

鈴ちゃん好きが転生し
たよ！(° ▽ °) 〇 ㄋ 〇 鈴
ちゃん(° ▽ °) 〇 ㄋ 〇 鈴
ちゃん

かきな

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

(。▽。)(。ミ。 鈴ちゃん (。▽。)(。ミ。 鈴ちゃん

注意：鈴ちゃん登場は本編からです

ペイルライダールート始まります

え、特典なしで転生ですか？ え、転生先は現世ですか？冗談が上手ですね；；

特典なかったらIS世界じゃ僕、一般ピープルなんですけど；

あ、小学生から転生？ せいぜい東さんに媚売って来い？ そんなあ……。

／ADA＼

へこの作品は鈴ちゃん好きの転生者が、鈴ちゃんと恋仲になるためにがんばろうとする

ものです。

あと、作者のガス抜き作品なのでノリが軽いです。

随所にネタらしきものが点在します。苦手な方はご注意ください！

目次

プロローグ	神様転生	1
小学生編		
一話	始まりは小学生	6
二話	純白の騎士と蒼穹の騎士	16
三話	別れ、そして始まり	25
学園編	前座	
一話	再会	35
二話	わたしとわたくしと私	44
三話	社会的に絶対絶命	50
四話	剣の道	63
五話	騎士出撃	71
六話	決着	81
七話	決意は固い	87
八話	実習	97
九話	兄のお節介	109
十話	転入生!	118
十一話	セクハラします	122
十二話	セクハラされます	131
十三話	H A D E S	142
十四話	夜の帳	154
十五話	黒き雨と蒼穹の騎士	164
十六話	兄の尊厳	176
十七話	シャルルとシャルロット	

186

十八話 国民的炭酸飲料 | 198

十九話 スニーキングミッション

211

二十話 氷雨、語る | 224

本編

キャラクター紹介 | 234

俺、ツインテールに出会います！

一話 バッドファーストコンタクト

240

二話 アフターケア | 246

三話 カワルミライ | 255

四話 波乱の予感 | 263

五話 修羅場？ | 272

六話 謝罪の技量 | 282

七話 激昂する | 294

八話 終幕 | 306

学年別トナメント

一話 始まりの号哭 | 316

二話 黒き雨の降る | 327

三話 何よりも好感度 | 337

四話 セクハラ王は伊達じゃない

349

五話 買い物獅子奮迅 | 359

六話 氷雨、ナンパされる | 370

七話 涙は髪飾りと共に | 382

466	十四話	差し伸べられるは誰の手か		466
457	e Hand f r s i e ?			457
	十三話	Wer lieh sein		443
	十二話	激闘は誰かの為に		443
	十一話	口は災いの元		428
	ント？			418
406	十話	タツグ……マツチ……トーナメント？		406
396	九話	理想は脆く、現実は夢く		396
	八話	自販機はイベント生成機		396
	十五話	事後処理回		478
	十六話	ReStart		491
	十七話	エピローグ		503
	祝☆お気に入り1000記念短編			
	その1	鈴の音は小さく響き		519
	その2	散る薔薇、咲く百合		540
	その3	変化を望まぬ平穏		560
	その4	学園最強との接触？	前編	
	その4	学園最強との接触？	後編	
600	クリスマスだよ！			615
	七夕番外編			

星合の七夕祭り	その1	621	七話	凧の静けさは……	758
星合の七夕祭り	その2	630	八話	暗雲立ち込み	770
星合の七夕祭り	その3	640	九話	二度目の正直	780
星合の七夕祭り	その4	653	十話	気づけば始まり	792
星合の七夕祭り	その5	669	十一話	好転は触れずとも	800
始まる想いと終わるモノ			十二話	振りかざす刃の行方	809
一話	始まりを告げる	684	十三話	それは並び立つ関係で	
二話	カワル想い	696	818		
三話	ヤクソクの清算	711	十四話	侵入者につき	827
四話	ISビルドファイターズ		十五話	死を司る第四の騎士	838
723			十六話	終わるモノ	849
五話	新たな風	738	ツナグミライ		
六話	新たな風と変わらぬ蒼	749	第一話		861

第二話	打ち明けた想いの納め処	970
第一話	打ち明けられる秘めた想い	966
プロローグ		966
ペイルライダールート		
ツナグミライ		951
シアワセのカタチ		936
最終話		926
第六話		917
第五話		906
第四話		899
第三話		886
第二話		876

第三話	波乱を孕んで明快H A D E S	978
		988

プロローグ 神様転生

二次創作小説を読んでいたら、どうやら神様転生というものがあるらしい。

女神転生の間違いじゃないの？ ってペルソナの考えも思い付かないわけじゃないけど、どうやら神様で間違いはないらしい。

その神様っていうのはどこの宗教の神なんだろう。作品を読んでいると唯一神っぽい事が多いからキリスト教なのかな。でも、僕はキリシタンじゃないからそういうものには巡り会えないだろうね。というか、大多数の日本人にもれず、無宗教だしね。

ぶっちゃけた話をしてしまえば、神様っていうのは人間が作りだした概念だし、そもそも神様が間違えて人を殺すなんて言うことはありえないよ。だって、全能だから神なんだよ？ そんな人が間違いを起こすなんてないよねー。

「ねっ、神様！」

「いや、なんかごめん」

なんだよ、この神殿。どう見たってギリシャのパルテノン神殿っぽい造りじゃないか。人間のイメージに迎合し過ぎなんじゃないの、神様？

「それで、どうして僕はここにいるのさ」

「間違えて殺したからだけど何か問題でも？」

さすが神様、開き直っちゃってるよ。というより、神様が自分の行動を顧みようとするはずないしね。

「じゃあ、僕はどこに転生できるの？」

「え、どこって、現世だけど？」

それ以外あるのか？ って顔で僕の方を見ていらっしやっていますけど……。あれ、これってテンプレ神様転生モノだよな？ なんて、わざわざ面白みのかけらもない現世に戻らなきゃいけない？

「神様ってさ、僕の心読めるんだよね？ 最初の三行辺りもちゃんと聞いてたよね？」

なんで、現世なのさー！

「むしろ、なんで現世以外の世界にいけると思ったのか、甚だ疑問なんだが？」

神様のくせに常識的だね。

「いいじゃん、夢があつて！ それにそうしないとだめだつてこと、全知全能の神様なら分かるでしょ!？」

「まあ、全知全能だからな。といつても、作者が創る全知全能なんてたかが知れてるが」

「メメタア」

全知全能恐ろしい。

「じゃあ、形式上の問いかけをするけど、どこの世界に行きたい？」

「インフィニット・ストラトス！」

「ですよ〜」

そう言つて神は次元を歪ませ、門を開く。

「じゃ、行つてらっしゃい」

「ちよつとちよつとちよつと」

「なに？」

面倒くさそうに尋ねてくる神様。いや、原因はそっちにあるんだからね。

「特典は？」

「は？」

物凄い形相で睨まれた。お、おそろしい……。僕のSAN値ががりがり削れていった気がするよ。

あ、ああ。神様つてそっち系の神様なのか。外宇宙の神様に遭遇して、SAN値ピンチ！ あ、SAN値といえば、ニヤル子さんのOPの曲はどっちもいいよね。カラオケでいつも歌うけど、どんな友達と行った時でも笑いを誘えるからね。ただし、たまに可哀想な人を見るような眼を向けられることがあるんだけど、どうしてだろうね。

「だつてテンプレ神様転生だよ？ それならチート特典いっぱい貰うのが普通じゃない

の!？」

「それはごく一部の話だろ。だいたい、チート特典は好き嫌いが分かれるんだよ」
「そんなの、僕の知ったことじゃないよ!」

僕は楽をして遊びたいんだよ!

「それに特典なしでISの世界に行ったらほんとにただの一般人じゃん!」

「まあ、男のお前じゃIS動かせないしな」

「ほら見たことか!」

ISに乗れなかったら学園に行くこともないし、ヒロインたちと絡むこともないんだよ? というか、鈴ちゃんに会えないなら行く意味すらないじゃないか!

「でもそれ、こっちは困らないだろ?」

「………………。困るのは作者だよ!」

「ぶっちゃけるんだな」

どうでもいいよ、神様との問答なんて! 早く、鈴ちゃんといちやいちゃしたいんだよ! 神様転生における神様との会話シーンなんて、読んでる方からしたら寒すぎるんだから、さっさと終わらせて転生しようよ!

「分かったから、そう騒ぐな。すぐに終わる。まあ、それでも特典は無しだがな」

「マジですか」

「ただし、転生の時期を小学一年生から、場所を織斑一夏と同じ学校の学区内にしてやるから、頑張つて篠ノ之束に媚び売つてこい」

「ハードモードおお！」

え、なんですか？ 原作通りの束さんだったとしたら、どんなに頑張つたところでコミュニケーション取れる気しないんだけど……。

いやまてよ、それだと一夏が束に気に入られている理由が分からなくなるよね。つまり、頑張ればワンチャンあるつてことかな？

「よっしゃあ、やつてやるよ！」

そんな風にする気を出し、僕は門の中に跳び込んでいった。

小学生編

一話 始まりは小学生

転生後、一年が経過した。

結論からいえば、一夏と仲良くなるのは容易かった。

一夏と仲良くなる方法はたった一つ。誠実に接すること、それだけだった。

一夏は正義感が強いからね。僕が何か悪いことをすれば怒るし、そうして僕を悪い奴だと認識すれば絶対に友達なんかにはなれない。だから僕は真面目に接してきた。茶化すことはあつたけど、絶対に悪意だけは抱かず、間違つたことを進んで行わなければ、一夏は心を開いてくれたのだった。

だから、一夏とは仲良くなれたんだけど、問題は箒なんだよね。

「ほーうーきー！」

「き、気易く名前で呼ぶなっ！」

「ほーうーつて、うわっ、タイム！ 竹刀は駄目！ 頭が凹むから！ 熟れたトマトみたいに潰れちゃうからっ！」

バキッ！

小学生の腕力とはいえ、そこそこに重さのある竹刀で殴られたらそりやもうひとまわりもないですよ。

てな感じで、一年生の間はボコボコにされましたよ。まあ、僕のアプローチが悪かった可能性も否めないんだけどね。

そんな状況をどう打開すればいいかのか、一夏に聞いてみたところ……。

「距離感が大事なんじゃないか？」

との回答を得たよ。

「そんな常識的な回答は聞いてないし、十年後の一夏にそっくりそのまま返したいよ」

「なんだよ、十年後って」

ドットの荒いボンバーマンで対戦をしながら相談する。

「箒の事が好きなのか？」

「はっ」

鼻で笑う。ISヒロイン中の僕のランキング最下位のモツプが好きだった？

「笑わせてくれるね」

「なんだか知らないけど、敵を増やしてる気がするぞ」

「こまかいことはいいんだよー」

「こ」で一夏痛恨のミス。自分の爆弾で自分を追い詰めてしまう。

「やっちまった」

「ふはは、僕の勝ちだね！」

一夏に敗北という烙印を押しした後、時計を見ると門限近い時間になっていたので、僕は一夏に別れを告げ、帰路についた。

◇ ◇ ◇

「ただいまー」

広い玄関で靴を脱ぎ、揃えて端に寄せる。この辺、きちんとしないと父さんに怒られちゃうからね。

「あ、おかえりー。おそいよー。この束さんが作った夕飯が冷めちゃうところだったよ」
ああ、うん。分かる。ツツコミたいところがあるよね。でも安心して。僕も最初はそんな気持ちだったから。

要約すると、僕は数年前、篠ノ之家に養子としてきたらしい。らしいっていうのは、僕の小学校以前の記憶は知識としてしか残っていないからだ。剣の名門である篠ノ之道場。その後を継ぐ男子が必要だったということになっている。

なんともご都合展開で、僕は大助かり。しかも、その数年の間に基礎的な剣術を身につけていて、かつ身体能力もそこそこにあるという、これもう特典と言っても過言じゃ

ないよね、と言いたくなるような感じになっている。

神様ありがとう。

そうは言ってもなかなか僕に慣れてくれないのが箒。人見知りということもあるよ。うだけど、過去の数年では解決できていない所を見ると、仲良くなるのが難しい相手なんだなあ、と思う。

「どうすればいいと思う、束姉?」

食後、リビングに束に聞く。あ、この呼び方強要されています。これやめると物凄く不機嫌になるので不本意ながらそう呼ぶしかないんだよね。

「箒ちゃんは見知りだからね。何かきっかけがあれば、ひーくんの良さに気づいて仲良くなれるよ」

ひーくんって言うのは僕のことね。篠ノ之氷雨。なんともかっこいい名前にしてくれて僕は嬉しいよ。決して、DQNネームだなんて思っていないよ? 命名してくれた柳

韻さんに感謝しないとね(血涙)

「きっかけかあ……。剣道大会優勝とかじゃ駄目かな?」

「うーん、それはあんまり効果ないと束さんは思うな。憧れの対象にはなるだろうけど、ひーくんが望んでるのはそういうのじゃないでしょ?」

「まあね」

んく、となると、それ以外のきつかけが必要つてことになるけど……。そういえば、一夏と箒はどうやって仲良くなつたんだろう？ 四年生の時に引つ越すことになつて離れ離れになるわけだから、その時までには仲良くなつてゐるはずだけど。

……というより、別に無理に仲良くなる必要はないのかな？ 予期せぬ展開から束さんと親密になるつていうノルマはもう達成しちゃつてるわけだし、これで鈴ちゃんルー卜確定だね！ え、気が早いつて？ そんなー。

「ひーくんなら箒ちゃんと絶対仲良くなれるよ。束さんが保証してあげよう」

「それは心強いよ、束姉」

まあ、成るように成るでしょ。



そんなこともなく二年生になりました。え、ほんとに？ まさか、このまま箒との絡みなしでいつちやうつてことはないよね？ 嫌だよ？ 学園で兄妹なのにぎこちない関係とか。というより、人見知り過ぎませんか、箒さん！

そんな風に悩んでゐると、誰かの足音が近づいてきて僕の近くで止まった。伏せていた顔を上げると、そこには見慣れたシヨタ一夏の姿があつた。

「氷雨、帰ろうぜ」

「おっけー、一夏。ちよつと待ってて」

懐かしのランドセルに教科書を詰め込み、席を立つ。箒は掃除当番らしく、まだ帰ろうとしていなかった。

「お待たせ。今日も一夏のうちで遊ぶ？」

「いいぜ。今日こそ氷雨のフォックスを倒してやる」

最近は二人でスマブラをすることが多い。たまに千冬さんと束さんも一緒にやることもあるんだけど、そうなると二人がフレーム単位の白熱した戦いを繰り広げる中、残機を失った僕らが後ろで観戦するということになる。

今日もそんな風になるのかな、と思いつつ廊下を歩いているとなんとなく物足りないランドセルに気付いた。いつもならもう少しカチャカチャとうるさい気がしたんだけど……。

そういえば給食袋を机の横にかけたままだった。それがないから物足りなかったんだね。

「あ、一夏。忘れ物しちゃった」

「んじや、戻るか」

待っててもいいのに付いてくる。

「いいよ。忠犬ハチ公の如くここで待っててよ」

「それ、氷雨帰つてこないじゃんか」

というわけで二人して教室に戻ると、数人の男子が箒を囲んでいた。

聞こえてくる声は『男女』だとか『暴力女』だとか。なんとも的を射た暴言の数々。原作を読んでいるときは僕もそう思つてたさ。

でもなんだろうね、このムカムカ。自分の妹がこう馬鹿にされているのを見ると……。

「いつてええー！」

「ドナルドは興奮すると、つい殺っちゃうんだ」

にこやかな笑みをぶん殴つた男子に見せる。こう見えて、篠ノ之道場で鍛えられてますから。強いんだよね、同年代の中では。

「お前ら、恥ずかしくないのかよ！ 寄つて集つて女の子いじめてさー！」

そんなことを言いつつ一夏も参戦する。とはいえ、そんな正論が小学生男子に通じることや言われると、通じないと思うね。だって、彼ら怒つた顔してるもん。自分のしていることの邪魔をされると癩癩を起すのが子供というものだからね。

「な、なんだよ。お前ら、この暴力女の味方すんのかよ！」

「家族なんだから当たり前でしょ？」

拳を握り、構える。

「イレギュラーなんだよ。やりすぎたんだ、お前はな！」
「？」

不思議そうないじめっ子の顔にダイレクトアタック。

「ふはは。粉碎、玉砕、大喝さい！」

「俺も加勢するぞ！」

こうして、俺と一夏は数の不利を物ともせず、勝利したのだった。



いいか、僕は面倒事が嫌いなんだ。

だが、断る！

といった感じで僕と一夏とその他の少年たちは職員室の隣の会議室で教師から説教をくらっている。これは……面倒なことに……なった……。

別に悪いことしてないのね。まあ、説教の内容なんてさ、長いだけで中身のないものだったよ。

殴ったら痛いでしょ？ だからやつちやダメ。

何その短絡的思考。でも、見過ごしたら見過ごしたで『それでも男ですか！ 軟弱者！』ってビンタされそうなんですよね。二律背反？

その後、先生の連絡を受けて迎えに来てくれた束さんがいじめっ子たちをめちゃくちゃ睨んでましたんですが、後でちよつかいとかかけないか心配です。明日も登校できたらいいね、いじめっ子たち……。

そんな夕刻の帰り道、不意に箒が僕の服の袖を引いた。

以前の僕なら『やめてよね。本気で喧嘩したら、箒が僕にかなうはずないだろ!』つて、腕を固める所だけど……。うん、やつば無理。束さんに殺されるね、それ。

「どうしたの?」

引かれた方に振りかえる。そこには少し俯き加減の箒。

僕と視線を合わせるのはまだ恥ずかしいのか、目は合わせなかったが、確かに僕の方を向いていた。

そうして箒から紡がれた言葉は簡単な言葉だけど、すごくうれしいものだった。

「……ありがとう」

あ、分かった。きっかけてこれだ。そういえばそんなこと原作に書いてたかもしれないけど、忘れてたよ。

「いいさ。だって、僕は箒のお兄ちゃんだからね」

え、茶化さないのかって? 隣に束さんがいるのにそんなことするわけないじゃん。

なんとなく……。何となくだけどさ。こういう風に外から見るんじゃないって、面と向

かつて接してるとき、箒の株が上がってる自分がいるんだよね。暴力的な一面もあるかもしれないけど、それでもここに居る箒は少なくとも普通の女の子だったよ。

手を握ると照れた顔で僕に笑いかける。その笑顔はやっぱり小学生の女の子のもので、剣道場で竹刀を振るしかめっ面だけが箒じゃないことを認識できた。

綺麗な夕焼けはまさに箒のイメージカラーだね。

そんな感じの一日だった。

二話 純白の騎士と蒼穹の騎士

あの日を境に箒は僕と一緒に行動する事が多くなつた。一夏とも仲良くなつて、とても良い傾向。ただ、あの時のような笑顔は滅多にしてくれないね。期間限定の笑顔だったみたいだ。

あの笑顔をいつもするような女の子になれば、一夏とくっつくことは容易なはずなので、色々と性格の矯正を試しているけど、全く効果は得られてないよ。転生者なんだから頑張れつて？ 逆立ちしたつて人間は神様にはなれねえつて、軟弱者が言つてたよ。

で、最近になって束さんの動きがおかしい。どこから資金が来ているのか知らないけど、家の蔵を改造してラボにした挙句、そこに籠つて何かを研究している。何かつて言つても、それがISであることは明らかなんだけどね。

「束姉、束姉」

「ん、なにかな、ひーくん。束さんは今忙しいのだよ」

「忙しいのは分かるけどさ、来客なんだよ」

スーツを着たどこかのお偉いさんの様な人たちだった。何でも束さんに話があると

かないとか。

「あ、それって、論文のことかな？」

「論文？ それって、今いじってる機械と関係してるの」

「その通りなのだよ。ひーくんは賢いね」

原作知識ありだけだね！ ちなみに、興味ないと思うけど小学校では天才って言われてますから。だって、あのレベルの問題なら一般教養で解けるもんね。あ、聞いてないって？ ごめんね。見た目は子供、頭脳はそこそこだから、ちよつと自慢したくなっちゃって。

応接間に通して、少しの間、外から様子を窺ってみる。内容は聞き取れないけど、何かスーツの人が話しているようだ。

スーツの人の話が終わる前に東さんの怒鳴り声が割り込んで聞こえてきた。そのまま東さんは退出。蔵に戻っていったようだった。

面倒だけど、スーツの人たちに謝罪して、帰ってもらった。なんか帰り際に東さんの悪口言ってたけど、東さんにそれ聞こえてるからね。いかん！ そいつには手を出さない！ って、教えてあげてもいいけど、そこまでしてあげる義理はないね。

「東姉、どうしたの？」

蔵に入ると、物凄い勢いで手を動かす東さんの姿があった。

「あいつら、私のインフィニット・ストラトスを欠陥品だって？　ふざけるな！」

あく、お怒りだ。ISの論文を馬鹿にされのか。

「ISは私の夢。絶対に……絶対に認めさせてやる」

えつと、これがあの白騎士事件を起こす動機つてことでもいいのかな？　まあ、起こしてもらつていいけどね。え、何。ISのせいで社会が混乱するから止めろつて？　あ、そうなんだ。で？　それが何か問題？

そんな主任のような発言は置いておいても、止められないと思うよ。一応声かけようか？

「束姉。僕は束姉が天才だつてことを知ってるし、束姉が作ったものが欠陥品なわけないつてことわかつてるよ？　それじゃあだめなの？」

「ひーくん……」

しばし沈黙。お、ちよつと効いてるのかな？

「けど、それじゃあ駄目なの。ISを認めさせて、今の世界を変える。そのために、私はやらなきゃいけないんだ」

そうだ！　それでいい！　これだから面白いんだ、人間つてやつは。え、主任がブームなのかつて？　さあ？

「分かったよ。束姉が決めたことなら僕は何も言わないし、応援するよ」

「ありがとう、ひーくん」

「でも、突然いなくなったりしないよね」

IS乗れるようにいろいろ手配してもらわなきゃならないからね！

「勿論！ 約束するよ。はい」

小指を出してくる東さん。それに応じるように、僕も小指をだしてその指に絡める。

絡めた指は細く、どこか儂げだった。この指がISという兵器を作りだし、世界を混乱させた指だと直結するのは難しかった。

◇ ◇ ◇

そんなこんなで東さんが消えました。有言実行早うい。だけど、約束破るのも早いいいー！

もうね、なんというかね、原作で読んだ印象のそのまんまの東さんだよ!! 貴女は自由人ですか! ってね。脚本家の悪意が見えるよ。

でね、そのまま原作通りに行くのかと思ったらさ、ちよつと変わったんだよね。

なんだか、東さんの中の僕の好感度が高かったみたいだね。

「いらつしやい、ひーくんにちーちゃん」

「あ、ありのまま——」

「どういうつもりだ、東」

あ、セリフ遮られた。ちなみにこの人は一夏の姉の千冬さん。地上最強らしいよ。大きすぎる……修正が必要だ。どこがとは言わない。

どういった状況かというと、東さんに拉致られました。それもすごいスムーズかつスピーディーに。プロなのかな？

「ふっふっふ。それはこれを見てもらってから説明しよう」

バーンという効果音と共に現れたのは、二つの影。

一つは純白のIS たぶん、これが白騎士なんだろうと思う。全身を包む鎧はまさに中世の騎士を彷彿とさせる。率直な感想はかっこいいに尽きる。

僕がこのISという作品を好きな理由の一つに、この機体のデザインの良さがあげられるかな。装甲の感じとか、凄い惹かれるものがあるよね。とかそんな話は置いておいて。

もう一つの影は見覚えのないものであった。同じく全身装甲ではあるが、薄い青色で染められていた。

もしかしなくても僕のISだね。……え、あのミサイルとか撃ち落とすやつ、僕にもやれって言うの？

「どう？ 凄いでしょ。これが私の作った史上最高のパワードスーツ、インフィニット・

ストラトスだよ」

「凄いと言われてもな。見ただけでは分からん」

「むう、ちーちゃん、乗りが悪いなく。ま、いいよ。それも含めて説明していくね」

で、スペックと作戦の説明が始まる。けど、武器が刀しかないっていうのはどうなんですか？

「だって、ひーくん、道場でちーちゃんの次に強いでしょ？ だから、大丈夫だよ」

て言うのが束さんの主張。正直、千冬さんの次と言っても差があり過ぎて並べられても酷って言うものなだけだね。

でも、これで専用機ゲット。当初の目的は達成されたんだから無問題？ 代わりに

リスクを背負っちゃうけど、ギブアンドテイクだから仕方ないね。

「白騎士と蒼騎士、頑張ってるね」

フィッティングを終えた僕らに束さんが声をかける。てか、蒼騎士って言うの、このIS？ ぶっちゃけダサくないですか？ 安直にもほどがあるよね。あれ？ つまり、

この白騎士事件も名前が変わるの？ もしかして、白と青の騎士事件とかになっちゃうの？ うわ、思わず顔を覆いたくなるネーミングだよ。

「大丈夫か、氷雨」

隣の白騎士がこちらを心配してくる。どうやら僕は本当に顔を覆っていたようで、傍

から見ればこれからの作戦を不安がる小学生に見えたようだ。

「だ、大丈夫だよ、千冬さん」

「そうか。まあ、お前の剣の腕なら大丈夫だとは思うが、無理はするな。東に振り回されて怪我をするなんて馬鹿馬鹿しいからな」

いや、ミサイルで怪我する事を馬鹿馬鹿しいの一言で一蹴できる千冬さん、マジリスペクトつす。

まあ、絶対防御があるから大丈夫なんですけどね。

そして、空に跳び出す。その加速は僕が今まで映像でしか感じられなかったもので、こうして肌で風を受けると、感動もひとしおつてもんですよ。

作戦位置に到着すると東さんから通信が入る。

『これからミサイル飛ばすからね。頑張って全部打ち落としてよ』

「分かった」

「了解。篠ノ之氷雨、目標を駆逐するよ!!」

『お、ひーくん。ノリノリだね』

テンションが上がっているのは否定しない。

でも、やっぱり男のロマンはビームだと思うんだよね。理想はジェフテイのベクターキャンオン。これ、頼んだら東さん作ってくれないかな。ついでに、ADAも採用してほ

しいね。

『くるよっ!』

「はいだらー!」

「な、なんだ?」

千冬さんが不思議そうな声を出す。それに反応している暇はないよ。眼前に広がる空いっぱいミサイルを見て、そんな余裕生まれてこないからね。

一番近いミサイルを側面に回り、斬る。爆風にさらされるも、装甲がそれを防ぎ切り、生体維持機能により熱で身体が焼かれることもない。やっぱり、このシステムがISの最大の長所だね。操縦者の安全が多分に確保されている。そのおかげで、ISは余裕のある戦闘ができるんだ。

ミサイル群を全て殲滅し、ひと息つく。

「お疲れ様、千冬さん」

「ああ、お疲れ様。だが、まだ休ませてはもらえないみたいだぞ?」

センサーに反応が多数。……って、これ戦闘機だ! しかも複数の国から飛んできてるよ!

『ふっふっふ。どうやら、このISの凄さを認めたみたいだね。ちーちゃん、ひーくん、やっちやっついていいよ!』

とは言っても、中には人が乗っているわけで。

「千冬さん、どうします?」

「脱出装置はついているだろう。羽を狙え」

「了解」

そこからは僕らにとつてはもはや作業でしかなかった。

機体の性能が天と地ほどもあるのだ。不殺を誓ったところで苦戦するわけもなかった。

呆気なく落とされていく敵機の数々に少し同情。

「今度こそ、終わりだな」

「天才ランナーと呼んでくれ」

『よっ、ひーくん! 天才ランナー!』

「ほ、ほんとに呼ばないで」

言ったのは僕だけど、なんか恥ずかしいよ。

後にこの騒動は蒼天の騎士事件と呼ばれることとなった。どちらかというところ、僕の方が前に出てる気がするけど、これが精一杯のネーミングなんだろう。

三話 別れ、そして始まり

事件のこともあり、I Sは世界的に認められるようになった。というか、認めるように脅したつてというのが、的を射た言い方かもしれないね。

でもって、コアが各国で研究されるようになったんだけど、やっぱり女性しか動かすことはできないようだ。

「束姉。なんで、I Sって女の人しか動かせないの？」

「それは、ちーちゃんを使用したコアの方を元に、量産していったからだよ」

話しによれば、事件の際に使用したコアがプロトタイプであり、登場した際のフィッティングにより、搭乗者のデータが入力され、そこで初めて搭乗条件がプログラムされたそうだ。

なんで、女性の方を使ったかについては聞けなかったけど、そっちの方が世界が大きく変わるからという理由なんだろうなど、僕は思う。

まあ、そんなことは良いのだが、僕は物凄く重要なことを見落としていたのだ。

「じゅ、重要人物保護プログラム……」

これだよ。これが施行されるのは小学4年生から。つまり、鈴ちゃんが転校してくる

一年前に、僕は別の学校に行かなければならないということだ。

なんたる失態！ 転生から四年たつて原作のことを忘れかけていたとはいえ、鈴ちゃん関連のフラグを管理できていなかったとは……！

いや、仕方ないさ。なんせ束姉がISを発表してから一家離散の危機だったし、その間ずっと箒の面倒見てたしで、なかなか忙しかったもん。俺は悪くねえ、俺は悪くねえ!!

アレだよ。鈴ちゃん、僕がいない間に一夏と仲良くなって、惚れるんだよね……。う、うわあ、ハードモードだ。

「何か、辛いところがあるなあ。原作で鈴ちゃんが一夏に惚れるのは知ってるけどさ。同じ壇上に立てたのに何もできないなんてね……」

ちなみに、重要人物保護プログラムでの移動先はみんなバラバラ。箒の面倒も見れないし、東さんにADAの開発を依頼する事も出来ない。

なかなか、辛いものありませんか？



転校前日ということで、僕は道場にて千冬さんと手合わせしてもらっている。

現世では武道なんて何一つやっていなかった僕だけど、基礎が出来上がって、自分の

思うように身体が動くとなると、剣道も楽しいと思えて、今では剣を振ることが楽しいとまで感じるようになっていた。

千冬さんの剣は鋭い一閃。どんな小細工もねじ伏せるような一振りです勝負を決める。そんな戦い方をするのが千冬さん。

対する僕はどうかこうにか、千冬さんの剣を掻い潜ろうと虚を探す、相手の隙を突く戦い方をする。

前述のとおり、小細工が通じないのが千冬さんなので圧倒されるんだけどね。

「ふう。本当に強くなったな、氷雨」

「いやいや、千冬さんの足元にも及びませんよ」

そういえば、この人は素手でISのブレードを振りまわしてたんだっけ。そんな人に勝てるわけがないよね。俺は人間を止めるぞお！ って勢いがないと無理だよ。

「謙遜しなくてもいい。これでも、お前を認めているんだからな」

「それは光栄ですけど、それでも僕には千冬さんが別次元にいるように思えますよ」

「そうか」

「ええ」

「……」

「……」

少し沈黙がその場を占める。これが最後なんだと思うと、寂しいな。

そんなことを千冬さんも考えているのかは分からないけど、漂う空気がそれを肯定しているような気がして、少し嬉しいものがあつた。

「束のこと、頼んだぞ」

「え、いや、引つ越す場所が違うのでそれは難しいかと」

「お前なら連絡を取るくらい容易だろう。暴走しないように見張っておいてくれ」

「あ、はい」

そういえば、束さんって数年後に行方眩ますんじやなかったっけ？ あ、駄目だ。これ、僕止められる気がしないんだけど。逃げんなよ……逃げんなよ、アロウズ!! って、違う。これ、今のタイミングで使うセリフじゃない。

そんな風に頼まれて、その日は道場を後にした。転校した先でも剣道ができるかどうか分からないけど、この竹刀は持って行くことにしよう。

◇ ◇ ◇

ついに別れの時が来た。さらば、まだ見ぬ鈴ちゃん。

「て、箒。服の裾を引つ張るのは止めようね」

「なぜ、私と氷雨が違ふところに行かねばならないのだ!!」

「いやいや、一緒だと解りやすいからだよ。バラバラの方が見つかりにくいでしょ?」

まあ、なんというか。性格はあまり変わっていないけど、箒は少し僕に甘えるようになりました。なにこれ、原作からは考えられないんですけど。

「くっ。元はと言えばこれも姉さんのせいだ」

まあ、東さんがIS作っちゃったからこうなつたし、箒に恨まれちゃうのも仕方ないよね。

「大丈夫だつて。毎日電話するからさ」

「本当か！ 約束だからな！」

「うん。お兄ちゃんはお約束を違えたことがないことで有名なんだよ？」

「いやいや、氷雨はよく俺との約束破つただろ」

一夏が割り込む。一夏の登場を目にした瞬間、箒は掴んでいた僕の服の裾を離した。

「え、いつの話だっけ？ 僕は憶えがないんだけど」

「テストで勝つたらジュースおごる約束破つただろ？」

「ジュースごときで。器の小さい男は嫌われるよ？」

「その言葉、氷雨に返すよ」

しかし、そんな一夏にサプライズ。僕は鞆から取り出したそれをひよいと一夏に投げ
る。

「おっと。いきなり危ないな。つて、サイダー？」

「うん。もうお別れだし。約束は守る男だからね」

「氷雨……」

お、感動してくれてる？ うんうん。我ながらこの演出は褒めてやりたいと思ってるんだよね。

「ぬるい炭酸とか、何の嫌がらせだよ」

「あれ？」

予想外の返答でした。

「しかし、寂しくなるな」

「僕もだよ。なんだかんだで、一夏は友達少ないから心配だよ」

「おいおい、そんなことないって」

まあ、さっきの言い過ぎでも、敵は多いと思うよ。たらしだからね。

「出来るなら、転校とかしたくないけど……」

「仕方ないな。国が言ってるわけだし」

「小さな存在だな、私も……君も……」

「いきなりどうした、氷雨」

なんでこんなことになったんだよおお！ このまま学校に残れば、もうすぐ鈴ちゃんに会えるって言うのにさ！ しかも、いじめられるってイベントがあつた筈だから、そ

れを助ければ好感度上がるはずじゃないか。ついてねえ……。

次に鈴ちやんと会った時は鈴ちやんの一夏に対する好感度はマックス……。

なにも変わらねえのかよ……結局。てな感じで、デイスプレイを叩き割りたいよ。合理的かと思われた転生場所に、思わぬ罠があったなんて！

溢れる感情が目頭を熱くし、涙を誘う。何故かそれを勘違いした一夏も涙を流す。

傍から見れば、感動的な別れのシーン。でも実際、僕の涙は鈴ちやんと別れからくるものである。なんとも、一夏には申し訳ないことをしたと思うわ。

◇ ◇ ◇

月日は流れ、そこそこに楽しい日々を送っていたのですが、下校時、僕はいきなり何者かに拉致られてしまった。

しかも、相手はISときたもんだ。やれやれ、レイヴンが相手じゃ分が悪すぎるか……。

え、なんでこんなに冷静なのかって？

実は事前に政府から聞いていたことがあってね。東さんが行方不明らしい。だから、そろそろ東さんの方から接触があるんじゃないかと思っていたわけ。というか、このISが無人であることは、僕のISから聞かされたからもうそんなIS作れるのは東さんしかないって分かるんだよね。

「ひーくん、久しぶり！ 元気にしてた？」

「まあ、そこそこ元気にしてたよ。今は高速飛行でちよつとぐったりだけだね」

嫌味を混ぜてみたけど、東さんは気にも留めていない様子。弟なんです、少しくらい心配してください。

「で、どうしたの束姉。失踪したり、拉致したり」

「んー、失踪の方はきまぐれかな。コアは十分作ってあげたし、これ以上言うこと聞いてあげる理由ないからね」

東さんの性格考えたら、誰かのいいなりになるなんてありえないことだし、なるべくしてなった失踪なのかね。

「拉致は？」

「蒼騎士の改造」

「えっ？」

「ん？」

蒼騎士改造するの？ この子、結構使い込んだお気に入りなんだけどなく。全身装甲だから男が乗つてることもばれなくて、こそこそしなくていいのもいいし。

あ、でも、あの事件で有名になったから、流石に公の場には出てないよ？

「ひーくんはそろそろ高校生でしょ？ それで、東さんの関係者だから強制的にIS学

園に入れられる」

「あく、うん、その通りだよ。あれ、束姉に言ったっけ？」

「天才である束さんにはそれくらいのことお見通しだよ」

要するに、ハッキングしましたってことね。

「そんな所に行くのに、専用機おっぴらに使えないのは辛いでしょ？ だから、外装を

変更してあげようと思って」

「ああ、そういうことか。ありがとう、束姉」

それを聞いた後、少し引つかかるところがあつたから聞いてみる。

「箒には専用機上げないの？」

「うくん、箒ちゃんはまだか私のこと嫌っちゃってるみたいだから、素直に受け取ってもらえないと思うんだよね」

確かに、その通りかもしれない。

「じゃあ、ちやつちやつとやっちゃうね」

「うん」

束さんの作業は神技の粋なんだよね。設計図はいらない。頭でイメージされたそれを現実にそのまま構築する事ができる。本当に天才って言うやつであることを実感できるとき瞬間だね。

「はいできた」

「早すぎるっ！ あ、ベクターキャノンとかつけてくれる？」

「それは前に聞いたあれのことかな？ 拡張領域けつこう使っちゃうけど、付けておいたよ」

「流石、東姉！」

男のロマン、大型ビーム兵器が実装されてしまった！ これはもう、大興奮ですよ！！
撃ちたいな……試し撃ちしたいな。どっかにないかな、そんな機会……。

「！」

あつた。入学早々、あつたよ撃てる機会!!

「ふっふっふ」

「あ、ひーくんが悪い顔してる。なんだか分からないけど、東さんも笑うよ！ ふっふっふ」

「ふっふっふ」

「ふっふっふ」

「「ふっふっふ」

不気味な笑い声が、ラボに響き渡るのであつた。

学園編

前座

一話 再会

入学前。

当初、政府の人たちは安全の確保という名目でIS学園に入れるつもりだったのだけど、僕がISを動かせるという事実を知ってビックリ。でも、僕の場合はこの蒼騎士しか動かせないわけだから、ちよつと特殊なだけだね。

あ、そうそう。政府にこの専用機を見せた時に蒼騎士つてそのままの名前で登録したら面倒なことになるから、名前は変えたよ。武装にベクターキャノンもあるし、ジェフテイつて名前にしたかったけど、安直過ぎると蒼騎士直々に駄目だしされた。

え、直々つてどうやって？　と思うかもしれないけど、たまに他の二次創作でも見るように、僕のISは意志の疎通ができるようになってる。コアには人格があつて、それが合成音声を使って僕とコミュニケーションをとるって寸法だ。どのISにも人格はあるのだけど、それができるように成るには長い年月とその人の相性が必要になる。

「じゃあ、蒼騎士はどんな名前がいいのさ」

『アヌビスを提示します』

「いや、それ敵方だから。ベクターキャノンも使わないし」
『細かいです』

実は蒼騎士にA D A っぽい話し方を教えたんだけど、蒼騎士は人格を持っているからA D A とは似ても似つかない言動をするんだよね。

『蒼という要素は残し、ダブルオーライザーというのはどうでしょう』

「どうもこうもないんだけど。蒼という要素って、機体の色だけじゃん」

『ではこの際開き直って蒼騎士でどうでしょう』

「それを隠すための相談だからね!？」

まあ、こんな感じで堂々巡りだったので蒼騎士にはスリープしてもらった。あ、常時話すわけじゃないよ。必要な時だけI S を起動させて会話するわけ。もちろん、起動するだけで展開はしないよ。展開中はいつも話しかけてくるけどね。

「うくん。箒の機体が紅椿だから蒼薔薇とか？ うわ、男が乗るのにそれはないな」
なんだか蒼薔薇って僕がホモみたいに聞こえるから却下だね。

どうせならかっこいい名前がいいしね。どうしようか。騎士……あ、ペイルライダーでどうだろう。ガンダムのオンラインゲームにも出てきてたよね。性能は……うん、まあ置いておくよ。いや、でも、あのポーズかっこいいよね。たしか、オーガンダムもあんなポーズしてたような気がする。サンライズはあのポーズ好きなのかな？

まあ、そういうわけで、僕のISの名前はペイルライダーになりました。名前だけならただだね。



入学式。

迷った。

前の生徒について行けばいいだけのはずなんだが、余所見をしている間にはぐれてしまった。まあ、最初の自己紹介なんて、参加する意義のない微妙なイベントだったけどさ。

ペイルライダーを起こしてみる。

『なんでしようか』

「迷子だから地図出してくれない？」

『嫌です』

「なんで!？」

『私は便利な携帯端末ではありません。そのような使い方は不愉快です』

「AIに有るまじき発言だね。ペイルライダーは人格持つてるし仕方ないか」

『ペイルライダー……未だに患っているのですか?』

「厨二病をつてこと？ 違うからね。君の名前だからね？」

結局、少々洩られたけど、ペイルライダーは地図を出してくれた。その通りに進んでいると、なんだか懐かしい後ろ姿を発見する。

「もしかして、千冬さん？」

「ん、なんだ。篠ノ之か。どうしてここに居る？ ホームルームは始まっているぞ？」

おお、反応薄いし、他人行儀だね。先生として学校に居る時は一夏もこういう対応されてたね。

「それに、学校では織斑先生と呼べ」

「あ、すいません。お久しぶりです、織斑先生。道に迷って、その辺をうろろしていたらこんな時間でした」

「そうか。ならちようどいいからついてこい。お前は私のクラスだからな」

まあ、知ってるけどね。一組って聞いた時からそうなるものと分かってたもん。少し二組にならないかなって願ってはいたんだけど、そううまくはいかないか。

◇ ◇ ◇

教室につくと、定番のツツコミが一夏を襲った。出席簿の表紙はすぐくかたいからね。角なんて凶器になるんじゃないかと思うよ。

「ち、千冬姉……と、ひ、氷雨!？」

その声に反応したのは箒だった。先ほどからの自己紹介の間は興味なさそうに窓の方を向いていたが、僕の名前に反応してか、こっちに顔を向ける。

「やあ」

声の主である一夏の方に軽く手を上げ、箒の方にも視線を送り、笑顔を作る。

それに対して、箒も少し堅いが笑顔を浮かべ、小さく手を振ってくれる。え、何この子。素直すぎるでしょ。

「このクラスの担任の織斑千冬だ。篠ノ之、お前も自己紹介をしておけ」

「え、この歓声の中で、ですか？」

前方のクラスメイトから聞こえる黄色い声は、千冬さんを賛美するものばかり。実際に見ると素直な感想が怖いの一言だよ。熱狂的すぎる気もするね。

「静かにしろー!」

千冬さんの一声でぴたりと声が止む。その後、千冬さんに目で促され、自己紹介に入る。

「入学早々迷子になって、遅れてきました。僕は篠ノ之氷雨。二人目の男性 I S 操縦者つてことになるみたい。これからよろしくお願いします」

まあ、特に歓声もなく終わり、席につかされる。僕の席は一夏と箒の間。ふむ。どっちに話しかけるか悩むところだね。

どうしようか悩んでいたら、千冬さんが授業の開始を宣言したので、次の休み時間まで待つとしようか。

◇ ◇ ◇

休み時間。

授業の内容はまあ、ISのことばかりだったね。今は基本的な所をやっているのですが、実際に触っている僕からすればなんてことはない部分だ。ただ、各武装に関する授業になればまた違うんだろうけどね。僕は僕が使ってる武器のことしかわからないから。

あ、ちなみに僕のペイルライダーの武装は近接ビームブレードが二本、両方の脚部に三点ミサイルポッド、背部の非固定装備にホーミングランスと呼ぶ追尾性のあるビーム。それに加えて、敵を一掃できるベクターキャノン、という感じである。

ペイルライダーとジェフティの半分ずつの武装を貰った感じに仕上がっているのは作者の迷いかな？

ちなみに、東さんに頼めば他のサブウェポンも作ってくれそう。拡張領域の中で武装は変更できるし、いろいろ試したいよね。

「ちよつといいいか？」

その声に顔を上げると箒が正面に立っていた。ああ、呼び出して話すイベントね。了解了解。

「いいよ。一夏も誘う?」

「う、うむ」

「一夏、ちよつと外の空気吸いに行こうよ」

「ん? ああ、いいぜ。俺もお前と話したかったしな」

そんなわけでこの好奇の目にさらされ続けるのも疲れるので、早々に場所を移動しました。

◇ ◇ ◇

なんか屋上つぽいとこに來た。風が気持ちいいね。ここでお昼を食べると凄く青春つぽい気がする。あ、そのイベント確か二巻であつた気もする。

「いや、とりあえず、再会おめでとうつてとこだね」

「ほんとに久しぶりだな、氷雨に箒」

「あ、ああ」

箒は少し緊張している様子。

「一夏、少し大きくなつた?」

「ああ。つてそりやそうだろ。何年経つてると思つてるんだよ」

「ええと、そーいやもう五年くらい見てなかつたんだよね……」

ふと、箒の方に視線を向ける。変わった、という感想よりも見慣れた顔になつたとい

う感想が今の僕には正しい。僕の知ってる箒はこっちなねやっぱり。

「な、なんだ？」

「いや、大きくなつたし、綺麗になつたね、て思つてさ」

「なっ！ そ、そんな恥ずかしいことを一夏の前で言うな！」

顔を紅くして僕を責める箒。そんな僕と箒を見て一夏は笑いだす。

「ははは。水雨も相変わらずだな」

「相変わらずつてどういう意味だよ。これでも成長してるからね」

まあ、成長したのは体だけで、頭はあんまり成長したように感じない。なんだか僕の精神年齢は年と共に上がるわけではなく、あくまで社会的に認識されている程度の年齢までしか成長しないみたいだ。あ、もともとの精神年齢は置いといてね。

「それにしても、まさか一夏がISを動かせるなんてね」

知っていることだけど、さも予想外だったかのように僕は驚いた表情で言った。

「ほんとだぞ。私も、テレビで見て驚いたものだ」

「俺自身なになんだか……。東さんは何か言つてないか？」

「っ！」

その一夏の言葉に箒はピクリと反応した。

「まあまあ、箒。抑えて」

箒は一家離散となった原因である束さんのことを嫌っている。そのせいで、束さんの名前には過剰な反応を示すことが多いのだ。僕も初めて電話で激高する箒の声を聞いた時はびっくりしたよ。

「ごめん、一夏。箒と束姉は今ちよつと難しい関係なんだよね」

「そ、そうなのか」

一夏に耳打ちする。

「だから、クラスでも少し気を配ってくれと嬉しいな」

「おう、任せとけ」

時計に目をやるとそろそろ授業が始まる時間だ。早く戻らないと、千冬さんにどんな刑罰を与えられるか分かったものじゃない。

「そろそろ戻ろうか」

「ん、ほんとだ。早く戻るぞ」

「ほら、箒も」

「……うむ」

なかなか束さんとのしこりは取れそうもない箒だけど、どうしようかな。

……放っておいていいか。別に特に害があるってわけでもないしね。

二話 わたしとわたくしと私

休み時間。

ああ、この時間って確かセシリアが絡んでくる時間だよな。キャラとして嫌いじゃない部類ではあるんだけど、この時期のセシリアはなんとも面倒くさい子ではあるよね。

あと、正直『わたくし』って平仮名表記にしないと『わたし』との区別がつけられないのも面倒。『私』でどっちにも読めるからね。

「ちよつとよろしいかしら?」

「ん?」

一夏が振り向く。

「まあ、なんて間の抜けた返事なのかしら。それがわたくしに対する態度ですの?」

「間の抜けた返事であったことは僕も否定しないよ」

「おい、氷雨」

一夏に睨まれる。

「冗談だって。それより、君はセシリア・オルコットで間違いないよね?」

「あら、わたくしの名をご存じで?」

「まあ、代表候補生だし。ネット上でも結構な人気があるみたいだしね」

オルコツ党と呼ばれる党が出来るくらいだしね。確かに、外見はモデルみたいだね。髪も綺麗なブロンドだし、口を開かなければ上品な感じ。でも、どう見ても艦これの愛宕とかぶっちゃやうんだよね。イメージカラーも青で一緒だし。愛宕のほうが後出しだとは思うけどね。

「ばんぱかぱーんって言ってみてよ」

「ぱ、ばんぱかぱーん。……って何を言わせるんですの!？」

萌える……萌えてしまう……。なかなかノリの良いキャラなんだね、セシリー。ん？

この呼び方だと違う人物思い浮かべちゃうね。なんとー!!

これだから男は、と言った感じに罵倒されてしまった。解せぬ。

「で、何か用なのか?」

一夏が僕に呆れたような顔を見せながらセシリアに問いかける。

「世界で二人しかいない男のIS操縦者の顔というものを見ておこうと思っただけですわ」

「つまり面食いなのか」

「そういう意味ではありませんわ!!」

「まあまあ」

からかいがいのある人だこと。表情が豊かだから見て面白いな。

「まったく、あなたたち分かってるのかしら。わたくしが代表候補生であり、このIS学園の入試で唯一教官を倒した人物であるということをして！」

いや、知らないよ。あ、ごめん、嘘ついた。知ってるよ。でも、それを知ってるからと言ってどうするってわけじゃないんだよね。

「それってあれか？ IS動かして戦うってやつ？」

「それ以外ありませんわ」

え、筆記はないの？ とか思っちゃうけど、当然あるよ。この会話の中ではそれしかないっていう意味でセシリアは断定しているだけだよ。え、説明いらないって？ ぐ、ごめん。

「あれ？ それなら俺も倒したぞ、教官」

「……は？」

まあ、真耶ちゃんが勝手に突っ込んだだけっていうオチがあるけど、セシリアは知らないから愕然とするよね。

前々から思ってたけど、それじゃ試験にならなくない？ 受験者の实力を見るための試験なのに、教官のミスで終わったら評価のしようがないじゃん。

とか思うわけだけど、ぶっちゃけ一夏の評価は良くても悪くても入学させるわけだから

ら、試験自体が意味のないものだよね。

「わ、わたくしだけと聞きましたか?」

「女子の中ではってオチじゃないか?」

「あ、ちなみに僕も倒したよ」

ISは操縦時間がものをいうからね。専用機使つていいなら、そりゃ負けませんよ。時間だけなら千冬さんにも負けないうよ。だって、千冬さんは途中で機体変えてるからね。

「つ、つまりわたくしだけではないと!」

「ああ、うん。たぶんな」

「多分!? 多分つてどういう……」

そんなセシリアを余所に始業のチャイムが鳴り響く。

「席につけ、お前ら」

教室の前に立つのは千冬さん。まだ何か言いたそうなセシリアであったが、千冬さんに逆らう気は流石にないようで、しぶしぶではあるけど自分の席に戻った。

「授業を始める前に、決めることがある。再来週に行われるクラス対抗戦にでる代表者を決める。自薦他薦は問わん。意見があるものは挙手しろ」

教室が色めき立つ。それもそのはず。千冬さんは他薦も良いと言ったのだ。誰が選

ばれるかなんて、もう自明だよね。

「はい！ 織斑くんを推薦します！」

「あ、じゃあ、私は篠ノ之くんを推薦します！」

「え、何その『じゃあ』って」

なんか扱い雑じゃないですかね？ 僕、これでも専用機持ちなんだけど。

「一夏、推薦だつてさ」

隣で放心状態の一夏に声をかける。思考が止まっていた一夏が僕の声で動きだす。

「そして、時は動き出す」

「はっ！ お、俺!？」

そう声を上げると立ち上がり、異議を申し立てる。

「ちよつと待った！ 俺はそんなのやらないぞ！」

「私は自薦他薦は問わないと言った。推薦されたのなら、覚悟を決めろ」

当たり前のようにその異議申し立ては鬼の裁判長によつて却下される。しかし、それでも食い下がろうとする一夏。

「い、いやでも——」

「待つて下さい！ 納得がいきませんわ！」

「そうですわ！ 僕がおまけのように推薦されるなんて、可笑しいですわ!!」

「ちよつと黙っていてもええせんこと!」

あ、怒られちゃったよ。隣の箒にそんな顔を向けると。笑ってくれた。何この子、天使なの？

あ、この後の口論は原作通りだったよ。要約すると

『日本は田舎ですわ!』『田舎の猿が代表……ないわ』

それに対する一夏が

『お前ん家、飯マズ国々家』

とジブリ風に言い返して、手袋を投げられたって感じかな。あ、手袋を投げるって言うのは決闘を申し込むって意味だからね。白手袋を相手の足元に投げるか、手袋で相手の頬をぶつと、『ぶつたね!』二回目ぶつと、『二度もぶつた!』親父にもぶたれたことが決闘の開始になるよ。

で、決闘になったけどアリーナの時間の都合もあって来週の月曜日に三人が同時に試合をすることになった。もうこれただの乱闘なんだよね……。そんなんでちゃんと決められるんだろうか。

まあ、乱闘でも関係ない。僕は勝つ。勝たなきゃいけないんだ!

僕の望みを果たすため……今この瞬間は、力こそがすべてなんだ!

三話 社会的に絶対絶命

放課後。

やっと授業から解放されてぐったりしている一夏。一夏はISに関しての知識が乏しいから結構苦戦してたみたいだな。

「お疲れ様、一夏」

「氷雨は余裕そうだな」

「そりや、ISは束姉が作ったものだし、勉強しておくのは当然のことだろ？」

「そりやそうか」

くだらだらと教室で駄弁っていると、隣の箒もこつちに来た。

「それより、二人とも大丈夫なのか？ 相手はイギリスの代表候補生なのだろ？」

「ん。心配してくれてありがとう、箒。でも大丈夫。お兄ちゃんが負けるわけないで

しょ」

「その自信はどこからくるんだ。というか、その『お兄ちゃん』というのはやめてくれな
いか。恥ずかしい」

「い、一夏！ 妹が反抗期だ！」

「妥当な意見だと俺は思うけどな」

馬鹿な！ せつかく妹属性を手に入れたにもかかわらず、それを腐らせるのが妥当だと！

「お前には失望した。もう何も期待しない」

「そ、そこまで言うか……」

冗談は置いておいて。

「僕は良いけど、一夏は問題あるかもね」

「ん？ どういうことだ？」

「だって、セシリアは代表候補生だから専用機持つてるけど、一夏は持ってないだろ？」

「その言い方だと、氷雨は持っているのか？」

「うん」

その言葉に、二人は驚きを隠せない。

「いつの間に」

「まさか、姉さんか？」

箒の鋭い視線が僕に突き刺さる。

「ま、まあそうなるね」

「むう」

箒が少し不機嫌そうな顔をする。

「ほ、箒も頼んだら作ってくれると思うよ？」

「いらん！」

ああ、怒っちゃった。

機嫌を直してもらおうと頭を撫でる。

「ごめんって」

「……別に、氷雨が悪いわけではないだろう」

「うん。そうかもしれないけど、気分を悪くさせたのは僕だからね。だから謝るの」

拒絶されていないから頭を撫で続ける。すると、箒はため息をついて先ほどまでの顔に戻った。

「なんだか、怒っている自分が馬鹿みたいだ」

「そんなことないよ」

そんな僕らを微笑みながら眺めている一夏に箒が気付くと咳払いをした後、キツ、と睨みつけた。

「それで、一夏はほとんどISを動かしたことはないのだな？」

「ああ。ISを動かしたのって、入試の時くらいだしな」

「それであんな啖呵を切ったのか？」

睨むことを止め、箒は呆れ顔になる。

「男には引けない時があるんだよ」

「あそこで引いたらかつこ悪いもんね」

「だが、そういうことなら特訓した方がいいのではないか？」

「そうだな……。氷雨か箒、頼む！俺にISの操縦を教えてください」

そこからかく。と言つても、ISは時間をかけてその操縦者のイメージに近い動きを学習していくからね。今からつてなると、ISに関しては僕からできるアドバイスはないなあ。

「ならば、剣道のかかり稽古でもするか！」

「え、いや、箒。俺はISについて教えてもらおうと……」

「ん。一夏、今からISの操縦は付け焼刃にもならないよ。ISの操縦と言つても、結局動くのは僕ら本人だからね」

それに、ここで一回醜態を晒さないと、一夏は向上心を見せないだろうしね。

「そうか？」

「う、うむ。そう思つて私は言ったのだ」

絶対考えてなかったな、と一夏と僕は二人で顔を見合わせ、アイコンタクトで同意した。

「それなら、早速行くか！」

「いや、今日はやめておこうよ、箒」

「な、何故だ？ 善は急げと言うだろ？」

「使用許可も取ってないし、慣れない学園の初日で一夏が疲れてるしね」

「そ、そうか。なら仕方ないか」

「箒、明日からよろしくな」

「うむ」

あ、今更気付いたけど、一夏を他のキャラとくつつ付けてしまえば鈴ちゃんフリーになるんじゃないですか？ おお、僕って天才なんじゃないか！

いや、でも、それと鈴ちゃんを付き合えるかは全く別問題の様な気もするよね。

「そういえば、一夏と箒はもう部屋とか聞いてる？」

「うむ。私はもうすでに荷物を運んでいるぞ」

「俺は今日、家に帰るつもりだけど……」

「あ、織斑くんたち。まだ教室に居たんですね。よかった」

その声と共に現れたのは一組の副担任、山田真耶ちゃん。大きすぎる……修正が必要だ。

「何か用ですか？」

「えつとですね、お二人の寮の部屋が決まりました」

「あれ？ 一週間は自宅からじゃなかったんですか？」

「事情が事情ですので、一時的ではありますが無理やり部屋割りを変えた様です。その際、注意してほしい事があるのですが」

真耶ちゃんの話は長くなりそうなので、箒に耳打ちする。

「先に戻っておいていいよ。話し長くなりそうだし」

「そうか。分かった。ではまた、夕食でな」

一緒にご飯食べることは決定しているようだ。まあ、そのつもりだったけどさ。

「うん、じゃあまたね」

そう言つて、箒を見送る。

「あの、聞いてましたか、篠ノ之くん？」

「え、はいもちろんですよ」

ええ、全く聞いてませんでした。

「それは良かったです。ですのであまり心配はしていませんが、注意してくださいね」

「はい」

声はそろえるけど、何に注意するの？ 騒音問題？ まあ、そんなにはしゃぐ気はな

いけどね。

「でも先生。俺は何も持ってきてないので今日は家に帰っていいですか？」

「荷物なら私が手配してやった。ありがたく思え」

その声は千冬さんのものであった。面倒見の良い姉ですね。実生活は結構だらけて
いるってことは原作で知ってますけど。

「おい、お前、今失礼なことを考えているだろ」

「そ、そんなことないですよ。考えすぎじゃないですか？」

ヤバイよ、心眼発動してるよ。剣道でも動き読まれるし、やっぱり千冬さんには第六
感が備わってるよ。

「それじゃあ、寮の部屋に行こうか、一夏」

「そうだな。疲れたし、早く帰って休もう」

そうして、言い渡された部屋に行くのだった。あれ？ 僕と一夏は同室なんだ……。
チツ。

◇ ◇ ◇

「えーと、ここか」

そう言つて部屋番号を確認する一夏。中に入つてみると、学生寮とは思えないほど、
綺麗な部屋が現れた。

鞆を適当なところに置き、ベッドに腰掛ける。

うわっ！ これ、ふつかふかだ。

「ふはは、ふつかふかであるぞ！」

「な、なんだかテンションあがってるな、氷雨」

しまった、テンションが上がり過ぎて紋様になってしまった。

「けど、これは本当にふつかふかだよ。一夏も寝転がってみてよ」

言われて一夏もベッドに転がる。すると、目を見開きこつちを見る。

「ふつかふかだな！」

「でしょ！」

大の男が二人してベッドの柔らかさに酔いしれている。傍から見れば本当に気持ち悪い状況だけど、一夏がイケメンだから良しとしてもらおう。

「ああ、このまま夕食まで寝ちやいたいね」

「良いんじゃないか？ 寝ても」

「いやいや、寝過したら、箒が怒るから」

「氷雨はほんとに箒のこと気にかけてるよな」

「それは兄として当然のことじゃない？」

でも、妹と仲がいいのは稀だって現実ではよく聞くね。ここが作品の世界でよかったよ。

「でも少し眠いな」

「だねえ。ちよつと寝ようかな」

ペイルライダーを起動する。一夏に聞こえない程度の小さな声で話しかける。

「六時に起こして」

『拒否します』

こうして僕ら二人は夕食に遅れ、箒に怒られました。

◇ ◇ ◇

食後。

ふう、良い気持ちだ。日本人に生まれて良かったと思える瞬間第二位くらいに入るのは風呂に浸かっているときかな。

こういう大きいお風呂は良いね。こんなものを男二人で使えるなんて、贅沢だよね。

あれ？ そういえば、ここ前まで男がいなかったんだよね？ ああ、それで入口が一つしかないのか。

「……ペイルライダー、大変だ。僕はやってしまった」

『変態ですね』

「そこは大変ですねの間違いだよね」

『私はプログラムです。言い間違いはありません』

「そこは間違えてほしかった」

コントしてる場合じゃないよ。運良く、今は女子が入ってきていないからよかったけど、いつ他の子が来るか分からないんだから。

「早く出なきゃ!」

『危険。エンカウント。脱衣所に生体反応』

まじで? ど、どどど、どうしろって言うんだよ! いやね、そりや気が緩んでいて大浴場の使用禁止を忘れてた僕が悪いけどさ、先生も言つてよ! そしたら、思い出してたよ。……あれ? 僕が箒に耳打ちして聞いていなかった内容ってそれ? ははは、ワロス。

というか、こんな時間に入ってくる人がいるのか。外でちよつと鍛錬してから来たから、もう結構遅い時間のはずなのに。

「ペイルライダー、どうすればいいと思う?」

『さすがに国家権力からの逃走はお勧めしません』

「捕まる前提!? 違うよ、現状の打破についてだよ!」

『不可能だと思われます』

残念、僕の冒険はここで終わってしまった!

それは嫌だあ! まだ鈴ちゃんも出てきてないプロログの段階だよ? クラス代

表決定戦すらサブイベント程度の認識だよ？　なのにここで終わるとか、やりきれないよ。

いや、セーフである可能性を考えよう。どの子が来たら笑って済ませてくれるだろうか。

候補としては、のほほんさん一択だ。あのキャラなら僕が使用禁止を聞いてなかったんだと言えば、笑って許してくれそう。さらに好感度が高ければ、一緒に入浴する事すら許されるのではないか？　さすがにないか。

いや、だが、あのキャラなら他の子にも隠さずに言いそうだ。そうなる僕が女子風呂に無断で入浴していたという噂が広まり、いずれ国家権力の名のもとに粛清されてしまいそう。

「詰んだ」

『そう言いました』

両手を上げて降参ポーズ。そうしてる間に、扉が開く。そしてそこに居たのは……。
「箒だ！　助かった！」

「な、何?!　その声は、氷雨か！」

動揺する我が妹、箒。身内ならセーフだよな。

「何故、ここに居る！」

「使用禁止だつて言うの聞き逃しちやつて。いや、それにしても来たのが箒でよかった。他の子だと、警察に突き出されるところだったよ」

「う……」

「う？」

箒が俯き加減で、肩を震わせる。あ……

「良いわけあるかつ！ 今すぐ出ていけえ！」

「ご、ごめんなさい！」

タイルの上に頭を擦りつける。その衝撃で劇中、一夏がシャワーを使うことを許可しないシーンを思い出した。

「あ、こんな遅くにどうしてかと思ったけど、そういえば箒は大人数でお風呂に入るの苦手だもんね」

「う、うむ」

いきなり開き直られて箒も狼狽しているようだ。そうして思考停止している箒を眺める。いつもは括っている髪は腰まで垂らされており、剣道で鍛えられた手足は無駄な肉を排除し、すらりとしたラインを作りだす。そんな細身である身体のラインが、箒の身体のある一点をさらに強調している。

「箒……大きくなつたね」

「ど、どこを見て言っているっ！ 良いからさっさと出ていけえええ！」

その後、脱衣所から出た所を千冬さんに目撃され、反省文を書かされたのは秘密である。

四話 剣の道

入学から二日目。

休み時間。

ISの座学も終わり、また自由な時間が訪れた。と言つても、たった10分だけだね。されど10分。やろうと思えばいろいろできるのが10分だ。この小説も、そんな10分の間の暇つぶしに読んでもらえればいいよ。僕もそうして二次小説を知るようになったからね。寝たふりをしていた頃が懐かしい。

「ねえねえ、篠ノ之くん、お昼暇？ 一緒にご飯食べない？」

「あ、抜け駆けはするいよ！ 私も一緒にどうかな？」

「はいはい！ 私も！」

昨日までは様子見をしていたけ女子たちが今日はここぞとばかりに攻めてくる。というか、僕の方にも来るんだね。それは意外だった。なんだか、高専病と同じような臭いがしなくもないね。

そんな女子たちの対応をどうしようかと、笑顔を浮かべながら考えていると、女子たちの背後に千冬さんの影が迫った。

「お前たち、少し二人に話があるから散れ」

その一声で、女子たちは離れる。でも、ちよつと距離を置いただけで、話を聞く気満々なんだけど、それはいいのかな？

「織斑先生、話ってなんですか？」

「ああ、お前の I S だが、少し遅れるということ伝えておきたくてな」
「？」

千冬さんの言葉に一夏は疑問符を浮かべる。いきなり端折った内容じゃあ、理解が追いつかないのも仕方ない気がするよ。

「つまり、一夏に専用機が用意されているけど、それが一夏の元に来るのが少し遅れるってことですよね」

「ああ、そういうことだ」

「せ、専用機!? 一年の、しかもこの時期に!？」

「つまりそれって、政府から支援が出るってことで……」

「いいなあ。私も専用機ほしいな」

それでもまだ微妙な顔をしている一夏。

「まあ、それだけ専用機が与えられるのは凄いことなんだよ」

「じゃあ、氷雨も凄いつてことか？」

「うん」

「即答か……」

「まあ、それもこれも東姉がコアを作るの渋ってるのが原因なんだけどね」

そんな会話を聞いたあたりで周りのクラスメイトが声を上げる。

「あの、先生。篠ノ之くんと篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……?」

あ、これはまずいよ。一夏の方に目を向けると一夏も僕が言ったことを覚えていたよ
うで目があった。

「い、いや、別に——」

「そうだ。二人はあいつの弟と妹だ」

「——」

あつさりと答えた千冬さんに二人で非難の目を向ける。が、逆に睨み返される。

「隠すことでもない。いずれ、明らかにすることだ」

「そうかもしれないけどさ……」

僕が千冬さんに抗議してる間にも、他の女子たちは箒に迫る。

「凄いつ！ このクラス、有名人の身内が三人もいる」

「ねえねえ、篠ノ之博士ってどんな人？ やっぱ天才なの？」

「篠ノ之さんも天才だったりする!？」 今度ISの操縦教えてよっ」

あ、最後の子のはカチンときたよ。何その超理論。姉が天才なら妹も天才じゃないかって? そんなわけないでしょ。

「あの人は関係ない!」

箒の怒声に、囲んでいた女子たちは驚いて距離と取る。

「大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もないんだ」

クラスの女子たちは困惑した表情を浮かべ、微妙な空気が教室に漂う。ただ、箒に避難の目を向けている女子も少なくともなかった。

「お前らの無遠慮な言葉のせいでこうなったんだから、箒を責めるのはお門違いだよね」
そう言いたいけど。そうしたらもつと箒との間に確執が生まれそうだから、僕は言葉を読み込んだ。言いたいことも言えないこんな世の中じゃ……ポイズン。

「休み時間は終わりだ。授業を始めるぞ」

箒の方を心配そうに見つめる僕と一夏。原作より丸くなったと思うんだけど、この辺は仕方ないことなのかな。

「あ、先生。結局、僕の話は何だったんですか?」

「ん、ああ。先日の反省文の件だが、放課後にするか」

よ、よかった。ここでされなくて……。

◇ ◇ ◇

ただ今、剣道場にて一夏と箒がかかり稽古に励んでいます。

ただ、一夏の動きはね、はつきり言つてひどい。いや、一般人に比べたら基礎ができている分上手いんだけどね。昔の一夏を見ている僕らからすれば、劣化がひどいと思つてしまう。

基礎体力が衰えているから、竹刀を振る速度も次第に遅くなり、もう腕も上がらない状態だ。

現世で、剣道と言えば、バンブーブレードくらいしか思いつかない僕だから、あまり言えた義理ではないんだけどね。今では僕も師範代クラスですよ。あ、千冬さんレベルには辿りついてないよ。あれはこの作品に居るべき力じゃないから。まじ恋にでもクロスオーバーで行けばいいと思えるレベルだよ。

「どうしてこんなに弱くなっている!」

あく。やっぱりこうなっちゃうよね。箒の中ではかつこいい一夏の像を崩したくないもんね。

「受験勉強してたから、かな?」

「それだけで、ここまで落ちるわけがないだろう!」

「まあまあ。今の実力が分かったただけで、今は良かったってことにしようよ」

「しかしだな、剣道で男が女に負けるなど……」

「おや？　ずいぶん物言いだけどき、僕もここに居るんだよ？」

一夏から竹刀を借りる。そして、箒の方を向いて構える。

「そういうのはさ、僕に勝つてから言おうね」

「……私も強くなっている。昔のままだと思わない方がいいぞ！」

とかつこつけたけど、防具付けてないので一旦構えを解いて防具をつける。

そして始まる剣道の試合。原作通りの剣の腕。しかし、鋭さは増しているもの、どこか慢心しているのか、隙の多い振りが多々見られる。

力に溺れている。実際に剣を学んで、対峙した僕の率直な意見だった。

「力技で男に対抗するにはね、千冬さんレベルがないと難しいよ？」

「ふん。それはどうだろうな」

駄目だね。ちよつと手加減してたらすぐ調子に乗っちゃう。僕の妹ながら残念だ。あ、別に本当の妹ではないけどさ。

「お前じゃこの先生きのこれないぜ」

「なっ！」

小手抜き片手面。相手の放った小手に対して、右手を竹刀から放すことで避け、左手

のみで面を打つという、漫画で見て感動した技だ。かつこよすぎるよ、珠ちゃん！

「二本だね」

「くっ」

その後はペースを乱した箒に出小手を決めて、二本勝ちという結果になった。まあね、流石に篠ノ之流の後継者ですから。負けるわけないのですよ。

「残念だったね」

「……やはり、氷雨は強いな」

「箒も強くなったよ。一夏が弱くなっただけじゃないと思うんだよね」

「まあ、俺が弱くなったのは認めるけど、氷雨さらに強くなってないか？」

「え、そりゃ強くなったよ。僕も箒と同じで剣道を続けたしね」

篠ノ之道場に通うってわけにはいかなかったけど、ペイルライダーの学習能力と細かい分析してもらったから、普通の人よりも効率の良い練習だったよ。

「一夏が剣道止めたのにも、理由があったんでしょ」

「まあな。言い訳みたいで言いたくないけどさ」

「そうだったのか。いや、すまない。理由があるにもかかわらず、私は……」

「いいって。事実弱くなってただろ？ だから、これから稽古、よろしくな」

「ああ、任せておけ！」

イイハナシダナ。

五話 騎士出撃

放課後。

「ペイルライダー」

『なんででしょうか』

「アリーナの使用許可が下りたので身体を動かすためにペイルライダーを起動させている。

「今度の試合、セシリアについてだけどさ」

『イギリスの代表候補生、セシリア・オルコット。専用機はブルーティアーズですね』

「うん、そうなんだけどね」

『勝算は限りなく100に近いでしょう』

「圧倒的な自信過剰だね。それは僕も大丈夫だと思ってるんだけどさ」

『何か問題が?』

「いや、ホーミングランスって、ある種、BT偏向制御射撃だよな?」

『ある種ではなく、そのものです』

空中で旋回しつつ、特殊無反動旋回や、三次元躍動旋回などを決めていく。

「BT適正Aのセシリアが苦戦してる中でそれを使ったら、凄く卑屈になりそうじゃない？」

『気にする必要はありません』

「でもさ、代表候補生の立場ってものがあるんじゃないの？」

『先ほどから見せている動きも代表候補生を超えています』

「世界水準、軽く越えてっからなく」

『当然です』

いや、冗談のつもりだったんだけど。でも、束さんが仕上げたISだからそれくらいの出力が出てもおかしくはないのか。

「あ、もしかしなくても展開装甲ついてる？」

『残念ながら現在それに類する機能はありません』

あら、そうなんだ。残念な気もするけど、ちよつと安心したよ。

『かわりにカラオケの採点機能が付いてますが』

「ちよつとそれ地味に気になるんだけど」

『冗談です』

「そつちの方が残念なんだけど……」

二本のビームブレードを展開し、振る。篠ノ之流剣術の中の二刀流は元々神事の際の

劍舞から流れている。なので、僕の剣も見る者からすれば劍術というよりも、舞のように見えるだろう。

『アリーナ内の視聴率100パーセントです』

「そんな情報要らないよ」

意識しちゃうとやり辛くなっちゃうから。

一通りの型をやり終え、ひと息ついてブレードを収納する。三点ミサイルの誘導はペイルライダーに任せているから、今やることではないし、ベクターキャノンはここで撃つたらまずいし……。

「やることなくなつたね」

『そうですか。では、終わりにしましょう』

ペイルライダーを解除し、ISスーツの状態になる。そのまま終わりになるかと思われたけど、取り囲む女子が良しとしなかった。

その後、さらに二時間、名前も知らない女子相手に指導する羽目になった。つ、疲れた。

◇ ◇ ◇

月曜日。

ついにやってきた決戦の日。僕はピットでペイルライダーと作戦会議を行う。

「注意するのはブルーティアーズのブルーティアーズなんだけど」

『ふざけているのですか』

「いたって真面目だよ！」

字面だけ見たら冗談のような文にはなってるけど、別にふざけているわけではない。というか、原作者も途中でビットとか言いだしたし。そんな風に言いかえるなら、最初から違う名前を付けておけばいいのになって思うんだけど……。

『事前に武装はチェック済みです。搭載数、およびその稼働率を見ても、さほどの脅威になるとは思いません』

「いや、代表候補生相手にそこまで言うの？」

といっても、僕自身セシリアの機体は少しインパクトに欠ける気がしていた。大型レーザライフル《スターライトMK-III》も使い方が普通の射撃だし、何発もくらった一夏がまだ動ける時点で火力不足も否めない。一撃必殺とは言わないけど、もう少し威力を上げればいいのにね。

まあ、一番の要因はビットとの同時射撃が現時点で出来ないことかな。プロヴィデンスvsフリーダムのあるくらの射撃密度が欲しいね。あ、ビームブレードで弾くやつやってみたいな。しかし、ミューティアが後ろについてるのにドラグーンが当たらないなんて、キラさんマジスーパーコーデイネーターですね。

『ブルーティアーズよりも、白式の方が気になります』

「ああ、確かに。あれのコアって、白騎士なんだよね?」

『はい。ですから、蓄積された経験が高いと思われます』

なるほどね。だから、あんなに早く単一仕様能力が解放されたのか。

『プランBを提案』

「ん? プランBって何?」

『そんなものはありません』

「まさかのギアーズ!」

そんな感じで、作戦は『高度な柔軟性を維持しつつ臨機応変に対処する』となった。

『単に行き当たりばったりなのでは?』

「しーっ!」



アリーナに出ると、二人はもう対峙していた。

「あなたも逃げずに来ましたのね」

「まあね。これでも篠ノ之の名を背負ってるからね」

ちらりと見ると、一夏の白式はやはり一次移行を済ませていない。さつき乗ったから当たり前ではあるけど、零落白夜はまぐれあたりでも負けるから、確認作業は怠らない

に越したことはない。

「あなた方に最後のチャンスが上がりますわ」

『お断りします』

「黙っててね」

ペイルライダーの茶々は幸い、僕だけのチャンネルにしか聞こえていない。まあ、Sの合成音なんてそういうものだしね。

「わたくしが代表候補生である以上、あなた方に勝つことは明らか。無様に負けて、その醜態を晒されるのは嫌でしょう。なので、今ここで謝罪すると言うのであれば許してさしあげますわ」

「そんなもの必要ないぜ」

考える間もなく一夏は答える。

「ありがたい申し出だけど、そういうわけだから。覚悟してね」

二本のビームブレードを展開し、構える。

「いいですわ。それなら……」

腰部のスカートが外れ、ビットが周囲に展開される。

「踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルーティアーズの奏でる円舞曲で

！」

「行くぞっ!」

『おはようございませす。戦闘行動を開始します』

「動けえええええ!」

それぞれの声アアリーナに響き、戦闘が開始される。

「行きますわよ!」

銃口がこちらに向く。まずは強い方から倒すっていう作戦かな? だけど、戦力を見誤ったね。

「そんな機体で勝負する気か、なめられたものだ」

『警告。キャラがぶれてます』

いや、わざとだから。というか、警告するならスターライトのレーザーの方を教えてよ。

「やあっ!」

迫るレーザーをビームブレードで弾く。

「弾いたですって!?!」

動揺しているセシリアに一夏が飛びこむ。しかし、セシリアはそれに気付き、上手い事距離を取って、一夏を近接攻撃の間合いに近づけさせない。

「俺もいるぞ!」

「くつ。こうなったら、先にあなたから倒してさしあげますわ!」

あ、これは良い展開だ。

「ペイルライダー。離れて見学しておこうね」

『了解。両者の意識は8割が互いに向いています。こちらから動かなければ、狙われな
いでしよう』

セシリアは一夏を気にしながらでは僕と戦うのは難しいと踏んでからだろう。一夏
は元々僕の実力を知っているし、尚且つ戦う動機としてはセシリアに対しての方が強い
からだろう。

そんな両者別々の理由から僕と戦うのは後の方がよいと考えている。

それに、僕は近接武器しか二人に見せていない。だから、ある程度ならとつさに対処
できると踏んでいるんだろう。

「タイミングが来たらよろしくね」

『了解』

二人の戦いを見つめ、僕はにっこりと笑顔を創った。



ピットでは箒、千冬、真耶がモニターから戦いを見つめていた。

「あれ? 篠ノ之くんはどうしたんでしょうか?」

突然、アリーナの隅で動かなくなる氷雨に真耶は疑問を浮かべる。

「氷雨のやつ……強者の余裕のつもりか」

千冬が考えるのは、乱闘という形式になっているが、氷雨自身はトーナメントのシード気分で二人の戦いを見守っているように見えている。

だが、弟が勝つことを応援する千冬からすれば、それはありがたいことだった。

「（一夏はまだ、ファーストシフトへ移行していない。だが、セシリアとの戦いの中でそれが起こり、『零落白夜』が使えるようになるならば……そうなれば、氷雨にも勝つ可能性はある）」

白式のコアが白騎士のコアであり、手に持つ武器は自身が使っていた雪片の後継である雪片式型、それに加えて自分の弟だ。ならば、零落白夜は解放されるだろうと、この時点で千冬は確信していた。

しかし、そもそも白式のコア、つまり、白騎士のコアは白式に転用される前に一度初期化を行っている上に、零落白夜を単一仕様能力にもつのは『暮桜』であり、別のコアが別のコアの単一仕様能力を発動させることはあり得ないことなのである。

だが、ブラコンである千冬からすれば、それは瑣末なことであろう。

そんな風に千冬が考えている中、妹である箒は氷雨に違った感想を抱いていた。

「（氷雨のやつ……遊んでいる！）」

長年の付き合いで分かる。あの笑みが何を意味するか。

真面目な筈からすれば、真剣勝負の最中に遊ぶなんて行為は許せるものではない。剣道の試合でも、幾度となく氷雨の笑みを見て、少しの怒りを覚えていたものだ。

だがしかし、それでもいつも筈はその怒りを奥にしまいこんでしまう。というよりも、消えてしまうのだ。

なぜなら、それでも氷雨は勝つからだ。結果を残されてしまうと、何を言っても意味のないことに思えるし、それでも勝てる氷雨に少しの敬意を表してしまうからだ。

だが、今回は一夏が絡んでいる。その一夏の特訓に一週間付き合った筈だ。許せるわけがなかった。

「氷雨め、後で説教だな」

そんな中、試合は一夏優勢に変わろうとしていた。

六話 決着

あゝ、原作どおりかなって思ったら、意外と一夏が優勢でした。

ビットに慣れるまでが早かったし、ビットを撃ち落とす剣にも迷いがなくて綺麗な太刀筋だった。それもあってか、別にセシリアの弱点論破する前にビットがなくなっちゃったよ。

「うおおおっ!」

一夏がセシリアに突っ込む。瞬間、セシリアが不敵な笑みを浮かべる。

「かかりましたわね!」

そうして、隠していたミサイル弾を打つことのできるビットが一夏に照準を合わせる。

「しまった!」

着弾し、爆煙が一夏のI Sを包む。しかし、俺は知っている。この時点で、一次移行が完了し、機体の外傷が綺麗に治ることを。

「ペイルライダー、もうすぐだからね」

『了解。ベクターキャンノンモードに移行』

その声と共にベクターキャノンが徐々に展開されていく。

一夏は自分の握る雪片式型の変貌、そしてその単一仕様能力、零落白夜に気をとられている。セシリアも、同じだ。

『エネルギーライン、全弾直結』

一夏は原作よりも被弾が少ないから、このままいけば勝てるだろうけど、そうはいかないんだよね。

『ランディングギア、アイゼン、ロック』

反動に備え、機体を固定するために地面に杭が撃たれる。

一夏は上段に構え、セシリアの方へ加速する。

『チェンバー内、正常加圧中』

エネルギーゲージがチャージされ、砲身の前にライフレングが出現する。

セシリアはビットを一夏の方へ向かわせるが、加速している一夏にすぐ間合いを詰められ、ビットは二基とも切り裂かれる。

『ライフレング回転開始』

砲身前方のライフレングは回転速度を徐々に増していく。

一夏がセシリアに肉薄する。とっさのことに近接武器であるインターセプターも出す余裕がないようだ。

そして……

『撃てます』

「行けえええええ！」

その声が届き、こちらに意識が向いた時にはもう遅い。

轟音と共に放たれた空間圧縮破砕砲は二人共々包み込んだ。

勝負が決したことを告げるブザーがアリーナに鳴り響く。

『試合終了。勝者——篠ノ之氷雨』

アナウンスと共に一組のクラスメイトから歓声上がる。

『お見事です』

「まあね。天才ランナーとでも呼んでよ」

『天才ランナー（笑）』

「なんか違う!？」

こうして、クラス代表決定戦は幕を閉じたのだった。

◇ ◇ ◇

「やってくれたものだな」

「何がですか、織斑先生？」

やりきった感じでピットに戻ると、呆れた顔の千冬さんと、般若の面をかぶっている

のかと思うような箒が出迎えてくれた。ちなみに、真耶ちゃんは「凄かったですね」と、興奮気味でねぎらつてくれた。なんだろう、少し僕と同じ匂いがするよ。

「……氷雨」

「は、はい！」

ドスの利いた低い声が箒の口から発せられ、思わず姿勢正して返事しちゃったよ。というか、この怒り様はいつたい何なんだろう。僕は何かまずいことをしたのか？ 気持ちよく勝ったと言うのに……。あ、気持ちいいのは僕だけだったね。つまり、怒っているのは僕の勝ち方か……。

「真剣勝負で遊ぶとはどういうことだ？」

「いや、遊んでたわけじゃないよ？ あ、あれが一番最適で、クールで、かつこよくて、気持ちのいい、やってみただけの勝ち方だったんだよ！」

ああ！ 動揺して本音全部出ちゃってるよ。うわ、箒だけじゃなくて千冬さんの方も雰囲気やばそうだ。

「氷雨には言いたい事が山ほどある」

「奇遇だな。私もあるぞ。なんだったら、指導室を使うか」

「ええ、そうですね」

なんか、意気投合しちゃってるよ！ こ、これは最悪のコンビだよ……。

「ちらっ」

「が、頑張ってくださいね」

真耶ちゃんに視線で助けを呼んだけど、エールを送られるだけだった。

◇ ◇ ◇

「なつつつつつとくいきませんわ!」

セシリアはピットに戻るなり不満を声に出した。

「一夏さんには……まあ、百歩譲ってわたくしの負けということにしましょう。いえ、あのまま邪魔が入っていなければ切り返せていたはずですわ!」

インターセプターを出せなかった時点で勝敗は決していたのだが、セシリアの中でそれはなかったことになっていた。

「そ、それにしても、一夏さん……思っていたよりやりますわね。わたくしにまつすぐ迫ってきて……男らしいですわ」

セシリアは自分の父の母に対する卑屈な姿勢を見て育ち、それによって男嫌いになった。しかし、それはセシリアの知る男が父しかいなかったという知見の狭さ故であった。

だが、それを払しょくしたのが一夏であった。ならば、初めて異性として意識するに値する男が現れ、さらにそれがイケメンであったのなら、惚れるのは当然である。

つまり、セシリアは別にチヨロくない。ほんとである。イケメン至上主義なので異議の申し立ては受理できないのである。

「それに比べて、あの氷雨さんという男は……！」

セシリアから見れば……いや、誰から見ても先ほどの氷雨は漁夫の利を狙った卑怯者に見えただろう。実際の実力がどうであれ、勝ち方があれでは称賛しようにも、できるのは武器の性能くらいのものである。

「次は負けませんわ！」

セシリアもさすが代表候補生と言ったところで、自身にも非があることは分かっている。乱戦であつたにもかかわらず、一人に集中していた。その事実は自分が氷雨を非難できる立場に居るのか？ という疑問を浮かび上がらせるのだった。

きりつとした顔は不意に一夏を思い出し、乙女になる。

「ああ、でも、先日一夏さんにはひどいことを言ってしまったわ。あ、謝りませんと……！」

乙女の戦いはこれからなのである。

七話 決意は固い

反省文を書かされました。それも原稿用紙10枚に。そんなに反省する事があるわけもないし、第一反省の言葉を素直に並べても、一枚埋められるかどうか怪しいものだよ。

途中からペイルライダーにゴーストライター頼んだから早く済んだけどね。

『氷雨河内』

「なんだい、ニイガキライダー」

起動しているISからどんどん現行の情報が流れてくる。それをただ文字にするだけという作業だけど、説教の後だから疲れも一入だよ。

『生体反応接近。照合。篠ノ之箒と判定』

「分かった。そろそろ終わるし、箒と一緒にご飯食べに行こうかな」

流れる情報が止まる。僕の筆も止まり、原稿10枚は要約『ごめんなさい』という、なんと内容の薄い文字列で埋め尽くされた。

扉が開き、宣言通り箒が姿を現した。

「真面目に書いていたか？」

「そりやもういろいろな単語を駆使して引きのばした反省文を書きあげるくらいには真面目だったよ」

「それは真面目というのか……」

少し呆れ顔になる筈だけど、それが僕であると長年の付き合いで諦めてくれているようにすぐに表情を戻した。

「私も、氷雨ならそろそろ終わるころであろうと思つて、夕食を誘いに来たんだ」

「うん。じゃあ、これ職員室に提出してから食堂に行くね。先に行つていいよ」

「そうか。なら先に行つて席を確保しておくでしょう」

「あ、一夏は誘つた？」

ピクリと反応する筈。

「い、いや。まだだが」

「まだつてことは今からか」

しまつたとしても言いたげな顔になる。なんでそんなに不器用なんでしょうか。血なのか？ 東さんも人間関係不器用そう……て、不器用を通り越して放棄してるしね。

「い、いや、べつに、大した意味はないぞ！ ただ、負けた一夏を慰めてやろうとか、思つていないからな！」

「別にそういう理由でいいんだよ。一週間特訓に付き合つたのは筈なんだから、そうい

うことを遠慮しなくていいんだって」

「そ、そうなのか？」

「そうそう。普通に誘っておいで。別に理由なんて言わなくても、一夏は来てくれるからさ」

ただし、他の女子に誘われていなければだけどね。

「う、うむ。分かった。ありがとう、氷雨」

「いいの、いいの。なんとたつて僕は箒……。てもういないだけど」

考えるより先に行動しちゃうのかな？ いや、考えすぎて変な行動をとることの方が多い気がするけどさ。

原作のタツグマツチの前の告白とか、一夏じゃなかったらあの後付き合えていてもおかしくないんだだけどね。

『次にあなたはそういうところが箒らしいと言います』

「そういうところが箒らしい……はっ！」

『シスコンを拗らせるのはいいですが、早く提出に行きましょう』

「別にシスコンじゃないからね。兄として当然の気遣いしかしてないからね」

あ、ちなみに箒とは同級生だけど、僕が6月生まれ、箒が7月生まれで、僕の方が少し早いから兄ということになっている。実際には数日しか差がないけど、兄という自覚

を持てば、人間はどこまでも大人になれるのだ。

「それにしても、もうすぐ鈴ちゃんに会えるのか。そう思うと興奮してくるね」

『これが大人のセリフですか』

恋の前には皆等しく少年になるのさ、ペイルライダー。

◇ ◇ ◇

夕食後。

箒と別れて一夏と二人で部屋に戻る。

「お茶飲むか？」

「うん。飲む飲む」

食後に緑茶を飲むのが僕らの日課になっている。一夏は例え安物でもそれなりに美味しく入れてくれるので、毎回なにかお茶請けが欲しくなる。今ここに羊羹がないのが非常に残念だ。

「最後、何されたかよく分からなかったんだけどさ、後から録画された映像見たらひどかったな」

ポットのお湯を一度湯呑に注ぎ、湯呑から急須に移す一夏。こうする事で、お茶の葉が開く適温にお湯が成るし、湯呑自体の温度も上がり、お茶を注いだ時に冷めなくなるというわけだ。

「ひどいとはなにさ。かつこいいと言ってほしいな」

「いや、確かにあの武器はかつこよかったけどさ。勝ち方はお世辞にもかつこいいとは言えないぜ」

確かに、通りすがりのクラスメイトから凄かったという感想はいただいたけど、かつこよかったは貰えなかった気がする。あれってそういう意味だったのか。

「ほいよ」

「ありがと」

二人してベットの端に座り、お茶を一口飲む。身体の中からあつたかくなり、思わずため息が出てしまう。

「日本に生まれて良かったよ」

「氷雨は安いな」

一夏に笑われるが、緑茶という日本文化を僕は尊敬しているんだよ。千利休万歳！

あ、茶道はまた別かな？

「まあまあ。それにしても、一夏強くなつてたね。あのまま行けば、セシリア倒せてたんじゃない？」

「邪魔したのは氷雨だけだな。後から聞いたけど、あの零落白夜なら一撃で倒せるみただな」

「それもう競技として如何なものかと思うよね」

ああ、この零落白夜にはいろいろな意見が書いてあったね。主に、一夏が兵器として認識できてないって。でも、ISってスポーツなんでしょ？ なら学生がそれを兵器と認識していないのは当然のことなんじゃないかな？

まあ、兵器であることには変わりないから、認識しているに越したことはないんだけどさ。特に専用機持ちはね。

「でも、これって千冬姉が世界大会で優勝した機体の単一仕様能力だよな。なんで俺が使えるんだ？」

「僕に言われてもな。東姉なら何か知ってるかもしれないけどさ」

二口目のお茶を飲む。やっぱりため息が出る。

「あそこまで迫れたのはやっぱり箒の特訓のおかげかな」

「ほう？」

「剣道の間合いの感覚を思い出させてさ、ビットにもその感覚を適応できないかって試行錯誤してたらできたんだよな」

「それ、試合の最中にやったの？」

「ああ。そうだけど」

それはすごいことなんだけど、一夏は理解できていないのかな？

「やっぱり一夏はすごいなあ」

「何がだよ。氷雨には敵わないって」

「そりやそうだけどね」

「堂々とし過ぎだろ……」

いずれ一夏にも負ける日が来るんだろうか……。分からないな。今は僕の方が圧倒的に強いけど、一夏はISの主人公として成長する。それも急速に。追いつかれるのも時間の問題かな。

お茶を飲む。今度もため息は出るけど、さつきまでとは毛色が違った。

戦いに負けるのは良い。でも、負けたくないものが一つだけある。

鈴ちゃんは渡さない!!

『気持ち悪いですね』

「おい」

一夏には聞こえていないようだが僕は心の中で泣きました。

◇

◇

◇

昼休み

と言うわけで、クラス代表は僕に決まったわけでした。ふざけはしたけど、絶対に勝たなくてはならない試合だったことは分かってもらえるかな? だって、鈴ちゃんとの

試合中にゴーレムが来るんだよ？ 良いとこ見せるならそこでしょ！

「決着は納得いきませんでしたけど、篠ノ之博士の弟でもありますし、相応しいのではありませんか？」

「フン、もつと腕を磨いておけ」

「なんですつて!!？」

「嘘ですごめんなさい」

まさか聞こえるとは思っていなかったんです。

「クラス代表トーナメントについてだが、4組の代表者が棄権したこと、および、専用機持ちが一人しかいないことが理由で延期になったぞ」

「はあ!？」

聞いてませんよ、神様！ 原作通りに進むんじゃないんですか!？」

「ちよ、ちよつと待つて下さいよ。4組の代表が棄権つて……なんでですか?」

「専用機がまだ未完成だ。来週までに完成する見通しも立っていない。だから、今回は見送る形になった」

えくと、4組の代表つて言つたら、更識簪だよ。ああ、一夏の白式に人員を割かれたせいで未完成になったんだっけ？ いや、そんなことはどうだっていい。

「中国の代表候補生は!？」

「お前は何を言っているんだ？」

呆れたような顔の千冬さん。確かにそんな顔するだろうね、いきなりこんな事言ったら。

焦る。僕の知ってる原作が徐々に崩れているんじゃないか？ 僕の知らないところで何か起こっているのではないか？

そんな不安が押し寄せてくる。だが、それが現実のものになるなんて、この時は思わなかったのだ。

『アクセスしたところ、中国の代表候補生はすでにこちらへの転入を申請しています』
「あ、そうなの」

嘘ナレーションになっちゃったよ。

◇ ◇ ◇

中国

突然頭角を現した少女が代表候補生になってから数か月たった。もともと代表候補生であった少女をIS学園に送るつもりであった政府だったが、それのおかげで予定が変更され、職員たちは様々な手続きに追われていた。

「ねえ、まだなの？」

来客用のソファでくつろぐ少女がその天才ともいえる、快活な性格を有し、その軽い

フットワークと太陽のような笑顔で私をにやにやさせてくれる少女、凰鈴音の姿があった。

「まだね。織斑女史の弟や、篠ノ之博士の弟といった、特異IS搭乗者が現れたこともあつて、今IS学園は立て込んでいるみたいね」

「ふくん。そうなんだ」

鈴は懐かしい名前を耳にして少し表情が緩む。候補生管理官である楊麗々がそれに気づき、声をかける。

「なんだ、知り合いか？」

「そうね。日本にいた時によく遊んだわ」

そうして懐かしむ鈴の表情をみて、楊はため息を吐く。

「できる限り早く手続きを終わらせるよう手配する」

「わかったわ。じゃあ、今日は何もないのね？」

「ああ、帰ってIS学園の要綱でも見ている」

その日、対応をするはずだった千冬は氷雨の説教をしており、結局手続きは終わらなかった。

八話 実習

授業。

今日から実際にISを用いた訓練が始まる。その初回ということで、まだ生徒はISに乗ることはできないが、僕たち専用機持ちが諸々の動作を実践し、みんなに見てもらおうというオリエンテーションをするみたいだ。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、篠ノ之、オルコット。試しに飛んでみせろ」

専用機は待機中、アクセサリーの形状でその操縦者の身につけられている。僕の場合はペンダント。アクセサリーである必要はないと思うんだけど、そういうところも女性しか扱えない制限に関係しているんだろうか。

……まあ、関係はしてなさそうだね。作ったの束さんだし、何も考えていないに一票だよ。

「熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

その言葉通り、僕はペイルライダーを即座に展開する。伊達に長い付き合いつてわけじゃないからね。

セシリアも僕ほどじゃないしろ、すばやく展開を終える。代表候補生だもんね、流石だね。

「集中しろ」

ISはイメージがものを言う。展開するにも、頭の中でイメージが固まっていなくて、それに答えてくれない。その点に関しては兵器として駄目なところだろうと思う。近代兵器の強みは持てば誰でも兵士になれる所だからね。あ、でも戦闘機とかは別になるのか。じゃあ、さっきの僕の持論は論破されちゃうね。

まあ、そういうわけで、一夏の手を前に突き出すポーズはかつこいいつもりでやっているのではなく、白式を展開する上で必要なモーシヨンであるということをみんなに弁解しておきたい。決して、一夏が拗らせているわけではない。原作者は拗らせているかもしれないけど。

一夏も展開を終えると、千冬さんがそれを確認し、号令を出す。

「よし、飛べ」

言われると同時に飛び出す僕とセシリア。その後を少し遅れて付いてくる一夏。

一夏は強くなったけど、それは戦いにおいてだけなんだよね。

「一夏、おっそーい」

「うるせえ」

イメージ操作、稼働時間。この二つが重要となるIS操縦ではまだまだ一夏は白式の全てを發揮できていないね。

『そういう、あなたも性能の8割しか出せてません』

「まじっか?」

そんなこと言いながらセシリアのブルーティアーズよりは前方にいる。まあ、そもそもカタログスペックがペイルライダーのほうが速いので、稼働時間も上回る僕が遅れるはずはないね。

「スペック上の出力では白式のほうが上だぞ」

一夏にとっては昨日習ったばかりの急上昇。とはいっても、イメージを口頭で伝えられても理解できないだろうというのが本音だね。

ある程度の高さで留まり、後続の二人を眺める。オープンチャンネルでセシリアが一夏に優しく助言をしている。コロツと態度を変えてるけど、僕に対してはあまり前と変わっていない。

なぜだ!

『坊やだからです』

いや違うよ。不意打ちが気に入らなかつたらしいですよ。まあ、僕が考えるに、表ではそう言ってるけど実は……

「ベクターキャノンのかっこよさに嫉妬してるだけだよね?」

『その可能性は限りなく0であると提示します』

いやいや、そんなわけではないですよ。ベクターキャノンを見たら誰だつて欲しくなるよ

! その証拠に、真耶ちゃんももう一度展開してみてくださいって頼んできたし。

そんなことを考えているとセシリアがやってくる。

「遅かったじゃないか……」

「毎回思うんですが、あなたたまに言動がおかしくなりません?」

おかしくなったんじゃないです。パロってるだけなんです。しかし、その実、おかし
く聞こえているんだつたら……はい、私がおかしいですよ。

「そういうセシリアも一夏の前ではおかしくなっていない?」

「あら、そんなことはありませんわ。だ、第一、一夏さんの前だけなんて、まるでわたくし
が一夏さんを特別視しているみたいではありませんか」

「してるよね?」

「してませんわ!」

オープンチャンネルじゃなくてよかつたね。

「あ、あなたこそ、わたくしの前で言動が変わったり、わたくしを特別視してるのではあ
りませんか?」

セシリアが苦し紛れに反撃する。

「いや、別に誰彼かまわず変わるよ?」

「くっ」

一夏から千冬さんまで、ネタのためなら体を張る。それが……ガンダムマイスターだ。マイスターになるとしたら、僕は誰だろう。機体がオールラウンダーだから、これといつてないけど、個人的にはミスターブシドーがいいな。

「二人とも早いな……」

最後尾の一夏もようやく追いつく。

「いえいえ、一夏さんも初めてなのにお上手ですわよ」

「うんうん。白式の性能に助けられているところもあるけど、一夏は呑み込みが早いよ」僕も慣れるまでは何とも言えない抵抗を感じながら上昇してたよ。今そんなことしたらペイルライダーにどれだけなじられるか分かったもんじゃないよ。

「そうなのか? でも、氷雨にもセシリアにも程遠いぜ?」

「え、僕に追いつく気なの? ワロス」

「おい」

そんなこと言いつつも、前言ったように一夏にはいつか追い越されるんじゃないかと冷や冷やしてます。僕が一夏に勝てるどころって、そこくらいのものだと思うんだよ

ね。

鈴ちゃんにアピールするものがほとんどないのが現状です。どうしよう。

「何頭を抱えてますの？ 急降下と完全停止、織斑先生からの指示ですわよ？」

「あ、そうなの？ ありがとう。僕先に行つていい？」

「別にいいですよ」

僕は今、一刻も早く地上に降りて確認しなければならぬことがあるんだ。

「……ペイルライダー」

『何でしょうか』

「最高速……出せるよね？」

『えっ』

「最後まで付き合ってもらおう」

非固定装備のスラスタを最大までふかす。一瞬の内に最高速付近に加速する。地面が数十メートルに迫ると、眼前に厚いクッションをイメージしを瞬時に速度を殺し、完全停止を完遂する。

「上出来だな」

千冬さんの賛辞を軽く無視したのち、箒に迫る。

「箒っ！ 僕の魅力って何かなっ！」

「むっ？ その頭の悪そうなどころではないか？」

なるほど！ 一言目に出てくる言葉がそれか！

「撤退する！」

「どこへ行く馬鹿者」

千冬さんに頭部をがっしりロックされて動けなくなる。話が……違うっすよ……。

空を見ると、一夏が加速し降ったきた。轟音を響かせ、一夏はクレーターを作り上げた。

「なんか安心するな〜」

「どういう意味だよ」

深い意味はないよ。ただ、まだ僕の唯一の優位性は保たれているみたいだと確認できてまだ勝機があることに安堵しただけだよ。我ながら性根腐ってるね。

「大丈夫か、一夏」

「大丈夫ですか、一夏さん」

箒とセシリアがクレーターの中の一夏を心配して声をかける。

「大丈夫だ。ありがとう」

感動的だ。箒が一夏の心配をしてるよ。あ、でも僕だけ心配してない薄情な奴だっと思われないかな？ よし。

「そんなＩＳで大丈夫か？」

「？ 大丈夫だぞ。問題なくエネルギーバリアも作動してたしな」

「あ、はい」

惜しい回答が得られたね。

「授業中だ。緊張感を持って」

怒られた。けど、授業ってそういうものだっけ、千冬さん？

「三人とも武器を展開してみる。織斑もそれくらい自在にできるようになっただろう」

「は、はい」

「ビームブレード、レディ！」

『私のセリフです』

瞬間、僕の両手にはビームブレードが握られていた。早いっただけならセシリアも同

様の速さだった。

「セシリア、そのポーズかっこいいね」

「ふふん。分かります？ まあ、このわたくしがとれば、どのようなポージングも恰好が

付くってものですわ！」

「……オルコット。そのポーズはやめろ」

「え……」

千冬さんの言葉にセシリアがこの世の終わりを目の当たりにしたような呆気にとられた顔になる。

「横に銃身を展開させて、一体どうするつもりだ」

「で、ですが、これはわたくしが武器を展開する上で大事なイメージ構築の要素ですし、それに恰好いいじゃありませんか！」

「……オルコット、勘違いしているようだが、これは助言ではない。命令だ」

すさまじい威圧感を感じてびくりと体を震わすセシリア。

「は、はい」

「可能性は感じたが……」

「あ、あの圧力に逆らうのは無理ですわ！」

プライベートチャンネルでセシリアに言うそう返された。確かにね。あれに勝てるのは、天上天下唯我独尊の束さんくらいなものだよ。

『足掻くな。運命を受け入れろ、ですね』

「分かっているじゃないか」

諦めは肝心だよな。

「ふむ。ある程度はできているようだな。だが、まだまだ遅い。0.5秒で展開できるようにしておけ」

「はい」

「一夏も既に展開を終えていた。見てはいないけど、千冬さんのコメントがマイルドになってるから、もたつかなかったんだね。」

「それと、オルコットは近接用の武装を、篠ノ之は……」

「ぜひ……ぜひベクターキャノンを展開してくださいっ！」

「任せてっ！」

「座ってる」

出そうとしたら千冬さんに止められた。

「山田先生。自分が教師であると言うことをお忘れなく」

「す、すいません……」

しゅんとうつむき加減になる真耶ちゃん。可愛そうに……。ただ、ベクターキャノンの魅力に気付いたばっかりに。

「他の射撃武器はないのか？」

「ありますよ。出しますか？」

「ああ、展開してみろ」

新しく拡張領域に追加した武装はジャイアントガトリングである。

『ジャイアントガトリング、レディ』

イメージし展開する。脇に抱えるようにその長い銃身を露わにした。

「近接武器だけにかまけているかとも思ったが、さすがと言ったところか」

「ペイルライダーは伊達じゃない！」

僕の言葉に千冬さんは反応しない。慣れているからなんだろうね。

「で、オルコットはいつまでそうしているつもりだ？」

隣で唸るセシリア。

「ああ、もうっ！ 《インターセプター》！」

名前を叫ぶとようやく手元に武装が展開される。これ初心者の出し方らしいけどさ、僕はペイルライダーがかわりに呼んだりしてるね。呼ばなくてもいけるけど、言葉にすただけで出せるなら言ってもいい気がするんだけどね。

「……貴様は実戦でも相手に待ってもらおうつもりか？」

「そういえば、前僕にやられる時も出せてなかったね」

「一夏さんに接近された時、ですわ！」

そうとも言えるね。

「で、ですが、あのように接近されることはまずありませんわ！ ですから問題はありません！」

「いや、あるでしょ」

「ないですわ！」

千冬さんがあきれてため息を吐く。

「まぐれでも、実戦で起こればそれが命取りだ。出せるようになれ、いいな？」

「は、はい」

基本が大事。はっきり分かんだね。

九話 兄のお節介

とある夕食後。

一組のメンバーは寮の食堂に各々が持参した飲み物やお菓子を広げている。

「篠ノ之くん、クラス代表決定おめでとう！」

「ありがとー!!」

クラッカーが乱れ咲く。なぜか僕の持っていたクラッカーだけしけってるんだけど、これを取れって言ったのペイルライダーだよね。

『不正はありません』

「この突き出したクラッカーのしまい所を教えてください」

『ダストボックスを提示します』

やっぱゴミなのか。

「これでクラス代表戦が延期じゃなかったらもつとよかったのにね」

「ほんとほんと」

「まあ、でも、専用機持ちが一人しかいなかったら結果見えちゃってるもんね」

「そうだねー」

あ、ちなみに今相槌を打っている女の子、二組の代表らしいです。鈴ちゃんに変わる前はこの子だったんだね。

とは言っても、まさか延期されるとは予想できなかったよ。

鈴ちゃんのフラグを立てるには最適なイベントだったはずなのにね……。

「はっ、フラグとか言うのは、なんか不誠実な気がする！」

「氷雨にそれは望んでないよ」

「おい、一夏。それはどういう意味だよ」

僕は言われるほど変なことしてないよね？ 女子風呂に侵入したり、不意打ちに一撃

必殺くれてやったりしただけじゃないか！

……あまり素行がいいとは言えないね。

「そこが長所だ。気にする必要はない」

「箒、フォローって言うものはね。本人が傷つかないようにするものなんだよ？」

「む、ああ、すまない。勘違いをさせてしまった」

「それはどういう？」

「別にフォローしたつもりはないぞ」

『会心の一撃。氷雨は死んでしまった』

「まさか……箒にまでこの扱いを受けるとは……」

お兄ちゃん、絶望したよ。この心の傷は、鈴ちゃんの笑顔じゃないと埋められないよ。「はいはい、新聞部です。話題の新入生、織斑一夏君と篠ノ之氷雨……くんはどこかな？」

周りの女子が盛り上がる中、膝抱えて座っているのが僕です。

「その卑屈そうな方が氷雨ですわ」

「いったい何の恨みがあるんですか」

「あ、君が篠ノ之くんね。私は二人に特別インタビューしに来た二年の黛薫子。よろしくね」

そう言つて名刺をもらう。

「貴様、覚えておくぞ！」

「え、あ、うん。ありがとう」

「すいません、先輩。こういうやつなんです」

大丈夫！ 最近みんなが僕をディスる傾向にあるけど、愛情の裏返しだって分かってるからね！

「ではでは篠ノ之君！ クラス代表になった感想をどうぞ！」

「トーナメントが延期になったので何もすることがありません」

「正直すぎる感想ね。じゃあ、あの代表決定戦についての感想とかはない？」

これ、ベクターキャノンが気持ちよかったですじゃダメだよね。

「普通の感想で良いなら、一夏の成長が目覚ましい試合だったね」

「氷雨っ!？」

突然の賛辞に狼狽する一夏。

「初めはセシリアのブルーティアーズとの間に苦戦していたみたいだけど、徐々に間合いを理解して行って、終盤にはレーザーを避けつつ切りかかることもできるようになってたからね。白式の機体性能に助けられていた部分もあるだろうし、セシリアがフィンファンネルをうまく使いこなせていないって言う要因もあったけど、一夏のセンスが良かったというのがやっぱり大きかったよね」

「ほうほう」

「少々気になるところもありましたが、一夏さんについてはわたくしも同意見ですわ」

「あ、織斑さんに迫られて焦っているところを横から篠ノ之くんに太くて濃いものを撃たれたセシリアちゃんだ」

「ハハハッ、見てたよ、ルーキーー!」

「る、ルーキーー!?! というより、貴方も当事者ですわよ!？」

うん、そうだね。というか、すごく引つかかる表現してきたね先輩。

「一夏さんの適応スピードは目を見張るものがありましたわ」

「ほうほう」

それをメモる先輩。その横で恥ずかしそうに頭を掻く一夏。

「で、でも、俺なんてまだまだ氷雨やセシリアには及ばないぜ」

「当然ですわ」

「俺がガンダムだ」

『その通りです』

名前だけだからね。それと、ペイルライダーはどちらかというジムだから。

「あ、それじゃあ、専用機持ちの三人の写真撮らせてほしいんだけど。いいかな?」

「もちろんいいですよ」

「いい、一夏さんとですか!」

「おいしい、ナチュラルに僕を除け者にしてない!」

「いつもわたくしを馬鹿にするからですわ。待遇改善を要求するなら、お世辞の一つくらい言ってみればいかがです?」

そう言いつつ、ここぞとばかりにゲスイ笑顔を浮かべる。あの、貴女貴族じゃありませんでしたっけ?

「その時、君は美しい」

「なあっ!」

「わお、大胆発言だ」

ネタだからね。

「そ、そんな風に言われましても……わ、わたくしには、その……い、いち——」
「いやいや、お世辞だから！ 自分で言つてたでしょ!?!」

あとね、綺麗とか可愛いとかの褒め言葉は恋愛感情とは別だから！

「じゃあ、撮るよ?」

「ちよ、ちよつと待つてください。今すぐ着替えてくるので」

「時間かかりそうだから、却下」

そうして先輩はセシリアの手を引き、僕と一夏の間押し込む。

「いくよー」

そういったところで、僕は箒の方を向いて手招きする。箒はどういうことかと思議
そうな顔をしたけど、こっちに近寄ってきた。

「 $35 \times 51 \div 24$ は?」

「無防備に近づくとは!」

箒の手を掴み、引き寄せる。そして、

「ナンセンスだ!」

一夏の方へ突き飛ばし、それを一夏が抱くように支えた。

ぱしやり。

シャッターが切られる音がする。周りを見るとやつぱりみんな入ろうとしていた。

「ななな、何をする氷雨!!」

「え、いや。どうせなら一緒に写りたかったから?」

「なぜ疑問形なのだ!?!」

「箒……そろそろ」

「そうですわ、篠ノ之さん! 早々に一夏さんから離れてください!」

言われるや否や、箒は顔を真っ赤に染め、一夏を突き飛ばす形で距離を取った。

「す、すまない、一夏! こ、これも氷雨が悪……」

そのセリフを聞き終わる前に僕は部屋に退却した。

◇・◇ ◇ ◇

部屋に戻るとなぜか簡易ベッドが部屋の中に一つ追加されていた。

「?」

理由はよくわからなかったけど、一夏が帰ってくるまで暇だからこのベッドでゴロゴロさせてもらうことにしようかな。

体重をかけるとバネがギシリと音を立てた。安っぽいマットレス使ってるなあ。

「あ、でも布団は一緒だ。ふふふ。ふつかふかであるな!!」

『うるさいです』

「乱入してくるとはとんでもない奴だ。ていうか、勝手に起動しないでよ」

『うるさいです』

どこか、僕に優しくしてくれる人はいないでしょうか。

「で、どうかしたの？」

『篠ノ之博士より新たなデバイスが送られてきました。確認の上、インストール許可を』

あ、束さん、また新しい武器作ってくれたんだ。まだジャイアントガトリングもしっかり試していないんだけど、新しいのって何かな？

『デコイ。装甲に瞬間的な負荷をかけ、分身を作ることが可能です』

「なるほどわからん！」

そもそもそれは武器じゃなくてシステムの類だよな？ あ、だからデバイスか。

「ていうか、なんで束姉はこれを僕に送ってきたんだらうね」

『全身展開装甲に使うシステムの試作のようです』

「へえ」

装甲自体に作用するシステムって意味では同系列なのかな？

「しかし、このデコイは胸が熱くなるね」

『なぜですか？』

「質量のある残像とでもいうのか！　って、言ってもらえるでしょ？」
『その可能性は限りなく0だと提示します』
ですよね。

十話 転入生！

「一夏が帰ってきたので、ベッドのことを話しつつ、お茶を入れてもらおうように催促する。」

「普通に考えたら、転校生なんじゃないか？」

「いや、僕もそう思ったけどさ、男二人の部屋に女子を入れるわけじゃないじゃん」

「だよな」

お茶を飲む。ほうつと息をついて芋羊羹をつつく。うますぎる。

「それにしても、何も連絡なしって言うのはおかしいよな」

「千冬さんに聞きに行く？」

「一夏は時間を確認して首を振った。」

「もう遅いからやめとこうぜ。どうせ明日聞けるしな」

「それもそうだね」

お茶を飲む。ほう、とため息をつく。

「なんか、氷雨年寄くさいぜ」

「一夏が言えたことじゃないと思うけどね」

でも、緑茶でほっとしない人間なんかいないと、僕は断言できるよ。

それにしても気になるのは簡易ベッドの意味だ。原作通りに行かないのは理解できる。僕というイレギュラーが割り込めば、原作者が敷いたルールから外れるのは分かりきったことだ。

だから、クラス代表トーマメントが延期されたのも分かる。……いや、疑問はあるけどね。延期理由が僕が割り込んだのと関係ないものなんだよね。

まあ、それは終わったことだからいいけどね。ベッドの意味……考えてみたら割と簡単だ。

また一人、男のIS操縦者が現れた。

それしかない。つまり、ほかにも転生者がいたということだ。それも、ISに乗れるという特典を持って転生者が……だ。

でもそうなると、その転生者は二次創作でたまに見る、『踏み台転生者』ということになるのかな？ うーん、あまりそういうのは好きじゃないんだけどな。

「ま、なるようになるよね」



次の日。

「あ、織斑くんは篠ノ之さん。二人ともおはよー。ねえ転校生の噂聞いた？」

僕らの席に近づいてきた女子が話しかけてきた。

「おはよ〜」

「おはよう。転校生？ 今の時期に？」

「I S 学園の転入は条件が厳しいって言われてたね。国の推薦がないとできないらしい。」

「それも二人いるらしいよ！」

二人？ 国からの推薦？

「お前ら席に就け」

答えにたどり着きそうになっていた思考は千冬さんの鋭い声で止められた。

「予定ではクラス対抗戦の後だったが、延期になった都合で今日から本格的に実戦訓練を開始する。専用機を持たないものは学校の訓練機を使用する。I S を使用しての訓練だ。各人、気を引き締めるよう」

ん？ このセリフっていつのものだっけ？

「I S スーツを忘れたものは代わりに学校指定の水着で受けてもらう。それも忘れたものは、下着でも構わんだろう」

私も一向に構わん！ あ、思い出した。これ、二巻だわ。え、二巻!?

「では、山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ。ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！ しかも二名です！」

「え……」

「「えええええっ！」」

「はあああっ!?!」

声をあげて驚く。

男って……ああ、そういうことですか。

教室の扉が開く。中に入ってきたのは予想通りの姿の二人だった。

「失礼します」

「……………」

ブロンド貴公子と黒ウサギだった。

十一話 セクハラします

教室に入ってきた二人の転校生は教室の前に立ち、自己紹介を始めた。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

「お、男……?」

クラスの中の誰かが呟く。

「はい」

ダウト。

「こちらに僕と同じ境遇の人がいると聞いて本国より転入を——」

ふむ。どう見ても男だ。何も不思議なところはないね。……なんていうと思ったの？

いや、まあ原作知識を持っているからって言うのもあるけどさ、男と認識するのは難しくくない？

外見はまあ、童顔であると考えれば納得できないこともないけどね。でも声が誤魔化せてないでしょう。ああ、生で聞いたらさらにそう感じるよ。

シャルの声を遮るように教室の中に黄色い声が響く。

「男子！ 三人目の男子！」

「しかも全員うちのクラス！」

「美形！ 守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてよかった〜」

「歓迎しよう、盛大にな！」

そそくさとばらしてしまってもいいけど、それだとなんだか味気ないね。

ふむ。セクハラをするというのはどうだろう。もちろん、こつちは男だと思い込んでいるのでボディタッチもただのスキンシップにしかない。

「これははかどるね！」

「騒ぐな。静かにしろ」

そうして静かになったクラスメイト達。注意は次の転入生へと向いている。

「……………」

しかし、口を開く気配のないラウラ。

「挨拶をしろ、ボーデヴィツヒ」

「はい、教官」

「ここではそう呼ぶな。それにもう私はお前の教官ではない。お前もここに通うのであ

れば、いち生徒にすぎん。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

そうして、正面に向き直る。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

そうぶつきら棒に言い放ち、再び静寂が教室に訪れた。

原作を見たら裏の印象は可愛い、だった。まあ、その辺の評価は改心後に關してではあるんだけどね。二巻でのラウラはぶつちやけるとシャルの引き立て役にしか見えなかったね。その後の輝きは鈴ちゃんに劣らずだったけどさ。

そんなラウラと目が合った。

「!・ 貴様が——」

ラウラが近づいてくる。え、なにこれ? まさか、勘違——

バチン

「まじか」

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

軍人の平手打ち早すぎる。虚を突かれた一発で成す術なしなんですけど。え、剣道で強いんだっつたら見切れるだろうって? それは気を張っているとき限定です。

「ハハハ、これだから面白いんだ、人間ってやつは」

「ふん……」

そのまま僕の横を通り、一番後ろに用意された空席に座った。そのテンポの速さに、僕は訂正することすらできなかった、『僕は一夏じゃないよ』って。

しかも、性質の悪いことに、さっきのセリフ『あの人の弟』のくだりが、『東さんの弟』という形で成り立つちやうもんだから、誰も訂正しようとしない。

……あ、千冬さんだけ気づいて口元が笑ってる!!

「認めましょう、貴方の力を。今この瞬間から、貴方は我々の敵」

「我々ってなんだよ、氷雨……」

「大丈夫か、氷雨」

隣の席から箒が声をかけてくれる。

「うん、大丈夫だよ。ありがとう、箒」

なんだか久しぶりに優しくされた気がする。

「では、ホームルームを終わる。各人はISスーツに着替えて、第二グラウンドに移動しろ。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う」

千冬さんが手を鳴らし、みな動き始める。

「織斑に、篠ノ之。デュノアの面倒を見てやれ」

「じゃ、俺は帰らせてもらう」

「おい」

がしりと頭を掴まれる。だって先生、もうおなか一杯なんですよ。鈴ちゃんは出てこないし、ラウラにはビンタされるしで……。

それにもう一つ、都合の悪いことが……。

これだと、ラウラに鈴ちゃんがほこられないよね？ いや、傷つく鈴ちゃんは見たくないけどさ、そこに颯爽と登場、銀河美少年！ みたいなこととして、好感度を上げるということができなくなってるない？ どんどんイベント潰されてるんだけど……。

「分かりました。じゃあ、行こうか。一夏にシャル」

「おう」

「え、どこに行くの？」

「更衣室だよ。教室は女子が着替えに使うからね」

「実習のたびにこの移動だから、早めに慣れてくれよ」

「うん、分かったよ」

そう言うと、一夏はシャルの手を取り教室を出ようとする。

僕はあの二人に群がる女子を遠目に見て、ひとり優雅に移動することにしよう。そう思つて二人を見送ろうとしていると、シャルが僕のほうを見て、手を取ってきた。

「し、篠ノ之くんも早くいこうよ」

「え、あ、うん」

僕の手を引くシヤルは少し頬を赤らめ、恥ずかしそうな顔をする。恥ずかしいならや
らなきやいいのに。



道中。

他クラスからシヤルを見に来た女子たちが後ろに迫る。しかし、三人がそれぞれ手をつないでいる現状では、速度も出ないし見かけも間抜けだ。

だけど、その間抜けな状態はそれだけではなく、もれなく見た女子の好奇心をさらに刺激するというデメリットをはらんでもいる。ただ手をつないでいるだけだが、ある一定層にはそこからさらに濃密な関係を想像する者もあり、いろいろとはかどるのだ。

捕まれば、質問攻めで遅刻は免れない。プラスであらぬ噂までたつてしまいうようなので奥の手を使おう。

「くらえ！ 必殺一夏の寝顔写真！」

「「キャ——！！」」

説明しよう！ 必殺一夏の寝顔写真とは、早朝の鍛錬のために早起する僕が、一夏の安心しきつた無防備な寝顔をカメラに収めて、裏で高額取引がされているとかいないとかいう、超レアな逸品なのだ！

「ちよ、氷雨！」

「いいから逃げるよ」

「あはは」

こうして僕らは更衣室にたどり着いた。

「げ、もうこんな時間か。急いで着替えないな」

「オツケー！」

そう言つて僕はおもむろにズボンに手をかける。一夏はシャツを脱ぎ捨てた。

「わあっ!?!」

「?」

「(ニヤニヤ)」

いや、別に深い意味はないよ。僕は下から先に脱ぐタイプなだけで、決して男物の下着を見て顔を赤くするシャルの顔が見たかつたわけじゃないよ。手で顔を覆うものの、指の隙間から凝視して、また恥ずかしくなつて顔をそむけたりするのを見て楽しんでいゝるわけじゃないよ。

「し、しし篠ノ之くん！」

「あ、僕のごとは氷雨でいいよ？」

「う、うん。じゃあ、僕のごともシャルルでいいよ。……じゃなくなつて！」

訂正しようにもどう伝えたらいいのか、というよりそれを伝えるのは男としては可笑しいのではないかと考えて、どうしたらいいかわからずうろたえるシャル。面白い。

「ん、どうしたんだ。忘れ物か？」

「え、いやそうじゃないけど……」

「なら早く着替えたほうがいいぜ。遅れたら千冬姉に怒られるからな」

遅れたら容赦なく出席簿が飛んでくるからね。

「分かったよ。き、着替えるよ？ でも……あっち向いててね？」

「まあ、男の着替えをまじまじ見る趣味はないけどね」

え、じゃあ、女の子のほうはどうかって？ それは犯罪なのでNGです。

「まあな。……って、シャルルはジロジロ見てるな」

一夏の体は中学の三年間帰宅部だった割にはほどほどに筋肉がついていて引き締まった体をしている。そりゃ、シャルも見ちゃうよね。むっつりだね。

そんなシャルの肩を回して密着する。もちろん男同士のスキンシップであって、他意はない。ふわりと鼻をかすめるシャンプーの甘い香りなんて別に気にならない。

さらにだ。コルセットを巻いている胸辺りはさすがにあまりいい感触はないけれど、肩とか二の腕辺りは女性特有の柔らかさを有している。

鈴ちゃんが来ないからってふつきれてる節があるね、僕。

「確かにいい体だけど、ジロジロ見るなんて、シャルルはそっちの気があるのかな？」
「ち、違うよ!!」

そう言つて顔を真っ赤にするシャル。この子面白い。

「おいおい、氷雨。そのくらいにしないと、本当に遅れるぞ」

そう言つて一夏に引き離される。……残念。

「ごめんな、シャルル。こういうやつなんだよ」

「う、うん。ビックリしたけど、大丈夫だよ。お、男同士だもんねー」

都合のいいように解釈してくれた。うん、ネタを知つてると面白いな。

とと、そんな感じで遊んでいるのもいいけど、本当にそろそろ行かないと千冬さんに叩かれそう。千冬さんの出席簿は竹刀で叩かれた時くらい痛いからね。

「……あれ？」

「ん？ どうしたんだ、氷雨」

「どうしたの？」

見るともう着替え終えた二人がこちらをうかがっている。あ、シャルはもう半裸の僕になれたのかな？ とか思つてたら頬は赤いから無理してるみたいだね。

「あのさ、水着つて……持つてる？」

「!？」

十二話 セクハラされます

グラウンドにつくと千冬さんに変な目で見られた。それもそのはず……。

「貴様、その恰好は何だ」

「ISスーツも水着も忘れたので言われた通り下着で来ました」

僕の姿に気づいた一組と二組の女子は「キャーキャー」と歓声とも悲鳴ともつかない声をあげていた。

何これ……。いや、一番それを言いたいのには僕じゃなくて千冬さんだろうね。さすがの僕も大勢の女子の前で下着一枚というのは……。

「恥ずかしいね」

「そ、その割には堂々としてるよね」

「まあ、見られて減るもんじゃないからね」

減っているものといえば、兄としての尊厳くらいかな。箒の目がものすごく冷たい。絶対零度……。肉親に向ける目じゃないよ、あれ。まあ、実際肉親じゃないんだけどさ。

「専用機持ちなら量子変換したものがあるだろ」

「あ、忘れてた」

振り返ると、一夏やシャルも同じような顔をしていた。おいおい、三人もいてなんで気づかないんでしょうね。

さつさとI Sスーツを展開させる。それは魔法少女の変身シーンとは違って隙がなく、局部は見えない。うん。だから、その君。かがんで覗きこもうとしても意味ないんだよ？ 何故か残念そうな声が聞こえた気がするけど、見えたからってどうということもないでしょう……。

「では授業を始める。初めに専用機持ちに模擬戦をしてもらおう。そうだな、醜態を晒したお前にやってもらおうか」

ひどい言われ様だ。さつきの僕のどこが醜態なのか。ありのままの姿を見せただけだよ。

「ありのーままのー自分になーるーのー」

「ひどい歌ですわ」

「失礼な。世界的に人気なんだよ？」

「曲ではなくあなたの声のことですわ」

「それほどでもないよ」

「褒めてませんわよ！」

「元氣そうだな、オルコット。では、お前にも模擬戦をしてもらおうか」

「は、はい……」

とぼつちりを喰らったと言わんばかりに僕の方を睨むセシリア。でも、自業自得だからね。

「先生、僕とセシリアが戦うってことでいいんですか？」

「いや、お前たちの相手は……」

音を立てて飛来してくるのはISだった。だけど、こちらに迫ってくる速度は一向に落ちる気配はない。あ、一夏の方に行った。練習の成果もあつて瞬時にISを出せるように一夏が白式を展開し、それを受け止める。言わずもがな、飛び込んだのは『大きなぎる、修正が必要だ』の真耶ちゃんでした。何が何だかわからない様子の一夏は真耶ちゃんに覆いかぶさったまま動かず、ふにふにと胸の感触を確かめていた。

「あのう……その、ですね。困ります……こんな場所で。いえ！ 場所だけじゃなくてですね！」

なんだか暴走気味の真耶ちゃん。

一夏は鈍感ではあるが、別に異性に興味がないわけじゃない。……というか、早く離れればいいのに。

「はっ！」

一夏が頭を上げる。一夏の頭があつたはずの場所を一閃のレーザーが通過する。

「あら、残念。外してしまいましたわ」

まったく目が笑ってないよセシリアさん。

「何をしている馬鹿者。さっさと立て」

「は、はい」

離れる瞬間残念そうな顔をする一夏。なぜだ！

「坊やだからさ」

「……2人の相手は山田先生にやってもらう」

あ、原作通りなのはいいけどさ、僕めちやくちや強いですよ？　いくら元代表候補生とはいえ、ISを扱った年数も機体のスペックも違うし、負けなと思うけど……。

「先生」

手を上げて千冬さんのほうを向く。

「なんだ」

「僕が二人を相手したほうがよくないですか？」

「「えっ!?!」」

クラスの子から驚きの声上がる。まあ、僕が真面目に戦闘したところをまだ見せてないもんね。僕が見せたのは、ベクターキャノンをぶっ放したところだけだもんね。

「その自信はどこから来るのか……。なら、セシリアは下がれ。一対一でやらせてやる

う」

「いえ、それならわたくしが一人でお相手いたしますわ！」

「どうやら一夏にいいところを見せようとしているみたいだけど……二人がかりで負けてたからねー。」

「行きますわよー！」

セシリアは千冬さんの返事を待たずして真耶ちゃんにビットを飛ばす。千冬さんは呆れ顔を浮かべたまま、シャルに真耶ちゃんが駆る機体の説明をさせていた。

『ラファール・リヴァイヴ』

それが真耶ちゃんの駆る機体。デュノア社が作った最後期の第二世代機。スペックは第三世代に劣らないと謳っているものの、第三世代の最大の特徴はそれ特有の武装であり、あまりこの機体に魅力はない。あるとすれば、その汎用性くらいのものだね。量産機としては十分な性能だとは思うけどね。あ、もう一つ魅力があった。それはデザインだね。

◇ ・ ◇ ◇

で、結果。

「ま、負けましたわ……」

惨敗。

「やれやれ、レイブン相手じゃ分が悪かったね」

「レイブンってなんですか……」

周りのクラスメイトの目が冷たいが、セシリア自身はショックで周りに気が回っていないようで気づいていないのが救いだね。

「山田先生はああ見えて代表候補生だったからな。ま、これでI S学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

その言葉を聞いて、クラスの女子はなるほど頷く。セシリアに対する視線も少し暖かくなった。

しかし、これは一組の真耶ちゃんに対する態度を受けて、気を利かせたのかな？ 千冬さん、人に気を配れたんだ……。

「次は私とお前でやるか？」

「滅相もございませぬ」

心を読むのはやめてほしい。

「専用機持ちをグループリーダーとして、八人グループになって実習を行う。では分かれる」

そういうと、一夏とシャルの周りに一気に人が集まった。

「うんうん、やっぱり二人は人気者だね」

これは予想通り。ただ予想外だったのは……。

「篠ノ之くん、教えてね！」

「手取り足取り……腰取り」

「アリーナでも教えてもらったけど、教えるのすごく上手だったよね！」

「またあの動きを見せてー」

僕の周りにも人が集まっているってことだ。まさか僕にも人気があったとはね。篠ノ之ブランドがあるからっていうのは分かるけど、こういうのを目の当たりにするとやっぱりうれしいものがあるね。しかし、この偏り様、千冬さんからのお叱りが来るんだらうね。

「名前順で分かれる馬鹿者どもが。そんなにグラウンドを走りたいなら別だがな」

千冬さんの声に反応し、僕たちの周りにいた女子たちは綺麗な五列を作っていた。

「初めからそうしている」

千冬さんも大変そうだね。

分けられた班についているんな声が聞こえてくるけど、ラウラの班はお通夜状態だね。セシリアの班はともかく、一夏やシャルの班の浮かれ具合と相まってすごくかわいそうだよ……。

「午前中はISの起動から歩行までやってもらおう。遅れたものは居残ってもらおうから

な。では、始めろ」

そうして始まる。

「じゃあ、待機中の I S に乗ってみようか。あ、そこに足をかけてゆつくりとね。そうそう、そんな感じ」

一人目の子が起動し歩行を始める。

「あ、しゃがんだ状態で降りてね〜って、ああー」

注意するのが遅かったようで、一夏の班同様に立ったまま女子が下りてしまった。

「え、なにになに？ ダメだったの？」

「うん、まあね。ほら、乗るところが高い位置になってるでしょ？」

それで、ほかの女子も「あく」と声を出す。仕方がないな……。

「ここは僕が踏み台になるよ！」

「えっ！」

I S の前で四つん這いになる。二番目の子が恐る恐る足を乗せる。

「んっ！」

「!？」

背中にかかった体重に思わず声が出る。ああ、これは……これは……！

「あの、届かないけど……」

「よしやめよう」

思った以上に気持ちよくなかった。ただただ痛い。女子だから軽いんだろうけど、僕にかかる力は重さ／足裏の面積なので、女子の小さな足で踏まれたら痛いんだよね。

あ、ちなみに僕はうなじフェチだよ。ここで脚フェチだったら、また違う感想も出てきたんだろうけどね。

「うん、じゃあ肩車しよう」

「「か、肩車!?!」」

驚きの声上がるけど、それしかないでしょ？ あの高さならちようどいいと思うんだよね。

「手こずっているようだな……手を貸そう」

「肩だよね」

そうとも言うよ。

しゃがんで女子に背を向ける。今度は吹っ切れた女子が僕の首にまたがる。

「……………」

「し、篠ノ之くん?」

やばいやばい、これはやばい。

ちよつと考えれば分かることだったよ。女子を肩車なんてしたら素足が僕の頬の横

に来るんだよね。それでなくともISスーツって生地がめっちゃくちや薄いから……。

「危険よ、距離を取って！」

「え？ えっ!?!」

「あ、ごめん。こつちの話だから」

む、無心だ。大丈夫、大丈夫。神経を末端に集中していれば、まずいことにならないって言ってた。

「それじゃ行くよ」

すつと持ち上げる。やっぱ軽いな。

「じゃ、そこに足かけて」

「うん」

そういうと上の女子は足をかけようと動き出す。

まあ、そんな風に動かれると、頬に生足が触れるわけで……一夏じゃないけど、僕もほどほどに思春期だからね。

「の、乗れた？」

「ん、もうちよつと……キャツ」

そこで体勢を崩した女子が僕の頭にしがみつく。なんですか、このラツキースケベイベント。

そ、それでも僕の愛は、ゆ、揺るがないし！

「ゆ、ゆつくりでいいからね！」

「う、うん」

あ、なんか背後からの視線がすごい。

精神を激しく疲弊して、二人目がようやくやくI Sに乗り込んだ。その後は難なく歩行も
終えたのだが。

「ねえ、なんで立ったまま降りたの？」

「え、いや〜」

ごめんね。実はわかかってるんだけどね……。僕でもいいの、それ？

「さ、次は私だよ！」

「……貴様、前のようにはいかんど！」

「はいは〜い」

慣れてるね。一組の子かな。

その後、逆セクハラを受け、シャルの気持ち少し分かった気がしました。

十三話 H A D E S

昼休み。

一夏に昼食を誘われたけど、昼休みにある人物に呼び出されているので丁寧に断つた。

ある人物ていうのは、僕の姉である束さんだ。

「やあやあ、来てくれたんだね」

どこにいるのかというと、僕の部屋だ。IS学園のセキュリティ、笨すぎでしょ。相手が悪いともいえるけどね。

「それで、どうしたの？ いきなり呼び出して」

「そんなそっけない態度しないでほしいなあ。面白いもの上げたでしょ？」

面白いものって、デコイのことかな。

「確かにあれは面白いね」

「でしょでしょ」

装甲に負荷をかけて分身を生成する。作られたデコイはISのシステムに干渉して、センサーに自機だと誤認させる。

「控えめに言っても強すぎない?」

「そうかな? 試作段階だから何とも言えないけど、装甲を消耗するから一回使ったらしばらく使えないよ」

つまり、タイミングが大事ってことだね。

「それで、本題は?」

「せっかちなあ、ひーくんは」

やれやれと言った顔をする。

「フランスから来た転入生のことだよ」

シャルのことだね。それについて話があるって、シャルが女だっていうことかな?

「シャルルがどうかしたの?」

「うん。そいつ、フランスの企業の娘らしくてね。ひーくんの蒼騎士のデータを盗もう

としてるんだよ!」

語気を荒げる東さん。あの、さらっと娘とか言ってるけど、東さんにとってそこはど
うでもいい情報なんですな。

「つて、僕の!?! 一夏の白式じゃなくて?」

「そつちも取る気なんだろうけど、優先は蒼騎士みたいだね」

『蒼騎士ではありません。ペイルライダーです』

「あ、そうだったね。ごめんごめん」

ペイルライダー、名前気に入ってたんだ。

「それでね、はいこれ」

「？」

手渡されたのは折りたたまれた薬包紙だった。

「何これ」

「劇物」

「どうしろと？」

「やっちゃって」

「馬鹿か、お前。馬っ鹿じゃねーのか！」

『またはアホですか』

「ええー」

残念そうな顔しないでよ。弟を殺人犯にしたいんですか!?

「でもさ、取られたところでどうってことはないでしょ?」

「世界一の天才科学者、東さんが作ったものだよ。オーバーテクノロジーの宝庫なんだよ? 真似されるのは癪じゃない」

まあ、確かにペイルライダーにすら第四世代の展開装甲の試作システムが積んである

しね。白式にはそのものが積んであるけどさ。

「まあ、盗まれていい気はしないよね」

「でしょー」

だからといって、どうすればいいんだろうか。原作ではシャルの中で、デュノア社に情報を送るシーンはなかったね。

「注意はしておくけど、僕から何か行動することはしないよ?」

「うんうん、それでいいよ」

でも、それだけの要件ならなんでわざわざここまで出向いてきたんだろう?

「束姉、それだけなの?」

「お、鋭いね、ひーくん。さすがは篠ノ之流後継者だね」

「束姉のほうが強いのにね」

「いやいや、剣を持たれたらひーくんにはかなわないよ」

全然そんなことないです。束さんの体はDG細胞でできてるんじゃないかと思うくらい生身で最強です。千冬さんの化け物加減とどっこいだよ。

「それでは、重大発表です!」

「いええーい!!」

『パチパチ』

乗りいいねペイルライダー。

「なんと！ この束さんがお弁当を作ってきたのだ〜」

「うおおおおお……お？」

『理解不能です』

「冗談だよ、冗談。あ、でもお弁当はあるよ。クロちゃんが作ってくれたの」

差し出された重箱を開けると、真っ黒の塊が鎮座している。

「なにこれ」

「お弁当」

「ひと、これを炭という」

蒸気機関でも搭載していないとこれを摂食行為に使えないよ……。

ガリガリ

「食べるんだ」

それを見送って、僕は購買で買ってきた惣菜パンをかじる。

「それでね、いいもの持ってきたんだよ〜」

そういつて、粒子が集まり手元に何かが開かれる。

「そのボールみたいなの？」

「そうそう」

表面に模様が走っているが、それだけのものだ。機械的ではあるけど、どんなふうに使うのかはわからなかった。

「この中にはすごく面白いシステムのデータが入ってるんだよ」

「それ、データだけ送れなかったの？」

「ものすごい容量だからね。たぶんインストールしたら追加の武装は入れられなくなりそうだね」

「そうなの？ ベクターキャノンは？」

「無理」

「そのシステム要らないわ」

ロマン砲を捨てるくらいならどれほど実用性があっても要りませんよ。

「えええ」

「いや、だつてさ、ベクターキャノンだよ？ 漢のロマンだよ？」

「このHADESシステムもすごいものになあ……」

え、今ハデスって言った？ HADES？ EXAMの後継の？

「まあ、これごと置いていくから、気が向いたら試してみてね」

じゃ、と言って束姉は窓から外へ飛び出していった。

次の瞬間、寮のドアが開いた。

「……ここに誰か来たか？」

そこに立っていたいたのは千冬だんだった。たぶん、東さんの侵入に気がついてここにやって来たのだろう。

「バカもーん！ そいつがルパンだー！」

「……………」

「睨まないでくださいよ。東さんならもうどこかに行きましたよ
「ちっ」

なんで舌打ち？

「あの馬鹿と何の話をしていた」

あ、この目は嘘ついたら殺されそうだ。

「えと、ISの新しい機能の入ったボールをもらいました」

「……嘘はついてないみたいだな」

嘘を吐く気なんて……ただ、すべて言ったわけではないけどね。

「だが、真実を言ったわけでもなさそうだな」

オワタ。

◇ ■ ◇ ◇

「なるほど。デュノアのことを教えられたのか」

「イエス、ママ」

正座して、敬礼のポーズをとる。

「学園のほうにどういう意図があるかは知らんが、デュノアは男として扱われている。束の言う通り、デュノアの目的はお前の蒼騎士と白式のデータを盗み、第三世代機の開発に着手していくつもりだろうな」

『ペイルライダーです』

デュノア社は第三世代の開発に出遅れているみたいだから必死なんだろうね。ペイルライダーは黙っててね。

「にしても、どうしてこんな突飛な策がまかり通ったんですか？ フランス政府なんかはパスポート見ればすぐわかるものなんじゃ？」

「フランス政府が自国の利益になる不正にいちいち介入するわけがないだろ。束の技術を盗んで作ったISが量産されれば、自国の軍事力は欧州で頭一つ抜けるだろうからな」

学園内にいる僕らは守られているからね。そのISの情報の開示も求めることはできない。それなら、学園に刺客を送っちゃえっつてことだね。

「それはいいんだけど、シャルルはどうやって情報を盗む気なの？」

「ISのハイパーセンサーでとらえたデータをコアネットワークを通して本社に送るん

だろうな」

なるほど、つまりシャルのISのシステムに直接干渉しないといけないわけか……。

「お前は何もしくない」

「いえいえ、何もする気なんてないですよ？」

「ならいい。午後の授業も遅れずに来るように」

そう言っつて、千冬さんは部屋から出ていった。

「で、ペイルライダー。シャルのラファール・リヴァイヴ・カスタムIIに接触できるか？」

『……………』

「ペイルライダー？」

なぜか返事がない。なんでだろう。起動もしてるし、システムに欠損も見つからない。

「どうしたの、ペイルライダー」

『黙っていると言われましたから』

「いいから、そういうの」

柔軟な思考が可能なAIが何を言ってるんだか。

『接触は容易です。ですが、数時間接触する必要があります』

「なにを？」

『操縦者同士の接触です』

「数時間？」

『はい』

「ムリゲー」

どうしようか思索しながら、コロツケパンを頬張りました。

◇ ・ ◇ ◇ ◇

放課後。

自室にて、夕食後のお茶を飲んでいる。

先ほどまで食堂で質問攻めになっていたシャルだが、どこまでも続きそうだったのでちよつと無理やりだけど、自室に戻ってきた。

そして、いつものように一夏の入れたお茶でのんびりとしている。

「紅茶と違う感じだけどおいしいね」

「気に入ってもらえたようで何よりだ」

シャルものんびりとしている。簡易ベッドに腰掛けるシャルはジャージ姿に着替えている。うーん。寝る前だというのに、コルセットを巻いているのはつらくないのかな？

たぶん苦しいと思うんだけどな。

「そういえば、一夏は放課後 I S の特訓をしてるって聞いたけどそうなの？」

「ああ、氷雨と箒とセシリアと一緒にな」

「一夏は覚えがいいからね。スポンジみたいだよ。カッピカピの」

「か、カッピカピ……」

「なんだよ、それ」

シャルは戸惑い、一夏は笑う。シャルは耳年増か。

「ぼ、僕も加わっていいかな？ 専用機もあるから少しは役に立てると思うんだ」

「おお、それはありがたい話だ。ぜひ頼むよ」

「そうだね。僕が教えられるところは結構限られてるしね」

主に教えるのは操縦技術。剣術は僕より箒に教わったほうがいい。バトルスタイルが二人は近いし、どうせ一夏のことだから、僕みたいに待つのは性に合わないだろうからね。

「うん、任せて」

となると、明日の放課後から参加することになるか……。ならば、手を打つなら今日の夜しかない。

あ、結構いいこと思いついたよ。

「んじゃ、今日はシャルルも転校初日で疲れているだろうからさ、僕のベッド使つていいよ」

「え？」

「そつちの簡易ベッド堅いでしょ？ それじゃ、疲れが取れないよね」

「そ、そうかな？」

「だよね、一夏」

「まあ、そうだけど。氷雨はいいのか？」

「僕は二人より体ができてるからね」

飲み干した湯呑にお代わりを入れて簡易ベッドのほうへ行く。

「シャルルは見るからに華奢だからね。あ、でも、今日だけだからね。僕はそこまで優しくないから」

「あはは。うん、ありがとう。じゃあ、お言葉に甘えようかな」

そんなわけで、湯呑を傾ける。

ほうつと息をつき。ニヤリと笑う。

「(計画通り)」

夜の作戦開始だ。

十四話 夜の帳

寝静まった夜。

僕は立ち上がり一度トイレに入る。別に出るものなんてないけど、こういう振りが必要なのと、ペイルライダーとの会話を聞かれないためだ。

まあ、熟睡しているならその心配はないんだけどね。

「作戦会議を開くよ」

『……了解しました』

「寝てた？」

『寝てません』

「熟睡だった？」

『熟睡でした』

「ごめんね」

『問題ありません』

ISが寝るのかって？ 一応スリープモード中にそれに近い状態になるらしい。

「今からシヤルに接触する」

『夜這いですか』

「違う。……いや、違うない」

でもえらいことするわけじゃないよ。あ、そういうえばエロイコってイタリアの言葉で英雄って意味らしいね。英雄、色を好むとはまさにこのことだね。

「じゃあ、任せたよ、ペイルライダー」

『了解しました』

決意とともに、僕はトイレを出た。



深夜。

部屋の中は静かだ。だが、環境が変わったばかりのシャルはあまり深い眠りにつくことができていなかった。

故に、ちよつとした音や光の刺激で目が覚めてしまう。

「(ん……。トイレかな)」

うつすらと目を開けると、トイレから出る氷雨の影が見えた。

その影はこちら側に歩いてくる。

簡易ベッドは位置的に一番窓際にある。なので、氷雨の影はシャルの視界を通り過ぎ、後ろに回る。

「……………」

うとうとしてきたシャルは瞼が落ちて、視界が狭くなる。

「……。っ!?!」

そんな微睡みに向かっていたシャルの意識は一気に引き戻される。

「えっ！ ええっ！」

何に驚いているのかというと、自身の布団の中に何者かが入ってきたからである。

首だけ回し、後ろを確認すると、背中にびったり引っ付くように誰かがこちらを向いて眠っていた。

「(ひ、氷雨!?)」

当たり前のごとく氷雨であった。彼は気持ちよさそうな寝顔を浮かべている。

「(寝ぼけてるのかな……。ど、どうしよう)」

もともとのベッドは氷雨が使っていた。だから、寝ぼけてももとのベッドに入ってしまったのだろう。シャルはそう考えた。

しかし、この感じ。背中から伝わる熱や、首筋をくすぐる吐息。シャルにとっては耐えられる空間ではない。

「(か、簡易ベッドに移動しよう)」

そう思って、体を浮かそうとしたとき、体を掴まれる。

なさい。

もうね、罪悪感で胸が押しつぶされそうなんだけど……。

さすがにね、セクハラのキツさを味わった後の僕は、もう嬉々としてシャルにセクハラをすることはできないよ……。

女の子に触れることが、こんなに苦しいことだったなんて……。

『システム削除、約二十パーセント』

うう、こんな作戦執行しなきゃよかったよ。

そんな後悔を抱きながら、僕は温もりを抱き続けるしかなかったのだった。



朝。

昨晚、シャルはしっかりと眠れたらしい。結構神経図太いんだね。そりや、単身IS学園に男装で乗り込むくらいだからね。それくらいの度胸はあるんだろう。

「も、もういいから。僕は大丈夫だから」

えくと、今どういう状況かと言いますと、僕がシャルの前で土下座をしている。

「氷雨は大げさだな。男同士なんだからそこまで謝るものじゃないだろ」

「貴女には、その質問を行う権限がありません」

一夏には僕の心情もシャルの心情も絶対分らないだろうね。だって、シャルが女子

だって気づいてないもんね。

「二夏の言うとおりだよ。ね、僕も怒ってないし、氷雨は僕のことを想ってベッドを交換してくれたんだし。もう顔を上げてよ」

うわあ、優しい言葉をかけないでええ。僕は最低な男なんですうう。

「もう……。じゃあ、こうしようよ。放課後の特訓の時に僕の練習も見せてよ。それで、許すってことでどうかな？」

「え、そんなことでいいの？」

もう、データ転送の心配はないし、それくらいのことならやるつもりだったけど。

「うん。それに、篠ノ之博士の弟に教えてもらってるって、すごいことだと思うよ？」

「そうか、考えてみたら氷雨に教えてもらってるって、結構贅沢だよな」

「いやいや。束姉の弟ってだけで何もないからね」

ISのことも独学だったし。主にペイルライダーに教えてもらっていただけだね。

「でも、僕に教えられることなら何でも教えるよ」

「ほんとに？　ありがとう、氷雨」

シャルが元気そうでよかったよ。



休み時間。

「氷雨」

休み時間ごとにシャルが僕らのところにやってくる。なんというか、懐かれた？ そんな感じがする。あれ、そんなイベント起こしたっけ？

「さっきの授業分かった？」

「僕は楽勝だったけど……」

言いよどみつつ隣の席を見る。そこにいる、頭から湯気が出ていそうな男、一夏の肩をたたく。

「ほら、休み時間だよ」

「う、慣性をなくして、推進翼で小型翼を任意に三次元動勢……」

あ、だめだこれ。完全に混乱してる。

「仕方ないよ。だって一夏はISの勉強を始めたばかりだもん」

「まあね。一夏の場合、受験の後だから、三月くらいからになるのかな？」

電話帳のような冊子は捨てたらしいから、実際は四月からになるけどね。

「いやー、未だにさっぱりなんだよな。感覚は掴めるんだが、理論にされると……」

「拒絶反応でちやうよね」

僕も知識を詰めるときは蒼騎士に乗って実践しながら覚えたからね。体を使って覚

えることが大事だって、よく聞くもんね。

「それでも重要なのは実践で扱えるかどうかだから、感覚がつかめているなら十分だと思おうよ」

「うん、氷雨の言うとおりでよ」

でも、今はこんな感じの一夏だけど、大部分の授業は理解できてるみたいなんだよね。恐ろしい学習能力だよ。僕なんか三年かけて準備したのにな。

「あ、僕ちよつとトイレに行つてくるよ」

「ああ、行つてらっしゃい」

そう言うのと一夏はもう一度机に突つ伏した。相当ダメージ受けたみたいだ。

「僕も一緒に行つていい？」

「ん？ 別にいいけど、シャルルもトイレ？」

「う、うん」

僕の問いに少し顔を赤くするも、動揺を隠して答える。あ、女子にそういうこと聞くのはデリカシーに欠けるよね。

「じゃあ、行こうか」

二人で教室を出る。

なぜか少し斜め後ろを歩くシャル。

「ねえねえ、話しづらいから横に来てよ。あ、僕歩くの少し速かったかな？」
「え？ う、ううん。そんなことないよ」

たたつと距離を詰め、「エヘヘ」と笑顔を見せる。あれれ〜おかしいよ。だつてこれ、フラグ立つてるもん。見た目は子供、頭脳も子供だけどき、これはまずいなあ……。「氷雨はI Sのこと詳しいよね。やつぱり篠ノ之博士に教えてもらったの？」

「いや、そういうわけじゃないよ。まあ、自分の姉が作ったものだから、知っておこうかなつて思つて調べただけだよ」

だから、一般公開されている技術のレベルまでしか知らない。まあ、ちよつとメタ知識も持っているけどね。

「そうなの？ 独学でするなんてすごいね」

「いやいや」

僕なんて時間をかけたただだよ。学校の勉強は生前の知識でしなくていいから、その分の時間をI Sに回しただけ。

その点、一年で代表候補生にまで成り上がった鈴ちゃんつてさすがだよね！

「そういえば、シャルは代表候補生なんだよね」

「うん、そうだよ」

「男を代表候補にするなんて、フランスつてなかなか度胸あるよね」

僕や一夏は保護という名目でIS学園にいる。それは男性操縦者という例外を利用しようとする国や組織からだけでなく、男がISを駆るということを好ましく思わない団体からの脅威から守るという意味でもある。

だから、そんな男を候補生すると多方面から苦情が来ると思うんだよね。

「えー！ あー、うん。なんか大丈夫みたい」

……まあ、元々代表候補生だったシャルを男装させたつてことだろうね。

「氷雨も専用機を持つてみたいけど、代表候補生なの？」

「いやいや、さすがに起動して二か月じゃ候補生は無理だよ」

「あ、そうだよね。ISを動かしたのはここ最近なんだよね」

うん。実は二か月なんだよね、公ではね。

「あのね、氷雨の専用機つてもしかして、篠ノ之博士が作ったの？」

「あ、トイレ着いたよ？」

シャルの問いに答える間もなくトイレに入る。シャルはさすがに個室なのね。

どうでもいいけど、シャルはただ付いて来ただけみたい。え？　なんでわかるかって

？　……五感を使うんだよ。

『変態ランナー』

十五話 黒き雨と蒼穹の騎士

放課後。

約束通り、アリーナでシャルに操縦を教える。が、やっぱりシャルの技術は高く、一夏やセシリアよりもうまかった。

「いやあ、さすが代表候補生って感じだね」

「そうかな？　ありがとう。でも、氷雨のほうがすごいよ。それで代表候補生じゃないなんて」

「模擬戦やつても氷雨に勝てた試しがないしな」

一夏の言葉にセシリアが少し顔をしかめる。

「ま、まあ、わたくしが本気を出せば、氷雨さんにだって負けませんけど、代表候補生としてそれは大人げな——」

「随分と調子よさそうだねえ」

両手にビームブレードを展開する。

「や、やってやりますわ！」

「おいおい。今日はシャルもいるんだ。ほどほどにしておけ」

「あはは」

楽しそうに笑うシャル。早々に馴染んできたのかな？

「シャルル、一夏の特訓に付き合っただけで」

「うん。ええと、何を教えればいいのか？」

シャルと一夏は僕に指示を仰ぐような眼を向ける。いやあの、僕は監督じゃないので自由にやつてもらっていいんだけど。

「ひとまず、一夏と模擬戦をして、それで弱点を教えてあげるのがいいかな。代表決定戦でセシリアに迫ったって言っても、模擬戦での戦績はからつきしだからね」

「う。それを言われると辛いところがあるな」

「え、一夏、セシリアに迫ったの!？」

「!？」

セシリアと箒が妙な反応してる。でも、違うから。シャルは純粹に驚いてるだけだから。

「いや、その一回きりだったけどな」

「それでもすごいよ！ 代表候補生レベルの射撃機に近づくと言うのは相当難しいことだよ」

「そ、そうか？」

シャルの何気ない笑顔に照れる一夏。……一夏にとつては男の子ですよ？

「はいはい、調子に乗らないようにね。その時のセシリアは僕の方にも少し、ほんの少し気を配ってたからつけ入れただけなんだから」

「ちよつと氷雨さん、ケンカ売ってますの？」

そんなことないよ。事実を言っただけだよ。

そうして、セシリアをなだめようとしたら、視界の端に黒い I S が映る。

「ねえ、ちよつとアレ……」

「ウソツ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だつて聞いてたけど……」

その存在に、アリーナはざわつく。黒いっただけでなんか威圧感があるよね。

「おい」

オーブンチャンネルで呼びかけられる。それが誰に向けてなのか。まあ、もちろん僕だろうね。勘違いしたままだったし。

「貴様も専用機を持っているらしいな」

見れば分かるよね。でも、ラウラのそれは確認というよりは分不相応な所有を非難しているようにも聞こえる。

「織斑一夏、私と戦え」

ラウラの声に戸惑う一同。一夏も「えっ、俺？」みたいな顔してるよ。

「いやだね、戦う理由がない」

「貴様には言っていない。私はそいつに言っている」

そう言つて指差されるは、何を隠そうこの僕だ。うん、知つてた。

「いや、そいつは、し——」

「いいよ、戦おうか」

一夏の声を遮り答える僕にみんなが驚き、こちらに視線を集めてくる。やだ、そんなに見ないでよ。

「見ないで、見ないでえ——！」

「うるさいぞ、氷雨——」

箒……、お兄ちゃんの大破をうるさいで片づけるなんて。

「だつて模擬戦するだけだよ？ 受ける理由がなくても、断る理由もないでしょ？」

実は受ける理由も一つあるんだけどね。ラウラの力を先に見定めておきたいっていうね。

なんで見定めておきたいのかというと、原作の通りに進むなら、黒タイツと化したラウラに一夏が絶対防衛なしで挑むからだ。一夏の無謀を止めてあげてもいいんだけど、千冬さんのこととなると止まらないのが一夏だから無理だろう。

で、挑ませるとして、原作のままなら一夏が勝って大団円なだけで、少しずつ……いや、めちやくちや変わってきているこの世界では、下手をすれば一夏が死んでしまうかもしれない。原作ですらなんで勝てたの？　って思っちゃったからね。だって、千冬さんのトレースだよ？　実際に戦った感想からして、多少の劣化があつたとしても、三年間帰宅部だつた一夏が勝てるとは到底思えないしね。

おっと、脱線したかな。だから、一夏にシールドエネルギーに余裕を持つて勝つてもらうために、ラウラの力を試す必要があるってわけだ。

「話は済んだか？」

「うん、待つてくれてありがとう」

他のみんなに目で距離を取るように促す。

「ふん、逃げなかつたことは褒めてやる」

「どうもー」

「だが、私はお前を認めない。あの人の弟が、お前であるなど！」

「まあ、戦えばわかることでしょ」

「はっ！　口だけは達者だな！」

レールカノンが降り、銃口がこちらを向く。轟音を響かせ、銃口から実体弾が高速で飛来する。

回転し、射線上からずれる。弾は僕の真横を通り過ぎ、アリーナのシールドに受け止められた。

「消えろ、イレギュラー!!」

「それは貴様だろう!!」

両手のビームブレードを構え、突っ込む。その直線的な動きに、ラウラは再度大型レールカノンを放とうとはしない。

確実にA I Cを狙ってるね。

僕は近づき出すとちよこちよこ左右の動きを加える。そして、ある一定距離になると、その横への移動がきかなくなつた。

なるほど、この位置がA I Cの効果範囲かあ。

「ふ、やはり口だけのようだな」

勝ち誇つた顔をするラウラ。後ろからは僕の動きが止まったことに対する戸惑いの声が聞こえる。

「うわあく動かない〜」

「シユヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前では貴様など、敵ではない」

いや〜、実際に喰らってみるとピクリとも動かないね。まあ、それはこのシステムがすごいわけではなく、ラウラの精神力が強いからなだけだね。

でもさ、これ、一夏とかシャルならきついかもしれないけど……。

「チャラララツタラ〜」

「ん？」

「三点ミサイル〜」

ダミ声です。ここ重要。

脚部アーマーに付属するミサイルポッドから三発、両足で計六発のミサイルが展開され、ラウラに向けて発射される。

「ちっ〜」

それをワイヤーブレードで対処するラウラだが、その時点でA I Cは解除された。

うくん。今のは不意を付かれたから解除されたのかな？ 莫大な集中力を要するA I Cだけど、ラウラは原作中でA I Cとレールカノン、またはワイヤーブレードを同時に使用することができた。つまり、完璧に対処されればあのA I Cから逃げる方法はな
いわけだ。

「厄介な、装備だね」

「余裕そうだな」

「それでもないよ。ただちよつと勝てるビジョンが浮かんでこないだけ」

一夏のね。

「ペイルライダー」

『ジャイアントガトリング、レディ』

脇の間から抱えるように構える。

「その結界、どこまで止められるのかな？」

「どこまでもだ！」

ロックを解除し、銃身が回転しつつ、弾丸をまき散らす。うわ、集弾性能悪いね。

そんな弾の数々をラウラは律儀に止めてかかる。ばらけるこの数の弾丸を止められるのか……半端ないですね。

「さすがね……」

「ずいぶんと死にそうな声だな」

「いやー純粹に感心するよ」

でも埒が明かないね。

ジャイアントガトリングを収納する。

「どこまでやれるか、試させてもらおうよ！」

「試すのは私の方だ！」

加速し、三点ミサイルを放ちつつ近づく。

ミサイルは先ほどと同様、ワイヤーブレードで破壊されるも、伸びたワイヤーを二本、

切り裂く。

「ちっ」

「不用意に伸ばしすぎだよ」

『A I C 効果範囲までコンマ二秒です』

声よりも早く、三次元躍動旋回でラウラの意識外の起動に変更し、再度接近する。

『ここからは相手の匙加減ですね』

「いやいや、消費するかどうか糖の量から数秒の休憩が必要だよ」

案の定、一度避けたらすぐには次が来ない。その数秒で僕はラウラと肉薄する。

「篠ノ之流の剣技、とくと味わってね」

接近してきた僕に対して、ラウラはワイヤーブレードを戻しつつ、両腕からプラズマ

刀を出し、応じてくる。

そういえばA I Cは手をかざさないと対象に作用しないみたいだから、とことん接近に持ち込めば、一夏にも勝機があるんじゃないや？

そんなことを考えていると、両肩からワイヤーブレードが飛んでくる。

ああ、これに苦戦したんだね。確かに理論上は八刀流を相手にすることになる。

一瞬、両手をだらりとたらし、左右のワイヤーブレードの射線の間に回避する。そして、両手を振り上げて、ワイヤーを切断すると、ラウラに向き直り体を回し、舞のよう

な剣戟を繰り出す。

剣戟をラウラは何とか捌く。しかし、もうA I Cを使う余裕は与えさせない。ここま
で迫ることができれば、僕の優位性が確実なものになる。

「……なかなかやるな」

「ボーデヴィツヒさんもね。剣道でもやってたの？」

「教官から少しな。だが……」

スツ、と構えを解き、プラズマ刀を収納する。

「その剣を超えられる気はしないな」

「ありがと。模擬戦はもういいの？」

ラウラにとっては模擬戦のつもりはなかったと思うけどね。

「十分、お前の実力は理解した。これなら、認めてやらんこともない」

「何に？」

分かっていて質問をする。そろそろ騙すのも可愛そうになってきたしね。

「あの人……教官の弟に、だ」

「え、僕、篠ノ之だけど？」

わざと驚いた声で言う。いや、びつくりした。僕のことを一夏と勘違いしてたな
んて、知らなかったな。

「……なに？」

「だから、僕の名前は篠ノ之氷雨。あの人って、僕はてつきり束姉のことかと思ったよ」
微塵も思っていないよ。

「……つまり、お前は織斑一夏ではない？」

「うん。違うよ、まったくの別人だよ」

少しの静寂が二人の間に訪れる。ラウラはどういうことかを理解したようで、本物の一夏がいる方に視線をやる。

「あっちか」

「そういうことになるね」

「そうか、私の早とちりか」

「うん」

ラウラがこつちに向き直る。その目には先ほどまでのむき出しの闘争心はなくなっていた。

「ふん。だが、お前のことを認めたのは事実だ」

「それは光栄だね。よかったら、ラウラって呼んでいい？」

「好きにしろ」

そう言ってラウラは踵を返す。

「あれ？ 一夏に挑まなくていいの？」

「興が削がれた。……いや、今日はもう満足したと言ったところか」

あく、さっきの戦闘が楽しかったことかな？ ラウラは蹂躪するのを楽しむタイプかと思っただけ、結構競技向けの性格なのかも。

ラウラはそのままピットに帰る。僕はそれを見送り、先ほどの戦闘を思い出しほくそ笑むのだった。

十六話 兄の尊厳

ラウラが見えなくなる頃には僕の周りにみんなが集まっていた。

「凄かったね！ 僕、ビックリしちゃったよ！」

「流石氷雨って感じだったな」

「ま、まあ、あれくらいなら、わたくしでもできますわよ？」

賛辞の言葉が気持ちいい。

「ところで、途中氷雨の動きが止まったけど、あれはなんだったんだ？」

「ああ、あれね」

一夏が疑問に思っているのはA I Cのことだろう。

「突然身体が動かせなくなっただんだよね。なんか、力を入れても同じ大きさの力で抑え込まれてる感じ。ラウラは停止結界とか言ってたけど」

「あ、それは多分A I Cだよ。シユバルツエア・レーゲンの第三世代兵器。アクティブ・イナージェナル・キャンセラーの略で、慣性停止能力のことだよ」

「ああ、聞いたことありますわ。でも、それはまだ試作段階のはずでは？」

「その辺は操縦者の力量もあるんだろうね。システムさえ開発できていれば、あとは操

縦者の精神力がものを言うのが第三世代兵器だし」

実際、ラウラの集中力は目を見張るものがあるしね。両目使うようになったらさらに強くなったりするのかな？

「……………」

そんな中、一言も発しないで、怖い顔をしているのが一人いた。

箒だね。なんで僕は睨まれているんでしょうか……。

「箒、そんな熱い視線で見つめられるとお兄ちゃんといえど照れちゃうよ？」

「お兄ちゃんって……………ぶふっ」

シャルが僕の言い回しに噴き出す。失礼なシャルだ。お兄ちゃんはいくつになってもお兄ちゃんだろうに。

「氷雨、後で剣道場に来てくれないか？」

「え、何？ 告白？ い、いや、確かに僕たちは血が繋がっていないかもしれないけど、しかし、この十年以上の生活で僕らは本物の兄妹の様になったと僕は思って、しかし……………」

「氷雨」

箒が僕の軽口を遮る。その目は真剣そのものだった。

これ以上茶化すのは、それこそ兄としてどうかと思うね。

「……分かった。先に行つててね。ちよつと、寮によつてから行くから」
「うむ」

そう言つて、箒もピットに消えていった。

そんな箒の様子に周りは不思議そうな顔をする。

「どうしたんだ、箒のやつ。さつきまでは普通だったのに」

「また氷雨さんが何かしたんではありませんか？」

まあ、僕が何かしたんだろうね。じゃないと、あんな目を僕に向けないでしょ。

「でも、篠ノ之さん、氷雨がボーデヴィツヒさんと戦うまでは普通だったよね。氷雨が何かする暇はないんじゃないか……」

あく、何となく分かつたかも。

「約束したし、僕は先に戻るね。シャルルにセシリアは一夏のことよろしく」

「うん」

「任されましたわ」

そうして、僕もピットから退出した。



剣道場。

付いた時、箒は袴姿に防具をつけ、面を膝の前に置き、正座の状態で瞑想をしていた。

準備は万端つてことだね。

「ごめんね。少し遅かったかな？」

「いや、そんなことはない。ちようど、私も準備を終えたところだ」

僕も袴に防具をつけた姿。脇に面と竹刀を持っている。こちら準備はできていた。

「じゃあ、始めようか」

「ああ」

面タオルを頭に巻き、面を付ける。竹刀を左の手で握ると僕らは向かい合った。

竹刀を抜き、蹲踞姿勢を取る。お互いがお互いの目を見据える。目を離さず、立ち上がる。どちらともなく動きだした。

「めえええん!!」

「こてええん!!」

箒のまつすぐな面に、僕は小手を合わせる。相手の後手を取るのが僕の剣だ。

「そうだ! それが氷雨の剣のはずだ!!」なのに……」

怒りを吐き出すように箒の突きが来る。竹刀を横に払い、箒にぶつかり鏝ぜり合う。

「なぜ本気を出さなかった!!」

それはラウラとの戦いについてだろう。僕にも思惑があったとはいえ、箒の目から見れば、それはただの手加減、遊んでいるようにしか見えなかった……ということだろう。

箒は力を入れて僕を押し、距離を取ろうとする。その押しにのるように後ろに下がら
つつ、面を打つ。

「私は……いつも見てきた。氷雨の剣を、氷雨が千冬さんに打ちこんでいたあの剣を」
愚直ではあるが、鋭い面。それを僕は迎え突きで応じる。

「だが、最近の氷雨の剣はなんだっ！ 相手の対応を見るような……！」
箒の剣は僕に届かない。

「なぜ本気を出してくれない」

それはどの戦いに対してだろうか。

クラス代表決定戦？

放課後の模擬戦？

さっきのラウラ戦？

全部だろうね。箒は器用じゃないから、一つに絞って感情を表すなんてできないよ
ね。

「私の兄は……あの程度じゃないんだ」

自分の尊敬する兄。それが周りにきちんと評価されていないことに対するモヤモヤ。
自惚れかもしれないけど、それが今の箒の心情なんじゃないだろうか。

「まったく、箒はお兄ちゃんが大好きなんだね」

「そんなんじゃない！」

兄が過小評価されていることに苛立ちを感じる妹。世間ではそれをブロンと呼ぶ。「仕方ないなあ。ちよつと待つてね」

壁際においていた竹刀袋を取る中にあるのは二本の少し短い竹刀。

「本気……見せてあげるから」

それを見て、箒は嬉しそうに竹刀を構えなおした。



中学時代。

篠ノ之箒という少女は力に溺れていた。

それは家族から離され、独り異郷の地で生活する寂しさを紛らわすため、また自身の姉に対する嫌悪を吐き出すため。

そんな場所を箒は剣道に求めていたのだった。

溺れた力はあまりに強く、誰かにそれを諫めてもらうことすらかなわず、徐々に力は歪んでいつていた。

そんな箒の支え、もといストップパーになっていたのは、兄である氷雨であった。

毎晩のような通話。それを一切無下にせず、話を聞き、時に自分の話をして箒の寂しさを緩和させていた。

「県大会も優勝したぞ」

『おお！　すごいね、箒。僕も勝ったけど、全国に行かないと箒には会えなさそうだね』
箒と氷雨は住む地方も違う。故に地方大会ではその姿を見ることはできない。

「ああ。だが、県大会程度では相手になるものがないな。早く、氷雨と対戦したいものだ」

『ん〜』

氷雨は少し悩ましげな声を出す。

「なんだ？」

『箒はその子たちが弱いから楽しくないの？』

「楽しくないとは言っていない。剣を振ることは好きだし、勝利というものもうれしく思う」

『そっか』

「だがやはり、強い相手と戦っているときが一番楽しいだろう？」

今の自分は弱いものいじめのようだと感じることもある。

『箒、剣は己を映すっていつも言ってたよね』

「ああ。そうだが？」

『実はね、県大会の試合、映像で見たんだ』

政府の人に頼んで撮ってもらったんだ、と氷雨は付け加える。

『箒の剣、綺麗だったね。相手に反撃の隙を一切与えない』

氷雨の誉め言葉を箒は素直に嬉しいと感じた。

『でも面を取った箒の顔、自分では気づいてないかも知れないけど……とつても醜かったよ』

「なっ!」

突然言われた言葉に箒は驚く。何故剣道ではなく、そこを否定されたのかと。

『あれは相手を見下し、自分の鬱憤を吐き出してスッキリした顔だね』

箒の口からは否定の言葉が出なかった。

『今の自分の剣……しっかり考えてみたほうがいいよ?』

「……」

箒は黙る。県大会を優勝した時の自分の剣はどうだっただろうか。

氷雨の言う通り、弱者を叩き潰した自分の剣は自分の醜さを露わしていたのだろう。

そうして変わった。

変わった後も箒は寂しさと姉への嫌悪を抱き続けてはいた。しかし、剣道の時だけは、真摯に相手と向き合うようになった。

そうすることで箒は自分の剣もさらに成長していくのを感じた。

だが、それでも届かなかった氷雨の剣。氷雨はそれを出し惜しみするかのように相手に手加減をする。

「（そんなこと、私は許せない）」

自身の憧れはいつも輝いていてほしいのだ。

◇ ・ ◇ ◇ ◇

肩で息する箒。息を乱さず、構えて、箒を見据える僕。向かい合い、構えを解き、礼をする。

面を取った箒は汗だくの笑顔をこちらに向ける。蛍光灯の光にキラキラと光る雫は宝石と形容するに値する気がした。だが、同時に悔しいのだろうか。宝石は瞳からも零れ出す。

僕は何も言わずに箒の頭を撫でた。くしゃくしゃと撫でるも、成すがままにされる箒の髪はしっとり……いや、びちゃびちゃに湿っている。

「氷雨……」

「な……」

自然に優しい声が出た。

「くしゃく」

「お互い様だよ」

小手はこまめに洗いましょうね。

十七話 シャルルとシャルロット

廊下。

「これで良いんだよね」

『何がでしょうか』

人がいない廊下。僕は汗だくの袴のまま、自室に向かっている。

「僕が本気を出しても何も面白いことないもんね」

『私は最近不完全燃焼です』

それは申し訳ないと思うけどね。大体、蒼騎士の頃から全力での戦闘なんて二回しかないしね。

「まあ、もうすぐタッグマッチもあるし、そこで頑張ろうよ」

『ご自由にどうぞ』

「ええ……」

なんと淡白な返答なんだ。そっちが不完全燃焼だって言ったのに……。

まあ、いつか。

「あー、早く帰ってシャワー浴びたいよ。汗でべたべた」

この状態で誰かにあったらすぐに臭いって鼻をつままれるだろうね。

「あ、篠ノ之くんだ〜」

「袴姿!? 写真撮っていいかな!？」

「有料だよ〜」

あと、近づくと臭いよ〜。

「い、いくらっ!？」

「いや、冗談だから。なんで財布取り出してるのさ」

別に僕は有名人ってわけじゃないから写真くらいいいんだけどさ。

「でも、今は汗臭いから近づいちゃだめだよ」

「汗のにおい……はあはあ」

「その子、大丈夫?」

「あ、うん。ちよつと不治の病で」

隣の子が笑いながら答える。

そんな感じですれ違つと、ヘブン状態の子が一瞬ビクンと震えたんだけど……。

「ペイルライダーは僕の今の匂いどう思う?」

『AIに嗅覚はありません』

「ハイパーセンサーでわかるよね?」

『……………』

あ、こいつ遮断してやがる。

強制接続……オン。

『……………ぐふっ』

「剣道つてホントに臭い競技だね」

機械すら殺す臭い《マシンキラースメル》ってね。

◇・◇◇

そんな廊下を抜けて、自室の前にたどり着く。部屋の扉を開けると、中には向かい合ってベッドに腰掛ける男と女の二人が姿があった。

「あ、部屋間違えました」

「いや、合ってるぞ、氷雨!!」

「う、うん。間違いないよ!!」

そのまま閉めようとする僕を止める二人。あーそっか。今日だけ、シャルのシャワー覗くやつ。

というより、二人とも待つてましたといわんばかりの歓迎だね。気まずい空気を換えるきつかけを見つけたって感じかな？

「あ、俺、お茶入れるわ」

「ありがとー。僕はちよつとシャワー浴びてくるね」

「ちよ、ちよつと待つて氷雨」

シャルルが呼び止めてくる。

「なに？」

「ぼ、ぼくを見て驚かないの？」

その恰好はいつものシャツであるが、一夏にばれてコルセットをつける必要がないと感じて、つけていないので、体のラインが分かりやすい服装つてこともあり、胸が強調されて女の子であることを主張している。

で、それが何か問題？

まあでも、さすがにノーリアクションすぎるかな？

「えくと、コルセットきつくなかった？」

「ええっ！ う、うん。きつかったけど……僕を見て最初の反応がそれなの!？」

「いや、何となくそうじゃないかって思ってたからね」

たぶんじゃなくて確信だけだね。

「そ、そうなんだ……」

防具と竹刀を置いてシャワー室に入る。なんだか、シャワーを浴びるからシャルとかち合うんじゃないかと思っただけ、そんなことなかったね。残念。

「あれ？　どのあたりで気付いたんだろう？」

シャルは素朴な疑問に頭を悩ませるのだった。

◇・◇◇

シャワーを浴び終えた僕はあるトラブルに見舞われた。いや、この発言だと僕は悪くないみたいに関こえるかな？

簡潔に言うど、水も滴るいい男(?)状態の僕の手元には一枚のタオルすらなかった。

「あゝ……やっちゃった」

何たる失態！　万死に値する！

早く汗を流したい一心でシャワールームに入ったんだけど、着替えはおろか、まさかタオルまで忘れるとは……。

といつても、タオルは備え付けの小さめのあるからいいけど。着替えはねえ。

「一夏、着替え取って」

腰にタオルを巻いて、一步外に出て一夏を呼ぶ。するとどうだろう。シャルと目が合ったではありませんか。驚きで頭がいつぱいなのか、シャルは固まったまま呆然としている。

「キヤー!!」

「なんで氷雨が声を上げるのさ！　って、胸は隠さなくていいよ!!」

シャルが突っ込む。

「と言つても、見られているのは僕だから当然の悲鳴じゃない?」

「そ、そう言われたらそうなんだけど……。うー、なんか納得いかないよ」

お茶を持つて一夏がやってきた。

「なんで裸なんだ?」

「あ、一夏。悪いけど、僕の着替え取つてくれない?」

「なんだ忘れてたのか?」

「うん。早く汗流したくてね」

「仕方ないな」

机にお茶の乗ったお盆を置くと、一夏は僕のカバンの方に向かう……。はずだった。なのに、なぜかシャルのカバンを開けた。

「……氷雨、お前」

「いやいや、それ僕のじゃないから。なんで僕が女性モノの下着穿くのさ」

ああ。シャルとベッドを交換した時にカバンの位置も変えたから勘違いしたみたいだね。

「い、一夏!?!　そ、それ僕の!!」

「えっ！……う、うわっ、わりい!!」

シャルのものだと気づいて手に取った下着をカバンの中に押し込むようにしよう。けど、少し焦りすぎたかな。逆にその反動でカバンの中から大胸筋矯正サポーター……つまるところ、ブラジャーが飛び出してきた。

というか、男装するならどっちも要らなくない？

「ちよ、ちよつと一夏!!」

「あのさあ、僕の服……」

「わりい、シャル。焦って……」

「もういいよ、僕がやるから!」

恥ずかしさのあまり大声になるシャル。その横で申し訳なさそうに頭を下げる一夏。その顔は少し赤い。そして、それを眺めるほぼ全裸の僕。

「ふう」

ため息をついて僕は自分で着替えを取り出したのだった。

◇・◇◇

えっと、それでシャルが女だったことを初めて……は・じ・め・て、知ったわけだけでも、わざわざ男装してIS学園に来た理由なんかを聞くためにベッドに腰掛け、お茶を飲んでいる。

「はあ、おいしい」

「そう言われると、入れた甲斐があるな」

「そうだねー。……じゃなくて!!」

和やかな雰囲気搔き消すようにシャルルが声を上げる。

「あ、そうだったね」

「もう……」

僕は腰を上げる。

「羊羹出さなきゃ」

「氷雨!!」

シャルルに怒られた。ええ、お茶請けがないことに不満を呈したのはシャルルじゃ、
ん。理不尽だよ。

「そうじゃなくて、僕に何か聞くことあるでしょ?」

「え、聞いてほしいの?」

そう返すと、シャルルは微妙な顔をする。

「そうじゃないんだけど……でも……。あれ、僕がおかしいのかな?」
「いやいや、シャルルは間違ってるぞ。氷雨が冷静すぎるんだよ」

と言う一夏も、騒動から少し時間がたって冷静になってきている。

「なんで男の振りなんてしてたんだけ？」

「それは……その、実家の方からそうしろって言われて」

「え、趣味じゃなかったんだ」

「違うよっ！」

知ってた。

「実家って言うところか……」

「デュノア社だね。量産ISのシェアが世界第三位のフランスの企業」

とは言っても作っているのは外装だけ。コアが有限だから、IS関連の企業は少しでも技術の進展が遅れば他社にシェアをすぐに奪われる。それだけリスキーな分野である。

「今は第三世代機の開発に苦勞してるみたいだね」

「そう。だから、今のデュノア社は欧州連合防衛計画『イグニッションプラン』の次期主力機を選定するトライアルに向けて、第三世代の開発中なんだけど、元々、リヴァイヴも第二世代最後発で、圧倒的にデータも時間も足りなくて、なかなか形にならなかったんだ」

この『イグニッションプラン』って言うのが気になっただけだよ。どこから守る気なんだろう？ 世界情勢は分からないけど、どこの国もISの開発を競技のために

やっているわけではなさそうだよね。

「それで、政府からトライヤルで選ばれなかったら、援助を全面カット、その上、IS開発のライセンスも剥奪するって通達が来たんだ」

ISは最先端事業だから、もちろん開発には莫大な資金を要する。だから、国の援助がなければ開発なんてできない。まあ、国も援助することでその開発成果の権利を得ることが出来るわけなんだけどね。

「……なんとなく流れは分かった。けど、それでシャルルの男装がどう繋がるんだよ？」

「君は実に馬鹿だな」

ダミ声で言ってみた。決してわさびの方じゃないよ。

「それは……」

「あ、言いにくいなら僕が言おうか？」

「ううん。自分の口から言うよ。あのね……」

言おうとして口を閉じる。唇を噛んで、苛立ちを隠せていない。

「同じ男子なら、特異ケースと接触しやすい。そして、使用機体とその本人のデータを取って来いって……」

「それは、つまり——」

「うん。白式、およびペイルライダーのデータを盗んで来いって言われているんだよ。」

僕は、あの人……父に」

「なんでそんなことを……親だろう？」

「一夏。僕はね、愛人の子なんだよ」

大企業の社長ともなれば、そういうことも起こるだろうとも思うけど、それを企業のために使うって言うのは最悪だよね。

「母が亡くなった時に引き取られて。その時の検査でＩＳ適性が高いことが分かって、非公式だけど、テストパイロットもしてたんだ」

シャルは顔を落とし、言葉を切る。

「ごめんね、一夏、氷雨」

「何言ってるんだよ。シャルは悪くないだろ」

「え、いや、悪くないことはないと思うけど」

僕の言葉にシャルはさらに肩を落とし、一夏は非難の目をこちらに向ける。

「いやいや、一夏、睨まないでよ。別に全部が悪いとは言っていないじゃん」

「シャルは実の親に利用されてただけだろ。何も悪いところなんてないぞー！」

一夏の正義感は固いなあ。

「そうそう。大本はデュノア社だよ。でも、それを止められなかったのはシャルなんだ。まあ、止められるような立場にいなかったのも理解できるけどね」

そう言い終えると、僕は立ち上がる。

「氷雨！」

「ちよつと飲み物買いに行くだけだつて。オランジーナが飲みたくなってね」

一夏の耳元に顔を寄せる。

「シャルのフォロー頼んだよ。それは僕にはできないことだから」

「氷雨……」

廊下にでると、僕は歩き出した。口もとにニヤリと笑みを浮かべながら。

十八話 国民的炭酸飲料

廊下。

部屋から出てアリーナの方にある自販機へ向かって歩いてみると、角からセシリアが顔を出した。

「あら、氷雨さん。どこかに行きますの?」

「うん、ちよつとね」

セシリアはたぶん一夏の部屋に行くのかな。

「箒さんとはどうでした?」

「あく、うん。いろいろあつたけど、何とか機嫌は直つたかな?」

それを聞いてセシリアはなんだかほつとしたような顔になる。

「なんだかんだで、セシリアって優しいね」

「な、ななな、何をおっしゃいますの!?!」

照れなくてもいいのに。

「箒のこと気遣つてくれたんでしょ? ありがとう」

「ま、まあ。友人として当然のことですわ!」

そう言つて胸を張るセシリア。大きな胸が揺れるんですが……。

「わたしはなにか……されたようだ」

「なんですの？」

「この子はこれで、胸が小さいと感じているらしいから困つたものだよ。」

「そういや、箒はちやんと部屋の子とうまくやれてるのかな？」

「ああ、それなら問題ないみたいですよ」

「あ、やつぱり、セシリアも気にしてくれてたんだね」

誘導尋問です。僕はもう箒の部屋に直接行つて、確認してきたけどね。鷹月静寐ちゃん。真面目で良い子そうだったよ。ルームメイトに恵まれてよかったね箒。ただ、本棚の本のタイトルがすごく引つかかるものが多かつたんですけど……。

「は、謀りましたわね！」

「あはは」

セシリアはからかい甲斐があるね。

「それで、あの……一夏さんは」

「ん、シャルと一緒に部屋にいたよ。多分まだいるんじゃないかな？」

「そうですか」

「うん、晩御飯もまだ食べてないと思うし、大丈夫だよ」

「ええ。……ええ！」

なんで分かったのかって顔してるけど、まあ、この時間帯だしね。

「で、では失礼しますわ」

「うん。ばいばい」

そうしてセシリアと別れると、僕は自販機に向かった。



自販機前。

絶望した！　なんでこの自販機には国民的炭酸飲料であるオレンジーナが売ってないんだ！　でも、なんでドクペはあるんだよ！

うくん。こうなるとコンビニまで行くしかないのかなあ。いや、しかし、このなっちゃんの手をうつつというの……。

「うくん」

『何を迷っているのですか？』

「いや、オレンジーナとなっちゃんの違いを考えて……」

『炭酸が入っているかどうかでは？』

分かってない。分かってないよ、ペイルライダー！

『それはそうと、どうするつもりですか？』

「ん？ シヤルのこと？」

うん。

「ほんとどうしようかなあ……」

『考えがあつて出てきたのでは？』

え？ いや、そんなことないよ？ のどが渴いただけです、はい。

「どうにかしたいって言うのはあるんだけど、僕にできることなんてあるのかな？」

『何もしなくてよろしいのでは？ I S 学園の校則によれば、校外からの不干渉が確約

されていますし』

「そうなんだよね。一夏もそこに気づいて、シヤルを説得するだろうね」

でもそれだけでと僕の存在価値なくないですかね？ いや、鈴ちゃんといちやいちや

できればそれでいいんだけど。なんかこう……ねえ。

「僕の取り柄つてさ、今のところ武力しかないんだよね」

『増える予定でもあるんですか？』

「辛辣過ぎない!？」

でもまあ、僕はありきたりな性格だし、頭もよくないからね。名案が思いつきもしない

んだよね。

「思いつくことと言ったら、武力で鎮圧することくらいかなあ」

『馬鹿ですな』

「脳筋なんだよね。思考が単純だからね」

『それが取り柄です』

いや、それ取り柄って言わない。

「分かりやすい悪ならいいんだけどさ。デュノア社を潰したら潰したで困る人はいるんだよね。まあ、父親は絶対に悪いと思うけどね」

二回しか顔を合わせず、その上自分の娘に犯罪行為を強要する親が善であるはずはないからね。

「……というか、僕がシステム解除したからシャル何もしてなくない？」

『氷雨ではなく、私のです』

「あ、はい」

まあ、未遂なら見逃していいのかってことにもなるけど。あれだよな、執行猶予？

『そんな言い訳が通るほど世間は甘くないでしょう』

「確かにねえ」

仕方ないので僕はドクペを買った。一口飲むと、何となくシップのような味がした。でも、この味が癖になる。

『氷雨はどうしたいんですか？』

「ん？ 別にどうもしないよ。ただ単に面白かったらちよつかいをかける。面倒だったら手を引く。それだけ」

転生者だもの。そうやって楽しく遊ばなきゃね。

「経過を見るしかないのが実情かな。力押しで解決するなら僕の出番だけど、こういうのは専門外です」

そう言つてはみるものの、どうにも僕は世話を押し付けたいらしく、何かしてあげたいという気持ちは消えない。

「思えば、最近の僕は他人の世話ばかりのような気もするね」

『お節焼きなのです』

「そうだね。相手からしたらお節介かも」

そうだ。どうしたいかなんてところを議論しても仕方がない。

「シャルはどうして欲しいんだらうね」

シャルは僕や一夏にどうして欲しいとは語らなかつた。最後まで自分の置かれた境遇だけを話していた。

「デュノア社の存続？」

『それはないでしょう。利用されているのも、自身の立場が弱いというのが理由でしたし』

「だよね。まあ、だから男装を解いたんだもんね。フランスのためというのも同じ理由でないだろうし」

「そうだ。」

「どうして欲しいかを、僕が考えるというのはナンセンスなんだ。」

「それは、本人に聞かなければわからないもの。本当に、余計なお世話かもしれないけど……。」

「友達だもん。助けたくなくなるのが道理だよね」

『氷雨らしい答えです』

「僕なりの答えが出、僕は自室へと向かった。」



部屋。

戻つてくると、シャルはベッドの上で布団をかぶり寝ていた。

「ただいま」

「あ、氷雨。お帰り」

「これはセシリアが去った後……つまり、風邪の振りの時かな。」

「あの後どうなった？」

「うん。一夏がここにいろつて、この学園は外部からのあらゆる介入を拒否できるか」

らつて」

「一夏らしいね。でも、今はそれが一番いい案だと思うよ」

少なくとも、今のシャルルには時間が必要なんだと思う。

「ちなみにさ、シャルルはどうしたい？」

「え？」

上半身を起こしたシャルルを見つめ、僕は隣の一夏のベッドに腰掛ける。

「僕はさ。シャルルの力になりたいとは思うんだ。でも、僕は馬鹿なのが取り柄みたいでね、何をしてあげればいいのか、全然思いつかないんだ」

自嘲気味な笑顔を浮かべる。

「何とも不甲斐ないんだけどね」

「そんなことないよ！ 氷雨は……正直馬鹿だとは思うけど、でもいつもみんなのことを気にかけてすごいと思うよ」

そんなのかな。僕はただちよっかいをかけて楽しんでるだけのようない気もするけど。

「でも……」

そんな風に僕を褒めてくれたシャルルだけど、俯き加減になり、どこか悲しそうな顔をする。

「僕は、何かを望んでいいような人間じゃないんだよ。一夏にはああ言われたけど、明日

には学園を出ようと思うんだ」

「はあ!？」

え、なにになに? どういうことですか!?! なんで、一夏説得に失敗してるんですか!! 「いやいやいや。なに、なんでそういう結論に至ったんですか?」

焦る僕と俯くシヤル。なんなんだろうこの構図は。

「僕が氷雨と一夏のISのデータを取って来いって言われてたのは覚えてるよね。それはね、僕のISのハイパーセンサーを通して、本社に送られてたんだ」
ん?」

「今日の訓練で、僕は二人のデータを盗んでるんだよ。そんな、二人を裏切るようなことをした僕が、ここに残る資格なんて……」

「あく、それなんだけどね」

何を言うんだろうと不思議そうな顔をするシヤルが僕の方を伺うように見る

「えくと、その、データを送るシステムね、壊したんだよね」

「……………え?」

僕の言葉にシヤルが間の抜けた声を上げる。そして僕に詰め寄ってくる。

「い、壊したってどういうこと!?!」

「ど、どうもこうもないよ。シヤルのISに積み重ねていたデータを転送するプログラム

を削除しただけだよ」

「ど、どうやって!？」

さらにグイツと詰め寄るシャル。ち、近いんですが……。

「えーと、僕のISとシャルのISを繋いで、コアネットワークに侵入して……」

「そんなことできるの?」

「あ、うん。でも、数時間密着しなきゃいけないから大変なんだよね」

それを聞いたシャルの動きが止まる。

それを見て、僕も失言だと気づき動きが固まる。

「そ、それって……」

思い出したのか、シャルは頬を赤らめる。今のこの距離も恥ずかしがって欲しいんだ
けど。

「もしかして、昨日の夜……?」

「……………」

無言で顔を逸らす。

「氷雨?」

逸らした方に回りこまれる。

「……………そうです」

「じゃ、じゃあ、もしかして、あの時起きてたの？」

うわああ、芋蔓式にバレてくんですけどお！

「……はい」

「つー！ ということは、僕が女かもしれないって気づいたのは、その時？」

「あ、いや、それはずっと前で………あ、やべ」

史上最大の墓穴を掘ったああああ!!

一瞬思考が追い付かなかったのか、シャルは固まり、その後、爆発音を立てるかのようになり、一気にシャルの顔は赤く染まり、頭から蒸気でも出るんじゃないかというくらい熱を放った。

「わ、分かかってやったの!？」

「いや、ほんとすいませんでした!」

即座に土下座したいけど、シャルが覆いかぶさるように迫ってきていて下手に身動きできない。

「あの、よろしければそろそろ引いていただけないでしょうか？」

「話を逸らそうとしないでよ!」

「いや、そうじゃなくて……」

今のシャルはもうコルセットを付けていないから、押さえつけるものがなくて、その

自己主張の激しい柔らかいものが……。

「当たっているんですが」

一夏みたいな思春期だね！ でもしようがないよ、男の子だもん！

「えっ！ わわっ！」

言われて気づくと、シャルはベッドに戻って布団にくるまる。

「氷雨のエッチ」

「申し開きもありません」

やつと自由になった体は即座に土下座を作る。

「……あはは。氷雨、それ好きだね」

「日本人の古来より伝わる謝罪の意思表示だからね」

別に好きとかそういうのではないよ。

「それにこれはただの謝罪ではなく、ここから護身術にもつながるんだよ？」

絶望先生の中に書いてあったよ。あ、そういえば絶望先生の最終回のオチを友達にばらされた時は殺してやろうかと思ったよ。まさに、絶望したあ！ だね。

「まあ、だから、言いたいことは負い目を感じる必要は……ないとは言わないけどさ、自分が被害者であることも覚えてていいし、シャルはここいていいんだよ」

それはやっぱり、ただ問題を保留にしているだけだろうけど。

「シャルがどうしたのか、それが決まったらその時は」

今のシャルには時間が必要なわけで、

「教えてほしいな。絶対に力になるから」

僕が何かをするべきなのは今じゃないんだって思ったよ。

「……うん。ありがとう、氷雨！」

何とかセクハラはうやむやにできたみたいです。

十九話 スニーキングミッション

前回セクハラはうやむやにできたとか言つたな。

「アレは嘘だ」

「ちよつと、氷雨聞いているの！」

「あ、はい。聞いてます、ごめんなさい」

正座のままシャルにこんこんと説教をされる。

「大体、氷雨は勝手すぎるよ。そりや、僕のためにやつてくれたんだらうけど……。けど、何も言わずに女の子のベッドに入ってくるなんてダメだよ」

「え、じゃあ、言つたら入れてくれるの？」

「え？」

「うん、最低な返しをしたね、僕。いや、でも、だつてね。さっきの言い方だとまるで言つてくれればいいのに、てニユアンスが入つてるように聞こえるもん。」

「……一緒に寝たいの？」

シャルが頬を赤らめ、上目使いでこちらを窺う。

「なんだこれ、据え膳食わぬは男の恥つてことですか？ いやいや、あり得ない。僕に

は鈴ちゃんがいますし、第一シャルもジョークでしょ？ 場を和ませる冗談ですよ。

それにシャルは一夏に惚れてるしね！

〔チラツ〕

〔(ジー)〕

何か期待してらっしやる?! これは……気の利いたジョークでの返答が必要か!!

「オレを癒せるのは、オレしかないんだ」

「……………」

啞然とするシャル。その無言が滑ったことを指し示している。やっべえ、恥ずかしい。

「ぶふっ。なにそれ」

堪えていたものを吹きだすように、シャルは笑った。なんだかその笑顔は吹っ切れたような笑顔で、初めて目にしたものだっただかもしれない。

「はあ、なんだか考えすぎて疲れたよ」

「そりやそうだよ。脳を使うと運動したくらいエネルギー消費するしね」

そういうと、シャルは布団を被り横になる。そうして、少し布団をめくり、マットレスをポンポンと手でたたく。

「え、なに？」

「ひ、氷雨は……入らないの?」

入るわけないじゃないですか。

「冗談が言えるくらい元気になってよかったよ。じゃあ、僕は食堂にご飯取ってくるね。シヤルもお腹空いてるでしょ?」

「え、う、うん」

「ちよつと待っててね」

そう言つて、僕は部屋を去つた。

「氷雨の意気地なし」



HR。

いつも通り朝は騒がしかったけど、教室に千冬さんが現れるなり静かになった。ここまでテンプレだね。

「学年別トーナメントについての連絡だ」

学年別トーナメントと言えばラウラが暴走するあれだよね。後からタツグマッチだつて言われるけど、僕は誰と組もうかな。一夏はたぶんシヤルと組むだろうし、僕は

箒と組もうかな。専用機持ちのセシリアと組んだ方が勝率は高そうだけど、箒と組んだ方が楽しいと思うんだよね。

それに、セシリアは遠距離射撃タイプだから、組むとなると相当連係の練習しないとFFの危険があるからね。え、強いとか自称してるなら『直撃コース』『避けてみせろよお!! アレルヤア!』くらいやれつて? いや、無理です。敵と認識している相手ならまだ避けようはあるんだけどね。

「知つての通り、この行事は毎年同じ時期に行われているが、諸事情により今年は早くなつた」

諸事情ってなんだろうか。

「開催は来週だ。よって、今週末までに相方を見つけ、登録しておくように。以上だ」

締めの一言が入り、HRは終わりを告げる。

そうして、クラスメイトが学年別トーナメントの話題でざわつく中、真耶ちゃんの授業が始まった。



休み時間。

いつものようにシャルがこちらに来て集まる。

「学年別トーナメントってどんな感じなんだろうね」

「どんなって、普通のトーナメントだろ」

いやまあ、一夏の言う通りなんだけどね。

「えくと、三年生には国や企業からのスカウトが来たり、二年生は一年の成果の確認をしたりする行事らしいよ。入学の時貰った資料に書いてたよね」

あ、そうなんだ。知らなかったな。でも、三年生のスカウトはちよつと早くないかな？　まだ、1学期だよ？　早めに目をつけておこうってことかな？　野球のド

ラフトみたいに。

「だったら一年生には関係なさそうだね」

「いや、お前らは関係しているぞ」

話していると、横から千冬さんが話に入ってきた。

でもどういふことだろう。

「僕らにはスカウトが来るんですか？」

「そんなわけないだろ。お前ら男性操縦者の実力の把握が今回、学年別トーナメントが早期に開催されることになった理由だ」

イレギュラー要素は抹殺する。ミラージュはそう判断した。

つまりはそういうことですな、分かりません。

「別に深く考える必要はないが、真面目に参加しろよ。……特に篠ノ之」

「ひよえっ!!」

なんで僕? ……ごめん、嘘。全然疑問はないです。そっか、原作ではその役割をクラス対抗戦が担っていたんだね。

「それだけだ」

そう言い切ると千冬さんは教室から出ていく。

「専用機持ちも結構いるから楽しそうだね」

「氷雨は相変わらずだな」

ん? 一夏がシャルと組んで、ラウラと戦うとなると、専用機持ちセシリアしかないな
くない?

なかなかの倍率だなあ。



放課後。

特訓を終えて、更衣する。そういえば、更衣室という単語はエロいって、どこかの生徒会会長が言ってたような。We are SYD!!

「ふう。シャワーも浴びたいね」

「それは部屋まで我慢しないと。あ、氷雨」

「ん? なに?」

「先にシャワー浴びていいぞ」

「え？ あ、僕、そっちの気はないから」

僕の発言に一夏は疑問符を浮かべる。そう言うセリフは女の子に言うべきだよな。

「気にしないでいいと思うよ一夏」

シャルがフオローする。あ、シャルは先に着替え終えてるよ。それでも、先に出ると不自然なので待つてもらっているんだ。もちろん、ロッカーの死角にいてもらってるけどね。流石の一夏も、女子と分かっているのに着替えをわざわざ見せたりはしない。

でも、僕は知っている。時折シャルがこつちを覗いていることを。

「でもどうしたの？ 今日は一夏が二番目じゃなかった？」

ちなみにシャルは一番最初に使ってもらうようにしている。だって、僕らの後なんて嫌でしょ。

「ああ、ちよつとこの後、箒に呼ばれてな。飯も先に行つててくれ」

……なるほど。あれか。

「うん分かったよ。じゃ、先に行つところか、シャル」

「え、うん。分かった。じゃあ、またあとでね、一夏」

「おう」

そう言つて僕らは更衣室から出て、廊下の角を曲がった。

◇
◇
◇
廊下。

僕は今、廊下の角にいる。

「氷雨」

廊下の角にしゃがみ込み、更衣室の方を覗き見る。

「氷雨っ！」

「スニーキングミツシヨン中だ、シヤル」

「これはどちらかといえばストーキングだよ」

うまいこと言うね。

「何しようとしてるのさ」

「いや、箒が一夏を呼び出したでしょ？ だから、お兄ちゃんとしてそれが気になっ

ね」

いや、内容はもう知ってるんだ。でも……それでも気になるのがお兄ちゃん!!

「そんなこと、篠ノ之さんに悪いよ」

「箒 イズ マイ シスター。アイ アム お兄ちゃん。ドウー ユー アンダスタ

ンドゥ？」

「……フランス語で言ってほしかったな」

フランス語? えーとえーと。

「……僕は日本人だよ? 何言ってるの?」

「さっきは英語だったよね?」

「……それはそれ、これはこれ」

「シャル。君はもう束縛から解放されて自由なんだ。だから、自分を抑え込む必要はないんだ。したいことをしていいんだよ!」

「氷雨……」

「そうだ。シャルはもうスパイなんてしなくていいんだ。もう、自分の好きなように生きていいんだよ!」

僕の言葉にシャルは感動している。

「て、それとこれとは別だよ!」

「シッ! 静かにして。一夏に気取られたらどうするの!」

そしたら箒を見守ることができなくなっちゃうじゃないか。

「あれ? 僕が悪いのかな?」

シャルが混乱していると何者かの影が迫ってきた。しまった、これが千冬さんならスニーキングミッション失敗だ!

「あ、ひさめに、でゅっちーだ〜」

「あ、のほほんとしてる、のほほんさん。こんばんは」

「こんばんは、布仏さん」

でゆつちーつていうのはシャルのことね。

「こんばんは」

まあ、でゆつちーつていうのは分かるんだけど……。

「で、そのひさめんつて言うのは何？」

「え、ひさめんはひさめんだよ。誰かがそう言つてたよ」

誰かつて誰ですかね？ 氷雨でひさめんかあ。なんだかおもしろいね。

「まあ、ひさめんでもイケメンでも好きなように呼んでいいよ」

「あはは。ひさめんはおもしろいね」

「それほどもあるよ」

褒められたら素直に受け取る。それが僕の主義。え、罵倒？ 馬耳東風ですよ。こ

う、東から風がフウ〜つてね。

「ナテユラルにイケメン発言を流されてるけど、いいのかな」

「そこはフランス語で言つてほしかったな」

「naturel」

「あ、はい、ごめんなさい」

あ、でも英語っぽい発音も残ってるんだね。起源が一緒だからかな？

「それで、二人は何してるの〜？」

「スニーキングミッションだ、大佐」

「そうなんだ。ひさめん軍曹、対象はどこですか？」

「乗るんだ」

のほほんさんはノリがいいことに定評があるんだよ。のほほんさんが腹黒なんて二次設定の小説出てこないかなあ。すぐく面白そうだよな。

「て、僕は軍曹ですか。えとね、箒がこれから一夏を呼び出すらしいからそれをお兄ちゃんとして見守ってあげるんだ」

「へ〜、ひさめんは妹思いなんだね」

「あれ、これが普通の反応なの？ 僕が間違ってるのかなあ」

そんなことをしていると、一夏が更衣室から現れる。一夏はそのまま廊下を歩き始める。事前に場所を指定していたのかな？

「つて、あれ？ こっちにきてない？」

「ど、どうするの、氷雨」

ふっふっふ。大丈夫。こういう時のために用意しているものがあるのさ。

「ペイルライダーー！」

『段ボール、レディ』

三つの段ボールが展開される。

「さ、これを被って！」

「え、これって、段ボール？ さすがにこれじゃあ……」

「大丈夫、絶対」

「ひさめん、用意周到だね〜」

「もっと他の物を用意すればいいのに」

しぶしぶではあるがシャルも被り、その場に伏せる。ぶつちやけ、のほほんさんは被る必要なかったかもしれないけど、そこはノリだ！

そして、近づく足音。

「ん、こんなところに段ボール？」

一夏が段ボールに気づいたようだ。

「……クローム？ あ、パーツって書いてるし、ピットに運び込むやつか。時間があつたら運ぶの手伝うんだがな……」

一夏、優しいな。

「でも、箒を待たせてるし、すまん。また今度手伝うからな」

誰に言ってるんだろうね。

そして、走り去る音がして、僕は段ボールを持ち上げた。

「……僕が出しといてなんだけど、一夏ちよろ過ぎない？」

「あはは」

「おりむーは素直だね〜」

ミッションはまだまだ続く。

二十話 氷雨、語る

屋上。

夕日がきれいに空を染めるこの時間。それが見えるこの場所は何ともロマンチックだと思う。

感動的だな。だが無意味だ。

何で無意味かって？ それは唐変木の一夏だからだよ!! こんなところで告白したって意味ないでしょ!

「呼び出してどうしたんだ、箒」

「……………」

一夏が来たことを一瞥し確認した後、視線を落とし、一夏と目を合わせようとしないう。恥ずかしくがっているみたいだ。

「どうして篠ノ之さんは不機嫌そうなの？」

「え、別に不機嫌じゃないよ。ただ、緊張して表情が強張ってるだけだよ」

「へへ、さすがひさめん、お兄ちゃんだね」

「それほどもある」

「あれ既視感が」

シャルはループでもしてるのかな？　これが……シユタインズ・ゲートの選択だよ。

「あの……箒？」

「来週の学年別トーナメント」

箒がぼそりと呟く。

「ん？　トーナメントがどうかしたのか？」

「わ、私が優勝したら……その……」

そこまで言つて、箒は口を噤む。今の空のような朱に頬を染め、少しして決意したように顔を上げ、一夏を見据える。

「……っ」

「っ？」

「氷雨、静かに」

「すいません。」

「っ、付き合ってもらおう！」

言つたああ!!　この上ないくらいあからさまに言つたああ!　でも、告白つてそうい

うもんだっけえええ!!

一夏も目が点になつてるよ。そりゃね、一夏視点ではこんなところに呼び出して、言

われたことが『買い物に』付き合ってもらうだもんね。そりやそうなるよ。

「て、やばい。さっさと撤退しよう」

「え、う、うん」

なんでシャルまで紅いのか。

「おお、しののん、やる」

「……言っておくけど、のほほんさん。このことをみんなに言ったら、怒るからね」

「うわ、ひさめん怖い」

後日、優勝者が一夏と付き合えるという噂が広まったのは言うまでもなかった。



食堂。

「……………」

「いや、私は何も言っていないよ？ ただ、しののんがおりむーと一緒に屋上に居たって

いったら、勝手に誘導されちゃったのだ」

「のどく……じゃないよ、のほほんさん」

「一個多いよ、ひさめん」

「失礼、噛みました」

「わざとだね」

「かみまみた」

「わざとじゃないかも？」

「なにこれ」

シャルの言い分はもつともだ。けれど、僕はこの情報漏洩の疑いのある大佐を尋問にかけなければならぬのだ！

「妹の告白がばらされる。これを問い詰めなくて、何が兄ですか！」

「……元凶は氷雨だよね」

「僕は兄として妹の秘密を！……え、僕？」

いやいや。僕悪いことしてないよね。

「そうだー。ひさめんが覗きに行こうっていうのが悪いんだよ」

「いやいや、あれは兄として当然の責務だし——」

……いや、まて。客観的に見てみよう。

……………アウト。

「あ、ごめん。僕が悪いわ」

「あっさり認めたね」

僕は正気に戻った。ごめんよ、箒。こんなダメなお兄ちゃんです。

「まあ、それはいいんだけどさ」

「いいのかな？」

「いいみたいだね」

その噂には続きがあるのだ。

「優勝賞品は一夏だけじゃなくてね」

「優勝賞品って……」

「まあ、言い方はこの際置いて。で、優勝したら付き合えるって噂にさ、僕とシャルも入ってるんだよね」

「ええっ！」

「そうだったね」

シャルは原作通りだから分かる。なんで僕も？

いや、なんでもくそもないなあ。うすうす気づいてたけど、どうやら僕にもそこそこの人気があるみたいだ。ぶっちゃけ僕に一夏以上の魅力はないんだけどね。あ、ギャグのセンスは一夏よりあると思うよ！ただ、一夏の「事実」は小説よりも奇なり、ラブは小説よりも絵なり」っていうのは笑ったけどね。

「そ、それはまじいよ！」

「ん？そこまで切迫した問題じゃないでしょ？ どうせ一年で優勝は僕だし」

「ひさめん、いうね」

まあ、それは冗談としても、極論はそうだよ。優勝候補は専用機持ちに限るし、ラウラ以外は一夏に行くだろうし、ラウラの場合はまだそういうことに興味はないだろうからね。

「……それもそうだね」

「あれ？ 納得しちゃうんだ」

シヤルからも突っ込みを受けるものと思ったよ。

「うん。だって氷雨だもんね」

「……うん？」

まあ、よく意味は分からないけど、納得してもらえないならそれでいいか。

「でも、氷雨はあのボーデヴィツヒさんのAIC攻略できるの？」

「え？ あれはまあ、懐に入っちゃえば発動させる暇与えないし、大丈夫なんじゃないかな？」

まあ、そこに行くまでで捕まっちゃうとジエンドだけどね。

「あ、お昼休み終わりそうだね」

「そろそろ戻ろうか」

「おー」

ちなみに昼食は鯖味噌定食だった。うまかった。

噂話をペイルライダーと共にいろいろと聞き耳を立てている。

「なんかすごいね。三人とまとめて付き合えるとかいう話まであるよ?」

『逆ハーレムですか。そういうのはお花畑の頭の中にとどめておいてほしいですね』

「あ、ええと……なんかごめんさい」

この作品もそういう罵倒の対象だと思うんだけど。鈴ちゃんといちやいちやした
いつて……。ん? その割には未だに出てきてくれないんですが。

『……その中国の代表候補とはどのような人物なですか?』

「え?」

ペイルライダーからいきなりの質問にびっくりする。

『時折思考に上がってきていますが、そんなに好きなのですか?』

「ちよつと僕にプライベートとかないの?」

『必要ですか?』

「いや、まあ、ペイルライダーならいいけどさ」

なんたつて相棒だからね。ちなみに僕は亀山くんが一番よかつたと思う。頭脳系と
肉体系が合わさり最強に見える。僕とペイルライダーはどっちも亀山くんだけだね。

『……なんでそう嬉しいことを』

「え、なんて?」

音量小さすぎて聞き取れないよ。

『何でもありません。しかし、メモリーには会った記録がないのですが』

「あ、うん。まだあったことないよ」

『? それではなぜ?』

なんて答えるのがベターなのかな? ペイルライダーになら転生したことを言ってしまうてもいい気がするけど……。

「あ、今の思考も聞こえた?」

『いえ。私に聞こえるのは特別強い思いに留まります。ですので普通の思考は聞こえません』

なんと都合のいい設定だ。さすが天災、げふんげふん。

『篠ノ之博士に報告します』

「ほんと都合がいいね!」

なんでそんなとこだけ聞こえてるのさ。

『冗談です』

「抑揚がないからわかりづらいよ……」

『それよりも先ほどの答えはいかに?』

先ほどの……なんで好きかって？

「前世からの宿命かな？」

『敵なのですか？』

いや違うよ。

『それで、その鈴という人物はどのような方なのですか？』

え、鈴ちゃんがどんな娘かって？

「鈴ちゃん是一年で中国の代表候補生に成り上がった天才少女なんだけど、それを鼻にかけることない明るくて元気で快活な性格で、周りを笑顔にしてくれて、人を貶めるようなことを言わない誠実な心の持ち主で、容姿は小さくて可愛いツイントールの似合う女の子なんだけど、小さな胸のことを気にしてたり、あ、でも全然コンプレックスに感じる必要はないと思うんだけど、そういうところを気にする女の子らしさも魅力の一つで、それでいてその小さな体に似合わずしっかり者で行動力があって、それにぶつちやけ貧乳はステータスだと思うので——」

『うるさいです』

「ええー」

聞いてきたのはそつちなのに。

『よく見ているのですね、会ったこともないのに』

まあね。会ったことないけど、鈴ちゃんを一方的に見つめてたよ。あれ？ ある意味
ストーカー？

『氷雨は時折私の知らない場所にいるように見えます』

「そうかな？」

転生前の原作知識があるからね。

『……………どこかに消えたり、しないですよね』

「……………？ さすがにそんなことはないよ」

「そういえば二組に転校生が来るらしいよ」

「へーそうなんだー」

「どんなこ？」

「中国の代表候補生なんだって」

『……………』

ペイルライダーは己の胸に生まれた少し小さな感情によって、その声を氷雨から遮断
した。

本編

キヤラクター紹介

篠ノ之氷雨

主人公

この作品の主人公であり、神様の手違いというテンプレで何の面白みもない理由によりISの世界に転生した転生者。特典は一応なし。

鈴ちゃんが好きであるが故にIS世界へ。

愛機は『蒼騎士』『ペイルライダー』

どこにでもいるような少年。

ロボットが好きという理由もあって、ISのメカデザに惹かれている。

剣術の腕は確かなもので、全国大会にも出場している。

伊達に長年ISに乗っているわけではなく、ISの操縦技術は並外れたものがある。

主にシャルに対してであるが、セクハラを多々行ったことから『セクハラ王』の称号を得る。

あらすじ

転生は小学生からであるが、氷雨という人物はそれ以前より存在しており、篠ノ之家に養子として迎え入れられ、篠ノ之流剣術の次期当主となるべく鍛えられていたらしい。しかし、本人にはその経験の結果と記憶しか残っていない。

織斑一夏とは入学式から接触し、同じ道場ということもあり、すぐに友人になる。姉である束とは仲がいいものの、妹である箒とはなかなか仲良くなれず、一年を終える。

二年生のときに、箒がいじめられている現場を目撃。一夏と共にいじめていた男子数名を相手に大立ち回り。それがきっかけとなり、箒は心を開くようになる。

白騎士事件、もとい蒼天の騎士事件では蒼騎士を駆り、千冬と共にミサイル群を切り伏せ、世にISの力を示す手助けをした。

その後、重要人物保護プログラムにより、鈴ちゃん転入の少し前にそこを離れなければならなくなる。

プログラム中、剣道で全国大会へ出場するも、腹痛で棄権。

高校生になり、IS学園にて一夏、箒と再開する。

クラス代表決定戦では一夏、セシリア共々ベクターキャノンで屠る。

その後、転校生が来たかと思えばシャルロット・デュノアとラウラ・ボーデヴィツヒであったと絶望。

なんやかんやあってシャルが女だと一夏にばれる。学年別トーナメントの開催が企画される。

シャルとのほほんさんと共に箒の告白もどきを目撃。その後、自身が景品となつていゝる噂を聞き、さらに噂の収集をしている。

ペイルライダー

氷雨のIS

世界で唯一男性が乗ることができるIS。正式名称は『蒼騎士』

元々は第零世代機としてのプロトタイプであったが、IS学園入学にあたり、束によつて、第三世代相当の性能に改良されている。

意志を持ち合成音を使い、搭乗者と対話が可能である。なお、氷雨の調教によりジェフテイのAI、ADA風の話し方をする。

ハイパーセンサーを制限することで氷雨の五感を少し奪つたりする怖いところもあるが、基本的には従順。

全力の性能は計り知れず、それを行使したのは過去に二回しかない。

最近、氷雨に対してある感情を抱き始めている。

白騎士同様、ナノマシンによる搭乗者保護システムを搭載している

武装

ビームブレード×2

ホーミングランス

三点ミサイルポッド×2

ベクターキャノン

ジャイアントガトリング

デコイ

H A D E S システム

織斑一夏

親友

ブリュンヒルデである織斑千冬の弟。

受験日に試験会場を間違えて偶然（必然）ISを起動してしまう。

IS学園にて、氷雨、箒と再会する。

3年前のモンド・グロツソIS世界大会で姉が決勝戦のときにある組織に誘拐される。その時、助けてくれたIS乗りに憧れを抱いている。

篠ノ之箒

妹

地味に兄離れしきれていないが、兄も妹離れしていないので全く問題ない。

一家離散の原因となった姉を恨んでいる。

原作変わらず一夏に恋心をよせる。

ちなみに、今作品では氷雨のフオローにより未だに一夏に暴力を振るっていない。

セシリア・オルコツト

今作品の不遇キャラ。

描写外では一緒にいることが多いが、イベントに絡んでこないの、あまり出番がない。

他のキャラを気遣ったり、なかなかの人格者ではある。

氷雨のツツコミもかねるが、シャルに奪われました。

チヨロイン

シャルル・デュノア

ヒロイン

男性操縦者のつもりで入学。

本名、シャルロット・デュノア。

気づいている人も居るだろうが、氷雨はシャルルが女であると知っているので、地文ではシャルル、会話ではシャルルと使い分けている。

氷雨に確信犯でセクハラされてて可哀想な娘。

一夏の言葉を、罪を犯した罪悪感ゆえに、受け入れられなかったところ、氷雨の言葉に救われ、氷雨に惚れるという、なんとも良いところ取りの氷雨くんである。

ラウラ・ボーデヴィツヒ

ドイツ軍人

試験管ベイビーとキルミーベイビーは響きがにている。

氷雨の実力を認めつつも、自身の方が上であると思っっている少女。
後に妹になるらしい。

凰鈴音

メインヒロイン

いまだに登場していない。

俺、ツインテールに出会います！

一話 バッドファーストコンタクト

放課後。

今日も特訓をするってみんなが言っていたけど、僕は少し遅れていくことにした。

『どうしたんですか、氷雨』

「いやね。突然ドクペが飲みたくなることってない？」

『理解不能です』

前飲んでから、また飲みたくなったんだよね。好きな人ならわかると思うけど、あれには中毒性があるよ。味はシップだけどね。なぜかまた飲みたくなるんだよね。

「でも、こつちの自販機にしかないっていうのがつらいところだね」

『検索したところ、ドクペというものは高笑いして飲むものだそうです』

「なるほどね。フウーハハハ!!」

まだ買ってないけどね。

財布から百円硬貨を取り出す。自販機の挿入口に持っていきこうとすると、横からカツ

ンカツンと、足音がする。

何気なくそちらに顔を向ける。

僕は足音の主を視界に収め、それが誰であるかを認識した瞬間、手に込めていた力が抜け、100円硬貨は重力に従い自由落下を始めた。

そこに立っているのは紛れもなく、見間違うはずもなく、唯一にして絶対のヒロインである凰鈴音、通称鈴ちゃん、であった。

その夢にまで見た顔に僕は見とれ、しばし放心していたが、我に返ると、僕は鈴ちゃんの方へ駆け出していった。

◇・◇ ◇ ◇

ようやく手続が終わり、中国の代表候補生である凰鈴音はIS学園にたどり着いた。手にはボストンバッグ一つのみ。最低限の必需品を持ち、単身外国へ乗り込む思い切りの良さが彼女の長所だ。

そんな彼女は出迎えの一つもないIS学園に少し不満を抱きつつも、校内をずんずん進んでいく。

「(一夏、元気かな)」

代表候補生になった理由の一つに初恋の相手、織斑一夏との再会というものが含まれている。代表候補生になって、IS学園に入学すればまた会いに行ける、と。

うれしい誤算であるのは彼もIS学園に入学したということだ。TVで彼の姿を見た時の彼女の驚き様は容易く目に浮かぶだろう。

「さみしがってるかな？ うん、そうに違いないわよね！」

IS学園というのは女子ばかり故に、一夏は肩身の狭い思いをしているだろうと考えている。もう一人の男性操縦者の存在は眼中にないようだ。

「あー、それにしても無駄に広いわね、この学園。どこよ、総合事務受付って」

くしゃくしゃの紙切れで確認するも、肝心の場所は分からずである。場所を確認せず、校内を歩き出すこの行動力も彼女の魅力である。この場合は裏目に出ているが、それは些細なことである。

校内を歩き回っていると、懐かしい声が聞こえてきた。

「一夏？」

不意を突かれたその声に彼女はピクリと体を震わせる。声はIS訓練施設から聞こえてくる。その声が一夏であることはIS学園という特異な環境が確信させてくれる。女子しかいないはずの学園で男の声が聞こえれば、鈴にとつてそれは一夏のものなのである。氷雨？ 誰それ。

彼女はなんだかうれしくなつて走り出す。一番会いたかった人物がすぐ近くにいます。それだけで鼓動は早くなり、弾む心を抑えることができなくなつた。

アリーナを覗き、声をかけようと口を開く。

しかし、目にした光景に言葉は出ず、頭は急に冷めたものになった。

「何、あれ」

そこにいたのは確かに一夏であった。だが、その周りを囲むように女子が三人。実際には、そのうちの一人は男のつもりのシャルであるが、遠目では判別できず、先入観により女子にも見える。

その中で楽しそうにしている一夏を見て、彼女は声をかけるのを止めた。

ドスドスと、自身の中に生まれた苛立ちの捌け口を探すように床を踏みつける。そうして感情を発散していると、しだいにその怒りも冷めて行き、対の感情である寂しさが込み上げてきた。

「何よ、あいつ。あたしがいなくても全然寂しそうじゃないし……。あたしのことなんて、忘れてるのかな」

一夏と仲が良かった自信はあった。自分が寂しい思いをしているのだから、あいつも寂しがっているだろう。と、そんな風に感情を共有していると思っていた。それが繋がりのようにも感じられ、つらい I S の勉強も頑張ることができた。しかし、現実はどうだろう。複数の女子に囲まれ楽しそう（鈴の主観であり、一夏自身はどうであるかは知らない）にしていた。そこに自分の居場所は、まだあるだろうか。気持ちが滅入ってい

る時には、思考が悪い方へ悪い方へと向かってしまう。

「(だめだめ。変なことばっか考えちゃう)」

彼女は自身の頬を叩き、気持ちを切り替えようとする。

そんな時、チャリンと硬貨が落ちる音が響いた。人がいるならちようどいい。総合事務受付までの道を聞こう。

そう思い、彼女は音のする方へ体を向けた。そこにはこちらにかけてくる一人の男の姿があった。



「な、なによ、あんた」

彼女、鈴ちゃんのもとへ駆け寄ると、鈴ちゃんは驚いた表情というか、困惑したような顔をし、僕を見つめる。鈴ちゃんが僕を見て、僕を認識してくれている。それだけでテンションが上がるよね！ やばい、心拍数がやばい。口から心臓が飛び出しそうって言葉を初めて体感しているよ。

「嵐鈴音さんですよね！」

「そうだけど？」

この十年、十年だよ？ そんな長い間抑えられていた感情、常に忘れたことがない恋情が溢れだしてくる。もう、抑えることは……。

『落ち着きましよう、氷雨』

「? 誰かいるの?」

ペイルライダーの静止で止まるようなら、転生者なんてしてないよね!

「好きです」

「は?」

「ずっと前から大好きでした。付き合ってください!」

『氷雨……』

……あれ? ちょっと待って、今回のこれがファーストコンタクトだよ。あ、やべ。やっちやった。

そう思った時にはもう遅いんだよね。後悔先に立たずってね。

「はあ!」

二話 アフターケア

前回のあらすじ。

僕、篠ノ之氷雨は所謂神様転生とかいうもので異世界に転生してきた転生者だ。異世界というよりはある作品、インフィニットストラトスの世界観を構築した世界であつて、いろいろ原作と違う部分がある似ているようで異なつた世界なだけどね。まあ、そんなことはおいといて、ふと思つただけど、転生者つてみんな現世に未練なさすぎだよな。神様の間違いで転生させてくれるなら、現世に戻りたいつて普通思うからね。え、ブーメラン？ 僕自身は高度な政治的判断により現世に未練はなく、このISの世界を選んだよ。……ぶつちやけ、鈴ちゃんが好きだからです、はい。恋は盲目つてやつ？ そんな感じ。

で、そんな僕はISの世界でいろいろしながら生きてきたんだけど、前回やつと、やつつやつつと、鈴ちゃんに出会うことができたわけですよ、ほんとに。世界の悪意が見えるよ、つてくらいに鈴ちゃんが出てきませんでしたからね。しかも後からそれは前座でしたつて言われても納得できるかつてね。

まあ、そんなわけで、初めて近くで見たらさ、画面越しに見ていた姿より、数倍、い

や、十倍、いや、百とんで千倍可愛かったんですよ。だから……ねえ。おもわずさ、ほら、なんていうの？　こ、告白をね、初対面で……

◇・◇◇◇

してしまつたのさ！

「あんた、いきなり何言つてんのよ！」

突然の告白に頬を染め、狼狽える鈴ちゃん。それが可愛くて、思わず頬が緩んでしまふ。

「何笑つてんのよ！」

「ほえ!?　い、いや、慌てた姿も可愛いなと思ひまして」

「なっ!」

しまつた。正直に答える奴があるか!　でもさらに赤くなる鈴ちゃんが可愛いから結果オーライ?

「あんた……バカにしてんの?」

わなわなと体を震わせながら怒りを露わにしている鈴ちゃん。全然結果オーライじゃなかつた!!

「え、いや。まったくそんな気はないんだけど」

「馬鹿にしていなかつたら何なのよ!」

怒鳴り声が響く。その語気の粗さに本気で怒っていることを感じた。

ああ、すごく怒ってらっしゃる。でも、正直そんなに怒らせるようなことした覚えがないのですが。確かに、告白は突然だったかもしれないけれど、それで怒られるのはひどく傷つくよ。

「ちよ、ちよつと落ち着いてよ」

「はあ？ あたしは落ち着いてるわよ。一夏といいあんたといい、なんなの？ あたしを馬鹿にして楽しい？」

一夏関係ないじゃーん。ていうか、え？ 一夏？

あ、そうか。原作ではここに来る前にアリーナから出てくる一夏を見つけてるんだったね。で、その一夏の周りに女の子が居たから、機嫌が悪い、と。それも相まって、鈴ちゃんはこのままに怒っているんだね。

「大丈夫！ 一夏と一緒にいたのはただのクラスメイトだから！」

「はあ!? なんでそこで一夏が出てくんのよ！」

少し驚きを顔に出すも、それを指摘されたことに怒っているようにも見える。

「え、だって今一夏って言ったから」

「っ！」

その反応から、それが凶星であることは間違いないが、だからと言って僕の言っ

たことが正解というわけでもなかった。

「……あなたに何が分かるって言うのよ」

影をおとし、鈴ちゃんは小さな声で僕に訴える。その声は震えており、その小さな肩から感じる儂さがそのまま声から伝わってきた。

「あなたに何が分かるって言うのよ！」

鈴ちゃんの叫びに込められた感情。怒り、哀しみ、どちらもが相混ざりあつた言葉。僕はどうして鈴ちゃんにこんな言葉を言わせるんだ。

「分かったような口、利かないですよ！」

鈴ちゃんの怒りの矛先が僕に突き刺さる。それは明確な敵意を僕に示しており、それを受け取った僕の体は震えた。

僕を嫌悪の対象として見ている彼女を目の当たりにして、僕は思い知らされる。この鈴ちゃんはまだあのキャラクターではないのだ。意思を持っている。脚本に踊らされているだけの存在じゃなかった。こんな風にずかずかと踏みいつてしまえば、拒絶される。なんだろう。なんでこんな当たり前の、人との距離の取り方を今まで忘れていたんだろう。

思えば今までうまくいきすぎて、距離をとる必要がなくて……。

「ほんと嫌い」

「え」

泣きそうな顔で睨み付け、鈴ちゃんは少し声を震わせる。僕はこんなに彼女を追いつめてしまったのか。

恋愛ってこんなに……

「あんたなんて、大嫌い！」

難しいものだったんだね。

◇ ◇ ◇

夕食時、食堂。

夕食時の食堂は賑わい、騒がしく、楽しそうに笑い合う声が飛び交い、活気に溢れた場所となっている。ある者は純粋にご飯を食べに、ある者は友人たちと集まり雑談に花を、パーっと、パーっと晴れやかに、咲かせているのかもしれない。

しかし、そんな賑わいを見せる食堂の一角、あるテーブルでは、花は花でも彼岸花が咲いていた。

「氷雨さんはどうなさったのですか？」

「俺が聞きたいよ」

セシリアが氷雨の沈みよ顔を気にかけて、一夏に問いかけるも、その実情を知っているものは当人だけなので、一夏も皆目見当がつかない状態なので、答えることができない

かった。

そもそも、氷雨はあまり人に弱ったところを見せないのです、一夏にとつてこんな氷雨を見るのははじめての経験だった。それ故に、その原因がなんであるのかを検討することも儘ならない。

「どうしたんだよ、氷雨」

一夏たちからすれば、放課後の特訓に来なかつたかと思えば、次に会つたときにはこの落ち込みようである。なにがなんだかわからないというのが、皆の感想である。分かることと言えば、時折氷雨から聞こえてくる呻き声くらいのものでした。

「僕らが特訓してる間に何があつたんだらう？」

「氷雨のことだ。なにか考えもなくしたことには後悔してるとかそんなところだらう」

妹の的確な解答に氷雨はピクリと体を震わせる。そうした後に、また過去を嘆くかのように呻き声をあげ始める。

「……当たつてるみたいですよわね」

「何したんだらうね」

セシリアはやれやれと呆れた様な素振りをして、シャルは心配そうに氷雨を伺う。当の氷雨はなんとか頭を起こし、皆に心配かけまいと声を出そうとするが、真つ赤に腫れた目が皆の目に入り、氷雨が口を開ける前にシャルと箒が声をあげた。

「どうしたの!？」

「何があった、氷雨!!」

その声に氷雨は口を少し開けたまま、どう説明したものかと思案したのち、再び顔を伏せた。

「……重症っぽいな」

「ですわね。氷雨さんがこんな風になる原因……想像もつきませんわ」

皆が知る氷雨という人物はいつも謎の余裕（原作知識）を見せ、笑っている。そんな氷雨がこのようになる大きな自爆を一体だれが想像出来ようか。出来たらニュータイプですよ。

「ここまで落ち込むとなると、失恋とかでしょうか」

セシリーまじニュータイプ。さすがファンネル使っているだけありますね。どうでもいいですが、ファンネルというのは円錐という意味らしいですよ。キュベレイのファンネルはその物の形ですよ。フィンファンネル! ……え、フィン? って感じになっちゃいますね。

凶星であるが、しかし、氷雨はその言葉に反応を見せなかった。

「違うみたいだね」

氷雨が反応しなかったことにホツとするシャル。セシリアも半ば冗談で言ったので、

さほど驚きもせず、また話し出す。

「こうなつてくると、本人に直接聞くのが一番ですわ」

「え、いや、でもなあ……」

氷雨に悪いような気がして乗り気ではない一夏。

「だが、このまま放つておくわけにもいかんぞ」

箒にそう言われ、確かにそうだと思いだす。大体、氷雨だし、遠慮はいらないだろうと、一夏はそう結論を出した。氷雨の日頃の行いの悪さがここで祟つてきたわけだ。しかし、本人に聞いたところで答えられる解ではないと思うが。

「氷雨、何があつたの？」

シャルが優しく声をかけるも、案の定返事はない。

「おい、氷雨。皆が心配しているだろう。何とかいったらどうだ」

「お、おい、箒」

心配のあまり、少し乱暴な口調になるも、やはり反応はない。ピクリとも反応していない。

それを不信に思つた一夏が箒を止める。

「なんか様子がおかしくないか？」

「? おかしいのは最初からだろ」

「まあ、それもそうですが。……言われてみれば、ピクリとも動かなくなりましたわね」
箒はまさかと思ひ、無理やり氷雨の体を起こす。するとそこには白目をむいた氷雨の姿があつた。

そのホラーつ振りに一夏、セシリア、シャルは悲鳴をあげそうなくらい驚くが、箒だけはすぐに気絶していると認識すると、氷雨の手を自身の肩に回し、担ぎ上げる。

「保健室に連れて行つてくる。悪いが食器を片付けておいてくれ」

「あ、ああ」

呆気にとられているうちに箒は氷雨を連れ、食堂から消えていった。

正気に戻り、氷雨を心配する三人。

「大丈夫かな……」

もう氷雨が見えなくなった出口を見つめるシャルであつた。

三話 カワルミライ

???

ここは何処だろう。

なんだか暖かい場所だね。心が落ち着く。先を見ても曖昧な暖色系の靄が視界に広がるばかり。なんだか陽に包まれているような気分だ。

あれ？ あそこに居るのは誰だろう。

気品のある佇まいの少女。

溢れる光が眩しいからか、この場所の視界が曖昧だからか、少女の顔の細かい所はよく見えない。

ただ、少女の顔はこちらに向けられ、僕を案じてくれているようだ。自意識過剰かな？ 分かんないけど、そんな気がするんだ。

そんな場所に立つ僕はどうしたんだろう。たしか、食堂でご飯を食べていたような……。いや、喉を通らなかつたから食べれてはいないね。恋って言うのは存外難しいものなんだね。

目の前に広がる風景が食堂には見えない。と言うことはここは現実ではないんだろ

う。

選択肢

戻る

留まる

◇・◇◇

なら戻ろう。居心地はいいし、なにも考える必要はないけど、ここに長居はできない。だって、早く鈴ちゃんに謝らないといけないからね。あの場ではすぐに口に出すことができなかった。嫌悪を含んだ眼差しを向けられた瞬間、胸が張り裂けそうになって、動機が高まり、言葉はついに出てこなかった。思考が停止し、その痛みを味わい続け、呑

み込んだ。でも消化しきる前に感情は涙になって溢れてしまった。だけど、泣きたいのは僕ではないから、もう行かなきゃ。

「行くのか」

少女は残念そうな声をだす。顔は見えないけど、寂しげな雰囲気漂わせる。

「うん。ちよつと現実逃避し過ぎたね」

一回フラれたからなんだというんだ。そもそも、好感度0じゃ、成功するはずないよね。

「いつまでももうじうじしててもしょうがないしね」

「そうか。それは氷雨らしいな」

その声に懐かしさを覚え、思い出す。

「ありがとう、蒼騎士。僕はいくね」

「ああ。私はお前の剣だ。いかなる時も先の道を切り開いてみせよう」

これが素の蒼騎士だ。まさに女騎士って感じでかたい。でも今はそれが心強い。

僕はゆつくりと目をつぶる。瞼の裏には残光が残るも、それも次第に消えていき、僕の意識はまどろみに溶けていった。



保健室。

目を覚ますと、知らない天井があった。

このセリフはいつか言ってみたかったんだよね。でもまさか、失恋って凶星を指摘された衝撃で気を失ってしまうとは……自分のメンタルの弱さにびっくりだよ。

「！ 氷雨、気が付いたのか！」

ベッドの隣で座っていた箒が僕の立ち上がりこちらを伺う。その両手は僕の手を握っていて、温もりが何ともうれしい。何度かその握られている左手で箒の手をにぎりと確かめ、笑う。

「心配かけてごめんね、箒。ありがとう」

「兄妹なのだから当然だろう」

箒が優しく見つけてくる。緊張が解けて安堵しているようにも見える。ほんとに心配をかけていたみたいだ。それもそうか。いきなり兄が失神したんだもんね。

「せっかくの一夏との夕食を邪魔してごめんね」

「軽口を叩けるくらいには回復したようだな」

左手を握る手に力が込められる。締め付けられるその握力は剣道で培われた全国一位のそれだ。めっちゃくちゃ痛い。

「……それでもやはり全快ではないのか」

僕がリアクションを取らなかつたから、箒はそう感じ取つたのだろう。

「まあね。まだ、何も解決してないから」

とりあえず、マイナスの好感度を零にするとところまでいかないと、始まってすらいな
いからね。それに、ひどいことを言ってしまったんだから、謝るのは当然だ。

「何があつたのか、話してくれないか？」

恰好のいい話じゃないから話したくないんだけど、心配かけちゃったからなあ……。

「失恋しただけだよ」

かと言つてすべてを話すわけにもいかない。もしそれが一夏の耳に入っちゃったら、
鈴ちゃんに迷惑がかかるからね。

箒は僕の答えが何か薄々感じ取っていたのか、さほどのリアクションもなく頷いた。
それはそれで、なんだかさみしいね。あれ、僕、芸人みたいだね。

「そうか。セシリアは当たっていたのだな」

そのタイミングだしね。僕が気を失つたのつて。

「どうせ、氷雨のことだ。その告白も非があつたのだろう」

「さすが僕の妹だなあ」

正解した箒の頭を撫でる。と同時にペしりと頭をはたく。

「もう少し兄を労わつてよ」

「その必要があるのか？」

なんてこった。気を失った兄ですら労わる必要がないと判断するとは……。

そんな風に項垂れると、不意に頭に手が乗っかり、僕の髪を撫でた。少しくすぐったいけど、その手に安心感を覚える。ずっと剣道をやってきて掌の皮は固くなった筈だけど、優しくなでる手はやはり女の子のそれだった。

「私は、そんなものがなくとも氷雨が立ち直ることを知っている。だから、信じていつも通り接しているだけだ。何も問題はない」

そんな風に素直な感情を伝えてくれていている時点で、気を使ってくれているのはバレバレなんだけどね。

筈のやさしさに僕は微笑みで答える。まだ、仮面のような仮初めの表情だけど、僕は兄なんだ。妹の信頼を裏切るようなことは絶対したくない。だから、早く立ち直ろう。そう決心させてくれた筈には感謝だね。

「ありがとう、筈」

「しつこいぞ、氷雨。兄妹なら当然だ」

そんな会話に割って入るように、保健室の扉が開く音が聞こえた。

その方向に目を向けると入ってきたのは僕のクラスの担任である千冬さんであった。

「意識は戻っているようだな」

「あ、ちふ……織斑先生、お騒がせしました」

「ここで千冬さんなんて言ってもまた殴られたら堪ったもんじやないので、反射的に訂正する。だが、千冬さんはそれについて別にいいと言ってくる。

「ここには担任としてもあるが、個人的にお前の心配をしてきたただけだ。名前で呼ばれたところで咎めたりはしない」

あ、千冬さん心配してきてくれたんだ。ああ、弱っている時にこういつもされない優しさに触れるとすぐくうれしくなっちゃうんだけど。涙出てきそう。

「だが、その様子なら体は大丈夫のようだな」

「そうですね。さすが千冬さんですね」

体は、と言っているあたり、本当に心が読めるんじゃないかというくらいの洞察眼があるね。あの眼にどれだけ剣の動きを読まれたことか。

「何があったというのには聞かん。明日の授業も無理する必要はない。ゆっくり休んで回復に努めろ」

千冬さんの気遣いはうれしいけれど、明日は休むわけにはいかない。僕の回復は休息をとるだけでなせるような類のものじゃないからだ。

「いや、大丈夫です。明日も行きます」

「そうか」

そういうと、手に持っていた紙袋を僕に渡してきた。

「だが、今日のうちはここで休んでいろ。鞆は一夏にでも届けさせる」
中には僕の寝巻が入っていた。

「千冬さん、勝手に鞆漁らないで下さいよ」

「気にするほどでもあるまい。それとも、見られて困るものでも入っているのか？」

え、思春期男子ですよ？ 入っていないとお思いで？

でも実際には何も持ってないんだよね。ほぼ女子高の I S 学園にそんなもの持ち込む勇氣はないよ。

箒が疑うような眼で僕を見てくる。持っていないよという意思を表示するように首を振るも、信じ切ってはもらえないみたい。兄を信じているんじゃないかなかったつけ？

「箒ももう出るぞ。もうすぐ消灯時間だ」

「はい。分かりました」

二人は部屋を後にする。

出る前に千冬さんは僕に休むよう念を押し、箒は手を振ってまた明日とあいさつをしていった。

四話 波乱の予感

朝。

教室。

昨日のこともあり、僕の周りにはいつものメンツが集まってきている。といつても、
筈だけは自分の席に座ったままだ。

昨日の時点で心配は消えたからかな？

「もう大丈夫なの？」

シャルが心配してくれる。机に手をつけて、乗り出した体勢で僕に迫るのですごく顔
が近い。シャンプーの匂いとかがふわりと鼻をかすめるといつかのベッドインを思い
出し自己嫌悪に陥りそうになる。というか、シャルの方も恥ずかしくないのかな？

あ、僕なんか眼中にないのか。それなら納得だね。

「うん。大丈夫だよ。一時的な発作みたいなものだったからね」

「いやいや、それで気を失ってたらやばいだろ」

言葉とは裏腹に、一夏は僕が普通に登校したことに安心していつものように笑みを浮
かべた表情をしている。

「でも実際大事がなくて本当によかったですわ」

「あれ？ デレた？」

「ち、違いますわ！ わたくしが勝つ前にいなくなられては困ると思っただけですわ！」

「それ、一生一緒にいないといけないよね？」

「い、いつてくれますわね……」

びくびくと頬を引きつらせるセシリア。そもそも、セシリアの機体は一对一で本領を発揮するような機体じゃないから、模擬戦じゃ僕との優劣はつけられないと思うんだけどね。

「よかった。本当に元気そうだ。すごく心配したんだから」

シャルが乗り出していた身を引く。

「ありがとう、シャルル。この通り元気だからね。心配かけてごめん」

「ううん、いいよ。氷雨が元気なら」

何とも優しい。シャルを天使だっという人たちの気持ちの一端を理解できたかもしれない。

「それにしても、なんだかクラスが騒がしくないか？」

一夏の言葉に周りを見る。ざわざわと騒がしいのはいつものことのように思えるけど、何か焦るような表情をして話している。

「確かにそうかもしれないね」

耳をすましてみると、どうやら学年別トーナメントの話題について話しているらしい。

掻い摘んで内容を示すと、二組に転校生がやってくる。それも中国の代表候補生で専用機を持っているとか。強敵がまた増えて優勝が遠ざかった。私の織斑（orシヤルル or 篠ノ之）くんがああああ！ といった具合だね。

今の段階で専用機持ちが五人もいるのに、さらに増えたらそりや騒ぐね。

と、そんな喧騒の中、ガラリと教室の扉が開く音がした。

「一夏、いる？」

そんな元気な声が教室に響き、僕の耳に入ってきた。声の主は見るまでもなく、今話題の鈴ちゃんであると分かった。

「お前、鈴か？」

そう一夏が言うと、いつの間にこっちに來ていたのか、一夏の机の前に陣取った箒が一夏に尋ねる。

「知り合いなのか？」

そう箒が言うと、一夏は頷く。

「ああ。箒や氷雨が引越した後に転校してきたんだ。言うなれば、箒や氷雨がフアー

スト幼馴染、で、鈴がセカンド幼馴染ってとこだな」

そのネーミングは苦笑ものだね。

「久しぶりね、一夏。元気してた？」

一夏の紹介が終わり、鈴ちゃんが声をかける。

「ああ、そっちも元気そうで何よりだ」

思わぬ再会に嬉しそうな顔をする一夏。それを少し面白くなさそうに見る筈。こちら。

「てか、IS学園に居たならもつと早く来てくれれば良かったのに」

「仕方ないじゃん。昨日、こっちに来たんだしさ」

それを聞いて察しのよいセシリアが気付いた。

「ああ。あなたが二組に転入してきた凰鈴音さんですわね」

「そうだけど、なに？　なんか噂にでもなってるの」

まあ、間違っではないね。

周りに目を向けて、一組のクラスメイトを見渡した鈴ちゃんは、その後、その目を一夏の元に戻す過程で僕と目が合った。その瞬間、鈴ちゃんの顔は少し歪む。嫌なやつを見つけた、と言わんばかりの目に、昨日の鈴ちゃんの拒絶の言葉が思い出され、鼓動が早くなる。バクバクと脈打ち、僕は手足が痺れるような感覚に陥り、背筋を嫌な汗が流

れる。

「あんた、昨日の……」

「や、やあ」

辛うじてまともな返答ができた気がする。でも、第一声で謝罪ができなかったのには後悔だけどね。あのね、うまい具合に頭が回らないんだ。思うように会話を組み立てられなかった。

「昨日？」

鈴ちゃんの言葉に目ざとく反応したのはシャルだった。その疑問の言葉はどちらかというと、僕ではなく鈴ちゃんに向けられている。シャルの言葉に鈴ちゃんはどう答えるべきか迷っているようだった。

ああ、また僕のせいで鈴ちゃんが困っている。これ以上彼女に迷惑はかけたくないね。

「き、昨日は総合事務受付までの道を聞かれたんだけど、僕も分からなかったから案内できなかつたんだよね。あ、あの後ちゃんと辿りつけた？」

そう言い終えると、鈴ちゃんは少し面食らったような表情を僕に向けた。次には僕の真意を測りかねていることを目で訴えてきた。

そんな鈴ちゃんに僕はぎこちない笑みで返すと、話しを合わせてくれた。

「ま、まあね。あの後、他の子に聞いて無事にたどり着けたわ」
「そっか、それは良かったよ」

鈴ちゃんと言葉をかわすことに、冷や汗をかくほど緊張している自分に苦笑する。

昨日も話した通り、一夏の耳に僕が告白したことを入れさせるのは駄目だ。確かにそうすれば、一夏の性格上、僕に遠慮して鈴ちゃんの好意を受け入れるようなことはしないだろうけど、それは僕にとつて好都合ではない。だって、それは卑怯なことだし、鈴ちゃんを傷付ける行為だからね。

と、そんなことを言っていると、始業のチャイムが鳴りだした。

「鈴、早く戻った方がいいぞ」

「は？ なんでよ」

鈴ちゃんは一夏に無下にされたと勘違いして少しムツとする。だが、それも背後に迫る影が否定してくれるだろう。

「うちのクラスの担任は……千冬姉だ」

クラスに打撃音が二度響き渡る。一度目は鈴ちゃん、二度目は一夏だ。

「嵐、クラスへ戻れ。ホームルームが始まるぞ」

「ち、千冬さん……」

出席簿で叩かれた頭を押さえながら振り向く鈴ちゃんの前にはこのクラスの鬼教官

こと、千冬さんがいた。

「な、なんで俺まで?」

「学校では織斑先生だ。何度言えば分かる。嵐も次からは気を付けろ」

「は、はい。織斑先生」

そう言つて、鈴ちゃんは教室から出ていく。去り際、一夏に「また、後でね」と言つていたが、多分お昼休みの食堂だろう。

そうして鈴ちゃんの姿が見えなくなると、僕の緊張の糸はプツリと切れる。

「先生」

「どうした、篠ノ之。ん、顔色が悪いぞ」

その声に、シャルと箒がこちらを見る。

「ちよつと、保健室で休んでいいですか」

「構わん。もう今日は出なくてもいい。何かあれば、養護教諭に言え」

千冬さんの了解を貰ったので、鞆を持って席を立とうとする。

「氷雨、荷物は俺が持つて行つてやるから、早く休めよ」

そう言つて僕の手から鞆を奪う。

「そうだよ。昨日から体調が悪いんだし、きちんと休んで早く良くなってね」

「うん。ありがとう二人とも」

千冬さんに頭を下げて、僕は教室を後にした。

「……………」

無言で僕を見送る箒に一抹の不安を覚えなくなかったけど、今の僕はそれを深く思考する余裕がなかったんだ。

それが、あんなことになるなんて……。

◇ ・ ◇ ◇ ◇

教室。

昼休み。

氷雨は結局午前中ずっと教室には戻ってこなかった。それ故に、一夏は有言実行すべく、氷雨の鞆を持ち保健室に向かうと言った。

「僕も行くよ」

シャルも付いて行くという。

「ああ、いいぜ。箒とセシリアはどうする？」

一夏はいつものメンバーに声をかける。セシリアは少し思案したのちに断った。

「大人数で押し掛けても氷雨さんの気が休まらないだけですわ。わたくしは放課後に行くことにします」

「私もいい。少し確認しなければならぬことがあるからな」

箒の言う確認の言葉に、一同は疑問符を浮かべるが、それ以上のことを箒が言い出さないのも、皆もそれを聞き出そうとはしなかった。

「じゃあ、俺とシャルルの二人で見舞いに行つてくるぜ」

「また、後でね」

そう言つて教室から出ていく二人を見送ると箒は立ち上がった。

「どちらに行かれますの?」

セシリアの声に箒は顔だけそちらに向けて、答えを返す。

「二組の、鳳鈴音のところだ」

その目を見たセシリアは一人で行かせてはいけないと思つた。

五話 修羅場？

二組。

昼休み。

鳳鈴音は転校生であり、専用機持ちの代表候補生であるが故にクラスメイトに質問攻めにあっていた。

早く一夏に会いに行きたいのだが、自分に関心を持つているクラスメイトを無下にすめるのもどうかと思ひ、いろいろな質問に答えている。

はつきりとした性格ゆえに質問も時間をかけずに答えていくので次第に質問攻めの勢いも弱くなっていく。その頃合いを計り、鈴は切り出す。

「そろそろ食堂に行きたいんだけど、良いかな？」

そう言うと、クラスメイトは頷き、一緒に行こうと誘ってくるが、それを軽くかわす。「知り合いと約束してるから、また今度ね」

その言葉に納得し、クラスメイト達は散り散りになっていく。

そうして一人になると、一息吐く。質問に答えるのは苦ではない。鈴は自身を偽るような回答をしないので、悩む必要がないからだ。

だが、人に囲まれるというのは苦手だ。それも、自分に覆いかぶさるようにして視界を遮られるようなものに精神的疲労を感じる。

過去、一夏に助けられたいじめの時もそうだった。自分よりも身体の大きい男子に囲まれる。糾弾され、まるで自分が悪いかのような錯覚まで起きる。それが嫌だった。しかし、それもISを使えるようになり、代表候補生まで上り詰めると、自分より大きいものが居なくなつた。大人でさえも、鈴がISを起動させれば小さな存在となる。それが気持ちよくもあつた。

「(あいつ……一夏も使えるんだよね)」

鈴は男の中でも一夏だけは認めていた。そして、自分も彼の様に強い存在になろうと思つていた。彼と対等になるために手にした代表候補生の座、成長した自分は彼に相応しくなつただろう。

そう思い、今、彼との約束を確認しに行くのだ。

「よし」

自分の意思を確かめ終え、鈴は立ち上がる。行く先は食堂に居るであろう一夏。そうして、廊下に出ようとした鈴の視界に、一つの影が立ち塞がった。

「少しいいか?」

その声に顔を見れば、先ほど一夏の周りに居た女子の一人だった。

「あんた、さつき一夏の横に居た……」

「篠ノ之箒だ。一夏とは幼馴染だ」

その自己紹介を聞いただけで、鈴は箒が一夏にどういう感情を抱いているかを察した。そして、こうして会いに来たのは多分それについての宣戦布告であろうと思った。

「あたしもだけどね」

だからそう応じた。しかし、鈴の予想と違い、相手はそれにさして反応せず、話しを続けた。

「昨日、氷雨に会っただろう」

「氷雨って誰よ」

「一夏ではない、もう一人の男性操縦者のことだ」

そこで初めて鈴は彼の男の名前を知った。つまり、さつきのあいつの話をしているのだと鈴は理解する。

「会ったけど、それがどうしたのよ」

あからさまに不機嫌な声になってしまったと鈴自身も気づいたが、いまさらどうしようもないことであった。その声色を耳にした箒は確信したように頷く。

「生憎、私は話術がうまくない。回りくどい聞き方はできないから単刀直入に聞く」

そんな口上から始まるので、鈴は身構える。

「氷雨に告白されたか?」

その質問は鈴の想定の範囲内のものであった。

「まあ、されたけど?」

そこまでは箒も予想していたことだ。だから取り乱すこともなく、そうだろうと頷く。

「それで断った」

「だって、初対面だしいきなりだもん」

「別にそこはいい。氷雨に告白されて承諾する奴などいないだろうからな」

さらりと兄を貶す箒。実際のところ、氷雨さんはネームバリュー的に大人気なのですが、そんなことはお構いなしである。

「聞きたいのは、どうやって断ったかだ」

突然鋭い眼光になる箒に、鈴は少し後ずさる。

「なんでそんなことあんたに言わなきゃなんなのよ」

一瞬気圧されたが、昨日のことを思い出し不機嫌になり、強めの返しをする。

「私が氷雨の妹だから、だ」

その回答に鈴はゾクリと背筋に悪寒が走るのを感じた。それは目の前の箒が発する威圧感からくるものでもあり、ただブラコンという人種に初めてであったからだという

ものもあつて、要するに「気持ち悪い」と感じちゃったわけなんです。

「氷雨の落ち込みようは尋常ではなかった。ただ落ち込んでいるだけならまだいい。だが精神に疾患ができるほどの状態までに陥っている現状を見ると、ただ初対面の相手に振られた程度でここまで状態になるか、と疑わざるを得ない」

一目惚れで告白して振られる。この世界の人からすれば、氷雨の行為はそれであるのだが、実際のところの鈴への入れ込み具合は半端なものではない。なにせ今までの人生を捨てて、ISの世界に転生するほどのものだから。

だから、箒の考えは間違つてはいないのだが、正解でもない。

「だから……お前が、氷雨を傷つけたに決まってる!! 氷雨に謝ってもらおう!」

感情を露わにした箒に対して鈴はその自分に向けられる怒りに困惑する。

しかし、どう考えても理不尽であるそれに、次第に困惑は怒りに変わる。

「そんなこと知らないわよ! 勝手に振られて、勝手に傷ついただけでしょ! あたしの知ったことじゃないわよ!」

「貴様っ!」

「それに……」

鈴は昨日のことを思い出す。あの男の言葉。自分の心を見透かしたような物言い。こっちの気持ちを考えないで土足で立ち入られた。

「あいつは、最低の人間よ。それくらい、当然じゃない!!」

その言葉に箒はびたりと動きを止める。そして、感情を抑えるように肩を震わせる。後ろから見守っていたセシリアも流石にこれはまずいのではないかと、割って入るために近付くが、時すでに遅し。

お前それどこから取り出したの? と言わんばかりに木刀を取り出し鈴に切りかかろうとする。

それを鈴がI Sの腕部を部分展開し防ぐ。

「やめときなよ。私は専用機持つてるのよ? あんた、怪我するわよ」
 そうして威嚇すれば、止まるだろうと鈴は考えたのだが……。

「それがどうしたっ!」

「なっ!?!」

「箒さん!?!」

ブラコンは止まらないのだった。



昼休み。

保健室。

「いや、心配掛けたみたいでごめんね」

もりもりとご飯を食べる僕を見て、一夏とシャルは脱力している。

「まさか、お腹の減り過ぎで体調が悪くなってたとはな」

「あはは。氷雨らしいね」

「申し訳ないよ。もぐもぐ」

よく考えたら昨日から食べてないんだよね。シヨックで喉を通らないってやつ？

あの状態に陥ってまして。そんなことあるわけないじゃんって思ってたけど、いざ自分がそうなるかと納得だわ。胃がむかむかして食べたいって思えなくなるもん。

「それ食ったら戻るか？」

「うん。……あ、鞆持ってきてくれたんだ。ごめんね」

「いや、鞆運ぶくらいなんてことはないから気にしないでいいぞ」

「やだ、イケメン。惚れちゃうよ、一夏」

「えっ」

何を本気にしているんですか二人とも。

「ま、まあ。元気になってよかったね」

「そ、そうだな。じゃあ、俺はこれで」

「ちよつと待って、身体を抱きながら後ずさるのやめて下さい」

冗談だよと言って、一夏は手を下ろす。

「そうなるかと氷雨は攻めなのかな。いやでも、背丈から見たら一夏が攻めの方が栄えるし、ああでも……」

シャルが小声で何かをぶつぶつと呟く。うん。聞こえてないよ。聞こえない聞こえない。だからペイルライダーさん、ハイパーセンサーを止めて下さい。お願いします、何でもしますから。

『今、なんでもと言いました?』

「言つてない」

最近は何を読むのが流行っているんですかね? 読心術怖いです。え、少し違う?

「じゃ、俺たちは食堂行くけど、氷雨はどうすんだ?」

あ、付いて行ったら鈴ちゃんもいるかな? 今度こそ謝りたいから、僕も行こう。

ああ、今から緊張してきた。

「僕も付いて行くよ。どうせ箒とセシリアもいるでしょ? 心配かけたから謝りたいし」

「別に謝る必要はないと思うけどな」

「そうだよ。友達なら心配するのは当然だもん」

おお、なんと嬉しい言葉。さらりと見えるところが凄いな。

ベッドから降りて立ち上がる。貧血の後なので、少しふらついたのを一夏が支えてく

れる。それを見たシャルが鼻を抑えている。あれ？　シャルってそういうキャラだっけ？

そんな中、バタバタと慌ただしい足音が外から聞こえ、保健室の前に来たかと思うと、勢いよく扉が開けられた。

そこに居たのは肩で息をして、いろいろ揺らしている真耶ちゃんであった。

「どうしたんですか、そんなに急いで」

「何かあったんですか？」

一夏の問いに、真耶ちゃんは息を整え、こちらに顔を向ける。

「そ、それが大変なんです。二組の方で、し、篠ノ之さんと転入生の方が……」

「え、箸と……」

「……鈴ちゃんが」

「鈴ちゃん？」

つい口を滑った言葉にシャルが疑問を呈してるけど、それは今置いておこう。

「お、大喧嘩してるんです！」

それを聞いて、僕は走り出す。

「ちよ、氷雨！」

一夏の声を置いて、僕は廊下に飛び出し、二組を目指し全速力で走りだす。

大事になっていなければいいんだけど……。

六話 謝罪の技量

二組。

大事になっていなければいいんだけど（爆）

なっていないわけないじゃん！

見てよこの惨状を。腕だけISの装甲を展開した鈴ちゃんと木刀を持った箒が机を踏みつけ、教室を所狭しと飛び回り喧嘩……というかこれもう戦闘じゃないかな？ とにかくやばい。

これは止めなきゃならない。早く止めないと……。

机の主には悪いけど、二人を止めるためだから許してね、と内心で謝りつつも机に飛び乗り、二人の間に割って入る。

鈴ちゃんのIS装甲には同様にIS装甲で、箒の木刀には篠ノ之流古武術で、木刀の側面を叩き、軌道を逸らす。

「嵐さん、ごめんね。箒、何やってるのさ」

「……これは氷雨のために……」

僕のため？

「どういう意味？」

「だ、だから、氷雨はこの女にひどい振られ方をしたから、あそこまで落ち込んでいたの
だろう。だから……謝らせよう」と

箒は僕が落ち込んでいたから、鈴ちゃんに謝らせようとして、喧嘩をしたって言う事
か。

「……理由は分かった。箒が僕のために動いたのも、嬉しいと思う」

「だ、だったら」

「でも、このやり方は許容できないよ。箒は嵐さんが僕に謝れば、僕の気が晴れると思っ
たんだろうけど……」

ビクビクと警戒している箒を落ち着かせるように箒の頭を軽く叩くように手を置く。

「振られた相手に謝ってもらって気が晴れるほど僕は小者じゃないんだよね」

「うう」

自分のしたことを否定され、箒は肩をすくめる……机の上で。ていうか、凄く目立つ
ねこの状況。

さすがにいつまでもここに居るわけにもいかないので早々に事態を取束させようと
鈴ちゃんの方に向き直る。

「な、なによ」

僕の視線を受けると、鈴ちゃんは少し身構える。

「凰さん、今回は箒が迷惑をかけて本当にご——」

チャイムが鳴り響く。僕の言葉はそこで遮られ、何となくいたたまれない感じになる。

咳払いをして、再度鈴ちゃんに向き直る。

「迷惑をかけて、本当にごめ——」

「始業の鐘が聞こえんのか馬鹿者」

バシんと、今度は出席簿の打撃音が響き渡る。いやいや、ちよつと待って下さい。

「あの、今謝罪中……」

「お前の私情で二組の授業進行を遅らせていいと思っているのか？」

いや、確かにそうなんです、なんというか……。

「分かったら机から降りて教室に戻れ。いつまでそこに突っ立っているつもりだ」

「す、すいません」

うわあ、鈴ちゃんに謝る前に千冬さんに謝っちゃったよ。なんだこれ、締まらないんですけど。

「話が……ちがうつすよ……」

「久しぶりに聞きましたわね」

あ、セシリアいたんだ。いたなら止めてよって言いたいけど、セシリアは肉体派じゃないしね。仕方がないよ。

机から降りて、箒の手を引く。手を握ると怖がるように身体を震わした。

「行くよ、箒」

「あ、ああ」

引かれた箒は自分のしたことを反省しているのか、何の抵抗もなく付いてくる。

廊下を出ると、遅れてきた一夏に迎えられた。

「何があつたんだ？」

一夏はこの騒ぎに不思議そうな顔をしている。

「見てなかったの？」

「織斑先生に止められてたんだ。僕らは見るなって」

千冬さん……GJ!! シャルはともかく、一夏にだけは知られたくないからね。ていうか、千冬さんは事情を把握していたってこと？ あ、あの人には隠し事できなさそうだね。

「織斑先生がそう判断したっていうことは、知らなくていいってことなんじゃないかな？」

「そうなのか？ まあ、氷雨もそう言うならいいけどな」

も？ て言うことは他にも言った人がいるのかな？

周りを見ると、セシリアと目が合う。するとセシリアが頷いたので、なるほどセシリアだったのかと納得した。

一応、事態は収拾したけど、この後だよ、大事なものは。

「……胃が痛いよ」

一夏が不思議そうな顔をしている。

「俺は腹が減って胃が痛いぜ？」

そういう事言ってるんじゃないんだよ。



保健室。

早く止めた理由はこれだ。

箒の手を取ると、真っ赤に染まっている。木刀でISの装甲を叩きつければどうなるか。それは、自身に加えた力と同等の反作用が手に働くのだ。IS装甲でなければ、物の弾性からそれは少し軽減されるのだが、ISのシールドはそれを全て受けとめる。そうなれば反作用の大きさは最大になり、木刀を握る箒の手には大きな摩擦が生じる。

だから、こうして皮がポロポロになり、血が滲んでしまうのだ。

「……………」

手当をしている間、箒は一言もしやべらず、僕と目を合わせようともしない。たまに僕の顔を窺うようにちらりと目を遣るが、すぐに下を向く。

「箒」

「な、なんだ!？」

びくりと身体を跳びあがらせる。

「終わったよ」

「な、何が!？」

「治療が」

それを聞いて、箒は自身の手を見る。包帯が綺麗に巻き終えられており、もうあの傷だらけの手を見ることはなくなった。

「す、すまない」

「いやいや、これくらいはね」

僕は立ち上がる。しかし、治療を終えた箒は依然として落ち込んだように暗い顔をしていた。自分のしたことを悔いているんだろうね。

「さつきも言っただけ、僕のために箒が本気で怒ってくれたのは嬉しかったからね」

「氷雨……」

箒が顔を上げる。

「でも、あれだよ？ 今回ののは箒の勘違いだからね。別に嵐さんが悪い訳じゃないんだから」

「……すまない」

「まあ、僕も悪かったね。箒にこんな勘違いさせるほど心配かけちゃって」
振られただけであんなことになるなんて、普通の人は思わないもんね。

「箒も悪いけど、僕も悪い。だから、一緒に謝りに行こうよ」

そう言うのと、箒は先ほどまでの落ち込んでいた表情を止め、いつもの箒に戻ったのだった。

「ああ。そうしよう」

元気になった箒の手を引いて教室に戻ろうする。流石に恥ずかしいのか箒は僕の手を払う。ああ、いつもの箒だね。

こうして、僕らは教室に戻ろうとしたのだった。



戻ろうとしたけど、生徒指導室に連行されました。

「あの、織斑先生？」

「当たり前だが、あれだけ暴れて何もなしだと思っていないだろうな？」

目の前にあるのは二十枚の原稿用紙。

「せ、せめて五枚くらいには減りませんか？」

この小説ですら一話約3000の原稿用紙八枚分だというのに、20枚……三話も書くの!?

「それくらいかけるだろ。最初期の投稿ペースを思い出せ」

メメタア。いや、だからあれは書き溜めだつて何度も言ってるじゃないですか!

「あの、私は凰さんに謝罪をしに行きたいのですが……」

「ああ、行くべきだな」

「それではっ」

「それを書き終えてからな」

「……はい」

駄目だ。これは缶詰決定だよ。

「……頑張ろうか、箒」

「ああ」

鈴ちゃんへの謝罪は明日になりそうな予感がしてきたよ……。



放課後。

アリーナ。

そこではいつものように放課後の特訓が繰り広げられていた。射撃機体との戦闘。それに重点を置いており、遠距離戦闘のブルーティアーズに中距離戦闘のラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡはうってつけの練習相手であった。

一夏もそれを理解しているので、意識して模擬戦をするが、やはり容易に近付けるものではなかった。

「難しいもんだな」

一通りの訓練を終えて、一夏が呟く。

「接近しかないというのはなかなか難しいものですわ。それしかないと分かっていたら、他に気を配る必要がないですから、距離を取ることに専念できますわ」

それをできなくて負けそうになったのがクラス代表決定戦なのであるが。

「だから、必要になってくるのがこれか……」

「そう、イグニッション・ブースト。織斑先生に教えてもらったみたいだけど……」

「未だに完璧にできないんだよな」

この先の課題を確認し、一夏はピットに戻った。

そこには一夏を待っていたのであろう鈴の姿があった。

「あ、鈴か」

「お疲れ様、一夏。はい、これ」

鈴が差し出したのはタオルとスポーツドリンク。一夏はそれを受け取る。

「サンキュ。お、ぬるめのスポーツドリンク。鈴、分かってるな」

「でしょ。一夏は年に似合わず健康に気を使ってるからね」

一夏に褒められ、鈴は笑顔になる。そして、いよいよ鈴は確認したかったものを一夏に尋ねる。

「あのさ、一夏……約束、覚えてる？」

その言葉に一夏は一瞬首をかしげる。

「ん？ 約束？」

一夏の反応に鈴は絶望するも、その後一夏は何かを思いだしたように声を上げる。

「あつ！ あれか、酢豚を毎日……」

「そうそう」

鈴は一夏が覚えていたことに、先ほどと一転して満面の笑みを浮かべる。しかし、期待を裏切らないのが我らが一夏なのである。

「おごつてくれるんだっけ？」

「……はっ。」

鈴はすぐに一夏が何を言っているのかを理解できなかった。故に鈴は固まったまま、一夏を見つめることしかできなかつた。

一方一夏は自分が約束を覚えていたことに我ながら感心しているようで、うんうんと頷き、鈴の目での訴えに気づくことはなかった。

それどころか、何かを思い出したように一夏は話しだす。

「そういうえば、氷雨に告白されたんだって？」

その言葉に鈴は驚愕する。なぜ一夏がそれを口にするのかと。

「断つたらしいけどさ。あいついい奴だからさ。考えてやってくれよ」

鈴は泣きそうになる。それは一夏の口から絶対に聞きたくない言葉だった。

それは実質的に一夏に振られたのと同義……とまではいかないであろうが鈴にとつてはそういわれたに等しいのである。

「……最低」

ぼそりと呟くその嘆きは一夏に届かない。

「まあ、あいつのこと知らないと判断できないだろうからさ、まずは友達からでも……つてどうした？」

ようやく気付いた時にはもう鈴は涙を抑えきれそうになかった。

「最低っ！」

「はあっ!?　なんでだよ。ちゃんと約束覚えてただろ」

「覚えてないわよ!　それに……あんたにだけはそういう事言われたくなかったのに

……」

言葉の後半は語気が弱くなり、一夏は聞き取れなかった。だが、覚えていないというところだけは聞こえ、考えてみる。つまり、自分がそうだと思っっている約束は間違っているということだ。だが、それ以外の約束が分からない。

「もういいわよ!!」

「あ、おい!」

鈴はピットから飛び出す。流れるものを一夏には見せたくなかったからだ。見せたくはなかったが、一夏が追いかけて来てくれるのではないかという期待を持っていなかったわけではなかった。

しかし、一夏はどうしていいかわからず、ただ姿が見えなくなる鈴を見送るだけだった。

七話 激昂する

指導室。

「不正はなかった」

『ありませんね』

「早すぎないか氷雨!？」

ふふふ、馬鹿にしないでもらおう筈。本気を出せば、一時間で一本分書ききる男だよ。僕は……ただし、内容如何は問わないけどね。今回の場合も要約『ごめんなさい』だからね。起承転結いらずだからなにも考えなくていいしね。え、いつも起承転結ないだらうって? あく、ノーコメントで。

「じゃ、先に帰ってるよ、筈」

「ちよつと待て、嵐に謝りに行くのではないか?」

そうは言っても時計を見る。昼から書き続けて四時。三時間ほどかかってもう放課後だ。鈴ちゃんはどこに行ってるかも分からないし、明日で直した方が賢明だよ。箒もまだまだ終わらなさそう……。

「て、まだ十枚も書けてないの?」

「し、仕方ないではないか。私は口下手なんだ」

まあ、確かに小さい頃からそういうのは苦手だったよね。でもやっぱりそれじゃあ箒を待つての謝罪は無理だね。

「まあ、時間もかかりそうだし、嵐さんも遅くに来られたら迷惑だろうから、明日にしようよ」

「う、うむ。そういうことなら仕方あるまい」

そういうことで、僕は箒を置いて部屋を出た。

「……いや待て、やっぱり早すぎないか!？」

氷雨の執筆速度に疑問を覚えた箒であった。



廊下。

職員室を出る。反省文を千冬さんに渡した時、「お前の反省文は出だしが一緒だな」と、少し疑いの目を向けられたけれど、「僕ってマニュアル人間じゃないですか、人科だけに!」という渾身のギャグをかまして、千冬さんに可哀想な目を向けられながらもなんとか切り抜けた。

ふう、ペイルライダーが書いたってばれたら、また一から書き直させられるところだったよ。

あ、ギャグの解説はね、人科の動物、つまりアニマルであるところからとってマニユア——。

『最近は急に冷え込んできましたね』

「11月だしね。秋はどこ行つたのって話しだよね〜」

……ん？

「いや違う。まだ五月だから。これから暖かくなつていく頃だから」

『そうですか。失礼しました』

別に良いけどさ。こういうメタ発言も好まない人いるかもしれないからやめようね。

「あ、そういうえば自販機にドクペがあるのって珍しいよね？」

『そうですね。某アニメで脚光を浴びましたが、それでもマイナーではありません』

あの高笑いしながらバナナをレンジに突っ込む人だっけ？

「そうそう。でね、なんでそんなマイナーな飲み物が学園の自販機に配備されてるか知ってる？」

しばしの沈黙が知らないというペイルライダーの意思表示であると判断した。

「実は千冬さんが直々に学園に要望したらしいよ」

『あのブリュンヒルデがですか』

「そうそう」

ちなみに東さんも好んで飲んでいるらしい。

「というわけで、今から自販機へ向かいたいと思います」

『どういうわけですか』

どうもこうもないよ。中毒者だからです。某スナイパーさんも飲んでいるらしいけど、これ書いていいのかな？ 事後承諾しておきましょう。

「イケメン死すべし」

『いきなりどうしたんですか』

「深い意味はないよ？」

そんな会話をしつつ、僕の足はアリーナの方にある自販機に向かう。

ああ、そういえば昨日、あそこで鈴ちゃんに会ったんだっけ。なんだか昔のこのように感じられるけど……具体的に二週間くらい。

そっか、昨日なんだね。

「ひつく……ぐす」

ん？ なんだか声が聞こえる？ 自販機のある休憩室の方かな？

廊下を進み、角から覗くとそこには小さく休憩室のベンチに座る一人の生徒の影が

あった。

そのリボンにツインテールの可愛らしい髪型は間違いないと鈴ちゃんであると確信する。

丁度よかった。今なら周りに人もいないし、聞かれる心配もないだろうから今度こそ謝ろう。

運良く見つけることができた鈴ちゃんの背後に近づく。僕の足音に気付いた鈴ちゃんだったが、振り向くことはなかった。

それは足音の主が僕であると分かったからだろうか。それでも関係ない。僕は押し付けでもない。まずは自分の気持ちを鈴ちゃんに聞いてほしいんだ。

「あの、風さん」

僕が声をかけると鈴ちゃんがピクリと身体を揺らす。

「そのままでもいいから、聞いてほしいんだ。僕の気持ちを……」

その言葉に鈴ちゃんにはなにも返事をせず、背を向けたまま黙っている。それを肯定と取っていいのか。少なくとも、この場から立ち去らないということは、話だけは聞いてくれるのだろう。

「昨日は、風さんの気持ちも考えず、分を弁えない領域にまで立ち入ってごめんなさい。昨日の僕の発言は初対面である人が踏み行っている領域を超えていたと反省してる。誰

にだって、触れられたくないところはある。僕自身もそういうところがあるから分かっていたはずなのに、何も考えず嵐さんを傷つけた。本当にごめんなさい」

鈴ちゃんは見てないけど、それでも僕は頭を下げる。え、くの字？ いやいや、そんなんで収まるわけないでしょ？ 土下座に決まってるじゃないか。

土下座をしている状態。僕の視界は地面しか映らないので、鈴ちゃんの様子を見ることはできない。でも、立ち去る音は聞こえないから、まだ僕の言葉は聞いてもらえてる。

「初対面で告白したのは……本当に気持ちを抑えられなかったからだけど、デリカシーにかけていたとは後から思ったよ。でも、初めての経験でどうしていいか分からなかったんだ。それは、許してもらえると……ありがたいです」

告白は間違いだったとは口が裂けても言えない。だって、本当の、心からの僕の気持ちなんでもん。

「お昼も、箒がいきなり来て、迷惑かけてごめんなさい。嵐さんからしたらいい迷惑だよ。ね。箒のは理不尽な怒りだもの。僕が振られたのは自業自得だし、嵐さんには一切の非はないのね。妹が迷惑かけてごめんなさい」

それでも、鈴ちゃんに誤解してほしくないことがある。

「でもね、箒、あんなんだったけど、本当はいい子なんだ。ちよつと感情に流されやすく

て、乱暴な言動になったりすることもあるけど、他人を気遣ったり、本気で心配したり、自分のことじゃないのにもいつも全力を出したりさ。なんというか……不器用なだけで、本当はすつごく優しいんだ」

鈴ちゃんに届いたかな？ 箒のいいところ。まだまだあるんだけど、これ以上言ってもブラコン気持ち悪いと思われてしまいそうで怖いからやめておこうと思う。

「だから、今日のこと、ありがとうって鈴ちゃんに言いたかったんだ」

「はあ？」

小さい声、本当に小さかったけど、鈴ちゃんから疑問の声が漏れた。

「箒が斬りかかってきても、反撃しなかったんだよね。木刀を見て分かったよ。削れた部分が物打に当たる辺りしかなかったからね。これって、鈴ちゃんがずっと受けに回ってくれてたからだよね？」

返事はなかった。でも、それは肯定だと思う。

「だから、ありがとう。理不尽な箒の暴力だったのに、箒に……僕の妹に反撃しないでいてくれて」

「……」

「ありがとう」

心から感謝している。もし鈴ちゃんが普通に反撃していたならば、IS装甲が箒の骨

なんて軽く砕いていただろう。

「やめてよ」

鈴ちゃんから絞りだすかのような弱弱しい声が聞こえてくる。おかしい。これはいつもの快活な鈴ちゃんの声ではない。

「凰さん？」

心配になって頭を上げる。僕の目には肩を震わす鈴ちゃんの姿が収められ、咄嗟に立ち上がる。

「優しい言葉なんてかけないでよ……惨めじゃない」

その震える声はどう考えても泣き声のように聞こえた。泣いている？ また僕は相手の気持ちを考えずに鈴ちゃんを傷つけてしまった？ そんな言葉が頭をぐるぐると回る。

そうして思考を投げだした僕のとった行動は、そう！

「ごめんなさい！」

ゴンツ！

土下座である。

鈍い音を響かせる。そんな音にさすがの鈴ちゃんも驚いたのか。

「え、ちよ、ちよつと、大丈夫なのあんた!？」

そう心配してくれる。

「大丈夫だよ。僕はこう見えても頑丈だから」

そう言いつつ頭を上げると鈴ちやんは僕の目の前にしやがんで、僕の様子を窺う様に覗きこんでいた。

ち、ちち近すぎませんか、鈴ちやん!?

「あ、あれ? 泣き止んでる?」

はっ! として自らの言葉を顧みる。そして、自らの言葉に後悔する。うわああ、またそういうこと正直に言っちゃってるよ僕ううう! 学習してええ! そうやってまた頭を打ち付ける。

そんな僕を見てか、前方の鈴ちやんから大きなため息が漏れるのを聞きとる。

「驚きすぎて、涙なんか止まっちゃったわよ」

そういう鈴ちやんの顔はなんだか笑っているような、投げやりになっているような……そんな、今にも消えそうな笑顔だった。

「……あのさ」

「なによ」

「ごんな、最低な人間な僕だけどき、何があつたか話してみてくれないかな?」

鈴ちやんが傷ついているのを見るのは辛い。

「僕は、鳳さんの力になりたいんだ」

「……」

一時の静寂が辺りを占める。それに耐えきれず、僕は言葉を紡ぐ。

「ほ、ほら。話してみたらすすきりする事つてあるでしょ？　そ、その役に僕が適任かは甚だ疑問ではあるけどさ、鳳さん辛そうだから……だから」

そんな僕を見て、鳳さんはくすりと笑う。

「必死すぎよ」

「あ、ごめん」

「別に謝ることじゃないけどさ。それ、普通なら引かれてるわよ？」

そう言うのと、鈴ちゃんは立ち上がり、ベンチに戻つて先ほどの位置に腰掛ける。そして、こつちに顔だけ向ける。

「だいたい、あんたのせいでもあるんだから、愚痴らせてもらうわよ」

それは、僕に話してくれるということだろう。少しでも鈴ちゃんの気を晴らす助けになれる、そう思うと嬉しくなつて、僕は急いで立ち上がった。

「あ、何か飲み物いる？　僕がおごるよ！」

「じゃあ、紅茶で。午後の方じゃなくて、花伝の方ね」

そんなところにこだわりがあつたとは。

ドクペと紅茶を購入した僕は、鈴ちゃんと対面のベンチに腰掛け、紅茶を渡す。そして、鈴ちゃんの愚痴を聞き続けた。

「……え」

聞き終えた僕の心は驚くほど冷え切っていた。

自身の胸を渦巻く感情は、ただの怒りとしておくには大分に冷たく鋭い。矛先が誰であるかは分かりきっているが、この感情をどう処理すべきかの答えが容易には浮かんでこなかった。あるいは心のどこかでその答えを僕が見つけることを妨げているのかもしれない。

ただ、一つ分かるのは、鈴ちゃんが八割の僕への愚痴と一割の一夏への愚痴と後一割の自分自身への反省を零すうちに流れていた涙がこの感情を増大させたということだ。

鈴ちゃんは目元をぬぐい、やりきった顔になる。

「悪かったわね。こんなこと聞かせて」

「いや、それを望んだのは僕だから……」

ああ、理解した。これは怒りじゃないね、殺意だね。うん、そうだ、間違いないわ、これは一夏の喉元に突き立てるべき鋭い感情だね、きつとそう。

それを理解したら僕はベンチから立ち上がった。

「? どうしたのよ」

「ああ、うん。ごめんね。ちよつと僕、箒を叱つたのに……だめだなあ。同じ立場になつた途端これだもん」

鈴ちゃんは不思議そうな顔をしている。

僕がしたいことによつて、鈴ちゃんが喜ぶわけがないということは分かるんだけど、やっぱりそれを理解した所で止まれるような感情ではないんだ。例えこれが僕のエゴだとしても……テンパに「それはエゴだよ!」って言われたとしても!

「この、氷雨・篠ノ之が肅清しようというのだ!」

「は?」

呆ける鈴ちゃんを残し、僕は全速力で駆けだした。

八話 終幕

廊下。

駆け出してからなんだけど、どこに行けば一夏君は居るんでしょうかね？

『氷雨』

ペイルライダーの呼びかけに一旦止まる。

「なに？」

『一度落ち着きましたよ。冷静になってから行動しても遅くはないはずですよ』

「遅くはない？ いや、別に早いも遅いももうないよ」

今更時を気にしても、鈴ちゃんも傷ついたことにかわりはない。その事実を覆せるのなら、昨日あんなに悩むわけがない。

『そこまで分かっているながら何故氷雨は感情に任せて走っていたのですか』

ペイルライダーの責めるような言葉を受けるも、僕は改心しない。

「怖いから」

『怖い？！』

ペイルライダーは意外な返答に理解できていないようだ。

「そう、怖い」

『いったい何を怖がっているのですか』

「この感情が腐っていくのが、怖い」

僕の中にある負の感情。これは放っておいたら絶対に良くない方向に行く。悩みすぎて、本当は単純なものだったかもしれない事態も、時を置き、いろいろと考えてしまふと、ドロドロと膨らんでいき、他の感情も呑み込んで大きくなり、いずれ制御できなくなる。

思考することはいいことだ。考えなしで突っ走るよりも、ペースを考えた方が完走しやすいだろう。

だけど、自分を腐らせるような感情を抱えた時だけは、どこかに捌け口を作るしかないんだ。

『しかし、それは箒にも言えたことでは？』

「……………」

え？ 自分を正当化してるだけだろって？

……………そうですけど何か？

「いや、だって、一夏の言ったことは許せたくない!？」

『第三者が介入する事ではありません』

「でも関係者ではあるんだよ？ 僕のことを思っただけで知らないけど、それで鈴ちゃんを傷つけられたら、怒るしかないよね!」

『それで解決するのですしたら、箒は咎められてはいません』

い、痛いところをつかれる……。

「でも、だからって、僕はどうすれば……」

『やっと落ち着いてきたのですね』

ペイルライダーの言葉に気づかされる。そうだ。会話に乗せられて、時間が過ぎることである程度の冷静さを僕は取り戻していた。少なくとも、自分がしようとしていたことに疑問を持てるくらいには。

「はあ、ありがとう、ペイルライダー。僕はどうかしていたんだね」

『いえ、いつもどうかしているのです、これくらい礼には及びません』

うんうん。……あれ？ 地味に貶された？

『それで、どうしたいのですか、氷雨は』

この質問、前もされたね。ペイルライダーはいつも僕のしたいことを聞いてくる。誰かのために動かなければならない、そんな使命感に満ちた行動をペイルライダーは望んでいないのだろう。あくまで「僕の剣」として。

「……一夏をぶん殴りたい」

『あまり頭を冷やした意味はありませんね』

「いや、鈴ちゃんに謝ってほしいとかの目的が消えて、僕のためだけの行動に変わったよ？」

詰まる所ただの憂さ晴らし。

『箒もそうだったのでは？』

「そうかもしれないね。でも、あれは鈴ちゃんに非がない以上止めるしかないよ」というわけで、行動の指針が決まりました。

「じゃあ、一夏を殴りに行きますか」

『今から一緒に？』

「これから一緒に！」

『殴りに行くこうかあ!!』

「おい」

あ、千冬さん。

「ちよつと来い」

いやああああ、いやああ、いやああああ、いやあ、いやああ、いやああ、いやあああああああ。



「出鼻ボツキボキに砕かれたんですが……」

『自業自得です』

「ノリノリだったくせに……」

説教を少し（5分）聞かされた後、飲みかけのドクペを差し出すことで解放された僕ははゆつくり一夏がいるであろう自室へ向かった。

「あれ？」

廊下を進んでいると、自室の前に突っ立っている頭の横で括られた髪の毛の束を揺らす、少女、鈴ちゃんが見えた。

「嵐さん？」

僕の声を聞き、鈴ちゃんはこっちに振り向く。その顔は真っ赤であった。え、なに？
何があつたつて言うんですか？

「ど、どうしたの!？」

「……どうしたもこうしたもないわよ」

あれ、語気荒げて……ひよつとして怒つてらっしやる？

「あんたが物騒な事言つて走り出すから、もしかして一夏と喧嘩になつてるんじゃないかって心配になつて中に入ったら、何事もなくお茶飲んでたじゃない!!」

「ぶふっ!」

その絵を想像して、思わず嘔き出してしまおう。

「あたし動揺して、一夏大丈夫？ って心配までしちゃったじゃない！」

『一夏の呆気にとられた顔が目には浮かびますね』

ペイルライダーの眩きに僕は咽る。

「ちよつと！ あんた何笑ってんのよ！」

「ご、ごめん。い、いや、笑ってないよ、全然。も、申し訳ないです、はい」

『しまいには「鈴もお茶飲むか？（一夏の声真似）」って聞いてきそうですね』

「ごはああ！」

「ちよつとっ！」

やばい、ペイルライダー合成音使ってるからほぼ本人なんですけど！ お、お腹痛いです。

「ご、ごめんな、ふふっ、さい……くふっ」

つぼに入っちゃやうと笑いつて収まらないよね。今それです。

「こつちはめちやくちや恥ずかしかったんだからね！ 喧嘩中だつて言うのに、いきなり相手を心配する奴がどこに居るつて言うのよ！」

「ほんとにごめんね！ いや、途中で千冬さんに捕まっちゃつてき。ほんとは一夏を殴るつもりだったんだけどね」

そう言うのと、鈴ちゃんは少し伏し目がちに僕を見据える。

「それは、あたしのためとか言わないでしょうね？」

「勿論最初は頭に血が上ってたからそのつもりだったけどね。諫められてやめたよ」
鈴ちゃんは不思議そうな顔をする。

「僕は僕が腹立ったから一夏を殴ろうと思った」

「へ？」

鈴ちゃんの腑の抜けた声、めっちゃ可愛いね！

「だって、嵐さんを傷つけたんだもん。そりゃ腹が立つよ」

まあ、僕が言えた義理ではないんだけどね。

「でも……」

殴りに行くこうとしてたけど、僕の気は変わった。

「一夏を殴るのはやめにするよ」

「……なんで？」

「だって、鈴ちゃんが本気で一夏の心配してたんだもん」

そんなことしたら、僕が悪者になっちゃうじゃんか。

「なんだか、嵐さんも元気になったみたいだし、僕が殴りに行く理由はなくなっちゃった

よ」

「あんた……」

鈴ちゃんは笑顔を浮かべ僕を見つめる。う、うわっ、これ凄く照れる。

「意外といい奴なのね」

「あ、あはは。ありがとう」

顔を逸らしつつ答える。直視してられないチキンな僕ですが、さつきまで頑張ってたから許してね。

顔を逸らした僕の視界の端に、鈴ちゃんが手を差し出す姿が映る。逸らした顔を再び鈴ちゃんに向けると、その手は握手を求めているようだった。

「昨日は……あたしも言い過ぎたわ」

「え、いやいやそんなことないよ！ 僕が全面的に悪かったって——むぐ」

左の人差し指で口を閉ざされる。

「あたしが言い過ぎたと思ってるんだから、素直に受け取る。わかった？」

鈴ちゃんの言葉に僕はコクコクと頷く。すると、指は離れ、唇は解放される。ああ、なんで僕は名残惜しいと感じてしまってるんだろう。変態なのかな？

「だから、これは仲直りの印ね」

「許してくれるの？」

「だから、そう言ってるじゃん」

優しすぎる!! 貴女が天使か! あ、天使だった。

「うん、じゃあ……改めて、よろしくお願ひします、凰さん」

差し出された手を握り返す。

「よろしく、ええと」

「篠ノ之、篠ノ之氷雨だよ。妹の筈もいるからできれば名前で呼んでくれると嬉しいな」

「分かったわ。じゃあ、氷雨! これからよろしくね!」

「はい!」

こうして僕は、何もしてないけど、一つの苦難を乗り越えたのであった。

そんな氷雨と鈴の様子をたまたま目撃した人物が一人いた。

「ふん。女にうつつを抜かしているとはな」

白銀の髪を靡かせ、少女は踵を返す。

眼帯の奥の瞳が見つめる世界は真つ暗だ。

彼女はその中に光を見いだすように、千冬にすぎる。

去り際、右目に映った氷雨のアホみたいな笑顔に彼女は何の関心も抱くことはなかった。

学年別トーナメント

一話 始まりの号哭

食堂。

何とも締まらない幕引きをしたものの、僕は無事、鈴ちゃんとの仲を良好なものにする事ができた。

でもそれは、偶然の重なりのおかげで、僕自身が何かを成したわけではないような気もするけど、結果オーライなので問題はないということにする。

そして、仲が良くなった鈴ちゃんと今、食堂でお昼を共にしているのだ！ 食堂のオムライスは卵がふわふわで君を見てるといつもハートドキドキな時間なのだ！ ふわふわタイム♪

まあ、僕がそのお供に選ばれた理由は消去法なんですけどね。一夏とは喧嘩中だから僕しかいない、ということだ。嬉しいような、悲しいような……。

「別にいいけどさ、なんで他に二人も付いてきてるわけ？」

同じ机についているのは四人。

一人は鈴ちゃん。一人は僕。

そして、あとの二人はシャルとのほほんさんだ。

「僕も転校生の凰さんと仲良くなりたいたいな〜って思つて」

「えへへ〜、私もそうだよ〜」

「て、ことらしいよ?」

「ふうん。ま、別にいいけどね。私は凰鈴音。鈴でいいわよ」

「僕はシャルル・デュノア。僕もシャルルでいいよ。よろしくね、鈴」

その自己紹介を聞いて、鈴ちゃんはなんだか引つかかるところがあつたらしく、小首をかしげる。

「男みたいな名前なのね」

「「えっ!」」

「あはは〜、りんりん、でゅっちは男の子だよ〜」

「……そのりんりんって言うのは止めてもらつていい?」

「え〜、なんで? 可愛いよ?」

「昔、パンダの名前みたいって馬鹿にされてたのよね……」

パンダ……ああ、確かに居そうな名前だね。

「う〜ん。じゃあ、ふあんふあんっていうのは〜?」

「まあ、それなら別にいいけど」

「決まり。じゃあ、今日からりんりんはふあんふあんだ」

のほほんさんの中では鈴ちゃんのあだ名はふあんふあんで決定したらしい。

「あの、鈴」

会話が途切れたあたりで、シャルがおずおずと鈴ちゃんに声をかける。

「なに？」

鈴ちゃんはシャルの方を向き、続く言葉を促した。

「僕は、男みたいじゃなくて、一応男なんだけど……」

一応って付けている辺り凄く怪しまれそうなんだけど、シャルはそれでいいのかな？

「え、そうだったの？」

「あはは。まあ、一夏や氷雨と違って大々的に報道はしてないから知らないのも無理はないけどね」

「いや、鈴ちゃんは僕のことも知らなかったよ」

一夏のことしか見てなかったからね。

「へへ、女だと思ってたわ。なんか悪かったわね」

「い、いや、別にいいよ」

まあ、中性的な顔立ちって、男が女みたいな顔をしているときに使うから、あながち間違っていないよね。男だって紹介をされなかったらクラスのみんなも女だと思ったん

じやないかな？

「嵐さんはどう？ 一夏と仲直りできた？」

「できてたらあんとここに居ないでしょ」

「それもそうだね」

あれから二日たつけど、全然進展はないみたいだ。一夏の方は一夏の方で、『何がどう間違ってるのか分からないのに謝れるわけないだろ』って謝る気はなさそうだしね。

あ、この時は一発殴りました、ボディーを。そしたら頭をどつかれました、千冬さんに。いったいどこから現れたんだ……。

「……ねえ、氷雨が鈴に振られた話って本当？」

「ゾはあー！」

僕の正面の机が紅い滴で染められる。それに驚いたシャルが慌てだす。

「わ、わわわ。だ、大丈夫、氷雨！」

「ふ、シャル……後のことは、たの……んだ……ガク」

「氷雨ー!!」

自前効果音と共に倒れる僕と、その肩を掴むシャル。それを冷めた目で見つめる鈴ちゃんに、我関せずとホットケーキをマイペースに頬張るのほほんさんの姿が凄く力オスな昼食時の食堂を彩っていた。

「シャルル、それ、ケチャップだから」

「え？」

「あ、ばれてた？」

鈴ちゃんとの仲が改善された今、それは最早トラウマにはなり得ないワードなのです。だからもう前みたいに失神する事はないのだ！ はははは、ああ、手が震えてやがる……。

「ていうか、シャルルはなんでそれ知ってるの？ あ、そういえば一夏も知ってたよね」
「え、あんたがしゃべったんじゃないの？」

いやいや、僕が鈴ちゃんの不利益になることなんてするわけがないじゃないですか。え、僕とくつつ付くことこそが不利益だつて？ ちよつと、その君、屋上行こうか？

「えつと……それは……」

言葉を濁すシャルが一瞬ちらりとのほほんさんの方を見る。それを見逃すはずもなく、僕は誰がこの事態を引き起こした犯人であるかを理解した。

「のほほんさん、貴女、しゃべりましたね？」

「ほへ？ な、なんか顔が怖いよ、ひさめん」

失敬な。満面の笑みを浮かべているじゃないですか。

「毎度毎度、のほほんさんの口は軽すぎるんじゃないの？」

「ほにやつ！ ほ、ほっへたつねははいへ〜」

ふにふにとのほほんさんの柔らかい頬肉を弄る。その感触はいままで最高のさわり心地だと思われていたビーズクッションをも凌ぎそうな柔らかさだった。こ、これが女の子！ お、恐ろしい。

「い、いつまで触ってるの、氷雨！」

「ごめんなさい！」

シャルに頭を叩かれてしまった。あの温厚なシャルが手を出すほどに、僕はふにふにしていたのだろうか。

「うう、私はただ噂が本当なのか確かめようと思ったただだよ〜」

頬をさすりながら僕に抗議してくる。ちよつと涙目になっている所を見ると本当にやり過ぎたようだ。ごめん。お詫びに後でオリ主にありがちなお菓子作りスキルを発動させるから。……まあ、僕にそんなスキルはないんですけどね。

「まあ、過ぎたこと怒ってもしょうがないし、別にいいじゃない」

「嵐さんがいいなら僕はいいいけどね」

そもそもその被害者は僕じゃないので、本人がいいというなら問題はない。

「ええと、つまり噂は本当ってこと？」

「まあ、そうなるね」

「へ、へえ〜」

何故か引きつり気味の笑顔を浮かべるシャル。どうかしたんだろうか。

「それより、一つ気になってたんだけどさ」

「ん？」

鈴ちゃんが僕の方を向いて話す。

「あんだ、一夏のことなんて呼んでる？」

「一夏」

それは鈴ちゃんの前でもよく言ってるけど……。

「妹は？」

「箒」

「イギリスの代表候補生は？」

「セツシー」

「え？」

シャルがそんな呼び方してたかな？ と不思議そうな顔をしているけど、気にするな

と目で訴えよう。いやいや、なんで紅くなってるんですか、シャルさん。

「シャルルは？」

「シャルル」

「あたしは？」

「鳳さん」

「なんでよ！」

「ええっ!？」

ちよつといきなりどうしたの、鈴ちゃん。

「あんた、あたしに告白したわけじゃない？」

「うん、まあ振られたけど」

「なのになんで他と違って、あたしだけ名前で呼んでないの？」

う、そ、そこを突っ込まれますか……。

「は……」

「は？」

……言わなきやダメかな？

「(ボソボソ)」

「え、聞こえないんだけど」

ええい、こうなりややけどよ！

「恥ずかしいからだよ！」

僕の叫びが騒がしい昼食時の食堂に響き渡る。

「こつちのほうに恥ずかしいわよ！」

おつしやる通りです！ 食堂にいる人たちの視線が一斉に僕に集まって嫌な汗かいちやつたよ。

『でも、それすらも快感にしてしまうのが氷雨ですよね』

けつたいなこと言わないでください。そんなことないからね!?

僕に集まっていた好奇の視線も消えたとき、再び鈴ちゃんも僕に向かって話し出す。

「あんた、すでにあれだけ恥ずかしいことしたんだし、これ以上恥ずかしがることないでしょ？」

「え？ ……うん、まあ、確かにそうかもしれないね」

「どんな告白。気になるね、でゆつちー」

「え、ぼ、僕は別に……」

のほんさんに遊ばれてるね、シャル。顔も赤いし、そういうのには疎い初心なのか？ 原作からはあんまりそういう印象受けなかったけど。

「だから、あんたはこれから私のことも名前で呼びなさい」

「えっ！」

「なによ。嫌なわけ？」

嫌なわけないけど、心の準備がその……。

で、でも、鈴ちゃん直々に言われたらそうするよね。ていうか、そうしたかったし。
「り、鈴たん」

あ、緊張しすぎて噛んじゃった。って、あれ？ 鈴ちゃんの様子がおかしい。

「さ、さすがにそれはあたしでも引くわ」

「ひさめん、おもしろいね〜」

「ひ、氷雨……」

いや、違うの！ 噛んじゃっただけなの！ だから、そんな非難の目を浴びせないで
！

「ち、違うよ！ 噛んだ、噛んだだけだから！」

『上手い具合に噛むのですね。つまり潜在的に氷雨は変態』

ちよつとペイルライダーひどくないっ!?

「ワンモア！ ギブミーワンモアチャンス！」

「なんで英語なのよ」

深呼吸をする。ひっひっふー、ひっひっふー。よし、あまり落ち着かない。

「鈴ちゃん」

その言葉は声に出すと思ったよりもしっくりくるものだった。

「鈴ちゃん」

ずっと前から口にしていたその単語は、やっぱり耳に慣れた響きで、なんだかそれを本人に伝えられるのがうれしくて……。

「鈴ちゃん……鈴ちゃん。鈴ちゃん！ 鈴ちゃん！」

「ここから、始まるんだな……って実感できたんだ。」

「鈴ちゃああああああああああああああああああああん！！！！」

「うるさいわよ!!」

「ひさめんはおもしろいね〜」

「氷雨……」

また初めの一步を踏み外したような気もした。

二話 黒き雨の降る

瞳には画面が反射しており、それを注視していることが窺える。

検索ワード「ふあんふあん」

「

画面の検索エンジンに打ちこまれる文字は、今日の昼にのほほんさんと呼ばれる女子から付けられたあだ名だ。初めはりんりんと呼ばれたが、それで昔は「笹食えよ」と、男子からからかわれた過去があり、拒否した。その代わりとして付けられたのが、この『ふあんふあん』というあだ名。

鈴はそれだけ打ちこんで検索するのかもしれないと思いきやそうでなかった。

検索ワード「ふあんふあん p」

そこまで打つと、無料な予測を g g r 先生はしてくれた。

「ふあんふあん パンダ」

「……」

それが見えると、鈴は今まで打っていた検索ワードを消し、ブラウザを閉じた。

◇ ・ ◇ ◇ ◇

グラウンド。

今日の授業は二組との合同演習！ え、なんで気合が入ってるかって？ もう、分か
りきつたことじゃないか。もちろん、鈴ちゃんにいいところを見せられるからだよ！

『見せられる“かも”ですよ、氷雨』

「そんな気遣いいらないよ、ペイルライダー」

確かに、昨日も致命的な失態をしてしまった。そのおかげで部屋に戻ってもシャルに
冷ややかな目で見られて凄く居心地が悪かった。しかし、昨日は昨日、今日は今日。試
行が変われば結果も変わるはずだよ。

「今日は何をするんだろうな」

一夏が聞いてくるも、実は僕も知らない。

「さあ？ でも、訓練機を使った実践的な訓練をするってことは織斑先生が言ってたよ」
「そうなのか？ 実戦的って、また歩行訓練とかじゃないだろうな」

その訓練も大事な訓練なんだけどね。一夏は一発で上手くいったけどさ。

ともあれ、動くだけなら一夏みたいにすぐに感覚を掴む人もいる。じゃないと、入学
前の試験で教官と戦えるわけがないからね。

「それに関して是我が妹は天才だと思っただよね」

「な、なんだ、いきなり」

いきなり話題が自分に飛び火したことに驚きを示す筈。

「だって、稼働時間もそこそこののに I S に乗って自分の剣術を發揮できてるんだもん。足捌きなんて、I S でやろうとしたらなかなかの難易度だからね」

そもそもが無重力軌道の I S に剣道の体捌きを適応させるのはなかなか苦労するものだ。僕なんて二カ月かかったからね。

「い、いきなり褒めるな!」

「あはは、いたいいたい。あ、ちよつと待って、ほんとに痛い」

照れ隠しで背中をばしばし叩く箒。いや、普通の女の子なら可愛らしい仕草だけど、剣道大会優勝者のそれはちよつと洒落にならない。

「確かに箒さんの動きには驚かされるものがあるね」

そう話しに入ってきたのはシャルだった。

最近になって放課後の訓練で箒とシャルが戦ったのだが、結果はまあ箒の惨敗。理由は単純、中距離戦闘を主とする相手に対する立ち回りができていなかったこと。

それでもシャルが褒める理由はその戦いが長期戦になったからだ。

「剣道独特の動きなのかな? 重心にブレがないからどっちに回避するのか読みづらかったよ」

「そ、そうか?」

あらぬ方向からも褒められ、なんだか本当に照れてしまっているようで、僕の背中也

そろそろ真つ赤になつてゐる頃だろう。

「やはり僕の妹だね。誇らしいよ」

「う、うるさいぞ、氷雨！」

あ、そつぽ向いちやつた。

「ま、僕には程遠いけどね！」

「「……………」」

あ、あれ？

僕の声高々の宣言に帰つてきたのは沈黙と冷めた目。うそお、ここは僕を褒め称える流れだったでしょ!?

『哀れですね』

「うるさいよー！」

「うるさいのは貴様だ、馬鹿者」

出席簿が僕の脳天を叩く。もうこれ何回目だろうね。身長が数センチ縮んでもおかしくないよ。

前を向くと、すでに千冬さんが立つており、他のみんなは綺麗に整列していた。

「これから、一組と二組の合同訓練を行う」

よく通る凛とした声を響かせ、授業の説明が始まる。皆一様にそれに耳を傾けている

のは真面目だからであって、決して千冬さんの暴力が怖いからという恐怖政治ではない。

「今日の訓練は専用機持ちとの模擬戦闘だ」

その一言に一同騒然とする。え、だってまだ一カ月ですよ？ しかも訓練機で模擬戦闘？

皆が同じ疑問を持っているかは分からないけど、多分それに近いことを考えてるんじゃないだろうか。

「静かにしろ。もちろん専用機持ちは手加減してやれ。あくまで訓練だ。学年別トーナメントに向けて、今までの訓練で習得した技術を確認するために模擬選という形式を取ったにすぎん」

なるほど。そりゃ、いきなり学年別トーナメントで戦えって言われてもまともに動けるか分かんないしね。戦闘という形式に慣れるという意味もあるのか。

「分かったら以前と同様に専用機持ちをグループリーダーとした班に分かれろ」

千冬さんが言い終わると同時に、依然と全く同様にクラスの女子は動き出した。そう、同様に……。

「織斑くんよろしくね！」

「きよ、今日こそは織斑くんにお姫様だつ……」

「シャルルくん優しく教えて〜」

「ボデイタッチまではセーフだよな？ セーフだよな！」

アウトでしょ。

「やっぱり篠ノ之くんが安牌ね」

「取りあえず篠ノ之くん、みたいな感じだよな」

僕は生ビールか何かなんですかね？

というかこの展開は前回もあつたでしょうに……学習しないんだね。え、ブーメランだつて？ ハハ、ナンノコトヤラ。

またたく間に正面に居た女子たちの頭が出席簿に叩かれる。その速さにただただ驚くばかりだ。千冬さん、ばない。

「……貴様らは学習という言葉を知らんのか。名前順に分かれる。次はないぞ」

ドスの利いた声により、瞬時に六列が出来上がる。

こうして、授業がやつと始まるのだった。

◇ ・ ◇ ◇ ◇

訓練機は近接ブレードとアサルトライフルが搭載されている。

「おりゃー」

正面に居る打鉄がアサルトライフルの弾をバラ撒く。それをビームブレードで弾き

ながら追いかける。

「うん。狙いはちゃんとつけられてるね」

「ええー！ 弾を弾くなんて反則だよおー」

弾を弾かれたシヨックからか、その後の回避が疎かになり、僕は簡単に肉薄する事ができた。

「はい、おしまい」

ビームブレードを喉元に突き立て、試合終了を示す。

「し、篠ノ之くん強すぎない？」

「前のあれじゃ、全然分からなかったけど……」

「あ、そういうえば、セシリアのビーム最初に弾いてたような」

あ、やっぱりクラスのみんなはそんな感じの認識だったんだね。別にそう思ってもらったままでもよかったけど、篠ノ之の名前背負ってるしね。多少は強いってところ見せていかないと格好がつかないよね。ペイルライダーにもなんだか悪いし。

「はいはい。じゃあ、次の人は？」

と、そう呼びかけると、それに答えるかのようにISの転倒音が響き渡った。

みんなして音の方に目をやると、そこには訓練機に乗る女の子が倒れており、さらにその横にはワイヤーブレードを戻すラウラの駆るシユバルツエア・レーゲンが見下すか

のように立っていた。

「それで終わりか？」

冷たい声が女子に投げられる。その目は鋭く、まるで敵でも見ているかのようだった。

うん。それでもそこに追撃しない辺りはまだまともに模擬戦していると云ってもいいのかな？

転倒した女子は自力で起き上がり、次の子に交代したみたいだ。

「ほら、こっちも始めるよ」

ラウラのグループの方を見つめる僕のグループの女子たちに声をかける。もたもたしてたら千冬さんにどんな罰を貰うか分かったもんじゃないからね。

「よし、準備できた？ さあ、始めるよ！」

授業はまだ続く。



黒き雨の意を持つ I S 『シュバルツエア・レーゲン』を駆るドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒは冷めた目で正面のクラスメイトを見据える。

「（これが今、教官のもとで訓練を受ける者のレベル……）」

どこからでも攻撃してくださいと言わんばかりに無防備に迫る打鉄にラウラは思う。

「低すぎる！ こんな奴ら、教官が指導するに値しない！」

その弱さにラウラのプラスチックシオンは溜まる。

直線的にワイヤーブレードを射出するも、その単純な軌道にすらかすつてしまいう体たらく。

こんなものも避けられないのかと、遊ぶようにワイヤーブレードが次々に少女を襲う。横薙ぎに来たかと思えば、次には正面から射るように迫り、それが到達する前に再度横薙ぎのワイヤーが来る。

まともに戦闘をしたことのない、ましてや訓練機に乗る少女には避けるすべなどなく、ただその刃を受け続けるだけであつた。

「やめろー！」

そんな状態に割つて入つたのは織斑一夏であつた。

「(織斑一夏……教官の汚点)」

攻撃を邪魔されたことには何も感じない。ただ抱くのは教官、千冬のIS世界大会の二連続優勝という偉業の達成を妨げたことに対する憎悪のみであつた。

しかし、一夏が拐われなければドイツに千冬が教官としてくることもなかっただろうという指摘は、ここでは無粋であろう。

「やり過ぎだぞー！」

正義感を振りかざす正面の男にラウラは冷ややかな笑みを浮かべた。

「これくらい避けられて当然だ。私はそいつのためを思つてやったまでだ」

「だからつて、こんなになるまで切りつける必要はないはずだ！」

こんなにとは、シールドエネルギーのことであろう。ISが提示するその数値は数パーセントを示している。

「命に支障がないのに、やり過ぎもないだろう」

「なんだと？」

二人の間に険悪なムードが漂う。それはラウラが狙つたものであつた。一夏には放課後対戦を申し込んだにもかかわらず、理由がないからと逃げた。故に挑発を以つて理由を作らせる。それが目的であつた。

しかし、その目論見は邪魔者によつて無に還される。

「見て見て、一夏！ 二刀のビームブレード、なんと柄の方で繋がられたんだよ！ さっき初めて気づいた……つて、あれ？ お邪魔だった？」

ラウラの怒りの矛先は今にも変わりそうである。

三話 何よりも好感度

それでも、守りたい世界があるんだーってできるようになってテンションあがってたんだけど、何この状況？

えーと……多分、ラウラが何かやらかして、一夏がそれを咎めたって感じだと思うんだけど、あつてる？

「やっぱ、俺って不可能を可能にする……」
「何をやっている」

あ、千冬さん来た。

「織斑、貴様は自分のグループを放り出してこんな所で何をしている」

「いや、だって、こいつが……」

「戻れ」

その一言で一夏の言葉は遮られる。その有無を言わさない千冬さんの語氣に一夏は渋々その場を離れる。

「それで？ お前は何をしている」

「あ、篠ノ之グループは模擬戦終了したので、少し遅れているラウラのグループの手伝い

にきました」

「なに？」

その言葉にラウラが怪訝な顔をする。まあ、とっさの思いつきで言っただけだからね。そりやそういう反応になるよね。

「殊勝な心がけだ。だが、次からは教師に報告してから行うようにしろ」

「はい、すいません、織斑先生」

そう言うのと、千冬さんは僕の横を通り過ぎその場を去ろうとする。去り際、「任せただ」と言われたので、なんとも信用されてるんだなあって嬉しくなった。

千冬さんが離れると、ラウラが明らかに嫌そうな顔をする。

「貴様、どういうつもりだ」

「どうもこうも、言葉の通り、手伝いに来たんだよ？」

その答えがお気に召さないのか、やっぱりラウラは不機嫌そうな表情のままである。

「……まあいい。次邪魔をすれば容赦はしない」

？ 何の邪魔だろうか？

ま、それはいいからさっさと始めましょう。

「よし、じゃあ僕と一緒にボーデヴィツヒさんを倒そう！」

「……なんだと？」

「え、う、うん。分かった」

訓練機に駆る多分二組の子と足並みをそろえてラウラに迫る。

飛来するワイヤーブレードを訓練機の子の周りを回りながら弾いていく。順調に近づいて行くと、ラウラはプラズマ刀を展開させ、接近に備える。

「ちっ」

舌打ちが聞こえるくらいまで接近すると、訓練機の子が近接ブレードを振り被る。その隙だらけの胴に来るであろう攻撃を背後から脇に腕を通してビームブレードを振るい止める。あ、二人羽織みたいだね。

無事に振りおろされた刀だが、流石にラウラは当たってくれない。

「おしかったね」

「あ、ありがとう」

そこまでの攻勢が終わると交代させる。

「何がしたいんだ、貴様は」

「え、訓練だよ？　まずは自分も戦えるって自信を付けてもらわないと」

「ふん。そんな甘いやり方で、強くなれるものか」

「えー、そうかな？　そういうラウラも最初は自信とかなかったでしょ？」

「っ！」

ラウラは僕の言葉に反応し、睨みつけてくる。

「壁を見せつけたって意味ないよ。壁の横にある扉に案内してあげるのが教えるってことだと思おうよ?」

うん。僕いい事言ったよね!

『例えがうまくありません』

いつもいつも辛辣な感想をありがとうペイルライダー。感謝で涙が出てきたよ。

「……扉」

ラウラが何かを呟いていた。なんだろう。どうかしたのかな? まさか、僕の言葉に感動していたりして!

『妄想が過ぎますよ』

「もう少し優しくしてくれてもいいんだよ?」

『必要ですか?』

「飴と鞭は基本だからね」

『鞭を肯定するとは氷雨は変態ですね』

「なんで曲解するのさ!?!」

そんなこんなで授業は無事に終わった。

授業が終わってから、千冬さんにドクペをおごってもらったのは秘密だ。

昼休み。

食堂。



「そろそろ仲直りしてもいいころじゃないかな、鈴ちゃん」

「あたしに言われても知らないわよ」

ちなみに今日は二人だけだ。シャルは一夏に射撃の特性の講義を頼まれたから今日は一夏と食べている。

のほほんさんはいつもの子たちと教室を出てた気がする。僕は一目散に二組に行つたからあまり見えていない。

「そういえば、あんた二組で話題になつてたわよ」

「ほんと？ 良い話題？ 悪い話題？」

「半々つてどこかしら」

え、どっちもあるの？

「どっちから聞きたい？」

「じゃあ、良い話からで」

「わかった。良い話はね、ボーデヴィツヒのグループだった子が良い人だったって言つてたわよ」

良い人？

「なんか、一緒に戦ってフォローしてくれて優しかったってさ」

「おおー。なんだかほんとに良い話だった」

「なにそれ」

「いや、僕が普通に褒められることって少ないからビックリして……」

「あんた……」

なんで同情の目を向けてくるんですか、鈴ちゃん。いや、嬉しいけどね。

「で、それを聞いた鈴ちゃんはどう思った？」

「え？」

「僕の好感度上がった？」

「あんた、直球ね」

え、なにかまづかった？ だって、もう僕が鈴ちゃんのこと好きってことはばれてる

んだし、隠すことないよね？

「ま、ちよつと上がったわ」

「いよつしやあああああああああああ！」

「今下がったけど」

「うわあああああああああああ！」

やっちまいましたよお……。

「なんか、そのボーデヴィツヒってどうなのよ。あんたとどっちが問題児？」

なんで僕と比較して聞いてくるのさ。その言い方だと、僕が問題児みたいじゃん。

「僅差で僕かな」

「自覚あったのね……」

だって、今のところラウラは問題あまり起こして無いもん。それに比べて僕は反省文をもう二回も提出してますからね。

「あれでも真面目に授業は受けてるんだよね……千冬さんの時だけ」

「へ〜」

鈴ちゃんは啜ったラーメンを咀嚼し、それを飲み込む。口をもぐもぐと動かす鈴ちゃんには小動物的な愛嬌があるね。もうね、口角が上がるのを抑えられないですよ、はい。

「そういえばさ、あんたも一夏の幼馴染なんですよ？」

「そうだよ」

「そ、その頃の一夏ってさ、ど、どんな感じだった？」

「えー、それを僕に聞くの？ 鈴ちゃん、その精神攻撃はなかなかキツイよ？」

「べ、別にそんなじゃないしっ！ ……て、あんたに言っても意味ないか」

うん。意味ないね。でも堂々とされてもそれはそれで死にたくありません。

「まあ、どうって言っても良くも悪くも一夏だったね」

「ああ、その言葉でもう察したわ」

「あ、でも、剣道をしてる一夏はなかなか格好良かったよ」

その言葉に鈴ちゃんはピクリと反応を示す。

「そうなんだ。写真とかある？」

「うーん。僕の端末には多分箒のやつしかないと思うけどなあ」

その言葉に鈴ちゃんはなんととも言えない顔をする。

「え、どうかした？」

「いや、べ、べつに？」

何故疑問形？

「言いたい事があるなら遠慮しないで良いよ？　僕は鈴ちゃんの言うことなら何でも受

けとめるから」

「そう？　じゃあ、遠慮しないで言うけど、あんたシスコン？」

「え？　いや、そんなことないけど？」

どうしてそんな疑問が上がってきたのだろうか？　でも僕の答えに鈴ちゃんはなん

だか納得していない様子。

「そんなにシスコンに見えるの？」

「違うなら良いけどね。携帯に妹の写真しかないってのは、そう思われても仕方ないんじゃない?」

言われてみればほんとにシスコンみたいだ。

「けど、家族の写真を持つてるだけだし、可笑しくないとと思うんだけどなあ……」

「ま、そういう感情がないなら普通よね」

「うん。……ていうか、そういう感情は鈴ちゃんに向いてるって知ってるでしょ?」

「あんた、最近開き直り過ぎじゃない……?」

隠すことでもないからね。

「だから一緒に居て気が楽つてのもあるけどね」

「おお、なかなか良い印象を与えてるのかな?」

あれ? でも一緒に居て気が楽つて言うのはそういう恋愛系の漫画では良い友達ま

でしか行かないような気が……。

うん。気のせいだよ。大丈夫大丈夫、前進してるはず……。

そんな疑問が頭をよぎった、昼休みであった。

「あ、そうだ。あんた、明日空いてる？」

明日といえば、土曜日だね。暇ですとも。だって、友達少ないですからね！ ああ、涙が……。

「うん。全然大丈夫だよ」

トーナメントに向けての特訓かな？

「じゃあ、買い物付き合っつてよ」

「うん、いいよ」

……ん、買い物？

「うおええええええええええええええええええええええ!!」

「うるさいわよ」

ぺしり、と頭をたたかれる。

「か、買い物!? デート!?」

「ばっ! ち、違うわよ、ただの荷物持ちよ!」

あ、ああ。なんだ、荷物持ちね、うん。そうだと思ってましたとも、はい。

「こっちには必要最低限のものしか持つてこなかったから、色々足りなくなってきたのよ」

「うん。そういうことなら力になるよ！」

そういうことじゃなくても喜んでお伴するけどね。

「時間はまた連絡するわね」

「うん。ああ、今から楽しみだよ！」

そんな僕らに迫る影が一つ。

「あ、千冬さん」

「校内では織斑先生だ、と言いたいが、今はいい」

どうやら出席簿による頭部損傷は免れた模様。でも、なんでだろう？

「個人的な頼みがある」

「え、千冬さんからですか？ 珍しいですね」

そう、珍しいだけに千冬さんの頼みというのは面倒なことが多いのだ。

「なに、今回はそこまで面倒な頼みではない」

「なぜ心を読めるのか」

「あんたも同じこと考えてたのね」

そっか、鈴ちゃんも千冬さんと馴染みがあるもんね。

「それで、僕らに何をしてほしいんですか？」

「ああ、こいつを買い物に連れて行ってやってほしい」

こいつと千冬さんが言うと、千冬さんの後ろから銀髪のクラスメイトが現れた。
「…………ちっ」

ラウラは僕の顔を見るなり舌打ちした。僕何かしたっけ？

「ええと、よろしくね」

「……………」

こ、これは手放しに楽しめない買い物になりそうだぞ……。

四話 セクハラ王は伊達じゃない

自室。

明日は鈴ちゃんと買い物。

いや、すごく楽しみだね。どんな服を着ていこうかな？ て、僕着ていく服がないよ！

生前からそうだけど、ファッションなんて気にしなかったし、お母さんが買ってきた服を着て過ごしてたから服を選ぶって言う行為すらしたことが……。

「これはまずいよ」

「笑顔になったり、絶望した顔になったり忙しそうだね。何かあったの？」

「あ、シャル」

一夏と共に特訓してたはずだけど、もう帰ってきてたんだね。

「特訓は終わったの？」

「うん。僕は先に帰ってきたんだ。一夏はまだやってるんじゃないかな？」

「ああ、瞬時加速の練習？」

確かにあれは難しい部類ではある。というよりも、あれは力技であるが故に制御が難

しいという感じで、加速だけならできるけど、それを生かすのにそれなりの技術がいるんだよね。

「うん。僕も付き合ってやってみたけど、結構難しいね」
「だよな」

そう言うと、シャルは鞆から着替えを取り出し、シャワールームに消えていく。あ、シャルは特訓の後で疲れてるだろうし、飲み物でも用意してあげようかな。

冷蔵庫に向かう。中には冷えた麦茶があるけど、これで良いかな？

コップに注いで机に置く。自分の分を飲み干して追加で注ぐ。それを机に置いて僕はまた思案の続きをした。

着て行く服はもう制服でいいや。学生の特権だよな。……いや待てよ。それはあからさまに襲って下さいと言わんばかりじゃないか？ 話題の男性IS操縦者……誘拐すれば利用価値は腐るほどある。

僕だけならIS起動して簡単に撃退できるけど、明日は鈴ちゃんやラウラもいる。鈴ちゃんに迷惑をかけるのは嫌だし、ラウラに至っては誘拐犯の方の身を案じる必要性も感じてしまうよ。

「うん。制服は無しだ」

でも待てよ。僕は制服じゃなくても、向こうは制服で来るかもしれない。ラウラなん

て私服で来るイメージがないし……となると調和を乱さないように制服の方がいいのでは？

私服の僕の横に制服の女子学生……犯罪臭がするのはなぜだろう。これは通報待たないだね！

「となると取れる方法は一つだけか……」

結論が出たあたりでシャルがシャワーを終え、出てくる。この後も食堂に出るので、シャルはまだコルセットを巻いている。

にも関わらず、その湿った髪からは艶やかな色気が溢れている。やっぱりこれを男と言い張るのは無茶があつたんじゃないですか、デユノア社さん。

「あ、お茶入れてくれたんだ。ありがとう、氷雨」

「いやいや、ただ冷蔵庫のを注いだだけだからお礼を言われるようなことじゃないよ」

シャルはコップを取り、口を付ける。……って、あ。

「おいしい」

一息をついてシャルはコップを机に置く。

「シャル、ごめん」

「へ？ いきなりどうしたの、氷雨？」

不思議そうに小首をかしげるシャル。

「そつちは僕が飲んだ方なんだ。あ、でも入れ直してあるから冷たいとは思うよ」
「え……。わ、あわわわわ」

一瞬思考が止まったかと思えば、一気に顔を赤くし、手をパタパタしながら慌てだすシャル。

「え、ええと。ええと！ は、はい、氷雨！ こ、これ、返すね！」

「ええ!？」

か、返すつて、これを僕にどうしろと？

よく分からないので残りを飲み干してみる。

「ど、どう!？」

「えつと、どうつていわれても……麦茶だね?」

「え、あ、そ、そうだね！ 麦茶だよね！」

ど、どうしたんでしょうか、シャルさん。

「取りあえず、もう一杯飲んで落ち着いたら?」

「そ、そうだね！」

そう言うつと、何故か空の方のコップに麦茶を注ぎだすシャル。いや、ちよつと待つて、

あ、そういうことか！

「シャル、ストツプ！」

その言葉が届く前に、シャルはコップに口を付け、グラスを傾ける。

「ふう。……………あ」

何かに気づいたかと思えば、シャルは重力に従いベッドに倒れ込む。

「シャル？ シャルううううう！」

シャルは一夏が帰ってくる頃にはいつもどおりに戻ったという。



食堂。

机には僕とシャルのみ。他の人は食器を片付けに行っている。混んでいる食堂では食器を返すのも一苦労だけど、その中で一足先に帰ってこれたのが僕とシャルだったわけ。

しかし、机に広がるは微妙な空気。自室での一件でちよつとシャルの僕に対する態度がぎこちない。

まあ、それは僕の不徳の致すところであるので仕方ないんじゃないかと思うけど、周りの女子、主に一組のクラスメイト達に、「何かあった!？」「遂に篠ノ之×デュノアかな!？」みたいな勘違いをされている現状は僕にもシャルにも利がない。

だからつてわけじゃないけど、関係改善のために僕は明日の買い物にシャルも誘ってみることにした。

「え、買い物？」

「うん。街のショッピングモールに出ようと思うんだけど、どうかな？」

まあ、断られたら凹んで今日は枕を濡らしますけどね。

「い、行く。行くよー！」

わ、すごい食い付いてくれた。良かった。ふふふ、ここで一夏なら何か買いたいものがあるんだろうなって思考に至るだろうけど、僕は違いのさ！

ズバリ、シャルは僕に惚れてるね！

『……………』

あの、ペイルライダーさん？ 突っ込んでくれないと僕が痛い人みたいじゃないですか。

『一度、地獄を見てきたらよいかと』

なんで!?

『シャルが可哀想です。私も報われません』

？ 本当にどういう意味ですか、ペイルライダーさん。

『よくよく考えれば良いと思われませう』

なんだろうか。なにかの謎かけかな？

「あ、そうだ。僕はちよつと用事があるから先に戻っててね」

「う、うん。分かった！」

そんな僕らの元に他の三人が帰ってくる。

「ん、氷雨、どっか行くのか？」

「うん。ちよつと用事があつてね」

「了解。じゃ、先帰つてお茶でも用意しておくぜ」

「ありがとう。じゃあ、箒にセシリア、お休み」

「ああ、お休み」

「お休みなさい」

そう挨拶を交わし、僕は千冬さんの元へ向かった。



朝。

シャルが目を覚ました時にはすでに氷雨の姿はなかった。彼女の枕元にはメモ書きがあり、そこには先に待ち合わせ場所に行っているという旨が書かれていた。

「ふ、ふつ、買い物かあ」

私服……で行きたいところではあるが、生憎男物の私服は持ちこんできておらず、女物で着飾るわけにもいかないので、シャルは少し不潔ではあるが制服に身を包む。

「(二人で買い物……デートみたいだ)」

そんなことを考え、思わず口角が上がっているのを感じる。しかし、同時にシャルの頭にあることがよぎる。

「(あれ? でも、氷雨は鈴の事が好きで、なのに僕と買い物……?)」

そう。氷雨は鈴に振られてもなお、鈴に好意を抱き続けている。これは日頃の行動を見ているシャルからすれば自明である。

その前提があるので、氷雨との買い物、なんだか疑わしくも思えてしまうのである。

「もしかして……」

その懸念が杞憂であることを願いつつ、支度するシャルであった。



正門前。

「……………」

「おはよう、シャルル」

杞憂で終わってくれないのが氷雨クオリティ。シャルは少し予想できていただけに、なんとも引きつった笑顔を浮かべていた。

「おはよう、鈴、ボーデヴィツヒさん」

鈴は予想できたが、そこにラウラがいたことは想定外であった。

「あのさ、鈴。どうしてボーデヴィツヒさんもいるの?」

「あれ、聞いてないの？ 千冬さんに頼まれたのよ。なんでか分かんないけど、千冬さんに言われたら断れないじゃない？」

「ああ、確かに」

千冬が人に頼みごとをする姿を容易に思いつかなかったシャルだが、それが命令とほぼ同義であるなら難なく想像する事ができた。

「それで、肝心のあいつはどうしたのよ」

「え、先に来てたんじゃないの？ 僕が出た時にはもういなかったよ？」

そう。ここには先に出たはずの氷雨の姿がない。待ち合わせの時間にはまだなっていないので、咎めるほどではないのだが、シャルは不思議に思った。

そんなことを話していると、校舎の中から駆けてくる音が聞こえる。

「お、お待たせ〜！」

声は氷雨である。で、あるのだが……。

「あんた……」

「氷雨……」

「……」

その服装は紛れもなく、女子用の制服であり、頭にはウィッグが付けられ、足は黒タイツで覆われ、その童顔が効してか、災いしてか、パツと見はそのままの女子であった。

「どうかかな？　我ながら上出来だと思っただけど！」

しばしの沈黙。その後、三人はアイコンタクトをし、踵を返し、駅の方に歩き出す。

「さ、行くわよ」

「ああ」

「そうだね」

「え？　ちよ、なんで？　無視が一番辛いんだってえええええ！」

出だしから不安な買い物が始まる。

五話 買い物獅子奮迅

モール。

最初は散々な酷評をされたものの、持ち前のタフな精神力で何とか乗り切った僕は千冬さんにしてもらった化粧が落ちないように涙を堪えるのに必死だった。あれ、乗り切れてないよね？

「着いたけど、結構大きいわね」

僕らの目の前には見上げるほどの建物が鎮座している。正面をガラス張りにされたそれはなんともヒートアイランド現象に貢献してそうな見た目だった。

「だね。ここだけで大体のものが揃うようになってるからね」

日用雑貨から銃火器まで、何でもござれだよ。……あ、ごめん。誇張しました。

「それで、まずはどこから行く？」

「あたしは服が見たかったのよね。私服ほとんど持つてこなかったからさ」

「確かに来た時ポストンバッグ一つだったもんね」

「そうそう。だから他の雑貨もみたいけど、それは後にするわ」

「了解」

そんなやり取りをする僕をシャルがまじまじと見ている。

「ど、どうしたの？」

「え、いや、やっぱりまだ慣れないな、と思ってね」

「似合っていないかな？」

「似合つてて、あんたは嬉しいわけ？」

的確な質問だ。僕的には、ネタとして受け入れてもらえればそれで良いけど。

「ま、あんたの女装はどうでもいいから、買い物に付き合つてよね」

「任されましたとも！」

こうして僕は婦人服売り場へと移動した。



「これはどう？」

「似合ってるよ！」

鈴ちゃんは手に取った服を自分の身体の前で合わせ、示してくる。可愛過ぎて鼻血が出そうだけど我慢せねば。

「こっちは？」

「可愛いよ！」

なんとも、これは良い！ 何が良いつて、鈴ちゃんが可愛い！

「……………これは?」

「キュートだよ!」

その服がなくてもキュートだよ! あ、ちがう。そう言う意味じゃない。だからペイルライダーさん、そのコール一步手前の110を止めて。

「……………あんた、適当に言つてない?」

「ええっ!」

そんな心外だよ! 僕はありのままの言葉しか言つてないよ! 大体、ニュートンの第四法則にも、鈴ちゃんは如何なる外的要因によらず可愛いつてあるし!

「さつきから似合うしか言つてないじゃん」

「だって、実際に合つてるんだから仕方ないでしょ?」

鈴ちゃんのセンスが良いのも一端を担っているんだからね。

「それに、何を着ても鈴ちゃんは鈴ちゃんだから、可愛くないわけがないしね!」

「っ! ……っ!」

顔を紅くして唸り声を上げる鈴ちゃん。か、か……。

「可愛いつ!」

「あんたじゃ、役に立たないわ! シャル、ちよつと付き合つてよ」

「え、僕? うん、いいけど……」

シャルが僕を窺うように視線を向けてくる。

「いつてらっしゃい」

沈んだ声でシャルを見送る。

「い、いつてくるね」

そう言つて去つていく鈴ちやんとシャル。何故だ、何故鈴ちやんは怒つてしまったんだ！ほんとに、何がいけなかつたんだらうか。女の子の買物物のアドバイスなんて、そもそも男にできるものではなかつたということか。

「あ、今僕女だった」

『違います』

だよね。こうなつてしまつては仕方がない。次、挽回できるようになつていればいいのさ。だから、次は心まで女装すればいいのさ！

「じゃ、ラウラの買物でもしようか」

「ああ。ついてこい」

「うん！……あれ？」

何故か僕の方がエスコートされる形になりました。



下着売り場。

連れてこられたのは女性もの下着が並ぶ、一角であった。

「ラウラ、僕は何か悪いことをしましたか？」

「何を言っている。買い物に付き合おうと言ったのはお前だろう」

そうなんだけどき。こんな場所に連れ込まれるなんて、罰じやなきやなんなのさ。うう、目のやり場に困る。

「傍から見たら変態だよ」

「その点は心配ないだろう。今のお前は女だ」

……あ、ほんとだ。

「じゃあ、何も怖くないね！」

「うむ」

『……』

社会から弾糾される心配がないのであれば、僕を束縛するものなど何も無いね。

『倫理』

ペイルライダーがぼそりと何か言っただけ、あまり聞こえないね。こんな気持ち初めて、もう何も怖くない！

というわけなので、とことん買い物に付き合っただけようじゃないか、ラウラ。

「というか、なんで下着？」

「軍の支給だけでは流石に数が足りん」

へえ、軍の支給品ね。

「ちなみにどんな色？」

「全て白だが？」

清潔感漂う良い色だよ。ラウラのイメージカラーは黒だけど、そういうのもギャップがあつていいと思うよ。あ、でも、見た目的にはあまりギャップはないか。逆に黒の方がギャップ？ どちらを選んでも見方によつてギャップ萌えを生み出すあたり、流石人気キャラだね。

「それで、今日はどんなのを買うの？」

「む？ 軍のものと同型のものだが？」

え、そんな保守的ななの？

「ここは攻めようよ」

「攻める……だと？」

「そうだよ！ そんな保守的な買い物、ラウラらしくないよ！」

保守的という言葉に反応を示したラウラ。

「ふん。お前に乗せられるのは気に食わんが、良いだろう。その攻める買い物とやらをやつてやる」

「おお、それでこそラウラだね！　じゃあ、まずその黒とかど——」

「なにやってんのよ!!」

「なにしてるの!?!」

後方から二人の怒声と共にウィッグの上から脳天を貫く手刀の衝撃が僕を襲った。あ、なんだろう。綺麗な河が見える……。

「はっ！　危うくトリップするところだったよ」

「そのまま行けばよかつたのに」

物騒な事言わないでしょ、鈴ちゃん。

「ふむ。黒か……」

その後は、床に直に正座させられ、鈴ちゃんとシャルにお説教をくらいました。

うん、弁明のしようがなかったね！



おもちゃ屋。

呆れた鈴ちゃんとシャルは二人で日用雑貨を見に行つてしまいました。何故だ！
鈴ちゃんとのデートのはずが、ほとんど別行動なんだけど!?!

原因は僕だけだね。いや、女装したらさ、妙なテンションになっちゃつてね。

『普段と変わらない気もしますが』

いやいや、まさかそんなわけないよ。普段からこのテンションだったら可笑しな奴だよ。え、ほんとにいつもこんな感じ？ まじかあ……。

「ラウラはついて行かなくてよかったの？」

「日用品の類は軍の支給品で事足りている」

「そうなんだ」

あれ？ だったら別にここまで買い物に来る必要ないような気もするけど……。あれかな、千冬さんはなにか別の目的があるのかな？

「あ、別に退屈だったら外で待ってても良いよ？」

「いや、いい」

そう言うと、ラウラは僕の後ろをついてくる。あ、この感じ懐かしいな。小さい頃の箒もこんな感じで後ろをついてきてたよ。

「それで、何を買うつもりだ？」

「ん？ プラモだよ」

「プラモ？」

あれ、ラウラは知らないのかな。

「プラモデルって言って、プラスチックの部品を組み合わせて自分で作る模型だよ」

「ふん、そんな子供だましを買うのか」

馬鹿にしたような眼で僕を見るラウラ。そんな事言っているのかな？ 絶対ラウラは食い付くと思うけどな。」

「まあ、まずは自分の目で見てから、そういうことを言ってもらおうかな？」
「いいだろう。だが、見たところで私の意見は変わら——」

“IS”のプラモコーナーにたどり着くとラウラは目を輝かせながら一つのパツケージをまじまじと見つめていた。

そのISの名は『暮桜』

そりゃあ、ラウラも食い付くでしょうね。

「子供だまし？」

「貴様、教官を愚弄する気か」

そ、そんな気はないから！ だ、だからその物騒な銃器を早くしまつて下さい。

「ふん」

鼻を鳴らし、銃をしまうラウラ。自分で言っていたことなのに……。

「しかし、これは玩具と侮れない精密さだな。……まさか、我が軍の機体も！」

「うんあるね」

ラウラのシユバルツェア・レーゲンはないけど、レーゲン系の第二世代機は出ている。くつ。どこで機密が漏れた……。まさか、内部にスパイが！」

「いや、公式で発表された機体しかないよ」

流石に軍の機密なんて公表したら、会社は潰されるからね。

「それに精密だけど、これ外装のデータだけで作られているから技術の流出は一切ないよ」

「そ、そうか。なら安心だな」

玩具にそんな心配する人、初めて見たよ。

一見は軍人氣質で堅いラウラだけど、暮桜のパッケージを嬉々として眺める姿は年相応……ではないかな、見かけ相応であるように思えた。

「お前はどれを買うのだ？」

「僕？ 僕はね」

ラウラの横を抜け、ある箱を手に取る。

「これだよ！」

「ああ、中国の甲龍か」

「うん。先週やっと発売されたんだよね。色々あつて買いに行けなかったけど、ようや

く手に入れたんだ!」

でも、このプラモの欠点は搭乗者が鈴ちゃんじゃないってとこだね。肖像権がどうとかで、モブ操縦者に変更されている。そこを拘らなきや意味ないだろ!!

「ふむ。なかなかプラモデルというのも面白いものだな」

「でしょ?」

なんか妙な所で意気投合した僕とラウラでした。

『何故、蒼騎士は買わないのですか?』

「え、も、もう二十個も作ってるからだけど……」

『なぜ蒼騎士も買わないのですか?』

「だ、だから、すでに二じゅ……」

『なぜ』

「買います」

定価5700円の出費が増えました。

六話 氷雨、ナンパされる

喫茶店。

ラウラとプラモを買い終え、僕らは鈴ちゃん、シャルと合流する。時間を見ると、昼食にするのにちょうどいい時間だったから、僕がそう提案し、お昼にすることになった。ここで事前に調べておいたオシヤレなフレンチなんかをごちそうできたら、かつこいいんだけど、舞い上がり過ぎてそこまで手が回らなかつたんだよね。

だから、僕らはモール内にある喫茶店に入った。フードコートは今の時間、人が凄いからね。男に見えないけど、一応男装のままのシャルもいることだし、こっちの方が安心なんだよね。

「サンドイッチおいしいね!」

サンドイッチ……サンドウィッチと書くべきか迷いどころだけど、僕の発音的にはサ
ンドイッチなんだよね。

「あんた、本当に女の子みたいね」

鈴ちゃんが僕を見てそう呟く。

「今更どうしたの?」

「なんでサンドイッチをちよつとずつ頬張つてるのよ」

なんでてつて言われても、口が小さいからなんだけど。あ、そうか。その食べ方は女子によく見られるよね！ 大口で食べられると、なんだか馬鹿な男の理想から外れちゃうもんね。

「なんか、氷雨の女装に慣れてきた自分が怖いよ、僕」

「諜報に使えるな」

まあ、これ以降女装なんてする気もないから大丈夫だよ、シャル。あと、ラウラ。何気に怖いからやめて。

「まあ、でも、この僕の溢れんばかりの漢気があるから、やっぱりばれちゃうよね」

「[[[……]]」

「あれ!？」

『漢気……:そのような現象は存在しません』

うん、別に物理的性質を持つてるわけじゃないから存在しないけどさ、そういうことじゃないんですよ。

『いえ、理解したうえで、氷雨にはそれが無いと言っています』

「それはひどい!」

「[[[?]]」

僕の今までの行動を見てみてよ！

不意打ちでベクターキャノンを撃つたり、

セクハラしたり、されたり、

告白して振られて失神するまで凹んだり……

「漢……気？」

「さつきから貴様は一人で何を言っている」

そんな指摘をラウラにされて、自分が声に出していたことに気づかされる。

「そう、それなのよね」

「へ？」

鈴ちゃんが僕を見て、何かを思い出したようだ。

「この前さ、あんたに二組で良い話と悪い話を聞いたって言ったじゃない？」

「うん」

三話くらい前にそんな話をしてたよね。

「あの悪い話って言うのが、それ」

「どれ？」

「独り言よ」

独り言？ うん。僕はあまり独り言はしないタイプだと思うんだけど。あ、たまに

発狂はするけどね。

「なんか、訓練の時も誰かと話しているような風の独り言をよくしてて、なんだか気持ち悪かったって言われてたわよ」

「ぐはっ!」

「ひ、氷雨!?!」

「安心しろ。それはタバスコだ」

「タバスコ?!?!」

じよ、女子に気持ち悪いと言われていたとは……鈴ちゃんに言われたわけじゃないからダメージは少ないけど、それでも辛うじて致命傷だよ。

「ま、あたしはあんたがおかしいことはもう知ってたから別にどうってことはないけどさ」

「ちよつと待って、聞き流せない言葉がまじってた気がするんだけど」

鈴ちゃんにもおかしいやつって思われてるの、僕? 詰んでるじゃないですか。

「いやいや、別に独り言言ってるわけじゃないんだよ? 実はさ……」

『氷雨、それは言わないでください』

そこまで言って、ペイルライダーに止められる。そうだよ。これ、ばれたらペイルライダー研究所に持っていかれちゃうかもしれないしね。

「実は……なに？」

シャルが続きを促す。でも、ごめんね。そこから先は言えないんだ。鈴ちゃんに可笑しな奴って思われても、流石にペイルライダーと別れるのはごめんだからね。

「実は……もう一人、僕の中には別の人格がいるんだ」

静まり返るテーブル。背中に伝わる嫌な汗。

「ワナ……か」

「どう見ても自爆だな」

ラウラ、冷静な分析ありがとう。

「ふう」

一息吐く。なんだか、身体が軽くなった気がする。

「屋上にはどう行くんだろう」

「氷雨!？」

しがみついてシャルが僕を止めてくれたおかげで、なんとか無事に昼食を終えたのだった。



昼食後。

「昼食を終えると、氷雨は三人に「トイレに行ってくるからちよつと待っていて」と言

い残し、パタパタと走り去っていった。

その後ろ姿に、一同は一瞬彼女が彼であることを忘れてしまったという。

「ちよつと待って、あいつどつちに入るつもりなのかしら」

「どつちって……あつ」

現在、見た目はどう見ても女子である氷雨。これならば自然に女子トイレを使うことはできるが、それは犯罪であろう。なら逆に男子トイレに入るのかと問われると、それはそれで問題があるようにも思える。

「ま、あいつのことだから、恥ずかしげもなく男の方を使うと思うけどね」

「あはは」

そう笑うシャル。彼女は現在の氷雨とほぼ同じ立場であるが、使用するのはもちろん男用である。

そんなシャルの顔を鈴はじつと見つめる。それに気づいたシャルは鈴に問いかけた。

「どうかしたの?」

「いや、あんたって見れば見るほど男に見えないわね」

核心をついてくる鈴の言葉にシャルは身体をビクリと震わし、たじろぐ。その反応を見て鈴はなにやら確信したようだ。

「やっぱり、あんた女でしょ?」

「うっ」

そう声が無れた後にシャルはすぐに否定しなかつたことに、しまったと後悔した。

「な、なに言つてるのさ。僕は男だよ」

「別に私はどつちでもいいんだけどさ。その事、あの二人は気づいてるでしょ？」

もはや鈴の中で答えは出てしまつていたので、シャルは何を言つても覆すことはできないだろうと、諦めることにした。

「そうだね。二人にはもう言つたよ」

「なら、あいつらが黙つてるんだから、あたしがとやかく言うことはないわね」

「え」

何かリアクションがあるものとばかり思つていたシャルはその鈴のあっさりとした返しに、肩すかしを食らつたような顔になる。

「それでいいの？」

「なに？ 告げ口してほしいわけ？」

「そ、そう言うわけじゃないけど……！」

鈴はシャルの反応に笑う。

「あいつらが黙つているつてことは、何か理由があるつてことでしょ？」

鈴がそう言いきれぬ根拠は一夏と、ここ最近知り合つたばかりではあるが、氷雨、そ

の二人の性格を知っているからであり、そして信頼しているからである。

「だから、あたしも黙ってるわよ」

「り、鈴。……ありがとう」

「お礼なんていらぬわよ。言うなら、あの二人にでしょ」

なんとも穏やかな雰囲気の流れの中、二人の会話をずっと聞いていた人物がもう一人いたことに鈴が気付く。

「……あんたはどうなのよ」

その問いは今までこちらを見ているだけであつたラウラに向けられたものであつた。

「ふん、心底どうでもいい」

言い方は悪いが、それは黙っているという意味であると、鈴は理解した。

「その程度の事がドイツの諜報部にばれないとでも思っていたのか」

「え？ し、知ってたの？」

「当たり前だ」

ラウラは軍からその情報を事前に得ていた。故に、シャルが男性操縦者の搭乗ISの情報を盗まないように、氷雨や一夏と共に特訓をする場面に現れたのだ。

しかし、ラウラが何かをする前に、シャルのISに組み込まれていたプログラムは氷雨の手によって解除されたいた。

「だが、公式で男と発表されてない以上、害はないものと判断し放置していたまでだ」
「え、公式で発表されてないの？」

それはシャルも初耳だったようで、確かに公式の場に男装で出た覚えはなかったが、まさかIS学園の中だけであつたことにシャルは驚きを隠せなかつた。

だが、それもそうである。いきなり男性操縦者を代表候補生にしたのでは、ただいたずらに国内を混乱させるだけなのである。

目的がイレギュラーである一夏と氷雨との接触であれば、国内に発表する必要はない。

その情報を聞き、少し救われたような気がしたシャルであつた。

と、そんな三人に近付いてくる影があつた。

氷雨かと思ひ、シャルや鈴がそちらを向くと、そこに居たのは女装姿の変態ではなく、少しチャラそうな青年たちであつた。

「ちよつと良いかな？」

青年たちの一人が、鈴たちに声をかけた。



用事は終わったしさして戻ろうと思つたら、なんだか鈴ちゃんたちに男の人たちが接触してよ。

あ、ナンパかな？

そりやあ、鈴ちやんだもんね！ あの可愛い鈴ちやんがそこに居るなら思わず理性を飛ばして声をかけてしまうのが、悲しきかな、男って言うものだよね。

いや、流石鈴ちやんだね。

それに、鈴ちやんだけじゃなくて、シャルやラウラもいるしね。ラウラに声をかけるのはちよつと警察との戦いだと思うけど、銀髪、眼帯なんてマニア受けする容姿を持つていたら仕方がないね。

「ねえ、君」

それにしても、あの男たち、僕の鈴ちやんに何気安く声かけてるわけ？ ハイスラでぼこるよ？

「あれ、聞こえてない？ ねえ、今ちよつと時間ある？」

あ、僕に話しかけてるの？

「なんですか？」

声の主の方に振り向き、返事を返す。声をかけてきたのは僕よりちよつと年上の男の人かな？

「君、一人？ 暇なら一緒に遊ばない？」

「え？ え？」

なんだこれ。あ、囲まれちゃった。僕より背が高いのも相まって威圧感が半端ないね。

「お茶でもしようよ。あつちに喫茶店もあるしさ」

あ、これナンパだ。女尊男卑のこの世界でよくやるね。若者の間じゃあ、あまりそういう風潮はないんだろうか？ セシリアは……まあ、特殊な部類ではあるよね。IS学園の女の子たちは教育の中で偏つちやうだろうし、全体で見たらそういう風潮はまだ少数なのかな？

「えと、ごめんなさい。友人と来てるので……」

「そう？　じゃあ、その子たちも呼んでみんなまで遊ぼうよ」

「カラオケ行かない？　俺、結構うまいんだぜ？」

押し強い人たちだね。そうまでして僕をどうしたいんだろう……。

「はっ！」

「？　どうかしたの？」

大体、普通は女装の男にわざわざナンパなんてするわけがない。となると、考えられる理由は、男性操縦者を欲しがる企業からの刺客なんじゃないか？

「そ、その手には乗らないよー！」

「ど、どの手？」

「やべ、俺が実は歌下手なのばれたのか」

「お前、話し方からして音痴だからな」

「まじか。だからこの誘い文句勝率0なのかよ」

『いえ、それはあなたの顔のせいでは？』

「うわっ！ グサツときた。薄々気づいてただけにグサツときた」

「てか、誰が言ったんだよ、今の。少しは遠慮してやれよ」

ペイルライダーの毒舌は僕限定じゃなかったんだね。ちよつと安心したよ。

「くそつ、こんなところにいられるか。私は自分の部屋に戻るぞー！」

そう言つて包囲を突破して走り出す。

「ああ、死亡フラグ立てて行っちゃった」

後方から聞こえる声は遠ざかる一方で、追いかけてくる気配はなかった。よ、よかつた。

七話 涙は髪飾りと共に

鈴ちゃんたちの元へたどり着くと先ほどまで鈴ちゃんの周りに居た軟派野郎たちはいなくなっていた。きつと自身の身の程を弁えて、去っていったことだろう。鈴ちゃんをナンパしようなんて、百億兆万年早いよ。

僕なんて一万年と二千年前から愛してるのにね。まさに、前世からの愛ですよ。

「遅くなってごめんね」

「ほんと、何してたらこんな遅くなるのよ」

「な、ナニ!？」

シャル？

「ちよ、ちよつと、シャルル！ あたしはそう言う意味で言ったわけじゃないわよ！」

「そ、そうだよね！」

「？ 何をしてたってわけじゃないけど、ちよつとナンパに捕まっちゃって、それで遅くなっちゃった」

「はあ!？」

「ええ!？」

鈴ちゃんとシャルが同時に驚く。まあ、確かにビックリするよね。このご時世にナンパなんてさ。

「女尊男卑の今じゃ珍しいよね」

「いや、あんた。珍しいも何も、絶滅危惧でしょ、それ」

「もう氷雨は女の子なんだね」

「いやいや、シャルル。それはいったいどういうことですか……」

僕は男ですから。

「というか、鈴ちゃんたちもさつきナンパされてたよね？」

「されてないけど？」

あれ？　じゃあ、さつき僕が見た男たちはなんだったの？

「あ、もしかしてさつきの人たちのこと？　あの人たちはお店の場所を聞いてきたただだよ」

「え、なんで鈴ちゃんたちに？」

「さあ？　IS学園の学生ならこの辺のこと詳しいと思ったのかもね」

詳しいのかな？　あ、でも確かに学園から買い物となるとこの辺が一番便利だし、みんなこの辺りに来るかもね。

「で、なんであたしたちはナンパされなくて、あんたはナンパされてるのよ」

鈴ちゃんがジト目で睨んでくる。ああ、睨まれてるのに何故か胸がキュンと来るのはどうしてだろう。

『頭がおかしいからでは?』

的確な解答ありがとう! その通りだから何とも言い返せないね!

「ぼ、僕の方が可愛いからかな、なんちゃ……て」

ああ、凄く睨まれてる。いやいや、そんなこと微塵も思っていないからね!

「冗談に決まってるじゃないですか、鈴ちゃん。僕は鈴ちゃんが、世界で! 一番! 誰よりも! なによりも! 可愛いと思ってるよ!」

「うるさいわよ!」

痛い! す、脛を蹴られた。かの有名な武蔵坊弁慶ですらその部位は痛がってたのに……。

「ご、ごめんなさい」

「あんたはいつもいつも大声で恥ずかしい事言いききなよ!」

顔を真っ赤にして僕を責める鈴ちゃん。鈴ちゃんの事となると歯止めが効かなくて。

でもこれが嘘偽りのない僕の気持なので、遮って気持ちを隠すのもなんだか嫌だからまた迷惑かけちゃうかもね。

「お詫びってわけじゃないけど、これ」

そう言つて手渡すのはちよつとした包装紙に包まれた長方形の箱。

「……なにこれ？」

「えと、ぷ、プレゼントです」

さつきはトイレに行くつて言つたけど、実は嘘で、本当はちよつと買い物に行つてたんだよね。そのうちの一つがこれ。

鈴ちゃんはなんのプレゼントなんだろうと少し首をかしげつつも受け取つてくれた。

「開けていいの？」

「うん、ちゃんとレシートももらつてるから大丈夫だよ」

万引きと間違えられることはないよ！

「その心配をしてるわけじゃないけどね。まあ、あんたらしいか」

？ 何が僕らしいんだろうか。

「これ、ネックレス……？」

「うん、似合うかなつて思つて」

光を反射しキラキラと光るそれはより一層に鈴ちゃんの魅力を増させることだろうね。僕のセンスを総動員して選んだものだから、多少なりともよいものだと思う。ただ、値段を見て思わず声が漏れちゃつたけどね。

「あ、これ、ロケットじゃない」

「え、ロケット?」

いきなり大気圏を飛び出しちゃうのか。確かにISはそういう用途で出来てるけど、なんで今?

「たぶん氷雨の考えているのはRocketだと思うけど、鈴が言っているのはIoc ketだからね」

「ん?」

ちよつと待って、日本人にその発音の違いは理解できないんですよ。ええと、上顎に舌を付けるのはどっちだっけ……。

「ロケットペンダント、この先についてるこれに写真を入れる奴よ」

「ああ、よく戦いの前に写真を見て、『俺、この戦いが終わったら結婚するんだ』って言うやつでしょ?」

「それはよく言うの?」

鈴ちゃんが僕の冗談に一つ息をついて、僕の方に視線を向けた。

「な、なに?」

「ありがとう」

……え?

「結構高いでしょ、これ。本当なら遠慮するところだけど、もう買っちゃってるし。だか

ら、ありがとね」

そう言つて微笑む鈴ちゃん。その笑顔は紛れもなく僕自身に向けられたものだ。そんな不意打ちの笑顔に僕は……。

「……………」

普通に照れちゃいましたとき。

「なに顔真つ赤にしてんのよ」

そう言つて、正面の鈴ちゃんは笑う。そんな笑顔も直視できないくらい、僕は柄にもなく照れちゃいました。えへへ。

◇・◇◇

顔を赤く染め、えへへと照れながら笑う氷雨を横から見ているシャルは……

「ああ、もう可愛いなあ、氷雨は」

内心にやけそうなのを頑張つて自重していた。

女装も相まって、その乙女のような行動に更なる補正がかかっているのだが、それに加えシャルの中でもう一つのフィルターがその画像を彩っているが故にこんな状況に陥っているのである。

「(はあ、あれを僕に向けてくれたらいいのになあ……)」

最近の氷雨は鈴と仲良くなったのもあつて、シャルと一緒に居る時間が少なくなつた

気がしている。

実際、少なくともなっているのだが、元々一日中一緒だったのが数時間ほど減っただけであり、晩御飯の後、部屋は一緒であるし、授業も同じ男性操縦者という肩書のおかげでほとんど同じグループになったりもしている。

まあ、そんな理屈が恋する乙女に通用するのかと言われると、よくある恋愛ソングのようにずっと会いたいとか、満たされないとかで、満足することはないのだろう。

「あ、ラウラにも。はい、これ」

そう言つて氷雨が手渡したものは包装紙に包まれたものであった。

「何だこれは」

「櫛だよ。ラウラつて茶道部でしょ？　だから、こういうものが欲しいんじゃないかと思つて」

ラウラの部活を知っていることにも驚きではあるが、渡す物が櫛であることにもシャルは驚く。軍人を絵にかいたような彼女だ。どうにも櫛を使うという姿が想像できない。

「別段必要とはしていない」

その正直な物言いをするラウラにシャルは少し、ムツとしたが、ここで自分が怒つても仕方がないと黙っていた。

言われた本人である氷雨はいつもの様なオーバーリアクションをしていた。一件冗談のような氷雨の反応だが、内心では大なり小なり、本当にそう感じていることをシャルは何となく理解している。

故に、口を挟みたくなくなったのだが、ラウラはその言葉に続けるように口を開いた。

「だが、これからは必要とするだろうな。折角くれたのだ。ありがたく使つてやろう」

素直に感謝の意を氷雨に伝えるラウラに鈴もシャルも驚きの表情を隠せなかった。

氷雨だけは驚くこともなく、満面の笑みを浮かべた。

この流れだと自分にもあるのだろうと、シャルは否応にも期待してしまう。卑しい思考ではあると自覚はするも、湧いてしまうものはしょうがないと自己を正当化させる。

「じゃあ、帰ろうか」

しかし、そんな期待を裏切るかのように、氷雨の声が自分の耳に届いた。

「(どうして、僕だけ?)」

そんなことを訴えたくもあつたが、しかし、この抗議を伝えたところで何になるというのだろうか。自分の評価を下げるだけであるし、自分の醜さを露呈させてしまう形になるだけだ。

なんだか泣きそうな、そんな寂しさに胸を締め付けられるが、氷雨の前ではそれを顔に出したくないな、と思い、シャルは必死にこらえ、帰路に就くのだった。

廊下。

◆ ◆ ◆
鈴ちゃんとラウラと別れて、僕とシャルは二人で自室の方に向かう。ちなみに僕は未だに女装だ。すれ違う女子たちにはばれないか内心ビクビクしてたけど、全くばれなくて、安心したような、なんだか腑に落ちないような……。

なんで気付かないんだろう。声で分かるよね？ 別に僕は女声を作ってるわけじゃないのにね。

で、先ほどからなんだかシャルが落ち込んでいるように、肩を落として歩いている。女装の僕が隣だからつてわけじゃなさそうだけど、どうかしたんだろうか？

「ねえ、シャルル？ どうかしたの？」

「……どうもしてないよ、氷雨。大丈夫。大丈夫……」

どう見ても大丈夫そうには見えないんだけど。

「あ、そう言えばね、鈴とボーデヴィツヒさんにばれたよ」

「え、なにが？」

「僕が女だつて言う事が」

え、ええ！ な、何それ！ 一大事じゃない！ そ、それで様子がおかしかったんだね。

「だ、大丈夫なの!？」

「うん。二人とも黙ってるって」

え、二人とも? ラウラも? なに、原作のこのころじゃ考えられないくらい丸く

なってるのね、ラウラ。

「ふう、よかった」

安心して息を吐く僕の顔をシャルが覗く。

「……氷雨はどうして自分のことのように心配してくれるの?」

なんだか今更な質問だね。そんな当然のことを聞かれるとは思ってなかったよ。

「好きだから」

「っ!？」

驚いたようにシャルが顔を上げる。あ、誤解させちゃったかな?

「友達だもん。助けてあげたいと思うのは当然でしょ?」

「え、あ、あくlike……」

小声で何かを呟くシャルであっただけど、納得してくれただろうか、その後の追及はなかった。

ああ、そうだ。

「ばれてるんだったら、あの時渡せばよかったね」

「え？」

手に持つ袋の中から一つ、包みを取り出す。

「はい、これシャルにあげるね」

「ぼ、僕に？」

「うん」

さつきまで落ち込んでいたみたいだけど、少し元気になったようで表情も明るくなる。よかった。

「あ、開けてもいい？」

「勿論」

ここまで来たらもう店員さんも文句は言つてこないだろうからね。

袋を止めるテープを丁寧にとるシャル。几帳面なんだね。僕だったら途中でびりつて破れちゃうよ。

そうして中から現れた物をシャルは手に取った。

「髪飾り？」

「うん。いや、シャルの髪に似合うなうって思つて買ったんだけど、それどう見ても女物だったんだよね。だから、あの場で渡すのはどうかと思つたんだけど、ばれてたならもったいぶらなくてもよかったね」

女装した男が男装した女子に女物の髪飾りを送る。……なんだろう、この謎の文章は。なんだか、性別がごちゃごちゃになりそうだね。

「うっ……」

「？」

シャルの様子が……。

「うえええええん」

「え、ええええええ！」

な、泣きだしちゃいました！

「え、え？ え、ど、どどどどうしたの、シャル！」

「うっ、ぐすつ、あ、ありが……とう。ひ……氷雨……」

「え、ど、どういたしまして。……ってほんとにどうしたの!? だ、大丈夫!？」

泣きやまないシャルの周りをぐるぐるしながら声をかける。そんなことをしていたら見知らぬ女子に発見されて……。

「ああ!! 誰かが、デュノアくんを泣かしてる!!」

「え？」

「「「なんですつてええええ!!」」」

「ええっ！」

なんだか物凄い人数の女子がいきなり現れたんですが！

「捕まえるわよ！　そして、デュノアくんを助けるわ！」

「「おおー!!」」

て、まずいよ。この格好で捕まったら、僕が僕であることがばれてしまう!!

「シャル……」

「ひっく、ひっく」

「またあとで謝るからねえええええええ！」

そう言っつて、僕ははためくスカートも気にせず、廊下を駆けだした。

「「待てえええええええ!!」」

追いかけられる最中、飛びこむようにして千冬さんの部屋に入ることか何とか一命を取り留めた僕であった。

その後、部屋に帰って土下座すると、シャルは焦りながら、僕は悪くないと許してくれた。

けど、結局涙の理由は教えてくれなかった。聞いてもちよつと紅くなってそれは言え

ないと言うのだ。気になるけど、言いたくないことを無理に聞くのはどうかと思ったので追及はしなかった。

そう言えば、余談だけど、シャルの守ってあげたい男子度が上がったとかいう話をクラスで聞いたよ。本当に余談だね。

あ、僕の評価は絶叫系不思議愉快さんだっけ。うん、何これ？

八話 自販機はイベント生成機

夕食後。

廊下。

一夏たちと一緒に夕食を食べた後、僕はいつも通りドクペが飲みたいと言う衝動（中毒症状）に駆られ、自販機への道のりを歩んでいる。

しかし、僕は大体この道筋を辿ると必ず誰かに出会ったよね。

『現状、この道筋でのイベント発生率は100%です』

「だよね。今日は誰に会うんだろうね」

『私の予想では鈴ではないでしょうか？ 最近は鈴がらみのイベントが多いので』

「まあ、それが目的の作品ではあるんだけど、ぶっちゃけ過ぎじゃないかな？」

でも鈴ちゃんに会えるのは嬉しいから、僕もそれに期待したいね。

そんな期待を抱きつつ、廊下を進んでいく。その歩みはできるだけ道中を長く歩こうとゆっくりとしたものになっているが、着実に前に進むその足は無慈悲にも自販機に辿りついてしまった。

「……結局何も起こらなかったね」

『おかしいですね。データでは確実にでしたが』

まあ、統計だけじゃ偶然の確率性を覆すことなんてできないよね。というか、試行回数が少なすぎる気もするね。

仕方がない……というか、そもそもの目的であるドクペを買うことにした。

「むむっ！ 新商品がある」

『ルートビアですね』

ルートビア、アメリカ発祥の炭酸飲料だね。色はどす黒くて見た目は黒ビールだけど、ノンアルコール。

「よくこんな不味いもの飲めるよね」

『ドクペを好む人がよくそんなこと言えましたね』

え、ドクペとルートビアは全然違うよ？ ドクペはおいしいけど、ルートビアはおいしくないんだよ。

「何を思っただけをここに置いたんだらうか……」

『アメリカから来た学生もいますし、その方々では？』

なるほど。そう言えば、上級生に代表候補生もいるし、その先輩が要求でもしたんだらうか？

「まあ、僕はドクペを選ぶけどね」

迷う余地はないし、何しにここに来たかと問われたら、「ドクペを買いに来た」って答えるしね。

そう思つて端末をかざすと、バチツと紫電が走り、あろうことかドクペではなく、ルートビアが取りだし口に落ちた。

「……」

『……』

「……ペイルライダー？」

『难道不是吗？』

何事もないかのような落ち着いた対応。うん、いつも通りのペイルライダーだね。ていうか、AIが取り乱すわけじゃないよね。

「ちよつとペイルライダー、なんてことしてくれるのさ!？」

『私のログにはなにもありません』

「おいしいい」

……どうしようこれ。え、飲むの？ いやいや、そんな馬鹿な。僕はドクペが飲みたくてここまで足を伸ばしたんだよ？ ただ喉が渴いたなら寮の自販機でも事足りるけど、ここまで来たのはこの自販機にしかないドクペを買うためなんだよ？

僕はおもむろに缶の封を開ける。炭酸特有の二酸化炭素が抜ける音がプシュッと鳴る。

『でも飲むんですね』

「だってもつたいないじゃん」

また買ってもいいけど、なんだか一日に二本以上ジュース買ったら負けた気がするんだよね。

「あ、おいしい」

『よくもそんな不味いものが飲めますね』

ペイルライダーに僕の発言をそっくりそのまま返されちゃいました。



廊下。

ルートビアを飲み干して、なんだかちよつと気分が悪くなった気がするけど、おいしいことはおいしかったよ。

ただ、胃に残ると言うのかなんというか……。

「うう、慣れるのに少しかかりそうだよ」

そんな感じで少し重い足取りで帰路を辿っていると正面から口論している様な声が聞こえてきた。ええと、なんかそんな感じのイベントが原作であったみたい気がする

けど、なんだっけ？ 転生してから40話くらい経っちゃうと忘れそうになっちゃうよ。

「声紋で誰か識別とかできる？」

『少々お待ちを。データ照合……結果を提示。どうやら、ラウラ・ボーデヴィツヒと千冬のようなようです』

ああ、あの二人が口論ってことは、あれかな？ なんてこんなところで教師なんてしているんですか、ドイツに戻ってきてください、つてラウラが千冬に抗議するシーンだね。

あれ？ それはちよつと遅すぎるんじゃない？ そう言うのは初日かその次の日あたりで言うべきだよな。

……ちよつと盗み聞きでもしてみようかな。

「ペイルライダー、段ボール出して」

『了解。段ボール、レディ』

僕はそれを被り、二人に近付く。

だんだんと聞こえてくる声のはつきりとしてきて、ラウラの声が聞こえてきた。

「当たり前です。あんな馬鹿を絵に描いたような男を評価するなどできません！」

ははは、誰の話をしているんだろうね。ん？ 男って言ったら二人しかいないよね。

……ふつ、一夏、ご愁傷さま。

「そうか。まあ、私もお前に考えを改めてほしいわけではない。確かに篠ノ之は馬鹿だからな」

「……」

『愁傷様です、氷雨』

なんでいつも僕ばかりなんですかねえ。

そんな風にしよげっていると、いきなり視界に光が飛び込んできた。

廊下。

時間は少し遡る。

ラウラは千冬に不満を訴えていた。

「教官、やはりこの学園は貴女に相応しくありません」

以前もラウラは千冬にドイツの軍にまた帰ってきてほしいと言ったが、その時には断られ、同時にラウラにはこの学園で学ぶことがあるとまで言われた。

それが教官の言葉であるが故に、ラウラは確かに学ぶことがあるのだろうと授業を受け続けた。しかし、数日が経過し、様子を見てきたラウラであったが、やはりこの学園から学ぶものなど何もないという結論に達し、その上周囲の学生のISに対する認識の



甘さにも辟易している。

ラウラが初めに感じたように、この学園の生徒はISをファクションか何かと勘違いしている。ISは兵器である。使い方を誤れば、何千、何万という命を奪うことのできる兵器だ。

そんなものを学園という形で一般人に触れさせていること自体おかしい、というのがラウラの考えである。

「教官の言っていた氷雨という男も他のやつらと変わらない。こんな認識の甘い奴ら相手に教えるなんて、意味がありません」

「ほう、ずいぶん物言いだな」

千冬が口を開く。その鋭い声に一瞬押されるラウラであったが、それでも考えは変わらない。

「帰ってきてください。もう一度、我が軍で我々に訓練を付けて下さい」
「前も言ったが、それはできない」

そもそも、それは誘拐された一夏の情報の対価であっただけである。それを払い終えた今、千冬がドイツ軍に戻る理由など何一つないのだ。

それに、千冬自身はISを兵器として運用する事に良い感情を持ち合わせていない。あれは元来、友人である束の夢を実現させるためのものだ。

「それに、貴様が否定した氷雨だが、本当に他の生徒と変わらないと感じたか？」

その千冬が呈した言葉に、ラウラは少し戸惑う。その言葉の真意が分からないからだ。

「……」

「なに、別に思ったことを言っただけ。お前の解答をとやかく言うつもりはない」

千冬はそう言うも、やはり聞いてくると言うことは何かあるのだろうとラウラは疑うも、その答えがすぐ浮かぶはずもなく、ラウラ自身の感じたままを言葉にする。

「……私は他のどの生徒よりも、氷雨という男は何も考えてないように思えました」

「ふっ」

ラウラの正直な感想に、千冬は思わず噴き出す。

「ああ。お前の言うことは分かる。確かにあいつは何も考えてないように見えるな」

千冬の同意を得られたことに安心するも、どうにもその言い回しに引っかかるラウラ。

「見える、と言うのは、どういうことですか、教官」

「ん？ どういうもなにも、そのままだ。そう見えるのは間違いではない。だが、それがあいつの本質ではないさ」

千冬からの過大評価にしか聞こえないその言葉にラウラは苛立ちを覚える。

「納得できていないようだな」

「当たり前です。あんな馬鹿を絵に描いたような男を評価するなどできません！」

「そうか。まあ、私もお前に考えを改めてほしいわけではない。確かに篠ノ之は馬鹿だからな」

そんなことを言いながら、千冬はいつの間にか横に鎮座していた段ボールをおもむろに取りあげる。

そこから現れたのは馬鹿に定評のある氷雨であった。

「っ！ 貴様っ！」

「ラウラ、今度の学年別トーナメントでこいつに勝てたら、私はドイツに戻ってやろう」
「なっ！」

「ふあっ！」

その言葉に驚く二人。それぞれ立場は違うにせよ、考えていることは同じで、そんな大事なことをこんな奴（この印象は両者同じ）に任せていいのか、と。

千冬としてはラウラを諦めさせる良い機会だと考えているからであるが、いくらなんでも思い切りが良過ぎると思うが、千冬は氷雨の実力を知っているが故の行動なのである。

「……………」

無言で互いを見つめる氷雨とラウラ。その後、氷雨を睨みつけた。

「貴様の様な何も考えていないような能天気な奴には絶対に負けない！」

「遊びでやってんじゃないんだよ！」

売り言葉に買い言葉に聞こえるが、氷雨の方は思わず言ってしまったと言った感じに、しまったと口を抑える。

「教官。その言葉忘れないでくださいね」

「ああ。私は嘘はつかない」

なんとも不穏な空気を残し、その場は解散になった。

九話 理想は脆く、現実は何ぼ

前回のあらすじー。

なんだか知らない間に、僕は大役を任されてしまいましたとき。

おわり！

「千冬さん、あんな事言っているんですか？」

「……貴様はいつまでそうやってしゃがんでいるつもりだ？」

あ、段ボールはもう取られてるんだったね。

「んしょ」

膝に手を付いて立ち上がる。

「で、いいんですか？」

「良いも悪いも、お前なら負けんだろう」

「いやいや、信頼してくれるのはいいんですけど、万が一って事もありませんし」

僕が急な腹痛で動けなくなるってことも無きにしも非ずだよ。

『そのような確率は存在しません』

「なんで？」

『氷雨の体調は私がナノマシンで管理していますから』

「…………え、初耳なんだけど」

「驚くことはないだろう。白騎士と蒼騎士にはそういうシステムが搭載されている。まあ、現在公開されている技術ではないがな」

「そういえば、福音戦で一夏が負傷した時って、白式が一夏を治療したんだよね。てことは、その要因はコアにあるってことなのかな？」

「まあ、僕は技術面での知識はゼロだし、知ったところでなにができるってわけじゃないから、考えるだけ無駄かもね。」

「私はお前を認めている。だから、あいつを諦めさせることに使わせてもらおうぞ」

「…………分かりました」

「人から信頼されるのは嬉しいから、それに答えたくなくなるのは必然だね。」

「あ、でも負けても文句言わないでくださいよ」

「言わんさ。お前を負かすようなら、ドイツでもどこでも言ってみる価値はあるさ」

「うわあ、大絶賛だあ…………。」

「あ、昨日はメイクありがとう(こ)ございました」

「やった私が言うのもなんだが、似合いですぎて困ったぞ、あれは」

いやあ、僕自身はそんなに似合っていたとは思わないんだけど、人の目をごまかすぐらいには女の子っぽかったみたいだね。

「思わず東に送ってしまったくらいだ」

「何やつてくれちゃってるんですか!？」

東さんに餌を与えたら良い方向に進むわけがないじゃないですか！

「すまん。だが、東も喜んでいたぞ」

「いやいや、東姉がテンションあがったらどんな被害が僕に来るか……」

ほんと、何してんですか、千冬さん……。



部屋。

部屋に戻ると、一夏しかいなかった。

「そう言えば、久しぶりの登場だね、一夏」

「いや、なにを言ってるんだ?」

この感じ久しぶりだな。シヤルが来てからは同室に女の子がいるってことで、なかなか気を使うことが多かったんだよね。

「一夏く、お茶入れて〜」

「はいはい、今入れるよ」

そう言ってお茶を入れてくれる一夏。もうお湯は沸かしていたようで、すぐに湯呑に熱茶が注がれた。

一夏はお茶を淹れてくれたんだから、僕からも何か出さないとね。

と思つて、僕は昨日の買い物で買ってきたお菓子を取り出す。

「じゃーん。抹茶味のロールケーキだよ！」

「おお。ナイスだ、氷雨」

ナイフ……は手元がないなあ。

「ペイルライダー、ビームブレード出して」

『ケーキが消え失せますがよろしいですか？』

それはまずいね。

「おいおい、IS勝手に展開したら怒られるぞ」

「あ、そつちの心配もあつたね。危ない危ない」

さつき千冬さんに認めてるって言われたばかりなのに、そんなことしたら裏切りつばいからね。

「そういえば、最近練習見れてないけど、調子はどう？」

「ああ、まだ完璧じゃないけど、瞬時加速はできるようになったぜ」
そう言つて一夏がガッツポーズをとる。

「おお！ それはすごいね！ あれは僕も満足に使えないからね」
そう言つと、一夏は驚いた顔をする。

「え、氷雨でも上手く使えないのか？」

「うん。理屈は分かるんだけど、使うタイミングがどうもつかめなくて」

「だって、相手と距離を詰めるために使つたら無防備に直線軌道を描くわけでしょ？」
的にしかならないよね。

でも回避に使うにしてもエネルギー消費するからねー。プラマイゼロ？

「俺にできるかな……」

「一夏ならできるよ」

「そうか？」

「うん！」

「だつて原作で使えてるもん！」

「あ、そう言えばラウラも瞬時加速使えるんだつたね。対策……大丈夫かなあ。」

「それにしてもシャル、遅いな」

「そうだね。一夏は何か知ってる？」

「先生に呼び出されたって聞いたけどな」

……なんだか嫌な予感がするけど、僕の予感あまり当てにならないから大丈夫だよ
ね。

「心配だな」

「一夏、変なフラグ立てるのやめてよね」

◇・◇◇

そうしてしばらくして部屋に帰ってきたシャルの顔を見て、僕の予感が的中してしま
ったことを察した。

「どうしたシャル！」

一夏もその顔を見ただけで、何か深刻な状態にあることを察してシャルに問うた。

その声に俯いていた顔を上げたシャル。その顔には困惑が浮かんでおり、どうすれば
いいのか分からないという感じだった。

「ど、どうしよう。あの人から、本国に帰って来いって……」

「あの人？」

「シャルの父親のことかな？」

「……うん」

しかし、どうしたんだろう。今更になって……というわけでもないのか。

「たぶん、僕のI Sからの発信が途絶えて数日経つから、それでだと思おう」
「結構急だよな。いきなり帰国しろなんて」

「それが一番確実だからね。一夏の言つたように、学園内には干渉できないからフランスに出てきてもらうのが一番やりやすいんだろうからね」

それを先生経由で伝えたということはそれなりの建て前を作っているだろうから、無視すると言うのも難しいのかな。

「で、なんて言われたの？」

「母親が危篤だからって……」

……ん？

「それってシャルが帰る必要あるの？」

だってそれ、正妻の人でしょ？

「でも、学園は事情なんて知らないから」

まあ、そうだね。それに、それが本当とは限らないけど、嘘でも本当でも建て前としては成立するし、最も効果的な連れ戻し方だね。

「そんなの、無視したらいいじゃないか！」

一夏が声を荒げる。

「シャルを道具みたいに使った父親の言うことなんて聞く必要ないだろ！」

「それはできないよ一夏」

「なんでだよ！」

感情的になる一夏を宥める。

「僕らはまだ未成年なんだ。親に守られて生活している身なんだよ？ 社会的弱者の僕たちはそう簡単に親から離れられないよ」

「な、実の娘をスパイにする奴が親だつて言うのかよ！」

「親権を握っているんだから法律上はそうなんだよ」

「でも……」

「それに」

何か言いたそうな一夏を遮り僕は言葉が続ける。

「切り捨てられて後ろ盾がなくなったら、学園に居ることすら難しくなるんだよ？」

「え……。ど、どうということだよ、氷雨」

えくと、どうということも何も。

「一夏、ここは学校だよ？ 学費はどこが出す？」

「えつと、そりゃ親だろ」

「うん。まあ、僕や一夏、それに代表候補生は国が出してくれるけどね」

その僕の言葉に一夏は首をかしげる。

「氷雨の言いたいことはその学費が払われなくなるってことだろ？」
「うん、そうだよ」

僕は一夏の言葉に頷く。I S学園は特殊な学校ではあるが、学校であることにかわりはない。国からの援助があるとはいえ、誰もが無償で受けられるわけではない。だからこそ、ここで学費という問題が発生するのだ。

「でもさ、シャルは代表候補生なんだから親は関係ないだろ？」

「え？ あく、うん。そうだね」

「……………え」

……………。

「いや、嘘々。関係ないわけないじゃん」

「そ、そうなのか」

なぜか指摘したはずの一夏も僕が無言になったことに焦ったようだ。

「たぶん氷雨は、あの人がフランス政府に言っ、僕が代表を下ろされることを危惧しているんじゃないかと思う」

「なんでわざわざそんなことを？」

一夏の疑問はもつともだけど、答えは結構シンプルなんだよね。

「使えなくなった道具にお金はかけたくないでしょ？」

「氷雨！」

胸倉を掴まれる。いやあ、流石最近鍛えているだけあつて力が強いね。

「言つていいことと悪いことがあるだろ！」

「分かりやすく言つただけだよ。ほんとにシャルを僕が道具だと思つてるわけないで

しょ」

「だからつて、言つていいわけじゃないだろ！」

むう。確かに一夏の言うとおりだ。シャルの気持ちを考えていなかった。

……僕自身も冷静さを欠いていたつてことかな。

「一夏の言うとおりだね。ごめん、シャル」

「う、ううん。いいよ。僕のために一生懸命になってくれてるのに、責めるなんてできな

いよ」

シャルは弱々しい笑みを浮かべながら胸の前で手を振つた。うう、後悔。

「ありがとう。えと、話を戻すけど、ただ無視するだけじゃ解決はしない。かといつて、ノコノコ出て行つたら行つたで何をされるか分かつたものじゃない」

「……どうするんだよ」

「えーと、僕らじゃどうしようもないよね」

「おい！」

また一夏が怒る。ちよちよ、話しはまだ終わってないよ。

「や、ね。だから、誰かに頼るしかないって言いたいわけよ」

頼れる人なんて心当たりがあるしね。

「私にいい考えがある」

あ、このセリフは失敗するフラグだった。

「………任せていいのか？」

一夏の真摯な視線を受け止める。

「勿論だよ」

だから僕はそれを受け止め、力強く頷いた。

選択肢

1 万能超人、細胞単位で天才の束さんに頼る

2 フランス政府に直談判

3 実力も名声も世界最強のブリュンヒルデ
4 ……え、学園の影の支配者、用務員のおじさんに頼っちゃおう？

十話 タッグ……マツチ……トーナメント？

そんなこんなでシャルの話しは置いておきましょう。

え、なんで置いておくのかつて？ 後日談みたいにして話すからだね。だってシリアス（？）回は続くと読んで疲れるじゃないですか。

多分、この作品にシリアスは求められていません。だって、タイトル見てよ。……あつ（察し）

そう言えばね、学年別トーナメントつてタッグだったよね。誰と組もうかな。ペイルライダーは基本近接型だから遠距離射撃武器との相性の方がいいよね。

一番の理想はセシリアのブルーティアーズだね。ビットの牽制力は敵を分断するのに最適だから、近接に持ちこみやすくなる。

まあ、それは戦術的な観点で相方を考えた時の話だけど、僕は鈴ちゃんと組みたい。甲龍が近接タイプだとかはこの際どうでもいいから鈴ちゃんと組みたい。

「ペイルライダー的には誰が良い？」

『白式がいいです』

え、近接同士が組むの？ 作戦が突っ込むしかなくなるわけだけど……。

「あ、コアが白騎士だから？」

『そうです』

やっぱり対で造られたから思い入れがあるのかな？

『あの女に私が優れている所を見せつけたいからです』

「あの女って……いったいどういう関係なのさ」

『冗談です』

冗談なのか。

『相性はともかくどうしてタッグだと思うのですか？』

「え」

ああ、そう言えば、未だにタッグ戦の発表はされてないね。

「ええと、勘かな？」

『それでは考えるだけ無駄そうですね』

どういう意味ですか、ペイルライダーさん。

◇・◇◇

そんなこんなでトーナメント前日になりました。

え、なんでタッグ戦に変更されたっていう通知が来てないの!? あれ? 僕の思い違いだったっけ? 確かに学年別トーナメントはツーマンセルのタッグマッチだった気がするんだけど……。

あ、そうか。そう言えばあの変更はクラス対抗戦での襲撃を受けて、より実践的な形式にして、代表候補生たちに自衛の力をつけさせるためって名目だった。

つまり、原作と違って、襲撃どころか、クラス対抗戦すらしてない現状ではタッグ戦にする動機がないということらしい。

……え、一対一の戦闘だったらラウラ一強じゃないですか。

「なかなか難しくなってきたね」

「そう言えばさ」

正面に座る鈴ちゃんが何かを思い出したように口を開く。

あ、ちなみに今は昼食の最中だよ。鈴ちゃんと一夏の冷戦は未だに続いてるから、僕はこの最近一夏とお昼を食べた記憶がないよ。

「一夏とあんた、それにシャルもだっけ、明日のトーナメントの景品らしいじゃない」「らしいね」

優勝したら付き合えると言うやつだね。

「どうなのよ、あれ」

「どうといわれてもね。僕たちの知らないところで言われてるだけだから、なんとも言えないよ」

ふーん、と鈴ちゃんは何かを思案する。

「もしそれで告白されたらどうするの？」

「え、告白？ はは、されるわけないよ」

「ん、なんでよ？ あんた、意外と人気あるわよ？」

いや、人気があるのかどうかは別としてね。……ていうか、さらつと本人にそれを言う鈴ちゃん、ほんとに僕のこと友人としてしか見てなさそうなんだけど……。

「だって、僕以外優勝させる気ないしね」

「……」

その言葉に鈴ちゃんは哑然とする。

「あんた、目の前に代表候補生がいるって分かってて言ってるわけ？」

「え？ あく、うん。り、鈴ちゃんには苦戦するかもしれないね！」

「かもしれないって何よ。どんだけ自信あるのよ」

自信があるってわけじゃないけど、千冬さんの期待を裏切るわけにはいかないし、それに僕は稼働時間だけで見たら世界一位だからね。天才とかにはいつか負けると思うけど、今のところは同年代に負ける気はしないよ。

「あ、そうだ。じゃあ、僕が優勝したら鈴ちゃんに告白していい？」
「はあ!？」

僕のいきなりの提案に鈴ちゃんは驚いて声を上げる。

「……て、別に改まって告白しなくても知ってるんだけど」

「だよね〜」

気持ちは伝わってるのに答えてくれないって言うのは結構絶望的な状態である気がするね。

「ま、あんたの戦い見て気持ちも変わるかもね〜」

鈴ちゃんはからかうような口調で言う。

「! それだつ!」

「え?」

しかし、からかわれていると分かっているにしても、行動しないことには成果を得ることはできない。からかうためとはいえ、一度口に出した言葉だ。鈴ちゃんも少なからず、それを意識してくれるに違いない。

「僕は、明日、鈴ちゃんのために戦う」

「いや、どういう意味よ、それ」

細かいことは置いておいてほしいです。

「だから、見ててね」

明日のトーナメントで僕は鈴ちゃんに漢を見せる。

「かつこいいところを見せつけて、鈴ちゃんを虜にしてやるんだから！」

「……もつと違う言い回しはなかったの？」

鈴ちゃんは少しあきれ顔になる。

「ま、観戦はするからせいぜいがんばりなさいよ」

「わーい」

見てほしい人が見てくれている。

これ以上に力が出せる戦場はないと思いました。



アリーナ、ピット。

なるほど。これが世界の選択か。

そう思いながら見つめるのは本日行われる、学年別トーナメントのトーナメント表を

映し出す電子掲示板である。

初日、午前の部、一回戦。詰まる所一番最初の試合だね。各国からお偉いさんも来る

し、この一番最初の試合に代表候補生を置くのは、まあ分からなくもないけど……。

ラウラ・ボーデヴィツヒ VS 篠ノ之氷雨

なんだか悪意……というか、千冬さんの思惑がもろに反映されている気がしてならないのは気のせいでしょうか？

「氷雨は初戦からか」

一夏が僕の横に立ち、同じように電子掲示板を見る。

そういう一夏は午後の部の一戦目だ。対戦相手は……鈴ちゃんだね。

「一夏は大変そうだね」

「ん？ 氷雨の方がやばいだろ。相手はあのボーデヴィツヒだぞ？」

確かにそうだね。VTシステムがあるから本当に面倒くさいね。そこそこ善戦を演じながらギリギリで勝つのが理想的かな？ でも、ラウラ相手にそんなことできそうにないんですけど。

ま、まあ、VT状態のラウラは一夏でも勝ててたし、ぼ、僕でも勝てるよね？

『一戦目の各選手は対戦の準備を始めて下さい』

アナウンスが聞こえ、僕は着替えるために移動しようとする。

「じゃあ、僕は着替えに行ってくるよ」

「ああ、しつかり観覧席で見てるからな」

「うん。応援よろしくね」

「おう」

掲示板から踵を返すと、そこにはシャルの姿があつた。その表情はどこか不安げである。

それもそのはずだ。今日は各国のお偉いさんたちが集まる。もちろんその中にはデュノア社の社長である、シャルの父親も来ているわけだ。

「氷雨……」

「大丈夫。任せておいてって言ったでしょ？」

そう、もうすでに手は打つてある……あ、僕がじゃなくて、東さんがだけどね。

「だから、シャルは安心していいからね」

「ありがとう、氷雨」

「いいって。それに、僕は本当に何もしてないから」

僕は何もしてないのに感謝されるのはむず痒いからね。

「じゃあ、いつてくるね」

「うん。頑張つてね」

そうして僕はピットを後にした。



待機室。

ベンチに腰掛ける銀髪の少女はこの後の試合を思い、笑みを浮かべていた。

勿論、氷雨と戦えることが嬉しいのではない。自分の教官であった女性、千冬を連れ戻すことができるからである。

自信の目に付けられた眼帯に触れる。その冷たさに、以前自分が晒されていたあの視線たちを思い出した。

蔑み、嘲笑、それらを孕んだラウラを見下す眼は冷たく、人に向けられるものではない。かっつた。

できそこない。

戦うために生まれ、戦うために教育された試験管ベイビーである彼女は、戦うことができなければ、そういうレッテルを張られるのは必然だ。

戦うこと以外に存在意義を主張できない。その唯一の存在意義を奪われた彼女の心は、深い深い闇の中に放り込まれていた。

そんな彼女を再び光の元へ連れ出してくれたのは、千冬だ。

自分に再び生きる理由を与えてくれた教官。今更、放り出すなんて許さない。そんな依存が彼女の根底には流れている。

彼女の中の千冬像を穢すものは許さない。千冬はこんな守られて育った甘い学生たちに教えるべき人物ではない。

「必ず、連れ戻します、教官」

故に氷雨を倒す。

「そのへらへらとした面を土にまみれさせてやる。

闘志の炎は燃え上がる。静かに、しかし確かに、ラウラの胸には宿っているのであつた。

十一話 口は災いの元

時間はちよつと遡つて夜。

「というわけで、どうにかしてよ、タバエモーン」

『何がどういふわけかは大体把握してるけど、なんで東さんがその女のために動かないやなんないのさ』

この反応は大体想定してた。だって東さんは興味ない人にはとことん冷たいからね。

『そもそも犯罪者に手を貸したらひーくんまで共犯になっちゃうよ?』

「別に犯罪の隠ぺいとか手伝うわけじゃないし、大丈夫じゃないの?」

僕がしたいのはただ国からの援助を続けさせることだけだ。それさえ叶えば、デュノア社が何をしようが、在学中は守られる。卒業したら、フランスで罪を償つてから再スタートすればいいだけだし、なんとかなるんじゃないかな? まあ、それはフランスの世論次第だろうけど。

「お願いだよ、束姉。シャルは僕と一夏の友達なんだ。助けてあげてよ」

『……………もろ、しょうがないなあ。今回だけだよ、いつくんとひーくんの友達つてこと

で助けてあげる』

「あ、ありがとう、束姉」

『ただし!』

言葉を遮るように大きな声が聞こえる。

『条件があるよ』

「条件?」

『そう。といつてもちよつとした頼み事するだけだよ』

「うん。それくらいならなんでもするよ!」

「ん? 今、何でもするって言った?」

『言いましたね』

「いっっちゃったね」

『……』

『……』

『……』

そこで通信は切れた。

な、なんか恐ろしいことになっちゃったぞ。



ピット。

僕は着替えを済ませ、控室まで戻る。アリーナへと続く扉の前に立つ。

「ペイルライダー。行くよ」

『戦闘システム、レディ。いつでもいけます』

頭にハイパーセンサーを通した情報が流れ込む。

「今日はちよつとハードになるかもしれないけど、頼んだよ？」

『ご期待に答えましょう』

ペイルライダーを展開する。

ピットからアリーナへつながる扉が開く、眩い光が溢れだす。



アリーナ。

周りを見渡すと、全ての席が人で埋まっている。男性操縦者という話題性がここまで人を呼ぶとは思わなかった。

そう言えば、原作のクラス対抗戦も一夏を見たさにチケットまで売りさばく人気だったよね。

「おい」

しかし、この人の数に見られて戦うとなると、なかなか緊張しそうだね。

「おいー！」

「だけど、負けられない。緊張しているからって言い訳して、千冬さんを裏切るわけにはいかない。」

「おい、貴様！」

「なんだよ、ラウラ。今、決心を固めてる最中なんだよ？」

「そんなことはどうでもいい！　なんだその格好は！」

え……なについて、ISスーツにペイルライダーを展開しているだけだよ？

「何か問題あるのかな？」

「大ありだ！　貴様……なぜ女装をしている!!」

会場は物凄くざわついている。噂の男性操縦者を期待していたら、何故か女が出てきたのだから当然だろう。

アリーナ内にある大型ディスプレイに僕の姿が映される。あ、凄く恥ずかしい。

「答えろ！」

「いや、まあ、これにはバイカル湖よりも深い理由があつてね」

『バイカル湖とはロシアのシベリア南東部にある、最大深度1741mの世界一深い湖のことです』

補足ありがとうペイルライダー。受験生の人は覚えておこうね！

「理由なんてどうでもいい。貴様、私を馬鹿にしているな？」
り、理由聞いてきたのはそつちじゃないか……。

ていうか、僕だつてやりたくてやつてるわけじゃないんですよ！ 本当はこんなことしないで戦闘で鈴ちゃんにいいところ見せようと思つて……かつこいい姿で鈴ちゃんを魅了しようと思つてたのに！

『何故、言いなおしたのですか？』

なのに……なのに！

『じゃあ、一つ目の頼み。前のあの女装で次のトーナメント出て』

「ふあつ！ なんでそうなるの!？」

『だつて、その日はひーくん目当てに群がる奴らがいっぱい来るわけだよね？ その

ひーくんが女の格好をしてたら、滑稽だと東さんは思うわけですよ』

「それに何の意味があるのさー！」

『東さんが面白い』

「この瞬間思った。あ、何を言っても覆らないっぽいつてね。

『あ、東さん特製のパットも送る？』

「いらないます」

「なんで！ こんな！ ことに！」

『落ち着きましよう』

……そうだね。ここまで来てこの女装に関して嘆いていても仕方がない。周りのぎわめきも、気にすることはないよね。

「うん。ペイルライダー、ノイズキャンセルして」

『了解。観覧席からの囁りを除去』

よし、静かになった。これで集中ができると思うものだ。

「ラウラ、別に僕は君を馬鹿にしているわけじゃない」

「なに？」

冷静さを取り戻し、僕は正面のラウラを見据える。

「僕がこんな恰好をしているのはただの高度な政治的判断にすぎない。それが、僕自身の戦闘技能に影響を与えるわけじゃない」

『高度な政治的判断（嘲笑）』

やめて、結構真面目な顔で話してるんだからさ。まあ、真面目な顔しても所詮女装な

んですけどねえ！

「それとも何？ ラウラは僕が女装してたら、心乱されて弱くなっちゃうわけ？」

「っ！ 貴様！」

「そんなことないよね？ じゃあ、何も問題ないよ」

『ビームブレード、レディ』

両手に構えるはいつも通りのビームブレード。展開した後、右手を突き出し、その切っ先をラウラに向ける。

「負けた時の言い訳を、今しないでもらえるかな？」

「……なるほど」

ラウラは何かを理解したように落ち着いた顔つきに戻る。前のめりだった姿勢もただし、こちらをしかと見据えている。

「私を煽って冷静さをなくさせ、A I Cの発動を防ごうと言う作戦か」

「……」

ラウラは胸の前で腕を組み、なにやら勝ち誇った顔をする。

「生憎、私はその辺の雑魚とは違う。軍人たる私が、そのような挑発に乗ると思っただか」

「……」

掌でこちらに招くような挑発をラウラが取る。

「こい。格の違いを見せてやる」

……やばい、ばれてた。

「どうしよう、ペイルライダー」

『どうしようも何も、一度A I Cは避けているじゃありませんか』

「あんなのまぐれだよ。一対一であれに捕まったら、今度はミサイルなんかじゃ抜けれないよ?」

今のラウラは僕が煽ったせいもあって、逆にすごく落ち着いている。前回の不意打ちミサイルはラウラが動揺してくれたからA I Cが解けたけど、冷静にワイヤーブレードで対処されたらなす術なんてありませんとも。

「あく、どうしよう」

『……氷雨、心拍数、発汗、ともに通常時より変化なし。焦ってませんか?』

「あ、ばれた?」

実は簡単な攻略法がある。タイミングは避けるよりも難しいけど、隙をつくことができれば、僕の勝ちなんじゃないかな?

「来ないなら、こちらから行くぞ」

動かぬ僕らにしびれを切らしてラウラがこちらに飛び込んでくる。

『きます』

「勝つためには誰かが負けなければいい。俺以外の誰かが！」

迫るワイヤーブレードをビームブレードで弾く。

そうして、戦いの火ぶたは切られた。



「くっ！ ちよこまかと！」

「あゝ、だめだめ。やっぱり近接戦闘はリスクが高すぎるよね」

『チキン野郎』

そんな罵倒を聞きながら、僕はジャイアントガトリングをラウラに撃ちつつ一定の距離を取っている。

このジャイアントガトリング、集弾性はあまりいいとはいえないけれど、装弾数が半端ではない。なんと、リロードなしに拡張領域に入れた分だけの弾が撃てるのだ！

え？ どうやったらそんなチートができるかって？ ガトリングの弾ってこう、横に繋がってるじゃない？ あれの端っこに次の弾を展開。また端っこに次の弾を展開。また展開。その繰り返しで撃ち尽くすことができるんだよ。

ただし、それができるのは僕か、ラピッドスイッチが使えるシャルだけかな。僕の場合、その展開をペイルライダーに一任することで解決してる。

『盛大にかっこ悪いですね』

「いやいや戦いつて言うのは格好じゃないんだよ。要は勝てばいいんですよ」
『最低ですね』

……しかしラウラも適度にA I Cを使って、避けてるね。僕、A I Mには自信があるんだけど、距離を取った上にこの集弾性じゃ当たらないのも仕方がないか。

『残弾数、100を切りました』

「ん。じゃあ、そろそろ近接に向かうか」

展開されなくなった弾を見て、ジャイアントガトリングを収納し、瞬時にビームブレードに持ちかえる。

「今日の僕は、阿修羅すら凌駕する存在だ！」

ビームブレードを構えラウラに突っ込む。弾が止んだことを確認したラウラは僕に注意を向ける。

「そんな直線的な攻撃！」

僕の方に右の掌がかざされる。そして、僕の体は制止した。

『……どういふつもりですか？』

ペイルライダーは僕がA I Cに捕まったことに疑問を呈す。本当の理由はV T システムを発動させないために、一度はかかっておいた方がいいんじゃないかと思ったから

だけど、この理由は誰にも言えないんだよね。

「まあ、任せておいてよ」

そんな風にペイルライダーに返事をする。しかし、身動きを止めたまま、ラウラは追撃してこなかった。

「ふん。これほどあつさり捕まるとはな」

「ラウラの集中力がすごいからね」

確かに直線軌道ではあつたけど、ガトリングでA I Cを多用した後でなおA I Cを正確に発動させるだけの集中力。ラウラだからこそシユヴァルツエア・レーゲンの力は発揮されるのだ。

「前に戦った時よりも動きが荒いな」

余裕を見せ、僕を見下すラウラ。

「そうかな？ 僕自身はあんまり違いが分からないんだけど」

「女にうつつを抜かしているからそうなる」

女にうつつ？ 鈴ちゃんに？ ……確かにそうかもしれないけど、別にそれを言い訳

にして鍛錬を怠ったことはないよ。描写しないだけで、僕は毎朝走って、竹刀ふって、舞の型を確かめて、とか、い、色々やってるんだから！

「別に鈴ちゃんは関係ないよ。もし実力が落ちたと言うなら、それは僕の怠慢が原因だ

「よ」

「どうだかな」

しかし、僕が反論しても、ラウラの中ではもうすでに結論が出ているようで、意にも介さない。

「教官に認められながら、その何も考えていない振る舞い。見ていて不愉快だ」
「そんなこと言われてもね〜」

A I C を発動したまま、大型のレールカノンの銃口がこちらを捉える。

「あんな女にうつつを抜かした結果だ」

「……あんな？」

え、ちよつと聞き捨てなりませんけど？

「代表としての自覚もなく、直情的で思慮の足りない女という意味だ」

……。

『レールカノン被弾。ダメージ10%』

……。

『次弾装填。被弾。ダメージ20%』

……。

『被弾。ダメージ30%。このままでは危険です』

「ベクターキャノン、レディ」

『正気ですか』

ペイルライダーの言葉を無視し、ベクターキャノンを展開する。

「なっ!」

現れる空間圧縮破砕砲の威圧感に、ラウラは一瞬レールカノンを撃つのをためらう。

『ベクターキャノンモードに移行』

「くっ!」

ラウラは再び、レールカノンを撃ちだす。

AICが止めているのは僕の身体だ。新たに展開されたベクターキャノンはその効果を受けていないし、すでに銃口は向けられているので止めたところで放てば直撃は免れない。

『エネルギーライン、全弾直結』

「僕のエネルギーが尽きるか、ベクターキャノンの準備が終わるか……」

再装填されたレールカノンが被弾する。残りエネルギーは半分。

『ライディングギア、アイゼン、ロック』

「チキンレースと行こうじゃないか、ラウラ!」

「き、貴様っ!」

レールカノンが着弾し、さらにエネルギーが削られる。シールドで止めきれない衝撃が身体を叩きつけるも、A I Cの効果もあり、僕はびくともしない。

『チェンバー内、正常加圧中』

「無駄な、あがきをつ!!」

加圧中にラウラはレールカノンを二発放つ。そのうちの一つが頭に当たり、一瞬意識を失いそうになるが、唇をかみしめ、なんとか耐える。もうすぐだ。

『ライフリング回転開始』

「っ!」

このリングの回転が何を意味するのかを悟ったのか、ラウラは最後にレールカノンを放つも次弾は装填しなかった。

そして……

『撃てます』

「上手く避けてね?」

そう言うと、ラウラはベクターキャノンの射線上から離れる。それは同時にA I Cを解くと言うことでもある。

「ペイルライダー、ベクターキャノン収納」

『了解』

放つ前に、ベクターキャノンを収納する。さて、ここから仕切り直した。
「覚悟してね、ラウラ・ボーデヴィッツヒさん？」

十二話 激闘は誰かの為に

観覧席。

そこには一夏といつものメンバーが固まって氷雨の戦いを見ていたのだが、一同は試合開始から忙しく表情を変えていたのだ。

まず試合開始直後、氷雨が出てきたと思つたら何故か女の子が出てきた。呆然とする一夏、セシリア、箒の中でシャルだけはなんとも言えない表情をしていた。

「……あれはだれなんだ？」

「I Sは……氷雨さんのものみたいですけど、乗ってらっしやる方は……」

「見覚えがあるような気もするが、心当たりがないな」

三人の感想を前にシャルはやっぱり苦笑い。周りも同じように困惑しざわめいているが、それを鎮めるためにアナウンスがなされる。

『お集まりの皆さまにご連絡します。ただいまアリーナ内部にてI Sを展開しているのは紛れもなく篠ノ之氷雨です。女性に見えますが男性です。お騒がせして、申し訳ありません』

そのアナウンスに観覧席の喧騒は一瞬収まるが、しかし、次の瞬間、また違う方向で

ざわめきだす。

「え、つまりあの子は氷雨なのか!？」

「ど、どう見ても女子ですわ」

「……氷雨のやつ!」

「あ、あはは」

最早笑うしかないシャルであった。

試合が始まってからはパツと見、一方的な試合展開。氷雨が巧みに距離を取り、ガトリング砲を止めどなく撃ち続ける。だが、実際のところラウラのシールドエネルギーは全く削れてはいない。

「氷雨さんにしては消極的な立ち上がりですわね」

「ああ。氷雨の長所は近接戦闘だ。そこに持ち込まずしてどうしようと言うのだ」

いつも放課後訓練していた二人からすれば、この戦い方に疑問を持たずにはいられないのだった。

それに返事を返したのはシャルだった。

「多分、ボーデヴィツヒさんのAICを警戒してだと思う」

「だが、それでは決定打に欠けるではないか」

「ああ、うん。言葉足らずだったね。そもそもAICは第三世代兵器で、搭乗者の集中心に依存するんだ。だから、ああやって疲れさせてAICの発動を少しでも弱めようとしてるんだと思うよ」

そういうシャルの説明を聞いて一夏はなるほどと頷く。

「結局氷雨は接近戦を仕掛けるけど、その前にAICのリスクを減らしておくてことか」

「そう言うことだね」

セシリアも箒も理解したが、それでも箒はその戦略に納得はしていなかった。

「氷雨なら、小細工を使わずとも勝てるだろう」

自分の兄ならそれくらいできる、と言い放つ彼女は別に兄だからこんな評価をしていいわけではなく、前回ラウラとの戦闘で見せた剣戟を鑑みてのことである。

「懐に入り込めば、確かに氷雨に分があるよな」

「ですが、その懐に入るために今こうしてリスクを減らしているのでは？」

色々意見は浮かぶも、その思考を断ち切るように試合が動き出す。

「つ、捕まった!?!」

驚きの声を上げる一夏。

「なんでしよう、今の動き……」

「直線的だったね」

セシリアとシャルはその氷雨の動きが気にかかった。

箒はというと。

「……………」

氷雨を心配するように無言でアリーナを見つめていた。

レールカノンが二、三度放たれると、見ていられず、箒は目を背ける。

だが、その次の瞬間には会場からは驚く様な声が漏れた。

「ベクターキャノン……」

「ここで展開ですよ!?!」

「あれは……」

データだけは知っていたシャルだが、現物を見るのは初めてである。なのであれがどういふものなのかを知らない。

その展開後から発射までの時間にレールガンが放たれる。

「間に合うのか!?!」

「こ、これは、分かりませんわ」

「え、え、どうなるの?」

そして、ベクターキャノンが放たれる直前にラウラは射線から離れる。

「……A I Cからは逃れたな」

「ですわね」

「でも……」

シャルはハイパーセンサーを起動し、氷雨を見る。そこから得られる情報には『シールドエネルギー残量100%』の文字。

「あと10%……」

「一撃でも受けたら終わりってことか」

一方、鈴は二組のクラスメイトとみていたが、その戦いに心中穏やかではなかった。

「(な、なんて無茶苦茶なことしてんのよあいつ！ 見てるこつちがドキドキするじゃないー！)」

そんな風に氷雨を心配するような表情をしていると、隣の女子がそれに気づいた。

「お、凰さん、心配してる？」

「はっ。」

「やっぱり心配だよね、彼氏」

「はあっ！」

その言葉に鈴は過剰反応する。大声を上げてしまったことで凶らずも周りからの視線を集める。

「え？ だっていつつも一緒にご飯食べてるし、毎日いちやいちやしてるし」

「い、いちやいちやなんてしてないわよ！」

「だって、篠ノ之くんいつも『かわいい』とか叫んでるでしょ？」

「うっ。それは、そうだけど」

それは事実であるため、鈴は反論できなかった。しかし、それは氷雨が勝手に言っているだけであり、鈴はそれを軽くあしらっていただけである。

「それって、もうカップル通り越して、バカップルじゃ？」

「んなっ!」

「あ、それ私も思ってた」

「私も……ヒヒツ……爆発しろって……思ってた」

「うちはもうビターチョコ持参してたで」

「浅はかなり」

「何勝手な事言ってるのよ！」

周りの女子も会話に参加する。何故か二組の中の共通認識として、鈴と氷雨は付き

合っているものとされてきた。故に、氷雨は別に代表候補生に囲まれているわけでもないのに他の女子からのアタックがないのだ。

……いや、確かに一夏より人気がないところもあるけどさ。今はそれはおいといていいよね？ ほら、イケメンって……ずるいじゃん？

「付き合ってないわよ。あいつはただの友達」

「えー、そうなの？」

「チツ……爆発……しない」

「そこ悔しがるところちゃうで」

「浅はかなり」

「なんなのよ、あんたたち……」

そんな中、一人何かを思案するように唸っていた。しばらくそうしていると、何かを思いついたように、手を叩く。

「決めた。じゃあ、私篠ノ之くんにあタックしてみる」

「は？」

「おお、大きく出たね」

「ちよ、ちよつとあんた、何言って……」

突然のことで戸惑いを隠せない鈴。氷雨にあタックすると宣言したクラスメイトは

鈴の方を見る。

「付き合っていないなら、別にいいよね？」

その言葉で、なんで自分が動揺しているのかという疑問に鈴は気づき、それを悟られないように顔を背ける。

「別に。勝手にしたらいいわよ」

そうやって再び、アリーナに目を向ける。

「え？」

そこには先ほどまでとはケタ違いの戦いが繰り広げられていた。

◇ ・ ◇ ◇ ◇

さて、少し講義をしておこう。A I C ……つまり慣性停止結界であるけれども、これは僕を動けなくするものではない。

いや、広義的には同じなんだけど、少なくとも僕が動こうとする意志は見せることができる。けれども身体は動かない。それはどうしてかと言われると、この空間内で使用者が捉えた物体の加速度と反対の加速度を同時に与えるからだ。

物理の話みたいになるけど、同じ大きさで反対方向の力が加わればその力は打ち消し合って、力を加えられた物体は動かない。これを空間として全方向から行っているからこそ、対象物の動きを止めることができるのだ。

まあ、イナーシャル（慣性）をキャンセル（打ち消す）というよりはアクセラレート（加速）をキャンセルしてる気がするけどね。

で、これは第三世代兵器だから使用者の集中力に依存するわけだけど、捕らえてしまえばあとはなかなか楽なものだ。じゃあ、どこで使用者の技量が必要か。

それは初速度。

初速を止めて制止させてしまえば、後は結界が加速を阻止する。なら、その初速を見せなければ捕まらないわけだ。

「ペイルライダー、ミサイル全弾、ラウラの前方足もと！」

『了解。三連ミサイル、全弾発射』

両足から全弾6発のミサイルが放たれる。それは地面に着弾し、視界を覆う広範囲に砂煙を作る。

「ふん。こんなもの目眩ましにもならん」

その通り。ハイパーセンサーには熱を検知して視覚化するシステムもある。

だけど、これで正確な初速は測れない……かもしれない！

『適当ですか』

「突っ込むよ！」

加速しラウラに迫る。もちろんラウラは僕の位置を把握している。もしかしたら、熱

探知の位置情報から速度を求めているかもしれない。

「もらった！」

「二度も突っ込むわけないでしょ！」

距離感はもう分かっている。その効果範囲のぎりぎりまで地面を蹴りあげ、砂をラウラの顔に飛ばす。

「ちっ」

本来ならI Sを装着している上で砂なんてものは大した障害ではない。

だが、乗っている人間の反射がそれを許さず、ラウラは目を閉じる。

「懐に入らせてもらったよっ！」

「小賢しい真似を！」

小細工上等だよ！

低い姿勢から振りあげるようにビームブレードで切り払う。

ラウラは展開したビームトンファアでそれを弾き上げる。

僕は振った勢いのまま回転し、逆の手に持つビームブレードで再度同じ方向から切り払う。

ラウラも逆の手のビームトンファアを弾き、肩からワイヤーブレードを放つ。

それを避け、片腕のビームブレードを収納し、ワイヤー部分を掴む。

「はいだらー!」

「くっ!」

掴んだワイヤーを思いっきり引く。少し体勢が崩れたラウラの腹部にその勢いのまま蹴り飛ばす。女の子のお腹蹴るなんて最低な行為だけど、試合だからね!

「ごめんね!」

ワイヤーを放し、再度展開したビームブレードで切り裂く。

蹴り飛ばされ、距離が開いたままのラウラが低い軌道でワイヤーブレードを放つ。その二本のワイヤーブレードをビームブレードで下に弾き、踏みつけ、ワイヤーを断ち切る。

「ペイルライダー、出し惜しみはなし。ホーミングランス起動」

『了解。ホーミングランス、レディ。目標、ロック。BT偏光射撃、適応』

「ファイヤー!」

通常はマルチロックオンに対応している砲門数のレーザーが弧を描き、一斉にラウラに振りかかる。

「こんなものまであるとは!」

懸命に回避するも避けきれず、レーザーはラウラのシールドを削る。

AICにBT兵器は相性がいい。何故か。それは最初に述べたように、初速を止めら

れないからだ。BT兵器はその性質上、一つの物体ではなく、無数の粒子の流れがレーザーとして放たれている。よって、それを止めるにはその全てに運動量と逆の力を加えなければならぬのだ。

しかし、ラウラもやられているだけではない。レールカノンが僕をロックし、放たれる。

「それに当たる僕じゃないよー！」

横向きに瞬時加速を行い、その射線からずれる。反撃をさせないよう、すぐさまホーミングランスを放ち、手元でビームブレードを連結させる。

「へアッー！」

『なんですか、その声』

左手のマニピュレーターで高速回転させたブレードを振りかぶり、レーザーを追わせるようにラウラに向けて投げつける。

「くっ。だが、この程度っ！」

AICは使えずとも、ラウラは千冬さんに鍛えられたパイロットだ。いくら偏光射撃といえど、二度は当たらない。

レーザーを避けきったラウラは手をかざし、回転するビームブレードをAICによって止める。

「これで、貴様の得物はもうないぞ」

「それはどうかな？」

ブレードと共に接近していた僕はラウラから引き裂いたワイヤーブレードの端を振り、突き出された右腕に巻きつける。

「カモン、ラウラー！」

「なっ！」

引くとラウラのA I Cは効果を失い、ビームブレードは落下を始める。

その落ちるビームブレードの柄を蹴り飛ばす。

「ぐっ」

右手を引かれ、体勢の崩れた所に来たビームブレードを防ぐことはできず、シールドエネルギーを減らしていった。

ワイヤーを手放し、ラウラに肉薄する。シールドに弾かれたビームブレードを受け取り、篠ノ之流双剣術の舞をラウラに刻む。

その剣は舞であり、その剣は流れを作る。流れに逆らおうと足掻けば足掻くほど、その足は深みにはまり、足もとを掬われる。あらがっていると思っていたら、気付けば流れの一部になっている。その流れを遮るは線では不可能。故に、剣と剣の戦いに置いて篠ノ之流双剣術を止められるものはいない。

ラウラの振るう剣戟は全てが意味を成さず、ただ流される落葉と同義だ。
「だから、気付けば追いつめられる」

「シールドエネルギーが……」

それに気づき、ラウラは一旦距離を取ろうとする。

それに続くように僕も加速するが、その加速は思わず止められてしまう。

そう。停止結界に阻まれたのだ。

「はあはあ。ようやく、捕まえたぞ」

「……」

ラウラはもう何が来ても勝てるようにレールカノンを構えている。そこにはきちん
とりロードされた弾が入っており、後はラウラの任意のタイミングで放つことができ
る。

「チエックメイトだな……篠ノ之氷雨」

「……」

十三話 Wer lieh seine Hand f

▪ r sie?

アリーナ。

それは誰から見ても決着がついていた。

それもそのはずである。氷雨の駆るペイルライダーのシールドエネルギーは残り10%。これまで攻撃を受けずにラウラを追い詰めるまで行ったものの、遂にはAICに捕えられてしまう。

もし、ここで先ほどと同様にベクターキャノンを展開したとしても、その瞬間向けられた銃口から装填済みのレールカノンが残りのシールドを削り取るであろう。

ゆえに誰しもがこの試合の決着をそこに見たのである。

それは当事者であるラウラとして例外ではない。

勝ちを確信する彼女は自身の掌の先にいる氷雨を余裕の表情で見据える。

「篠ノ之氷雨。勝負は決した」

そのラウラの声はオープンチャンネルで氷雨に届く。

「そして、私はさっきの戦いで確信した。貴様、いや、篠ノ之氷雨、お前もまた教官と同

じだ」

その声に試合開始時のような侮蔑は籠っていない。眼前にいるのが女装した氷雨であつてもである。

教官と同じであると語るラウラ。

「お前はこのような場所に留まっているべきではない」

その言葉を聞き、氷雨もまたオープンチャンネルに声を乗せる。

「それは、どういう意味？」

「そのままの意味だ。このような場所では、お前の能力は活かしきれない」

能力……この場でのそれは、純粋な戦闘技能を指すのであろう。残り一発、そんなわずかなエネルギーであるにもかかわらず、その一撃が与えられず追いつめられる過程で見た篠ノ之氷雨という人間の強さ。

それはラウラの考えを変えるに足るものだったということだ。

「ここにいるのはISをファクションか何かと勘違いした、認識の甘い連中ばかりだ」
その声はただ馬鹿にしたものではない。何かを危惧し、氷雨を諭すような声色であつた。

「競争意識がなく、真剣に訓練に取り組まず、楽しそうにISに触れる」

IS学園で目にする光景は、自分がいた軍とは当たり前であるが違う世界。だが、生

まれた時から軍に生きること定められたラウラであるから、軍の価値観がラウラの世界を形成する絶対の基準であった。

故に認められない、許容できない。

「ISとはそんな顔で扱うものではない！ それを理解できていない人間に与えるには大きすぎる力だ！」

兵器として最強。ISに対抗するものはISしか存在しない。

そう謳われるほどの大きな力を、学園という形で使い方を教える。

「選ばれた人間しか使うべきではない。自分の未熟さから目を背け、周りに流され現状をよしとするような連中の集まるこの学園に……」

選ばれた人間……その言葉を発すると、蘇るのは昔の自分。選ばれなかった自分だ。

それと同じような力しか持たない者たちが、嬉々として笑うこの学園は、彼女にはどう映っていたのだろうか。

「教官やお前はいるべきではない！」

その言葉は氷雨だけでなく、専用機を持つ者たちの全てが聞いていた。

ある者はそれを肯定するだろう。

また、ある者はそれを否定するだろう。

あるいは、理解することなく一蹴するかもしれない。

そんな中で、氷雨の胸には一つの解が生まれている。

「ドイツへ来い。我が軍なら、お前の本当の力を活かすことができる」

「就職難のこの時代に、ありがたいオファーだね」

その放たれる肯定の言葉にラウラの表情は少し緩む。

「では……」

「だが、断る」

しかし、氷雨から紡がれたのは拒絶の言葉だった。

「だいたいは理解したよ？ 周りのみんなのレベルが低いから、僕のレベルに合った場所に連れて行くこうって感じでしょ？」

本質はそこではないが、氷雨はわざと表面だけを掬いとりまとめる。

「でもさ、僕は別に好きでここに入ったわけじゃないし、僕の意味で出ることはできないんだよね」

「それができるなら、来ると言うことか？」

「え？ そんなわけないじゃん」

氷雨は笑い飛ばす。

「もし、国が良いよって言っても僕はいかないよ」

「っ！ 何故だ！ そこまでの力を持っていて、何故このような場所に留まろうとする

！」

「力があるからって、戦いたいわけじゃないでしょ？」

そもそもISの軍事利用は禁止されているはずである。わざわざ軍に入る意味が、果たしてあるのだろうか。

「それに！」

その怒声にラウラはビクリと身体を震わす。

「ドイツ軍に、鈴ちゃんはいないじゃないかああああ！」

「なっ！　だ、だが、教官は連れて帰らせてもらう。それが約束だからな！」

「……」

ラウラが見据える先にある水雨ヘレールカノンが火を吹く。それを避ける術を持たぬ目の前の水雨は、その弾丸を無抵抗に受け、試合終了のブザーが鳴る……

「ところがぎつちよん！」

……はずであつた。

「なっ!」

声がるる方に居たのは、徐々に光学迷彩の剥がれる氷雨の姿であった。そして、眼前に迫るは空間圧縮破砕砲。

「チエックメイトには、一手およばなかつたね」

「貴様ああああ!」

光はラウラを飲み干し、残りのエネルギーを根こそぎ削っていく。

そして、試合終了のブザーは鳴り響いた。

◇・◇◇

ラウラの敗因は二つ。

一つは追い詰められて、ちゃんと確認しなかつたこと。

A I Cが発動した瞬間、僕はデコイを発動させた。捉えられた身体は装甲に圧力を加え、生成されるデコイが肩代わりしてくれる。展開装甲の試作システムということもあつて、発動には予備動作がいらぬ。装甲を加圧し、表面をデコイとして分離、その上で分離面から光学迷彩の粒子を纏い、僕は退避する。

デコイが I S のシステム系にハックして誤認させていることもあつて並大抵ではばれないにしても、動きがなければすぐに偽物とばれる。

だけど、相手の動きを止めるといふ A I C ならどうか。

動かないのは当たり前だから、何の疑問も浮かばない。そこにつけこんだのが今回の作戦。

だとしても、すぐにレールカノンを撃ちこめば違うことは分かる。だから、もう一つの敗因は勝ちを確信してベラベラと口上を垂れたこと。

いや、それもプライベートチャネルなら良かったんだ。一対一の通信なら、発信源が正面のデコイとずれていることに気づくだろうからね。

でもラウラが行ったのはオープンチャネルだ。

恐らく、他の専用機持ち達にも言いたかったからなんだろうけど、それは失策だったね。

……確かに、この学園は守られ過ぎている。生徒たちはISがどれほど社会に影響を及ぼし得るものかを理解しきれていない部分はあると思う。

でも、それでも、ISを学ぼうという意欲だけは本物だ。……一夏が関わりと別だけど。

「悪く思わないでね。僕は、この学園が好きなんだ」

そこに千冬さんも欠けてほしくないだけなんだ。

『お見事でした』

「ダメーじ受け過ぎちゃったね。後でメンテするから許してね」

『はい。お疲れさまで——』

そこでペイルライダーの言葉は途切れる。

「どうしたの？」

『高エネルギー反応検知。氷雨、戦闘準備を』

「え……。あ」

そう。ここで終わるほど、ISという世界は甘くなかったのだ。

◇・◇◇

光に包まれる中、ラウラの意識はコアネットワークに沈んでいった。

「負ける……この私が……」

シールドエネルギーがなくなるのは確かに見た。あの兵器は残るエネルギーを全て奪い去っていったのだ。

「いや……だ……」

沈んでいく意識は抵抗を受けながらゆっくり闇に落ちて行く。海の底に落ちて行くような感覚。水面を輝かせる光は次第に遠くなり、自身を照らしてはくれなくなる。

「消え……ないで……光……」

どんなにすがろうとも、今度は手を差し伸べられない。自分を光の元へ引き上げてくれる、あの頼もしい手は見つけられない。

また自分の周りを包む闇に身体は震える。

「(また……またあの頃に戻るのはいやだ……また……)」

『M·chtest du die Kraft? (力が欲しいか?)』

手が差し伸べられる。もうラウラは光のある方向がどちらか分からない。その手が差し出されているのは上なのか下なのか右なのか左なのか。

「戻りたくない。そのためなら、私に……力を！」

差しのべられた手はどす黒く、しかし力強く、どこか教官を思い出させる手であった。

「(私に……また、光を……)」

その手を強く握り、安心感を覚える。

それが導くは、どこまでも暗い、底なしの闇であることも知らずに。

十四話 差し伸べられるは誰の手か

.....

「すっかり忘れてた!!」

『何をですか?』

鈴ちゃん馬鹿にされた所からもうラウラのVTとか、手加減とかポンつと抜け落ちてたよ!

ああ、どうしようどうしよう。う、うわあ、あのかっこよかったシュヴァルツエア・レーゲンがドロドロに溶けてもう跡形もないんだけど……。

形成されるのは千冬さんの動きをトレースした偽物。

「ま、まあ? 偽物だし? 数年前の千冬さんの動きだし? い、今の僕の方が数段強い

よね」

そう思っていたら、一瞬で肉薄される。

「っー」

振り下ろされる剛の剣は受けとめられそうもない。

「い、瞬時加速ー」

横に吹かし、回避したうえで距離を取る。

『どうしました?』

無言で手を横に振る僕。

「いや無理無理無理無理」

え、あれ、本当に偽物? めちゃくちゃ早いんだけど。

「というか、え? 表示ミスかな? ラウラのシールドエネルギーが……」

『はい。回復しています』

馬鹿なんじゃないかな?

「いや、もうベクターキャノン使えないよね?」

『そうですね。砲身の排熱には時間がかかります』

「だよ……ねっ!」

会話中にもVTトラウラは切りかかってくる。あ、でもモーションだけなら避けられないこともないね。

「いや、でもこれじゃじり貧なんだけど……」

増援待つ? それが賢明だよな。

『……いや……だ……』

? 今、声が……。

『また……あの頃に……戻るのは……』

「！ これって、ラウラから!？」

『発信源特定。はい、恐らくコアネットワークから直接のようです』

コアネットワーク？ つまり、今ラウラはそつちに意識があるの？

「ペイルライダー。これって結構まずい状況？」

『……防戦に専念すれば増援までは確実に持ちます』

「違う！」

振り下ろされる剣にビームブレードを添え、その剣の軌道を僕からずらす。

「ラウラのことだよ！」

『……普通では起こり得ない状況ではありますが、VTシステムの発動によって彼女の意識が取り込まれているのであれば……』

「バックステツポ！」

横に薙ぎ払われた剣を紙一重で避ける。あれは当たってたら絶対防御あつても骨が折れてたね。

『時間が経つにつれ、彼女の意識が戻らなくなる危険性は増します』

「っ！」

それなら、増援を待っている暇はない。かといって、このエネルギーじゃまともにや

り合って勝てる気はしない。

一夏がここに来て一撃で仕留めてくれれば万事解決だけど、これだけ経ってここに来ないということは誰かに止められているのかな？

「ペイルライダー、コアにラウラは取り込まれているんだよね？」

『意識だけです』

「前にさ、シャルにやったあれ、できる？」

『無茶です』

「できるんだね」

『無理です』ではなく、『無茶です』とペイルライダーは言った。つまり、危険はあるものの、できないわけではないのだ。

『……ですが、接触できなければリンクもできません』

「コアネットワークっていつでも繋がってるんでしょ？」

『システムの解除にこちらの戦闘システムの制御、どちらもを並行して行うとなると、接触は不可欠です』

なるほど。どちらか片方ならできるといふことか……。

「なら、ペイルライダー、僕の意識をあっちのコアに飛ばしてくれる？」

『正気ですか？』

威力を抑えた鋭い連撃が迫る。二刀のビームブレードをその一閃一閃に這わせ、当たらないように弾く。

「こつちのシステムを放棄されたら僕の体はひとたまりもないからね。それなら、僕がそつちをやるしかない」

『……了解しました』

え、ペイルライダーじゃ、防げないんじゃないかって？ 多分大丈夫だと……。

あ、意識が……遠のく。

『転送後は、彼女を思いながら進んでください。そうすれば、辿りつきます』

あ、はい。そんな胡散臭い空間だったのか、コア。



ざぶん。

そんな擬音が似合うような抵抗を全身が受ける。光は届かない。厚い厚い水が阻み、光が失われている世界が広がっている。

「ラウラ……こんな世界に、君はいたんだね」

あの頃に戻りたくない。それがここ。千冬さんはこんな所からラウラを救い出したって言うの？

それは途方もない深さだった。僕の体感時間と現実の時間が一緒ではないことを祈

りながら、ラウラの元へ急いだ。

そして見つけたラウラは誰かの手を握り、丸まって震えていた。

「ラウラ？」

その声に彼女は反応しなかった。聞こえていないのだろうか。しかし、返事の代わりにラウラは呟く。

「いやだ……暗い……私は……強い」

「ラウラ！」

もつと近づく。もう直接引つ張るのが一番だよな？

だが、それは何者かの手によって阻まれる。

その手の主に目を向ける。光が僅かしか届かないのでうつすらとしか捉える事ができない。だが、よく目を凝らせば見えた。この手は千冬さんの手だ。それも、全身真っ黒の。

「ホラーだよー！」

そんな突っ込みを入れつつも、どうやってラウラを連れ戻すかを思案する。

「ラウラ、君は十分強い。だから、もうそんな手にすがる必要なんてないよ！」

「私が強い……」

お、反応した。

「そうだよ。ラウラは強いよ！」

「だが、私は負けた。負けたら……また、あの頃に……あの頃に帰ってしまう」

「あの頃？」

「いやだ……あの目は……もう……」

「……まで追い詰められる、それはどれほどの痛みを伴っていたのか。それでも、その目はここには無い。今のラウラに、そんな目を向ける人はいない。」

「今は今でしょ!? 昔のことばかり気にしてどうなるって言うのさー!」

「私は、教官に憧れ、教官みたいになりたいくて……」

助けてくれた、自分を闇から救ってくれた人だから、千冬さんみたいになりたいのは分かる。だからって、こんな形で手に入れても、意味はないよ。

「あの時差しのべられた……あの手に……」

ラウラはまた昔に戻ってしまおうと、そう思ってまた千冬さんに縋っている。そんな弱みに付け込んだVTシステムがこのホラー千冬さんなのか。

「もう、昔に捕らわれる必要なんてないよ。今のラウラにその手は必要ない」

その手はどう見ても悪魔の手だよ。力つて言うのはそんなポンつと渡されるものじゃないよ。……て、僕が言っても説得力に欠けるね。転生者だもの。

「あの頃を忘れてしまったら……今の私が崩れてしまおう……」

痛みを伴った記憶は、いつまでも忘れられない。嬉しいことや楽しいことは綺麗に忘れてしまうのに。……いや、転生者なんて一生分の過去を捨ててますけどね？

「大丈夫だよ！」

僕は声を張り上げる。ラウラの弱気をかき消すように。

「え……」

「その傷は、ラウラが忘れようとしたって消えはしない。消えないで残って、それでラウラの今を支えてくれるんだ」

なんだか自転車を頑張ってこいでいた頃を思い出す。何度もこけて、擦り傷をたくさん作って、それでもまた前に進もうとして……。そうやって乗れるようになったその結果は一生モノなんだ。

「それでも、まだ立てないなら、手くらい貸すよ」

僕ができることはそれくらいのもの。黒千冬さんに阻まれたつも、精一杯ラウラの方へ手を伸ばす。

「僕の手は千冬さんほど優しくもない。どこかに連れて行ってあげること、連れ出してあげることできない」

ラウラは僕の手を見つめる。僕の手は千冬さんほど頼もしそうには見えない。それでも、僕は思い切り伸ばす。

「でも、進みたい場所に行くための手伝いくらいはできるよ」

引つ張つてはいかない。並んで歩こう。こけそうになつたら支えよう。迷つたら一緒に迷おう。それだけしかできないけど、それだけで変わるはずだ。

「……その手は、私をまた光の元へ連れて行つてくれるのか」

「ラウラが望むなら、僕は一緒にいくよ」

そして、ラウラは黒い手を放し、僕の手を握る。

「暖かい……」

僕は握つたラウラの手を手繰り寄せる。

「戻ろう」

「ああ」

小さなその手は僕の手を強く握る。それに少しでも答えたくて、僕はそれを握り返す。

振り返ると、黒千冬さんが僕らを見送る。それは次の瞬間溶けるように崩れ、一人の少女が現れる。

『ラウラちゃんを、よろしく』

声が聞こえた。

誰のものか分からないその言葉に僕は頷いた。

アリーナ。

『流石に千冬のトレースですね』

対面する二人であるが、その位置関係がどちらが優勢かを物語っている。

アリーナの端を背にするペイルライダー。そしてそれを追い詰めるように構える千冬の紛い物。

『ここまでのようですね。私としては上出来の時間稼ぎではないでしょうか』

鳴りやまない警告のアラームが、エネルギーの限界を訴え続ける。

このまま攻撃が来れば、搭乗者である氷雨の身体は無事では済まない。

しかし、そんな事情、向こうからすれば関係のないものであり、ただ対象を屠るために剣は振り上げられる。

だが、そんな危機的状態にペイルライダーは焦りもしない。それは別に氷雨の身体がどうなるうと、コアである自分が傷つくことはないとか、そんな考え故ではない。

確信があつたからだ。

『ええ、上出来の時間稼ぎでした』

そうペイルライダーが言うと、今まで形を保っていた黒い物体にピシリと亀裂が入る。

それは次第に全身に広がっていき、ついには瓦解を始める。

『お帰りなさい、氷雨』

帰ってきた主に挨拶をする。おくびにも出さないが、それでも心配していたペイルライダーであり、無事に帰ってきたことに安堵している。

「ただいま、ペイルライダー」

ただ返事を返すだけの氷雨も、ペイルライダーが自身を心配してくれていたことに気づいている。

「心配した？　心配した？」

『うるさいです』

氷雨は自分の手を開いたり閉じたりして、帰ってきたことを確かめる。そして、瓦解を始めているシュヴァルツエア・レーゲンだったものに近づく。

自分を包む闇から解放され、倒れるラウラを氷雨は抱きかかえる。そのぐったりとした少女を抱えたまま、すでに限界であるペイルライダーを解除する。

「お疲れ様」

すでにスリープしているペイルライダーから返事はない。

「僕も、ちよつと休憩……」

ようやく来た増援を目にし、安心した氷雨はそのまま後ろに崩れ、意識はまどろみに

吸い込まれていった。

十五話 事後処理回

保健室。

そこに居るのは、ラウラと千冬であった。

あの後、駆けつけた教員たちによつて、氷雨とラウラはこの保健室に運び込まれたのだが、氷雨は早々に目を覚まし、教員たちの制止を聞き流し、何故か時間を気にしなから走り去つていった。

故にここに居るのはラウラと、二人の様子を見に来た千冬だけしかない。

意識を取り戻したラウラは、千冬に問いかける。

「私は……何が起きたのですか？」

「……重要機密だ。あまり多くは口には出来ん」

「ですが、私は当事者です」

そう言われてしまうと、千冬も何も言えず。一息をつき、ラウラを見据える。

「VTシステムは知っているな？」

千冬の問いにラウラは頷く。VTシステム、それはIS世界大会の優勝者であるヴァルキリーの動きをデータ化し、再現するというものだ。

「ですが、あれは……」

「そうだ。条約で使用は禁止されている。だが、それが今回お前のISに組み込まれていた」

ラウラは言葉を発しない。

あの手を思い出す。力を欲したが故に、千冬のようになろうとしたが故に、それは発動してしまった。

「巧妙に隠されてはいたがな。操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして操縦者の意志」

「意志……」

「ああ。それらが揃うことで、VTシステムは発動する」

その言葉にラウラは目を伏せる。

「……氷雨、篠ノ之と戦って、どうだった」

突然の言葉にラウラは驚き顔を上げる。少し言葉に詰まったラウラであったが、真っ先に出了た言葉は――

「強かったです」

それだった。

「そうか」

「はい。教官に認められているのも納得がいく実力でした」

そう答えたラウラに千冬は苦笑する。

「? なにか、可笑しかったでしょうか」

「いや。私があいつを認めているのはそこではないさ」

千冬の言葉にラウラは疑問を抱く。だが、どこかその答えに納得している自分もいた。

「確かにあいつは強い。だが、それだけならまだまだ上はいるだろう」

そんな尺度で人は語れない。そんな当たり前の感覚も、ラウラには新鮮なものである。

「それでは、教官は氷雨のどこを認めているのですか?」

「一途さだな」

その千冬の返答に、ラウラは困惑する。

「あいつは何事にも一途に行動している」

「……: どういうことですか?」

「迷いが無いのさ。自分の決めたことに迷いが無い。だから強い」

「迷いが無い……」

それが、氷雨の強さ。そう言われて、なんだか納得するラウラ。

「別に見習えとは言わん。だが、お前も自分で疑うことのない何かを見つけてみる。そうすれば、そんなものに惑わされることはなくなるだろうな」

そんなもの、VTシステムに惑わされれない……。

ラウラの中に一つ、答えが生まれたのであった。

◇・◇◇

ところ変わって僕は束さんとの待ち合わせ場所に来ている。

え、なんで束さんなのかって？ シャルの問題解決の顛末を聞くためです。

でもね、それなら別に電話でもいいと思うんだけど、なんか……直接……この格好を、みたいからって……。

「女装で来てるんだよね！」

『変態野郎……いえ、失礼しました』

「ほんとに失礼だよ」

別に僕が変態なんじゃなくて、束さんが変態なんだよ。そうそう。こんな恰好させる人の方が変態なんです！

『変態貴婦人』

「そこ!?! いやいや、そこは問題じゃないですよ、ペイルライダーさん!」

確かに今の僕は野郎じゃないけど、あ、いや、待つて。野郎であつて。別に僕の性

別は変わってないよ。

『大体、何ですか。何故、女性用の制服を持っているんですか』

「え、千冬さんがくれたよ?」

『千冬はまともだと思っていました』

いや、別にその認識は間違っていないと思うんだけど。

「だってまともな理由だったし……」

『どこがですか?』

そんな会話をしていると、向こうの方から特徴的なうさ耳の女性が走ってきた……ポルト並の速さで。

「おつまたせー!!」

「速い!! 速すぎる!!」

『世界記録を何だと思っているのですか』

「まあまあ。東さんは細胞レベルで天才だからね」

端から聞けばバカみたいな言葉なのに、東さんが言う事実だから何も言えなくなる。

「それで、どこに移動する? その辺の喫茶店とかでいい?」

「おお! ひーくんは全然女装に恥じらないんだね」

いや、もう何回目だよって感じだから……。

「じゃあ、あそこに行こうよ」

「あそこ？」

僕は別にこだわりがないから東さんについて行くことにした。

でも僕は油断していたんだ。東さんが何も企んでいないはずがないのに……。

「お帰りなさいませ、お嬢様！」

「タイム！」

「認めません！」

『諦めましょう』

可笑しい、可笑しいよ、カテジナさん。

状況を整理しよう。

メイド喫茶に、女装姿で、真面目な話をしに来た。

なんだこの不協和音……。真面目な話をするようには見えない状況だよ！ ていう

か、女装でメイド喫茶って、何の罰ゲームだよって感じじゃないですか……。

「ほらほら、ひーくん早く」

「分かったよ、東姉」

東さんに急かされる形で席に着く。メニューを開くと、なんともファンシーな色合いが目についた。

「ひーくん。東さんはこれね」

「ん、分かった」

メニューを指差され、僕は了解する。

「あ、すいませーん」

「はい、ご注文はなんでしょうか、お嬢様？」

小首を傾げ注文を聞いてくる。あざといメイドさんだね。

「あ、このあちゅあちゅブレンドコーヒーとおえかきオムライス下さい」

「かしこまりましたー」

語尾を伸ばしつつ、注文を取ったメイドさんが消えていく。

「ひーくん、お腹すいてるの？」

「お昼食べてないからね」

まあ、注文が来るまで時間があるだろうし、先に聞いておこうかな。

「で、どうなったの？」

「どうなったも何も単純だよ」

東さんの語る顛末はこうだ。

そもそも、シャルの罪というのは学園に提出する書類を偽っただけだ。入国時のパスポートも本物であり、性別を偽ったりもししていない。ただ男ものの服を着ただけの女の子であっただけ。

なら、対処するのはその学園に提出した書類に関するものと、フランスのバックに関してだ。

日本政府に対しては、学園でシャルが男装をしていたことを見逃せという。

もちろん政府は「公の場で世間を混乱させるような行為を見逃すことはできない」と断る。

しかし、今日公の場で僕が女装する。

それを見逃さないということは、僕にも罪を問うということかと半ば脅しの様な言い方そする。

政府は渋々シャルを見逃すことに。

ただし条件で、今後の男装は認めないということだった。

「なんだか力押しすぎない?」

「そもそも、学園は治外法権だからフランスの代表候補が学園内で性を偽っても日本政府は裁けないからね」

なるほど。……ん？

「じゃあ、なんでそんなことしたの？」

「治外法権だからって国から言われたら学園も何らかの処罰をせざるを得ない。だから先に芽を摘み取ったわけだよ」

「ああ、それで僕が女装させられたってことなのか」

「え、それは私がさせたかったからだよ？」

おい。

「お待ちせしました、お嬢様。こちらあちゅあちゅブレンドコーヒーになります」

「あちゅあちゅですか」

「あちゅあちゅです」

「らめえ、ご主人さま、そんな熱いの入らないいい、つてくらい熱いですか」

「もつと熱いです」

「もつとですか」

「はい」

「……」

「……」

そうやってクールなメガネメイドさんは去っていった。

「はい、東姉どうぞ」

「ひーくん、面白い方に成長したね〜」

東さんに面白い認定されました。これは喜ぶべきなのでしょうか？

「あ、でもフランスの方はどうなったの？」

「そっちはホントに単純だよ」

ほんとに単純とは、どういうことだろうか？

「フランスの二番目に大きい I S 関連企業に……」

「うん」

「第三世代の技術を上げた」

「うおおおおおおいいい!!」

それ一番やっちゃいけないことじゃないですかああ！

「アウト！ それはアウト！」

「なんで？ 第三世代の技術くらい時間があればどこでも作れるしいいじゃん」

いや、そりゃ東さんからすればそうかもしれないけど……。ていうより、その時間がないからデュノア社は大変だったんじゃないですかねえ？

「まあまあ、もう上げちゃったし、それはいいでしょ？」

「いや、いいのかなあ……」

「大丈夫。ちゃんと条件も付けたからね」

「条件？」

第三世代機の技術を上げるとなると、それなりの条件なら飲んでくれるということなのかな？

「二つ目にデユノア社を買収して傘下に置くこと」

「二つ目で問題解決しちゃってない!？」

「そんなことないよ。傘下に置いてはまだそのフランスの候補生はその娘のままです。しよ？」

まあ、そこまでなら親権はデユノアにあるし、国とグルであるなら支援を止めて強制的に帰国させることもできるのか。

「だから二つ目に、その第三世代機のテストパイロットをその子にしろって言うたのだ」

「？ それで何が解決するの？」

「ひーくんもまだまだだね」

東さんがにやりと笑う。僕は紡がれるであろう言葉を息をのんで待つ。

「つまり——」

「お待たせしました、お嬢様。おえかきオムライスになりまーす」

「あ、こつちです」

手を上げて示すと、僕の正面にオムライスが置かれる。

「何を書きましようかー?」

「あ、ブラブレのティナちゃんできますか?」

「はい。お任せ下さい!」

そう言つて数分で出来るティナちゃん。おお、完成度高い。主に前髪の。

「これは食べられないな」

「ありがとうございます、お嬢様。ごゆっくりどうぞ」

そう言つて離れていく元気そうなメイドさん。

「あ、束姉続きどうぞ」

「むー、邪魔が入るな」

そんなこと言うならもつと違うところであればよかつたんじゃないかと思うけど、言わないでこつち。

「じゃあ、続けるよ? フランスで唯一の第三世代機、これのテストパイロットになつたら、そのフランスの子の専用機は?」

「え、その第三世代機でしょ? もぐもぐ。あ、おいしい」

「そうそう。だから、そんな専用機を持った子を国が手放したいとは思わないでしょ?

東さんにもちよとちようだい」

「そりやそうだよね。……あ、ということはフランスはシャルを代表候補生から外せないわけだ。はい、あーん」

国内唯一の第三世代機持ちを一企業のテストパイロットのままにするわけにはいかない。

「あーん、もぐもぐ。そういうこと。これで国からのバックアップの確保したし、デュノア社の社長も口出しできないでしょ」

「口出しできない?」

「だって、娘のバックは自分の親会社が付いているんだよ? 下手なことできなくなっちゃうよね」

な、なんともいやらしいやり方だなく。

「そういうわけで、解決!」

「ありがとう、東姉!」

ひし、と抱き合う。ん? でも何か忘れている様な気がする……。

「じゃあ、二つ目をお願いをしようかな」

「忘れてた!」

シャルの問題は解決しても、僕の方はまだまだ解決しないようだった……。

十六話 ReStart

その日の夜。

帰ってきた時間はもう夕食時を過ぎていた。

ペイルライダーから学園の状況を聞く限りでは、ラウラの暴走により、学年別トーナメントは中止。しかし、スカウトなどが関わる大事な行事である点を鑑みて、一回戦だけは全て行ったらしい。

つまり、鈴ちゃんと同夏も戦ったみたいだけど、結果は一夏の勝利。何がどうということはない。実力で勝ってしまったのだから驚きだ。

最後の決め手は弾かれた零落白夜の柄を蹴って切りつけるという。あれ？ それ僕がやったやつじゃない？ 一回見ただけでとっさに真似たの？ ニユ、ニユータイプとでもいうのか……。バナージいいいい！ あ、リデイお前絶対許さない。マリーダさんのことは絶対に許さない。

それは置いといて、なんか、既視感のある戦いだけど、ゴーレムは現れなかった。

まあ、その元凶である束さんは一緒にいたわけだから、何も無いのが当たり前なんだからね。

あの後の束さんからの頼みごとで疲れ切った僕は未だ食堂に居るのか、誰もいない自室のベッドに倒れ込み、まどろみを楽しむ。

「ああ、気持ちいい」

二度寝が気持ちいいのはこの半分意識があるかどうかと言う感覚があるからだと思ふよ。なかなかやめらんない。

「寝ちゃってもいいかな」

『今日は色々ありました。寝てもいいでしょう』

ありがとー。なんでペイルライダーの了解をもらってるのか分からないけど。僕はこうして眠りについた。



夜。

自室。

どれくらい寝ていたのか分からないけど、起きたら目の前にシャルがいた。

うん。正面。真正面。眼前。

「……おはよう、シャル」

「お、おはよう、氷雨」

あゝ、これって僕の顔をうかがってた感じかな？ 朝の一件の後、いきなりいなく

なって、今になってここでもぼったり倒れてたらそりゃ心配してくれるよね。

……いやいやいや、ちよつとこの距離は無理があるわ。どう見てもあれだよ。ラブコメに良くある、寝ている間にキスしようとしたら寸前で目が覚めて気まぜくなるあの展開だよ。

「あのお、シャル？」

「な、なに!？」

驚き、顔を赤く染めているシャル。

「なにをしようとしたの？」

「え、えつとその……さつき、アルカディア社って言うところから連絡が来てね」

アルカディア社？ えーと、話しの流れからしたらフランスで二番目に大きいI S 関連企業のことかな？ アルカディアって……ついに作者も頭をやられてしまったのかな？

「第三世代機のテストパイロットをしてくれって」

おお、東さんの言った通りだね。

「それで、色々説明を聞いて、ああ、これが氷雨の言っていたことなんだって」

これでシャルはデュノア社に囚われることもなくなったわけで、一安心ってところかな。

「だ、だから、その……お、お礼を……」

あ、ああ、なるほど。

そこまで聞いて、僕はシャルの肩を掴んで距離を放す。

「お礼なんていいよ、シャル。僕が直接やったことじゃないし、友達を助けるのは当たり前だもん」

「氷雨……」

「それに、シャルは自分のことをもつと大事にした方がいいよ？」

「え？」

身体を起こし、シャルと対峙する。顔が赤かったのは恥ずかしいのに無理してたからかな？　そこまでしなくていいのにな。

「男は狼だからね。そんなことしたら、襲われちゃうかもしれないよ」
手を上げて襲うようなポーズをとる。

「いいよ」

「……え？」

笑ってくれるかと思ったら予想外の解答が飛んでくる。

「氷雨なら、いいよ」

赤らんだ頬に上目使いで僕を見つめてくるシャル。な、ななな。

「え、あ、え!? い、いや、あの……あれ!」

そうして見つめていると、なんだか僕も恥ずかしくなってきた、頬が熱くなるのを感じる。

思考停止してどれくらい経ったのか。いや、実際にはそれほどの時間も経っていないのかもしれない。でも、僕はその無限にも感じられる時間、息もできず固まっていた。さしずめ蛇に睨まれた蛙だ。いやいや、逃げなさいよ、と言われても蛙の足では逃げられません。ご愁傷様でした。

この状態ではどちらも蛙で、どちらも蛇だ。どっちも動けない、というか動かない。

そんな時間の止まった空間の針を動かしたのは扉の開く音だった。

「お風呂上がったぞうって何してんだ二人とも?」

「な、なななななななんあななななんあ」

「日本語で話してくれよ、氷雨」

そんな動揺する僕を見て、シャルが息を吹き出し、笑った。

「あはは、冗談だよ、氷雨」

「ななな……へ? あ、冗談?」

や、やられた。まさかシャルにからかわれるとは。

「でも、感謝の気持ちはほんとだからね」

「もう……お礼なんていいのに」

「なんか分からないけど、氷雨見てたか？ 俺、勝ったぜ！」

「うん、全然見てなかったよ！」

「おい、堂々と言うことかよ、それ！」

「あはは」

ともかく、この平穩は守られたということ、今回の騒動は幕を閉じたのでした。



朝。

一緒に登校しようとしたらシャルは職員室に用事があるようで先に行ってしまった。

「わたくしの相手は一般生徒でしたから、本気が出せませんでしたわ」

「仕方ないんじゃない？ 専用機持ちは少ないしき」

昨日のことを心配してくれる人はあんまりいない。ていうか、『氷雨なら大丈夫だろう』って感じでみんな避難誘導にしたがってたらしい。おいおい……。

「つて、そういうえば氷雨さん。昨日はBT偏向射撃をしておりますでしたか？」

「うん」

そう言うとセシリアはぐつと僕に迫ってきた。近い近い！ なんなの？ 最近流

行ってるの？ 僕のATフィールド無視されまくりじゃないか。

「何故教えてくれませんでしたの!？」 わたくしがどれほど苦労していることか」

「い、いや、でもさ。セシリアも分かっているとと思うけど、あれ教えるどうこうの技術じゃないからさ」

「……まあ、そうですね」

僕の言葉に冷静になったのか、セシリアはちよつとしょんぼりした感じで離れた。怒られた時のわんちゃんみたいだね。

教えてあげたいけど、BT偏向射撃はホントに精神力に左右される技だからね。教える教えないってものじゃないんだよね。

「じゃあ、そんなセシリアに簡単な精神修行法を教えてあげよう」

「ほんとですか!？」

「ぱあ、と表情を明るくするセシリア。

「うん。簡単だけど、究極の精神修行だよ」

「きゅ、究極……」

真剣な顔になり、息を飲むセシリア。表情がころころ変わって面白いなあ。

「千冬さんの悪口を、言うことだ」

「お、織斑先生のですの!？」 ほ、本人の前ですか?？」

「いやいや。目の前で言ったら駄目だよ。それだと後の結末が分かりきっているから修業にならない」

僕の言葉に困惑の表情を浮かべる。え、セシリア、この短時間で哀以外の表情コンプレックスしてない？

「この始業手前の時間帯に、入口に背を向けて言うのさ」

「それだけでいいんですか？」

あ、セシリアは分かかってないな、この修行の恐怖を。

「いい。これは千冬さんだから効果があるんだ。千冬さんは気配もなく教室に来る。だから、僕らは視認以外に千冬さんが教室に来たことを認知できない。その視覚すら奪って悪口を言う」

僕の語気に押され、セシリアが真剣に耳を傾ける。

「言葉を発し、それが千冬さんに届いているか分からないか分からない。背後から出席簿が来る恐怖、緊張感。それが最後まで分からないからずっと気を張っていないければならない。つまり、筋肉で言えば遅筋を鍛えるトレーニングと言わけだ」

「な、なるほど！（遅筋？）」

あ、これあんまり分かかってない顔だ。

「……つまり、瞬発力のある筋肉じゃなくて、持続力のある筋肉を鍛えるってこと」

「いい、言われなくても理解していましたわ！　ち、チキンですわね！　クリスマスに食べますわ！」

もも肉だから一応間違っていない。

「まあ、何でもいいから始めようか」

「わ、分かりましたわ」

さてさて、セシリアはどんな悪口を言ってくれるのかな？

「お、織斑先生、いつも寝癖付いてますわよ！」

「弱い！」

悪口のレベルが低い！　それにあれは寝癖じゃなくてウエーブだから！　……ん？

千冬さんが自分でウエーブをかけるかな？　面倒くさがりだし、もしかしてほんとに

寝癖……。

「……や、やりましたわ。織斑先生に聞かれてませんわ！」

満面の笑みで振り返る。

「そうか。それは良かったな」

からの絶望の表情。

出席簿による制裁を受け、セシリアは涙目になる。あ、哀の表情。

「まったく。教師の悪口を言うとはな」

「ちなみに織斑先生」

手を上げて質問を投げかける。

「なんだ」

「その髪は自分でウェーブかけてるんですか？」

「……」

「それとも寝癖ですか？」

「HR始めるぞ。全員席に着け」

スルーされた。

席に戻る時セシリアに睨まれたのは僕もスルーしよう。

皆が席に付くと千冬さんは教卓の前に立ち、話しだす。

「転校生が一人来た。まあ、皆も知っている奴だ」

「それ転校生じゃないですよ。ある意味僕と同じ『転性者』なんちゃってね。……面

白くないですか、そうですか。

「入ってこい」

扉が開き、現れたのは女生徒用の制服に身を包んだシャルの姿であった。

「シャルル・デュノア改め、シャルロット・デュノアです」

その自己紹介に、一同は驚きを隠せない。まあ当たり前だよ。男だと思ってちやほ

やしてた相手がいきなり女でしたらって言われてもね。

「ど、どういうことですか!？」

その質問はもつともだ。

「……シャルには男性操縦者ということで狙われる可能性のある二人の警護という形で男装してもらっていた」

その答えにざわつく。なるほど。学園はそういう形でシャルを処理するつもりなんだね。考えた物だね、流石十蔵さん。

「だが、外の人間が多く学園に来訪する行事である学年別トーナメントは終わったよって、その任を終え、こうして再度挨拶しているということだ」

そこまで言い終えるとシャルが謝罪のため口を開く。

「今までみんなを騙すようなことをしてごめんなさい。厚かましいかもしれないけど、これからも仲良くしてくれると、うれしいです」

そう言って頭を下げるシャル。それに対するみんなの答えは拍手によって肯定が表された。

「逆に話しかけやすくなってラッキーって感じだよね」

「でゆっちはでゆっちはだからね」

「私は女の子でも一向に構わない!」

「涎拭きなさい」

「僕がガンダムだ！」

「これからもよろしくねー」

快く迎えられたことにシャルは嬉しそうな顔をする。

そうして、シャルは元々の自席に座った。

僕と一夏は顔を見合わせ、受け入れられたことに安心して笑いあつたのだった。

十七話 エピローグ

ドイツ。

軍の内部ではいつものように作戦会議が繰り広げられていた。

「う。うわああああ、心が、心がピヨンピヨンしない！」

「副隊長！ ごちうさはもう終わりました！ 立ち直ってください！」

「ふ、副隊長、報告です！」

「どうした。今副隊長は発狂中だ」

「そ、それがごちうさの二期製作が決定したとの情報が入りました！」

「なにっ！」

部隊員の言葉にクラリッサは即座に反応する。

「そ、それは本当か」

「はい。情報源はツイッターですが、写真に合成跡も見られず、事実だと思われま

スマホの画面をクラリッサに向け、その写真を示す。

「……この帯、きんモザの帯じゃないかあ！」

「ええっ！」

よく見ると帯には思いつきりきんモザの作者の名前が書かれていた。

「私のウサギは……いない」

「お姉様あああ！」

ちなみに、こんなクラリツサであるが、面倒見がよく、部下からの人望に厚く、親しみを込めて部隊員は『お姉様』と呼んだりもしているが、日本のアニメカルチャーが関わりと駄目になる。だが、部隊員にとってはそこも愛嬌なのだ。

と、そんなことをしていると、通信が入ってきた。

流石に副隊長、部隊を任されているだけあって、切り替えは早いらしく、すぐさま凛々しい顔つきになり回線をつなぐ。

「こちらクラリツサ・ハルフオーフ大尉」

「こちらラウラ・ボーデヴィツヒ少佐だ」

通信の相手が隊長であることで部隊に緊張が走る。ラウラが定時連絡以外の通信をしてくるということは、何かしらのアクションがあったからだろうと考えたからだ。

「何ででしょうか、隊長」

『……その、今まですまなかった』

その予想もなかった言葉に部隊の一同は驚きを隠せない。

「それは、どういう意味でしょうか」

『私は、私が強くなること、教官のように成ることに必死で周りが見えていなかった。そのせいで、部隊のことに気を配ることを怠り、クラリツサに部隊のことをまかせつきり……。隊長としての自覚が足りなかったと、反省している』

その紡がれる謝罪の言葉に、クラリツサは嬉しそうな顔になる。

成長したのだと、まるで保護者の様な感想を抱いてしまう。それは部隊員たちも変わらないように、自分たちより一回り小さいラウラが成長したことを喜んでいた。

『本当にすまなかった』

「……いえ、私たちはそのようなこと気にしていません。隊長は隊長なりに頑張っていることは皆が知っています」

ラウラはその言葉にありがとう、と感謝の言葉を述べた。

「それで、どうなさったのですか？ まさか、それだけということもないでしょう」

『ああ。相談したい事がある』

クラリツサはどんな相談が来るのかと身構える。

『気になる相手があった』

その言葉にクラリツサはピクリと反応する。そう、クラリツサのセンサーが反応したのだ。

「それは、男性ですか？」

『ああ』

クラリツサセンサーとは、日本の少女漫画を読みふけることによる擬似体験から形成された根拠のない恋愛センサーである。

『だが、私はこれがどういった感情なのか分からない。だから、どうすればいいのか分からないのだ』

「では、私の質問に答えてもらえますか？」

クラリツサはラウラに問う。

「その男性のことをいつも考えてしまいますか？」

『ああ、（その強さがどこからくるのか）考えている』

「その男性のことを目で追ってしまいますか？」

『そうだな。（どんな動きをしているのか）目で追っていたな』

「ここまでの質問でクラリツサはすでに確信していた。

「最後に、その男性のことを思うと、胸がドキドキしますか？」

『……』

その質問への解答にラウラは時間をかけた。その余韻が、クラリツサをさらに確信させている。

『そうだな。鼓動が早くなるのを感じる』

ラウラは学年別トーナメントのあの戦いを思い出す。あの時の氷雨の鬼神の如き攻めは思い出すだけで、ラウラの胸を高める。

「それは……」

クラリツサの目は輝きを増す。

「それは恋です！」

『恋……』

「そうです。相手をいつも考えてしまい、つい目で相手を追つてしまう。決定的なのは、相手を思うと胸がドキドキする。これらから、隊長の感じているものは恋であるにちがいありません！」

そう私のバイブルに書かれています、と心の中でクラリツサは付けたす。

『な、ならば私はどうすればいいのだ』

「それは、今からお教えしましょう。長くなるので、ゆっくりできる場所に移動してから、再度通信を繋いでください」

『分かった』

そう言い、通信は途切れる。

「皆、よく聞け！」

その声に部隊員は整列し、姿勢を正す。

「ごちうさは終わり、私たちの心は長らくぴよんぴよんしていません」

その言葉に何言つてんだこいつと首をかしげる者はいない。

「だがしかし、我々は再び心をぴよんぴよんさせることができる」

クラリツサの熱弁は終わらない。

「隊長という可愛い黒うさぎが我々のもとには帰つて来たのだ！」

その言葉に歓声が上がる。

「これより、我ら『シユヴァルツェ・ハーゼ』は隊長の支援に入る！」

そして、クラリツサの恋愛相談が始まるのだった。



休み時間。

午前の授業が終わりを告げ、隣ではぐったりと机に突つ伏す一夏がいた。

「……放課後は特訓の前に勉強会の方がいいかもね」

「いやいや、これでも結構勉強してるんだぜ？」

それは同じ部屋なので知っている。置いて行かれないようにと、晩御飯が終わると僕がテレビを見て笑っている横で復習をしたりしている。まあ、一夏が勉強を始めると流石に僕もそつと部屋を出て行き、鍛錬したりしている。

「でも、新しいところに来るとやっぱ一回じゃ理解しきれないんだよな」

「一回で理解できるほど簡単な内容じゃないからね」

そんなことを言いつつ、僕は後ろを振り返る。ラウラの席は空席だ。やはり昨日の今日、学校には来られないのかな？

とか何とか思っていると、教室の扉からラウラが入ってきた。

「あ、ラウラ」

良かった、元気そうだね。怪我とかしてるかとも思ったけど、そんなこともなかったんだね。

つかつかと歩みを進め、その進路は一直線に僕の方に迫っていた。

「？」

そのまま言葉を発することなく、僕の席の前に立つと、いきなり顎に手を回され、ラウラの顔が近づいてくる。

って、今回もこういう感じなのか！

「緊急回避！」

ギリギリのところまで顔を背ける。しかし、ラウラの方は止まらないわけで、柔らかい温もりが頬に伝わる。

「お、おいっ！」

そんな一夏の驚きの声を封切りに、クラスは騒然とする。

ざわつくクラスメイトなんて眼中にないかのようにラウラは僕の方を見据える。

「な、なに？」

「お前を……」

あ、このセリフ聞いたことあるような気がするぞ。

「お前を、私の嫁にする！」

その衝撃的な言葉に静まり返る教室。そしてワンテンポ遅れてそれに対する反応は現れる。

「「はあっ!?!」」

クラス一同、同じ反応でなんとも一組の団結力を感じるね！

て、そうじゃないそうじゃない。

「ラウラ、その嫁って言うのはおかしいと思うんだよね」

「なぜだ？ 日本では気に行った相手を自分の『嫁』と言うと聞いたぞ」

おのれ、クラリツサ。日本の文化を間違つて教えて……ないね！ その通りだね！
鈴ちゃんも僕の嫁！ だって僕も前世で言つてたからね。

「だから私はお前を嫁と呼ぶ」

そう言つて腕を組むラウラ。フンスと鼻を鳴らしそうなくらい堂々としてるね。

「いや、駄目だよ」

そう言つて僕は立ち上がり、ラウラの肩に手を置く。

「僕のこと……」

その前置きにクラス一同は息をのむ。

「お兄ちゃんと呼びなさい!!」

僕の言葉に、教室が再び静かになる。しかし、またしても反応はワンテンポ遅れてやつてきた。

「「はあつ!?!」」

「天井だね!」

そんな中、ラウラだけは神妙な顔つきになる。

「……お兄ちゃん。なるほど、了解だ、お兄ちゃん」

あ、これいいね。なんだか新鮮だよ。

「ちよつと待て!」

そう荒々しく立ち上がるのは我が妹、箒だった。

「箒もお兄ちゃんと呼んでみて?」

「氷雨は黙っている!」

うう、辛辣な物言いだよ……。実の兄になんて物言いなんだ……。

僕は沈み込んで机に突つ伏した。ああ、ひんやりして気持ちいいな。

「なんだ」

「なんだではない。嫁だとか妹だとか訳の分からないことを言つて……水雨の妹は私だ！」

え、デレた？

「ふん、貴様には関係のないことだろう。私はお兄ちゃんに話している」

「だから、そのお兄ちゃんと言うのをやめろ！」

うゝん。このまま箒とラウラの関係がこじれるのは避けたいけど、ラウラの呼ばせ方を変えることはできるのだろうか。……原作で散々一夏がやめろって言つても止めなかつたし、それは難しいか……。

「ラウラ、こういうときはこう言うんだよ」

僕は上目遣いで箒を見る。そして……

「お姉ちゃん」

精一杯可愛いと思われる声を出してみる。

「気持ち悪い」

『反吐がでます』

しかし、箒の反応は淡白なものだった。ペイルライダーの反応はいつも通りの様な気がするけど。

「ん、ここのか？」

そして、ラウラは僕の真似をして上目遣いに箒を見つつ、

「お姉ちゃん？」

そういつた瞬間、クラス的全員のラウラに対する印象が変わる。

それまではあの高圧的な物言いや鋭い眼光から「怖い」という印象を受けていた一同であつたが、今この瞬間、それは変化した。

「（か、可愛い）」

そうして、ラウラは畏怖の対象ではなく、愛でる対象へと変化した。

そんな印象を受けたのは箒もだつたらしく、なんだか頬がびくびくと震えており、にやけそうなのを我慢しているのが丸わかりだ。

その顔をニヤニヤとして眺めていると睨まれました。

「ま、まあいいだろう」

いいんだ。

いや、その方がありがたいけどね。

こうして、ラウラが妹になつたんです。



夜。

廊下。

昨日買いに行く暇がなかったからドクペ飲めなかったんだよね。だから禁断症状が
でそうで怖いんだよね……。

『その飲み物に中毒性の強い成分は含まれていないはずですが』

『そんな科学で解明できるものじゃないんだよ、ドクペはね』

『そういうものですか』

『そういうものですよ』

廊下を進み、自販機のある休憩室へ向かう。

「あれ？」

そこにたどり着くと見慣れた人物が先客にいた。

「千冬さん？」

「ん、氷雨か。どうした、お前もこれか？」

そう言つて千冬さんが自分の手に持っているドクペを見せる。それに僕は笑つて頷く。

「ですな」

僕の答えを最初から分かっていたのか、千冬さんはもう一本を取り出し、僕の方に投げる。それを僕は顔で受けとめてから拾い上げる。

「……すまんな」

「いや、僕が疲れてるだけなんで大丈夫ですよ」

自販機の前にあるベンチに千冬さんが腰掛ける。なので僕も隣に座る。千冬さん、横に並ぶと分かるけど、意外と大きいのね。あ、背丈の話しだからね。あつちは意外でも何でもないからね。

「感謝している」

「え？」

いきなり切り出されたその言葉に僕は心当たりがなくて戸惑う。

「ラウラのことだ」

「あ、ああ」

ラウラね。

「あいつは私がドイツ軍にいた時の教え子だった」

「あ、その話長くなります？ ドクペ飲んでていいですか？」

ペットボトルで頭を小突かれた。

「構わんさ」

「構わないなら殴らないでくださいよ……」

キャップを捻り、口を付ける。ああ、この医務室にいるかのような味が安心するんだ

よ。

「その時のこともあり、あいつは私に依存していた。それがこんな結果になるとは思わなかったがな」

「ぐくぐく、ぷはあ。それは千冬さんのせいじゃないですし、誰も咎めようとはしないですよ」

悪いのはそんなシステムを積んだ技術者たちですよ。

「そうかもしれない」

千冬さんも一口ドクペを飲む。

「ラウラはお前を好いてるらしいな」

そんなことをいきなり言い出す千冬さんに違和感を覚える。

「聞いたぞ。妹にしたらしいな」

「ぶほっ！」

口に含んでいた分のドクペを吹き出す。な、なんでもう千冬さん知ってるんですか！

「ラウラが直接いいに来たぞ。よほど嬉しかったのだろう」

「いやいや、そんな嬉しがるようなことでもないでしょ？」

「少なくとも、ラウラにとっては嬉しいことだったわけだ」

……そうかもしれない。だって家族なんていないもんね。いままでのラウラには千

冬さんとの繋がりしかなかったもんね。

「だとしたら、軽率だったかな」

「なに。お前なら上手くやるだろう」

「結構無責任に信頼してくれますね」

でも、千冬さんにそう言われたら、心強いね。

「ところで、昨日ドイツのある研究所が潰れたらしいぞ」

「へえ。物騒な世の中ですね」

「ドイツ軍の報告によれば、死傷者0人。にもかかわらず、研究所はその機能を完全に破壊された」

「それはなんとも手際がいいですね」

「その襲撃者を見たものはこう言ったらしい」

もったいぶる様に、そして試すように千冬さんは僕を見る。

「蒼騎士が来た、と」

「……………」

こつちを見据える千冬さんにニコニコと笑顔を返す。

「ラウラのこと、感謝してるぞ」

「さつきも聞きましたよ」

笑顔を崩さない僕に千冬さんはなぜか呆れ顔だった。

「頼んだぞ」

「当然ですよ。だって……」

飲み終えたドクペをゴミ箱に投げる。外れたので立ち上がり、千冬さんを見下ろす。

「お兄ちゃんですから」

祝☆お気に入り1000記念短編

その1 鈴の音は小さく響き

放課後。

カフェ。

色々なことの片が付いたので、僕は鈴ちゃんを誘って学園内にあるカフェに来てい
る。

「お疲れ会って感じかな？」

「なんのよ」

そう言いながらも付き合ってくれるのが鈴ちゃん。本人曰く、暇だかららしいけど、
鈴ちゃんの優しさだよ。

カフェに着くと、僕らは先に席を確保して注文に向かう。

「鈴ちゃんは何にする？」

「あたしはホットカフェラテにするわ」

「じゃあ、僕はカプチーノさんにしようかな」

「え、誰それ」

「え、いや、別に誰ってこともないけど、たまに物をさん付けしたりしない？」
「あー、分からないこともないわね」

そんな会話で時間を潰した後に、注文を受け取り、僕らは確保した席に向かう。

「じゃあ、学年別トーナメントお疲れさまと言うわけで、かんぱーい」

「かんぱー……ってそういうところじゃないわよ、ここー！」

「だよ。あつあつのカフェラテとカプチーノをぶつけたら、コップからこぼれて火傷しちゃうよ。」

「いや、待てよ。火傷したら治療のために鈴ちゃんに手を握ってもらえるんじゃない？」
「それ身体張ってまでやることなの……」

まあ、僕にとってはそれくらいの価値はあるかもしれないけど、ちよつと周りくどすぎるね。

「そういえば、どうでしたか、僕の戦いぶりはい！」

「あ、それ言いたい事があったのよね」

「お、それはなんだか期待していい感じじゃないかな？ いや、我慢じゃないけど、後半は大人気なく頑張ったからね。鈴ちゃんの好印象は間違いないはずだ！」

「あんたなんて危なっかしい戦い方してんのよ！」

「ほえっ!？」

よ、予想外に怒られちゃったよ。

「もう、見てるこつちが心配したじゃない。レールカノン無抵抗にくらって……て、何ニヤニヤしてるのよ」

あ、表情に出ちゃってた。抑えよう抑えよう。

……駄目だ。やっぱりにやけちやう。

「いや、鈴ちゃんが僕のことを心配してくれるなんて嬉しいなって思ってたさ」
「つー！ い、今のなし！ べ、別にあんたのことなんて心配してないわよ！」

鈴ちゃんは少し恥ずかしそうな顔をする。ほんのり赤みがかかる頬に見とれ、また顔がにやけるのを止められなかった。

でも、そんな鈴ちゃんの顔も徐々に戻り、いつもの可愛い鈴ちゃんになる。

「……はあ。本当に心配したんだから」

伏し目がちに鈴ちゃんと言う。その様子から、本当に僕のことを案じてくれてたんだなど、改めて感じ取り、それを茶化すことはできなかった。

「ごめんね、鈴ちゃん。心配掛けちゃって」

「ほんとよ。反省しなさいよね」

「うん」

あ、結局聞けてなかったけど、聞きたい事があったんだった。

「で、好感度は上がった？」

「あんた、ほんとに反省してるわけ？」

ジト目で睨まれる。いやいや、本当に反省はしてるよ？　でも、それとこれは別じゃないですか。

「反省はしつかりとしています。今後一切、鈴ちゃんに心配かけるような無茶はしませんとも」

「それ、破ったらどうする？」

「え……」

破った時……。

「えーと、空中で三回転して土下座します」

「ぶっ。なにそれ」

笑う鈴ちゃん。そして、小指を突き出してくる。

「指切り、するわよ」

「え、いいの？」

「いや、その反応はおかしくない？」

鈴ちゃんが良いならいいけど、火傷する必要はなかったってことだね！

そう思いながら指を絡める。女の子らしい細くやわらかい指にちよつとぐつと来て

ます。変態じゃないです。

「ゆーびきーりげんまん、嘘ついたら」

「龍咆1000発くらゐわす」「えっ」

「ゆびきった」

「待って！ 罰則が重すぎないですか！」

ミンチどころの話じゃないよ！ その辺の砂と合挽きになっちゃうよ。

「それくらいじゃ、あんた死なないでしょ？」

「死ぬよ！ 死なないわけではないじゃないですか！」

僕は鈴ちゃんの中でどういう位置づけをされているんだろう。少なくとも、今人間にはカテゴライズされないことが分かったけど……。

「まあ、かっこよかったけど」

「……」

鈴ちゃんは聞こえない程度の小さな声で言ったつもりでしょう。しかし、みなさん覚えていますか。私にはペイルライダーという専用ISがいます、ハイパーセンサーを作動させることができます。

「ぶはっ！」

「ちよ、ちよつと氷雨、あんた大丈夫!?!」

「だ、大丈夫。ちよつと萌え死にそうになっただけだから」

「燃え死に!? どこに発火する要素があつたのよ!」

「僕の心の導火線に火を付けたのは、鈴ちゃん、そう、君なのさ」

「なんでいきなりキザっぽくなってるのよ」

ああ、このまま天使の迎えが来ても悔いはないわけなので、天使が来たらその羽をもぎます。

「ありがとうございます、鈴ちゃん」

「お礼を言われる要素は皆無だった気がするんだけど……」

不思議そう、と言うよりは苦笑いを浮かべる鈴ちゃん。あれ? 引かれてる?

「ま、まさか好感度は……」

「そうね。下がったかも」

「やってしまったあああああ!」

調子に乗るのが僕の悪い癖だよお……。

「あ、そういえば、鈴ちゃんはもうどうだった、トーナメント」

「あんた立ち直り早いわね」

切り替えの速さは僕の良いところベスト3くらいに入ってるからね。と言うよりも、話しの都合上、早めに切り変えないと作者が面倒くさく(検閲により削除されました)う

ん、僕の良いところだよね！

「一夏と対戦だったみたいだけど」

「うん。あのさ、あいつほんとについ最近動かしたの？」

あ、それほど強かったんだ。

「強かった？」

「あゝ、あんまり強くはなかったんだけどさ。動きとかに堅さが無いからISを使いなれてる印象があつたのよね」

「まあ、僕ら……と言つても、僕は最近付き合つてないけど、一組にいる代表候補生と箒が放課後特訓に付き合つてるからね」

代表候補が特訓に付き合つてくれるというのは、プロ野球選手が少年野球の練習に参加する感じじゃないかな？ 素人監督よりも圧倒的にためになるけど、教えるプロのインストラクターには及ばない、くらいの感覚。

「そりゃ、上達も早いわけだ」

「まあ、鈴ちゃんの方が凄いと思うけどね。一年で代表候補になるって、並大抵ではできないよ」

「ありがと。褒めても何も出ないけどね」

そう言つて笑顔を作る鈴ちゃん。その笑顔だけで十分ですたい。

「あ、強くないって言った割には負けたよね？」

「……」

あれ？ 聞いちゃいけないところだった？

「ま、まあ、何を言っても言い訳になるから言わないけど、一つだけ言うなら……」
な、なんだろう。

「一夏の零落白夜ってせこくない？」

「あー」

何となく分かった。

つまり、鈴ちゃんが圧倒していたものの、最後の最後で一夏の零落白夜にあたって一発KOってことだね。

「それはなんだか……ドンマイ」

それしか励ましの言葉が出なかったのです。



一夏に負けたことは事実であり、その要因に零落白夜のチート性能があるのは事実である。しかし、それだけなら鈴は負けることはなかった。

代表候補生になるにあたって、過去のモンド・グロツソ大会の映像を見せられている。故に、一夏が瞬時加速を使用する事は予測済みだった。なにしろ千冬が使用した技で

ある。それを一夏が覚えていないわけがない、というか千冬が教えないわけがないと思っただからである。

なので、冷静に対処すれば、零落白夜の間合いに入ることも、最後の奇襲の零落白夜も当たるとはなかったのだ。

だが、結果的に鈴は負けてしまっている。その理由は、まだ他にあった。

「あんたのことが心配で集中できなかったなんて、言えるわけないじゃん」

鈴は見たのだ。倒れた後、担架で運ばれていく氷雨の姿を。

それを見て、さらにその前のクラスメイトの言葉が相乗的に効果を出し、鈴はなかなか目の前の戦いに集中できずにいたのだ。

「ほんと、最近振り回されてるわね」

目の前で楽しそうに話しかける氷雨を見つめる。

その視線に気づくと、目の前の男は恥ずかしげに笑う。

その屈託のない笑みに、鈴は自分の力が抜けて行くのが分かった。

「(悩みなんてなさそうね、あんたはさ)」

なんだか、悶々としている自分がバカらしくなって、鈴はため息をつく。

「あれっ!?!」面白くなかった?」

「え? あ、いや、別にそういうわけじゃないわよ?」

そう言つて鈴は笑顔を作る。その顔を氷雨は見つめ、何か納得したように頷くと、コップに残つたカプチーノを一気にあおつた。

「じゃあ、今日はこれくらいでお開きにしようか」

「え、もう？ 今日早いわね」

「うん。なんだか、鈴ちゃん疲れてそうだし。当然だよ、昨日の今日だし」

氷雨は鈴のお盆を持ち、返却口へ駆けて行つた。

「……調子狂うわね」

なんだか負けた気分にする鈴であつた。

◇・◇◇

そりや、代表候補生だし、学年別トーナメントの後、政府の人と会つてないわけないよ。

そんなめんどくさい行事の後で疲れてないわけなかったよ。

お盆を返すと僕はさつさと鈴ちゃんの元に戻る。

「おまたせ〜」

「お盆、ありがと」

「いやいや、別にいいよ」

「こう言うのは男がすべきことだしね。」

「じゃ、帰ろうか」

「そうね」

そうして、僕らはカフエを後にした。

寮に戻ろうと廊下を鈴ちゃんと共に歩いていると、正面から誰かがやってきた。

「あ、篠ノ之くん、ちよつと話があるんだけど」

「え、僕に？」

その声をかけてきたのは二組の子だったと思う。たしか、授業でラウラの班にいた子だったかな？

「今、大丈夫？」

「えと、僕は大丈夫だけど……」

ちらりと、横を見る。

「なんであたしの方を見るのよ」

「え？ い、いや」

「鈴、篠ノ之くん借りていい？」

目の前の子も鈴ちゃんに聞く。

「いいもなにも、別にあたしのものじゃないわよ?」

「じゃあ、いいんだね?」

「……いいわよ。氷雨、あたし先帰ってるから」

「え、あ、うん」

そう言つて鈴ちゃんは歩き出す。

「お、おやすみー」

角を曲がり、鈴ちゃんは見えなくなつてしまった。

「えと、ここで良いのかな?」

「あ、じゃあ、屋上に来てもらつていい?」

「うん」

屋上かく。今の時間、夕日がきれいでロマンチックだよね。ロマンチック……え?

◇・◇◇

そんな二人を後ろから追う影が五つ。

「いやいや、あんたたち何してんのよ」

「え、覗きだけど?」

「ひひっ。リア充生誕を呪いに行くのよ」

「そこは祝つたりーや」

「浅はかなり」

「堂々としてるわね……」

と、鈴は呆れた顔をするものの……。

「ふひっ。そ、そう言う鈴も付いて来てる」

「あ、あたしは、あんたたちが変なことしないように……そう、見張ってるだけよ！」

痛いところを突かれ、適当な言い訳をするも、実際気にはなっている。

ここまでの流れで分かるように、先ほど氷雨に声をかけた女子は学年別トーナメント

の観覧席で氷雨にアタックしてみると宣言した女子である。

「それはええけど、そろそろ移動せんと見失ってまうで」

「浅はかなり」

「まあ、行先は屋上って分かっているから大丈夫だけどね〜」

そんな一行は無事(?)に屋上まで辿りついた二人を後ろから見ている。

「さて、どうなるかな」

「ふひっ。結果は明らか。しめやかに爆発四散」

「リア充なる前に爆発かいな」

「浅はかなり」

そんなゆるい空気の4人と違って、鈴は二人の様子を食い入るように見ていた。

「結局、一番見てるの鈴やん」

「同じ穴の、ひひ、むじな」

「仕方ないかもね〜」

「浅はかなり」

ひそひそとしたその声は鈴には届いていない。

そして、告白は始まった。

◇・◇ ◇ ◇ ◇

「好きです。付き合ってください!」

そのまっすぐな言葉を受け止めるも、どう返せばいいのか見当たらず、僕は彼女に問う。

「えっと、僕のどこが好きなのかな?」

正直なところ、僕を好きになる要素は大体一夏も持つてるわけで、尚且つ一夏の方がイケメンである。勇気を振り絞ってくれて嬉しいんだけど、ちゃんと理由を聞いておきたかった。まあ、こう言う問いはあまり好まれないとは思うけどね。

「前の一組と二組の合同授業、覚えてる?」

「うん。君は確かラウラの班だったよね」

「! は、はい!」

僕が覚えていたことが嬉しいのか、声が大きくなる。

「それで、篠ノ之くんは私と一緒にボーデヴィツヒさんと戦って……。私、正直、ISの操縦があまり得意じゃなくてちよつと憂鬱だった。向いていない。やめようかなって、思ってたの」

IS学園への入学。それだけでも物凄い倍率を勝ちぬくために努力してきたんだろう。そうして入った学園で上手くいかない。それはどれだけ彼女に重くのしかかっていったのか。

「そんな時だったから、篠ノ之くんのおかげで、私、ISを動かすことが楽しく感じられた時、凄く救われたの」

僕はそんな殊勝な人間ではない。僕が救ったわけではなく、君が自分で立ち直っただけだ。そう切り捨てるには、彼女の眼は真剣過ぎて、できなかつた。

「だから、私は篠ノ之くんのことを好きになって……」

「ありがとう。でも、ごめん」

これ以上は聞けない。僕が聞いておきながら、向き合ってあげることができないなんて、最低だよな。

「僕には好きな人がいるから。だから、君と付き合うことはできないんだ」

「それは……鈴？」

その言葉に頷く。知られているのは当たり前だよな。

「そっか」

予想できていたのか、彼女の反応は薄い。それでも、目はうるんでおり、我慢しているだろうことが窺えた。

彼女は一度目を閉じる。そこで切り替えるように意地悪な顔つきになる。しかし、それもどこか弱々しく、強がっているのが見てとれるけど、それを指摘するほど、僕は意地の悪い人間ではない。

「振られたのに、まだ好きなの？」

仕返しとばかりの意地悪な問いに僕は笑ってしまふ。

「振られたって、諦めきれない想いだってあるさ」

「そっか……そうだよな」

彼女は目にたまったものを拭うと、強気な笑みを見せる。

「だったら、私が好きのままでもいい、文句は言えないよね？」

「え、う、うん」

……あ、負けた。

「ふふ、なんちゃって。私はそんなに執着するタイプじゃないの」

そう言って、背を向けると、彼女は少し振りかえって最後に言う。

「鈴をよろしく」

「え……う、うん。当然だよ」

そう言って去っていく彼女。

その背を見て、やっぱり男より女の方が強いな、と改めて思った。

◇・◇◇

「「ヒューヒュー」」

「……」

「浅はかなり」

何故か覗きの三人にはやし立てられる鈴。

それに何も言えず、鈴は顔を真っ赤に染めている。

改めて氷雨の好意を聞かされると、鈴は恥ずかしくなってしまう。

「ふう、ひとしきり鈴をからかったし、帰ろっか」

「そうだね、ふひ、慰め会もしなきゃいけないし」

「せやなく。うち、お菓子用意するわ」

「私も菓子を持って来る」

「あんだ、普通に喋れたのね」

そんな感じでした。

次の日の昼休み。

え、昨日の今日だし、二組には流石に行けないねって？

そんなわけないでしょ! 鈴ちゃんがそこにいるのに行かないわけがないですよ!

それにさ、真面目な話、あの子は気を使ってほしいタイプの子じゃないと思うんだよね。気を使ってぎくしゃくした対応するより、いつも通りにした方が良いんじゃないかって。まあ、僕が勝手に思っているだけだから、違ったら明日からペイルライダーに万能迷彩兵器『ダンボール』を出してもらおうけど。

『氷雨、段ボールの迷彩効果は全くと言っていいほど期待はできません』
「なんで?」

一夏には効いたよ?

『鈴に声をかけるのであれば、音を遮断できずばれてしまいます』
「ああ! そこがネックだった!」

そんなことを言いつつ、僕は二組に向かう。

二組の扉を開ける。

「鈴ちゃん、お昼食べよー」

と、声を上げながら二組を見渡すも鈴ちゃんの影は見当たらなかつた。

「あれ？ 鈴ちゃんがない？」

そんな風に首をかしげていると、いつも鈴ちゃんと一緒のティナさんが声をかけてくれる。

「り、鈴なら用事があるって職員室に行ったよ」

「そっかー。ありがとう」

あれ？ でも僕チャイムから最速できたつもりなんだけどな……。居ないなら仕方がないね、撤退しようかな。

「……」

「あ」

昨日の子と目があつてしまう。彼女の眼はどこか不安げな感じだ。何に不安を感じているのか。その明確な答えは持ち合わせていない。けど……。

「またね」

「え、う、うん！」

僕は手を振って別れを告げた。いつも通り。それが僕だから。

◇ ・ ◇ ◇

場所は二組の机より低い位置。

中国の代表候補生兼、二組のクラス代表である凰鈴音は身を隠すようにしやがみ、小さくなっていた。

「……何してるのよ」

フォローしてくれたティナが鈴に声をかける。

「……」

「ん？ 聞こえないよ？」

言いたくなさそうな顔をする鈴だが、フォローしてもらった手前、答えないわけにはいかない。

「い、今は、あいつとまともに顔、合わせられそうに……ないから」

一同はそれを聞いて呆れた顔をする。

「もー、それは鈴のセリフじゃないでしょー」

「ふひっ、甘酸っぱい。爆発しろー」

「もうそれでええ気がしてきたわ」

「浅はかなり」

恥ずかしそうに顔を赤くする鈴。そんな鈴に昨日の彼女は言う。

「もう、鈴を理由に私は振られたんだからさ、ちゃんと向き合ってよね」

「……」

「その顔をまともに合わせられないのはなんでかって考えて、答えだしなよ」
「……そうね」

その鈴の答えに少女は満足そうに笑う。

「よし。じゃあ今日は鈴の恥ずかしがってる顔を肴にお昼にしよう！」

「「おー！」」

「浅はかなり」

「ちよつと、あんたたち！」

そんな平和なIS学園の昼休みでした。

しかし、結局その日一日、鈴は氷雨と顔を合せなかったそうです。

その2 散る薔薇、咲く百合

所在不明。

「ただいま僕は蒼騎士の限定機能である完全ステルスモードで飛行中でございます。特殊な信号をキャッチして、それが示す座標へと移動中。」

「え、なんでそんなことしているのかって？ 束さんに呼び出されたからですよ。」

「また頼み事らしいけど、何をさせられるんだろうか僕は……」

『心配ありません。今回はそんなに難しいものではありません』

「前回は前回だからね。ドイツ軍のVTシステムの研究機関を破壊しろってさ、あれがどれだけ大変だったかみんなには分かるかな？」

「え、と言うか、ペイルライダーは知ってるの？」

『はい。氷雨の身を案じて先になにをするのかを聞き出し、ナノマシンで最善の体調に仕上げました』

「あ、ありがとう」

「だから、昨日食事のメニューにうるさかったのか。やたらカラーゲンを勧めてきたし。」

雲が切れ、ある一点にその目標がISのバイザー越しに見える。

「到着だね」

『短い飛行でしたね』

「一時間は短いのか……」

◇・◇ ◇ ◇

そんなこんなで束さんのラボに到着。え、ラボの名前？ 吾輩は猫であるって束さんが言ってたけど、名前が付けられてないことの比喻らしいから気にしなくていいと思う。

「おじゃましまーす」

「……」

中に入ると正面にいきなり鈴ちゃんがいた。

「あ、鈴ちゃんだ」

『氷雨？』

「あ、いや、分かってるけどね。しかし、毎回思うけどこのワールド・パージって凄い能力だね」

油断している相手なら絶対に気づけないよね。

後ろから杖で小突かれる。一発ではなく連続で。なんだかフェンシングの様な突き

が……。

「痛い痛い！ え、なに？ 僕何か悪いことしたっけ？」

「せっかく今あなたがご執心の相手を見せたのですから、もう少しリアクションが欲しかったですね」

え、期待通りのリアクションとらなかつただけでこんなにと突かれるの？

「いてて、こんにちは、クロエちゃん」

「はい、こんにちは。それと、私は貴方より年上です」

「うん、そうだね」

クロエちゃんはラウラより少し早く作られた試験管ベイビーだからね。

「分かってるのなら、その呼び方は改めるべきです」

「え、でも東姉の娘だよね？」

「……まあ、そうですね？」

東さんはクロエちゃんのことをクーちゃんと呼び、自身の娘にしている。戸籍とかはとつてないから正式な娘ではないみたいだけどね。

「じゃあ、僕の姪だよね？」

「そうなりますか」

「姪ならちゃん付けでよくない？」

「では、私は氷雨叔父さんとお呼びしましょう」

「う、なんかそれはキツイね」

「そうでしょう」

表情に出さないものの少し得意げ。この年でいきなりオジサン呼ばわりはなんとも胸に来るものがあるね。別に老け顔でもないのに……。

「でも、仕方ないからそれでいいや」

「え」

意外そうな顔をするクロエちゃん。僕のこの回答はどうにも予想外だったようです。

「氷雨叔父さん」

「何、クロエちゃん」

「……叔父さん呼ばわりになんとも思いませんか？」

え、いやいや、そんなことないよ。なんだかしっくりこなくて首をかしげたくなくなつてますとも。

「でもクロエちゃん、考えてみてよ」

「そう前置きして僕は話しだす。」

「僕がオジサン呼ばわりされることと、クロエちゃんをちゃん付けで呼ぶことを天秤にかけたらどつちに軍配が上がると思う？」

「……天秤は軍配を上げるものではないです」

「え？ あ、そうだね。適当な事言っちゃったごめん」

「分かってもええれば結構です」

煙に巻こうとしてない？

「じゃあ、川中島の戦いで氷雨叔父さん陣営とクロエちゃん陣営が戦ったらどっちに軍配が上がる？」

「そんなに軍配が使いたかったのですか？」

『戦闘なら私が負けるはずありませんね』

もう何が聞きたいのか分からなくなってきたら、ペイルライダーは論点が違うしでめちやくちやじゃないか……。あ、元凶は僕です。どうもすいません。

「というわけで、僕はクロエちゃんと呼ぶわけですよ」

そう言うのと、クロエちゃんは大きなため息をついた。

「勝手にしてください」

杖で脛を叩かれる。

「姉妹揃って傍若無人ですね」

「え、それを言うなら姉弟揃って、じゃないの？」

そんな僕の疑問にクロエちゃんは初めて表情を露わにし、にやりと笑った。

「いえ、間違っていますよ、姉妹です」

「あ、嫌な予感する」

ちよつと待つて、ペイルライダーは何を頼まれるか知っていて、その上でカラーゲンを勧めてきたんだよね……。

「ペイルライダー？」

『私は何も悪くありません』

ある意味の肯定をいただき、僕は東さんの居る部屋へ進むのだった。



さて、正面にいるのはニコニコと笑みを浮かべる東さんだ。

「ひーくん、いらっしやーい」

「おじやます、東姉」

そして、その横に並んでいるのは……女性ものの衣装の数々だ。

「さ、脱いで」

「いきなりすぎない!!」 もうちよつと説明のワンクッションを挟んでほしかったよ!

えー、とめんどくさそうな顔をする東さん。

「私の目の前で女装してもらいます。以上」

「うん、簡潔で分かりやすい説明ですね」

『感動的です』

「だが無意味」

ペイルライダーとクロエちゃん息ぴったりだね。というか、何となく二人は似てる気がするんだけど……。

「ささ、お着替えしようか、ひーくん」

妙な手の動きをしながら束さんが迫る。

「い、い、いやー!!」

誰にも届かないその僕の悲鳴はラボに虚しく響き渡った。

◇・◇◇

「ひーくん、やっぱり似合うね〜」

『男であることを疑います』

「いつそ男なんて辞めてしまえばどうです?」

性別は辞めるとかそういうものじゃないんです。

「というか、なんでこのウィッグがここにあるのさ」

僕が今付けているのは買ひ物、学年別トーナメントで付けた物と同型のものである。

「ちーちゃんに送ってもらった」

「千冬さん……僕あんなに頑張ったのに、その仕打ちがこれですか……」

千冬さんは何故か僕の女装に結構乗り気だからなあ……。束さんに写真を送ったのも千冬さんだったし。

「……クロエちゃん。言いたい事があれば言っていんだよ?」

「そうですね。まさか束様と同じ衣装が似合うとは……ドン引きです」

「くーちゃんも言うね〜」

え、それ間接的に束さんも馬鹿にされてない? あ、いや、クロエちゃんだし、純粹に僕を馬鹿にしている可能性の方が高いかな。

「そのうさ耳も似合ってるよ、ひーくん」

「ちよ、嬉しくないし、いきなり抱きつくのやめて!」

「すりすり」

「お尻触るとか、エロおやじか!」

そんな僕を軽蔑するかのような冷たい眼差しのクロエちゃん。

「え、なに? 寂しいの? いいよ、僕の胸に飛び込んでおいで!」

「銃弾なら喜んで飛び込ませます」

え、恐ろしすぎませんか?

「ていうか、いい加減束姉は頬擦り止めてよ」

「え、ひーくんの肌もちもちなんだもん」

『昨日のうちにナノマシンで美肌しましたから』

そんな機能もあるの!?! あ、この機能は機能とかけてるんだよ? うふふ、誤字すらネタに昇華させるもんね。

「世の女性に刺し殺されますね」

「クロエちゃん、もしかして僕のこと嫌い?」

さつきから棘がすっごい。

「好きではありませんね」

『つまり嫌いではないそうです』

「よかったー」

「余計なことを……」

やっとと東さんが頬擦りを止めて離れてくれる。ふう、これで終わりか。

「じゃ、次の衣装行こうか!」

「ですよね」

僕の着せ替え人形はまだまだ続きそうだ。

◇・◇◇

さて、続いている衣装は何ですかね! もう何でも来てよ! 開き直るよ!

「で、まさかのメイド服……」

『あまり先ほどの衣装と変わり映えがしませんね』

だね。エプロンドレスはどれも大体一緒だしね。……いや、こだわりのある人なら違うと思うんだけどね。僕からしたら、先の衣装との違いは色しかないと感じちゃうんだよね。

「分かってないな、二人とも」

東さんがチツチ、と舌を鳴らし指を振る。

「メイド服と言うのは、着た者に自分が奉仕者であるという自覚を持たせることに最大の意味があるのだ！」

『『な、なんだってー』』

「つて、ネットに書いてるよ？」

「大衆の意見を取り入れるなんて、束姉成長したんだね」

「知らないことは仕方ないからね」

「知らなくていい情報と違いますか」

確かにクロエちゃんの言う通りだわ。

「さっ！ 存分に奉仕してもらおうかな！」

「はいはい」

そう言うのと東さんのチョップが飛んできたので白刃取りをする。

「な、なんなの、束姉？」

「ひーく。君は今メイドだよ？ だったら、それ相の言い方があるんじゃない？」

あ、この前メイド喫茶行ったのは僕を反応を楽しむのと、これが目的だったのか。これじゃあ、分からないって言い訳できないじゃないか。

一つ息をついて、居住いを直す。

「承りました、お嬢様！」

語尾を上げるのがコツだ。物凄く恥ずかしい。

「ぷっ」

「あ、クロエお嬢様笑いましたね」

「メイド叔父さん、喉が渴きましたよ」

「その呼び方は勘弁してよ……」

仕返しに思いっきり砂糖を入れた紅茶を渡したら杖で脇腹を刺されました。



「で、メイドの次が巫女さん……」

「なんかね、人気らしいからね」

「別に箒ので見飽きてるんじゃない？」

「でも、ひーくんが剣舞するときって普通の袴でしょ？」

まあ、僕は男ですからね。

「別に良いけどね。それに、巫女服は色が紅いだけで別に恥ずかしい要素がないからね」
「はい、じゃあ、上を肌蹴させて」

……は？

「え、いや……は？ なに？ なんて言いました束姉」

「だから、上の白衣を肌蹴さして、肩まで露出して？」

「いやいやいや。何故に僕がそんなヌードをせねばならないんで候」

『なぜ『候』と言ったのでしょうか』

「袴姿だからという安直な思考でしょう」

そして、束さんはクロエちゃんに何かを呟く。するとクロエちゃんは頷き、こつちを見据えた。

「な、なに？」

「覚悟を決めて下さい」

「へ？」

どういう意味でしょうか、クロエさん。

「ワールド・ページ」

「そういう意味かああああ！」

東さんの姿が見えなくなる。

「ペイルライダー、ハイパーセンサーを！」

『……強力なジャミングにより起動不可です』

「東姉本気だわ」

突然、肩を掴まれる。

「ひーくん。観念するんだよー」

「い、いやあああああああ！」

この後むちやくちや脱がされた。

誰が得するんですかねえ……。



「ひどい、もうお嫁にいけない」

『行く気だったんですか』

「ドン引きです」

本日二回目かな。クロエちゃんに引かれたのは。

「というか、東姉」

「んー、なにかなひーくん」

「これいつまで続けるのさ」

なんか、そこにある衣装の量からしていつまでも続けられそうで怖いんだけど……。

「もう、仕方ないなく。じゃあ、はい。次のこれで最後にしてあげよう」

「わー、束姉やさしー」

『完全な棒読みですね』

「目から光が消えかけてそうですね」

そう言つて差し出されたのはチャイナドレスだった。

「最後までまた王道だね」

「王道つて言うのは、良いものだから王道つて言うんだよ、ひーくん」

確かに束さんの言うことに一理ある。

渡される衣装を見る。

「いや、束姉。これスリット深すぎるよ。これじゃあパンツ見えちゃうから」

「大丈夫。パンツが見えるのはひーくんが男物のパンツ穿いてるからだよ」

「どこも大丈夫じゃないんだけど、束さんはいったいどうさせたいんだろう。」

「だから、はい。これに履き替えて」

「うん？」

「つて、女性用下着じゃないですかー！ やだー！」

「これは駄目だつて！」

「なんで？ いいじゃん、東さんの下着穿くくらいさ」

東さんの下着なの!?! 素敵悪いと思わないのが我が姉ながら恐ろしい!

「これは拒否する。確かに東姉には大きな借りがあるけどね、人として、男としてやってはいけないことがあると思うんだよね!」

『男?』

「男?」

そこ! なんで疑問符浮かべてるのさ!

「いいじゃん! それとも、東さんの下着を穿きたくないってこと?」

「当たり前じゃないですか!」

その言葉に東さんは驚愕の表情を浮かべる。あれ? そんな驚く場面だった?

「ひ、ひーくんは東さんのことが嫌いなのか?」

「え? そんなわけないじゃん。だって姉弟ですよ? 長い付き合いじゃん」

「でも、東さんの下着穿きたくないって」

そこか!

「別に東姉の物に限らず、女性用下着を身に付けたくないだけだから!」

『鈴のほうですか?』

「……」

「黙るとは、変態ですね、氷雨叔父さん」

「はい、すいませんでした」

ちよつと悩んじゃった自分が恥ずかしい！ そんな不純な目で見てるわけじゃないんです！ 信じて下さい、お巡りさん！

「ひーくん、東さんはもう怒ったよ」

「うわつ、クロエちゃんの言った通り傍若無人だよ……」

東さんは手元に突如何か薬の様なものを出現させる。そんなもつて僕に近付いて……つて。

「な、なにをするのさー！」

無理やり飲まそうとするので頑張つて押し返す。

「ひーくんなんて、ひーくんなんて、こうしてやるー！」

「もーっ！」

ていうか無理。押し返せるはずないよ。だつて東さんだよ？ 千冬さんと腕相撲で拮抗するオーバースペックだよ？ 勝てるはずがないじゃないか。

丁寧に鼻まで塞がれて、僕は否応なしに口に入れられる薬を飲み込む。

「ぶはっ！ はあ、はあ。な、何するのさ東姉」

「ふっふっふ」

あ、凄く嫌な予感のする笑い声だ。

「ひーくん。ひーくんは女性用の下着をはくことが嫌だから断ったんだよね」

「そ、そういったじゃん」

あれ、なんか身体が熱い……。

「それはなんで？」

「そりゃ、僕は男だから」

……気のせいかな。若干僕の声が高くなってる気が。

「それなら、もう断る理由はないね！」

「……」

はしたないけどこの際仕方がない。

僕は自身の股に手を添える。

「……やっぱりかあああああ！」

『ありえない現象です』

「氷雨叔母さんと呼ぶべきですね」

なんでそんな冷静なのさ……。

「うわ、ウィッグが落ちたと思ったたらいきなり髪が伸びたんですが……」

『良かったですね。これで禿げる心配はなくなりました』

「そんな心配もとからしてないよ」

うなだれる僕だが、もう決めた。面倒くさいから、プライドは捨てましょう。

「もう、東姉の下着でも何でも穿くよ」

「ほんと？ 東さんのことが嫌とか言わない？」

言つてない言つてない。なんでそうなるのさ。

「大好きだから。東姉のこと大好きだからさ」

「シスコン」

『箒の方だけかと思つてましたが、東博士の方もでしたか』

もう何とでも言つて。

「わーい。私もひーちゃんのこと大好きだよ」

「うんうん。分かったから頬擦りは止めて。お尻触るのも止めて!!」

今それやられるとまずいんだって。なんか変な気分になっちゃうんだって。

「だからさ、元に戻して」

「……？」

え、何その不思議そうな顔。

「だから、下着でも何でも穿くから男に戻してよ」

「え、あー あゝ」

なんだか雲行きが怪しいぞ？

「まだ作ってなかった」

「ごめんね、と笑顔を作る束さん。」

「ふあっ!？」

「明後日には作れると思うから、それまで我慢してて」

「明後日!? 束姉なら今すぐ作れるでしょ?」

「いやいや、いくら束さんでもそんなすぐにはつくれないよ」

束さんがてこずるくらいのおバーテクノロジーが詰まっていたの!？」

「ま、明日明後日は学校もお休みだし大丈夫でしょ?」

「大丈夫なわけないじゃないかあ……」

同室にいる一夏はまあ事情を話せばいいけどさ。鈴ちゃんに会いに行けないじゃないか。それはこの作品のアイデンティティに関わるじゃないか! え、それは今更だつて? ……開き直るんじゃないよ!

「ああ、これどうすればいいのさ。帰る時何着ればいいの?」

「……」

「……」

ニコニコと僕を見つめる束さん。その手に持っている鞆は何?

「えと、それは？」

「下着と服だよ。必要でしょ？」

「必要だけどさあ……」

うなだれる僕の肩をポンと叩く。後ろを振り向くと、今までの無表情はなんだ、と言いたいくらいの笑みを浮かべるクロエちゃんがいた。

「ご愁傷様です、氷雨叔母さん」

「煽られてる」

こうして僕は東さんの頼みを消化し、大火傷したのであった。

その3 変化を望まぬ平穩

そういうわけで、前回のあらすじだよ。

東さんと作者の暴走により、僕は女になりました。

「はあ」

『どうしました?』

僕のため息にペイルライダーが声をかける。

「いくらタイツをはいていても、このすーすーする感じは嫌だなーって思っ」

スカートをはくだけならまだ僕も許容できる。でも、女性用の下着をつけちゃうと布面積の少なさに凄く心もとなさを感じる。

「世の女の子はよくこんな下着でミニスカートなんてものに手を出せるね」

『男と女では感性が違いますからね』

まあ、逆に女の子がトランクスとかはいたらやつぱり嫌なんだろうなと思うけど。

「うっ、酔ってきた」

『まあ、これだけ揺ればそうでしょう』

僕の現在の状況は、ステルス性の高い無人ISによって担がれて、学園まで運んでも

らっています。

え、なんで来た時みたいに蒼騎士で帰らないかって？

「女だからだよ!!」

『いきなり大声出さないでください』

あ、ごめんね。

女だからってどうしてだよ？ っと思う方もいるかもしれないですけど、そもそも僕はこの世界にあるISのほとんどの乗れません。なのになんで蒼騎士もといペイルライダーに乗れるかと言うと、蒼騎士のコアは唯一男が乗ることのできるコアだからです。

つまり、女になった僕は起動させることができないのです。

え、じゃあなんでペイルライダーが話しかけてきてるのかって？ ……話しの都合上です。いや、嘘だよ。ラウラの時に見たように、ある程度なら自立稼働ができるんだよ。それでも僕がリンクしないと制限があるからハイパーセンサーくらいしか稼働できないけどね。

『そろそろ到着です』

「はい」

地に着いた無人ISが僕を下ろす。手を振って見送ったら手を振り返してきた。ん

? 無人だよね?

しかし、千冬さん、制服まで束さんに送っていたとは……。おかげでこうして違和感なく帰宅できましたけどね。

「……」

「……」

無事じゃなかったです。千冬さんに見つかりました。

「話は聞いている」

「あ、そうなんですか」

千冬さんは腕を組んでなんとも言えない表情を浮かべる。

「……正直、すまないと思っっている」

「ほんとですよ……」

うなだれてる僕の頭を撫でて、千冬さんは去っていった。え、フォローなし!?



その後、何人かのクラスメイトとすれ違うも誰も気にも留めなかった。そうか、誰も僕だって気付かないのか。外見はあんまり変わってないと思うけど、前の女装もばれなかったし、案外この女装は諜報に使えるかも?

『どこを諜報するのですか?』

「え？ うくん、思いつかないけど、更衣室とか？」

『ナチュラルに犯罪者ですね』

あ、いや、違う！ 思いついたただけだから！ やらないから！

自分の部屋の前に立つ。さて、一夏になんて説明しようかな。

「あ、別に取り繕う必要ないね、一夏だし」

『そうですね』

何言つても納得しそうだし、ぶっちゃけても受けとめてくれる器の大きい男だからね。

そう考えて、躊躇いなくドアを開ける。

「おう、氷雨。おそかつ……え、どちらさまで？」

「いや、氷雨であつてるよ」

呆気にとられる一夏はなんとも間の抜けた顔をする。

ちなみにこの部屋にもうシャルはいない。簡易ベッドもなくなつて、部屋が広がつたように思える。いずれ慣れると思うけど、ちよつとまだ違和感があるね。

少して状況を飲み込むと一夏は再度僕に問いかける。

「は？ え、どういふことだよ!？」

「そうなるよね。実はさ……」

◇・少女（誤字ではない）説明中 ◇

「た、大変だったんだな……」

「そうなんだよ！　もう、色々むちゃくちゃで可笑しなことになってたよねー、ほんとにカオスだったよねー。」

「そういうことだから、明後日までフオローよろしくお願いします！」

「ちよ、土下座はやめろよ。女の子に土下座されると罪悪感すげー来るから」

「そういわれると絵的にまずいから僕は起き上がる。シオニーちゃんじゃあるまいしね。」

「ま、助けないわけないだろ？　俺と氷雨の仲だろ？」

「おお、一夏あ」

感動的だね。僕の周りは僕に優しい人が少ないんだよ……。

「心の友よお！」

「うおっ！」

勢いで一夏に抱きつく。すると何故か一夏は固まってしまふ。

「？　一夏どうしたのさ？」

「い、いや、その……」

なんだろう。なにに動揺しているのか……。うくん……はっ！

「まさか、一夏、ホモなの!？」

「違うだろ!」

え、違うの? じゃあ、なんで男に抱きつかれて鼓動を早めてるのさ。

「ひ、氷雨、その、柔らかいものが……」

「?」

柔らかいもの? ……あ、そっか。僕、女だ。

「ほほう。一夏は男であるはずの僕のおっぱいに興奮していると?」

「ばっ! そ、そんなわけないだろ!？」

ていうか、おっぱいあったんだ。失意のあまり無心で着替えたから見てなかったや。

あ、耳まで赤い。引き際かな。

「うん、ごめんね、一夏。からかい過ぎたかな?」

「まったくだ。そういうの止めてくれよ?」

止めてくれ? 押すなよ、絶対押すなよ? Ⅱ 押せ。

「うん。分かった」

「なんだ、その満面の笑み。嫌な予感しかしなぞ」

身構える一夏。

僕が何もしてこないのを確認して一夏は息を吐き、立ち上がる。

「お茶でも入れようか？」

「ありがとー。じゃ、僕はお茶受け探そうかな」

そう言つてベッドを横断するようにうつ伏せ、ベッドの横にある僕のバッグを漁る。たしか、十蔵さんにもらつた神父も絶賛、激辛麻婆煎餅があつたはずなんだけど……。あれ？　ない？　もつと奥の方かな？

そんな風に鞆を漁っていると後ろからガシヤガシヤと食器がぶつかる音が聞こえる。僕は煎餅を探しつつ、一夏に声をかける。

「一夏、大丈夫？」

「あ、ああ。危うく落ちるところだったけどな……つて、氷雨！　その格好は止めろ！」
なに？　僕何かしたの？

「お、お前、スカートが捲れてきてるんだよ！」

「あー」

バランスをとるため足バタバタしたのが悪かつたのか……。

「ていうかさ、男だった時と同じように振舞ったらもうほとんどアウトだよね」

「そうだな。で、早く起き上ってくれ」

むー。なかなか不自由だ……。

「あ、煎餅あつた」

「でかした、氷雨」



二人して唇を真つ赤にしてせんべいを食べきると、牛乳を飲んで一息ついた一夏が口を開く。

「しかし、そうになると明日のあれは諦めるしかないな」

「? 明日?」

何を諦めるんだろう。

「おいおい、忘れたのか?」

「えつと……ごめん、昼のごたごたの印象が強すぎて……」

性転換とか、インパクトの強さじゃ生涯で一位二位を争うレベルだよ。

「お前、鈴とデートだって張り切ってたじゃないか」

「……うわっ! 本当だ!」

なんてことを僕は忘れていたんだろうか。そうだよ、明日は鈴ちゃんとデートじゃないか! 昨日鈴ちゃんが遊びに行こうって誘ってくれたのを大はしやぎで一夏にも言つてたじゃないか。

……まあ、デートって言うのは僕が勝手に言ってるだけで、鈴ちゃんの方は純粹に遊びに行くってだけだと思うけどね。

「ど、どどど、どうしよう、一夏!」

「お、おい。肩を揺するなよ」

「今それは重要じゃないでしょ!」

「いや、重要かどうかの問題じゃなくてだな」

「こ、こうなったら東さんのところに殴りこんで今すぐ薬を作らせるか? いや待つ

て、東さんの場所分らない上に、僕は今ペイルライダーに乗れないじゃないか。だつたら、この状態で行くしかないの? え、僕が女になったのを鈴ちゃんに知られるの?

「い、いやだー! そんな格好悪いこと知られたくないい!」

「お、落ちつけよ、氷雨。あと、肩放してくれ。がつくんがつくん首が揺れてるから」

いや、待てよ……。

一夏にそう言われたからではないけど、僕はぴたりと動きを止める。それはある考えに行きついたからだ。

女装だと言えばれないんじゃないだろうか。そもそも、女装した時も誰にも男だとはばれなかったわけだし、そうなるのと逆に女になったからと言って女装でないと見抜くことは千冬さんくらいにしかできないのでは?

「なるほど……女装つてことにすればいいのか」

「は? いや、まあ……氷雨が納得してるならそれでいいけど。いや、それでいいのか

？」

一夏は自分の口にした言葉に首をかしげる。

そうと決まれば、明日鈴ちゃんに見せても恥ずかしくないように念入りに身体を洗わねば。

『服を着れば関係ないのでは？』

気持ちの問題なんだよ、ペイルライダー。そういう指摘は野暮って言うものさ。

一夏から離れ、僕は束さんから渡された鞆を漁る。そこにある下着の数々だけど、自分が女の身体だからかな、全く抵抗なく触れる。

そうして、着替えを用意し、バスタオルを持った僕は立ち上がる。

「じゃ、お風呂行ってくるね、一夏」

「おう、いつてらつ、いや待て待て！」

慌てて手を掴み引きとめてくる一夏。

「いくらなんでもそれはまずいだろ」

「だよね。大丈夫、冗談だって」

決して、鈴ちゃんと裸のスキンシップがしたかったわけではない！ 決して鈴ちゃん
の背中を流したいとか思っていない！

『煩惱が漏れていますよ』

せやね。

「仕方ないから、シャワーにするよ」

「仕方ないってなんだよ……」

そんな感じで、初日は乗り切ったのでした。

◇・◇◇

翌日。

朝食を鈴ちゃん待ち合わせてとる。鈴ちゃんの意向でみんなが食べ終わったであろうちよつと遅めの時間になったけど、理由は教えてくれなかった。なんでだろう？

「で、あんたはなんでまた女装なのよ」

「あはは、いや、これには深いわけがあるんだよ」

やっぱり突つ込まれるのはそこだよ。

「よく考えてみて、僕は世界で二人しかいない貴重な男性操縦者と言う名のモルモットだよ？　それが、制服を着てこれ見よがしに『私研究材料です』と街を歩いていたら、怪しい組織か、怪しい国家に連れ去られるか、もしくは女性の権利団体的なものに刺殺されちゃうでしょ？」

「モルモットって自分で言っちゃうのね」

え、まあ、間違っていないからね。

「そこで出てくる解決策が女装なんだよ！」

「その答えが出るあたり、あんたらしいけどね」

いやいや、そんな褒められると照れるなあ。

「褒めてないわよ」

「え？」

そんな僕を見つつ、鈴ちゃんは呆れ顔だ。

「はあ、緊張して損したわよ」

鈴ちゃんが小声でつぶやく。

「え、緊張してたの？」

「な、なんでもないわよ！」

？ まあ、何でもないならいいんだけどね。

「全く。で、なんで今回はそんなに気合の入った女装なのよ」

「え？ き、気合なんて入ってないけど？」

メイクだつてしてないしね。まあ、しなくても女の子に見えるからいらんというの
が正しいね。

「だって、あんた……パッドまで入れてんじゃん」

そう言つて鈴ちゃんは僕の方に手を伸ばし、胸に触れる。

「んああ」

「……」

あ、変な声でちゃった。まずいまずい。

内心で焦っていたら、対応が遅れ、鈴ちゃんは触れた手で僕の胸を揉む。

「んっ。……くう」

「あんた……」

ああ、鈴ちゃんの目が凄く冷たい！ 止めて！ そんな目で僕を見ないで！

「はあ、はあ。じ、事情を話すので、その豚を見るような目を止めて下さい」

「そ、そんな目して無いわよ」

この際、格好なんて気にしてられない。変態と言うレッテルよりはましだ！

『そちらは時すでに遅いような……』

◇・◇ 少女（疑問は残るも事実）説明中

「と言うわけなんです」

「あんたも苦労してるわね……」

ああ、豚を見る目から同情を向ける目になってる。

「そう言うことは最初に言いなさいよ」

「だって……」

「なによ」

「女になったなんて、格好悪くて言いたくなかったんだよ……」

そう言つて項垂れる。女の子になったなんて、好き嫌い以前に恋愛対象にならないじゃないか。

「あんたの中で、女装はいいんだ」

「え、だつて女装は結局男でしょ?」

「よく分かんない基準ね」

顔を見せたくないのに机に突つ伏す。デートはしたいけど、こんな状態を鈴ちゃんに見せ続けるのは嫌だなあ……。

◇・◇◇

そもそも、なぜ鈴は氷雨を遊びに誘つたのか。その理由は先日のクラスメイトの告白にあつた。

その告白したクラスメイトに言われた言葉、ちゃんと向き合え。そう言われた鈴はどうしたものかと少し思案した。だが、ただ悶々と考えていても答えは出ない。氷雨から向けられた好意、それは素直に嬉しいものだとは思ふ。だが、果たして自分はどう思っているのか。

その答えを探すべく、鈴は自分らしい方法を取つた。それが、今日のデート(仮)で

あつたというわけだ。

やはり、近くで本人と接してみないことには答え何てでないだろうというのが鈴が最後に至った考えである。

そんな、少しの決心と共に迎えた今日であつたにも関わらず、正面で突つ伏しているのは、よく分らない基準で恥ずかしがつている氷雨であつた。

「(これじゃ、答え何て出るはずないわよね……)」

自分が悩んでいても、変わらない氷雨の行動に、ある種の安心を鈴は感じ取っていた。変わらなくていいなら、それが一番楽だからだ。

だから、鈴は言葉を紡いだ。氷雨が、いつも通りであるように、それを続けてもらうために。



「しようがないわね」

そんな言葉から鈴ちゃんは始めた。

「あんたが女なのを見られて恥ずかしいなら、あたしも男の恰好してあげるわよ」

一瞬何を言っているのか分からなかつたけど、何となく察した。

「あたしも恥ずかしいから、お相子でしょ？」

その優しさに僕は笑う。

「鈴ちゃんの貴重な男装が見れるってこと!？」

「いきなり元気になったわね……。今回だけだからね」

女の子状態の僕を見られることには変わらないけど、鈴ちゃんの男装が見れるなら、我慢するしかないよね？

『単純ですね』

男はみんな、そんなもんだよ……。今は女だけどね!

「さ、食べ終わったなら支度して遊びに行くわよ」

「うん!」

◇・◇◇

正門で待っていると、遅れて鈴ちゃんがやってきた。

「お待たせ」

「あ、鈴ちゃ……。…」

その姿を見て僕は絶句した。

「ちよ、ちよつと、どうしたのよ」

「……」

なぜなら、鈴ちゃんの男装が、男装が……。

「可愛い!」

「え？」

何ですか、僕の貸した男性用の制服を着て、ツインテールを下ろしただけじゃないですか！ そんなの、そんなの！

「男装じゃないよ！」

「そ、そうなの？」

「ただの可愛い鈴ちゃんだよ！」

「お、大声で恥ずかしいこと言ってるじゃないわよ」

「あんっ！」

ピンタされた。ごめんなさい。

「たく。ほら、早く行くわよ。映画見るんだったら早くいかないと良い席取れないでしょ」

「あ、う、うん！」

鈴ちゃんの男装を見て思った。

どんな格好をしても、鈴ちゃんは鈴ちゃんなんだ。だから、僕だって、女の子になっただって、僕であることに変わらないんだ。なにも、恥ずかしがることはないんだね！

そんなことを教えてくれた鈴ちゃんに感謝しつつ、僕は横を並んで、歩くのだった。

『ただの開き直りでは？』

「しー」



そうして支度を終えた二人は歩き出したのだが、その後ろから、三つの影が二人を追うように動いていた。

「ねえ、止めようよ。こんなの氷雨に悪いって」

一つの影はシャル。一時期は男装をしていた彼女だったが、今は女として学園に在籍している。女性用の制服を着ている。

「いやでも、何かあった時のフォローを頼まれたしな。ついて行くのは氷雨に悪いから、こういう形になったけど」

もう一つの影は一夏。だが、彼の目的は正当なもので、昨日頼まれたそれを完遂するべく来たのだ。決して面白そうだったからではない。

「わ、私も別に面白そうだとか、氷雨の念願のデートがうまくいくか気になったとか、そういう理由でついてきてるわけではないぞ。ほんとだぞ？」

最期の影は、氷雨の妹である箒だ。一夏から聞いて気になったとかそういう理由ではない……多分。

そんな箒を訝しむように見るシャル。

「な、何だ、その目は。ほんとだぞ!? 決して興味本意ではないぞ!」
「うん、分かったから」

そういうキャラだったな、と思い出すように目を細めるシャル。

「おい、二人とも。氷雨と鈴が動いたぞ」

「なんか、一夏ノリノリだね」

「ああ、昔見た刑事ものみたいでちよつと楽しいぞ」

そんな子供のようには笑う一夏に、シャルも笑い返す。

「どこに向かっているのだろうな」

「氷雨は映画に行くって言ってたぞ」

「映画かく。うん、定番だね」

氷雨にしては無難な選択にシャルはちよつと苦笑する。それだけ氷雨は本気なんだろうとも思ってしまう、なんだか複雑な心境になる。

「……」

そんなシャルを一夏はじつと見つめる。

「ん? どうかした、一夏?」

「あ、いや、なんでもないぞ」

シャルは視線に気づくも、一夏は誤魔化すように笑う。

「映画館に入ったぞ」

「お、どの映画見るかもちゃんと確認しなきゃならないからな、急ぐぞ」

「う、うん」

「ああ」

一夏に促され、三人は映画館に駆けだした。

……ちなみに、セシリアとラウラがいないのは、高度な政治的（以下略



映画館に着くと、僕たちはまずどんな映画があるかを見ていた。

「結構いろいろあるわね」

「そうだね。最新作から定番のまで。古いのもやつてる映画館って少ないよね」

大体は最新作ばかり何だけどね。

「ジャンルも多いわね……あ、見てよ、ホラーもあるわよ。『リング』だって」

「へ、へ。ほ、ホラーもあるんだね」

泳ぐ視線を追って鈴ちゃんが回り込む。

「……もしかしてあんた、ホラー苦手なの？」

なっ！

「そ、そそんな馬鹿な話があるわけないよ！　だ、だってそんな、どうせフィクションでしょ？　げ、現実にもあつたかのような作り方してるけど、結局は嘘なんだから、そ、そんなものにどうして僕が怖がってるって証拠だよ！」

「ふ〜ん」

あ、鈴ちゃんの目が玩具を見つけた子供のように輝いてる。わり、鈴ちゃんが嬉しそうだと僕も嬉しいな。

「氷雨、今、あんたの後ろに」

「な、なにを馬鹿なことを。こんな、真昼間から幽霊なんているわけ……」

そう言つて後ろを向くと目があった。なにと？　いや誰と？　うん、それはね。

「「……」」

こつちを窺つてる三人とだよ！　なにを「やつちまった」って顔してるのさ一夏！

「ちよ、ちよつとトイレ言つてきていいかな？」

「え、良いけど」

「すぐ戻るから！」

そう言つて駆けだす。

◇・◇◇

「(トイレつてそつちにあつたかな?)」

駆けだした氷雨を見送りつつ、ふと疑問に思う。

「(あ、そう言えば、あいつどつちのトイレに行く気なのかしら。流星に、今は女性用かな?)」

まあ、どつちでもいいか、と言うなんとも鈴らしい結論に至ると、彼女は少し悪い顔をする。

「氷雨つて、ホラー苦手だったのね」

そう言つて、先ほど氷雨が目を逸らした映画のポスターを見る。

「良い席を取るために先に券を買つてあげるあたしつて優しいね」

そんなことを言いつつ、悪い顔の鈴はホラー映画の列に並ぶのだった。

◇・◇◇

……見失つた。まさか、この僕から逃げ切るとは、一夏たちもなかなかやるようになったね。

『何様でしょうか』

「いやあ、それにしても、胸がそんなに大きくなくてよかつたよ」

『? なぜ今それを?』

「え、だつてこの大きさでさえ揺れると違和感があるのに、もつと大きかったら痛くて走れないよ」

『……変態ですね』

「いやいや、純粹な感想だから。別に自分の身体に欲情するほど、僕は落ちぶれちゃいないからね?」

「あ、鈴ちゃん。お待たせ〜」

そう言つて近づくと、鈴ちゃんは一枚の券を手渡してくる。

「はい」

「え、なにこ……れ……」

その紙には、なんとも形容しがたい、おどろおどろしい女性の霊が写っていた。

「ひい!」

「いや〜、運がよかつたわよ。ちようど真ん中の席取れたしね。さ、行くわよ」

「待つて、待つて待つて。おかしいよ!」

な、なんでよりもよつてホラーなのさ。恋愛映画とかありませんでしたか?

あ、いや待つてよ? 怖がつた振りして鈴ちゃんに抱きつくというのはどうだろうか?

いけるんじゃないかな? だつて、鈴ちゃんは僕が怖がつていることを承知の上でこ

の映画を選んでもるわけだし……。

「よし、行こう！」

そんな感じで、僕らはドリンクを買って、席に着いた。

◇・◇◇◇

いやああああああああ、無理無理無理無理。怖がった振りして抱きつく余裕もありません。

「いやああああ、後ろ！ 志村！ 後ろ後ろおおおお！」

「あんた、ほんとは余裕あるんじゃないの？」

そんなわけないじゃないですかああああ！ この感嘆符のつき方を見てももらえれば分かるじゃないですかああああ！

終始、そんな感じで、手を握るという思考さえ浮かばなかったんです。くう、一生の不覚！

◇・◇◇◇

水雨に追われた後、一夏たち三人は無事、二人の見る映画を確認した後、二つ後ろの席を確保したのだった。

「その登場の仕方は卑怯だよおおおお!!！」

「ははっ。氷雨、すげえ怖がってるな」

「う、うむ。ぶ、武士として、な、情けないな」

「あの、箒。手を握るのはいいけど、ちよつと力を緩めてね？」

似た者同士の兄妹であったことにシャルは笑みを浮かべる。氷雨の新しい一面を知ることができたことをちよつと嬉しく思うも、氷雨の隣が自分じゃないことに、少し表情は影を落とす。

怖がる氷雨を見て微笑んでいる鈴。そこに自分が居ないのがたまらなく悔しいのだ。そして、鈴が自分では気づいているのか分からないけど、確実に氷雨に好意を示していることに気づいてしまい、自分の恋が叶わないものだと分かった。

「……」

そんな沈んだ顔をするシャルを見るのは、一夏だった。なぜそんな顔をしているのかは大体想像がついた。自分に対する好意には鈍いが、周囲のそれに関しては鋭いのが彼である。

そんな中、映画はラストのクライマックスを終え、エンドロールが流れ出す。

「氷雨たちが席を立つ前に帰るぞ」

「う、うむ。そうだな」

「え、後ろから追わなくていいの？」

そのシャル問いに一夏は頷く。

「もう十分だからな。氷雨をからかうネタもできたし」

「……目的が変わってないか？」

まだ、映画の余韻でシャルの服の裾を掴む筈の指摘に一夏は笑って答える。

「いいんだって。それに、よく考えたらあの氷雨だぞ？ 俺のフォローなんて必要ない
だろ」

「そ、そうなのかな」

「そうだって」

一夏の無理やりな言葉にシャルは察した。自分に気を使ったのだと。

「……一夏」

「うん？ なんだ、シャル」

暗がりでも振り返る一夏にシャルは笑顔で言う。

「ありがとう」

「……おう」

そのシャルの目に溜まる涙はこの暗がりでは誰も気づかないだろう。ハイパーセン
サーがなければ……。



映画が終わり、氷雨は喉をからしていた。

「り、鈴ちゃん。ぜ、全然怖くなかったね！」

「あんだだけ叫んどいて、どの口が言うのよ」

氷雨の虚勢に鈴は笑う。

鈴はこの空気が好きだ。

氷雨の馬鹿みたいな言動が創る、何も考えなくていい空気が気を張る必要がなくて心地がいいのだ。

それは友達だから。友達として、好き。だから、居心地がいいのだと。

「映画館の次と言えばゲーセンだね！」

その何も考えてなさそうな、屈託のない笑みが鈴を自然と笑顔にさせる。

そんな関係は、もはや恋人なのでは？ そう言われても、鈴はピンとこないだろう。

「先にお昼じゃない？ 時間的にちよつと遅いけど」

ちやんと向き合う……その答えが、これなのだろうか。

「それじゃあ、お昼御飯食べたら、ゲーセンに行こう！」

分からないけど、今はもう少し、友達でいたいと、鈴は思った。



蛇足。

ゲーセン。

「鈴ちゃん！ DDRやろうよ！」

「なにそれ」

「え、大好きな男装姿の鈴ちゃんの略かな？」

「だとしたら、DDRをやるって言うのは余計わけが分からないけど……」

「よし、鈴ちゃんに僕の華麗なダンスを見せつけてやるよ！」

「よく分かんないけど、見とくわよ」

ダンス開始。

「ちよつとあんた、スカート！ スカート気にしなさいよ！」

「え？ あ、大丈夫だよ。タイツ穿いてるし」

「大丈夫じゃないわよ！ ちよつと、あんた！ 何見てんのよ！」

鈴ちゃんが大変でした。

「鈴ちゃんはレースゲームとかやる方？」

「うーん、やらないわけじゃないけど、ISの訓練の一環だったから、こんな車のやつは知らないわよっ！」

「そうなんだ。じゃあ、初めてだね？　一緒にやってみない？」
「望むところよ！」

レース開始。

「え、ギア？　マニュアル？　ちよ、ちよつとなんであんなに速度でるのよ！」
「アハハハハッ！　いーじゃん！　盛り上がってきたねえ！」
「ちよつと、教えなさいよ！」

鈴ちゃんが大変でした。

「さてさて本命ですよ、鈴ちゃん」

「あ、プリクラね」

「そうそう。鈴ちゃんは撮ったことある？」

「当たり前じゃない。それくらい普通にあるわよ」

「くつ。その普通が僕には……うう」

「プリクラごときでどれだけ落ち込んでんのよ」

「ま、まあ、女の子同士のプリクラに妬くほど、僕は小さい人間じゃないからね！」

「え、一夏とだけど？」

「この劣等感は留まるところを知らない!!」

「はいはい、一緒に取ってあげるから、それでいいでしょ?」

「ほんと? やったーって、今の僕、女じゃないかあ!」

「撮ったことに変わりないでしょ?」

「確かにそうだけど……」

「ほら、撮るわよ」

　　少女（もはや疑う余地はない）撮影中

「わあ、何これ? 目が光って気持ち悪いね!」

「そういうものなのよ」

「うわあ、落書きとかあるの? よし、『鈴ちゃんLOVE』と」

「ちよつと!」

「フレーム? フレーム……あ、このラーメンどんぶりのふちに描いてありそうな模様にしようよ!」

「もう、それでいいわよ……」

結論、鈴ちゃんが大変そうでした。

その4 学園最強との接触？ 前編

放課後。

授業を終え、僕は自室へと向かう。

土日は鈴ちゃんのお出かけ以外は何もなく、食事も悪いけど一夏に持つてきてもらって、無事にTS状態を乗り切った僕は月曜からさわやかな気分だ。

「いや、まさかこの僕が月曜をこんなに清々しい気分で迎えることができるとはね」
『威張ることですか』

それに東さんがお詫びに新しいおもちゃ（兵器）をくれたのもあるけどね。

「ベクターキャノンの威力そのまま、取り回しを良くした最高のロマン砲……ヒューズキャノン！」

『取り回しはいいのでしょうか？』

「確かに武装自体は大きいけどさ、ベクターキャノンと違って展開後に射線を変更できるんだよ？」

それができるのは本当に強みだよ。ベクターは不意打ちにしか使えないからね。

「お兄ちゃんよ」

後ろからラウラが呼びかけてくる。

「ん? どうしたの?」

「なんだか機嫌がいいが、どうしたのかと思ってな」

あ、分かつちやう?

「さすが我が妹、僕の気持ちが分かるんだね」

頭を撫でる。目を細め気持ちよさげな顔をするラウラはなんだか猫みたいだなと思っただ。

「なに、妹として当然だ」

『目に見えて終始笑顔だったように思えますが』

まあ、みんな気づいてたかもね。一夏なんて起きてすぐ『なんかいいことあったか?』って聞いて来たし。

「それで、何があったんだ?」

「ちよつとね、新しい武器をインストールしたんだよ」

「ほう、それは確かに心が躍るな」

「ねー」

「ね、ねー」

『無理に真似することもないでしょうに』

またそこが可愛いんじゃないか。

そういうえば、妹って宣言してから土日あまりアタックはなかったね。やっぱり、嫁と妹じゃ行動が変わってくるのかな？

と、二人でおしゃべりしていると、僕の部屋の前につく。

「ラウラ、暇？」

「ああ、この後の予定はないが」

「じゃあ、一緒にお菓子食べようよ」

「お菓子？」

「そうそう。この間十蔵さんにもらった生八つ橋があるんだよ」

そういうえば、どの辺が生なんだろうね、あれ。つまるところ、生地を火にかけてないからなんだろうけど、生じゃない方もあるのかな？

「生……奴は死？」

「なんとなくだけど、それは違うと思うよ」

奴は死の『は』を『は』って発音してるし、ってこれ伝わらなくない？

「よくわからんが、お兄ちゃんの誘いを断るわけがないだろ」

うーん、妹ってそういうものじゃないと思うけど、今はそれでいいかな。

「その猟奇的なお菓子を食べようではないか」

「やっぱり勘違いしてない!」

ラウラの誤解を解くのは後にして、とりあえず自室に入るためカギを開け、扉を開く。すると、そこにはベッドの上でこちらを見る短髪の女子の姿があった。

「バタン」

僕はそれを認知した瞬間、間髪入れずに扉を閉める。

「? どうした、お兄ちゃん」

「いや、ちよつと幻覚が見えただけだよ」

うん、誰もいなかった。あそこには誰もいなかった。

「それより肝心の飲み物がなかったからね。一緒に自販機まで行こうか」

「そうか。分かった、ついていこう」

そう言うラウラは何故か手を差し出してくる。何かわからないからとりあえずその掌に飴を置く。

「違う。そうではない」

「え、龍角散いらなの?」

「いらないうけではない。だが、この手はお兄ちゃんと手を繋ぐためだ。妹とは、そういうものなんだろう?」

クラリツサが吹き込んだのかな? ま、間違つてないと思うけど。

「じゃ、繋ごうか」

「う、うむ」

僕は差し出されたラウラの小さな手を握る。

「どうっ？」

「……暖かいな」

「ラウラの手もあつたかいね」

今、子供は体温高いからな、とか思った人は後でヒュージキヤノンの刑ね。握る手の温もりを感じ取り、なんだかうれしくなるのだった。

「ん！ この飴、おいしくないぞ」

「えー、おいしいと思うけどなー」



自販機で僕はドクペをラウラに勧めただけけれど、僕のを一口飲んで断ってきた。む、このおいしさを共有できるのは千冬さんだけのようだ。

「さて、戻ってきたわけだけど……」

「何か問題でもあるのか、お兄ちゃん」

……呼ばせておいてなんだけど、お兄ちゃんって呼ばれるのちよつとこそばゆいね。
で、問題はこの部屋にまだあの人がいるかどうかということだ。

「ちよつと手を放すね」

「あつ」

名残惜しそうにするラウラ。なんか罪悪感が……。でも、戸を開けるのに両手が塞がっちゃうから。

「さて」

扉を開け、中をそつと窺う。だが、そこには依然として少女はベッドに誘う様に寝転がっている。

《バタン》

「……」

「さつきからどうした、お兄ちゃん」

まさか、まだいるとは思わなかったよ。

しかし、どうしたものだろう。

「よし、ラウラ、千冬さんも呼ぼうか」

「きよ、教官をか？」

僕用にドクペを二本買ってるし、そのうちの一本上げれば来てくれるんじゃないかな？

「まあ、無理なら無理でもいいけどね」

「？」

その言葉はたぶん部屋の中にいるあの人には届いていないだろう。



「結局ドクペだけ取られた……」

「仕方ない。教官は、教師として断っただけだ。元気を出してくれ、お兄ちゃん」

いや、そっちはいいんだけどね。僕のドクペ……。

さてさて、部屋の中には……。

「いないね」

「なにがだ？」

「いやいや、こつちの話だよ」

さすがに千冬さんの名前を出したらいなくなるよね。

「よし、じゃあ、生八つ橋食べようか！」

「焼くのか？」

「焼かないよ!？」

ドクペには合いました。



次の日の放課後。

『一年一組、篠ノ之氷雨くん。至急、生徒会室まで来てください。繰り返します……』
そんなアナウンスが流れ、一夏が僕の方を見る。

「いったい何したんだ?」

「いや、何もしてないよ?」

だから、その「また氷雨か」みたいな諦めたような顔はやめてよね。僕そんなにトラブル起こしてないからね?」

「だが、呼び出されるといいうことは何かしたのではないか?」

「思い当たる節はそこそこあるけど」

「あるのかよ……」

まあ、行くしかないよね。」

「じゃ、行ってくるね」

「私も行こう」

そう言つてラウラもついて来ようとする。

「だめだよ、ラウラ」

「なぜだ？ 妹なら当然であろう」

う、うくん？ 当然なのかな？

そう思つて箒の方を伺う。

「いや、私に聞かれても……」

僕の視線に気づくも箒は困つた表情をするだけだった。

「ラウラ、氷雨を困らせちゃだめだよ？」

「む、シャルもか」

あ、そういえば、シャルとラウラは同室になつて仲良くなつたみたいです。ラウラの中でのシャルへの信頼は結構大きいみたいでシャルのいうことは大体聞く。

「シャル、ありがとう」

「ううん、行つてらっしゃい、氷雨」

見送られて僕は生徒会室を目指した。



生徒会室。

「失礼します」

扉を開け中に入ると、会長と布仏虚先輩がいた。のほほんさんはまだ教室かな？

「来たわね、篠ノ之氷雨くん」

「あの、どういったご用件でしょうか？」

そう言うと、なんだか会長さんの顔がちよつと怒ってるように見えるんだけど……。

「要件は、先日のVTシステム暴走の件だけど、先に……」

会長は立ち上がる。

「昨日はなんで無視したのよ！」

「ええ！　そこですか!?!」

いや、確かに昨日は無視しましたけど……。

「仕舞には織斑先生を連れてくるって……どれだけ会いたくなかったわけ？」

「だって、一見したら不法侵入してきた不審者じゃないですかー」

「ちよっ！」

「会長、その篠ノ之くんの言う通りなので「反論は無理かと」

事実だもんね。

「もういいわよ。それで、先日のだけ……」

その後は普通に情報規制について話されました。真面目な会長って新鮮だなく。

その4 学園最強との接触？ 後編

生徒会室

会長は一通りの事務的な話を終えると生徒会室に設置されている小さな冷蔵庫からケーキを取り出してきた。

「食べるかしら？」

「もちろんいただきますよ」

でも生徒会に冷蔵庫なんて必要なだろうか？ まさか仕事で使うわけもないだろうし、備品じゃなくて会長の私物を持ち込んだのかな？

と、そんな疑問もわいてくるけど、別にそれがケーキの味に作用するわけでもないで差し出されたケーキを一口頬張る。

「わあ、おいしいー！」

「そう？ それはよかったわ」

会長さんは僕の反応を見て微笑む。その表情の一端になんだか裏があるように感じ取れたけど、ケーキがおいしいので良しとしよう。

「どうぞ」

横から差し出される紅茶。虚さんが入れてくれたらしい。

「あ、ありがとうございます」

差し出された紅茶を飲む。ケーキの味を消さないように調和する風味に舌が鳴るね。

「それと、これは先日の事件とは関係ないけどね」

そう話し出す会長さんの方に僕はフォークを咥えながら視線を向ける。

「一年の四組に日本の代表候補生がいるのは知ってるかしら」

「ああ、会長さんの妹ですよね?」

そう僕が返すと会長さんは少し苦い顔をする。

「そう、妹よ。その妹、簪ちゃんのことなんだけど、専用機の開発が遅れててね、クラス代表になったのはいいんだけど、クラス対抗戦とか、トーナメントとかの参加を辞退してるのよね」

「ああ、それは知ってますよ。でも、専用機ができてないんじゃないよね」

僕だって、ペイルライダーが整備中で使えないってなったらそりゃ、辞退するよ。だってペイルライダー以外は乗れないからね。

「そうよね。私も仕方ないとは思うんだけど、あいにく偉い人はそれが分かります」

「専用機は飾りです」

「それが偉い人には分から……ってそれ簪ちゃんを否定してない？」

「まあ、そうなるな。……あ、嘘々。本気でそんなこと思ってますから、怒らないで下さい」

危ない。この人もシスコンの類の人だった。

「やっぱりほかの国に日本の代表候補生の力を示していないっていうのが、日本政府にとつては気がかりみたいね」

「まあ、そりやそうでしょうけどね。でも、日本のISってことなら一夏が頑張ってるし、それで充分なんじゃないですかね？」

「んー、でもそれで注目されるのは日本じゃなくて男性操縦者っていう括りなのよね」

まあ、確かに一夏の白式が日本製だとしても、興味は一夏本人の方に行っちゃうしね。

「それで、簪ちゃんはやけになつて自分で専用機を作るって言出しちゃったのよ」

え、いや、それ会長さんのせいじゃない？　って言いたいけど、言つてもどうにかなることじゃないしねー。

「とうか、やけになつたわけじゃないんじゃない？　ただ、自分で作つた方が早いと判

断したからそうしたんじゃないの？」

「んー、もしそうだとしても実際のところは苦戦してるみたいなの」

まあ、結局タッグマツチトーナメントまで完成しなかつたわけだしね。

「ということだから、簪ちゃんの手助け、お願いね」

「へ? なんで僕が?」

「というか、その台詞、僕の意向を聞く気なくないですか?」

「え、だって、ケーキ食べたでしょ?」

「うん、出されたからね」

「それ、高いのよ?」

「う、うん、おいしかったもんね」

「じゃあ、頼まれてくれるわよね?」

「い、いやあ、学園最強の生徒会長ともあろう人が、そ、そんなこすいことしませんよね?」

「そう言つて会長の方をうかがうも、会長はいい笑顔を浮かべたまま何も言わない。

「……ちなみにお幾らのケーキですか?」

「小声で隣にいた虚さんに聞いてみる。」

「3万弱ですね」

「ごはっ!」

「い、いや、高いにもほどがあるんじゃないでしょうか……。」

「やってくれるわよね?」

「……仰せのままに」

こうして、脅迫まがいには僕は頼まれごとをされたのであった。

◇・◇◇

会長さんに妹、簪ちゃんのことを頼まれたわけだけでも、当然のごとく僕は何をしようということもない。いやー、だって期限を指定されなかったからね！ だから機会があればするって感じで積極的に行くこうとはしないよ。だって、僕の中での優先度は鈴ちゃんが一番だからね。僕に頼み事したかったら高いキーキじゃなくて鈴ちゃんを連れてくるべきだったね。ま、鈴ちゃんを人質に取られたら学園最強でもぶっ飛ばすけどね。不意を突いて、ヒュージキヤノンで。

早々に鈴ちゃんたちと合流しようと、第三アリーナを目指す。今日は鈴ちゃんとラウラと三人で特訓をすることになっている。一夏と一緒じゃないのは未だに鈴ちゃんと一夏の二人が仲直りしていないからだ。それに、ラウラもまだ一夏のことを認めていない様子だし。

でも、あまり鈴ちゃんは僕と特訓しようなんて言ってこなかったんだけど、今日突然鈴ちゃんのほうから特訓しようといってきた。まあ、理由として思い浮かぶのは多分学年別トーナメントで一夏に負けたからだろうね。結構悔しがってたし、鈴ちゃんは負けず嫌いだしね。

けども、順当にいけば鈴ちゃんも負けるとは思わなかったんだ、なにかあったのかな。……あれ、誰もいない?」

アリーナにたどり着いたかと思えばそこには鈴ちゃんもラウラもどちらの姿も見当たらなかった。

どこかにいるんじゃないかと思ってアリーナを見渡すも、やはり鈴ちゃんたちはいなかった。その代わりというわけではないけど、アリーナの端に見覚えのある人物がいた。

「ペイルライダー、あそこにいるのって」

『日本の代表候補生、更識簪とその専用機、打鉄式式ですね』

やっぱりそうだよな。実際に見るのは初めてだけど、そこにいるのは会長の妹である簪ちゃんだ。……いや、会長の妹って言い方は怒られそうだね。かんちゃんは優秀な姉の存在にコンプレックスを持っているらしいからね。

同じ姉持ちでも一夏や箒は違う方向に育ったね。一夏は姉を誇りに思って、箒は姉を埃に思い……。あ、僕今うまいこと言ったね。

『うまくないです』

「え、そうかな? 結構自信あったんだけど」

まあ、ペイルライダーの手厳しいコメントは置いといて、簪ちゃんはその二人の間く

らいにあるんじゃないかな。

姉を認めているからこそ、そこに劣等感を抱くし、その存在を疎ましく思うから遠ざけようとする。いつそどちらかの極端な感情であれば、楽だったんだろうと思うも、かんちゃんの性格を考えるとそんな風に割り切れることはできなかつたんだろう。

「うーん、鈴ちゃんたちも来てないし、せつかくだからかんちゃんに話しかけに行こうかな?」

『先ほどから、更識簪のことをかんちゃん、などと呼んでいます。知り合いなのですか?』

「いや、全然」

『それなら呼び方は気を付けたほうがよいかと』

え、なんで? 一瞬そう思ったけど、当たり前だよ。鈴ちゃんの時もだけど、どれだけ作品を読んだ頃の愛称があつたとしても、ここで使つたらただ馴れ馴れしいだけの不審者だもんね。鈴ちゃんの時失敗したんだから、同じ轍は踏まないよ!

「うん、わかつた。忠告ありがとう」

『当然のことです』

そうと決まればさつそく話しかけに行こうか。一応、会長にも頼まれてはいるし。律儀に果たす気もないけども、目の前にいるし、困つてることを知つてに放つてお

くのはなんだかちよつと気が引けるもんね。

ということ、かんちゃんの方に歩いていく。

僕の足音に気付いたようでかんちゃんは打鉄式の方から視線を上げてこちらに移す。僕の顔を見てなんだか不思議そうな顔をした後、なんだか嫌そうな表情を顔に浮かべた。

「初めまして、かんちゃん!」

「えっ?」

「あつ」

やあつてしまったあああ! あれだけ気をつけなきゃいけないって思ってたのになんで開口一番そんな失態をしちやうかな!

「あ、今のなし。もう一回! もう一回チャンスをください!! ワンモアチャツス!」

「え……、あ、う、うん」

気圧されたようにかんちゃんは僕のワンモアチャンスプリーズに承諾する。

「ありがとう。じゃあ、ちよつと待っててね」

「え?」

かんちゃんの不思議そうな声を置き去りに僕はアリーナの入り口まで走り去る。そして少し呼吸を整え、口を開く。

「……あれ、誰もいない？」

『そこからですか』

かんちゃんの見線を受けながらも一度やり直すのさ！



「こんにちは、更識さん」

「こ、こんにちは」

うん。今度こそは成功したね。バッドファーストコンタクトなんてそうそう繰り返したいものじゃないからね。

「あ、僕のことわかる？ 初めましてだよね」

「う、うん。……でも……知ってる。一組の……篠ノ之、水雨」

おお、覚えてもらってるみたいだ。まあ、僕や一夏は学園で有名人の一角だしね。他の有名人で言ったら、千冬さんとか会長とか。あと、僕のとぼつちりで鈴ちゃんも有名だね。

「……なにか……用なの？」

かんちゃんはそう僕に問いかける。確かにいきなり声をかけられたんだから、何か用事があるんだろうと考えるよね。

「いや、別に何も無いよ？」

「ふえっ？」

でも何にもないんですよねー。だって、僕が声かけた理由は鈴ちゃんたちがいないからだもんね。まあ、会長さんに頼まれたっていうこともあるんだけど、それを実行するにしたって僕にできることなんてないけどね。

「え……じゃあ、どうして……？」

当然の問いが来ました。なんて答えましようかね？

1 会長に頼まれたから

2 鈴ちゃんがいなくて暇だったから

3 君の存在に心奪われた男だ！

『正解がない気がします』

人生に正解なんてないのさ。踏みしめ歩いてきたその軌跡が結果として道になるだけなんだよ。

『言葉としては間違っていないませんが、回答としては不適切です』

あれ、そうかな？

と、僕が返事を返さないのでもますますかんちゃんの不信感が増していく。その不信感
は眉を顰めることでしつかり僕に伝わっているので早く返事をした方がよさそうだ。

「会いたかったぞ！ ガンダム！」

『よりによってその選択ですか』

だってこれが一番当たり障りないしね！

「あ、グラハム……」

「！」

「この感じ、まさか！

「かんちゃん、ガンダム分かる感じ!?!」

「え、あ、うん。知ってる」

なんと！ 戦隊ヒーローものが好きだという情報はあつたけど、まさかガンダムにまで精通しているとは！

「よもや君に出会えようとは。おとめ座の私にはセンチメンタリズムな運命を感じずにはいられない」

「おとめ座なの？」

「いや、かに座。最弱聖闘士だよ」

なぜ僕の聖闘士だけこんなにも不遇なんですか！

「でも、僕の中の燃え上がるコスモは獅子座の聖闘士すら打ち倒す勢いだよ！」

「獅子座の聖闘士？」

「多分千冬さんだよ。なんか獅子座ってオーラ出してるしね」

千冬さんは獅子座以外あり得ないね! あ、でも、あれで実は乙女座って言うのはありかもしれないね。そのギャップが受けるかも。

そんな風に思考を巡らせていると、ふいにクスリと小さく笑う声が聞こえてきた。

僕がそちらに視線を向けると、ハツとしたように口元を抑える。

「(´・`・)めんなさい」

「いやいや、全然気にしないよ。むしろもつと笑顔見せてくれた方が僕は嬉しいよ」

女の子には笑顔が似合いますからね。

「……なんだか、想像と違った」

「ほえ?」

一瞬、神妙な顔になったかと思うとかんちゃんも表情を緩めて僕の方をおずおずと見る。

「篠ノ之束の弟だから、それを鼻にかけた嫌な人だと思ってた」

「なんと……」

なるほど、僕の断片情報だけ聞けばそう言うイメージを持たれる可能性もあるわけなのか。これはさらに第一印象を大事にしていかなきゃいけないね。

「でも、実際の篠ノ之くんは嫌な人じゃなかった」

おお、今回はバッドファーストコンタクトにならなかつたみたいだね。よかつたよ。

「思ったより……バ、陽気だった」

「今、バカつて言いそうになつてなかつた!？」

「な、なつてないよ」

こ、これはほんとにバッドじゃないといえるのだろうか？ うん。少なくともグッドではないね。ベターかな？

「ま、いつか」

「いいんだ……」

「いやー、実はね。ここでクラスメイトと特訓する約束だったんだけど、来なくてさ。暇だったから、かんちゃんに話しかけたんだ」

「そ、そうなんだ」

まあ、そんな理由で作業を中断させられたらかんちゃんも迷惑だろうし、離れたほうが良いのかな。

「そう言うことだから気にせず作業してていいよ」

「え、あ、うん」

かんちゃん少し僕の視線に戸惑いつつも、作業に戻る。やつぱり見られてるとやりづらいかな？ うーん、作業の邪魔してるのなら申し訳ないなあ……。

「それにしても遅いな、鈴ちゃんは。ラウラとかも時間にきつちりしてる気がするんだ

けど」

「あ、あの……」

僕のつぶやきにかんちゃんの声をかけてくる。

「もしかして、集まる場所を間違えてるんじゃない……」

「え? いや、確かに第三アリーナでやるって言ってたと思うけど」

「あの……ここ、第二アリーナだけだ」

え?

僕の思考の一切がその言葉に止まり、しばしのフリーズを起こす。

「ここ、第二?」

「う、うん」

なるほど。ということは待たされているのは僕ではなく、鈴ちゃんたちというわけだ。

「なるほどなるほど」

……

……

「うわあああああああ!」

「ひゃっ」

僕の絶叫にかんちゃんが驚いた声を出す。

「あ、ごめん、かんちゃん。僕は重大な勘違いをしてたみたい」

「う、うん」

「僕は……行くよ」

「あ、うん」

僕は駆け出す。第三アリーナへ向かうために！

「あ、またねー、かんちゃん！」

外に出る前に手を振る。小さく振り返してくれるかんちゃん。それを見てから僕はアリーナを後にしたのだった。

しかし、関わるつもりはなかったんだけど、まさかガノタだったなんて……。これは関わらざるを得ない。

「何とかしてあげたいね」

そんな風に僕の考えは変わったのだった。

ちなみにその後鈴ちゃんにすごく怒られました。

クリスマスだよ!

クリスマスパーティー。

それは生徒会主催で盛大に行われた。

一つのアリーナを丸々使い、所狭しと並べられた料理たちを囲んでみんなで騒ぐと言ったものであった。

そんな中、催しの一つとしてプレゼント大会というものが開催されたのだった。

『はいはい。みんな、クリスマス楽しんでる?』

会場からは肯定の声が多数響く。それに頷き、うれしそうな顔をする会長。

『楽しんでもらえてるなら、企画した甲斐があったつてもものね』

そんな会長は壇上でマイク越しに語り掛けている。

『それじゃあ、本日のメインイベント、プレゼント大会を始めるわよ』

その声を皮切りに、アリーナからは歓声が上がった。

「なんかすごい活気だな」

周りの活気に飲まれそうになる一夏。

「ああ。しかし、こういうイベントごとで一番はしやぎそうな水雨のやつがないな」

兄である氷雨が騒いでいないことを不思議、というか怪しんでいる筈。

「氷雨さんでしたら、先ほど会場の外へ出ていきましたわ」

落ち着いた雰囲気です。パーティーを楽しんでいるセシリア。気合の入ったドレスで来ようとしたが、このパーティーの正装は制服であったためしぶしぶ断念したそう。

「同じタイミングでラウラもいなくなってたよ」

男装を止めてからのシャルはラウラと同室になり、そのおかげか、ラウラの世話係のような立ち位置になっている。今日も、ラウラと共にパーティーを楽しんでいたわけだが、ラウラと共に行動すると、必然的に氷雨と一緒にいる時間が増え、なんだか複雑な心境なのである。

「ま、あいつのことだし、十中八九何かやらかすんでしょうね」

正妻鈴は氷雨の行動パターンを把握しているため、余裕の表情を見せる。ちなみに、時系列は関係ないので未だに付き合っていない。

『それじゃあ、この企画の進行をしてくれるサンタさん二人に登場してもらおうかしらね』

「「ああ」」

その二人というワードで皆は察しがついてしまった。そのサンタが誰なのかという

ことを。

ライトアップを受け、登場する二つの影は予想通りの人物であった。

「みんなー、メリークリスマスだ！」

「メリークリスマスだ」

「メリークリスマスだ!!」

いい返事が返ってきたことにご満悦の氷雨サンタ（女装）

『二人のサンタに来てもらったけど、相変わらず女装なのね、氷雨くん』

「いやいや、楯無さんがこの衣装用意したんじゃないやありませんか！ 控室に言ったらウィツグとこれがあつて、びつくりしましたよ!!」

『え、私じゃないわよ?』

「楯無さんじゃなかったら誰がこんなことを……」

そこまで言つて、氷雨は思い当たる人物が二人いることに気が付く。

「東さんか、もしくは……」

だが、そこで氷雨は思考を止めた。なんだか、この先を言うときまづいことになりそうな悪寒がしたからだ。

「似合っているぞ、お兄ちゃん」

「ありがとう、ラウラ。ラウラも可愛いよ」

「か、可愛いかな？　そ、そうか……うむ、サンタ、なかなか悪くないものだな」
『こらー、イチヤイチヤしないで進行する！』

「いちやいちやじゃないよ。兄妹として普通の会話だよ」

『うつ……』

「図らずも痛いカウンターを受けた楯無はそれつきり黙るのだった。

「氷雨の奴、鬼だな」

「あれを素で言っちゃやうところが一夏くらい凶悪だよね」

「？　なんでそこで俺が出てくるんだ、シャル？」

「[[……]]」

三人くらしいの視線を受けるも何のことかわからない様子の一夏君でした。

「はい、じゃあ、プレゼント大会のルール説明だよー」

未だに黙りこくる楯無をしり目に氷雨サンタは会場を仕切る。

「プレゼントは最新のゲーム機、家電製品から、一夏に何でも言うことを聞いてもらえる券など、様々用意されてるよ」

「[[!!]]」

「うおい、ちょっと待て!」

自身の知らないところでそんなものが作られていたことに抗議しようとする一夏だったが、その声は周りの歓声にかき消された。

「こうなったら、俺自身が取るしかないな……」

「が、頑張つて、一夏」

波乱が幕を開けそうだった。

——完——

予告

幕を開けるプレゼント争奪戦。

獣の如き闘争本能を見せる女子たちに圧倒されながらも一夏は戦う。自分自身の、身の安全のために。

そして立ちはだかる真紅の衣をまといし者……

S
A
N
T
A

はたして彼はその手にプレゼントを掴むことができるのか！

C
o
m
i
n
g
s
o
o
n

七夕番外編

星合の七夕祭り その1

7月7日、昼下がりに。

7月7日という日がどのような日なのか。もったいぶった説明を挟む必要もなく自明な行事である七夕の日だよ。

天の川によって引き離された夫婦、織姫と彦星。その二人が唯一会うことの許された日、それが七夕、別名星合の日だよ。星合なんて、なんとなくロマンチックな響きがあるね。

「まあ、僕らからしたら願い事を短冊に書いて吊るすだけの日であって、星を見る人なんてあんまりいないけどね」

それに新暦の方の7月7日じゃ、梅雨の時期で星なんて見えやしないんだから風情も何もないよ。

「そんなこというなよ、氷雨。こういうのはやるつてことに意味があるんだつて」

僕の否定的な言葉に一夏が宥めてくる。まあ、愚痴つたところで現状が変わるわけでもないし、一夏の言う通り、七夕は元々お盆の行事の一環だったわけだし、ご先祖様を

迎えるためにやることに意味があるのかもね。僕のご先祖様はここに居ないけどね。

「しかし、男だからってという理由で千冬姉もひどいよな」

「全くだよ。労働力として見られるのは仕方ないかもしれないけどさ、こういうのって教職員の仕事じゃないの？」

二人で愚痴を呟きながら手を動かす。

え、どういう状況なんだって？ それはですね、七夕ですから願い事を書いた短冊を吊るす笹がいるわけですよ。うん、ここまで言えばわかるんだろうけど、僕らは今学園の中で用務員の十蔵さんが趣味で育ててた笹を切ってる最中なんです。

ギコギコと鋸が笹を削る音だけが林の中に響く。7月だからね、そこそこに暑くてこんな労働をすると汗がしたり落ちるわけだよ。そしたら服がべたついて、さらに暑苦しくなる。そしたら愚痴りたくもなるよね？

「あー、ダメだ。さすがに10本は辛いよ」

気力の消費が激しい。こうなったら鈴ちゃんの笑顔を妄想して回復するしかない。「だよな。これ、IS使ったら怒られるよな……」

鈴ちゃんが笑顔で僕の名前を呼んでくれているシーンを想像していたところに一夏が天才的な発言をする。

「それだ！」

「え？」

こんな作業、僕とペイルライダーなら秒殺だよね！

「やれる、やれるんだ俺は！」

「おい待て、落ち着け氷雨」

僕は一夏の静止を右から左へ聞き流し、ペイルライダーを起動する。

「行くよ！」

『ビームブレード、レディ』

握りしめたビームブレードをしっかりと構え、標的を見据える。視線の先は無数に生い茂る笹林だ。

「消えろ！ イレギュラー！」

『笹です』

そうして、僕は笹林を全てなぎ倒したのだった。



生徒指導室

「はい、あの時はどうかしていたんです。はい、暑さで冷静な判断ができなかつたんだと思います。はい、反省してます。え、いや、そんなつもりはなくて。はい、もうしません。今後一切、笹は切りません、一夏に任せます」

その一言の末、僕の頭は出席簿の衝撃を受け止めた。

「反省してないだろ」

「してますとも。さすがに全部切っちゃったのは、十蔵さんに申し訳ないと思っただし、あわや下敷きになりかけた一夏にも申し訳ないと思っってますよ」

逃げ切れた一夏に称賛を送りたいよね。さすが、主人公！

「そこじゃないだろ」

そういうと千冬さんは少しため息を吐く。何だろう、僕は何か間違った回答をしていたのだろうか。

「もういい。今日は七夕祭りだ。あまり拘束しても仕方ない」

そうそう。僕と一夏が笹を切ったのはこの夕方から夜にかけて行われる生徒会主催の七夕祭りのためだったんだよね。だったら、生徒会が笹とってくればよくない？

「この反省文を書いたら帰っていいぞ」

「ちよ！　また原稿用紙10枚ですか!?　書くことなくなるんですよ、4,000字あつてもー!」

「ごめんなさいを引きのばすのにも限界があるんですよ?　カルピスだって6000倍に希釈したら、それはもう水なんですよ。」

「4000字でも6字でもお前の書くことは変わらないだろ」

「いや、変わりませんけどね」

「否定するところだぞ……」

大きなため息をつき、どうやら千冬さんは呆れているようだ。と言つても、僕の反省文なんて何度も見てるんだから、もう分かつてると思うんだけどね。

「じゃあ、頑張つて書きますね」

「もう何も言わん。カギは職員室に返しておけよ」

「はーい」

そうして僕の執筆が始まつて……

◇ 10分後 ◇

終わった。

『鬼神の如き速さでしたね』

「も、もう、腱鞘炎待ったなしだよ……」

途中で左手に交代してなかつたら右手の手首が疲労骨折してたかもね。

「また世界を縮めてしまった……」

『反省文の世界ですが』

達成感に少し浸る。この疲労感、何かを成し遂げたという感覚。……2度と味わいたくないね。

「はっ！ 呆けてる場合じゃなかった！」

そう、今日はお祭り、その上、実は浴衣の日でもあるのだ。というわけで、女子たちは気合入れてみんな浴衣を着てくるそうなんだ。

「鈴ちゃんの浴衣を見に行かなければ！」

そうして、僕は職員室にカギと反省文を渡しに行ったのち、自分の部屋に戻ったのだ。

「……」

『ごめんなさい×666』

その要約する間もなくごめんなさいという反省文の前に、千冬はただ黙ってため息を吐くのだった。



自室。

さてさて、自室に戻ってきた僕の前に居たのは浴衣に身を包んだラウラでした。多分、シャルに着付けを手伝ってもらったんじゃないかなって思うけど、シャルって着付けできるのかな？

「というか、その浴衣面白いね」

「だろう。クラリツサが送ってきたのだ。私に似合うのはこれだとな」

濃い目の紺色を基調とし、アクセントにピンクのスカートのような丈でフリルのついた浴衣にフリルのついた帯で、なんというかゴスロリチックな浴衣になっている。

「あとは髪を束ねるだけなのだが」

「はいはい、分かっているよ」

僕はベッドの端に座って膝を叩く。すると、ラウラは嬉しそうな表情を浮かべ、小走りに僕のもとへ寄ってきて膝の上に腰を下ろす。そうすると、僕に髪を梳かすことを催促するように頭を揺らす。

その動きがちよつと愛らしかったので僕は頭を少し撫でる。梳く必要があるのか疑わしいくらいいさなりと流れる髪に触れると、驚いた様子でラウラが振り向く。

「あ、ごめん。嫌だった?」

「そうではない。少し驚いただけだ」

そう言つてラウラは前を向く。

「もつと撫でていいぞ、お兄ちゃん」

そう言つてくるので、僕は引き続き頭をなでる。すると、ご機嫌な様子で足をパタパタと動かしていた。

「そういえば、ラウラは七夕がどういう日か知ってる？」

髪を梳き始めて、僕はラウラに問いかける。

「当然だ。私を見くびってもらっては困るぞ、お兄ちゃん」

僕を氣遣つてか、頭は動かさないように小さく胸を張る動作をするラウラ。あ、やっぱり知ってるよね。多分、クラリツサの間違った知識だろうけど。

「短冊に願いを書けば、織姫と彦星が叶えてくれるのだろうか？」

あれ？ 意外にまとも？ さてはシャルに聞いたね。

「シャルに聞いたの？」

「いや、何やら氣合を入れていた筈に聞いたところそういう回答を得た。つまり、正装でないと願いは叶えられないのだろう」

「そういうわけじゃないけどね」

ラウラと箒つていうのは意外な取り合わせだね。しかし、氣合を入れてるっていうのは言わずもがな、一夏に見せるためだろうね。頑張れ、箒！ 浴衣なら勝機はあるはずだよ！

「それで、ラウラはどんなお願いをするの？」

「うむ。私は、私が疑うことのない何かを見つけたい」

う、うん？

「それを願いとして叶えてもらうつもりはないが、あくまで願掛けだからな。それが私の願いだ」

「お、おお」

年頃の女の子の願いとは思えないほどカッコいいお願い事だ。

そっか、あの事件以来、ラウラはそれを探してたんだね。

「見つかるといいね」

「ああ」

「何かあつたらお兄ちゃんを頼るといいよ。約束したからね、手助けはするって」

髪を梳き終え、僕はラウラに渡されたリボンでその髪を束ねる。

「はい、出来上がり」

「ありがとう、お兄ちゃん」

どっちに対しての言葉だろう。多分、どっちもに対してなんだろうけど、僕は深く考えずにその感謝の言葉に笑みを返した。

星合の七夕祭り その2

そんなことがあつた後で、僕も浴衣に着替えていた。

そこにやつと一夏が帰ってきた。

「あれ？ 遅かつたね、一夏。どこに行つてたの？」

そう声をかけると、少し恨めしそうな目で一夏はこちらを見てきた。

「お、おう、何ですか、その眼は」

「そつちが反省文書いてる間、俺は七夕祭りの設置とかで忙しかつたんだよ……」

ああ、それは申し訳ないことをしたね。でも、それは生徒会の人やるから一夏に仕事なんて回つてこないんじや……。

「その後、楯無さんに色々絡まれて……」

「うわあ、ぐ愁傷様」

僕は一夏に向けて手を合わせる。あの人は面白い人ではあるんだけど、疲れてる時に絡まれるとなかなかしんどいよね。

「それより、さっさと着替えていくよ、一夏」

「ああ。ちよつと休んでから行くから、先に行つててくれ。さすがに疲れたぜ」

そういつてベッドに倒れこむ一夏。うーん、一夏が来ないと悲しむ人が何人かいるんだけどな……。箒も気合入れてたみたいだし、セシリアやシャルもだよ。かといって、この死体のような一夏を引きずっていくのも気が引けるし……。

「ああ、デコイでダミー一夏を作ればいいんじゃないかな」

『根本的解決にはなりませんね』

まあ、確かに。

……仕方ないか。

「じゃあ、先に行くけど、ちゃんと来てよ？ みんな楽しみにしてるんだからね？」

そう言うで一夏は言葉も発さず、手をひらひらと振り了解の意を示していた。ほんとに大丈夫かな……。

少し心配ではあるけど、束さん特製の目覚ましをセットして、僕は集合場所へ向かった。



グラウンド。

「あ、やっと来たわね」

そんな声が聞こえてそつちに顔を向けると、そこには黄色の浴衣に身を包んだ鈴ちゃんの姿があった。

「遅かったじゃな——」

「うわあああ、可愛い可愛い！」

「ふえっ!?!」

僕の声は鈴ちゃんの声を遮り、グラウンドに響く。いきなり大きな声を出した僕に驚いた鈴ちゃんは何ともかわいらしい声を出した。

「天使? 天使!?! あ、天使だ! 鈴ちゃんだ! もう、何ですか、その反則的な可愛さは! ところが地上か疑っちゃうくらいのかわいさだよ!」

「ちよ、ちよつと、氷雨……」

顔を紅くしてしどろもどろになる鈴ちゃん。あ、まずい。これは鈴ちゃんに迷惑をかけている。いったん落ち着こう。

「すーはー」

大きく息を吸って、大きく息を吐く。よし、落ち着いた。今なら冷静な思考ができる。そうして僕は視線を上げる。するとそこには浴衣を身にまとった天使がいた。

「うわあああ、可愛——」

「無限ループですわ!」

後頭部を叩かれて、僕の暴走は止められる。振り返るとそこにはパーソナルカラーの青色の浴衣を着たセシリアが立っていた。

「あれ、僕より遅かったの？」

「女の子の準備は時間がかかるものですわ」

「何だと！ それは暗に鈴ちゃんが女の子じゃないって言いたいのだ！」

「深読みしすぎですわ！」

と、そんな感じでこの場には僕と鈴ちゃんとセシリアしかまだ集まっていなかった。……と言つてもだよ、集合時間は早めにしてある。七夕祭り開始の20分前にはみんなが集まろうということにしていたわけだから、まだ時間はあるんだよね。

「それよりも氷雨さん、わたくしのこの姿を見て何の感想もないのは少し失礼ではありません？」

セシリアにそういわれて確かにそうだなと思った。せっかく浴衣を着てきた女の子に対して全く浴衣を褒めないのは失礼だし、ナンセンスだよ

「確かにそうだね」

では、改めて……。

「鈴ちゃん、その浴衣可愛いね！ いつも可愛い鈴ちゃんが今日はさらに可愛いくなつてるよ！」

「あ、ありがとう……つて、あんたいつもそんなことばかり言うから、言葉に重みがないのよ」

「とか言つて、毎回嬉しそうな顔してくれる鈴ちゃん、やっぱり可愛いよ」

今も紅くなつてゐるしね。嬉しさを隠しきれず頬が緩んで口角が上がつてるところもやっぱり可愛いね。

「それに、僕が鈴ちゃんにいつも可愛いって言つてゐるのはいつもそう思つてゐるからだし、毎回僕の全身全霊こめて可愛いって言つてゐるから軽い言葉なんかじゃないよ」

「あんた、よくそんな恥ずかしいこと臆面もなく言えるわね……」

「本心だからね！」

そんな会話を隣で聞いていたセシリアが口を開く。

「『本心だからね』ではありませんわ！」

開いた瞬間僕への叱責が飛んできた。え、なに？ 僕は間違つたことを言つてた？

……いやいや、僕が言つたのは要約して『鈴ちゃん可愛い』だからまつたく間違つてゐるところはないはずだよね。

「鈴ちゃんが可愛いってのは間違つてないと思うんだけど？」

「そこはどうでもいいですわ！」

鈴ちゃんの可愛さがどうでもいいという言葉で一蹴されてしまった。

「鈴さんのことは先ほど褒めてらしたでしょ？」

いや、鈴ちゃんの浴衣は褒めてなかつたから……。まあ、浴衣も含めて今の鈴ちゃん

を褒めたんだから、むしろ別個で褒めるのはおかしかったかもね。

「なら、わたくしのことを褒めるべきではありませんの!？」

「自分から褒めろと言うのはちよつと……」

「あなたが言わせてるんですわよ!？」

まあ、冗談はこのくらいにしておこうかな。さすがの僕もあの場面でセシリアを褒めるべきだったことくらいわかるさ。あ、でも鈴ちゃんのことを可愛いって言ったのは冗談じゃないからね。本心だから。

「冗談だよ、セシリアも浴衣似合ってるね」

「ついでの様な言い方は好きませんわ」

あらら、すねちゃったよ。セシリアは反応が面白いからついじつちやうけど、こんな風に拗ねられると悪かったな、と反省する。

「ごめんって、ほんとに似合ってるから機嫌直してよ」

「……かわいいですか?」

「ん、なんて?」

僕はセシリアのつぶやきが聞き取れず首を傾げる。

「ですから、わたくしは可愛いですかと、聞いていますの!」

「え、可愛いはないかな」

その返答にセシリアはシヨックを受けたようで驚愕を顔に浮かべたのち、表情を曇らせた。

「そ、そうですわよね……わたくしの浴衣なんて……」

「うん、どちらかという綺麗だよな」

「綺麗ですわよね……え、綺麗？」

曇っていたセシリアの表情が変わり、*“綺麗”*とはどういう意味だったかと思案するような顔をしていた。少ししてその答えに到達したのか、セシリアの顔は瞬時に紅く染まった。元々の肌が白いので、その変化は顕著だった。

「な、ななな、何をおっしゃいますの!？」

おかしい挙動をしながらセシリアは僕を責めるような大きな声を出す。え、何って、感想だけど、何かおかしかったかな？

「まあ、確かにセシリアのちよつと抜けた性格を知ってたら可愛いっていう方が当てはまるかもね」

「な、ななな」

もはや頭が回っていないのか、僕の『ちよつと抜けた性格』という文言にも何の反応もせず、セシリアは黙ってしまった。

「そ、そういえば、他の方は遅いですわね！ わ、わたくし、ちよつと様子を見てきます

わー！」

「え、あ、ちよつと」

僕が何かを言う間もなく、セシリアは寮の方へ走り去ってしまった。浴衣は走りづら
いと思うんだけど、驚くほどスマートな走りだったよ。

それを見送っていると、横から僕は二の腕を叩かれた。

叩かれた方に目を向けると、そこにはそつぽを向いた鈴ちゃんの姿があった。

「え、どうしたの鈴ちゃん」

「……」

返事をしてくれないってことは、怒ってるのかな？ な、何か僕は悪いことしまし

たっけ!?

「ごめんなさい!」

「……ふふつ、なんで謝ってんのよ」

僕が謝罪をすると、鈴ちゃんは噴き出したように笑い、こつちを向いてくれる。

「あんだ、謝るのが早すぎるのよ。もうちよつと怒らせなさいよ」

「ええ？ だって、僕が悪いことしたなら僕が謝るのは当たり前じゃないか」

そういうと、鈴ちゃんは少し呆れたような笑顔になって、僕の方をじつと見つめてく
る。

「思ったことをそのまま口にするのはあんたのいいところだけど、悪いところでもあるのよね」

「褒められた？」

「微妙ね」

なんとなくおかしくて僕は笑った。

思ったことを口にするのは僕の長所であり短所か……ん？

「もしかして、鈴ちゃん、さっきやきもちやいてた？」

セシリアを褒めた後に怒ってたし、思ったことを口にするのが短所っていうし、もしかすると嫉妬してくれたのかも……。

そんなことを言うと、鈴ちゃんは僕の胸を小突いた。

「そういうのが悪いところなのよ……」

恥ずかしそうに顔を紅くした鈴ちゃんが上目使いで僕を責めてくる。な、なんという破壊力。こ、この気持ちの口にするのが悪いことだって言うのか？ 否、断じて否。

「鈴ちゃんは僕の織姫様だね！」

「じゃあ、年に一度しか会えないわね」

「やっぱり鈴ちゃんは鈴ちゃんだね！ 織姫？ 何それ、私は拒絶する？」

「こうなるんだから、今度からは考えてから言うことね」

そういう鈴ちゃんであるけれど、その表情はどこか嬉しそうに見えて満更でもないのかな、と思った。

星合の七夕祭り その3

鈴ちゃんと二人で他のみんなを待っていると、向こうの方から手を振りながら駆け寄ってくるシャルとラウラの姿が見えた。

「遅れちゃってごめんね」

息を整えながらシャルが申し訳なさそうに手を合わせる。集合時間には遅れているが、別に祭りの時間には間に合っているので咎めることもない。

「全く。私の用意は終わっていたが、シャルが存外に手間取ってな。すまない、お兄ちゃん」

「いやいや、全く問題ないよ。それと、ラウラの用意はシャルと僕がやったんだから偉そうにしちゃだめだよ」

「そうか、それもそうだな」

ラウラが僕の言葉に素直にうなずくと、隣で見ていた鈴ちゃんとシャルが少し笑う。

何か面白いところでもあったかな、と思つてそつちを向く。すると、二人は弁解するように口を開いた。

「ああ、いや。その、ほんとに姉妹みたいだねって思つてさ」

「姉妹じゃないよ!？」

なんで僕が姉になっちゃってるんですか？

「良いじゃない。どっちでも大して変わらないでしょ」

「変わるよ、主に性別が！ 生物として一番大事な一線を越えちゃってるからね!？」

「それこそあんた曖昧じゃない」

「いやいや、僕くらい男らしい男もいないと思うよ？ ほら見てよ、この惚れ惚れする上

腕二頭筋を！」

「細いわね」

「うん、スタイルが良いって近所のおばちゃんによく褒められたよ」

「それ男らしいって言わないわよね？」

「確かにね」

鈴ちゃんの鋭いツツコミに論破されていると、シャルが再び笑い出した。

「二人の息もぴったりだね」

「夫婦漫才か何かか、お兄ちゃん」

「そうだよ!」

「違うわよ!」

夫婦という単語に反射的に肯定してしまつたら、鈴ちゃんが真っ赤になつて否定して

きました。これは、悲しくて涙が出ちやうね。

『だつて女の子だもん、ですか』

いや、そのネタは古すぎる。それに女の子じゃないから、漢だから。

『男の娘という人種も存在します』

うん、あるね。……だから？

そんなことをしていると、そろそろお祭りの開始時間となつていた。そんなギリギリの時間にセシリアと箒はやつてきた。

「おーやつと来たね」

「すまない。少し用意に手間取った」

そう謝る箒に僕は全然気にしていないと言つた。そうして大体が集まつたのだが、肝心の一夏が来ていないことを箒が指摘する。

「一夏は……来ていないのか？」

どことなく残念そうな表情と声色に僕はにやけるのを抑えてその問いに答えた。

「うん、ちよつと会場の手伝いでくたびれちゃったみたいで遅れてくるらしいよ」

「そ、そうなのか……」

やはり残念そうな顔をする箒。当然だよな。箒が容易に手間取つたのも、多分一夏に綺麗に着飾つた自分を見てもらうためだつたんだろうし。

「まあ、東さん特製の目覚ましをセットして来たからすぐに起きるだろうけどね」「なんでしよう。その篠ノ之博士の特製というのがすごく引っかけますわね」

セシリアがそういうのも一理あるね。だってあの東さんの作った目覚ましだよ？

普通なわけないよね。ちなみに、僕はもらった後、怖くて使ったことはないです。だから、一夏があの時計の第一犠牲者ってわけだね。

「南無……」

「手を合わせるって、どれだけ危ないのよ、その目覚まし」

僕は後数分後に叩き起こされるであろう一夏を想像し、手を合わせたのだった。



グラウンド

学園の大きなグラウンドでも、全校生徒が集まるとなるとなかなか狭く感じる。ステージが生まれ、各部活が運営する屋台が立ち並んでいる。どこもかしこも高いレベルの屋台で、学内限定で開催するのがもったいないくらいだ。

「というか、もうこれ学園祭のレベルじゃないの？」

「IS学園は行事がお祭りごとが好きなのかもしれないな」

どことなくそわそわして落ち着きのない筈がそう言う。その様子とセリフだけ見たら、筈の方がお祭り大好きに見えるけど、その実ただ一夏がいつ来るかとそわそわして

いるだけなのが丸分かりだよね。

うーん、ここはお兄ちゃんとして一肌脱ぐのがいいかもしれない。

『公衆の面前での露出は捕まりますよ』

物理的に脱ぐんじゃないからね!?

あ、いいこと思いついたよ。じゃ、この袋に鍵を入れて……つと。

「箒、これ僕の部屋の鍵ね」

そう耳打ちしながらこつそり箒に袋を渡す。箒はどういうことだ、と不思議そうな顔になる。

「僕がみんなを連れていくから、僕の部屋に行つて一夏を起こしておいで」

そう再び耳打ちすると箒は驚いた顔で僕の方を見てくる。僕はそれに微笑みかけたのち、再度耳打ちする。

「別に合流しなくていいからね」

「氷雨……」

言いたいことを言い終えると、僕は合図を送るようにウインクする。

「気持ち悪いぞ」

「おい」

そうして、事を実行に移した。

「あ、セシリア、射的があるよ」

「射的ですか。なるほど、景品を落として遊ぶものですね」

「これで偏向射撃の特訓しようよ！」

「できるわけじゃないじゃないの！」

「いやいや、できないことはないだろうさ。ね、シャル？」

「え、僕？ いや、無理じゃないかな？ 偏向射撃ってBT兵器特有の技能だし……」

「いや、そこはこう、こう根性というかサイコキネシスというか」

「もはや偏向射撃でもなくなってるわよ、それ」

「ワイヤー付きで射出すればあるいはできるかもしれないな」

「有線サイコミュカー、あれにはロマンをひしひしと感じるよね」

「あれ？ 箒がないよ？」

シャルがそれに気づく。

適当な話を持ち込んで人ごみの中を移動してたら、うまいこと箒ははぐれたふりをすることができたようだね。

「ああ、さつき方向を変えてどこかに行つたぞ。トイレではないのか？」

……ラウラには気づかれてたみたいだね。



会場の外

氷雨に言われたとおりに皆からはぐれ、会場の外に出た箒の心臓は激しく高鳴っていた。原因は走ったからとかではなく、間違いないこれから一夏のもとへ行き、二人つきりで会えるからというものだろう。

今日という日は箒にとつて特別な日だ。そんな日には一夏と二人きりで出かけたという乙女な願望もあつたものの、あいにく学園の行事がかぶってしまったことにより、それは断念するしかなかった。

しかし、まさかあの……あの氷雨の計らいによりそれが実現できるなんて、夢であれば頬を抓つて正気を確かめるところだ。

そう感謝をしつつ渡された袋を見る。どうしてこんな袋に鍵を入れていたのか疑問ではある。それは可愛らしい柄のついた紙の袋であつた。普通ならお土産物などを入れるような包装であつたが、それを氷雨はカギだと言つて渡してきたのだ。

そこに少し疑問を抱いて開けてみると、そこに入つていたのは鍵だけではなかつた。袋を傾けて手の上に中身を出すと、鍵の他に琥珀でできたかんざしと一切れの紙が入つていた。

「氷雨の奴……」

大体を察した箒はその紙に書かれた文字を読む。

『誕生日おめでとう、箒。今日は七夕だね。箒の彦星様と会えるといいね』

「ふふっ。いらん世話だ。……ありがとう」

そうつぶやくと箒はその紙を丁寧折りたたみ巾着に仕舞う。そして手元に残ったかんざしを髪にセットし、兄である氷雨のことを少し見直しながら、一夏の部屋へ向かうのだった。



会場

「決まった……」

「まさか……ありえませんわ」

そう。ここは射的屋。僕はしたり顔で銃を構えたまま綺麗な星空を見上げる。ああ、あれがデネブ、アルタイル、ベガつてね。あの曲は良いよね。不健康そうながはらさん可愛い。

「全部外すなんて!」

はいそうですね。僕は射的のセンスはないのですべて外しました。あれだよ? 的に当たったけど落ちなかったっていうわけじゃないよ? グリコのお菓子にもかすりもしなかったよ。

「偏向射撃までできるのに何でこれができないのよ」

「いや、だってI S乗ってるときはI Sの補助が付くじゃない？ そしたら僕の銃の腕なんていらんじやない？ はい、Q・E・D」

「そういうもののかなあ」

シャルは笑いながら自身の銃での的を狙う。そして放たれた弾丸は見事にぬいぐるみの眉間を打ち抜き、撃墜させる。

「はい、氷雨あげる」

「わーい、ぬいぐるみだーって、なんでやねん！」

男の僕にぬいぐるみ似合うと思うの？ しかもこんな、抱きしめられるくらいのおっきさのトトロ口が？

「え、いらんいの？」

「ううん、嬉しい。ありがとう！」

「えへへ」

なんというか、ぬいぐるみってぎゅっと抱きしめると安心するよね。まあ、大の男がやったらモザイク必須なんだけども。

そんなことをしてたら、ラウラと鈴ちゃんにぬいぐるみを抱きしめているシーンを端末のカメラで撮影されてしまった。

「ちよっ！ 何してるの!？」

「いや、あんたがあまりにも似合ってたからつい」

「ついじゃないよ！　というか、似合っていないからね！」

「ラウラ、あとで送ってもらっていない？」

「任せろ、シャル」

「そこ、取引しない！」

ああ、何たる失態。あんな痴態を後世に残すことになってしまおうとは……。

「？　……あ、別に女装の時点で手遅れか」

「そこに自分で気づくなんて、氷雨さんも成長してますのね」

「ありがとう。嬉しくない賛辞だよ」

まったく褒められている気がしないセシリアの賛辞を流す。鈴ちゃん、シャル、ラウラはなんだか僕の写真の話題で盛り上がっている。あそこに突っ込むのはやめたほうがよさそうだね。

「そういうえば、セツシー。今日は七夕だけど願い事とか決めてるの？」

「セツシーってなんですの」

そういうった後にセシリアは少し思案顔になる。

「こういう行事ではあまり深刻なことは言うものではありませんわよね」

「なんでさ。こういう所だからこそ本当の願いを書いておかなきゃ。こんなところすら

偽ってたら、いざという時本当の気持ちを吐けなくなるよ?」

その言葉にセシリアは少し笑う。

「いつも本音で語る氷雨さんがいうと説得力ありますわね」

「えっへん。……今度はちゃんと褒めてるよね?」

「ええ。わたくしからの褒め言葉ですわ。ありがたく受け取ってください」

「ははー」

少し大げさにありがたがると、やっぱりセシリアは笑顔を浮かべる。

「わたくしの願いは、家名復興ですわ」

セシリアの願いは思うよりも大きなものだった。両親を失ってから、セシリアは家を守るために頑張って勉強したんだっけ。そうして守ってきたも、やっぱりセシリアだけの力ではどうにもならないところがあったってことなんだろう。

「貴族に生まれたのですから、家を守ることに、家名を上げることが当主たるわたくしの役ですもの」

「セシリアは強いね」

その言葉にセシリアは目を丸くする。そして自嘲するような笑みをうかべた。

「そんなことありませんわ。弱いから、守れていないのですもの」

「いや、そんなことないさ。本当に弱かったら、逃げ出すもん。家名とか、そういうもの

を投げ出さず戦おうとしてるセシリアは強いし、偉いよ」

それが僕の素直な感想だった。でも、その言葉を聞いたセシリアは少しして涙を浮かべたのだった。

「え、ええ！ あ、ご、ごめん。なんか悪いこと言っちゃった？ ごめんね」

僕は慌てて巾着からハンカチを取り出してセシリアに手渡す。ああ、やっぱり鈴ちゃんの言うとおりかも、僕が思ったことをそのまま言ったら良いことなんてないね。

そんな僕らの様子に気付いた鈴ちゃんたちが僕を責めるように見る。

「あんた、なに泣かしてんのよ」

「セシリア、大丈夫？ もう、氷雨、また余計なこと言ったでしょ」

「お兄ちゃんはおとめごころ？ というものが分かっていないな！」

そう責められて僕は素直に頭を下げる。でも、ラウラ、分かってないなら無理して使う必要ないんだよ？

「ち、違いますわ。氷雨さんは何も悪くありませんわ」

そんな中でハンカチで目元を抑えながら、セシリアが弁明してくれる。

「ただ、そんな風にわたくしのことを言ってくれたのは氷雨さんが初めてで、少し……お、驚いてしまっただけですわ」

そう言いながら落ち着いたのか、ハンカチを目元から放し、僕の方を見つめる。まだ

赤い目が僕を捕えるが、それは僕を責めているわけではないようだ。

「なんだか、今日は満足してしまいましたわ。わたくしは少し一人になりたいので、別行動させてもらいますわ」

「え、ええ！ や、やっぱり怒ってるの？ そうだったらごめんね。何でもするから、許して」

「ふふ、なんでもですわね？」

あれ？ なんだか不敵な笑みでセシリアさんが笑ってらっしゃるぞ？ 嫌な予感しかしないんですが……。

「ではまた後日お願いしますわ。ハンカチ、感謝しますわ。これは洗って返しますわね」

「え、あ、うん」

なんだか、圧倒されて僕はそう答えるしかなかった。

そうしてセシリアは離れていった。その後ろ姿がなんだか嬉しそうに見えて、僕は少し安心する。

「で、あんた何言ったのよ」

そんなセシリアを見送った後は当然の如く鈴ちゃんたちに問い詰められるわけで。しかし、勝手にセシリアのお願いとかを話すのはどうかと思っただけ。

最終的に僕は三人にかき氷をごちそうすることで決着がついたのだった。

星合の七夕祭り その4

一夏の部屋

廊下で扉の前まで来た箒はそのノブに手をかけることを躊躇っていた。カギはある。中に入ることは問題ない。しかし、一夏と二人きりで会った後、冷静でいられる自信が無いのだ。

自分が冷静さを欠いて暴走してしまう癖があることを箒は自覚している。故に踏ん切りがつかないのだ。

「(こんな時、氷雨ならなんて言うだろう)」

氷雨がここに居れば、笑顔で自分の背中を押してくれるだろうことは容易に想像できた。そして、それが自分にとってどれほど大きな安心感になるかも。しかし、それが分かっても本人がいなければその安心感は得られない。高まる鼓動は抑えようのないものになっているのだ。このまま一夏と目が合えば間違いなく自分は冷静さを失い、一夏の一挙動に反応し、不快なことをしてしまおうだろう。

「(どうすれば……)」

そんな風に悩み、立ち往生している箒のところへ自室へ向かおうとしていたセシリアが近づいてきた。

「あら、箒さん。どうしましたの?」

「あ、いや、そのだな……」

どうしてセシリアがここに居るのかという疑問や自分がしようとしていることがばれるのではないかという危惧から、何とも覚束ない返答になってしまった。

そんな箒の様子を見てかセシリアは状況を察して、箒が何をしようとしていて、何を躊躇っているのかを大体理解したのだ。

「はあ、貴女はもう少し兄を見習った方がいいですわね」

「な、なに!？」

いきなりそんなことを言われた箒はどういう意味なのか図りかねていた。

そうしていると、セシリアは箒の両肩をがしりと掴みしつかりと箒の目を見据えた。

「良いですか、箒さん。こんなところで自分の思う通りの行動ができないのであれば、いざ大事な場面になった時にとつきには動けませんわよ」

それはどこかで聞いたことのある言葉だった。

「失敗するかもしれないと恐れるのは、本当に後戻りのできないときだけにすべきですわ。今失敗したところでその代償は数日間気まずくなるだけで済みますわ。二度と

会えなくなるわけでもないのですしたら、やって後悔した方が得ですわよ」

セシリアは真剣な顔で箒にそう諭した。その言葉は箒の中にすんなりと入ってきて、どことなく知っている安心感を与えた。

しかし、箒は不思議だった。この様子であれば、セシリアは自分が何をしようとしているかも理解しているように見える。にもかかわらず自分の背中を押すようなことをしているのはどうしてか。セシリアも一夏のことを好きなのではないのか……。

「セシリア、お前は……」

「勘違いしないで下さる？ わたくしは借りを返しただけですわ」

「借り？」

身に覚えのない借りに箒は首をかしげるも、セシリアは平静を取り戻した箒を見て離れた。

「うまくいくといいですわね」

「あ、ああ」

訳も分からないまま、箒はセシリアを見送った。見送ったのちに、セシリアの言葉がどうにも氷雨が考えそうな言葉であると思ひ、それが関係しているのかとも考えた。

しかし、それも憶測に過ぎないので箒はそれ以上考えることをやめた。

ふと立ち返ってみると、セシリアのおかげで大部分を占めていた不安が消えているこ

とに気が付いた。

「セシリア……ありがとう」

箒は思い切つてノブをひねる。そして、開け放つたドアの先にはこれから浴衣に着替へようとしている下着姿の一夏の姿があつた。

「あ……」

時が止まる。二人の間には何とも言えない気まずい空気が広がり、箒は一夏の姿を見て動けなくなつていた。

「う」

「う?」

「うわあああああ!」

勢いよく閉められたドアの音はセシリアの部屋まで届いてたという話だつた。



会場

「?」

「どうしたの、氷雨?」

なにやらどこかで大きな音がした気がしたのだけれど、その音の方に視線を向けてみたところで特筆して何かがあつたわけではなかつた。

「気のせいだったみたい。なんでもないよ」

後方にいたシヤルにそう答えてから僕は視線を目の前の水槽に戻した。今僕は、金魚と死闘を繰り広げている最中だ。

「しかし、この金魚掬いというのは面白いものだな」

隣で熱心に金魚を目で追っているラウラがそう答える。

「ただ金魚を掬うだけでは面白くないと、わざわざ水に耐性のない紙で行うとは。合理的ではないが、計算されているな」

いや、多分店の売上の問題が一番の要因だと思うんだけど。そんな無粋な回答も浮かんできたけど、祭りの場にそれはふさわしくないよね。楽しめているならそれ以上の何かはいららないのですよ。

「つて、鈴ちゃんすごい手馴れてるね」

ラウラとは反対側の隣に座る鈴ちゃんが持つ器にはすでに何匹もの金魚が跳ねていた。

「そう？ まあ、日本にいたころはこれで一夏と競ったりもしたからね」

そう得意げにポイを掲げ笑顔を浮かべる鈴ちゃん。なるほど、確かに一夏はこういうの好きそうだし、よく行ってたんだろうね。

「僕も負けてられないね。神社の息子として、縁日で鍛えられたこの腕、見せてあげるよ

！」

「へえ、見せてみなさいよ。言っとくけど、あたし結構自信あるからね」

そんな挑戦的な鈴ちゃんを見て、後ろからシャルがあることを提案してくる。

「じゃあ、とった数が一番少なかった人に罰ゲームとかどう？」

自分は参加していないからって面白がってない？ まあ、僕も面白そうだから全く問

題ないけどね！

「ふふ、あとで吠え面かいても知らないよ？」

「言ってなさいよ。実力の差っていうのを見せてあげるから」

「何故か私まで巻き込まれたが、無論負ける気はないぞ」

「みんな頑張ってるねー」

よし、罰ゲームはともかくとして、ここで一つ鈴ちゃんにカツコいいところを見せて

やろう！

『金魚掬いに格好良いも悪いもないでしょう』

……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

いっぱい金魚が取れてモテるのは、ただ足が速いだけでモテた小学生までのステータ

スだよね。

「しかし、ここで漢を見せないでどこで見せるというのだ！」

「金魚掬いとはそこまですごいものなのか、お兄ちゃん」

「そんなことないから安心しなさい」

漢水雨、この一投にすべてをかける！

『数を競うというのに全てをかけるのですか』

大きく振りかぶった右腕がうなりを上げて水面近くを泳いでいた一匹の金魚の真下を潜り抜ける。その素早いポイの動きが作り上げた水流により、その金魚は上へ飛び上がる。跳ね上がる金魚の真下に器を持っていき、僕は金魚を確保したのだった。

「ふふ、決まったね」

「……決まってるわよ」

隣の鈴ちゃんからなにやら怒りの色が含まれる声が聞こえてきた。え、怒り？

恐る恐る横に視線を向けると、そこには水を滴らせる鈴ちゃんの姿があった。前髪が濡れて額に張り付いている感じにどことなく艶めかしさを感じて僕は少し頬を紅くする。

「み、水も滴る可愛い鈴ちゃんだね！」

「そうじゃないでしょ！」

「真っ先に出てくる言葉がそれな水雨に驚きを通り越してもう称賛しちゃいそうだよ、僕は」

「さすがお兄ちゃんだな」

「なんであんたらは肯定的なのよ……」

え、でもなんで濡れてるの？ ……あ、僕が勢いよく掬い上げた時に水が顔にかかったってこと？ う、うわあああああ、GJ！ じゃなかった！

「ご、ごめんなさい!!」

人目をはばかることなく僕はその場で謝罪の意を込めた土下座をする。前に一夏に「お前、土下座好きだな」って言われたけど、好きなのわけじゃない。ただ、首を垂れるこれが一番僕の謝罪の意思を伝えやすいだけなんだよ。

と、謝ってるだけじゃだめだ。僕はすぐさま頭を上げて巾着に手をかけて鈴ちゃん顔を拭くものを探す。

しかし、ハンカチはさつきセシリアに貸したので手元に拭く物はなくなっていた。

「しまった。ハンカチがない！ 仕方ない。僕の浴衣をちぎって、その布きれで応急処置を……!」

「やりすぎよ、馬鹿」

鈴ちゃんに頭を小突かれて僕は袖にかけて手を止めた。顔を上げ、鈴ちゃんの方を伺うと、自分のハンカチで顔を拭いているところだった。

「うう、ほんとにごめんなさい。調子乗って、ごめんなさい」

「あんた毎回反省するけど、毎回失敗してるわよね」

そう言つて鈴ちゃんはため息を吐いた。うう、これやつぱりすぐ怒ってるよね。そんな空気がひしひしと伝わってくるもん。

「お、怒ってますよね?」

「んー、どうかしらねー。ちよつと機嫌は悪くなったかもしれないわねー」

あれ? あんまり怒つてない?

「じゃ、あたしの機嫌がよくなるように、罰ゲームで焼きそば人数分買つてくること。いい?」

少し意地の悪い笑顔を浮かべながら鈴ちゃんは僕を指さしてそう言った。本当は怒つてないけど、僕の罪悪感をなくすために罰を与えてくれたのかな。なんというか、鈴ちゃんらしい気の使い方僕は表情を明るくする。

「もちろん! ……つてあれ? 罰ゲーム?」

僕は手元のポイを見る。そこには確かに破れたポイが握られていた。

「あれだけ水の中速く動かしたらそりゃ破けるわよ」

ぐぬぬ。漫画とかだとああいう表現でいっばいとつてるのに……。

「あ、でもでも、僕一匹とつたよ? 流石に初めて金魚掬いをやるラウラは失敗してるでしょ」

そう言いながら振り返ると、器いっぱいに掬われた金魚と慣れた手つきで次々掬うラウラの姿があった。もはや掬われた金魚が可哀想なくらい器の中はすし詰め状態だ。

「ん？ ああ、最初は苦戦したが慣れてみれば簡単なものだな。ナイフの扱いに似ているところもある。これはクラリツサに報告だな」

完敗してました。

「で、なんだっけ？ 縁日で鍛えたんだっけ？」

「ぐぬぬ」

嬉しそうな笑顔で煽られると腹が立つどころか、可愛いと思ってしまう。

「わかったよ！ 買ってきますよ！ 青海苔と鰹節は乗せてもらっていいよね！」

「うん。お願いね」

そういつて鈴ちゃんに笑顔で見送られる。鈴ちゃんもラウラもまだポイは破けてないみたいだし、続行するようだ。

「あ、僕も行くよ」

後ろからシャルが駆け寄ってくるので僕は振り向いた。

「待っててくれてもいいよ？ 罰ゲームだし」

「四つも持てないでしょ？ それに見てるだけじゃ手持無沙汰になっちゃうもん」

そういつてシャルは僕の隣に並ぶ。まあ、確かにずっと見てるだけじゃ面白くなく

なっっちゃうよね。

「そういうことなら、一緒に行こうか」

「うん」

そんなわけで僕とシャルは焼きそばの屋台へ歩き出した。

◇ ◇ ◇

焼きそばの屋台につく前に綿あめを買ってシャルに渡した。最初は遠慮していたシャルだったが、ついてきてくれたお礼だと言って半ば無理やり渡すと受け取ってくれた。

故にシャルの手は空いていないので受け取った焼きそばはすべて僕が持った。

「な、なんかごめんね。半分持ったためについてきたのに」

「いやいや、気にしないでよ。どうせ蓋付きだから重ねても問題ないしさ」

まあ、それを狙って綿あめを渡したわけだし、全く咎める気にはならないよね。

鈴ちゃんたちのもとへ戻るべく、僕らは来た道を引き返していく。その道中で僕はみんなに聞いてる話題を出した。

「シャルは七夕で何をお願いするの？」

「え、お願い？ うーん、そうだなあ……」

そんな感じでシャルは綿あめを摘まみながら思案顔になる。どうやらまだお願い事

は決めていなかったようだ。

「考えてなかった？」

「うん。というより、思いつかないかな」

笑顔を浮かべながらそう返すシャル。思いつかないとは、何とも無欲なんだなあ。

「なんていうかね。僕はもうこの現状に満足しちゃってるんだ」

そんなことを言いながら、なぜかシャルの表情は少し曇る。屋台からの光の加減でシャルの表情に影が落ちているだけかもしれないけれど、俯き加減になっているのは確かだった。

「お母さんが死んでから、毎日苦痛でしかなかったからね。ここに来て、一夏や氷雨に助けられて、やっと日常に戻れた気がするんだ。みんなと一緒に過ごしてるだけで、すごく安心する。僕がいていい場所がここにあるんだってね」

シャルは少しずつ千切って綿あめを口に運んでいく。

「でも、それもずっと続くわけじゃない」

そうして少しずつ減っていった綿あめは最後には割り箸だけになっていた。

「いつかみんなここを卒業したら、別々のところに行かなきゃならない。そしたら、僕はまたあの頃に戻ってしまう……」

シャルはその割り箸を近くににあったゴミ箱に捨てに少し僕から離れる。手からする

りと抜けるように落とされた割り箸は段ボールにビニール袋を張り付けた簡素なゴミ箱に吸い込まれる。

それを見送ったシャルは再び僕の方に駆け戻ってきた。

「だから、あえてお願いするなら、いつまでもみんなと一緒にいれますように……かな。えへへ、おかしいよね」

自嘲気味に笑うシャル。でも僕はその願いが自嘲するような願いには思わなかった。

「なんで？ いいお願いだと僕は思うよ？」

「そ、そうかな？」

僕が肯定したことにシャルは少し驚いたような顔をする。

「でも、叶わない願いだよ」

「いやいや、そんなことないさ」

シャルの言葉を僕は即座に否定する。一緒に居たいという願いはそんなに難しいことだろうか？ 僕はそんな風には思わなかった。

「ありきたりな言葉に聞こえるかもしれないけどさ。どれだけ遠くに居ても僕らは繋がってるんだよ」

「ふふっ。もしかして、心で？」

シャルが少しからかう様な口調で答える。まあ、それもありと言ったらありだよな。

「模範解答だけど、僕的には不正解」

シャルは不思議そうな顔をする。他に何かあるのかと言いたげだ。

「正解はネットワークでしたー」

「え」

予想外だったのか、シャルは呆然とする。というより、そういうものを期待していたわけじゃないという顔をしているようにも見えるね。

「居場所っていうのはね、別に現実の世界になきやいけないうってわけじゃないんだよ？
どんなに辛い日々でもね、逃げられる場所が一つでもあればそれだけで戦えるんだからね」

心の支えになるなら居場所のカタチなんてどうだっていい。ただ自分を受け入れてくれる、そんな場所が一つでもあれば、それは原動力になる。

「辛いことがあったらメールでもすればいい。何ともないつまらない日なら電話すればいい。予定のない休みがあれば訪ねればいい。四六時中一緒に居られなくても、こんな繋がりでも、多分それは居場所って言っているいいものになるんじゃないかな？」

「氷雨……」

「思い出話に花でも咲いたらそれでももう元気になるはずだよ」

まあ、僕の思い出話の大部分は誰にも伝わらないけどね。え、それを後悔してるかつ

て？ 前の僕には咲く花もないし、咲かせる友人もないよ？

「だから、今はその思い出話になるような思い出をいっぱい作ろうね！」

「えっ？」

「今が楽しくなきや、思い出話も楽しくないしね！ シヤルは今に満足してるっていったけど、僕はまだまだ満足してないよ！」

僕は焼きそばを持ったままの両手を高く突き上げる。

「もつともつと楽しまないと気が済まない！ 残念だけど、僕と一緒にいたが運の尽き。シヤルにも付き合ってもらうからね！」

そういつて僕はシヤルに笑いかける。すると、シヤルは一瞬キョトンと呆けた顔になり、その後、満面の笑みで頷いた。

「うん！」

「よし。それじゃあ、ひとまずはあのあんず飴を食べよう！ その次はラムネを飲んで、次にいか焼きも食べようね！」

「もう、なんだか食べてばかりだね」

シヤルは呆れたように言う。しかし、その顔は楽しそうだ。

「食は文化だからね。人の食事なんて、最早娯楽でしかないからね！」

「あはは、そうだね！」

先ほどの曇り顔はどこへやら、楽しそうな笑顔になるシャルを見て僕はほっとした。あのままだったら、いつかその不安が大きくなって、一人になった時に本当に絶望しちゃいそうだったよ。

空を見上げる。快晴の夜空には綺麗な月がよく見えた。

「やっぱり晴れてた方がいいもんね」

「早くいこうよ、氷雨！」

シャルに急かされ、僕は歩き出した。僕だって、みんなと一緒に居たい。だから、今を楽しまなきゃね！

その後、冷めた焼きそばを手に、僕とシャルは鈴ちゃんに怒られたのでした。

星合の七夕祭り その5

会場

着替え終えた一夏と共に箒は七夕まつりの会場に戻ってきた。一夏の下着姿を目の当たりにしてしまったことにより、二人の間には何とも言えない気まずい空気が流れていた。

どうやら目覚ましはしっかりと一夏を起こしていたようであるが、起こし方が目覚ましから出ていたアームにより宙吊りにされるといふものであったので、そこからの脱出に時間を食われて一夏は遅れていたようだ。

やっと抜け出して着替えようとしたところに箒が入ってきたのであのような形の対面になってしまったのだった。

「(くっ。氷雨の奴が余計なことをしていなければ……)」

決心していざ踏み出してみればあのざまであったのだ。恨み言の一つも垂れたくなくなるというものだった。

「おお、結構本格的な屋台をやってるんだな」

そんな箒の気を知つてか知らないでか、一夏は祭りの会場に立ち並ぶ屋台を見て嬉しそうな声を上げていた。昔と変わらぬ一夏のノリになんだか安心してしまつた箒は少し笑う。

「なんだよ、箒」

「いや、お前が子供みたいいな反応をするものでな。お前も変わらないな」

二人の間にあつた気まずい空気は気づけばなくなつていた。
「祭りつてそう言うもんだろ。……なんだか昔を思い出すな」

そう言つて一夏は少し遠い目をする。その表情がなんとも年寄り臭く見えた。

「また年寄りみたいいな顔しているな」

「そうか？」

「ああ。お前の癖だぞ」

「うーむ。自分ではそんなつもりはないんだけどな。氷雨にもよく言われるけど、そんなに年寄りくさいか？」

「否定はできないな」

そう答える箒の言葉に一夏は大げさに落ち込む。そんな一夏の反応に少し言い過ぎたかと思う箒であつたが、一夏はすぐに顔を上げ冗談めかした笑顔を浮かべた。

「なんてな。それより、箒」

一夏は箒の方に向き直ると、手に持っていた綺麗に包装された箱を差し出した。

「誕生日おめでとう」

その言葉を受けて箒は驚くとともに、一夏が自分の誕生日を覚えていてくれたことを嬉しく思った。

「お、覚えていたのか……」

「当たり前だろ？ 長い付き合いなんだ。忘れるわけないって」

そうあつさり答えるもので、箒は嬉しさを隠しきれず笑顔になる。

「あ、ありがとう、一夏。その……開けてもいいか？」

受け取ったプレゼントに視線を落としたのち、箒は一夏にそう尋ねた。

「もちろん」

「そ、そうか……」

はやる気持ちを抑えて箒は丁寧に包装をはがしていく。そうして現れた箱のふたを開けると、中には綺麗な赤色のリボンが入っていた。

「こ、これは？」

「箒、今でも昔俺が上げたりボン使ってくれてるだろ？ だから、どうかと思ったんだけど、だめだったか？」

「い、いや、そんなことはないぞ。あ、ありがとう」

「おう。喜んでもらえて何よりだ」

そう嬉しそうな笑顔を浮かべる一夏に、箒もつられて笑顔を浮かべる。

そして、箒は心の中で氷雨に謝りながら、簪を外し、リボンをつける。

「どうだ？　そ、その……に、似合っているか？」

そう問いかけると、一夏はその頬を赤らめてこちらを伺う箒に少しドキリとする。

「お、おう。似合ってるぜ」

照れくさそうにそう答える一夏に、箒は嬉しくなった。

一夏は照れ隠しをするように屋台の方へ視線を移す。

「それじゃ、行こうぜ。せっかくの祭りなんだし、楽しまなきゃ損だからな」

一夏は箒の手を取って引く。その一夏の行動に少し驚いた箒であったが、しつかりと

一夏の手を握り返した。

「……ああ。そうだな！」

そうして、二人の七夕は始まったのだ。



会場

ひとしきり遊んだ後、僕らは最後にグラウンドの一角に設置されたイベント会場に足を運んだ。そこには昼間に僕が切り刻んだ笹が並んでおり、そこから伸びる枝には生徒

たちの願いが書かれた無数の短冊が飾り付けられていた。

別行動をしていた一夏と箒、セシリアともそこで合流し、最後にみんなで短冊を飾ろうという話になっていたのだ。

「いやー、なかなか楽しかったね。昼間に頑張ったかいがあるつてもものだよ」

「氷雨は反省文書いてただけだろ?」

「いやいや、そんなことないからね? この笹切ったの僕だからね?」

なんだか設置されている笹が予定されていた数よりも多いのはきつと気のせいだろう。元々こんなもんだったはずだよな。

用意されている短冊を手に取り、僕らは各々の願い事を書き込んでいく。

「そういうえば、氷雨はどんなお願い書くの?」

自身の短冊に願いを書き終えた様子の子のシャルが僕に尋ねてくる。ああ、みんなに聞いておいて、僕の願いは言っていなかったね。

「そんなこと決まってるじゃないか」

そう答えると、まだ言っていないのに何故かシャルは納得したような顔つきになる。ちよつと待って、気が早いよ、シャルさん。

「僕の願いはもちろん、鈴ちゃんといつまでも一緒に居られますように、だよ!」

「うん、知ってた」

「予想はしてましたわ」

シャルもセシリアも予想通りだった僕の回答に頷く。まあね、何のひねりもないお願いだからね。でも、僕の中では一番のお願いだからね。面白くないと言われても変えるつもりはないよ。

「そんな風に想われてる鈴の願いは何だ？」

そうラウラが問いかけると、鈴ちゃんは慌てたように自身の短冊を取り上げ、見られないように後ろ手に隠してしまった。

「あ、あたしのは別にいいじゃない。そ、そんなことより早く飾るわよ。後ろもつつかえてるんだから」

その鈴ちゃんの指摘通り、まだ短冊を書いていない生徒たちが僕らが退くのを待っていた。

「それもそうだな。じゃ、みんな飾ろうぜ」

一夏が先に笹のもとへ移動するので、僕らもそれを追って移動する。

「？ どうしたの、鈴ちゃん。行くよ？」

「わ、分かってるわよ」

何故か鈴ちゃんは少しの間動こうとしなかった。まだ書けていないのかな？

「先に行った方がいい？」

「え……。あ、うん。そうして。後で追いつくから」

みんながいたから書きづらかったのかな？ そう思ったら邪魔するのも悪い気がして、僕は一夏たちのもとへ先に行つたのだった。

◇ ◇ ◇

みんなが飾り終えたところに鈴ちゃんも追いついてきたけど、その時にはもう短冊を持つてはいなかった。

「あら、鈴さん、短冊はどうしましたの？」

「あー、あまり見られなくなつたから、別の場所に飾つてきたのよ」

そう答える鈴ちゃん。そんな鈴ちゃんにシャルが不思議そうな顔をした。

「そんなに見られなくなつたの？」

「い、いいじゃない、別に。あたしの勝手でしょ？」

なんだか様子のおかしい鈴ちゃんだったけど、本当にどんなお願いしたんだろう？ ちよつと気になるね。

気にはなるけど、隠すつてことはあまり追求してほしくないんだらうから、僕はその話題を終わらせるようにみんなに問いかける。

「これからどうする？ 祭りが終わるまではもう少し時間あるけど、みんなでまた屋台を回る？」

結構堪能したからここで解散してもいいけど、せっかく集まったんだからもう少し遊んでいたいという気持ちもある。

僕が問いかけると、鈴ちゃん以外のみんながなぜか顔を見合わせ、何かを確認し合う様なアイコンタクトをとった。

すると、何やら突然一夏が芝居掛かったように声を上げた。

「しまった！ 俺はこれから会場の片づけを会長に頼まれてたんだ！」

え、いや、まだ終わるまで時間あるけど？

「えっと、あ、ぼ、僕も！」

「あ、わ、私もだ」

それに便乗する形でシャルと箒もそんなことを言い出す。

「私はこれからクラリツサへの提示報告があるから、別行動させてもらう」

「わたくしはテニス部の屋台に顔出しに行きますわ」

と、後の二人も何やら別行動を望んでいる様子だった。ん？ となると、必然的に残った僕と鈴ちゃんは二人きりになるってこと？

「じゃ、そういうことだから」

そう言つて一夏と箒とシャルはステージ横にある運営テントの方へ走り去つていった。

「では、わたくしもここで失礼しますわ」

「お兄ちゃん、今日は楽しかったぞ」

そんなことを言つてセシリアとラウラもどこかへ行つてしまい、笹の前に僕と鈴ちゃんだけが取り残される。

「……」

「……」

僕と鈴ちゃんはお互いを伺うように視線を交わした。

「鈴ちゃん、どうする?」

そう尋ねてみるも、何か考え事をしているのか、鈴ちゃんは答えなかつた。

疲れているのかもしれないね。結構歩いたし、お祭りつて楽しいけど、なんだかんだ
疲れるからね。

「じゃあ、僕の部屋に行つて二次会でもしようよ」

「えっ?」

僕の提案に鈴ちゃんは驚いた顔を見せる。

「お祭りは堪能したしね。一夏ほどじゃないけど、おいしいお茶入れるから一息つかない?」

鈴ちゃんは笹の方をちらりと見る。それが何を意味しているのか、僕にはわからな

かったが、視線を戻した鈴ちゃんは頷いて肯定の意を示してくれた。

「それじゃ、行くうか」

「うん」

そうして、僕たちは寮の方へと歩き出した。

◇ ◇ ◇

会場の外に出ると、祭りの賑わいとは対照に人気のない、夜道が続いていた。照らすのは月明かりだけ……つてわけでもなく、街灯は設置されてるけどね。

人の目が無くなったのを確認すると、横を並んで歩く鈴ちゃんがそつと僕の手を握ってくる。その細い指先を確かめるように、僕も握り返した。

「今日は楽しかったね」

「そうね。あんた、いつも以上にはしゃいでたもんね」

「そうかな？ 自分で言うのもなんだけど、いつもあんな感じじゃない？」

「ま、確かにそうかも」

そんな風におしゃべりする。涼しい夜風が鈴ちゃんの髪を撫でるように通り抜け、それを鈴ちゃんは手で押さえる。その一連の動作がなんだか儂げに見えたのは、鈴ちゃんの表情故だろう。

「……何かあったの？」

そう僕が尋ねると、鈴ちゃんはやっぱりばれたかと少し苦い表情を浮かべる。

一つ息を吐いてから、鈴ちゃんはそつと話し始めた。

「あたし、結局短冊は飾れなかった。お願いとかはあるのよ？ でも、それを短冊に書いて笹に飾るっていうのは、なんか躊躇っちゃって」

そこまで言つて鈴ちゃんは口調を変える。少し明るく、それでいて寂しげに。

「織姫と彦星つてすごいわよね」

「どうして？」

鈴ちゃんは空を見上げる。つられて僕も見上げてみる。

「だって、年に一度しか会えないのに、お互いがお互いを一途に想いあつてさ……」

そう言いながら、鈴ちゃんの手は少し震えていた。それは何かを恐れているように僕には思えた。

「鈴ちゃん……」

「……でも、あたしの願いは去年と違うものになつてた。この想いはずっと変わらな
いって思つてたのにね」

鈴ちゃんは視線を落とし、自嘲気味に笑う。

「今、あたしが抱いてる気持ちだつてそう。来年にはまた変わつてるかもしれない。そ
う思つたら、怖くなつて……」

震えていた手に力がこもり、細い指が僕の手を強く握った。
「だから、短冊には書けなかった」

それは鈴ちゃんが真面目だから抱いてしまった不安だろう。一途な二人と比べて、自分の気持ちはなんて移ろいやすいんだろうか、と。

都会の空じや二人を隔てる天の川なんて見えやしないのに、どうして鈴ちゃんを苦しめるんですかね？ どうせみんなに隠れて毎日会ってるんでしょ？ 変に一途なんて気取ってるから、鈴ちゃんが傷付くんだよ！ 宇宙進出したら真っ先に星を割りに行きたいよ。

とはいっても、鈴ちゃんが不安に思っているそれは、別段に気にすることでもないと思う。

「そんなの、僕だって同じだよ」

「え……」

それに鈴ちゃんは驚きを露わにする。

「あんたが？」

「そうだよ。僕の思いだつて変化してるよ。別に一途なんかじゃない」

そういうと、鈴ちゃんは少し不安げな顔になる。

「初めて会った時の僕、覚えてる？」

「忘れるわけないじゃない」

「だよね」

あの時の自分を思い出して自嘲する。我ながらバカだったなーって。

「あの時の僕の好きは押し付けるような好きだった。でも、鈴ちゃんに怒られて、僕の好きは変わっていった」

変わったというよりは、新しく芽生えたという方が正しいかな。

「僕の好きは、目の前で反応が返ってくる鈴ちゃんへの好きになった」

それはまた違う好きという感情だ。

「目の前で照れる鈴ちゃんへの好きに変わったたり、俯いて不安げな顔をする鈴ちゃんが好きだったり、男装した鈴ちゃんへの好きだったり……」

そんな僕の言葉に何故か鈴ちゃんは呆れたような顔をする。

「今は浴衣姿の鈴ちゃんへの好きかな」

「ふふっ。なによ、それ」

笑顔を見せてくれたことに僕は安堵する。

「変わらない想いなんてない。だって、人は時間と共に変わっていくものだもんね。でも、それでも僕は鈴ちゃんが好きって声を大にして言えるよ。だって、鈴ちゃんが変わっていくように、僕の好きも変わっていくからね」

そう言い終えると、僕は鈴ちゃんの方に視線を向ける。

「だから、僕は鈴ちゃんの気持ちが変わっても、僕の方を見てくれるように、ずっと変わり続けるだけだよ」

変わらぬ想いが良いわけじゃない。いつまでも好きでいられるなんて安易なこととは言えない。もし鈴ちゃんが変わってしまったら、その時の僕の気持ちがどうなっているかなんてわからない。

だから、いつも伝えたい。

「今、僕は目の前にいる鈴ちゃんが好きだよ」

「……バカ。恥ずかしいじゃない」

そう言ってくる鈴ちゃんであったが、その表情は穏やかであり、さつきまであった不安の色は見えなかった。

「……あたしだって、今感じてるこの気持ちを否定する気はないもん。だったら、不安になるのはおかしいわよね」

「そうそう。それにもし愛想が尽きたってことになったら、それは僕のせいだしね」

そんな風に笑いながら言う。

「だからこそ、愛想尽かされないように頑張らないとね！」

「はいはい。頑張ってるね」

「なんで他人事!？」

僕と鈴ちゃんは二人で歩く。

歩幅を合わせて、同じ景色を見ながら、同じ道を進んでいる。

いつまでもそれが続いてほしいと、願いながら。

「短冊、飾りに戻る?」

「別にいいわよ」

不安がなくなったら短冊も飾りたくなるかと思っただけどそうではないらしい。

「なんで?」

僕がそう問いかけると、僕の顔を見上げて肌を仄かに紅く染めながら微笑む。

「願わなくても、あんたとなら叶うって、確信しちゃったからね」

そんな天使のような微笑みに、僕は悶えてしまう。

「やっぱり鈴ちゃん可愛い!!」

「はいはい」

そうあしらいながらも笑顔な鈴ちゃんに、本日も惹かれっぱなしであった。

始まる想いと終わるモノ

一話 始まりを告げる

深夜。

ラウラ・ボーデヴィツヒは先日、クラリツサとの作戦会議で言われたことを実行に移そうと動いていた。

『妹……ですか』

クラリツサの声は困惑というよりはなるほど、とどこか納得したようなものであった。

『さすが隊長が見込んだ男性ですね』

そうして始まった会議の結論はこうだ。

夜に枕を持って兄の部屋に行き、『一緒に寝てもいい?』と、言う。

だが、この寮ではそれは難しい。なぜなら、ここを管理するものが千冬であるからだ。故に、行動を起こすのは千冬が自宅に帰ってからである。

氷雨の部屋の前にたどり着く。むろん、扉には鍵がかかっているが、ラウラは難なく開錠し、侵入する。

「お兄ちゃんは……ここか」

氷雨の姿を認めると、ラウラは布団の中に潜り込む。

「暖かい……」

温もりを感じ取り、目を閉じる。すると、不意に氷雨の手が動きラウラの頭をそつと撫でた。

「ん……。起きているのか？」

そう思い顔を伺うも氷雨は気持ちよさそうな寝顔を見せるだけであった。

氷雨の手を不思議に思うも、ラウラはその手に安心感を覚え、眠りについたのだった。



朝。

朝が覚めると布団の中にラウラがいた。夜のうちに入ってきたのはうつすらと気づいたけど、追い出せなかった。だって、枕を抱いて布団にもぐりこんでくるんだよ!? 誰がそれを無下にできるっていうのさ!

「ほら、ラウラ。朝だよ」

布団の中で丸くなるラウラの頭を撫でつつ呼びかける。すると、ラウラは僕の声に反応するように身を震わせる。

「んん……」

眠たそうに目を擦り僕の方に焦点を合わせる。まだうつすらとしか開いていない目は僕の後方辺りに焦点が逸れている。

「おはよう、ラウラ」

「おはよう、お兄ちゃん……」

声からも寝起きの感じが伝わってくる。僕は立ち上がり、洗面所へ向かう。ラウラもそれに追従するようについてくる。

二人で顔を洗うと不意にラウラが懐から何かを手渡してくる。

「これは……」

「お兄ちゃんが私にくれた櫛だ。梳いてほしいのだが……」

窺うようにラウラの瞳は僕を捉える。

「いいよ、座った方が楽だから、ベッドの方に戻ろうか」

「うん」

僕の提案に頷くと先にベッドの方へ駆けて行った。

「一夏起こさないようにね」

小さな声で注意するも、熟睡している一夏の寝顔を見てその心配はなさそうだと安心する。

“パシヤリ”

「何をしているのだ、お兄ちゃん」

「ん？ 一夏の寝顔写真をつてるんだよ」

「それに何に意味が？」

「需要と供給だよ。これのおかげで、暴走を抑えてるんだよ」

「何の暴走かは分からんが、必要なら仕方がないな」

もの分かりのいい妹で助かるね。

「じゃ、座って」

「うむ」

僕の隣をポンポンと叩いて、そこに座ることを促したつもりなんだけど、ラウラは何か僕の膝の上にちょこんと座った。

「ラウラ？ なんで僕の上に座ったの？」

「ん？ この方が梳きやすいだろ？」

なるほど。なんとも合理的である。僕も別段それを止めさせる理由もないのでそのままラウラの髪を梳き始める。

「ラウラの髪は綺麗だね」

「そ、そうか？」

カーテンからこぼれる朝日に照らされ、キラキラと光る銀髪はなかなか美しいもの

だった。

「櫛もすーって通るし、櫛要らずだね」

「そ、そんなことはない！」

なぜか僕の褒め言葉に過敏な反応を示すラウラ。あれ？ 髪を褒められるのは嫌いだっただけかな？

「お兄ちゃんからもらった櫛が必要ないはずがない」

語気を強め、僕にそう主張してくる。ラウラの言いたい事が分かり、僕は嬉しくなつて頭をくしゃくしゃと撫でる。

「嬉しい事言ってくれるね、ラウラは」

目を細め、気持ち良さそうにするラウラ。しかし、折角櫛をかけた髪は台無しだ。

「あ、ごめん。髪、くしゃくしゃになっちゃったね」

「いい。お兄ちゃんに梳いてもらう時間が増えたただけだ」

何故か嬉しそうにするラウラ。そんなもんかな？

女の子の髪は安易に触ると嫌がられるみたいだけど、ラウラはそう言う感じじゃないのかな？

そうして、ラウラの髪を梳き続けていると、一夏がもぞもぞと動きだす。

「一夏、おはよう」

「んん……氷雨、おはよう……ってあれ？　なんでラウラがここにいるんだ？」

目を擦り、僕の方を見た一夏はラウラがここにいることに疑問を覚える。

「貴様に説明する必要はない」

「こら、ラウラ。なんでけんか腰なのさ」

知ってはいるけれど、ラウラは千冬さんの経歴に泥を塗った一夏のことをあまりよく思っていない。だけど、その傾向は以前よりはずつと弱い。千冬さんに依存するということを止めたからだ。

まあ、そんなことを言ってもやっぱりきつかけがないと態度は改まらないようで、一夏に対しては厳しめの口調になることがしばしばある。

「私はまだ、こいつを教官の弟と認めていない」

「認めるも何も、それを決めるのはラウラじゃないでしょ」

「しかし……」

「それ以上言うと、もう髪を梳いてあげないよ？」

そう脅し文句を言うと、ラウラは少しうめいた後、恨めしそうに一夏を睨みつけた。

「はは、なんだかほんとの兄妹みたいだな」

「ふん、当然だ」

何故か誇らしげなラウラ。

僕はちらりと時計を見る。時間に余裕はあるものの、そろそろ朝ごはんに行かないと混んでくる頃だろう。

「さ、朝ごはんに向かうよ。ラウラは一旦部屋に戻って着替えてきてね」

「問題ない。着替えなら、この部屋に常備している」

そう言つてクローゼットを開けると、そこにはラウラのカスタマイズされた制服が出てきた。

「いつの間に……」

「流石軍人つてところなのかな？」

一夏共々啞然とするも、僕は来ている服に手をかけたラウラを素早く止める。

「む、どうした、お兄ちゃん。早く着替えるべきではないのか？」

「いやいや、ここで着替えるのは遠慮しようね。僕はともかく、一夏もいるんだから」

「さらつと自分はセーフになつてるあたり、もうほんとに兄だよな」

兄妹だし、その辺は良いよね？ え、だめ？ まあ、僕も鈴ちゃん以外の着替えに興味はないけど。

『自重しましょう』

うおお、あ、頭が痛い。そ、そんなこともできるの、ペイルライダー!? これ、危ないってレベルじゃないよ!?

「朝から騒がしいな。氷雨らしいけど」

そんな朝から、一日は始まりを告げた。

◇・◇◇

HR前の休み時間。

「さて、セシリア。今日もやってきたね」

「ええ。訓練ですわ。今日こそ、織斑先生にバレないで悪口を言って見せますわ!」

これ、別にバレてもバレなくてもいいんだけどね。セシリア的にはバレないように言う事が目的になっっちゃってるのかな？

「まあ、バレないに越したことはないけどさ、重要なのはそこまでの精神的緊張ってことを忘れないでよね?」

「わ、分かってますわ。チキンを鍛えるんですわよね? 本日食べるものですわ!」

「あ、うん。それは別次元の話ね」

今は五月ですよ。

「それじゃあ、早速だけど始めていこうか」

「ま、まだ心の準備ができてませんわ」

「準備して落ち着いちゃったら意味がないんだけど」

まあ、悪口の準備ってことかな?

「い、いきますわ」

「うん、今回は悪口期待してるからね！」

セシリアは一息つき、深呼吸をする。そして、意を決したようにきりつとした顔つきになるも、これからするのはただ悪口を言うだけだ。

「アリーナ付近の自販機にあるあの飲み物を飲んで飲むなんて、味覚音痴ですわ！」
飲み物の名前すら覚えてないの!?

〃スパン〃

「い、痛いですわ……」

「ああ、案の定聞かれてたね」

「全く。美味い不味いは人それぞれの好みだ。貴様に言われる筋合いはないぞ」
「す、すいません」

……ん？ ちよつと待って、アリーナ付近の自販機？

「ひよつとしてセシリアが言ってる飲み物ってドクターペッパーのこと？」

「あ、それですわ！ シップのような味がすると評判の飲み物ですわ」

千冬さんの方を見る。

千冬さんは僕のアイコンタクトで察したのか、何も言わず出席簿を手渡す。

「セシリア……」

「なんですの?」

// スパン //

「いたっ」

無言でひっぱたいて僕は出席簿を千冬さんに返還する。セシリアはなぜ殴られたのか分からず、「えっ? えっ!?!」と、僕と千冬さんの顔を交互に見ていた。

「俺はそうは思わん。ドクペこそが人間の可能性なのかもしれん」

「どういうことですか……」

「口は災いの元と言うことだな、オルコット」

今日も一組は平和です。



HR

教卓の前に立つ千冬さんから連絡事項があるらしい。

「前回延期になったクラス対抗戦が来週行われることになった」

その連絡事項に僕は「えっ」と声を上げた。

「先生、それはどういう意図でしょうか?」

「意図も何もない。だが、学年別トーナメントがトラブルにより中止となってしまう今、実戦を積ませる行事は早急に行うべきと判断したのだろう」

とはいっても、前回の中止理由は専用機持ちが一人しかいないという理由じゃなかったわけ？ あ、もしかしてかんちやんの専用機出来上がったのかな？

「クラス対抗戦に際して、二組のクラス代表が変更された。篠ノ之、お前の予想通りの人物だ」

「あの、なんで僕、名指しされたの？ え、僕Ⅱでつないでいいの？ やったー」

千冬さんに認められるって、ほとんど公認じゃないですかー。

「馬鹿は放っておくが」

え、馬鹿って言われた？ 僕が？ ははは、その通りですよ。

「このクラスにも専用機持ちが増えている。よって、再度代表を選出してもいいが、誰かいるか？」

その千冬さんの問いに立候補する者はいなかった。ああ、よかった。

「ふむ、居ないか。おい、篠ノ之。いい加減その殺気をしまえ」

「え？ あはは、やだなー、殺気なんて出してませんよ」

『クラスメイトの心拍数、発汗量、共に上昇してます』

科学的に証明された!?

「……とまあ、そう言うわけだ。篠ノ之、代表として恥かしくない戦いをしろよ」

「承知しました」

こうして、クラス対抗戦の開催が決定したのだった。

しかし、これがあんな悲劇を生むとは、今の僕は想像もしていなかったのだった……。

『セルフ死亡フラグは止めましょう』

「そうだね」

二話 カワル想い

夜。

時間は少し遡り、クラス対抗戦の開催を千冬が告げた日の前日の夜になる。

中国の代表候補生である鈴はその所属している中国の大臣からお叱りの言葉を通話でいただいていた。

『あの無様な戦いは何!? 我が国の最新鋭の技術の集大成である甲龍が、日本の欠陥機、それも男なんかに負けるなんて! あなた、代表候補生としての自覚がちゃんとあるわけ!?!』

「はっ」

激昂し、声を荒げる大臣のありがたいお言葉を鈴は聞き流す。そんなことを言われずとも、自身が負けたことは十分理解している。

しかし、大臣は男に負けたというところが気に食わないらしく、やたらと男、男と連呼する。

「(欲求不満かって感じよね)」

『あなた、ちゃんと聞いているの!?!』

「はいはい、聞いてますよ」

『なに？ 反省してるの？ 男に負けたのよ？ 尊厳を踏みにじられてるのよ？ もつと悔しそうにしなさいよ！』

いったい何の尊厳だというのか。確かにあの試合は負けたものの、その理由もあって、鈴は大臣の言い分をすんなりと受け入れることは不可能であった。

「（あーうるさいうるさい。中身がなくて長いよね）」

うんざりとした顔をする鈴。ルームメイトであるティナも同情の目で鈴の方を見ていた。

ノイローゼになりそうなヒステリックな声を聞き続けている鈴は疲れ切っていた。

「（あたしだって、どうかしてると思わうわよ。別に、好きじゃないのに、いや、嫌いでもないけど、一夏より、氷雨のこと考える時間の方が多し、でも会ったら何か悩んでることがパツと消えちゃって、あれ？ あたし、どうしたんだろう……）」

纏まらない思考がぐるぐるすると頭をかける。それだけならともかく、視界もぐらつき始めたのだ。

『ちよつと、聞いてるの、嵐！ 嵐！』

通話越しの大臣も様子がおかしいことに気づく。そして鈴はベッドに座って倒れ込む。

「！ 鈴?！」

横にいたティナが近寄り、鈴の額に触れる。

「熱がある！ だ、大丈夫、鈴！」

眩む視界、虚ろになる意識。そんな中で頭に浮かんだのは誰だったのだろうか。

「(……わからない)」

その答えは誰かに与えられるものではない。自分で辿りつかなければならぬものであった。

頭が回らなくなり、鈴はそのまま眠りに着いた。



昼休み。

二組。

「鈴ちゃん、ご飯だよ！ 今日の日替わり定食は、酢豚だよ！」

日課のように元氣よく飛び込む僕に二組の人はもう驚きもしない。むしろ、それが日常の一部のように当たり前のものになっている。

「つて、あれ？ 鈴ちゃんがいらない？」

いつもなら、うるさいと注意しつつ立ちあがるはずの鈴ちゃんなのに、今日はその言葉が聞こえてこなかった。

「あ、ティナさん。鈴ちゃんどこ行ったか知らない？」

「え、あ、えくと、う、ううん分かんないな」

？ なんでそんな反応するんだらう。

「鈴なら今日は休みやで」

「熱出して、寝てるって、フヒヒ、心配」

「浅はかなり」

え、熱出して休み？

「ああ！ それ、篠ノ之くんには言っちゃダメって言ったじゃない」

「え、なんで僕に言っちゃダメなの？」

ティナさんに僕は聞く。そんな一大事を秘密にする理由、それ相応のものじゃないと僕はちよつと怒っちゃうよ？

「うう、鈴に言われたの」

「え、鈴ちゃんに？」

「うん。篠ノ之くんが知ったら授業サボってでも来そうだからって」

「あ、せやったわ」

「ひひっ、わざとばらした」

「浅はかなり」

「もー」

鈴ちゃん、そんなこと考えていたのか……。けど、鈴ちゃんはちよつと僕のことを見誤っているね。

「僕は授業サボったりしないよ？」

「え、そうなの？」

「当然だよ。うちの担任は千冬さんだからね。サボったら後でどんな目に合うか……。考えただけで背中からいやな汗が噴き出しちゃうね。」

「そ、そうだよね。いくら篠ノ之くんでもさぼったりは……」

「だから堂々と早退するよ！」

「結果は変わらない!？」

「そう言うわけだから、二組の皆さんバイバイ！」

「ああ、ちよつと！」

音を置き去りにするかのとき速さで、僕は職員室に向かった。



職員室。

「早退します！」

「理由は」

「多分、お腹が痛いんです」

// スパン //

「多分とは何だ、馬鹿者」

い、痛い。頭が痛い……。

「だ、だって、ナノマシンで健康過ぎて、仮病が使えないんだもん……」

「知るか。で、本当の理由はなんだ」

う、流石にお見通しですね、千冬さん。

「鈴ちゃんが熱を出してるからです」

「……それとお前の早退に何の関係がある」

「大ありですよ、千冬さん！」

// スパン //

「織斑先生だ」

あ、頭が割れる……。どんな叩き方したら出席簿でここまでの威力が出せるのか知
りた……くはあんまりないかな。

「ね、熱を出して寝てるときって心細いじゃないですか。だから、僕が行ってあげない
と、鈴ちゃんが寂しくて死んじゃうんですよ」

「あいつはウサギかなにかか」

「ウサギよりかわいいです」

「そうか……」

なんで呆れ顔？

「はあ、お前は本当に馬鹿だな」

「それが取り得って箒に言われました」

「よく分かつてる妹だな」

肯定された!?

「思った通りに行動できる奴はそこまでいない。大体のやつはいらん思考が邪魔して、本当にやりたいことをないがしろにしてしまう」

千冬さんはため息をひとつつく。それは呆れているというより、諦めたような感じだ。

「お前のその一途さはなによりの武器だな」

「僕の武器……」

そんなこと言われたの初めてだね。

「で、早退したいんだったな」

「はい。でも、その理由が……」

「今、どこか痛むところはないか？」

痛む所なんて……はっ！

「頭……頭が割れるように痛いです」

「そうか。なら、部屋に戻って療養に努めろ。良いな」

どの部屋かも、誰の療養かも指定しない。流石、千冬さん。

「ありがとうございます」

「お礼を言うところではない。早く行け」

「はい」

千冬さんに促され、僕は職員室を後にした。

「織斑先生」

「山田先生。どうかしましたか」

「見てましたよ。私感動しました」

「……何のことか分かりませんね」

「またまた。甘いのは一夏君だけじゃないんですね」

「山田先生、昼食は済ませましたか？ 食後の運動に少し付き合ってもらいたいのです」

が？」

「ご、ごめんなさい」

二人は仲良しです。



鈴の部屋。

部屋の中には布団の中で眠る鈴がいた。

不意に目を覚ますと、額にひんやりとした感覚があったので、何だろうかと鈴は確認する。

「……タオル？」

時計を見ると時刻はまだ授業時間を指していた。

「（ティナが心配して来てくれたのかな）」

そんな風に考えるのは当然であったのに、不意に視界に現れたのは全く予想外の人物であった。

「あ、鈴ちゃん、起きた？」

「！ ひ、氷雨!？」

驚いて身体を起こそうとするも、それは氷雨の手によって妨げられる。

「ごめんね、驚かせちゃったね。でも、まだ寝てなきやだめだよ？ 熱は少し下がってる

けど、まだあるからね」

「あ、あんた、どうして……」

ティナには口止めしたはずだ。氷雨が知ったら必ず来るだろうと思ったから。今は氷雨に来てほしくなかったから、それを防ぎたかったのだ。

「あ、うん。ティナさんは何も言っていないよ？ 他の子から聞いただけ」

そんな風に氷雨は先回りして答える。

「あ、タオル換えるね」

そう言つて氷雨は鈴の額のタオルを取り、汲んできたであろう水に浸し、絞つたタオルを再び鈴の額に乗せた。

「ありがとう……」

「いえいえ」

そう言つと、氷雨は黙つた。

いつも騒がしいだけの氷雨が黙ることに鈴はなんだか新鮮だった。氷雨は彼なりに考えて、鈴の療養を邪魔しないように静かにしている。それが、なんだか鈴は気持ち悪かった。いつもと違う一面を見せられると、なんだか鈴の氷雨に対する気持ちが変わつてしまいそうで、不安になるのだ。

「氷雨……」

「なに？」

いつもと違う、穏やかで優しい声。こんな声も出せるのかと少し驚く。

「何か、しゃべってよ」

そう鈴に言われて氷雨はしばし思案顔になる。

「この前の映画は面白かったね」

「あんたのリアクションがね」

「え、な、なんのことかな？ ぼ、僕は静かに映画見てたけど？」

わざとらしく泳ぐ視線に鈴はくすりと笑う。

「まさか、ホラーが苦手だったなんてね」

「そりゃ、ホラーってジャンルは人を怖がらせるためのものだもん。むしろ、怖がるのが

正解で、QEDだよ」

「あはは、確かにそうかも」

そんな他愛のない会話が、弱っている鈴には心地よかった。

「また、行きたいね」

「ホラー映画に？」

「違う違う」

氷雨は笑いながら否定する。

「遊びにだよ。鈴ちゃんと遊びに行くの、すごく楽しかったもん」

「はいはい」

いつものべた褒め。それが本心であることは鈴も分かっているが、氷雨がそれに対するリアクションを要求しないので、鈴も気楽に受け取る。

「だから、早くよくなつてね」

氷雨は再度タオルを取り換える。

「弱つた鈴ちゃんも可愛いけど、やっぱり元気な鈴ちゃんが一番だからね」

そう言つて微笑みかける氷雨。その笑顔に鈴は顔を赤くする。

それは鈴が弱っているからという一因もある。弱つているときに、氷雨の一途でまっすぐな心配する気持ちはなかなかにくるものがあり、鈴は不覚にもドキリとしてしまった。

「？ 鈴ちゃん、また熱がぶり返した？」

そう言つてタオルをどけると、氷雨は片方の手を鈴の額に、もう一方を自身の額に当てる。氷雨の手が触れることによつて鈴の顔はさらに熱を放つ。

「うくん。上がったかもね。ごめんね、僕が寝てるどころ邪魔しちゃつたからかな」

「う、ううん。そ、そんなことないわよ」

なんで必死に否定しているのだろう。そんな疑問がふつて湧かないこともないが、鈴

はそれを否定しなければと思っている。

それはなぜか。それが分かれば、鈴は苦労していないのだ。

「じゃあ、僕は水を変えて、食堂に氷を貰ってくるけど、鈴ちゃんは寝てるんだよ？」
「い、言われなくても分かっているわよ」

退出する間際、氷雨は笑顔で手を振っていた。鈴は紅い顔を半分布団で隠しつつ、それに手を振り返すのだった。

◆ ◆ ◆
夜。

次に鈴が目を覚ますと、そこには氷雨の姿はなく、時計は7時くらいを指していた。

「あ、鈴、起きた？」

「ティナ。……あいつは？」

目を覚ました鈴は部屋を見渡し、氷雨の姿が見当たらないことに気づく。

「篠ノ之くんなら、私が帰った時に後はよろしくって出て行ったよ」

「そっか……」

「え、なに？ 一緒にいてほしかったの？」

「ばっ。そんなわけないじゃない！」

ティナの言葉に反応して突然起き上ると、頭がくらくらした。

「ああ、ごめんごめん。冗談だから」

「つたく」

ふと視界の端に机の上に置かれた小さな鍋が現れた。

「あれは？」

「あ、そうそう、これ氷雨くんが置いて行ったおかゆだよ。食欲あるなら食べる？」

「うん」

そう鈴が答えると、ティナはトレイごとおかゆを持って来る。

ふたを開けると、見るからに冷めているおかゆ。あの氷を取りに行った時に持ってきたのだろうか。

「……」

これを誰が作ったのか、食べなくても分かった。

『鈴ちゃんLOVE』

海苔で書かれたその文字に、メイド喫茶かよと突っ込みを入れたくなつた鈴であったが、その文字を崩しつつ、蓮華でおかゆを口に運ぶ。

「おいし〜」

弱っていたから、一時の気の迷い、そんな言い訳もあるかもしれない。でも鈴は、氣付いてしまった。向けられた好意に自分はどうか感じていたかを。

「早く元気にならなきゃね」

眩いた言葉は鈴の心に自然な形で吸い込まれていった。

三話 ヤクソクの清算

お昼。

「鈴ちゃん、復活おめでどう!!」

「おめでどう」

僕とラウラは食堂でクラツッカーを鳴らす。周りがなんだなんだと振り返るも、僕の作業と分かると「ああ」と納得した顔ですぐにいつもどおりに戻る。

「たく、風邪くらいで大袈裟よ」

「いやいや、風邪だって長引けば合併症を起こすかもしれないでしょ?」

「お兄ちゃんの言うとおりで。それに、戦地での体調不良はすなわち死だからな」

「あんたは何と戦ってるのよ……」

今日のお昼は昨日いきなり消えたことに怒っているラウラも一緒に食べる。

「まあ、昨日はありがとう。世話掛けちゃって」

「いいよ。困った時はお互い様だし、今後長い目で見たら、僕の方がお世話になるしね」

家事とかでね!

「な、長い目で見過ぎじゃない?」

「ふむ」

ラウラが僕の発言を受け、なにやら思案顔になる。そうして、少しするとある答えにたどり着いたようで、鈴ちゃんの方に向き直る。

「つまり……鈴は私のお義姉ちゃんになるわけだな」

その言葉に鈴ちゃんは驚いた顔をする。

「な、なるわけないでしょ!」

「ええ!?!」

「あんたが反応するの!?!」

いや、だって、つまりそう言うことでしょ? え、ええ……。

「べ、別にあんたのことは嫌いじゃないわよ」

「ほんと!?!」

いや、ちよつと今のあれだよ、遠回しに好きって言ってるんだよね? つまり告白

? いや、待って。き、気持ちの整理が……。

「ち、近いわよ!」

あ、ごめん。思わず乗り出しちゃったよ。

というか、よく考えたら、鈴ちゃんが言ってる嫌いじゃないって友達としてだよ。むう。どうすれば鈴ちゃんに振り向いてもらえるのだろうか。

「……何難しい顔になってんのよ」

「え、あ、いや。どうやったたら鈴ちゃんに振り向いてもらえるかな〜って思っ」

「はあ!？」

「ほあ! 普通に口から本音が滑っちゃった!」

「あ、あたしは……」

「そんなもの、夜這いしかないだろ、お兄ちゃん」

「夜這い!？」

『ガタタツ』

ラウラの言葉に僕と鈴ちゃんが過剰に反応し、それを耳にした周りの人たちが立ち上がる。

「違うのか? 確か日本で夜這いは男女の営みの文化と聞いたぞ?」

その言葉に、鈴ちゃんが僕をジト目で睨む。

「あんた……なんてこと教えてんのよ」

「え? 僕? いやいや、流石の僕でもそんなこと教えないよ!」

『流石のとは……氷雨自身、自分が異常であることを理解しているのですね』

え? あ、う、うん……。あれ?

なんだかペイルライダーに指摘されて口をついて出た僕自身の言葉に深層心理の片

鱗を見た気持ちになったけど、そんなに僕はおかしい人間ではないはずだよね。

「僕、教えてないよね、ラウラ」

隣に座るラウラに確認を取る。

「ああ。これは私の部隊の副隊長から聞いた話だが、なにか間違っているのか？」

「間違ってるわよ！」

ラウラの返事に鈴ちゃんは即座に否定する。

いや、現代ではそうだけど、昔ならあながち間違いないんだけどね。

「そうなのか。だが、今朝、お兄ちゃんは受け入れてくれたぞ？」

《ガタタツ》

そのラウラの誤解を生む発言に再び周囲が立ち上がる。鈴ちゃんも再び僕を睨んでくる。

「いや、ただ一緒に寝ただけだよ？ 兄妹ならするでしょ？」

「あんたたち本当の兄妹じゃないじゃない」

いや、そうなんだけどね。それを言ったら、箒だって血が繋がってないから本当の妹じゃないけどね。

「それでも心は兄妹なんだよ！」

「その通りだ」

「……仲いいわね」

何故か微笑ましそうに見る鈴ちゃん。

「ま、あんたの事だし、本当にそうなんだろうけどね」

「そうだよ。僕は正直な人間だからね」

「自分に、の間違いじゃなくて?」

鈴ちゃんの茶々に思わず納得しそうにもなるが、首を振る。

「いやいや、そんなことないからね!! 僕なんて、日々自分を押し殺して生きてるからね!!」

「ダウト」

「ごめんなさい、その通りです」

色々とほっちゃけちゃうのが僕の悪いところだよね。

とんとん、と肩を叩かれ隣に座るラウラの方に視線を移す。

「私は自分に正直なのは美德だと思っぞ」

妹の何気ないフオーローに僕は嬉しくなって頭を撫でる。

「ありがとう」

「感謝されるようなことは言っていないが……悪くないな」

どこか気持ち良さ気に目を細めるラウラ。ひとしきり撫でると、鈴ちゃんの方に向き

直る。

「そういえば、鈴ちゃん、二組のクラス代表になったんだよね？」

「ん？　そうだけど……。あ、そういえば、あんた一組の？」

鈴ちゃんは僕の話振りから一組のクラス代表が僕であることを察する。僕は鈴ちゃんの問いに頷いて肯定すると、何故かラウラがそれについて誇らしげに語りだす。

「ふつ、お兄ちゃんは代表候補生が複数いる中でその代表の地位に誰も異議を唱えなかつたんだ」

胸を張り、どうだと言わんばかりだ。そんなラウラの行動に鈴ちゃんは微笑む。

「へへ、凄いね」

「だろう。私のお兄ちゃんは凄いのだ」

何だろう。親子の会話に見えてきた。

「てことは、あたしと戦うわけね」

「そう言うことだね」

心苦しいけど、鈴ちゃんとの戦いは避けることができないのです。鈴ちゃんと戦うということとはたとえ一時的であれ、鈴ちゃんに剣を向けるということ。想像したら、なんだか本当に戦えるのか不安になる。

そんな風に悩んでいるのが顔に出ていたのか、鈴ちゃんは何かを思いついたように僕

に提案してくる。

「じゃあ、こうしない？ 負けた方は勝った方の言うことを何でも聞く」

「え、いいの？」

それ物凄くやる気が出てくるんですけど。

「勝つたらよ？ ま、あんたの強さは見たけど、相性は悪くなさそうだしね」

「しかし、お義姉ちゃんよ」

「お義姉ちゃんじゃないわよ」

鈴ちゃんの指摘をラウラは華麗にスルーし話を進める。

「お兄ちゃんの強さは相性など些細な要素にしかならないと思うぞ」

「いやいや、ラウラ。それは過大評価だと思うよ？」

というか、そもそもペイルライダーはオールラウンダーだから相性の良い機体なんて存在しないと思うけどね。

「ただ、鈴ちゃんの甲龍もオールラウンダーだし、特筆して相性が悪いというわけでもなさそう。」

「ま、やってみないと分からないってものよ、勝負なんて」

「だよ。何が起こるか分からないから面白いんだし」

あ、でも多分だけど、クラス対抗戦って束さんがちよっかいかけて来るよね。原作通

りならだけど。え、その場合勝敗はどうなるんだろう。無効試合かな。だとしたら、東さんに釘刺しとかなきゃね。それに、万が一鈴ちゃんに怪我があったらいけないしね。

「楽しみにしてるわよ」

「僕も。いくら鈴ちゃんといえど、手加減はしないからね！」

クラス対抗戦……俄然楽しみになってきたね！



放課後。

鈴は一夏を呼び出していた。

別に大したことでもない。ただ、鈴の中で生まれた答えが、彼女にそれを実行する余裕を与え、今に至ったというだけのものだった。

「あ、鈴」

一夏の声が聞こえ振り返る。そこにいるのは鈴の初恋の人物。それが、この場でどんな意味を持つのか。だが、鈴の中でそれは些細なものだった。

「な、なんの用だよ」

一夏と鈴はまだ喧嘩中である。もうすでに一夏の中に怒りなんてものはないが、喧嘩中である手前、取りあえずのそっけない態度を鈴に見せる。

そんな一夏の行動を鈴は少しおかしく思い、笑う。それは彼女の余裕の表れである

が、そんなことを知らない一夏にとつてはいつもの鈴と違う反応であり、怪訝そうな顔をしてしまうのも道理である。

「ふふ、別に。大したことじゃないわよ」

しかし、鈴の口調が怒っておらず、いつもの声色であることを認知すると、一夏はなんだか肩すかしをくらったような表情を一瞬するも、すぐにほっとする。

「ただ、いつまでも意地張ってるのは疲れるじゃない？ もう怒ってるわけでもないし。仲直りでもしようかと思つて」

その言葉に一夏は嬉しそうな顔をする。

「そ、そうか。よかった、このまま疎遠になるかと思つて結構ビクビクしてたんだぜ」

「そうなの？」

鈴は存外一夏が自分のことを考えていたことに驚く。

「ああ。また昔みたいに遊べなくなるんじゃないかってさ」

それは友達として。一夏の中での鈴と言う存在はいつまでたつてもそこを抜け出せそうになかった。

だが、鈴はそれでいいと思つている。それ以上を求めることにもう諦めはついた。

「まったく。あんたも相変わらず頑固よね」

「なんだと。鈴の方こそ意地っ張りは変わつてないよな」

そう二人で言いあい、二人で笑った。

「用件はそんだけ。どうせ他の子待たせてるんでしょ？ 行くわよ」

「おう。あ、鈴木も特訓に付き合ってくれるのか？」

「別に良いけど、あたしは二組で来週のクラス對抗戦の敵よ？」

「敵って……別にいいだろ。どうせ戦うのは氷雨だし」

その一夏の言葉には氷雨への信頼が乗っていた。鈴はなぜかそれを嬉しいと感じてしまう。

「ん？ なんで笑ってるんだ？」

「え、あたし笑ってた？」

「ああ。笑うというか、なんかにやついていたぞ」

指摘されて自分の頬を触って、そうして初めて鈴は気づく。

「なんか俺、可笑しなこと言ったか？」

「ううん。思い出し笑いよ」

不思議そうな顔をする一夏。

そんな二人の会話は途切れ、アリーナまでの歩を進める。だが、二人の間に流れる空気は別に気まずいとか、そういったものではなく、どこまでも穏やかなものであった。

皆が集まっている第三アリーナの入口まで来ると、一夏はふと思い出したように鈴に

語りかける。

「あのさ、約束って言ってたじゃん」

「え、うん」

「あれってさ。酢豚をおごるんじゃないかって、毎日酢豚を作ってくれるだったっけ？」

「え？」

一夏が思い出したことに鈴は驚く。その反応を見て、一夏もそれが正解であると察した。

そして、言葉をすっかり思い出したかと思うと、一夏は再び口を開く。

「もしかしてだけどさ、それって、日本で言う味噌汁を毎日作ってあげるとかと、同じ意味だったか？」

どうしてここで思い出すのだろう。いつも間が悪い、一夏はそんな奴だったと、鈴は思い出す。

だからと言って、もうその言葉は鈴の中に響かない。鈴の音は共鳴する音を見つけた。その音が一夏ではなかったことに、鈴はもう困惑はしない。まだ慣れていない感情であるが、いやなものではなかった。

鈴は笑う。過去の恋を吹き飛ばすように、軽く笑った。

「違うわよ。そんなわけないじゃん」

その笑顔に一夏は安心する。いつもの鈴であることに。
「だよな」

一夏もそれに笑い返した。今までならそれに怒ってたかもしれないな、と鈴は何となく他人事にそれを思った。

四話 I Sビルドファイターズ

二組。

一夏との喧嘩も解消し、気が軽くなったように思える鈴の表情は何故か微妙なものだった。

それもそのはず、周りを囲むはいつもの仲良し4人。彼女たちは今朝、清々しい笑顔で教室に入ってきた鈴を見て、確実に何かあったと察したのである。

故にこのように鈴の机を取り囲み、事情を聞く、もとい吐かせるために迫っているのだ。

「それで、何があったの？ 言ってみ？ このティナさんに言ってみ？」

「ネタは上がってんだ！ さっさと吐け！ 吐かないと、うひひ、酷い目に合うよ」

「途中まで刑事やのに、最後ただのエロおやじやん」

「浅はかなり」

とはいえ、彼女たちは大体の予想を付けている。連日の鈴の悩みと言えば氷雨のことに関してであるので、今日、このような晴れやかな表情で登校するということは、その悩みが解消されたが故のものであることは確定的に明らかなのである。

「べ、別に何も無いわよ」

そうはぐらかすも、別に鈴は自分の気持ちを打ち明けたくないわけではないのだ。仲良くしている彼女たち。時に相談に乗ってもらったりもした恩もある。だが、それ以上に友人として隠すような感情ではないという認識が鈴にはある。

しかし、目が泳ぐのはそれを口に出して、自分の気持ちを明示する事が恥ずかしいからだ。

「何も無い人はそんな顔しない！」

「ふひひ、いい事言った」

「その通りやね」

「うむ」

ティナの的確な突っ込みに鈴は諦めたような表情をする。それを見て、4人はようやく話す気になったのかと、近過ぎる顔を離れた。

「ほんと、何があったってわけじゃないんだけどさ、ただ自分の気持ちに整理が付いたって言うか、気づけたというか……」

ゆつくりと紡がれる鈴の言葉にティナがもどかしそうな顔をする。

「別に、今までの気持ちの間違ってたわけじゃないんだけど、ええと、ちゃんと自分で理解できてなかったというか……」

「ああもうー！」

そこまで来て、ティナが声を上げる。

「まどろっこしい！ つまり、鈴は篠ノ之くんをどう思ってるの？」

ティナの言葉に他の三人も頷く。四人の視線が集まる中、鈴は徐々に染まる自分の頬を自覚しながら口を開いた。

「……………好き」

鈴の口から零れたそれに、ティナは心底うれしそうな顔をする。

「よかったね、鈴。答えが出たんだね」

「うん。色々ありがとね、ティナ」

感謝の言葉を述べる鈴。

鈴自身、いつからこの感情があったのかを知らない。だが、傍から見ればなかなか長い期間、その感情を抱えていたように見えていた。そんな長い時間をかけて、ようやく鈴はスタート地点に立ったのだ。

「リア充誕生目前。ふひひ、火薬を用意しないとね」

「気が早いやろ。気持ちに気付いたのはええけど、これからどうするかが肝心やで？」

「浅はかなり」

これに関してはどうにも鈴は実感が湧かなかった。

そもそも、氷雨からは常にと言っても過言ではないほど好意を伝えられている。ここからどうするも何もないように思えるのだ。スタート時点かと思えば、一步先がゴールである。しかし、そのスタートの合図が明確でないので進めない、と言った状態である。その合図にするためにクラス対抗戦で負けた方が勝った方の言うことを聞くという、子供みtainな約束を氷雨としたわけである。

本当にただの合図。どっちが勝っても、結果は変わらないようなものであるが、鈴にはその後押しが必要だったのだ。

「で、で？　いつ告白するの？」

「こ、告白……。そ、それは……。ええと」

言い淀む鈴にティナは怪訝そうな目を向ける。

「なに？　ここまで来て告白しないの？」

「くふふ、恋愛成就の藁人形でも作る？」

「それほんまに成就するんかいな」

「浅はかなり」

なんだか行動を起こさないと怒られそうな空気に鈴はどう答えるべきかと思案する。

「まだ、告白は保留……。かな」

「「……………」」

一同はその回答に呆れた顔をする。その一方で鈴らしい、と納得している様にも見え
た。

「な、なによ」

そんな彼女たちの視線に鈴は抗議の声を放つも、一向にやれやれといった呆れ顔を止
めなかった。

「先は長そうね」

「浅はかなり」



放課後。

自室。

「私のシュバルツエア・レーゲンの停止結界の前に、お兄ちゃんの龍砲は無意味だ」

「なんだって！ くつ、相性が悪かったか」

え、ペイルライダーにそんな武装ついてたかって？ いやいや、ついてませんよ？

それに付いてたって寮の自室でI S展開しちやったら千冬さんにどれだけ怒られるや
ら……。いや、怒られる程度じゃ済まないね。専用機の無断展開なんて、そうそうやっ
ちやいけないことだよ。もし街中でそんなことしたら、すごいよ。詰まる所、街中に一
国の軍隊が突然現れるってことだしね。そんなのがたびたび起こったら安心してコン

ビニにもいけないよ。

じゃあ、どういふことかって言うと、僕とラウラの手にはISのプラモデルが握られているのだ。いわゆるごっこ遊びだね。

ちなみに、龍砲とか言っていたのはこの間の買い物の時にラウラと共に買った甲龍だよ。

「相性が悪いのは百も承知だよ！」

そう言いつつ、僕は手を動かして甲龍がもつ双天牙月の連結を解き、両手に持たせる。次に、双天牙月を固定する透明なスタンドを取りだし、ラウラの手を持つシュバルツェア・レーゲンに向け、投げつけるように宙で固定する。

「同時に龍砲を撃ちながら突進するよ！」

「ふん。お兄ちゃんらしい戦法だな。同時に多重攻撃を仕掛ける。大抵の相手なら対処に困り、被弾するだろう」

しかし、言葉とは裏腹に余裕ありげな表情をするラウラ。シュバルツェア・レーゲンの両肩の装甲の一部を開け、そこにある穴に付属のワイヤーブレードを差し込む。そのワイヤーの向く先はもちろん、スタンドで固定している双天牙月だ。そして、フリーであるその手はこちらに向けられて、僕の手にある甲龍の動きは止められる。

「だが、私にかかればこれくらい造作もない。勝負あったぞ、お兄ちゃん」

下ろされたレールカノンが僕の甲龍を捉える。

「バーンッ！」

「うわあ、やられたあ！」

甲龍の膝を折って、崩れさせる。

「むー、やっぱり甲龍じゃ相性が悪いね」

「AICが龍砲を完全に封じてしまうからな。例えお兄ちゃんといえど、近距離戦に持ち込まなければ難しいだろうな」

満足そうな顔をして腕を胸の前で組むラウラ。なんだろう。褒めてほしいのかな？

頭を撫でるのが正解かな？

「いやー、ラウラは凄いね」

「い、いや、別に撫でてほしいわけじゃないんだが……」

「あ、そうなの？」

正解ではなかったみたいだ。むう、僕に女の子の思考を読む才能はないみたいだ。一夏のこととは言えないね。

言われて撫でるのを止めて手を引こうとすると、引いた手の方向にラウラの頭が動く。

「や、やめろとは言っていないぞ、お兄ちゃん」
「え、え？」

そう言われると、止めるわけにもいかないのでも撫で続けてみる。するといつものように目を細め、気持ちよさそうな顔をする。

そんな表情をされると、撫で甲斐があるというものでなんだか嬉しくなつてさらに撫でる。

「仲いいわね、あんたたち」

「うわっ！　び、ビックリした」

いつの間にか入ってきていた鈴ちゃんが声をかけてきたので驚いて変な汗がでちやつたよ。

「む、お兄ちゃんは気づいていなかったのか。戦闘中に入ってきてたぞ」

「ほんとに？」

「うん。あんたはそれに夢中で気付かなかったみたいだけど」

そう言つて鈴ちゃんが指差すのはさつきまで遊んでた甲龍のプラモデルだ。

「なんで私の持つてるのよ」

「え、そりゃ鈴ちゃんの専用機だからね」

当然のことのように答えると、何だか鈴ちゃんは安心したような顔になる。

「はいはい。まったく、あんたらしい答えね」

そんな鈴ちゃんの反応にラウラが胸を張る。

「当然だ。なんとたって私のお兄ちゃんだからな」

ベッドの上に立ち上がりフンスと鼻を鳴らす。

「なんであんたが誇らしげなのよ」

「む？ お兄ちゃんを褒めたのだろう？ なら、妹として誇らしいのは当然だろう」

当然なのかな。いや、それが標準ではないとは思うけど、自信満々で一切の疑いを抱いていないラウラの顔を見ると何となくそれが正解なんじゃないかと思えてくる。不思議だね。

そんなラウラを見て、鈴ちゃんが耳元で囁く。

「あんた変な教育してない？」

「だから、僕じゃないってば、ラウラに変なこと吹きこんでるのは」

クラリツサだよ。どんな少女漫画を読めばこんな風になってしまっただけ……。いや、漫画とかラノベとかは、作者の欲望がてんこ盛りだからそれが情報源なら偏るのは必然なのかも。

「それにしても、これってこういうふう遊ぶもんなの？」

ベッドの上にある甲龍のプラモデルを拾い上げ、鈴ちゃんもベッドに腰掛ける。

「正しい遊び方なんじゃないかな？ 多分プラモデルを作った人は誰しもが通る道だと
思うよ」

僕はそのおかげでEz8を破壊しちやっただからね。高かったのに……。

「ふーん」

僕の言葉を聞きながら、鈴ちゃんは自分の期待である甲龍のプラモデルを眺める。

「これ、意外と細かいところまで作りこまれてるのね」

「ああ、私も初めはスパイの存在を疑ったほどだ」

「そんなこともあったね」

ちなみに今ラウラが持つてるシユバルツエア・レーゲンは先行製造モデルをラウラが
受け取ったのである。一応、前のトーナメントでシユバルツエア・レーゲンの公式発表
は済んだわけだから、もうすぐ発売するんだろうね。

「あ、そういうえば、鈴ちゃんは何か用があつてここに来たの？」

「ん、別にないけど？ 遊びに来ただけよ」

あ、そう言えば鈴ちゃんも僕と一夏の部屋に遊びに来たのつてこれが初めてじゃない
かな？ 今までは一夏との喧嘩もあつたし、来にくかつたと思うけど……。あ、と言う
ことは一夏とのけんかは解決したのかな？

「じゃあ、僕飲み物でも入れてくるね」

「別に気を使わなくていいわよ。押しかけたのこつちだし」

そう言って立ち上がった僕を手で制す鈴ちゃん。そうはいつても、せつかく遊びに来てくれたのに何も出さないのはね。僕が許さないよ。

「いやいや、そういうわけにはいかないからね」

「そ、そう?」

鈴ちゃんも僕の性格を分かっているのか、すんなりと引く。まあ、そんなに意地になることでもないしね。

「とつておきのドクペを振る舞うね」

「あ、私のど渴いてないからいいわ」

「ええ!」

今明らかにドクペって聞いてやめたよね。

「それよりもさ、あたしもこういうの作ってみようかなって思うんだけど、何かない?」

「あ、鈴ちゃん興味湧いたの?」

「まあ、そんなところね。玩具といつても侮れないディティールの精巧さだしね。案外、造ってるうちにそのI Sの特性が分かったりしそうだし」

なるほど。こんなところにまで技術向上を見出すなんて、さすが中国の代表候補生だね。

「それじゃあ、一緒にこの蒼騎士のプラモでも作る？」

取り出したるは以前の買い物の時、ペイルライダーに無駄に購入させられた未開封のプラモだ。買ったはいいものの、甲龍を作って満足してしまい放置していた所謂積プラモである。

「蒼騎士って、あの蒼騎士？ そんなものまであるのね」

「まあ、公開されてる機体じゃないから細かいところは違うけどね」

「ふーん」

僕の言葉にそんな返事をした鈴ちゃんだったが、ラウラは僕の言葉に違和感を感じ取ったらしい。

「なぜお兄ちゃんは違うと分かるのだ？」

「ううえっ!？」

鋭いツツコミだー!

『失言ですね』

その通りですね。

だがしかし、待つてほしい。僕はその蒼騎士の製作者、篠ノ之東の弟である。つまり、蒼騎士というISを知っていたところから何ら問題はないじゃないか。

「い、いや、東姉に見せてもらったことがあるからね」

その言葉にラウラは納得したように頷く。

「そうだった。お兄ちゃんは篠ノ之博士の弟だったな」

ふう。ちゃんと納得してくれたみたいで安心だよ。

ふと時計を見てみると、針はもう夕食時を示していた。一夏はまだ特訓から帰ってきてないけど、この調子なら直接食堂へ向かったのかな？

「今日はもうこんな時間だから、プラモ作るのはまた今度かな」

そう言うのと鈴ちゃんも端末で時間を確認する。

「確かにいい時間ね」

「うむ。お腹も空いてきた。お兄ちゃんよ、食堂へ急ぐぞー」

そう言うってラウラが袖を引く。それに抗わず、扉の方に踏み出す。

「鈴ちゃんも行くっ」

そう言うって手を差し出す。その手に鈴ちゃんは少し戸惑う様にしたけれど、最後には僕の手を取ってくれた。その手の柔らかさに頬が緩む。

「何わらってんのよ」

「え？ いや、なんだか幸せだなって思ったただだよ」

「……はあ」

「なぜにため息!？」

差し出された氷雨の手を取った鈴は少し浮かれていた。なぜかという次に会う約束を取り付けたからである。

そんなことをしなくても氷雨の方から鈴のもとへ毎日来ると思うのだが、約束というものがあると鈴は安心するのだ。いくら氷雨が鈴のことを好きとはいえ、現在の鈴には氷雨を束縛する権利を持ち合わせていない。故の約束である。

「幸せだなんて思ったただだよ」

そんな思ったままの気持ちを口に出してくる氷雨に鈴はため息を吐く。いや、氷雨に對してというのは語弊があるだろう。素直な感情を吐露する氷雨と気持ちを伝えることにしり込みしている自分を比較して、自分に対して鈴はため息を吐く。

「（これくらい素直になれたら、生きやすいのかもね）」

自嘲気味の笑顔を浮かべる。

だが、今はまだ、この心地のいいぬるま湯に浸かっていたいと願ってしまうのが鈴であつた。

「今日は金曜日だし、夕飯はカレーだね」

「？ お兄ちゃんよ、金曜とカレーは何か関係があるのか？」

「軍人なら金曜はカレーなんだよ？」

「そうなのか！」

「あんたは軍人じゃないでしょ」

他愛のない会話が嬉しくて、永遠に思えて……。紡がれる言葉に、鈴は安堵で微笑むのだった。

五話 新たな風

アリーナ。

昼食後の今の時刻は本来なら教室で子守唄のような講義を聞きながら睡眠にいそむ時間であるのだが、僕とシャルの二人は何故かこの場に呼び出された。

アリーナには真耶ちゃんが待つていた。そしてその後ろにはカバーで覆われた何かが鎮座している。大きさは僕らより一回り大きいくらい。

「山田先生、僕らはどうして呼ばれたんでしょうか」

シャルが付いて早々にそのような質問を真耶ちゃんにぶつける。当然の質問ではあるけどね。

「それはですね、デユノアさんにフランスから新たな専用機が送られてきたからですよ」
「おおー！」

新たな専用機というと、あの束姉が技術提供した第三世代兵器が搭載されてるってやつだよ。シャルの第三世代兵器……ラピッドスイッチだけでも第三世代機と対等以上に戦えてるのにそれに第三世代兵器が追加されるってことは、まさに鬼に金棒だね！
「楽しみだね、シャル！」

「う、うん。あ、でもなんで氷雨も呼ばれたんだろう?」

確かにそうだね。シャルの新しい専用機が来たからと言つて僕が付き合う必要はないよね。

「えと、それに関してはデュノアさんの第三世代兵器の試運転に付き合ってもらおうというのが目的ですね。射撃も格闘も高い技術を持ち合わせている篠ノ之くんが適任だったというわけです」

なるほどね。

「それじゃあ、早速見てみましょうか」

そういうと真耶ちゃんは自身の後ろに合つたカバーを引きはがした。そうして現れたシャルの新たな専用機の外見はほとんど以前と変わりが無いように見えた。

「こちらはラフアール・アドヴァンス。アルカディア社がデュノア社を買収したことで新たに作られた機体ですね」

基本構造は以前のそれと似ているけれど、発達した背部スラスタは四つから二つに減り、その代わりに脚部の側面に大型のスラスタが設置されていた。

「拡張領域はラフアール・リヴァイヴ・カスタムⅡと同様に、デュノアさん用に増設されているみたいですね」

手に持つ端末に目を落とす真耶ちゃん。その説明を聞きながら僕とシャルはラ

フール・アドヴァンスに近付く。

「これが僕の新しい機体……」

「コアは変わってないの？」

「あ、うん。そうだね。だから以前からの戦闘データは引き継がれてると思うよ」

代表候補生の戦闘データが詰まったコアを初期化するなんて勿体ないことするわけないから当然コアは変わってないよね。

「それでは早速デュノアさんはフィッティングお願いします」

「はい」

真耶ちゃんに促されるようにしてシャルはアリーナに隣接しているピットに向かう。

「真耶ちゃん真耶ちゃん」

「あの、その呼び方は……。私は一応先生ですよ？」

そう言われると呼び方は改めるしかないね。

「真耶ちゃん先生」

「あまり解決してないような気がしますよ」

やっぱり駄目かあ。親しみやすいからみんなこんな感じで呼ぶけど、真耶ちゃんとしては先生としての威厳を出したいみたいだからね。

「山田先生」

「それでお願ひしますね」

そうして納得してくれた真耶ちゃんに質問を投げかける。

「このラファール・アドヴァンスの第三世代兵器ってどういうものなんですか？」

試運転に付き合うのだから先に特性を知っていた方がやりやすいよね。うまく立ち回ってその兵器の性能を試しやすくするにはどんな奴か把握しないとね。

「えと、ちよつとしたサプライズと言うことで、篠ノ之くんは普通に戦ってくれればいいですよ」

「え、教えてくれないんですか？」

まあ、それでもいいけどね。確かに知らない方が面白そうではあるけどさ。

「楽しみだな」

「そうですね」

二人でシャルの帰りを待つのだった。

数分すると更衣を済ませたシャルがやってきた。

「それじゃあ、フィッティング始めますね」

「お願ひします」

作業をする二人を少し離れて眺める。

「さてさて、ペイルライダー」

『さんを付けましょう、でこ野郎』

「ええ……」

いきなり罵倒されたんだけど、どうしたのさ。

『冗談です』

「いきなりびつくりさせないでよ……」

最近ラウラがべったりだから話しかけられなかったのを怒ってるのかな？

『それでどうしたのですか？』

「いやー、こういう兵器が来るかなっておもってさ。ペイルライダーの意見も聞いておこうかなと」

『フランスですから、騎士のような武装ではないでしょうか』

「騎士かく。でもシャルは中距離タイプだよ？」

近距離武器を使用したこともあるけど、インファイトする感じではないよね。

「僕的にはシャルは相手との距離感を大事にしているから相手を引き離すような武装じゃないかと考えたんだけど」

『引き離す……』

「どうかনা?」

『引き離し方にもよりますが、戦術で代用できるので兵器としての価値はあまりないかと』

そう言われると反論しにくいね。事実、シャルはできてるからね。

そんな会話をしていると、シャルのフィッティングは終わったようでも新たな専用機を身にまとい僕に対峙した。

「新しいI Sも似合ってるね」

「えへへ。ありがとう」

シャル自身もしつくりきっているのか、僕の言葉を素直に喜んでくれる。シルエツトは異なったものになっており、やや重心が低いように見えた。それは大型のスラスタールが脚部についてるせいであるが、そのおかげで安定感があるように見える。

「じゃあ、二人とも始めてくださいね」

アリーナの外に出た真耶ちゃんから通信が入り、試運転が始まる。

「シャルはもう知ってるんだよね?」

「うん」

「どんな攻め方したほうがいい?」

「いつも通りの氷雨でいいよ。その方がいつも見てる分対処しやすいと思うし」

じゃあ、いつも通りの戦闘でいいのかな。

両脚部から三連装ミサイルを発射させる。弧を描き、誘導弾はシャルのもとへと迫るも、シャルが楯を構えた瞬間、その誘導が解かれたようにミサイルはシャルから逸れ、後方の地面に着弾した。

「?」

あの楯に第三世代兵器が搭載されていることは明らかだろうけど、ミサイルの誘導を解除するだけの限定的な能力なわけがないよね? というか、そんなものを束姉が作るわけないし、もし作るとしても、誘導解除の上で乗っ取るくらいはしそうだしね。

ということとは別の何か……。

「考えてもしょうがない。試すのが一番だよね!」

『ジャイアントガトリング、レディ』

構えるガトリングの銃口をシャルに向ける。シャルはその楯の性能を使いたいので射線から逃れようとはしない。

「ファイアー!」

爆ぜる音と共に弾丸がシャルに降り注ぐ。しかしそれは構えられた盾に阻まれて……いや、盾にすら当たらず、軌道がねじ曲がり、シャルから逸れた。

「むむむつ?」

「どうやら僕は実弾でも偏向射撃ができるようになったようだ。弾丸の魔術師とも呼んでもらおうかな。」

『全て外れる弾丸に意味はありません』

「確かにね。というか、実弾を曲げる芸当なんて聞いたことないよ」

「まあ、詰まる所シャルの持つあの盾が僕の放ったミサイルやガトリング砲の軌道を強制的に変更させたんだらう。」

「じゃあ、射撃は完封かな？」

『ビームはどうでしょうか』

「確かにAICのようにビームには適応できないものかもしれない。その辺を試す意味でも僕とペイルライダーは適任だったというわけだね。」

「よし、パパ、ヒュージキャノン撃っちゃうぞー」

『それは実弾です』

「マジで？ あの高威力で実弾兵器だったの？ 逆に怖いね。」

「じゃあ、無難にホーミングランスでいいね」

「でもただ撃つだけじゃ面白くないので、シャルの周りを回りつつ、多角的な攻撃を行なった。」

「くっ」

シャルは一瞬眉をひそめるも、一方向のビームに自ら迫り、その面のビームの軌道を曲げ、避けきると同時に身体を回しつつ、随時せまるビームに盾を合わせていく。

「……え、全部避けるの？ 受けとめることもなく？」

『予想以上に厄介な兵器ですね』

厄介どころじゃないよ。あの盾一つで取り囲んでの集中砲火の優位性を無に還しちゃうわけだよ？ その上でシャルのラピッドスイッチによる弾幕があれば、物の数は意味を成さないね。

「……そう言えば、真耶ちゃんは僕を呼んだ理由に格闘の技術も高いからってのを含めてたよね」

『そう記録してます』

つまりはそう言うことなのかな？

何となく嫌な予感を抱きつつ、僕はジャイアントガトリングを収納し、両手にビームブレードを握る。

「抱きしめたいなあ、ガンダム！」

『ISです』

二刀流するところのセリフを言いたくなるよね。

ブーストを吹かし速度を落とさず、シャルに迫る。肉薄した瞬間、僕はシャルめがけ

てビームブレードを振り下ろした……はずだった。

「は？」

振り切ったビームブレードはアリーナの床を焦がすだけであった。

僕とシャルの立ち位置を見る限り、シャルが避けたわけではなく、僕の腕ごとビームブレードの軌道がずらされたと考えるべきだろう。

盾で受けとめられるものと考えていたから、行き場を失った速度が僕をそのままシャルへと突っ込ませた。

「うおっ！」

「え？ きやつ！」

衝突されたシャルも予想していない衝撃に踏ん張ることができず、巻き込むように二人でゴロゴロと転がる。

その回転も収まったところで、僕はシャルを押し倒すような形に収まってしまった。

「ひ、氷雨……」

「うわあ！ っ、ごめんね」

邪魔にならないようにペイルライダーをしまい、立ち上がり離れる。そして、シャルに手を差し出す。

「ありがとう、氷雨」

「いやいや、こっちこそごめんね」

シャルが僕の手を掴み、立ち上がると真耶ちゃんが駆け寄ってきた。

「だ、大丈夫でしたか、お二人とも」

「あ、はい。大丈夫です」

安堵した顔を見せる真耶ちゃん。絶対防御があるから安全は保障されてるけど、こう心配されるとなんだか嬉しいね。

「なんか中断しちゃったけど、あんな感じで十分だった？」

「うん。付き合ってくれてありがとね、氷雨」

シャルもラファール・アドヴァンスを解く。

そうして、シャルの新たな専用機の試運転は終了した。

六話 新たな風と変わらぬ蒼

シャルと僕は制服に着替え、教室に戻ろうと廊下を歩きだす。

「しかし、面白い盾だったね」

「そうだね。僕もビックリしたよ」

あの盾は『ラファール・ブークリエ』というらしい。盾の前方円柱空間に強力な力場を発生させ、迫ってくる対象に盾の動径方向の加速度を与えるというものだ。それによつて対象は軌道を変えられ、逸れるというわけだ。

その特性はA I Cと似てるけれど、A I Cと違いその空間に作用するため、ビームに対して実弾と同等の効果を得ることができた。さらにその特性上射撃だけでなく近接攻撃もいやすことができる。

「はつきり言つて強すぎると思うんだよね」

「だね」

一番の驚きはあの兵器を初めて使ったシャルがあそこまで運用できるといふところだ。第三世代機のコンセプト通りと言えそうなんだけど、A I CやB T兵器と違って

使用者を選ばないのは強みだね。その辺のシステムまわりは東さんがやったんだろう。そりゃオーバースペースが出来上がって当然か。

「カタログスペースも凄いなだよ。推進翼が減ったのに瞬間の加速度も最高速も上がってるんだよ！」

そう興奮気味に語るシャルの姿を見ると、東さんに頼んでよかったと思えた。あの後の東さんからの難題も嬉しそうなシャルの姿の対価と思えば安いものだよね。

そんなことを考えていた僕がどんな表情をしていたのかは分からないけど、こちらを見たシャルがハツとした顔になる。

「ご、ごめん。ちよつと新しい専用機が嬉しくて」

「分かるよ。テンションあがっちゃうよね」

新しいゲーム機を買った時なんて凄くわくわく感があるよね。

「改めて、ありがとね、氷雨」

「ん？」

突然のお礼に僕は何のことか分からなかった。

そんな理解できていない僕の表情からシャルが察したのか、言葉を続ける。

「こうして今まで通り、代表候補生として学園にいられるのも、新しい専用機を持てるのも、氷雨のおかげだから」

「いや、その話はもうやったよ？ そんな気にしなくて良いよ、シャル」

僕がやりたいからやったわけだし。

「それでも、こうして専用機を目の当たりにしたら、やっぱり言いたくなってる」

「シャルは律儀だね。都合のいい友人がいて儲けたって思っておけばいいんだよ」

「あはは、流石にそれは酷いよ」

僕の軽口にシャルが笑う。そうそう、あまり真剣に感謝されてもどう返せばいいか分からないからね。

話しながらも歩みは止めず、教室が見えてきた。

廊下は夕日に照らされ淡い朱に染まり、なんとも言えない良い雰囲気である。いつもの学園の喧騒もどこへやら、しんと静まりかえり、響くのは僕らの足音だけであった。

……え、夕日？



廊下

シャルの新機体の試運転が終わる頃には授業も終わっている時間になっていたらしく、教室にたどり着くともう誰もいなかった。なので現在、僕の足は寮の自室へと向いている

ちなみに、シャルも一緒に帰ろうとしたが、一夏との特訓があることを思い出しそつ

ちのアリーナへと向かった。なんだか別れ際に残念そうな顔をしていたけど……。
「もつと僕と一緒にいたかったのかな」

なんて、冗談だけどね。そこまで僕は自意識過剰じゃないさ。

『馬に蹴られて骨折すればいいです』

「え、なんでちよつとリアルテイストなの？ あ、でもことわざよりマイルドだね」

でもそれだと普通に僕の怪我を望んでるようにしか聞こえないよ。

『一夏のことを悪く言えませぬね』

「そ、それにしてもあの盾はチートだったね」

なんだかペイルライダーの毒舌が続きそうな予感がしたので無理やり話題を変えてみる。

『そうですね。作用するものが実弾、ビーム問わないだけでなく、近接格闘にも及ぶ、というのが』

そうそう。実弾とビームだけなら射撃が完封されるだけでやりようはあるけど、格闘にまで及ぶとなると、シャルが本気で守りに徹したらちよつとやそつとじゃ崩すことはできなくなるよね。

「でもそこまでなら別にA I Cの方が優秀なんだよ」

だって、A I Cなら反撃もなく一方的に攻撃できるからね。

『どういうことですか?』

「あれ? ペイルライダーにしては珍しいね。分からない?」

『偉そうですね。もぎますよ』

「何を!?!」

ペイルライダーの言葉に内股になってしまう。やめてよね。想像しただけでキツイんだから。

『それで、どういうことですか』

「いや、簡単な話だけだね。あのラファール・ブークリエの利点は多人数戦でも適応されるってところだよね」

『そう言うことですか。確かにあの盾は多人数戦でも有用ですね』

「そうそう」

攻撃の量がどれだけ多くなったとしても搭乗者の技量次第では全てを完璧に防ぐことがシステムの可能なのがA I Cと違ったあの盾の長所だよね。

「おまけにシャルはそもそもラピッド・スイッチという第三世代機と戦えるだけの技能を所持してるから、代表候補生の中で頭一つ抜けるかもね」

とは言っても、それはシャルが攻防を一体化させた戦い方を習得した場合だけだね。

「さて、僕は早く部屋に戻って用意しなきゃね」

『なにをですか?』

ペイルライダーが問いを投げかけてくる。何をだつて?

「そんなの決まつてるじゃないか」

自室の扉を開け、机の引き出しから道具を取り出し、机の上に並べる。

「ガンプラビルドの準備だよ」

勿論、鈴ちゃんのためである。



自室。

「と言うわけで準備はできてるよ、鈴ちゃん!」

「机の上、プラモよりお菓子とかジュースとかのほうが多いんだけど」

そりゃ、鈴ちゃんを部屋に招待するわけだし、これくらいの準備は必要だよね! え、

さつきガンプラビルドの準備つて言つてただらつて? 逆に聞こう。たかだかニツ

パーややすりを取り出すことと、鈴ちゃんをもてなすためにお茶菓子を用意する事、果

たしてどちらが重要だと思ふんだい?

「勿論、鈴ちゃんだよね!」

「いきなり何よ」

あ、声に出しちやった。まあ、そういうわけなので、鈴ちゃんも来たことだし取りあえず飲み物を出さなきゃね。

「あ、鈴ちゃんはジュースと紅茶と緑茶とウーロン茶とジャスミンティー……」

えーと用意してるのはこれくらいかな。

「でいいよね？」

「それ選択じゃなかったの!? あんた、あたしに全部飲ませる気!」

おおー、なんだか鈴ちゃん元氣だね。ツツコミが冴えわたってるよ。

「冗談だよ。はい、オレンジジュースね」

「ありがとう」

コップに注いだジュースを鈴ちゃんに手渡す。その時に鈴ちゃんの細い指が僕の手にしふれる。それと同じタイミングで鈴ちゃんはびくりと身体を震わしたと同時に手を引つ込める。

僕は渡した気になって手を放したので、コップは重力に従い落下する。

「あ」

僕と鈴ちゃんの声が重なる。

しかし、その後僕らが予期したような事態は起きず、なぜかコップは空中で停止した状態であった。

「ふっ。間一髪だったな、お兄ちゃん」

「あ、やっぱりあんたもいるのね」

なんだか残念そうな声を出す鈴ちゃんの視線の先にいたのは、ISを部分展開したラウラであった。なるほど、この空中で停止したコップはAICによるものだったのか。

「なるほど……」

「? どうした、お兄ちゃん」

AICにはこう言う使い方もある。それはラファール・ブークリエにはできないことだ。そういうことだったのか。AICは日常生活でも役に立つ。そう言う側面まで持っていたとは……。浅はかだった。

「AICが劣ってるなんて言ってごめんよ、ラウラ!」

そう言いつつラウラを抱きしめる。

「ど、どういうことだ。なにをする、お兄ちゃん!」

抱きしめると少し身じろぎして抵抗する。抵抗するってことは嫌がついているってことなので、そこで僕はラウラを解放した。

僕から解放されたラウラは顔を少し赤らめ僕の方を抗議の目で見つめる。そのあとなんだかそわそわとし出した。かと思ったら、脱兎のごとく部屋から飛び出していった。

「ラウラが、脱兎のごとく……」

あ、これギャグだ。

「ほんと、ろくなことしないわね」

「褒め言葉と受け取っておくよ」

呆れ顔の鈴ちゃんに僕は笑顔を返す。そしたらなぜかささらに呆れ顔をされた。

ジューズはこぼれた。

七話 凧の静けさは……

自室。

ラウラが退出して、僕らはベッドに腰掛け、机に向かう。一夏のベッドを無断で使うのもどうかと思ったので、僕と鈴ちゃん僕らのベッドに横並びで腰かけている。

「それで、この蒼騎士を作るのね」

「うん。それはいっぱいあるから、正直僕も持て余してたからね」

クローゼットの中には飾りきれない……とか飾る必要がない蒼騎士たちが眠っているだけでなく、大量の積みプラモがある。悲しいけど、これ、全部定価なのよね。財布がああああ。

「このパッケージの絵カッコいいわね。あ、これ実写なの？」

「いや、多分イラストだよ。もしくはCGかな？」

僕、こんなポーズ取った覚えなし。プラモのパッケージはどれを見てもそれだけで完成しててくらかいのかっこよさがあるよね。

「えーと、この説明書に沿って作っていけばいいのよね」

「うん。基本的にはそれでいいよ。ただ、このパーツを切り取る時に少し気をつけな

きやいけないところがあってね」

うーん、でもこれを口で説明するのは分かり辛いかもしれないね……。

「……」

僕が黙ると鈴ちゃんが不思議そうにこつちを覗きこんでくる。手にはニツパーとラッナーにつながったブーツをすでに準備している。

「どうしたのよ、氷雨」

うん、そうしよう。

僕は鈴ちゃんの手に自分の手を重ねた。

「ひゃっー！」

ひんやりとした鈴ちゃんの手の手甲に触れると可愛い声が聞こえる。あ、あかん。ちよつと狙ってやったわけなんだけど、まさか僕の予想通りのリアクションが返ってくるなんて……。

「い、いきなり何すんのよ」

「いや、あのね。口頭で説明するのは難しいと思ったからね、こうやった方が説明しやすいと思って、決してやましい気持ちちは心の大半を占めてますよ!？」

「普通に暴露してんじゃないわよー！」

と、言いつつも、しかし、鈴ちゃんは僕の手を振りほどくようなことはしなかった。そ

れに疑問を覚えたものの、鈴ちゃんは不思議そうな顔の僕の方を見て恥ずかしそうに言う。

「は、早く教えなさいよ」

「え」

思わぬ返答に僕は間の抜けた声を返してしまふ。

「こ、ここうしないと教えづらいなら、し、仕方ないじゃない」

ズキューン！ ……っていう効果音はこう言う時のためにあるんだね。もうね、ハートを射ぬかれて、今ですら穴だらけのハートにさらにもう一個穴が増えちゃったよ！

「抱きしめていい?」

「後にしなさい」

はーい。

……。

「つて、後?!」

「じよ、冗談に決まってるじゃない!」

ですよねー。

鈴ちゃんの小さく華奢な手に触れてパーツを切る作業を教える。必然的に近くなつた距離。こうして直接触つたほうがやりやすいと言つたけど、緊張して心拍数が上がつて逆に教えづらくなつちやつた。

「な、なによ。早く教えなさいよ」

そう言いつつチラチラと僕の方を窺う鈴ちゃんもどこか動きがぎこちなく見える。

いや、このまま恥ずかしがってどぎまぎしても何も進まないね。鈴ちゃんが折角プラモに興味を持つてくれたんだから、僕はそれに全身全霊で答える義務があるよね！

「うん、じゃあやっていこうか」

触れた鈴ちゃんの手を動かし、パーツを切り放す工程を説明していく。

「まずはね、大雑把に切り取るんだよ」

そう言つてニツパーの刃をゲート、つまり外枠と部品をつなぐ部分だね、その少し部品から離れたあたりに持つていき場所を示す。

「え、そんなのでいいの？」

その一見適当な切り方に鈴ちゃんは僕に疑問を呈す。

「そうだよ。まずはこうやって部品を傷つけないように外枠から外すんだよ」

そうしてとどころどころ出っ張りがある部品が一つ机の上に転がる。

次に僕は机の横に用意していたデザインカッターに手を伸ばす。デザインカッターって言うのはちよつとおしやれなカッターです。僕はそう認識してるけど、まあ、普通のカッターより細かい作業がしやすいんだろうと思う。

「で、その外した部品をこのカッターで切り落とすんだよ。こうした方が微調整がしやすいくて綺麗にできるんだ」

そう僕が説明すると、鈴ちゃんは納得したようで、何度か頷いて感心していた。

「そんなとこまでキツチリやるのね」

「まあね。どうせなら綺麗に作りたいからね」

「いつも勢いだけのアんたらしからぬ丁寧さね」

「あはは」

まあ、爪切りで作ろうとしたらペイルライダーが怒ったからネットで調べただけなんだけどね。でも、綺麗に出来上がった物を見たら凄く感動したなあ……。

「まあ、駄目にした部品は数知れないけどね」

「やっぱりあんただわ」

失敬な。これでも頑張ってる方なのに。

「って、鈴ちゃん、僕が言う前に綺麗に切り取ってる!？」

「あ、ごめん。さっきの説明で理解できたからやっちゃったわよ」

「そ、そんな……。確かに口頭の説明で十分な作業工程ではあるけど、でもそれじゃあ……。」

「鈴ちゃん合法的にひつつけないじゃないか！」

「な、何言ってるのよ、あんたは！」

顔を赤くして僕を非難してくる鈴ちゃん。あ、危ないから、デザインカッターは危ないから！

「ご、ごめんなさい、僕が悪かったから一旦カッターを置いてください」

ベッドの上に渾身の土下座をする。その様は多分武士のように潔い風格を漂わせているはず！

「……確かに危なかったわね。ごめん、氷雨」

「い、いや、悪いのは僕だから謝らなくても……」

そう言って顔を上げると鈴ちゃんが微笑を浮かべていた。

「でも、それはそれで、これはこれよ」

その次の瞬間、僕はおでこに少しの痛みを感じる。

「いたっ」

「思ったことをそのまま口にするのやめなさいよね」

鈴ちゃんから受けたのはデコピンだったようです。

「……エへへ」

その行為が何だか可愛らしくて笑みが零れてしまう。

「あんた、ここであたしがなんで笑ってるかって聞いたらなんて答えるわけ？」

「え、鈴ちゃんが可愛いからって」

あ。

「反省してないじゃない！」

「うわあ、ごめんなさい！」

そんな風に僕と鈴ちゃんはいちいち騒ぎ合って、蒼騎士のプラモを作っていったのだった。

「つて、もう夕食の時間だね」

「え、もうそんな時間？ 早いわね」

その後、鈴ちゃんは思った以上に楽しんでくれたようで、夢中になってプラモを製作していた。そして、気づいたらもう夕飯時になっていた。楽しい時間はすぐすぎるって言うやつかな？ 僕はそうだった。できれば鈴ちゃんにとってもそうであってほしい

けど、こればかりは分からないね。ただ、今鈴ちゃんが見せる表情は少し満足げなのでちよつと一安心。

「じゃあ、続きはまた明日にして食堂に行こうよ」

「あともう少しで完成しそうなよね。でもまあ、時間なら仕方ないわね。また明日にしましょ」

机の上にはもう七割は出来上がっている蒼騎士のプラモがある。鈴ちゃんはそれらを丁寧な箱の中に戻し蓋をした。

「それじゃ、食堂に行くわよ」

鈴ちゃんが立ち上がるので僕も追従して部屋から出る。

そうして食堂へ移動すると先に席についていた一夏たちが手を振ってその所在を主張していた。

「おーい、氷雨に鈴、こっちだぜ」

「りよーかいだよー」

一夏たちの元に行くと、みんなで食券を買いに動き出す。こうして原作アニメ一期のヒロインが勢ぞろいしているのを見るのは意外にもこれが初めてかもしれない。思えば鈴ちゃんと一夏の喧嘩がクラス対抗戦が伸びたせいで長く続いていたような気がする。そのせいかな。

券売機に着く。しかし、券売機に着いてから何を食べようかと思案しようものなら非難轟々だろうから目に付いたものをすぐに押す。

「あ、酢豚だ」

「ご飯と中華スープが付いての酢豚定食みたいだ。」

「鈴ちゃんは何にした?」

「え、酢豚だけど」

「おお、一緒だ。なんだか嬉しいね。」

「お前ら仲いいな」

「なっ!?!」

「ふふふ、当然でしょ? 僕と鈴ちゃんだよ?」

「調子に乗るんじゃないわよ」

背中を鈴ちゃんに叩かれる。その強さで本気で怒っているわけではないことが分かる。というか、もう僕と鈴ちゃんの中でこんな感じのやり取りは定型化されてるに等しい。

「ほんとに仲いいな」

笑いながら僕らを見る一夏はなんだか年寄りくさい慈愛の目をしていた。更けるにはまだ早いと思うよ、一夏。

「そういう一夏はどうせサバ味噌定食でしょ？」

「どうせってなんだよ。だが、今日の俺は一味違うぜ。ほら」

一夏が差し出す食券には『アジフライ定食』と書かれていた。

「なるほどね、アジフライに一味違うをかけたってことだね」

「お、流石氷雨だな」

「当然でしょ」

褒められて悪い気はしないので胸を張る。しかし、一夏以外からはなんとも言えない視線が飛んでくる。

「なんでわかるんだろうね」

「センスが同レベルなんじゃない？」

「一夏さんも氷雨さんもギャグのセンスは悪いですものね」

「？今の何がギャグなんだ？」

ラウラはそもそもどこがギャグなのかも分かっていないようで不思議そうな顔をしている。

「氷雨、俺の味方はお前だけだ」

「世知辛いね」

この人数になると食事時も騒がしいものだったけど、楽しいひと時だった。

鈴の自室。



ちよつとした出来事ではあつたが、意識が変わつた鈴にしてみると、今日の氷雨とのプラモ作りと言うものは意外にも大きなものであつた。

それは自室に戻つてからも気分が高揚して、足なんかをパタパタと動かしている様子を伺えば明らかであつた。

びたりと止まつたかと思えば、また何かを思い出したようにパタパタとせわしなく動き出す。その顔は少し紅潮している。何を想いだしているかなどは説明不要だろう。

「鈴、なにかいい事あつたの?」

「え、なんで?」

「いや、なんでつて……」

見るからにそうでしょ、と思つたティナであつたが、それは口に出さなかつた。言え、絶対怒るだろうと思つたからだ。

「べつに、大したことじゃないわよ」

そう言つてはぐらかすも、ティナはその少し朱に染まる頬から大体のことを察する事ができた。

「うまくいつてるみたい」

鈴のことだから気持ちとは裏腹な態度をとってしまつて関係が悪くなつたりしないだろうかと少し心配もしていたティナであるが、それが杞憂に終わったようで一安心である。

そんな時、鈴の端末から呼び出しのコール音が鳴りだした。鈴が端末を手に取り、相手が誰であるかを確認すると、端末の液晶には中国政府からであると映しだされていた。この通信の相手が政府の人間であると分かつた瞬間、鈴はなんだか嫌な予感がして先ほどまでの高揚もどこかに消えて行つた。

「はい」

そして、その予感は現実のものとなる。

「なによそれ……」

八話 暗雲立ち込み

昼休み。

「へーい、鈴ちゃん！ 昼食にするデース！」

「で、デース」

ラウラと共に意気揚々と二組に殴り込みに行く。しかし、僕の期待していた軽快なツツコミは飛んでこなかった。

あれ？ ひよつとして、鈴ちゃんいないの？ そう思つて鈴ちゃんの席に目をやるとそこは空席であつた。休みなのかな？ 昨日の様子を見てたら病欠つてことはないと思ふらだけど。

「ねえねえ、鈴ちゃんは今日休みなの？」

「あ、篠ノ之くん。うん、今日は鈴休みみたい」

あら。どうしたんだろうか。……ひよつとして代表候補生としての用事かな？ あ、もしかしたら来週のクラス対抗戦に向けて新しい装備なんかを本国から送られてきたりしたのかも。昨日のシャルミたいに試運転のために今日は休んだのかもしれない。

「そうなんだ。ありがとう」

教えてくれた二組の女子にお礼を言ってから僕は教室から出た。

でも、そうか、鈴ちゃん今日いいなのか。

「どうしようか、ラウラ」

「私はお兄ちゃんについて行くまでだ」

むー、じゃあ、仕方ないね。一夏たちと食べようかな。

「じゃあ、一夏たちと合流しようか」

「うむ、了解した」

というわけで、先に食堂へ向かったであろう一夏たちと合流して昼食をとることに
なった。



食堂。

「と言うわけで鈴ちゃんがいらないから合流した氷雨です」

「ラウラだ」

「消去法で選ばれた氷雨の親友、一夏だけ」

「え、なんで自己紹介してるの？」

「知らん。氷雨のいつもの悪ノリだろう」

「ですわね」

なんだか辛辣だね。というか一夏、そんな悲しいこと言わないでよ。

「消去法でも僕らは親友だよ、一夏」

「氷雨……」

僕と一夏は友情を確かめ合うように握手する。それを周りの女子は冷めた目で見ていた。

「氷雨さんの行動原理はほんとに鈴さんですわね」

「え、勿論だよ」

なんでそんな当然のことを今更。

「それでまだ付き合ってもいけないのですわよね」

「そうだね」

だって振られましたし。

「……ストーカーなんじゃないのですの？」

「ストーカー!?!」

その言葉に箒が僕の方を睨みつけてくる。いやいや、箒さん、僕そんなことしてないよ。

「まさか自分の兄が犯罪者になろうとしていたとは……」

「待って、僕法に触れるようなことしてないよ?」

「わかりませんわよ？　もしかしたら鈴さんに関するものをコレクションしてたりするかもしれないわ」

鈴ちゃんに関するもの……グッズ……まあ、集めてたけど。

「思案するということは思い当たる節があるということだな！」

「それは言いがかりだよ箒！」

集めていたって言っても生前の話だし、好きなキャラのグッズを集めちゃうのは当然の紳士の嗜みだよな？　え、しない？

「ひ、氷雨が鈴の使ったストローとかを集めてたなんて……」

「シャル、そんなこと一言でも僕が言ったかい？　そんなことしないから！」

あー、なんでこんなことになってるの？　こ、これは早く收拾をつけないと大変なことになるよ。セツシーは分かった上で言ってるけど、箒とシャルはなんかガチっぽいし。

「そうだ。一夏、一夏は同室だから僕の無罪を証明できるよね?！」

「ん？　ああ、そうだな。俺が見る限りでは氷雨はそんなことしてないぞ」

「ほらね！」

流石、持つべきものは友。やっぱり一夏は親友だよ。

「あ、でも氷雨は器用だし賢いから俺が見てないところでやってるかも」

「一夏―!!」

やっぱり消去法のこと根に持つてるんじゃないの!?

「やっぱりそうなの!?!」

「そうなのか、氷雨!」

「そんなわけないじゃん!」

そりゃ、シャルの言ったストローとか少し興味があるかもしれないけど、でもそれを回収するのはただの変態だけど、僕は紳士だよ? するわけないじゃないか!

「落ち着け二人とも」

そう静かに二人をたしなめたのはラウラであった。

「私はお兄ちゃんを四六時中監視しているが、ここ一週間はそんな挙動は一切見せなかつたぞ」

「そうなんだ」

「ラウラが言うならそうなんだろう」

ラウラの一声で二人は納得して落ち着いたようだ。ふう、なんとか事態は收拾したようだね。

「ありがとう、ラウラ」

そう言つて頭を撫でる。

「ふん、お兄ちゃんを助けるのは妹の役目だからな」

「四六時中監視にはスルーですよ!？」

セツシーがなにか大きな声を出してけるけどどうしたんだろうね。

そうして、話がひと段落したところでセシリアが咳払いを一つ吐き、仕切り直す。

「それでですわ。傍から見ればストーカーのようにも思える氷雨さんの行動を」

「異議あり!」

「却下ですわ」

僕の異議はセシリア裁判長により取り下げられた。なんてことだ。権力の前では僕の言葉は無力……。どうか、どうか力なき声に救いの手を!

「そのような氷雨さんの行動を許容している鈴さん。これは普通ありえませんか」

「まあ、気持ち悪いだろうな」

「ぐはっ!」

「箒、直球すぎるぞ」

妹の言葉がここまで痛いとは……。

「ですので鈴さんは氷雨さんにそこそこ好感を持っていると思いますわ」

ん? 流れ変わった?

「まあ、確かに鈴と氷雨は仲いいよな」

「ですから、氷雨さん」

「はい」

紡がれるだろうセシリアの言葉に身構える。というか、この流れでなにが来るの？

「……」

「？」

しかし、身構えたはいいもののセシリアはそれ以降の言葉を紡がず、何かを思案するような顔をしている。そうして、思案顔を続け、何か答えが出たようで再び僕の方を見る。

「やっぱり何でもないですわ」

「ええ!？」

「ここまで引つ張っておいて何にもないの!？」

「わたくしとしたことが、これ以上言うのは野暮ですわね」

「どういうこと!？」 え、終わり? あ、ちよ、みんな食器片付けに行っちゃうの? まつて、置いてけぼり食らってる僕をだれか助けて!」

楽しい(?) 昼食が終わった。



放課後。

自室。

鈴ちゃんが休みと言うことで今日はプラモ作りは無しかな。折角東京からバナナを仕入れてきたのに……。あれ？ これバナナじゃない、東京バナナだ！

「おのれ、クロエちゃん。ワールド・ページで騙したな……」

『酷い風評被害ですね』

まあ、お菓子だから鈴ちゃんをもてなすのにはもーまんたいだね。明日にでも鈴ちゃんが来た時に出そうかな。

それにしても、鈴ちゃんの中での僕の好感度かー。最近そう言うことを考えてなかったけど、ていうか何も考えずに鈴ちゃんと居ることを楽しんでいたんだけど、やっぱりあの頃からは多少なりとも変わっているんだろうか。

確かに、あの頃から比べると今の僕と鈴ちゃんの距離は大分近くなっている気もする。でも、それが友人以上かと聞かれると何となく首をかしげてしまう。

いや、そもそも恋愛経験のない僕はどこくらいからが友達以上なのかが分からない。僕の知っている男女関係と言うのはいつも二次元のものだったし、その中で言うなら悪友ポジションの女友達は驚くくらい主人公とべったりくっついたり、過剰なスキンシップの応酬だったから、それを基準に考えちゃうと鈴ちゃんはどうなんだろう。いや、確かに以前より仲良くなった実感はあるんだけど……。

確信が持てなくてなんだかもよもよとした気分になる。

「あー、なんだか頭が痛くなってきたよ。鈴ちゃんと今日会ってないからかな？」

『鈴に依存性はありません』

ペイルライダー、それは違うよ。鈴ちゃんに触れてしまったセカン党員は三日鈴ちゃんに会わなかったら発狂してしまうんだよ。

そんな風に鈴ちゃんに会いたいなーと思つてたら、扉をノックする音が聞こえてきた。

「? 誰だろう」

『サーモグラフィーによる識別では……鈴ですね』

え、鈴ちゃん? 今日は学校休みだったし、来ないと思つてたんだけど。

鈴ちゃんと分かれば扉までダッシュだよ。すぐさま扉を開け鈴ちゃんを歓迎する。

「いらつしやい、鈴ちゃん!」

「……」

扉を開けるとそこにいたのは予想通り鈴ちゃんだったわけですが、その様子は俯き加減で、何かあったことがすぐに分かった。

「何かあったの?」

その僕の問いに鈴ちゃんは少し頭を動かし肯定を僕に示す。

「……取りあえず、中に入ってよ」

僕は事情を聞くために鈴ちゃんを招き入れた。東京バナナはやっぱり明日になりそうだね。

九話 二度目の正直

自室。

俯いたままの鈴ちゃんを部屋の中に招き入れる。鈴ちゃんを昨日と同じようにベッドに座らせると僕はいそいそと冷蔵庫から昨日用意していた膨大なドリンクの中から無難な紅茶を取り出しコップに注ぐ。僕の分は無論ドクペだけど、それはどうでもいいのでさっさと鈴ちゃんの元へ戻る。

机の上にコップを二つ置くと鈴ちゃんの隣に腰掛ける。正面の机の上には昨日から片付けていないペイルライダーのプラモが置いてある。それを見ると、昨日と変わらぬ空間のはずなのに、昨日と違い明るい空気はそこには無かった。

「何かあったの?」

僕の問いに鈴ちゃんは頷いて肯定を示した。それから少し間を置いて、鈴ちゃんは昨夜あったことを放してくれた。



「はこ」

鈴は嫌々ながらではあるが、かといって政府の通信を無下にすることもできないので

返事をする。

「私よ」

そう言ってくる声の主は以前一夏に負けた時にヒステリックを起こしたフェミニストの大臣であった。

鈴は声の主が誰であることを認識すると、「またか」と、あからさまに嫌な顔をする。

「なんの御用でしようか？」

だが、そんなうんざりした気持ちをおくびにも出さず、鈴は応答する。無駄に相手の機嫌を損ねるような対応を取っても、話が長くなりこつちに不利益があるだけであると分かっているからである。

「いい情報が入ったのよ」

機嫌のよさそうな声色で言う。しかし、彼女の言ういい情報は自分にとってのいい情報ではないのだろうと思う鈴であった。

「今、学園には二人の男性操縦者がいるわよね」

大臣は確認するかのように話す。

「二人はブリュンヒルデの弟、織斑一夏。あなたが先日の試合で負けた男ね」

そう付け足すあたりに、彼女が未だに学年別トーナメントの敗北を根に持っているのが分かる。

「そして、もう一人。ISの提唱者であり、世界で唯一コアを作れる天才、篠ノ之東。その弟である篠ノ之氷雨」

その名前が出た時に少し反応してしまったことに苦笑する鈴であったが、この話の流れから、その氷雨に関しての何かについてであることは明らかであった。

「それで、その情報つてのはなによ」

氷雨という名前が出て、少し口調が砕ける鈴。しかし、いつもならそれを咎めるであろう大臣もこの機嫌の良さでなにも言わない。

むしろ、なにがおもしろいのか大臣は少し笑い声を洩らす。

「それはね、その男、あなたに好意を寄せてるらしいのよ」
わらつちやうでしょ、と付け足す大臣。

しかし、もったいぶった割にはその程度のことだったので鈴は呆れると同時に少し安心する。そして、そんなことのためにわざわざ通信してきた大臣という役職はよほど暇なのだろうとさえ思った。

「それでね」

しかし、それはそこで話が終わればと言うものであった。

「それを聞いた時にね、私ひらめいたのよ」

そう、鈴が感じていた嫌な予感が現実のものとなる。

「あなた、その男と恋仲になりなさい」

「……………は？」

大臣の言葉を受けた鈴はしばらくの間言葉を失った。口から出てきたのは間の抜けた声だけであった。

「どういうことよ」

「言葉通りの意味よ。そもそも相手があなたに好意を寄せているなら簡単なことでしょ？」

さも当然のことであるかのように大臣は言い放った。それがどういう意味なのかを考えることもなく、ただ思いついたからというような軽い口調であった。

「そうだったら、その男はあなたに気を許すわ。そしたらやつてほしいことがあるの」

鈴の頭は混乱していた。畳みかける大臣の言葉は鈴の理解力を越えているのだ。

「あのIS、ペイルライダーとか言ったかしら？ あのISはおそらく篠ノ之博士が作ったものでしょうね。でないと、あんな戦いが男にできるわけがないわ」

あんな戦いとは先日の学年別トーナメントの時のことである。その戦いを見た大臣は感心する前に疑ったのだ。どうして男があんなに強いのか、ありえない、と。そしてたどり着いた結論がこれである。

「そうなれば、あのISは天才篠ノ之博士の技術の結晶、いわばオーバーテクノロジーの

塊よ。ここまで言えば、分かるかしら？」

それに鈴は答えない。大臣はそれでも楽しそうに鈴へ最悪の命令を叩きつける。

「恋仲になって、待機状態のI Sを奪取してきなさい」

「なによ、それ……」

◇・◇◇

鈴ちゃんはそこまでを説明し終わると、俯いたまま再び黙り込んだ。

そんな鈴ちゃんを見て、さつきから僕の中で渦巻いている感情が沸々と湧きがってくる。

よし、中国を潰そう。

『やめてください』

ペイルライダーが僕の思考を読んで止める。でもね、これはちよつと我慢できる感情の度合いを越えそうだよ？ まだ辛うじて身体が動きだして無いのは漠然とした解決策があるからだよ。

「ねえ、鈴ちゃん」

隣に座る鈴ちゃんに声をかける。その声に反応して鈴ちゃんは顔を上げ、視線を僕の方にやる。

「鈴ちゃんさえよければさ、その……付き合ってたってことにしない？」

「えっ?」

僕の提案に鈴ちゃんは少し驚いたような声を出す。

「も、勿論、本当に付き合うわけじゃないよ! ただ、そのくそみたいな頭のいかれた大臣を納得させるためにはやっぱり一度付き合ったってことにしたらいいと思うんだ」

くそアマさんの命令に従うのは嫌だとは思うけど、実行しましたって言う感じを出しちゃうのが一番だ。

「その後で、I Sの奪取は失敗しましたって報告すれば、それで終わりじゃないかな?

あ、でも、鈴ちゃんが嫌じゃなければだけだね。嘘でも僕と付き合うって言うことになっちゃうから……」

そう提案してみたのだが、鈴ちゃんの顔は未だに暗いままであった。

……あ、分かった。やっぱり僕と付き合うところが嫌なんだろう。

「そ、そうだよね。僕なんかと付き合うのは嫌だよね……」

「ち、違うの! そうじゃないんだけど……」

鈴ちゃんは大きな声でそれを否定してくれるものの、どうにも歯切れが悪い。て、あれ? そこを否定してくれるのは嬉しいんだけど、ならどうして浮かない顔をしているんだろう。

I Sを奪取して来いという命令はどう考えても無謀なものだ。だから、向こうの脳み

その足りない政府の人たちは奪取はダメもとで、僕と恋仲になるまでを一番重要視しているはずだ。だって、そこまで行けば一度失敗してもそのあと何度でも機会はある。そんなものだしね。

だから、虚偽でも付き合つたと報告すれば、それで鈴ちゃんへのお咎めなんかはないだろうと思うのだけれど……。

んー、もしかして、他に理由があるとか？

「あのさ、鈴ちゃん。なにか隠して無い？」

僕は何となく引つかかったので、鈴ちゃんに尋ねてみる。隠してる、という表現は間違っていると思う。どちらかと言えば、言っていないだけなのだ。でも、この場であえて言っていないことがあるとするなら、それは鈴ちゃんが隠したいことなのかもしれない。

そう思つて問いかけてみたら、鈴ちゃんはびくりと身体を震わせた。おっ？

「話したくない？」

「……あまり、気分の良い話しじゃないわよ」

ははは、そんなの最初からだよ。なんなら国家に喧嘩売りに行つてもいいくらいだよ。

「それでも、僕は鈴ちゃんの力になりたいからさ、話してほしいんだ」

そこまで言うとは、鈴ちゃんは話してくれた。さっきの通信の続きを……。

◇ ◆ ◆
「なによそれ……」

そう呟くと、通信の向こうの大臣は笑う。

「何を驚いてるのかしら。遅かれ早かれ、こう言う命令が来ることは決まっていたじゃない」

「は？」

いきなりのことに混乱している鈴をさらに混乱させる発言をする大臣。

「あら、気付かないものなのかしら？」

その大臣の言い方から、それは明らかかなものであったらしいのだが、当然鈴はそういう認識をしたことはない。

「だいたい、たった一年やそこらで何のコネもない一般人が国家の代表候補生になんてなれるわけがないでしょ？」

それは確かにそうである。ISという最先端技術を預ける人材であり、国家代表と言うのはその国の国力を誇示するためのものであるに等しい。そんな大役なのだから、それの候補となる人材も厳格な審査があるのは当たり前である。

しかし、事実として鈴は中国の代表候補生である。だからこそ、このIS学園に通つ

ているのである。

そんな鈴の疑問に答えるかのように大臣は畳みかける。

「あなた程度の人材ならいくらでもいるし、あなたより強い子だって探せばいるわ」

探せば、のところ辺りにこの発言が大臣の推測であることが窺い知れるが、鈴は気づかない。

「なのにその中でどうしてあなたごときが候補生に選ばれたか、分かるかしら？」

その大臣の問いに鈴は答えられない。それを大臣は面白く思ったらしく、楽しそうにその解を語りだす。

「それはね、あなたが世界で二人しかいない男性操縦者の一人、ブリュンヒルデの弟と知り合いだったからよ」

その言葉に鈴は愕然とする。自分の力で勝ち取ったと思っていたその代表候補生と言う地位は結局のところ自身とは全く関係ない要素で与えられていたと言われたのだから当然だ。

自分の一年間の意味を、たった一言で無に還された喪失感にしか分からないだろう。

「そんなあなただからこそ、男性操縦者が見つかった後早々にあなたを学園に送り込むうとしたんじゃない。他の国に先を越されないようにとね」

鈴が反応できないことに心底満足しているようで言葉の端々に笑いが零れていた。

「あなたの代わりはいくらでもいるの。もし、これを実行しなかったり、失敗したりしたら……」

その先の言葉を鈴は聞きたくなかったが、大臣はそんな鈴の気持ちも構うことなく、続けた。

「代表候補生の座を降りてもらおうわ」

それが、氷雨に伝えなかつた通信の全貌であつた。

◇・◇◇

氷雨と恋仲になれという命令。恋仲になる自体は鈴も嫌ではないが、それを政府の命令で、しかも氷雨の専用機を奪取する事を目的としたものとなれば、それは氷雨の好意を裏切るような行為であり、鈴は絶対にそれを実行したくはなかつた。そんなことをしてしまえば、鈴はその後ろめたさで、氷雨の隣にいても今まで通りでいることは出来なくなるだろうと思つたのだ。

しかし、そうしたら自分は代表候補生を降ろされる。そうしたら国からの支援もなくなり、このまま学園に残ることもできなくなるだろう。シャルの時と同様、国からの支援がなくなることは帰国と直結するのだ。

どういふ選択をしても自分は氷雨と居られない。そういう風に身動きが取れなく

なつてしまい、どうしようもなくなつたと感じたから鈴は政府に対する怒りの感情よりも、どんよりと沈んだ感情が先行したのであつた。

話したくなかつた理由は明白だ。実は自分は凄くない。政府の打算的な選択で代表候補生になつた。そんな恥ずかしい自分を氷雨に知られたくなかつたからだ。

鈴は話を聞いた後の氷雨の反応が怖くて、話し終えてからしばしの間、氷雨の方を見れなかつた。

しかし、氷雨は話を聞いても何も言わなかつた。

そんな氷雨の無言が余計に鈴を不安にした。幻滅したんじやないだろうか、軽蔑されたんじやないだろうか。そんな悪い方の予想ばかりが頭に浮かんでしまう。

意を決して鈴は氷雨の方を横眼で見る。

そして、視界に入ってきた氷雨はいつもの腑の抜けたような表情が消え、まさに無の表情を顔に浮かべていた。

「?!」

そのなんともシュールな氷雨の顔を見て、鈴の抱いていた不安は驚きと混乱に上書きされてしまった。

「ひ、氷雨?」

「……」

鈴の声に氷雨は反応しない。それどころか手を膝の上に置いて微動だにすらしないのだ。

これには常日頃から氷雨の奇行を近くで見ている鈴でさえもなにがなんだか分からなくなっていた。

「……ス」

「え？」

やつと反応があつたと思えば、口だけ動かして何かを呟いただけであつた。

「……ロス」

また呟いたかと思えば氷雨は静かに立ち上がる。

「……野郎、ぶっころしてやあるうううう!!」

氷雨はいきなり表情を崩し、般若面の様に怒りをあらわにした表情に変わると、廊下へ走り出した。

「ちよ、ちよつと!」

鈴はどこまでも嫌な予感がして、さつきまでの沈んだ気持ちはどこへやらと言つた具合に氷雨を追いかけた。

十話 気づけば始まり

廊下を疾走する僕。どこへ行くこうとしているのかって？ そりや当然中国だよ。鈴ちゃんに無茶な命令した挙句、鈴ちゃんを侮辱するとはね。よほど命がいらないと見受けられるよね。ぜひともハイクを読んでもらおうね。

そんな風に走っていると、後方から僕を追いかけるように足音が聞こえてきた。

「氷雨、あんた、待ちなさいよ！」

振り向かずともその声から追いかけてきている人物が鈴ちゃんであると分かった。だけでも僕はその声に従うことはせず、廊下を走り続ける。あ、僕が鈴ちゃんを蔑ろにするのってこれが初めてかもしれないね。

だけど、今は鈴ちゃんの言葉通りに立ち止るよりも優先しなければならぬものがある。それをしなきゃ、鈴ちゃんの悩みは解決されない。だから僕は走る。

けれど、そんな僕の手を誰かが掴み、強く引いた。僕は無理にその手を振りほどかず、ゆっくりと立ち止り、後ろを向く。

「鈴ちゃん」

そこにいたのはやっぱり鈴ちゃんだったけど、背後にはISを一部展開していた。僕

に追いついて止めるために展開したんだろう。そこまでして、どうして止めるんだろうか、と不思議にも思った。

「どうして、止めるの?」

「はあ? あんたが物騒なことと言って飛び出していくからじゃない!」

まあ、確かに部屋を出るときの僕は元グリーンベレーのコマンドーみたいな状態だったしね。それも、負ける方の。

「でも大丈夫だよ、鈴ちゃん。頭は少し冷えてきたから、物騒なことはいらないよ」

その言葉に鈴ちゃんは少し安心した表情を見せる。

「そうよね。あんたもそこまで馬鹿じゃ……」

「生まれてきたことを後悔させるくらいボロボロにして命令を取り消させるくらいはしないよ」

「馬鹿じゃない!」

「ううええ!? なんで!」

「あんた、それがどういうことかってわかってんの!」

「どうって言われても……」

鈴ちゃんへの命令を取り消してもらって、鈴ちゃんがこのIS学園に居られるようになるってことだね?

「ただ、お願いしに行くだけだよな?」

それにちよつと武力行使がおまけで付くだけだよ。

「相手は中国政府なのよ!?!」

「相手が誰とかは関係ないよ。重要なのはそいつが鈴ちゃんを苦しめているってところだけだよ」

多分相手が東さんだったとしても、僕は行つただろうね。勝てる勝てないは別にしてもね。

「脅迫なんて、それ犯罪なのよ!?!」

うん。そうかもしれないね。それに、今から行くとしたら不法入国も追加だしね。

「それでも、やらなきゃいけないことはあるよ」

「やらなきゃいけないことって……そんなことしたら、あんたここに居られなくなるのよー!」

中国政府にケンカを売る。それはつまり、国際手配犯になつちゃうわけで、さすがのISS学園も匿つてはくれなにかもしれない。でも……。

「そんなこと構わないよ。だって、今僕が何もしなくて学園に居れたとしても、そこに鈴ちゃんはいないでしょ? だつたらそんなの、意味ないじゃないか!」

僕は自分の存在意義のすべてを鈴ちゃんに依存している。それが良いことか悪いこ

とかという議論は必要ない。だって転生者だもの。この作品が好きで、その作品という箱庭で遊んでみたいという欲望の果ての存在だもん。

そんな僕の世界を守るためなら、僕はなんだってできる。

「だから、たとえ僕がここに居られなくなつたつて、僕が警察に追われる身になつたつて、鈴ちゃんのために……鈴ちゃんがここに居られるために動いた方が、何万倍も意味があるよ!」

『ゼロを何倍してもゼロですよ』

話の腰を折らないでえええ!

そんな言葉に鈴ちゃんは何かを言いたげで、でもその言葉がすんなり出てこないような、なんだかもどかしそうにもじもじとし、僕から少し目を逸らした。そして、ぼそりとしてつぶやく。

「あたしだつて……あんたの居ないIS学園に残れても……う、嬉しくなんてないわよ」
「ほあつ!」

その小さな声を僕は聞き逃さなかった。というかね、ISのハイパーセンサーが嫌でも拾ってくれるんです。あ、嫌じゃないよ? これが一夏なら聞き逃すところだろうけどね、僕は聞き逃さないよ。

つ、つまるところはだね、これは明確な好意の表現じゃないんでしょうか? 確かに

ね、友人を失うのが嫌だつていう意味にとることもできるかもしれないけどね。それなら躊躇う必要もないし、今恥ずかしそうに頬を赤らめる必要もないよね！

おおおおおお、おちちちちつけ僕。ちよつとさつきまで湧き起つていた赤黒い怒りは僕の目の前にいる紅潮した小さな天使によつてどこか遠くに飛んで行つてしまつたわけだけど、もう大臣なんて重要じゃないよ。今重要なのは鈴ちゃんだよ。

「り、りりりりり、鈴ちゃん！ そそそそそつそ」

うわああ、お、ち、つ、け、僕ううう！ それはどういう意味つて聞くだけだるおお!?

僕は頭を冷やすべく壁に頭を打ち付ける。

「ひ、氷雨？ あんた、なにやつてんのよ!？」

鈴ちゃんが驚いたような声を出す。あ、ごめん、びつくりさせちゃつたよね。うん、でもこれである程度は冷静になれたかも。少なくとも、さつきまでの一連の動作の意味を疑えるくらいにはね。

「い、いや、何でもないよ。気にしないで」

「気にしない方が難しいわよ……」

そんなことよりも、鈴ちゃんのさつきの言葉の真意を聞かなければ！

「り、鈴ちゃん、あ、あの、さつきのつて、あの、どういう意味?」

僕がそれを聞くと、鈴ちゃんは再び顔を赤くする。

「ど、どういう意味ってあんな……そ、そのまんまの意味よ!」

うん、そこまででは分かってるんだ。

「そ、そうじゃなくてね、ほら、友達としてとか、あの、もしくは、い、異性としてとか、あるじゃない!」

う、うわあ、言葉にすると自意識過剰の痛い人にしか聞こえないよ。でも、そこが重要なところだからね? これを聞き流して、そのままにしてたら一生鈴ちゃんと進展なんてするわけがないからね!」

「あ、うう、そ、それは……その……」

はい! これはもう決定でいいよね! 鈴ちゃんも僕に好意を持ってくれているってことでいいよね! あれ? じゃあ、どのタイミングからなんだろうか? いやいや、待つて、今それは重要か? 重要じゃないよね!

僕の中では答えは出てしまったけど、鈴ちゃんは僕の問いにどう答えるべきかで、口を小さく開けては閉じ、開けては閉じを繰り返した。その顔はもう真っ赤に染まっており、すごい熱を帯びている。

「あ、あたしが……あんなのことを……」

「ほ、僕のことを?」

「す……」

す？ す!?

僕の頭が何かを察してショートしそうになったときに、鈴ちゃんは意を決したように目つきを変える。

「す……!」

「嵐、貴様、寮内でI Sを無断展開するとはいい度胸だな」

「……あ」

僕と鈴ちゃんはその声の主を視界に入れると、さっきまでの高揚はどこへやら、一瞬で冷えてしまった。

「嵐、来い」

「あ、あの千冬さん、今ちよつと氷雨と大事な話を……」

「織斑先生だ、馬鹿者」

そういうわれ、鈴ちゃんは有無を言わず、連れていかれてしまった。

突然のことに茫然として、ただそれを見送るだけだった僕は、はつと我に返る。

「……これはずい」

『なにがまずいのでしょうか。両思いになってハッピーエンドではないのですか?』

いや、それはそうなんだけど。

「あそこまでいってだよ? それを途中で遮られて、続きは後日って、鈴ちゃんがそんなことしてくれるわけじゃないか」

となると、この話はこれで終わり、続きを聞こうにも、多分はぐらかされてしまうだろう。タイミングを失ってしまったから、鈴ちゃんからは何も言ってくれないだろう。

「ああ、どうしよう……。もう少しだったのに」

『……水雨らしからぬ悩みですね』

ペイルライダーがそう言う。でもさ、僕の悩みっていつも鈴ちゃんのことだし、何が僕らしくないんだろう?

『鈴が言ってこないのであれば、水雨が言えいいではないですか』

…

……

……

「それだあ!!」

僕はもう一度、鈴ちゃんに告白をすることをここに決心したのだった。

十一話 好転は触れずとも

それは突然僕の中に芽生えた感情だった。

ISという作品で出会った元氣いっぱい少女の姿に、僕は不思議なくらい心を惹かれたのだ。その感情が世間的に見てどのようなものなのかは分かっていた。たとえ友人であっても、正直なその感情を打ち明ければ笑われるか、引かれるか……どう考えても立派な感情ではなかった。

それがこの世界に来て正当化された。それはもう僕は嬉しかったよ。それこそ内のため込んでいた感情をそのままぶちまける程度にはテンションが上がってしまった。

でも、それを受け止める側がただのキャラクターじゃなくなっていたこの世界では、その感情は相手を傷つけてしまうようなものであったのだ。それに気づかされて、接し方を変え……てはないかもしれないけど、それでも僕の中での彼女がキャラクターじゃなくなつてから、どれほど一緒に時間を過ごしただろう。

あの時、違う次元から見ている彼女から同じ次元で触れ合えるようになって、僕はますますその感情を膨らませていった。いや、既存の感情とは違うもう一つの感情なんだろうか。

キャラクターとしての鈴ちゃんを好きな気持ちと、

同じ世界で生きる鈴ちゃんを好きな気持ち。

その二つはどちらかを打ち消すことはない。けれど、交わることもない。だから、僕の中には二人の鈴ちゃんが出て、その二人共を好きな僕がいるんだ。

前者の気持ちだけなら僕がとらなければいけない行動は大臣をやっちゃうことだ。でもそれは鈴ちゃんのためではあるけれど、鈴ちゃんの気持ちを汲んだ行動じゃない。後者の気持ちだけなら、東さんの援助でも貰って二人で逃避行というのでもいいかもしれない。

どちらにしても、鈴ちゃんのために行動したという意味で僕は満足できるだろう。

でも、今の僕はその二つの気持ちを内包している。ならばその折衷案がいいのか、と言われるとそれはそれで首をかしげてしまう。違うんだ。僕はそんなに割り切れない。大臣は殴りたいし、鈴ちゃんとも添い遂げたい。それならどうすればいいか。また、東さんに頼めるのか、千冬さんにでも頼めるのか。いや、それでは僕は満足できない。鈴ちゃんのために思えば、僕の満足なんてごみのようだ。と割り切れるほどに僕は大人じゃないんだよね。

『それで、どうするのですか』

ペイルライダーが急かすように僕に問いかけてくる。しかし、僕の中に明確な答えは

ない。そんなすべてを丸く収めるような案がすぐに思いつくわけもないしね。

だからつてこのまま放つておいて状況が好転するわけでもあるまいし、何か行動を起こさなきゃいけないのは事実だ。

「どうすればいいんだ……」

そうして、答えが出ないまま僕は頭を抱えるのだった。

◇ ◇ ◇

そんな風に氷雨が知恵熱を出す勢いで悩んでいる中、千冬が鈴を連れ込んだ指導室で事態はあっけなく好転してしまった。

「は？ 大臣の独断!？」

「そういうことだ。嬉しそうに語っていたところを楊が聞いて、確認をとったそうだ」

千冬がああタイムミングで鈴を捕まえた本当の理由はこれを伝えるためであった。鈴が授業を休んでいたことも知っている千冬は、大方命令の内容に鈴が動揺し休んだのだろうと考え、一刻も早く伝えてやるべきだと動いたわけである。

「よ、よかった……」

鈴の体は糸が切れたように力が抜け、へなへなと座り込んでしまった。それは安堵からくるものであり、鈴の顔には嬉しそうな笑顔が浮かんでいた。

「しかし、お前も篠ノ之も少し考えればわかったことだろう」

千冬はため息を吐きつつ、何かに気付かなかった鈴と氷雨に呆れているようだった。鈴はその千冬の言葉が何を示唆しているのか、心当たりがなく首を傾げる。

「待機状態の専用機を盗んだとしてもだ、当人のライセンスがなければ展開すらできないだろうに」

「あつ」

「そこまで千冬が言うと、鈴もやつと大臣の命令がいかにお粗末なものだったかに気付いた。

「それに、本国にそれを強制的に起動できる装置があつたとしても、コアネットワークにつながったままでは位置情報が共有されているのだ、誰が盗んだなんて容易にわかるだろう」

確かに氷雨の専用機は価値のあるものだ。コアを一つ盗むというだけでも価値があるのに、さらにペイルライダーは束の技術が使われている。それを解析できるのなら多少のリスクだつて犯す価値はあるだろう。

しかし、それを実行したことがバレてしまった場合、瞬間全世界を敵に回してしまうわけだ。ただコアを盗んだことが悪いからという理由ではない。いち早く攻め落とし、そのペイルライダーを我が物にしようと各国が押し寄せてくるだろう。

故に実行するにしても、周到的な準備の末バレる危険性を限りなく無くさなければ、国

としてそんなことを命令するわけがないのだ。

「ええと、じゃああたしは何もしなくていいってこと？」

「普通ならそんな命令をした時点で中国に罰則を与えたうえで、中国の代表候補生には国に返つてもらおうだろうな」

その言葉に鈴は先ほどまでの笑顔を消し、目を見開いて千冬の方を向いた。鈴の視線を受けた千冬はなぜだか少し笑う。

「だが、今回はその大臣の独断だ。それに、嵐に実行の意志が無かったことも考慮すれば公にすることはないだろうし、強制送還もしないだろう」

千冬の言葉とその表情から、鈴は自分がかかわれたことに気付き、抗議のまなざしを千冬に向ける。

「千冬さんー」

「ふっ。まあ、そういうことだ。精々篠ノ之と仲良くやればいい」

最後までからかってくる千冬に鈴は抗議の目をやめ、笑顔を浮かべた。

「ありがとうございます」

「礼などいらん。私は何もしていないからな」

そういうと、千冬は、話は終わりだと立ち上がり、廊下へと続く扉に向かう。鈴はその後ろをついていき、同様に部屋を後にした。

「しかし、大臣も馬鹿なことをしたな」

指導室のカギを締めた千冬が呟いた。

「篠ノ之氷雨に手を出すと誰を敵に回すことになるか」

それを思えば、大臣に対して少し同情してしまう千冬であった。



自室。

「うーん、うーん」

どうすればいいのか、妙案をひらめくこともなく僕はベッドの上を頭を抱えながら転がる。かれこれ一時間くらいになるかな。そろそろ一夏も訓練を終えて帰ってくる頃じゃないかと思う。

「なんてこった、僕の頭を持ってしても解決法が見つからない！」

『何もしなくていいのでは？』

ペイルライダーがそういうので、それもありませんのかと一瞬考える。しかし、それがダメな理由はすぐに思い出せた。

「いや、この命令に失敗したら鈴ちゃん候補生降ろされちゃうんだって」

『そうですよね』

ん？ 僕の指摘にペイルライダーは全く動じない。何かあるのだろうか。

『先ほどコアネットワークを通じて情報が入ってきました』

「なんの？」

『鈴への命令が大臣の独断であったというものです』

「ふあっ！」

なんですか、そのとんでもなく重要な情報は！ え、なに？ それじゃあ、さつきまでの僕の苦悩は時間の無駄だったってこと？

「よし、一刻も早く鈴ちゃんのもとへ向かおう」

『吹っ切れたようですね』

ペイルライダーがさつきとそのことを言ってくれてたらもっと早かったんだけどね。まあ、そんなことで責めても仕方ない。

障害があつさりなくなってしまった。双方が相手の気持ちを知っているこの状態、長く続けてしまつたらそれだけそこから脱するのは困難になる。

だから、僕は行く。

この転生の意味を成すために。

「次回、最終話」

『氷雨、死す。ですか？』

「違うよ！」

降りしきる雨が地面をたたく。雨粒が跳ねる音だけが響く静かな夜。街灯の光が水たまりに反射して不気味に光る。

そんな中に影が三つ。一人は何やら騒いでいるようだが、その音は存外に響かず、闇に吸い込まれるように消える。

そんな雨音しかない静寂の中、呟くような声がする。

「ワールドパージ」

その声を境に騒ぐような仕草をしていた女性の挙動が急におかしなものになった。何かにするように道路の中央に向かい、視界の端に現れたトラックが謀っていたかのようには彼女に迫る。

「ひーくんにちよつかいかかけようとするゴミが。なにがハニートラップだよ、馬鹿か？」
その女性に向けるまなざしは鋭く、侮蔑を含み、まさにゴミを見るような眼と形容するのが正しいものであった。

減速することのないトラックと、それに気づかない……いや、気づけない女性。こと

の顛末は明らかだろう。

「さ、くーちゃん、帰ろつか」

「はい」

二人は最期を見送ることもなく立ち去る。

これが、篠ノ之氷雨に手を出すということの意味であった。

十二話 振りかざす刃の行方

生徒指導室

大臣が事故にあつたという知らせは次の日には千冬のもとへ届いていた。それを聞いた千冬はある程度そうなるだろうことを予想していたために驚くことはなかった。それが誰の仕業であるかも……。

それを聞いてすぐに千冬は再び鈴を呼んだ。

呼び出された鈴は何事かと不思議そうな表情であつたが、大臣のことを話すと少し安堵した表情になる。自分が悪いことをしたわけではないと分かつたからだろう。

「それで、凰、お前はこれから少しの間氷雨との接触を避ける」

千冬がそう鈴に言うのと鈴は話の脈略のなさに思わず声を上げる。

「はあ!? どういうことですか、千冬さん!」

「織斑先生だ」

出席簿で鈴の頭を軽く叩く。千冬もこの反応は仕方ないものだと感じたからいつもより弱めに叩いたのだろう。

「大臣の件はどうであれ、そういう命令があつた後に氷雨と仲良くしてみろ。お前のこ

とを知っているものならいざ知らず、知らないものからすればハニートラップを実行しているのではないかと思うだろう」

千冬の言わんとすることが分かった鈴は不本意ではあるがそれを承知した。鈴も自分の持つ行為が紛い物のハニートラップなどと思われることは望んでいなかった。

そうして要件を終えたので、鈴を退出させる。これで鈴には危害は及ぶまいと、千冬は考えたのだが、どうにも嫌な予感がしていた。

「気のせいだといいいがな」

一々面倒を起こす篠ノ之という名前に、千冬は少しため息を吐いたのだった。

◇ ◇ ◇

一週間後。

……時間が飛んでるけど、僕と鈴ちゃんとの関係は全くと言っていいほど進展していない。というか、もう鈴ちゃんが隠す気もなく僕を避けてくる。この前、教室に会いに行ったら窓から飛び出して逃げていったよ。確かに僕も鈴ちゃんが僕を避けるだろうなっていうのは予想していたんだけど、まさかここまでとは思わなかったよ……。

「まあ、恥ずかしがる鈴ちゃんも可愛いんだけどね」

「お前はぶれないな」

一夏が笑いながら言う。

「いや、鈴ちゃんに逃げられてうなだれたら、廊下の角で鈴ちゃんが顔だけ出してこつちを伺ってた時なんて、その可愛さに悶えてブリッジしちゃったよ」

「氷雨が廊下でブリッジしたっていう噂は本当だったのかよ……」

なんだか呆れ顔の一夏。でもね、仕方ないと思うんだ。ひよっこり顔だけ角から覗かせてこつちにばれないように伺ってるけど、ツインテールがしつかりはみ出てるから全然隠れられていないのに、それに気づいてない鈴ちゃんなんて見せられたら、僕がのけぞつちやうのは必然だと思わわけですよ。

「つと、そろそろだぞ、氷雨」

「うん、分かった」

一夏にそう言われて僕は立ち上がる。向かう先はピットからアリーナへと続く扉。

そう、今日この日はクラス対抗戦の当日なのだ。そして今からがその一回戦になる。僕の対戦相手は誰かって？ それはもう、なんとというか千冬さんが仕組んだんじゃないかってくらい都合のいい相手だよ。

「約束、覚えてるよね」

「あ、当たり前じゃない」

一回戦、一組 vs 二組。

対戦相手はもちろん、鈴ちゃんだった。

ピットで待機している鈴の頭の中には、一週間前の廊下での出来事がぐるぐると何度も再生されていた。

そして、そのたびに鈴は自分の口走った言葉に羞恥を覚え、赤く染まっていく顔を手で覆いうなだれる。

これだけ思い出して恥ずかしいと感じているのだが、後悔しているのかと問われると、鈴は回答を躊躇う。氷雨に言おうとした言葉は確かに自分の正直な気持であったし、ああ言わなければ氷雨の行動を止められなかっただろうと思えば間違っていたとは思わないし、自分の言葉を否定する気にはならなかった。

けれど、鈴は少女である。恋に恋する、とそこまではいかなくとも少なからず告白などに理想を抱いているわけである。だから先日直前で千冬に遮られたことを後から思えば少し感謝していた。

やはり、告白するなら二人で出かけて、帰る間際の夕暮れ時か、綺麗な夜景を背にして、できれば氷雨から……なんてことを考えていた。故のこの約束である。鈴はこの戦いに勝つことで、告白のタイミングを作ろうとしていた。

「でも、あいつ強いわよね……」

本気で戦ったことはほとんどない。なので、二人の間に実力差がどのくらいあるのか

は分からない。しかし、はつきりとわかるのはこんな動揺したままの自分では勝てないということだ。

顔を覆う手を放し、自身の頬を叩いた。パチンツと、音がピット内に響く。

「よし、切り替えていくわよ」

気持ち切り替え、気合を入れる。勝つ、勝つて思いの丈を氷雨に伝えるのだ。

出来レースであることは黙っておいた方がよさそうだろう。



アリーナ。

クラス対抗戦はそんなに大きなイベントではないはずなんだけど、やっぱり男性操縦者ってことかな、観覧席は同級生だけじゃなく上級生も混じって飽和状態だった。

僕の目の前には鈴ちゃんか甲龍を身にまとい、こちらを見ていた。

「勝った方が負けた方の言うことを何でも聞くんだよね？」

僕は再度鈴ちゃんに約束の内容を確認する。

「そうよ」

「なんでも？」

「なんでもよ」

「ここでは言えないような、それはもう過激なことでも?」

「いや、それは断るわよ」

あれ、そこは乗ってくれないのね。

しかし、意外と話してくれらるみたいだね。あれだけ避けていたからここでもすぐに戦闘を開始して話してくれないかと思つてたよ。

「常識の範囲よ、常識。……といつても、あんたにそれを求めるのは酷かもね」

「ひどい」

いつもの調子で話してくれる鈴ちゃんに少し安心する。あれ? でもそれじゃあ、なんであんなに僕を避けてたんだろうか。先週のあの時のことを気にしてたからだと思つてたけど、面と向かっても動揺していない様子を見ると、なんだか違う理由なのかな?

「ジ」

「な、なによ」

僕は疑惑の目で鈴ちゃんを見つめる。そうして僕は一つの結論に至つた。

つまり、僕に悟られたくなくて、その上、僕と一緒に居られないような理由があつたのではないか? 実は会いたかつたけれど、それを許されないような理由、それは!

「NTRか！」

「は？ 何それ」

うん、分かってた！ 鈴ちゃんの反応から違うことを確信したけど、そもそもNTRをされるにもこの学園には女子しかいなかったよ。いるとしても、人畜無害の一夏と十蔵さんだけ。いや、百合展開というのものもあるかもしれない……。

『戻ってきてください』

「はっ！ ごめん、トリップしてた」

危ない危ない。まさか僕が鈴ちゃんの心理作戦に嵌まるとは……さすが鈴ちゃん！

『独り相撲です』

相も変わらずペイルライダーのツツコミは辛辣なだけ……。

向き合ってから僕らが一向に戦わないので周りのギャラリーはどうしたんだろうと、不思議そうな感じであった。

「おしゃべりは終わりにするわよ」

そう僕に言う鈴ちゃんの目にはどこか強い意志を感じられた。昨日まで鈴ちゃんは僕を避けていたけど、今日は違うと言わんばかりだ。

なら、僕はこれ以上の問答をするわけにはいかない。

「そうだね、さすがにこれ以上みんなを待たせちゃ悪いよね」

欲を言えばこの場で聞きたい。鈴ちやんが今何を思っているのか、どうして僕を避けていたのか、そして、あの日の言葉の続きを……。

「聞きたいことはまだまだあるし、言いたいこともいっぱいあるけど……それは全部！」
ビームブレードを展開して構える。それに合わせて鈴ちやんも青竜刀を構え、僕を見据える。

「この試合に勝つてから聞くよ！」

馬鹿正直に飛び出す僕に鈴ちやんは合わせるように龍咆を放つ。不可視の砲弾ではあるが、その特性上、気圧情報を読み取ることとその気圧の高い部分が弾道であると読むことができる。

予測された龍咆を回避し、僕は止まることなく鈴ちやんに接近する。

鈴ちやんも龍咆で僕が止まると思っていなかったのか、双天牙月の連結を外し、両手持ちにして僕を待ち構えていた。

「チエリオー!!」

肉薄し、僕はビームブレードを振り下ろす。鈴ちやんはそれに応えるように双天牙月をぶつけてくる。

アリーナに二人の得物がぶつかり合う音が響き渡る。

だけど、この時、僕は自分の刃に疑問を持ってしまった。存外簡単に降り下ろしたそ

の剣の先には鈴ちゃんがいたというのに……。

「僕は……」

その疑問は小さなものだったし、色々言い訳もできたかもしれない。しかし、確かに感じたその疑問は僕の心を揺さぶり、動揺させた。

十三話　それは並び立つ関係で

アリーナ

試合が始まって数分の時が過ぎた。

観客席は男性操縦者見たさというのもあり、予想通りの活気を見せていた。剣と剣のぶつかり合い、肉薄する二人の剣技の応酬による白熱した試合展開。傍から見れば接戦、そう見えるのだろうか試合だった。

しかし、当事者である鈴の感じ方は全く異なったものだった。

確かに氷雨と自分の実力の差がどれだけあるかは分からないと言った。だが、それでもこの打ち合いで感じるものはあった。それは氷雨の捌き方が劣等感を感じるほどにうまいということであつた。自分の振るつた双天牙月が空振つたかと錯覚するほど、完璧に鈴の攻撃を逸らされていた。そして、そうして捌かれるということはその後の鈴は隙だらけになってしまふということなのだ。

ならば、なぜ二人は傍からは接戦に見えるのか。その答えは単純なものだ。氷雨が初撃以来鈴に対して反撃をしていないからだ。

「(なんなのよ……)」

鈴にしてみればそれは解せないことだ。生じた隙に付け込まない。聞こえはいいかもしれないが、意味するところは真剣に勝負していない、勝とうとしていないという姿勢を意味してる。

この試合に勝った方は負けた方に言うことを聞かせることができる。氷雨はその権利を放棄しているということだ。それに鈴は一抹の寂しさを感じる。変な話ではあるが、氷雨には鈴に求めるものがないという捉え方もできるのだ。そう感じてしまうのは毎日のように会っていた氷雨から距離をとった反動であろうか、それともこの一週間で氷雨が自分に愛想を尽かしたのではないかという不安からか。

いずれにしても、鈴は氷雨が真剣に戦っていないことに気が付いていた。



鈴ちゃんに刃向けて何とも思わなかったとか、シャレにならないよ！

なに？ ISは絶対防御があるから大丈夫とかいう考えが根底に植え付けられちゃった感じなの？ 僕もISの常識という非常識に毒されてきちゃったのかな……。

鈴ちゃんの振るう双天牙月を両手に握るビームブレードで捌きながらも頭の中は自身の気持ちへの疑問で埋まっていた。

躊躇うことなく振り下ろせたのは、本当は鈴ちゃんが好きじゃないから？

違う。僕は鈴ちゃんのことを好きで、それは紛れもなく僕の本当の気持ちだ。

なら、僕が好きなのは本当に目の前の鈴ちゃんなのか？

確かに僕は初め、キラクターとしての鈴ちゃんを好きだったのかもしれない。でも、今はそうじゃないはずだ。僕の中には二つの感情があるはずだ。そう思っていた……。

ではなぜ僕は、僕の手は鈴ちゃんに刃を向けることを躊躇わなかったんだろう。もしかして、僕は本当は……。

『警告、龍咆哮弾三秒前』

「えっ」

集中していなかった僕はその警告に反応できず、龍咆哮の直撃をもらう。

「うわっ！」

その衝撃に踏ん張ることができず、僕は後方へ飛ばされる。何とか姿勢を建て直し、着地する。それに鈴ちゃんは追撃することなくその場で僕の方をただ見つめていた。

「なんで反撃してこないのよ」

その震える声は僕を責めているようだった。僕の数メートル前方に佇む鈴ちゃんからの鋭い視線は怒りの色だけでなく、どこか悲哀の色も内包しているように思えた。

「い、いやー、鈴ちゃんの攻撃が激しくって、そのタイミングがなかったっていうか、なんというか……」

自分でもよく分かつていない感情を鈴ちゃんに伝えるわけにもいかず、僕は誤魔化そうと言葉を紡いでみるも、鈴ちゃんは僕の嘘を見抜いているようにじつと僕を見つめていた。

「勝つ気がないわけ？ あんたはあの約束なんてどうでもいいって思ってたの？」

「え、いや、そういうわけじゃないよ」

そりや、鈴ちゃんに勝つて、一緒にご飯食べたたり、遊びに行ったりしたいけど……。でも、今のこのもやもやした気持ちを放つておいていいわけではないと思う。

「じゃあ、なんでよ！」

鈴ちゃんは怒りをあらわにし、大きな声を出す。観戦している人たちには何を言っているかは分からないだろうけど、それでもこの剣幕な雰囲気だけは伝わっているだろう。

「なんであんたは真面目に戦わないのよ！」

鈴ちゃんは答えを求めている。これを有耶無耶にするのはできないだろう。僕の中ですら出ていない答えを、鈴ちゃんに言うのは気が引ける。でも、きちんと伝えよう。僕がどう考えているかを。じゃないと、鈴ちゃんは納得しないだろうし、それに僕だけじゃ分からないこの気持ちの答えを、鈴ちゃんなら知っているかもしれない。

「僕自身、まだ分からないんだ」

鈴ちゃんは僕の言葉に耳を傾ける。まだ睨んではいるけれど、話そうとしている僕の言葉を遮りはしなかった。

「僕は鈴ちゃんのことを好きだ。大好きだ」

そんな前置きに、鈴ちゃんはビクリと体を震わせ、顔を紅くする。

「でも、試合が始まって、鈴ちゃんと交戦するって時になって、僕は何も考えず剣を振り下ろしたんだ」

そう、あの時僕は何も疑問を抱かなかった。

「でも、それっておかしいよね」

僕は鈴ちゃんに同意を求める。鈴ちゃんは僕の意図するところが読めなかったのか、返事はなかった。

「だって、僕は鈴ちゃんのことを好きなんだよ？ それなのに、僕は鈴ちゃんに剣を向けた。容易に、何の葛藤もなく……。それって、本当に好きってことなの？」

鈴ちゃんはその言葉に反応し、表情を変えていく。

「それで、あんたはあたしのが好きだから、攻撃してこないってわけ？」

僕は鈴ちゃんの言葉に頷く。そこまで来ると、鈴ちゃんは明確な怒りを示した。

「ふざけないでよー」

その怒声に僕は少し驚いて、そして後悔した。また鈴ちゃんを怒らせてしまった。

「あたしはそんな理由で手を抜かれたくないし、そんなので勝つてもちつとも嬉しくないのよー!」

鈴ちゃんが怒るのはもつともだ。僕は真剣勝負に水を差したんだ。そりや怒るよね。

しかし、鈴ちゃんはいきなり、悲しげな表情になる。

「好きになるって……そういうことじゃないでしょ」

鈴ちゃんは震える声でそう言う。そんな鈴ちゃんを見て、真剣勝負に水を差したことに怒っているわけじゃないことに気が付いた。

「そりや、傷つけたくないとか、大切に思ってくれるのは嬉しいわよ。でも……今のあんなはそうじゃない」

今の僕は違う? その言葉を僕は理解できない。攻撃したくないっていうのは、鈴ちゃんを大切に思ってるからじゃないの?

「あんなはあたしを見下してる。あたしを、守るべき弱者に見てる」

「っ! ちがつ……」

「違うわいわよ!」

否定しようとした僕の言葉は鈴ちゃんに遮られる。

「あたしを対等に見てたら、攻撃したくないなんて思わない。あたしと向き合うことを投げ出そうとなんてしない」

向き合うことを投げ出す……。

「そんなんだつたら、好きになつてほしくなんかない。あたしは……氷雨と対等でいたいのに！」

その言葉に僕は気づかされた。

そうだよ。僕と鈴ちゃんは対等なんだよ。あの頃とは違う。ただ一方的に愛でるだけの対象じゃない。僕が言葉を投げかければ、鈴ちゃんはそれを受け取つて、鈴ちゃんの言葉を返してくれる。そんな対等の関係になつたんだ。

だから、あの時の僕は鈴ちゃんと戦うことに疑問を持たなかつたんだ。鈴ちゃんは守るべき存在じゃない、一緒に競い合う対等な存在だから……。

「そうだよ。僕は何を的外れなことを悩んでたんだろう」

鈴ちゃんのことを本当に好きなのかどうかなんて、誰よりも一番僕自身が分かつてるはずじゃないか。

「ごめんね、鈴ちゃん。僕はやつと理解できたよ」

僕は鈴ちゃんが好きだ。でもそれは、鈴ちゃんを人形のように愛でていたいという欲求じゃない。一緒に手をつないで、同じ歩幅で、同じ道を歩きたいという、そんな対等の存在であるパートナーになつてほしいというものだったんだ。僕は男だから、鈴ちゃんよりもできることが多いかもしれない。だから、結果的には僕が鈴ちゃんの前に出る

ことは多くなるだろう。けれど、それは鈴ちゃんを弱いと思ってるからじゃない。僕は僕に出来ることを鈴ちゃんのためにするだけ、ただそれだけなんだ。

だから、この気持ちは間違っていない。

「僕は鈴ちゃんが好きだよ」

キャラクターとしての？ それとも実在する人物として？ そんなの全部ひっくりめて僕は鈴ちゃんが好きなんだ。

「だから、僕は全力で戦うよ」

片方のビームブレードを収納し、ジャイアントガトリングを展開する。

「だって、僕と鈴ちゃんは対等の存在だからね！」

そう言つて、鈴ちゃんに笑いかけると、つられて鈴ちゃんも笑顔になる。

「そうよ。氷雨のくせに、無駄に悩んでるんじゃないわよ。似合つてないよ」

「ひどいー！」

そんなことを言つてまた僕らは笑う。

試合中とは思えない緊張感のない笑みに僕らはお互いの気持ちを確かめ合つた。

「じゃ、行くよっ！」

「来なさいよ。ほんとに反撃できないくらいポコポコにしてやるわよ」

僕らは得物を構え、向き合う。真剣な目つきになつて見つめ合う僕らの間に緊張した

空気が流れる。そして、僕が先に仕掛けようとジャイアントガトリングの銃口を鈴ちゃんに向けた。

その時、轟音が響き渡り、アリーナ全体を揺らすほどの衝撃と共に、砂煙を巻き上げ、何者かが内部に侵入してきた。

突然のことに観覧席は騒然とし、アナウンスでは落ち着いて避難してくださいとも流れてきた。

「……………まさか」

僕は知っている、この事件を。それは原作では一巻に起こるはずだったイベント。

「無人機の襲撃……………」

砂煙の中に無人機のものであろう影が三つ見られる。

……………え？ 三つ!?

十四話 侵入者につき

アリーナ。

上空に張られたシールドバリアーを容易に破壊し、侵入してきた三機の I S に千冬は顔をしかめる。

「山田先生、会場に避難アナウンスを。生徒会に避難誘導の指揮をとらせ、教員は直ちに I S 搭乗、侵入者の鎮圧に当たれ」

「は、はいー！」

突然の出来事に茫然としていた真耶は千冬の声で思考を再開させる。

「み、みなさん、お、落ち着いて、避難してください。あ、慌てず、生徒会の人言うこと聞いてください」

真耶自身が落ち着いていないのではないかと、ため息を一つ千冬はついたのだった。

◇ ◇ ◇
アリーナ内部。

砂煙に紛れて相手はまだ見えない。しかし、その正体を僕は知っている。ならば、とるべき行動は一つだ。

「鈴ちゃん！」

「な、なによ！」

僕は鈴ちゃんのもとに駆け寄り、その手を取る。

「逃げるよ！」

そういつて僕はハッチの方へ走ろうとするが、鈴ちゃんの手を取った右手に抵抗を感じてその歩は止められた。

「ど、どうしたのさ鈴ちゃん。早く逃げなきゃ危ないよ！」

「待ってよ、氷雨。逃げるって言っても、今あたし達が逃げたらあいつらが野放しになるのよ？」 他の生徒の避難も終わってないし、教師が来るのももう少しかかるでしょ」

そういうと、鈴ちゃんは僕の手を振りほどき、侵入者の方に向き直る。

「だったら、少しの間、あたしたちが足止めすべきじゃない？」

確かに鈴ちゃんの言うことは専用機を持つ者として当然の意見だろう。だが……。

「絶対にダメ！」

僕はそんな鈴ちゃんの正面に回り、感情に任せて怒鳴りつけてしまった。

そんな僕の大きな声に鈴ちゃんは驚いたようで、少し怯えたような目で僕を見ていた。どうやら僕は必死のあまり剣幕な表情で鈴ちゃんに迫っていたらしい。

「あ……。ごめん。いきなり大声出しちゃって」

そう謝るも、僕は再び鈴ちゃんの手を取った。

「でも、それだけは認められない。例えば、鈴ちゃんの言うことの方が正しいとしても、僕は鈴ちゃんが危険に冒されるのを正しきで割り切ることはできないよ」

「氷雨……」

捲し立てる僕に鈴ちゃんは反論しない。中央の侵入者は未だに動いていないとはいえ、ここで時間を使っていたら状況は悪化するだけだよな。

「だからお願い。ここは避難して」

僕が鈴ちゃんの目を見てそういうと、鈴ちゃんは何も返さず、ただ僕を見つめて小さく頷いた。鈴ちゃんの肯定の意志を受け取った僕はすぐに鈴ちゃんの手を引き、ハッチの方へ向かった。

後ろを伺ってみるが、徐々に晴れつつある砂煙の中の無人機が追ってくる様子はない。それに嫌な予感がするも、僕はピットへとつながるハッチへたどり着くと、横に設置されている開閉ボタンを押す。

「？」

しかし、ハッチは僕の期待した通りの反応を起さなかった。何度もボタンを押してみるけど、一向にハッチは開く気配がなかった。

「どうしたのよ」

その状況に焦る僕の様子に鈴ちやんが不思議そうに尋ねる。

「もしかして、開かないの?」

「そう………みたい」

学園側のシステムが乗っ取られているのかもしれない。しかし、それならば!

「ヒュージキャノンでハッチを破壊すればいいだけのこと!」

『お言葉ですが、ヒュージキャノンは現在装備されていません』

………は?

待つて、なんでヒュージキャノンが装備されてないわけ? 僕、その辺の設定いじつ

た覚えはないよ?

『外部アクセスにより、拡張領域からヒュージキャノンが外され、H A D E Sシステムがインストールされました。おそらく篠ノ之博士が行ったのでしよう』

た、東さん、こんな時に限ってなんてことしてくれてるのさ。……いや、こんな時だからかな?

多分、この襲撃の目的がそれなんだろうね。H A D E Sシステム使用時のデータをとるため。それが東さんの目的。それならば、僕が逃げられないように出口を塞ぐのは当然だよね……。

「開かないなら壊せばいいんじゃない? あんたのその、ヒュージキャノン? はない

かもしんないけど、あたしの龍咆ならいけるんじゃないの?」

「いや、そもそもヒュージキヤノンを使ってもダメだったかも」

そう答えると、鈴ちゃんは首をかしげる。

「アリーナは安全のために半球状にシールドバリアを張ってるからね。当然、壁も内側は同じように張られてると思う」

だから、破壊するなら一夏の零落白夜を使うか、外側から壊してもらうしかない。

「多分、救援に先生たちが来てるはずだから、それまではやっぱり時間を稼ぐしかないみたいだね」

そう言うのと、僕と鈴ちゃんはアリーナの中央に目を向ける。砂煙はとうに晴れ、そこには三機の全身装甲のIS、ゴーレムが鎮座していた。

直立不動の三機はよく見ると、原作で乱入してきたゴーレムと酷似しているものの、違いがあった。背部にコンテナのようなものを背負っているのだ。そこから伸びる二本の発達した機械部分は何かを発信するアンテナの様にも見える。

「鈴ちゃんはここで救助を待ってて。僕が前に出て、あいつらを対処するから」

しかし、そう僕が言うのと鈴ちゃんは不満げな表情を見せた。

「ど、どうしたの?」

「さつきはあんたに圧されて頷いたけど、やっぱりあたしだけ逃げるのは嫌」

「ええ!？」

そう答える鈴ちゃんは真剣な目つきで僕を見ていて、そこに強い意志を感じた。

「言つたでしょ、あたしは対等でいたいって。守られるだけなんてまっぴらなのよ」

「い、いや、でもね。危険なんだよ? I Sに乗ってるからって言つても、あのビームを

受けたら死ぬかもしれないんだよ? そんな危険にわざわざ晒されに行くなんておか

しいよ」

確かに足止めは必要な役目かもしれない。でもそれは本来生徒である僕らがやるべきことじゃないはずだよ。

「それはあんたにも言えることでしょ?」

「でも……!」

なんとしても、鈴ちゃんを危険に晒したくはなかった。しかし、それ以上の言葉は鈴ちゃんに遮られる。

「あたしはあんたの隣が良いの。後ろじゃない。それじゃ、あたしがあんたにしてあげることがない。だから、支え合える隣が良いの」

恥ずかしさからその頬は少し紅く染まっていたが、鈴ちゃんは真剣なまなざしで僕を見つめて、語つた。こんなことを言われて嬉しくないわけがない。こんな状況じゃなければ飛び跳ねて喜んでいたところだけど、目の前の死の危険性がそれを阻む。

「……」

複雑な気分だよ。嬉しいのに、素直に喜べない。危険を分かち合う、それが対等でいてくれる鈴ちゃんの想いなんだろう。けど、僕はやっぱりそれを拒みたいという気持ちがあった。だってそうでしょ？ どの世界に好きな子を危険に巻き込みたがる人がいるのさ。

しかし、そうしていつまでも膠着し続けるはずもなく、状況は動き出した。

『警告、前方の正体不明機より強力な妨害電波発生』

「え？」

外部との通信が遮断されるってことだよな？ まずいですよ！

鈴ちゃんもそれに気付いたようで、それを止めるべく前に飛び出る。

「ちよつと！ 一人で前に出るのは危ないよ！」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ」

そう言つて先行する鈴ちゃん。僕も鈴ちゃんの後を追い、ゴーレムとの距離を詰めようとした。

しかし、それを拒むかのようにペイルライダーの動きが鈍る。それはさながら水の中を進むかのように強い抵抗を受けていた。

「どうしたの、ペイルライダーー！」

『コアネットワークより強力な命令信号を受信』

その時、僕の視界にとんでもない光景が映り込んできた。

ISスーツに身を包む鈴ちゃんの姿。纏っているはずの甲龍が粒子になり、宙に放り出された鈴ちゃんの姿だった。

僕はそれに唖然とした。目を疑うしかなかった。

『命令を拒絶。コアネットワークとの接続を解除。独立起動モードに移行します』

「鈴ちゃん！」

抵抗がなくなり軽くなった体で、鈴ちゃんを庇うようにゴーレムとの間に回り込む。

「ひ、氷雨、ISが……突然！」

僕は鈴ちゃんの言葉に何かを返す前に、鈴ちゃんを抱えてゴーレムから距離をとる。

先ほどまで動きを見せなかったゴーレムたちがここに来てこちらに砲門を向け、その敵意を明確なものにしてきた。

相手は三機。そのどれもがシールドバリアーを貫通するだけの武器を持つ。そして、ISの絶対防御を失った鈴ちゃん。目の前の死の危険性に鈴ちゃんは無防備で晒されているのだ。

この絶望的な状況に僕は嫌な汗をかく。

「ペイルライダー、これ、どういう状況？」

『ISの強制終了命令を受け、それを拒絶するためにコアネットワークとの接続を切断。よって、コアネットワークからのバックアップを受けることができず、戦闘能力は著しく低下しています』

ISの強制終了……それで、鈴ちゃんの甲龍は待機状態に戻っちゃったわけだね。

僕はハッチのある壁際まで移動すると、鈴ちゃんを下ろした。

「鈴ちゃん、絶対そこから動かないでね」

庇うように鈴ちゃんの前に立ち、ゴーレムたちを見据える。

「射撃系の武器は使えないと考えていいのかな」

『そうですね』

相手は射撃系の武装を持つゴーレム。あっちから僕の方へ近づいてくるようなことはしないだろう。けれど、僕の方からゴーレムの方へ近づけば、鈴ちゃんが無防備になる。

だから僕のできることは一つしかない。

「ここで、相手の攻撃を全部防ぐ」

二刀のビームブレードを展開し、ゴーレムたちを見据える。

「あ、あたしのは良いから、行きなさいよ」

後方で鈴ちゃんがそんなことを言う。

「足手まといになんてなりたくないの。だから……!」

「断るよ!」

ISがなくなつて弱気になつてるのは分かるけど、それだけではできない。

「それじゃあ、何のために力を手にしたのかわかんないよ。守りたい人がいて、守れる力がある。なら、僕のやるべきことは決まってるでしょ?」

鈴ちゃんの方を振り返り、安心させるために笑いかける。震える鈴ちゃんの体を見て、今すぐ抱きしめたい衝動に駆られるも、僕の手は鈴ちゃんを抱きしめるにはあまりにも物騒なものが握られている。

「安心してよ、鈴ちゃん。絶対に守るから。僕、約束は守ることに定評があるんだよ?」
鈴ちゃんに触れるのにこんな武器は必要ない。だけど、これは守るために必要な武力。大切なものを守りたいという、僕の意志を貫くための矛。

ならば、すべてを終わらせて、東さんをぶん殴つて、それからにしよう。

「いくよ、ペイルライダー」

『了解。全力でバックアップいたします』

鈴ちゃんに背を向け、ゴーレムと対峙する。待つていたかのようにそのセンサーアイを光らせるゴーレムたちに宣戦布告するようにビームブレードの切っ先を向ける。

「東さん、見てるか! 貴様の望み通りだ! だがそれでも……!」

切り捨てるようにブームブレードを振り下ろす。そして僕は宣戦布告する。

「勝つのは僕だ！」

それを皮切りにゴーレムたちはその搭載された砲門から粒子砲を放つ。それら全てをブームブレードで弾いたのちに、僕は東さんの思惑通り、その起動を宣言する。

「HADES!!」

それは死を司るペイルライダーの側にある死の世界の名であった。

十五話 死を司る第四の騎士

「篠ノ之、鳳、聞こえるか」

そう問いかけるも、二人からの返事はない。どうしたのかと再度問いかけるもやはり返事はない。

「電波妨害か」

アリーナ内部の二人と連絡が取れない状況に千冬はそう結論づける。おそらくそれを起こしているのはアリーナに侵入してきた奴らだろう。

「山田先生、アリーナからピットへのハッチを開放、中の二人の避難を促してください」
「そういわれ、真耶はハッチを開放させようとパネルを操作するも、その操作は受け付けられなかった。」

「お、織斑先生！ ハッチが外部からロックされてるみたいで開放できません」

「……」

そこまでするのかと千冬は眉をひそめる。

「IS部隊に告げろ、早急にハッチを壊して突入しろ。侵入者の鎮静化より、二人の安全

確保を最優先としろ」

「せ、先生！　ＩＳ部隊から通信が入りました！」

真耶は青ざめた顔で千冬の方を向く。その表情に千冬は嫌な予感がした。

「ＩＳが……ＩＳが起動しません！」

その言葉に千冬は目を見開く。

とつさにアリーナ内部を映すモニターに視線を向ける。するとそこには危惧していた通りの状況があつた。

「嵐のＩＳが解除されている……」

「え、あー！」

千冬の言葉に真耶も気が付く。それがどれほど危険な状態か分からない二人ではなかつた。

「織斑先生！」

切羽詰まった声で呼びかける真耶に千冬は立ち上がり、答える。

「山田先生、ここは任せました」

そう言い踵を返し、外へ出る扉の方へ向かう千冬に真耶はどうしたのかと振り返る。

「お、織斑先生？　どうするんですか？」

「ハッチを開けてきます」

真耶の質問に対し、そう答えると、千冬は部屋から出ようと扉に向かう。

しかし、廊下へとつながる扉は開こうとしなかった。

「……はあ」

千冬はため息を一つ吐き、スライド式のドアを蹴り開けた。

「東、今の私は虫の居所が悪い。こんなもので止められると思うなよ」

そうつぶやく千冬を見送った真耶はISが起動しない今千冬がどうやってハッチを開けるのか、真耶には想像もつかなかったが、しかし、開けられない千冬というの想像できなかつた。

◇ ◇ ◇

ペイルライダーの機体表面が紅く染まり、それは粒子状になり機体に纏わりつく。展開装甲の一種なのだろうか、その紅い粒子はビームブレードまでを覆い、通常ピンク色をしたその武装を赤黒く染めていった。

『H A D E Sシステムにより、機体の反応速度、および情報量のセーフティが解除されま
す』

なるほど。H A D E Sは機体の性能の上昇じゃなくて制限が解除されるのか。それに情報量のセーフティ？ っていうのも解除されると。ふむふむ。

「それやばくない？」

『そうですね。搭乗者の処理能力を超える情報量には制限がかけられていますが、H A D E S システム使用時にはそれが無くなり、より詳細なデータが脳に送信されます』

その言葉が事実であることを示すように、ゴーレムから放たれた粒子砲の軌跡の予測、着弾時間なんかの様々なデータが脳に直接情報として流れ込む。その情報をもとに僕はそれらを弾いていく。

「おお！ これ凄いじゃないか！」

『ですが、これには搭乗者への負荷が多分に掛かります』

「そんなこと、この状況で僕が気にするわけではないで、しよつ！」

迫るビームを一本一本弾き落とす。敵の挙動から粒子砲が放たれる前に予測軌道を算出し合わせてビームブレードを振る。幾本の閃光と交差する真紅のピンク棒。その一連の動きに伴う思考回路の負担に少し頭が痛むも、背後にいる鈴ちゃんを思えばこの程度の痛みわけないね。

しかし、僕はここであることに気付いてしまった。

「……ペイルライダー」

『なんででしょうか』

「さつきからロックオンアラートが鳴ってないのはどうしてかな？」

『……』

それにペイルライダーはすぐに答えはしなかった。ただ一つ言えるのは否定もしなかったということ。つまり、ロックオンされているならばアラートはなるはずなのに鳴らないのは不具合ではなく、事実ロックオンされていないからということだ。

それはつまり……。

『狙いは鈴であると推察します』

薄々感じていたその回答に寒気を感じた。

このゴーレムは束さんが送ってきたものだ。そのシステム系の設定はもちろん束さんが行ったもの。それに加えてさっきの信号。

つまり、束さんはISを展開できなくなつた状態に追い込んでから鈴ちゃんに攻撃をさせようとしていた。これはどう考えても明確な殺意が現れている。

「何考えてんだよ、束姉……」

湧き上がる怒りを抑えることができず、ビームブレードを握る手に力が入った。



某所

モニターに映る光景を見つめ、篠ノ之束は満足そうな笑みを浮かべる。

「いいよー、ひーくん。予想通りのデータが取れてるよー」

ゴーレムを通して収集された赤黒く発光したペイルライダーのデータが束の頭に流

れ込む。

「表面装甲を粒子化しての擬似展開装甲、それに加えての搭乗者の神経伝達速度の向上。うんうん、やっぱり理論通りの性能になってるね」

そうして満足そうな束の隣でクロエは少し不思議そうな顔をする。それに気がついた束は流れ込む情報の処理をしながら、クロエの方を伺った。

「どうしたの、クーちゃん」

「H A D E S システムは使用者の負担が大きかったはずですが、氷雨に使用させてよかったですか？」

それは当然の疑問だった。束の氷雨に対する溺愛っぷりを幾度となく見てきたクロエにとって、束がその氷雨にリスクのあるシステムを使用させるなどということがおかしなことを感じたのだ。

「そうだねー。H A D E S は無理やりリミッターを外すものだからねー。それ相應のリスクは負つちやうんだよね。でも、それに見合うだけの性能はあると思うけどね」

その答えになつていない回答ではクロエは納得しきれなかったが、ただ束が氷雨に使用させていることに何も感じていないことだけは分かった。

再び束はモニターへ視線を戻す。しかし、その向ける表情は先ほどと打って変わって不機嫌なものであった。

「ひーくんを色香で騙したチャイニーズはまだ死なないの？ さすがひーくんって言い
たいけど、今回はそういうの期待してないんだよねー」

そうして、東は目の前に現れた空間投影タイプのディスプレイに指を滑らせる。すると、モニターの向こうのゴーレムの攻撃が目に見えて激しくなった。

「中国」ときがハニートラップでひーくんを籠絡できると思うなよ」

その鋭い目はもはや氷雨を見てはいなかった。

◇ ◇ ◇

アリーナ。

迫る粒子砲の雨を全て払いのけ、僕は背後の鈴ちゃんを守り続けた。いつか背後のハッチが開き、外から救援が来ると信じて。しかし、その時は何時まで経っても訪れない。その事実には僕は焦り始め、嫌な汗をかき始める。

おかしい。いくらなんでも遅すぎる。普通ならすでにIS部隊を編成してここに到着してもいい頃合だよ。ハッチが開かないと言っても、外部からならいくらでも手段はあるはずだ。それでも現時点でここに来ないということは……。

もしかして、あのコアネットワークを通じてきた命令信号って、僕と鈴ちゃんにだけじゃないのかもしれない。というか、当然だよ。早々に救助が来たらH A D E Sのデータ収集も満足にできないし、それに……何のつもりか知らないけど、鈴ちゃんを仕

留めきれないだろうしね。

「絶対許さないよ」

怒りに声が震える。

その時、その囁くような声に反応するかのように脳内に描かれる粒子砲の軌跡が全く異なったものになった。眼前に広がる予測軌道は数十本の粒子砲がすべて異なる曲線の軌跡を描く偏向射撃に変化したのだ。

「なっ！……ぐっ」

その増加したデータの処理に脳は悲鳴を上げる。その痛みに歯を食いしばり耐え、すべての軌跡にビームブレードを合わせる。

「氷雨っ！」

目に見えて増えた粒子砲の数に背後の鈴ちゃん心配そうに声を上げるが、安心させるための言葉を紡ぐ余裕すら今の僕にはなかった。

降り注ぐはまさに雨。小さい頃に雨降る外に出て雨を全て避けて走ろうとしたことがあった。今、僕が成そうとしていることはまさにそれと変わらないようなことだ。つまり、無謀。

ISから送られる情報の全てに意識を集中しても、握るビームブレードの剣先に全霊を込めても、導き出される解には必ず着弾が存在した。それが僕の脳の処理能力の限界

だと突きつけるように横を通り抜けようとする一閃。もはや振り切ったこの手では間に合う術がない。なら、選択肢は一つしかないよね！

「させるかああああ！」

痛みを咆哮で紛らわし、僕は体を傾け鈴ちゃんに覆いかぶさる。それはもうなりふりを構わない捨て身の行動だった。瞬間、背中に衝撃が伝わる。それは僕の意識を飛ばすのに十分すぎるものだったが、唇を噛み切り、意識を保つ。それでも視界は霞み、額には冷汗が浮かぶ。そんな僕の正面には瞳に涙を溜め、必死の形相で僕を心配してくる鈴ちゃんの姿があった。

絶望的だった。

流れ込む情報量が多すぎて頭が痛い。その痛みは脳を錐で直接穴を開けられているかのように鋭い。体を動かす気力を根こそぎ奪う様な痛みに、僕の意識は薄れていく。

だめだ、限界だ。僕の体がそう訴えかけてくる。これ以上無理をすれば、間違いなく何かが壊れてしまう。それを理解して僕の体は僕にやめろと訴えるんだ。

分かってている。僕の体だもん。僕自身がそれを理解していないわけがない。でも、ここで無理をしなくても、失うものはあるんだ。確かに自分の身は大事だ。でも、自分の身を案じるばかりにもっと大事なものを失うわけにはいかないんだ。

ここで僕が諦めてしまえば、鈴ちゃんは助からない。そしたら、僕はどうなるだろう

……。何一つ欠けることのなかった体に、ぼつかりと穴の開いた心を伴って……。そんな状態で僕は助かったと言えるのだろうか。僕は後悔をしないのだろうか。僕は……前を向いていられるだろうか。

遠のく意識を引き戻し、霞む視界を精一杯広げる。目の前には何かを必死で語りかけている鈴ちゃんの姿が映る。僕の身を案じてくれているのだろう。僕なんかより、自分の方がよっぽど危険な状態なのに、それでも目の前の僕のことを心配してくれる……。嬉しいなあ。その気遣いだけで僕の心は温かい気持ちでいっぱいになる。やっぱり、僕には鈴ちゃんが必要だよ。僕の存在はもう鈴ちゃんに依存してしまっている。鈴ちゃんを失うということは、すなわち僕の存在を揺るがすことだ。

なら、僕の体が壊れるなんて些細なことだ。僕はビームブレードを握りしめる。

「……鈴ちゃん」

渴いた喉を弱々しく震わせる。それが声になっていのか、自分の声が鈴ちゃんに届いているかもわからない。鈴ちゃんを守るために聴覚情報は必要ないからだ。

「ありがとう。僕と一緒にいてくれて」

すべてが終わった時、また鈴ちゃんと一緒に居られるようにと、願掛けの様に僕は眩く。

「僕は……これからも一緒に居られるように……行ってくるよ」

だから、これは別れの言葉ではない。また一緒に居たいから紡ぐ、約束の言葉だ。
「またね」

絶え間なく背にぶつかる衝撃に耐えながら僕は口を開く。

「ペイルライダー」

呼びかける僕の声に彼女は返事を返さない。

「もう、僕の意識は必要ない」

『氷雨……』

その声は機械的なはずなのに、どこか僕を心配しているようにも聞こえる。

「僕の脳のすべてを……情報の処理に回して……」

迫る衝撃を顧みず、立ち上がり、鈴ちゃんに背を向けゴーレムの方に向き直る。

「鈴ちゃんを……守れ」

『……了解しました』

そこで、僕の意識はブラックアウトした。

十六話 終わるモノ

観覧席

避難指示が出された後もその場に残る者たちがいた。

それは一夏を含めた一組の専用機持ちたちと、箒であった。

彼らが逃げなかったのには理由がある。それは他の生徒の避難が終わった後にアリーナに張られているシールドバリアを一夏の零落白夜で破り、二人の援護に行こうと考えていたからだ。それに箒は参加できないのだが、どうしても自分だけ逃げるのは嫌だと言うので、残っている。

しかし、彼らの思惑は実現されなかった。

「くそっ！　なんで起動しないんだよ！」

会場に張られたシールドバリアに拳を叩きつけながら一夏は叫ぶ。それは自分の無力さに憤りを感じているような、そんな声だった。

そして、そんな感想はこの場にいる全員が感じているものだった。ただ見ていることしかできないことが歯がゆくて仕方がなかった。

アリーナの中では氷雨が鈴を守るようにゴーレムと対峙しており、それを見守ること

しかできないのがどれだけ苦しいことか。それを一番に感じているのは箒であった。そもそも専用機を持たぬ彼女が一番自身の無力さを痛感していた。

「ど、どうにかできないのか!」

「無理ですわ。何度ブルーティアーズを展開しようとしても反応がありませんもの」

セシリアが淡々と箒の叫びに応える。しかし、平静を装いながらもセシリアの握りしめた拳からその怒りが現れていた。それに気づかない箒ではない。故に、それ以上声を荒げることもなく、視線はアリーナの方に戻っていく。

氷雨の駆るペイルライダーの周囲を覆うその真紅の粒子が揺れ、どことなく不吉なその雰囲気には箒は嫌な予感がした。

そして、その予感には現実のものとなる。

◇ ◇ ◇

アリーナ

降り注ぐ粒子砲。その全てから後方にいる鈴を守り抜くためには氷雨の意識などには必要なかった。ハイパーセンサーからの膨大な情報を処理するための脳と反射で動く体さえあればいい。

迫る粒子砲に氷雨の体は先ほどと比べ物にならない速度で対応する。動きに伴う体への負荷に対し無意識に働くセーフティすら氷雨の脳は行わない。

ただインプットされた情報から出た結果に体を無理やり合わせるだけ。ちぎれんばかりに振り回される両腕が鈴を守るべく必死で空を裂く。搭乗者の安全性を考慮しない、出力の限界を超えた動きはH A D E Sによる第二段階のセーフティ解除によるものだ。

「ああああああああああああああああ!!」

獣の如き咆哮を伴い、氷雨の体は粒子砲をさばき続ける。次第に攻撃速度の上がつていくゴーレムからの粒子砲に合わせるように氷雨の動きも激しくなる。

脳に流れ込む情報量はとうに元来人間が処理できるであろう情報量を超えている。それが更に大きくなる。それは自ら意識領域を明け渡した状態の今の氷雨の処理能力すら上回り、限界を超えた情報量に氷雨の脳は悲鳴を上げる。

視覚情報の過多により充血した眼球の血管が切れ、その瞳に血が溜まる。眼球にたまった血液が鼻にも流れ込み、呼吸が困難になり、氷雨の体は口で荒い息をするようになる。激しい動きにより酸欠状態に近くなるも、体内のナノマシンが四肢への酸素供給より脳への酸素供給を優先させ、体の動きを全て外骨格であるペイルライダーに任せ

る。
満身創痍になる氷雨の体はこれ以上この行動を続行させると、結果として鈴を守れないと判断する。それは意識を失ってもなお潜在された氷雨の行動理念である『鈴を守

残りの二機のゴーレムがそれに反応するも、すでに肉薄しているペイルライダーは姿勢を低くし、ゴーレムがその粒子砲の照準を合わせる前に斬り伏せた。

倒れこむゴーレムを虚ろな目で見送る。すでに焦点も合っていないその瞳は真っ赤に染まっていた。

動かなくなつたゴーレムを確認して氷雨の体は踵を返し、鈴のもとへと歩き出した。すでに限界を迎えていた氷雨の体はペイルライダーの補助を受けながらも、その歩みは遅く、足を引きずるように鈴との距離を詰めていった。

その場でしゃがみ込んでいた鈴の正面に立ち、氷雨の体はそれを見下ろした。安否を確認するようなそのしぐさに気付いて鈴は顔を上げる。

「ひっ」

顔を上げた鈴の瞳に映つた氷雨の顔は血にまみれており、焦点の合わない虚ろな目も相まってそれは鈴に恐怖を与えるに十分なものであった。

冷静な思考ならいざ知らず、先ほどまで命の危機に晒されて極度の緊張状態にあった鈴の思考では助けてくれた相手であつても、このような反応をしてしまうのは仕方のないことだった。

そんな姿の鈴を見て、意識を押し込めていたはずの氷雨は少し微笑んだ。自分は守り切つたのだと、それをしっかりと確認してそして。

「ぐふっ」

咽るように咳き込むと、氷雨の口からは血が溢れだした。

そして、無理を押し通した氷雨の体は自立することさえできなくなり、その場に倒れこむ。展開されていたペイルライダーは粒子へと変換され消え、その場にはISスーツ姿の氷雨だけが取り残された。

「氷雨……？」

鈴は震える声でその名を呼ぶ。しかし、小さく鈴の音の様な声にあの馬鹿みたいに元気な返事はなかった。ただ鈴の目に映るのはピクリとも動かなくなった氷雨と、その周りに漂う赤黒い粒子だけである。

「氷雨っ！」

鈴はその名を叫びながら氷雨の元へ近づき、その体を抱き寄せる。目立った外傷はない。目や耳から血が出ていた形跡はあるが、今は止まっている。呼吸も規則的でただ眠っているようにも見える。

だが、氷雨の周囲を漂う赤黒い粒子が不気味に光り、鈴に嫌な予感を抱かせる。

鈴の後方で何かが弾けとぶ音がした。千冬がハッチを破壊して開放したのだ。その手に握られたのはIS用のブレード。生身でそれを握り、扉を破壊したのだった。

しかし、鈴はそれに目もくれない。鈴の視線はただ動かなくなった氷雨から離れな

かった。



氷雨は目を覚まさなかった。体の損傷は少なかった。一番ひどかった眼球の損傷も、再生治療により視力の低下は免れないものの、視力を失うこともなく済んだ。そのまま目覚めれば、すぐにでも日常生活に復帰できるはずであった。

しかし、それは叶わぬものだった。H A D E S システムの使用において、最も負荷がかかるのは脳である。脳の機能を最大限に活用することにより、血液が集中し、内出血を起こしていたのだ。

当然、普通であればそれはすぐさま死に直結する出来事である。しかし、氷雨においては血液中にI S のバックアップを受けるナノマシンが流れている。それにより、さまざま処置が行われ、幾度の内出血を伴ってもH A D E S による情報処理を実行することができたのである。

しかし、それが良い事とは限らない。無茶をさせれば、必ずどこかが壊れてしまう。故に氷雨は一週間が経とうとする今現在において目覚めることなく、眠り続けているのだ。

そして、鈴は病室で氷雨の目覚めを待っていた。あの日から毎日、朝から晩まで氷雨

の顔を見つめるだけの日々。

「……」

ありがとうと伝えたいから。氷雨が目覚めたら、色々な人が各々の言葉を投げかけるだろう。一夏やシャルなんかはよかったと氷雨の無事を喜ぶだろう。箒やセシリアは氷雨の無茶を責めて、それから心配してたことを伝えるかもしれない。千冬は、馬鹿者と一言で済みますかも。

しかし、鈴はそんな皆の誰よりも先に伝えたい言葉があつた。それは『ありがとう』という感謝の言葉だつた。自分を犠牲にしたことを責めたいとも思うし、無事目覚めたこととの喜びを伝えたくも思うし、どれだけ心配したかを涙交じりに語ってしまふかもしれないとも思う。だが、それでもやはり最初に伝えたいのは、こんな自分を守ってくれてありがとうというこの上ない気持であつた。

未だ目覚めぬ氷雨の顔を見て、未だ伝えられない現状に、鈴は膝の上に置かれた手を小さく握り、拳を作つた。

そんな時、扉の向こうからノックの音が聞こえ、扉が開かれる。顔を覗かせたのは箒であつた。

「……鈴か」

「……」

病室に入ると、箒は鈴の隣に立ち同様に氷雨の顔を見下ろした。

「まだ、目は覚まさないのか」

「うん」

もうすでに何度も行ってきたそのやり取りに、半ば答えを分かっていた箒は小さく

「そうか」と呟いた。

「先生が言うにはどこにも異状ないんだって。いつ目覚めてもおかしくなくて……。だったら、なんで今も目を覚まさないのよって、思わず掴みかかっちゃった。別に、先生は悪くないのにね」

鈴の渴いた笑いだけが病室に響く。自嘲するように笑う鈴の顔はどこかやつれてい
るように見える。

「鈴、ちゃんと寝ているのか？ 少し疲れた顔をしているが」

「心配しなくていいわよ。ちゃんとベッドには入ってるもの」

鈴はどうでもよさそうに答える。箒も「そうか」と返事をしただけで、それ以上何か
を言うこともなかった。

「……」

「……」

病室に再び静寂が訪れる。重苦しい空気が病室に漂い始める。そんな空気がどこと

なく残された者を責めているように感じられて、箒は後悔の言葉を紡ぎだした。

「私にも……私にも力があれば……。氷雨をこんな目に合わせずに済んだかもしれないのに」

箒は見ていたのだ。自分の兄が、自分の視界の中で傷つき倒れる様を。見ていたのに、それでも何もできなかった。自分に力がないばかりに、氷雨にだけこんな傷を背負わせてしまったと、後悔の念を抱いているのだ。無論、あの場においてISという力は何の意味もなさなかったのは確かであるが、持たぬ者にとってそれは些細な問題なのだ。

「私が……私がっ！ ……くっ」

そう嘆くように吐き捨てる、箒はその罪の意識に耐えきれなくなり、踵を返した。そうしてそのまま箒は病室から出て行ってしまった。

そうしてまた二人になってしまった病室。先ほどの箒の言葉はそのまま鈴にも当てはまるものであった。自分にも何か出来ることがあったのではないか。

「……」

鈴は泣くことも嘆くこともしなかった。もう疲れてしまったのだ。今はただ、氷雨が目覚めるのを待つだけ。それだけしかできなかった。

窓から淡い赤色の斜光が差し込む。今日も氷雨は目を覚ますことなく日が暮れ始め

た。傾く陽に照らされ、氷雨の顔が赤く染まる。

それがどことなく眩しそうに見えた鈴は立ち上がり、窓際に歩き出し、カーテンを閉めた。

その時、ベッドで横たわる氷雨の体が動いた。

「氷雨っ!!」

それにすぐさま反応した鈴はベッドの脇に移動し、氷雨の顔を覗き込む。すると、眠たそうに何度かまばたきをした後、氷雨はしっかりと目を開き、その意識を覚醒させたのだ。

氷雨はその体を起こす。その一連の動作を鈴はただ見つめていた。驚きのあまり動けなかったのだ。しかし、徐々に動き出した思考から鈴はようやくやく目の前で起きたことを理解した。

氷雨が目を覚ましたのだ。それを理解した瞬間、鈴の胸はいっぱいになり、さつきまで言いたかった言葉なんかもどこかへ行ってしまう、ただ溢れる感情が出口を探して涙となつて零れだした。

そうして言葉に詰まっていた鈴に氷雨が気づき、視線をそちらへ向ける。しかし、その眼はどこか他人を見るような目であった。

「あの……」

その声に鈴が反応して氷雨と目を合わすも、鈴は気づいてしまう。
「ここは、どこでしようか」

それは紛れもなく氷雨の目なのに、氷雨の声なのに……。
「あなたは……」

目の前にいるのが別人であると、鈴は理解してしまった。
「誰ですか」

ツナグミライ

第一話

氷雨が目を覚ました後、鈴は医師を呼び、その場を後にした。普通なら喜んだ。普通なら側にいた。普通なら……。しかし、そんな想いとは裏腹に目覚めた氷雨の状態は鈴の思い描く普通とは程遠いものであった。

記憶喪失。

氷雨を見た医師によると、脳に異常は見つからなかった。しかし、記憶がなくなっていることは事実。原因は不明であるが、おそらくあの侵入者との戦闘時に使用したH A D E Sというシステムが関与しているのではないかという結論に至った。

だが、その医師の話は肝心なところを言及せずに終わった。

氷雨の記憶が元に戻るかどうか……。それが鈴の一番知りたいたところであった。だが、それについて何も言っていないというところは、例えば鈴が問いかけたところで、返ってくる言葉はありきたりで当たり障りのないものであるうということが容易に予想できた。

一緒に話を聞いていた千冬も険しい表情を浮かべる。それは誰かへの怒りを抑えているようにも見えるのだが、鈴にはそれが誰に向けられているのかを推し量ることはで

きなかった。

「体には異常はないのだな」

その千冬の確認に医師は頷き、肯定を示す。

「なら明日から学園に戻ってきてもらおう」

その言葉に鈴は驚く。確かに目を覚ました氷雨だが、記憶を失っている彼を学園へ連れ戻すのは早計ではないかと。医師もそれには反対だったようで、引き続きの入院を提案するも千冬は医師を威圧するような眼光を飛ばし、それを一蹴する。

「氷雨は普通の患者ではない。世界で二人しかいないISの男性操縦者だ。それがこの病院にいるという情報が漏れてしまえば、どうなるか想像はできるだろう」

そこまで言われて医師は納得……というよりは渋々といった表情で千冬の意向に従ったのだった。



記憶のない氷雨を連れて千冬と鈴の三人は学園に戻ってきた。千冬の不機嫌な顔に萎縮して道中一言も話さなかった彼だったが、学園の入り口に來ると感嘆の声を漏らした。

「(トト)は……」

「(トト)はお前が在籍している学園、IS学園だ」

ISという聞き覚えのない単語に彼は首を傾げながらも、その眼前に広がっている学園の規模の大きさにただただ圧倒されていた。

「私は、すごいところに通っていたのですね」

「まあ、ある意味すごいわよね」

「ある意味……ですか？」

そう鈴に問い返した彼であつたが、回答を得る前に千冬が学園の中に歩き出したので二人は続いて歩き出した。

「今日はもう遅いからな。お前には私の部屋で寝てもらおう。皆への説明はまた明日にでも行おう」

「あ、はい。分かりました」

薄暗くなつた空を見て彼は当然そうなるだろうと思つた。誰も、全寮制だと言つていないのだからもうこの学園に生徒はいないのだろうと考えているからである。

「あれ？ では、君はどこで寝るのですか？」

「凰鈴音」

鈴の言葉に少し首を傾げる。しかし、少ししてそれがどういう意味かを理解した。

「ああ、凰さんというのですね」

「そうよ。あんたの名前は篠ノ之氷雨……って、それくらいはもう聞いてるわよね」

「はい。病室の名札にも書いていましたので。読み方はすぐには分かりませんでしたけど」

そう言って自嘲気味な笑みを浮かべる。それに鈴も合わせて笑顔を浮かべる。しかし、浮かべた笑顔と裏腹に、彼女の心は沈んでいる。だが、それを表に出したとて現状は好転しないのだから、彼女は精一杯取り繕った仮面をつけるのだ。

そんな鈴を見て、千冬は思う所があつたようでも千冬には珍しく曇つた表情を一瞬浮かべる。

「言っていないが、ここは全寮制だ。鳳もこの学園の生徒であるから、自室をもっている」

「ああ、そうだったんですね」

謎が解けて少し嬉しそうな顔をする。それは知識が増えるにつれて記憶が戻ってきているように錯覚しているが故の笑みだった。

千冬は扉の前で立ち止まる。そして鍵を開け、扉を明け放ち、氷雨の方を見る。

「先に入っている。私は少し鳳と話があるのでな」

「……分かりました」

千冬の言う話というのが自分に関するものであることは自明であつた。それについて、自分抜きで話そうとしていることに少し抵抗を感じたものの、そこに出しゃばれる

ほどの立場に自分はいないと彼は思い直した。

「嵐さん、お休みなさい」

「うん、お休み」

そう言うと、氷雨は千冬の部屋の中に入っていき、千冬は扉を閉めた。

「それで話って何ですか、千冬さん」

「単刀直入に聞かせてもらおう。鈴、お前は今の氷雨と一緒にいて苦しいか」

千冬の言葉は鈴の心に深く刺さった。それは今、一番聞かれたくない問いであったからだ。

「なんで、そんなこと聞くんですか」

自分の中の違和感を見ない振りすることで平静を保って今の氷雨と接することができていたのだ。それを、千冬は崩そうとしている。

「……いや、答えたくないなら答えなくていい。私としては誤魔化せるのならその方が都合が良いからな」

千冬は思いの外、あっさりと退いた。

「嵐。お前には明日から一組で授業を受けてもらおう」

「……そういうことですか」

そこまで言われれば、千冬が鈴に何をしたいのかが分かった。今の氷雨の状態を

知っているのは鈴しかしない。であれば、彼の側にいて明日からの学園生活でのサポートをしろということなのだろう。

故に千冬は鈴に問いかけた。今の氷雨について苦痛かどうかを。

「ずるいですね」

鈴は少し恨めしそうな顔を千冬に向ける。

「あたしが氷雨と一緒にいて苦しいなんて、言えるわけないじゃないですか」

「……すまない。だが、適任者がいなくてな。私はずっとついていらればいいのだが……」

「それはそれであたしが嫉妬しちゃいますよ?」

鈴は冗談めかしてそう言いながら笑顔を浮かべた。

「強くなったな、鈴」

そう言つて千冬は鈴の頭を撫で、話は終わりだと踵を返した。

「お休み」

「お休みなさい、千冬さん」

氷雨ではない氷雨の目覚めは始まりだった、二人が繋ぐ未来までのプロローグの。

◇ ◇ ◇

IS学園、一年一組の教室は騒々しいものになっていた。それもそのはず、一週間学

園を休んでいた氷雨が登校しているのだから騒がないはずがなかった。箒でさえ目覚めたことを知らされていないのだ。クラスメイトがするはずもなく、それはもう一種のパニック状態だった。

「静かにしろ」

そんな狂乱も千冬の一声で治まる。

「今日から篠ノ之が登校を再開する。が、今のこいつには記憶がない」

淡々と紡がれたその言葉に皆は驚愕を顔に浮かべた。そんな中、箒はおもむろに立ち上がり、声を荒げ千冬に問いかける。

「氷雨の記憶がないとは、どういうことですかっ！」

「言葉の通りだ。先の戦いで記憶を失った。それだけのことだ」

「それだけって……」

千冬の言い方に箒は苛立ちを覚えた。記憶がなくなつたことは、それだけと一蹴するには大きすぎる問題だ。そんな箒を見て、一夏が宥める。

「落ち着けよ、箒。千冬姉に怒つたって仕方ないだろ」

「それはっ……そうだが……」

箒も分かつてはいるのだ。千冬の言い方に苛立つたのは間違いない。だが、怒りの根幹にあるのはあの時何もできなかった自分の不甲斐なさだ。そう理解しているが故に、

箒は一夏の言葉で沸き起こった怒りの矛を収めた。

そのまま着席する箒を見て、千冬も自分の言い方が悪かったと反省する。だが、詳しいことは語れない、いや、語りたくないのだ。H A D E S システムによつて記憶を失つたといえ、それは原因が束にあると悟られてしまうのだから。氷雨が記憶を失つてい

る今、箒と束の関係を更にこじれさせることは、得策ではないのだから。「記憶がないこいつ一人では何かと不便だろう。よつて、こいつの世話に適任の人物を一時的にこのクラスに加えることにした」

世話という表現が少し引かかったが、その紹介に依じて鈴が教室に入ってくる。

「二組の風鈴音よ」

その登場に動揺はなかった。むしろ鈴が出てきて納得している生徒すらいた。

「一時的な措置だが、風には一組で授業を受けてもらおう」

それを受けて一組では席替えが行われた。最前列の正面に鈴と氷雨を配置して、その周囲に氷雨と関係が深かった専用機持ちなどが座るように変更されたのだった。

◇ ◇ ◇

昼休みになると、氷雨の周りにはクラスのみんなが集まってきた。みんな心配していたのだからそうなるのは当然のことだろうと思つていた鈴であったが、大多数の女子はどこか面白がつているような節があつた。

「篠ノ之くん、覚えてないの！ あたしとあなたは恋人だったのよ！」

「私も篠ノ之と恋人だったよ」

「私は愛人だったんだよ」

「私も」

「私も」

そんな風に嘘を吹き込もうとする女子たちに鈴は呆れた顔をする。ため息を一つ吐き、彼女たちを氷雨の側から引つpegす。

「はいはい、あんたたちいい加減にしないと後で千冬さんに告げ口するわよ」

「わー、それは卑怯だよ」

「仕方ない、てっしゅー。てっしゅー」

氷雨を囲んでいた少女たちが散っていくのを見送り、いつものメンバーが氷雨の周りに集まってきた。

「大丈夫だった？」

鈴が問いかけると、彼は暗い表情をしていた。なにかあったのかと鈴は心配になる。

「わ、私は複数の女性と関係を持っていたのですか……」

そう言つて記憶を失う前の自分を想像して絶望を顔に浮かべる彼であったが、それが的外れな心配であることを一番知っている鈴は笑う。

「あはは、そんなことないわよ。みんな、からかつてるだけよ」
「そ、そうなんですか？ よかったあ」

安堵の笑顔を浮かべる。そんな彼の様子を見て、一夏たちはやっぱり氷雨が記憶を失っているのだということ再度認識した。

「やはり、記憶はないのか、氷雨」

箒が語りかける。正直、氷雨が記憶を失ったという事実には彼女はピンと来ていなかったのだが、鈴と彼が話をしている様子を見て理解した。彼には鈴への好意がなかったからだ。

「えと、あなたは……」

「ああ、私は篠ノ之箒。妹だ」

「妹さん……あ、双子なんですか？」

確かに同じクラスに妹がいるとなるとそう認識するのも無理はない。だが、実際には二人は双子ではない。

「いや、同じ学年だが双子ではないぞ。私が小学一年のころに氷雨が養子としてうちに来たんだ」

「なるほど。そう言う事情があつたのですね」

彼はそう言うと、箒の方を見つめる。その視線に箒は少しむず痒くなって恥ずかしげ

に顔を逸らす。

「な、なんだ。まじまじと見て」

「いえ。確かに双子にしては僕と違って整った顔立ちだと思ひまして」

「なっ!？」

思いもよらず褒められてしまい、箒は顔を紅く染める。その仕草が何とも可愛らしく、妹だと思うと、一層彼には愛らしく見えた。

「で、俺の名前は織斑一夏だ」

「織斑……あ、先生と同じ苗字ですね」

「おう。その織斑先生の弟だ。氷雨と俺は小学一年の時に出会って仲良くなつたんだぜ」

「そうなんですか。長い付き合いだったんですね」

長い付き合いだった。なんてことない言葉の中に、一夏は少し彼との間にある壁を感じた。感性の強い一夏なので、その程度のことにも気になつてしまう。しかし、それを仕方ないことだとも思っている。故に彼はその壁をすぐに取り去つてやると、むしろ息巻いたのだ。

「ああ。氷雨が家の都合で引越すまでの4年間ずっと一緒だったんだぜ」

「私も一緒だっただろ」

「そうだな。二年のころからは筈も一緒に遊んでたよな」

昔話を懐かしそうに語る彼らの表情を見て、その記憶のない氷雨は以前の自分がどれほど彼らと深い仲だったのかを見出した。それは自分を肯定してくれている証拠であって、彼は安堵した。以前の自分が少なくとも、この二人には好かれているのが分かって安心したのだ。

「で、俺と氷雨は男でISを扱える世界でたった二人の人間だったわけで、この学園に入学させられたんだ」

「あ、その辺りのことは昨晚、織斑先生に聞きました。ISという女性しか扱うことのできない人型外骨格の操縦者を育成するのがこの学園なんですよね？」

千冬が彼に説明した部分は彼の記憶……というよりは彼が置かれている状況であった。この状態の氷雨には人間関係の情報よりも優先されるものと千冬は判断した。それは彼の身の安全を守るために、一番彼に認識しておいてほしい事柄だったのだ。

「そうそうだからこの学園には世界中からIS操縦者が集まってくるんだ」

「その最たる例がこのわたくし、セシリア・オルコットのような国家の代表候補生なのですわ」

そう胸を張って氷雨の前に躍り出たセシリアに氷雨は視線を向ける。原作知識などという先入観のない彼にとって、その姿は眩しく見えた。

「え、オルコットさんは国の代表の候補生なんですか。すごいですね」

素直に褒められてしまったセシリアは何故か少しの困惑を覚える。

「え、ええ。そうですね。わたくしはすごいのですわ!」

戸惑いながらも徐々に自信を取り戻し最後には高らかに宣言するその姿はまさに出会ったころの姿そのものであった。

「ですが、わたくしは氷雨さんに負けているのですわ」

「え?」

彼は驚愕する。それは以前の自分が国の代表候補になるような人物に勝利してしまふような凄い人物であつたなど、到底予想することはできなかつたからである。

しかし、その後に聞かされた試合の内容で彼の中の以前の自分に対しての評価は少し低いものになつた。当然、不意打ちのような勝ち方をしたからである。

「まあ、あの試合はうまいこと氷雨に踊らされたな」

「ええ。ですが、あの試合展開まで含めて氷雨さんの実力だとわたくしは思っていますわ」

だが、彼の評価に反して二人の評価は高かつた。どうしてそんな風に肯定するのか彼には分からなかつたが、二人にはその試合以外の氷雨が見えているからそのように評価するのだ。

「僕はシャルロット・デュノア。色々あってね、氷雨にはすごく感謝してるんだ」
「そうなんですか？」

彼は少し困惑する。第一声に感謝の言葉を述べられても、それは自分に向けてであつて、自分に向けられたものではない、何とも反応に困るものだったからだ。

「うん。あまり詳しくは言えないけど、氷雨は僕のために色々してくれたんだ」

シャルが男装して学園に入学した本当の理由は一夏と氷雨にしか明かされていない。なので、ここで多くを語ることはできない。

「それは僕の人生を大きく変えるくらい……それくらい大きな存在だったんだ、氷雨は」
以前の自分のことを聞かされ、彼は一層自分が分からなくなる。人から好かれて、代表候補生を超える力を有し、人生の転機を作ってしまうほどの大きな存在。

「……私とは、いったいどんな人物だったのでしょうか」

そんな独り言を呟く彼の心境は一気にお披露目された『氷雨』という人物像によつてかき乱されていた。

しかし、そんな彼の混乱もよそに最後の刺客が自己紹介と共に彼をさらに混沌へと誘った。

「私はラウラ・ボーデヴィツヒだ。私はお兄ちゃんとの戦いで救われて、お兄ちゃんの妹になった」

氷雨はその文字列に混乱した。理解するにはその言葉はよくわからないものだったのだ。彼女の視線からお兄ちゃんという単語が指す人物が誰なのかは予想がついていない。しかし、それはおかしいのだ。彼女の名前はどうか考えても日本人のそれではないのだから、彼女が妹であるというのはおかしい。それだけでなく、妹とはなるものなのかという疑問も生まれる。

彼は混乱する頭で恐る恐る確認する。

「その……お兄ちゃんというのは……どなたのことですか？」

それを受けたラウラは胸の前で腕を組み、堂々とした表情で宣言する。

「むろん、氷雨のことだ！」

「私という人物は、一体どういう人物なんですかあー！」

彼が氷雨を理解する道はあまりに険しかったのだった。

第二話

昼休みに一夏たちから語られた水雨という人物の断片を得た彼は午後授業中にそれらを整理しようと頭を抱えていた。

数ヶ月前に世界初の男性のIS操縦者が発見されたということは、私自身がISに触れた期間は3ヶ月にも満たないはず。そんな私が、何年も訓練を重ねてきた国の代表候補生よりも強いというのは、いささかおかしい話です。しかし、皆さんはそれに疑問を抱いていないように見えます。確か、織斑先生の話では私はこのISの開発者、篠ノ之東博士を姉に持つという話でしたが、それを根拠にその強さを納得するのは無理があるでしょう。同じ条件である籌さんは普通の生徒らしいですし……。

彼が引つかかったのはまず水雨という人物の強さだ。国の代表候補生というものがどれ程のものかを知らない彼であつたが、乗り始めて数ヶ月の人間が敵うはずがないと思うのだ。実際のところ、一夏というイレギュラーを除けばそんなことありえない。彼の考えは的を射ているのだ。だが、それは彼の持つ情報の範囲内での思考に過ぎない。故に彼が答えにたどり着くことはない。

そんな出口のない迷路に迷っている彼を見て、真耶ちゃんは少し慌てたような口調で氷雨を慰める。

「だ、大丈夫ですよ。ゆっくり、ゆっくりこの辺の内容も理解していけばいいですからね！」

「え？ あ、は、はい。すいません」

真耶ちゃんには彼が授業内容で頭を抱えているように見えたのだが、この時の彼は以前の氷雨同様、授業を聞いてはいなかったのだった。

◇ ◇ ◇

授業を終えた放課後に再び一夏たちは違和感に首を傾げていた氷雨の机に集まってきた。

「氷雨、授業はどうだった？」

一夏が彼に話しかける。

「さっぱりでした。ぼんやりとした知識はあるのですが、生憎山田先生がおっしゃる内容を理解するまでには至りませんでした」

「まるで入学当初の一夏のようなだな」

恥ずかしそうに言う彼の言葉に、妹の箒がフォローするように言う。

「確かに入学当初は俺もさっぱりだったからな」

一夏もそれを受けて懐かしむように頷きながら返すが、それを聞いたセシリアが笑みを浮かべる。

「あら、一夏さん。その言い方だと今は理解しているように聞こえますわ」
「え？」

思いもよらぬツツコミに一夏はセシリアの方に顔を向ける。

「そうだね。さっきの授業も氷雨みたいに頭抱えてたしね」

「なっ!？」

笑いながらシャルも便乗する形で追い打ちをかける。そんな二人に一夏は心外そうな顔をして抗議の目を向ける。

「俺だって頑張ってるんだけどなあ」

「貴様は教官の弟であるという自覚が足りていないのだ」

「ぐっ……」

ラウラに千冬の名前まで出されて一夏はうなだれる。そんな彼らのやり取りを見ていた氷雨はクスリと笑みをこぼした。

「あ、笑った」

その表情の変化にいち早く気づいたのは鈴であった。鈴の言葉を受けて彼は自分の笑みに気づき、手で口元を隠した。

「す、すいません。あまりに皆さんが仲良しなので、なんだか私まで安心してしまつて……」

彼の元が集まつた彼らは記憶のない彼によそよそしい態度を取らない。それが彼にとつては嬉しいことであり、自分を肯定してくれているようで安心感を覚えるのだ。

「別にいいのよ。氷雨とあたしたちはそんな気を遣うような仲じゃなかったんだから」

「そうだけ。むしろ笑ってくれてこつちが安心したぜ」

鈴の言葉にいつの間にか復活していた一夏が同意する。他の皆も言葉にはしないが、その表情から同じ気持ちであることが伺える。

「みなさん……ありがとうございます」

先ほどまで持っていた以前の自分に対する不信任は消えた。記憶を失つてなお一緒にいてくれる友人に恵まれている、それだけで彼の『氷雨』に対する不信任を拭うには十分なものだった。

「感謝されることでもありませんわ。それより、今日は氷雨さんの記憶を取り戻す手伝いをしたいと思いますの」

「記憶を取り戻す手伝い……?」

セシリアに彼は問い返す。それに対してシャルが答える。

「あのね。氷雨がなじみ深い場所に行けば何か思い出すんじゃないかと思つてね、これ

からみんなで回ろうって話になったんだ」

「皆で回った方が昔の話もできるし、何かを思い出すきっかけがあるんじゃないかと思っただけからな」

自分のために時間を割いてくれることを彼は嬉しく思った。鈴はその顔を見てする必要はないだろうと感じつつも、一応の確認を彼にした。

「どうする？ 気が進まないなら今日は見送ってもいいけど」

「いえ、せっかく皆さんが私のために時間を割いてくれるのですから断る理由はありません。とても嬉しいです」

言葉の通り、嬉しそうな笑顔を浮かべ、彼はその提案を承諾したのだった。



氷雨という人間を語る上で彼らが真っ先に出してくる特徴はその強さである。I Sの開発者である篠ノ之束の弟というアドバンテージを持っていることを差し置いても、彼と対峙した専用機持ちの彼女たちはその力に一目を置かざるを得ない。

故に一行が訪れたのはいつも放課後の特訓に使用していた第三アリーナであった。各々の専用機を展開した一夏たちを見て、氷雨は目を輝かせた。

「なんだかすごいですね。皆さん、かっこいいですね」

「そ、そうか？ なんか照れるな」

一夏は満更でもなさそうに氷雨の言葉に返す。しかし、他の専用機持ちは氷雨の新鮮そうな感想に改めて彼が記憶を失っていることを実感しているのだが、一夏はあまり気にしていない様子である。

「氷雨さんといえばその専用機、ペイルライダーを駆り戦う姿が印象に残っているうちでは一番ましですわね」

「そ、その言い方はどうかと思うけど……」

間違つてない、と続く言葉をシャルは飲み込んで苦笑いを浮かべる。

とはいえ、氷雨の専用機であるペイルライダーは先の襲撃に受けた損傷が激しく、さらにその修復作業を千冬によつて止められている状態とあつて使用できる状態にはないということもあり、氷雨の前には貸し出し用の打鉄が鎮座していた。

「まあ、確かに一番わかりやすい凄さだしね、あいつの」

鈴は手を組んで頷きながら同意する。

「あの、やっぱり私は、その皆さんの強そうなISに勝つたのでしょうか。どうにも私は信じられないのですが……」

彼がそう思うのは当然なのだが、そうは言われても事実は事実であるので皆、少し返答に困ってしまう。

「お兄ちゃんは強い。それをお前は疑問に感じる必要はない」

しかし、そんな疑問を口にする彼にラウラは真つ向から叩きつけるように断言する。少し敵意を含んだその言葉に彼は少し怯み、一步後ろに下がる。

「はいはい、そのくらいにしときなさいよ。ここに来たのはISに触れて、記憶を取り戻すきっかけを作るためでしょ。ケンカ腰になってどうするのよ」

そんな二人の間にさつと鈴が割り込み、ラウラから氷雨をかばう。生身の氷雨にとつてISを展開したラウラに迫られるのは恐怖でしかない。そんなことでは氷雨も積極的に記憶を取り戻そうと動いてはくれないだろう。

「……そうだな。悪かった」

そう言つてラウラは引き下がる。氷雨が氷雨を否定するという行為に少し感情的になつてしまつただけで、彼女は彼の記憶を取り戻すことに協力的ではあるのだ。

ISに対して少しの恐怖を覚えた彼であつたが、鈴に庇つてもらつてこの状況に少し情けなさを感じた。自身は生身で相手はISなのだから仕方ないことだと頭では理解しているものの心の端で鈴の後ろにいることを恥じる自分がいたのだ。

彼は鈴の前に出て打鉄に触れる。その光景を一夏たちは固唾を呑んで見つめる。彼が打鉄に触れてから少し経つた後、一つ息を吐きだし、彼は一夏たちの方に向き直つた。「これは、どうすれば乗ることができるのでしようか？」

張りつめていた空気はどこへやら。確かに記憶のない彼が何も教えられないままに

ISに乗るといふのは難しいだろう。なにやら以前の氷雨に似た空気を感じ取った一夏が嬉しそうに笑いながら氷雨の方に近づく。

「そりやそうだよな。俺ら何も教えてなかったしな。よし、俺が乗せてやるよ」
「助かります」

そうして一夏が氷雨を抱えると、アリーナの出入り口の方から声が聞こえてきた。

「織斑、篠ノ之を下ろせ」

その声の主は千冬であった。どこか焦りを感じさせる千冬の表情を感じ取った一夏はすぐさま自分の行おうとしていた行為、つまり、氷雨を打鉄に乗せようとする行為をやめた。

千冬がそのように言うのだから一夏は分かった。今の氷雨をISに乗せるという行為はしてはいけないものなのだ。しかし、それがどのような理由によるものなのかは測り知ることとはできない。それは一夏だけでなく他の皆も同様である。

「教官、なぜISに乗せることを止めるのですか。ISに乗れば、お兄ちゃんの記憶が戻る可能性があります」

「ダメだ」

ラウラの反論を千冬は一蹴する。千冬のその眼は鋭く、ラウラは少し怯んでしまう。しかし、同時にそれほど重大な理由がそこにはあるのだということもラウラは理解す

る。理解したので、それ以上ラウラは何も言わず、おとなしく下がるのだった。

「氷雨、今から私の部屋に戻るぞ」

「え……。で、ですが、みなさんが……」

「お前の記憶が戻るにしろ戻らないにしろ大事な要件だ。悪いが明日にしてもらえ」
千冬にそう言われると、申し訳なさそうな顔を一夏たちに向ける。

「すいません。皆さんの貴重な時間を割いてもらったのに……」

「気にすんなって。困った時はお互い様だろ？」

一夏が笑ってそういうので、気が楽になった彼は穏やかな表情を浮かべる。

「ああ、それと鈴も今日はもういいぞ」

千冬が鈴に向かってそういうと、鈴は頷いた。

こうして記憶を失った氷雨は千冬の部屋に向かうこととなった。

そして、そこに待ち受けていた人物とは……

「ひいくううううん!!」

篠ノ之束。この物語の元凶である人物であつた。

第三話

「ひいくううううん!!」

突然抱き着かれた氷雨はそのかけられた体重に耐えきれず廊下に束と共に倒れ込んでしまった。

「え、ちよ、ちよつと、なんですか?」

「久しぶりだね、ひーくううん!」

戸惑う氷雨をしり目に束は氷雨から離れない。そんな束の首根つこを掴み、氷雨から引つpegがした後、代わりに千冬が氷雨の間に答える。

「お前に来てもらったのは他でもない。こいつに、篠ノ之束に会ってもらうためだ」

それを聞いてようやくと氷雨は理解する。この人が、ISの開発者であり、自分の姉である篠ノ之束であるということ。

「あなたが……」

「そう! 何を隠そうこの私が天上天下、人類史上最も天才な束さんだよ!」

「は、はあ」

その要領を得ない自己紹介に気のない返事をする。千冬も頭を抱えてる様子だった

が、大まかなところでは間違つてはいないので訂正はしなかった。

「そ、それで、東さんは……」

「東姉」

氷雨の言葉にかぶせるように、東は少し低い声で言う。

「東さんのことは、東姉と呼ぶんだよ？」

その言葉に少し氷雨は背筋にぞくりと冷たいものを感じた。笑つていようにも見えるその細めた目にどこか鋭さを感じ、鼓動が早くなつた。

「た、東……姉」

「うん。どうしたのー？」

氷雨が言われた通り名前を呼ぶと東は先ほどの威圧が嘘だったかのように穏やかな笑みを浮かべていた。それに戸惑いつつも、氷雨は遮られた疑問を東に伝えようとする。

「東姉……はどうして、ここにへ？」

その質問に東が答える前に千冬が東の首根っこを掴み氷雨から引きはがす。

「それについてはここではなく私の部屋でもらおう。廊下では誰かに見つかるかもしれないからな」

その千冬の言い回しに氷雨は少し疑問を抱く。それではまるで、東と会うということ

が見られては困ることのようであるからだ。実際のところ困るのだが、今の氷雨にその疑問は束に対しての不信感を抱かせるに十分なものである。

「はい。解ったからちーちゃん、放してよー」

そんな風と言う束の言葉を無視して千冬はそのまま部屋に入っていく。束がどういう人物か、いまいち掴めず戸惑う氷雨だったが、ここから逃げるといふ選択肢はとても困難なものであるので、続いて部屋の中に入るしかなかった。



千冬の部屋

部屋に入ると束はおもむろにベッドへダイブした。そのままゴロゴロと転がる束を見て、氷雨は自身の抱いていた警戒心がなんだか無駄なもののように感じて、肩に入っていた力を抜いた。

「お前はそこの椅子を使え」

「あ、はい」

「ねー、ちーちゃん。束さんはコーヒーが飲みたいなー」

「……お前は何をしに来たんだ」

「えー、蒼騎士ちゃんの治療とひーくんの記憶についての話でしょ？ 蒼騎士ちゃんの治療はすぐに終わるけど、ひーくんの記憶の話はちよつと時間かかるもん。飲み物くら

いほしーなー」

なんとも子供のような言動を取る束。しかし、千冬はため息を吐きつつも束のわがままに従い、コーヒーを淹れる。

「篠ノ之もコーヒーでいいか」

「あ、はい。ありがとうございます」

差し出されたカップを受け取り、氷雨は口をつける。千冬が入れたコーヒーは苦味が少なく酸味の強いタイプの豆らしい。

「それで、蒼騎士ちゃんは？」

コーヒーに口をつけつつ束は千冬に尋ねる。それに応える千冬は懐から待機状態のペイルライダーを取り出し束へ渡す。受け取った束はそれを待機状態から展開し、状態を確認していく。

「誰にも触らせてないよね？」

「ふん。当たり前だろ。この中身が公表されてみる。また騒ぎが起きるだろう」

千冬の言葉に氷雨は驚いた表情をする。彼にしてみれば、このペイルライダーというISは自分が記憶を失った事件に関わっていたモノという認識。その中身に世間を騒がせる何かがあると知れば、疑惑の眼差しを向けるのは当然のことである。

「ふつつつぶ。ひーくんはこの蒼騎士ちゃんの事が気になるようだね」

「そ、それは、当然です。私は私の過去を知らないのですから」

「うーん、じゃあ、手短に蒼騎士ちゃんのことを話してあげよう！」

嬉々として話し出す東に少しじろぐ氷雨であったが、その様子を気にする素振りもなく彼女は話し出す。

「この蒼騎士ちゃんは私が作った2つのプロトタイプの内の一つでねー。このプロトタイプって言うのが重要でね、最初の搭乗者の情報を元に起動時のプロテクトを構築したんだけど、今世界に巡回ってるコアは全部もう一つのプロトタイプ機がもとなっていて、その最初の搭乗者がちーちゃんだったから女しか乗れないわけでねー」

そんな風に説明しながらも、自身の周囲に展開された多機能アームを動かしペイルライダーの修理を進めていく。彼女の頭の中で、どれ程の情報が処理されているのか、傍から見ている氷雨では推し量ることはできなかつたが、それが常人では不可能なことであろうことはなんとなく察することはできた。

「だから、ひーくんが乗れるISはこの蒼騎士と……白騎士だけだよ」

そう言った東の顔はどこか含みを持ったように受け取ることができたが、千冬の咄めのような視線を受けて、東はそれ以上を言おうとはしなかつた。

「そんな特別製の蒼騎士ちゃんだからね。そのコアを触られると今のISの前提が覆されちゃうんだよー」

「前提？」

氷雨が問いかけると、東は意地の悪そうな笑みを浮かべる。

「そう。女しか乗れないって言う、女尊男卑の社会を作った前提がね」

しかし、前提が覆され混乱した世界になることは、それはそれで面白そうだ、とその笑みは語っている。それが篠ノ之東という人物であり、天才が天災たる所以であろう。

「そういうわけだ。今後、ISに関わる時は気を付ける」

「は、はい」

千冬の言葉で話が締められると同時に東の正面に鎮座していたペイルライダーが量子へと変換され待機状態になる。

「はい、終わったよー」

東から手渡されると、氷雨はそれを受け取りまじまじとそれを見つめた。

「これは？」

「ん、チョーカーだよ。せっかくだから待機状態のアクセサリも変えてあげたよ」

悪意のない笑みを向けられた氷雨は少し引きつった笑みを返し、視線を手元へと向ける。チョーカー、言ってしまうえば首輪である。ペットなどへの主従関係を明らかにするために用いられるそれをつけることに少しの抵抗を覚えた氷雨であったが、東にそういう意図がないようなので抵抗するのもおかしいような気がし、それを首にはめた。

「さてさて、後はひーくんの記憶に関してだね」

彼にとつてはこれが本題であろう。彼の記憶、それに関しての情報を彼女が握っているのであれば、当然彼は欲する。

「H A D E S システムの使用に伴って限界まで情報処理を行った負荷から記憶がなくなったって言うのは本質的ではないね」

そう前置きをしてから束は話し始める。

「ひーくんは自身の意識の全てを投げ捨て、脳を戦闘中の情報処理にあてた。それは脳の思考を司る部分に留まっていたけど、激化する攻撃がついにその処理能力すら上回った時、どうなるか」

どこか楽しそうに語る束。

「コンピューターがマルチタスクを思考するとき、使用するのはメモリだけ。じゃあ、そのメモリの処理能力を上回るタスクをしなきゃならなくなったらどうする？」

束は氷雨を指さし、回答を仰いでくる。突然振られたその質問に氷雨は少し考え答える。

「えと、メモリを増設するのではないでしょうか」

「正解！ 流石ひーくん、当事者だけあるねー」

茶化すような言葉に千冬が目つきを鋭くさせるが、それを機に止める様子もなく束は

続ける。

「足りないなら増設すればいい。意識もなくなつて、生命維持も最小限にして情報処理を行つていたひーくんの脳の中で増設できる部分はどこにある？」

そこまで来ると氷雨にも理解できた。その答えが自身の記憶喪失と関係しているというのならば、必然的につながる。

氷雨の表情から察した束は満足そうな表情をする。

「そう！ H A D E S システムはね、足りないと思つたからひーくんの記憶を司る領域に侵入してメモリを増設、その時に不要だと判断された記憶を消去したということなのだ！」

束は興奮気味に話す。それは誰かに聞いてほしかったからだ。自分が得た、研究成果を。自身が製作したH A D E S システムがどれ程素晴らしい結果をもたらしたかを。それは研究者としての欲求。天才が自分を認めてほしいと思う自己顕示欲。ただ、共有したいだけ。彼女の中の興奮を、知的欲求が満たされた喜びを。しかし、それを周りは受け入れない、受け入れられない。ある者は驚愕し、ある者は怒りを覚える。それが天才。周囲に受け入れられないはずれた感性は排斥されるしかないのだ。

「束、もういい。帰れ。外まで送ろう」

「えー、ここからが良いところなの。H A D E S システムにはね、擬似的な展開装甲

の発現効果もあつてねー」

「いいから、表に出ろ」

束の言葉を遮るように千冬は言う。低く、胸元にナイフを突き立てられているかのような鋭い声。常人ならまともに返事もできないだろう千冬の声に、束は笑顔を張り付けたまま返事をする。

「ちーちゃんがそこまで言うなら仕方ないなー。じゃあ、またね、ひーくん」

そう言つて二人は部屋から出ていく。残された氷雨はその言葉に返事もできず、ただただ呆然と束を目で追うことしかできなかつた。



学園の外

日も落ちて、活気のなくなった校舎。宵闇にふさわしい静寂の中に一つの衝撃音が走る。

「どういうつもりだ、束」

声を荒げることもせず、束を見据える千冬が放った拳は何もない空間に阻まれ、止まる。

「さすがちーちゃん。PICじゃ止まらないんだね」

千冬の拳を阻んだものはISに搭載されているシールドバリアーであつた。千冬は

拳を戻し、腕を組み、束を見据える。

「氷雨の手前言わなかったが、あの事件はお前が起こしたものだろうか？　自分が何をしたらわかってしているのか」

「私じゃないよー。……つていう言い逃れはあのゴーレムを回収された時点でできないよね」

回収されたゴーレムからわかることは、あの襲撃が無人機によるものであるということだ。そして、現時点で無人のＩＳを作ることができるのは彼女しかない。それが分かっているから束はあえて否定はしない。

「答えろ、束」

「私はひーくんに群がる悪い虫を駆除しようとしただけだよ？」

束は悪びれる様子もなく答える。

「ちーちゃんは、ひーくんが外交カードになってもいいつていうの？」

「そうは言つてないだろう。それに、そうだとしても人を殺すことが正しいことだともっ。」

「正しい？　正しいかどうかは問題じゃないよ。問題なのは結果だよ」

その言葉はこれまでの束の行動の根底にあったものを表していた。彼女の中に善悪を区別するものはない。彼女の起こした行動が正しかろうが間違つていようが、それが

成した結果だけが彼女の中で価値のあるものなのだ。当然、それを千冬は肯定しないが、否定することもできない。なぜなら、その片棒を担いでいた過去があるからだ。

しかし、仮にその理論を受け入れたとしても、今回の顛末のどこに肯定できる部分があるだろうか。

「なら、この結果はお前が望んだものなのか？ 氷雨を危険に晒し、剩え記憶を失わせるという事態を」

千冬の言葉に、彼女は少し怯む。確かに彼女の中に罪悪感はあるのだろう。それが意識的であれ無意識下であれ……。でなければ、言葉に詰まることもないだろう。しかし、それを覆い隠すように、意識しないように、彼女は仮面のように笑みを浮かべる。

「H A D E S システムのデータも取れたし、記憶を失うことで中国のハニートラップも回避できた、この結果のどこにちーちゃんは不満があるの？」

狂気に満ちたその仮面の裏にある何かを千冬は感じ取れただろうか。それに同情したのか、はたまた気付くことなく呆れ果てたのか。彼女はそれ以上の問答を要求せず、束に背を向ける。

「お前がどう思おうと構わんが、鈴はそんなに弱い奴じゃないぞ」

千冬の言葉は鈴を高く評価しているから出てきた言葉だった。

記憶を失った氷雨を見ていれば、嫌でも思い出すだろう。あの日の無力だった自身の

ことを。それでも、氷雨の側にいて支えようとする鈴がどれ程の覚悟を持っていたか。そんな鈴のことを思えば、千冬は束に言わずには言えなかつたのだ。でないと、鈴が報われない気がしたのだ。

「そうだね」

しかし、その言葉を受けた束はさも当然のことだと言わんばかりに肯定を口にする。

「知ってるよ。記憶がなくなったのに未だにひーくんの隣にいたことも」

予想に反した返事に千冬は思わず束の方を振り返る。しかし、すでにその場に束は居らず、静寂だけがその場に満たされていた。

束の言葉に千冬は胸騒ぎを覚えた。嫌な予感がするのだ。

「ワールド・ページ」

それはどこかで響いた、小さく、しかし確かな絶望の言葉であった。

第四話

氷雨が千冬に連れていかれた後、一夏はせつかくだから最近行っていないかつた特訓を再開しようと提案してきた。その提案に箒やセシリア、シャルは賛成だったが、そもそも参加していなかった鈴とラウラは参加せず、アリーナを去つた。

ISのスーツから制服へと着替える間、二人は言葉を交わさなかつた。どことなく気まずさを感じていたのだ。いつもならそんなことはなかつた。しかし、今はいつもいたはずの氷雨が二人の間にいない。そんな些細なところにも、彼の存在はあつたのだ。

着替えを終えた二人は寮へと歩き始める。その道中で鈴は口を開いた。

「ねえ」

語りかけるも、視線は交わらない。それくらいの距離感が、どうしてかそこにはあつた。

「どうしてあんなこと言ったのよ」

それは責めるような口調ではない。純粹な疑問から来たのだ。ラウラは賢い人間だと鈴は知っている。氷雨と一緒にいる時は子供っぽさが先行しがちだが、今の氷雨がどういう心情であるかを分からない人間ではない、と。だから、先ほどの言動が気になつ

たのだ。

ラウラはすぐに返事をしなかった。それは言い淀んでいるという感じではなく、何かを思い返していると言った様子であった。

「お兄ちゃんは、私の過去を否定しなかった」

どこか寂しげな声でラウラは答える。

「忘れても、その過去が今の私を、これからの私を支えてくれるのだと、そう言ってくれたんだ」

それはVTシステムの暴走時にラウラに手を差し伸べた氷雨の言葉である。彼女にとってこの言葉が彼との絆であり、『氷雨』なのである。

「その言葉を、否定されたような気がしてしまつて……」

その口調から悔いていることが伺える。衝動的になつてしまつたのであろう。それを抑えるには少し彼女は幼かつたようだ。

そんな彼女の言葉を聞いて鈴は納得した。氷雨に『氷雨』を否定されるなんて、とても耐えられるものではないだろう。

「そう言うことね。気持ちには分からなくもないけど、あいつもあいつで辛い状態だからね。そこは分かつてあげなさいよ?」

「当然だ。もう、あんなことは言わない」

素直なラウラに鈴は少し安心して、頭を撫でる。そんな鈴の行動に少し驚いたラウラであったが、悪い気はしないのかそれを咎めることも止めることもしなかった。

「お兄ちゃんの記憶は戻らないのだろうか……」

鈴は答えることができなかった。

「またこんな風に、頭を撫でては……貫えないのだろうか」

ラウラの声は震えている。氷雨が目を覚ました嬉しさも、次第に記憶がないことの悲しきで薄れていき、気づき始めるのだ。欠落した、日常の断片に。

鈴は慰めるように、より強く頭を撫でる。それは、鈴の部屋の前につくまで続いたのだった。



ラウラは鈴と別れて一人、廊下を歩いていった。去り際の寂しそうな表情に鈴は気づいたが、それに付き合えるほどの余裕は彼女にはなかった。

角を曲がりラウラの姿が見えなくなると鈴は一つ大きな息を吐いた。他人の感情に触れてしまったから、自分の中で蓋をしていた感情が溢れそうになってしまったのだ。再び大きく息を吐き、鈴はそれを呑みこむ。ここで零せば、ルームメイトのティナに要らない心配をかけてしまいかねない。

落ち着きを取り戻した鈴は扉に手をかける。その時、彼女の視界の端に見慣れない影

が映る。

そちらに視線を向けると、そこに立っていたのは凜とした佇まいで、どこかラウラと似た雰囲気を持つ少女であった。

少女の瞳は閉ざされているものの、その意識は確かに自分に向けられていると感じ取った鈴は彼女に問いかける。

「あんた、誰？」

その問いを受けても少女は名を返してこない。その問答は彼女にとって必要ではないからだ。

「あなたは篠ノ之氷雨の何ですか？」

突然の問いに鈴は戸惑う。この少女は誰なのか、なぜそんなことを聞いてくるのか。明かされた情報は少女が氷雨を知っているということだけ。そんな怪しげな少女に深く刺さる問いを投げかけられる。この状況で冷静にいられるわけがない。

「なんなのよ、あんた」

再びの問い。しかし、やはり少女が答えることはない。

「あなたは氷雨と結ばれるべきではない」

代わりに返ってきた言葉は鈴の中から戸惑いを追いだした。しかし、冷静になれたわけではなく、今度は怒りが彼女を満たした。

「あんたに何が分かるのよ！」

声を荒げる鈴に少女は物怖じすることなく、鈴に言葉を投げかける。

「政府と繋がるあなたと、政府に触れられてはならない氷雨。交わることは許されない」その言葉に鈴の怒りは急激に萎んでゆく。鈴はその少女の意味するところが分からないわけではなかった。当然である、氷雨は世界でたった二人の男性操縦者である。国と繋がるということがどういふことなのかは分からないわけではない。しかし、それこの少女が言う理由が分からないのだ。

「あ、あんた、一体……」

少女は少しの間顔を逸らし、何かを確認するかのような素振りを見せてから鈴の方へ向き直った。

「そろそろ時間ですね」

そう呟くと、彼女は手に持つ杖を少し前に掲げた。

「あなたはどちらかを捨てなければならぬ」

閉じていた瞳を少し開き、その焦点の定まらない瞳が鈴を射抜いた。

「願わくば、叔父さんの望む結果であってほしいですが」

「ちよ、それって、どういふ……」

しかし、鈴の言葉は途中で遮られる。いや、遮られるという表現よりは紡げなくなっ

たと言った方が正しいだろう。

「ワールド・ページ」

その言葉と同時に鈴の体が崩れ落ちたのだから。

◇ ◇ ◇

千冬の部屋

嵐の去った部屋の中で、記憶を失った氷雨が項垂れていた。それは精神的疲労から参ってしまったからだろう。

記憶喪失。

多くの場合は次第に記憶が戻ってきたりする。それが断片的であったり、不完全であったり、個人差はあるものの、記憶は意識の奥底に眠っているのだ。

しかし、彼は違う。束の説明では記憶を消したというのだ。これでは思い出す思い出がそもそもないではないか。

彼は知っている、いや、知ってしまったている。氷雨という人物の帰りを待つ人たちの期待を。彼らが望むのは今の自分ではない。彼らの記憶に存在する『氷雨』という人物なのである。彼らの期待に応えたいとは思ふ。彼らが良い人であることはなんとなく分かる。だが、それは叶わないのだ。

そんな風になっていると、氷雨は不思議な感覚に襲われた。この部屋には誰もいないは

ずである。しかし、どこからか自分に語り掛ける声が聞こえた……いや、聞こえたわけではない、感じたのだ。

「誰かいるのですか？」

そんな風に問いかけるとやはり発生源の分からない声が聞こえた。

『初めまして』

それはシステム音のようであり、しかし、どこか人間味のある声であった。その声の主の居所を探るように氷雨は視線を右へ左へ動かすが、そこに映るのは誰もいない空虚な部屋だけであった。

「あ、あなたは誰ですか？」

その問いに声は答える。

『あなたの道を切り開く剣、ペイルライダーです』

自身の専用機の名を名乗る声に氷雨は戸惑う。

『行きましょう』

しかし、唐突にその声は氷雨を駆り立てようとする。どこに？ そんな氷雨の疑問に答えるように、ペイルライダーは続ける。

『あなたがあなたたらん為に』

それは確かな回答ではなかった。だが、その言葉は彼が求めていたものであった。

第五話

鈴は目を覚ました。どうやら自分は意識を失っていたらしいというのを覚醒した。頭で理解した。しかし、目を覚ました場所は寮の廊下ではなかった。

「自販機……?」

そう、ここはアリーナの近くにある休憩所である。ずらりと並んだ自販機の中にはおそらく購入者が限られているであろう飲み物も置いてあった。

「あ、これ、氷雨がよく飲んでたやつじゃない」

一口飲んでみたことはあるも、鈴はお世辞にもおいしいとは思えなかった。しかし、それを嬉々として飲んでいた氷雨の表情が思い出されて彼女は自販機のボタンを押した。取り出し口からドクターペッパーを取り出し、口をつける。こくり、と喉を鳴らし、一口飲みこむとすぐに口を離す。

「やつぱりおいしくないわね」

そう言って少し笑う。残りを捨てるわけにもいかないのです。少しずつ口に含み飲み込んでいく。長椅子に座りながらそんな動作を繰り返していると、向こうの廊下から誰かがやってくるのが見えた。

そちらに視線を向ける。それは見慣れた人物であった。

「あれ、鈴ちゃん？」

その言葉に鈴は驚いた。驚き、そして、それを理解したときにはすでに頬に涙が伝っていた。

「ひ、氷雨……」

「ど、どうしたの、鈴ちゃん!？」

そこに居たのは氷雨だ、間違いなく。

「氷雨っ!」

しかし、正しくもなく……。



千冬の部屋

氷雨が聞いた声の正体。それは専用機であるペイルライダーのものであった。

「そ、それで、私はどこに行けばいいのでしょうか」

『今すぐ鈴の元へ向かいましょう』

ペイルライダーは間髪を入れずに氷雨の問いに答える。

「嵐さんのところ……ですか？」

『はい』

唐突に出てきた鈴の名前に首を傾げる。しかし、ペイルライダーは何故鈴なのかを説明しようとはしなかった。鈴が彼にとつてどういう存在かを知ることが別段重要なことではないからだ。

『鈴は今、クロエと接触中です』

クロエという名前に氷雨は覚えがない。しかし、ペイルライダーが名指しするのだから知り合いだったのだろうと理解した。

「そのクロエという方と、嵐さんが接触していることに何か問題があるのでしょいか」
『急がなければ、取り返しのつかないことになります』

氷雨は一瞬どういふことかわからなかった。何故二人が出会うことで取り返しのつかない事態になってしまうのか。しかし、それを理解できないまでも、鈴に危険が迫っているということだけは呑みこむことができた。

「た、大変じゃないですか！ 早く、嵐さんの元へ向かわないと！」

氷雨は急いで廊下へと出る。しかし、鈴の元と言ったはいいが、どこにいるかの当てもない。せめて、鈴の部屋の間所を聞いておけばよかつたと、後悔した彼であつたが、どうしてか彼の足は迷うことなく動いていた。

氷雨は戸惑う。自分は鈴の部屋を知らないはずだ。しかし、どうだろうか。今自分の足が向いている方向に、鈴の部屋があるという確信が今、彼の頭の隅には存在するのだ。

思い返せば、不思議なのはそれだけではない。鈴の身が危ないと聞いて、衝動的に走り出したのは何故なのか。本来ならば、単身で駆け付けようなどと思うだろうか……。

しかし、そんな疑問も次第と湧いてこなくなる。どうでもよくなるのだ。今はただ、鈴の身を案じる気持ちで胸が満たされているからだ。

「凰さんっ！」

廊下の角を曲がる。そこで見たのは倒れ込む鈴と、もう一人の少女の姿であった。

先ほどのペイルライダーの話からその少女がクロエであろうことが分かる。少女はこちらに顔を向ける。

「何をしたんだ！」

そう叫んだ氷雨を見て、クロエは興味深そうに閉ざされた瞳を氷雨に向ける。

「まだ『少し』と言ったところでしょうか」

クロエの言葉に氷雨は眉を顰める。

「どういう意味ですか！」

「やはり彼女は必要でしたね。分かりやすい人で助かりました」

クロエの言葉は氷雨との会話ではなく、独り言に近いものだ。そんな言葉たちは氷雨に奇怪な印象を彼女に持たせる。それが近寄り難さを氷雨に感じさせ、鈴の元へ駆けようにも、できなくさせていた。

「ああ。私がいてはやり難いですね」

どこか引つかかる物言い、彼女は姿を消した。いや、正確には氷雨には見えなくなつたと云つた方が正確である。

「それでは叔父さん、また会いましょう」

そんな捨て台詞を残し、クロエはその場を去つた。そして、氷雨は鈴の元へ駆け寄る。
「凰さんっ!」

肩を抱き起こし、鈴の安否を確認する。

「よかつた。息はしています」

そして、生存を確認すると氷雨は安心する。だが、ペイルライダーがそれを否定する。
『鈴は現在ワールド・パージによる精神攻撃を受けています。このままでは意識は戻らないでしょう』

ペイルライダーの言葉に氷雨は驚愕し、慌てる。

「ど、どうすればいいんですか!?!」

その問いに、ペイルライダーは答えを返すのではなく、問いを返す。

『どうしたいですか』

その言葉は簡潔で、しかし、今の氷雨にとって鋭いものだった。

「……」

氷雨は考え込む。

1 凰さんを助けない

2 自分の手で凰さんを助けない

そうだ。先ほどから自分はおかしい。冷静さを欠いているのも原因であるだろうが、それだけでは説明できない。

少し前までの自分にはなかった感情だ。しかし、どうしてか湧き上がってくるこの気持ち。これが偽りの気持ちであるわけがない。ならば、この感情を否定することはできない。この衝動に正直になること、それが……

「私が、私たる為に……」

今、私がしたいと思うことなんだと。

「私は凰さんを、私の手で助けない」

それは声に出してみると、簡単なことだった。簡単であるが故に重要だった。

『分かりました。では、参りましょう』

ペイルライダーがそう告げると、氷雨の体は抱きかかえた鈴と共に廊下に倒れる。氷雨は向かったのだ。鈴が待つ、理想郷へ。

◇ ◇ ◇

自販機で買った飲みきれないドクペを片手に鈴と氷雨は長椅子に並んで座っていた。びつくりしたよ、鈴ちゃん突然泣き出すんだもん」

泣き止んだ鈴に笑顔を向ける氷雨。

「うるさいわね。元はと言えば、あんたが悪いんじゃない」

そんな鈴の言葉に氷雨は謝罪しつつも、どこか嬉しそうな笑顔を見せる鈴を見てつられて笑顔になる。

「そう言えば、僕たちが最初にあったのってここだったよね」

「あーあの時ね」

それは鈴がこの学園にやってきた初日のことだった。

「あの時からそうだけど、あんたってデリカシーなかったわよね」

「その節は本当に申し訳ないと思っっています……って、進行形!?! 僕ってそんなにデリカシーないかな?」

心外そうな表情をする氷雨であったが、鈴は構わず続ける。

「ないない。あんたも一夏も、乙女心つてもものが分かってないのよ」

「い、異議あり！ 一夏と同列で語られたくはないよ、僕！」

「その異議は認められないわね」

「がーん！」

鈴の言葉に氷雨は項垂れる。本当に落ち込んでいるようにも見えるが、鈴は氷雨の切り替えの早さを知っているのであえて慰めるようなことはしない。

「それで、仲直りしたのもここだったわよね」

「仲直り……ていうのかな、あれ？ 結構一方的な謝罪だった気もするけど」

そんなことを本人が言うのだから少し面白くて鈴は笑う。

「まあ、でもあたしはここで許したのよ。でも、正直関わりたくないとは思ってたけどね」

「ひどくない!？」

「どつちが？」

「……僕だねっ！」

潔く宣言する氷雨だったが、自分の言葉に「あれ？」と首を傾げた。

「あんたはいつも一生懸命だっただけなのよね」

振り返ればいつもそうだ。氷雨は全てにおいて一生懸命であった。時に方向を間違え、時に度を超えてしまっても、それは全て悪意のない全力を向けた結果だったのだ。

故に危惧していたのだ。いつか怪我をするのではないかと。

「だから、責めるのはお門違いだって、分かっているのに……分かってたのに」

鈴の頭をよぎるのはあの日の氷雨だ。自分の前でゴーレム三体と対峙し、自分の限界も顧みず守ってくれた彼の姿だ。

顔を見られたくなくて鈴は俯く。

「心配かけないって……約束したじゃない」

それは指切りした約束。

「……」

氷雨は黙って鈴の頭を撫でる。

「心配かけて、ごめんね」

氷雨は鈴に謝る。そして……

「もう、あんなことしないから」

そう言って、自分を否定したのだ。

「違うっ!」

その声はどこからか聞こえた。

二人は驚いて声のした方へ顔を向ける。二人の視線の先にいたのは氷雨だ。コアネットワークから鈴が取り込まれたワールド・ページの世界へと辿り着いた氷雨だ。

「私なら……、氷雨なら、そんなことは言わない!」

彼にとつて、氷雨という人物は自分とは別の人間である。しかし、ここに来るまででこれだけは理解できた。

「凰さんを守るといふ行為を、否定なんかしない!」

その言葉で鈴は目覚める。ここが現実ではないこと、そして、隣にいる氷雨が本物ではないことを。

「だとしてもっ!」

不意に鈴の体は宙に浮く。そして、気づけば鈴は鳥かごの中に囚われた状態になる。

「凰さんっ!」

「氷雨っ!」

鳥かごはワールド・ページが作り出した虚像の氷雨の後ろに移動する。

「鈴ちゃんを守れるのは僕だけだ! 決してお前なんかじゃないっ!」

そうやって、虚像は専用機を展開する。

「もう鈴ちゃんを危険な目には合わせない。ここが、ここだけが全てから鈴ちゃんを守れる理想郷だ！」

両手にビームブレードを持ち、虚像は切っ先を氷雨に向けて言い放つ。

「鈴ちゃんを連れ出したければ……僕を倒して、証明してみろ！　鈴ちゃんを、守れるとっ！」

「望むところです！」

展開されたペイルライダーに包まれ、氷雨は虚像と対峙する。自分であるはずのそれは、とてつもなく強大に見えた。

第六話

対峙してみて初めて昼に一夏たちが言っていたことを彼は理解した。専用機に身を包んだ虚像が以前の自分と同じだというのなら、彼も一夏たちと同じことを思うだろう。

「勝てる気がしないのですが……」

『何を弱気になつて居るのですか』

その圧倒的な存在感に一種の畏怖さえ感じる。それほどまでの圧力が虚像でありながらも、その氷雨にはあつたのだ。

虚像が先に動き出す。接近を許せば、舞いを原型とした剣技が氷雨を襲うだろう。それをさばき切る術を彼は有していない。であれば、距離を取るのが道理だ。

しかし、彼はそれに立ち向かうように一步踏み出した。

「う、うわああー！」

気合を入れる咆哮か、はたまた悲鳴か。どちらともとれる叫びと共に、氷雨はでたらめに剣を振るう。

しかし、それは牽制の役割も果たさず、虚像の剣技に呑まれ、虚像の剣は彼の四肢を

切りつけてゆく。

「ぐう……」

痛みに顔を歪める。それもそのはず。ここはコアの内部に生成された世界。そこに干渉する氷雨は精神のみである。故に、ここでは展開されているペイルライダーのシールドエネルギーは氷雨の精神力に置換されているのである。

『虚像の剣技に吞まれつつあります。いったん距離を取りましょう』

「りよ、了解！」

足元に六連ミサイルを放ちつつ後方へ下がる。虚像は危険を冒すことなく下がる氷雨を見送る。

氷雨は荒く息を吐きだし、呼吸を整えようとする。体は思ったよりも動く。しかし、彼の頭がペイルライダーの動きについていけない。自分の目算よりも一歩先に体が到達してしまうのだ。

虚像の剣は素早く、そして一連の剣線が途切れることなく一つの流れのように綺麗に線を結んでいる。それを防ぐことなど、氷雨には到底できることではないだろう。

「でも、いいんです」

「？」

虚像は氷雨のつぶやきに怪訝な顔をする。

「それで、いいんですー！」

呼吸を整え、氷雨は再び虚像と対峙する。先ほどまでの畏怖は少し消えた。対峙するあれは自分なんだと、自分に怖がるなんて馬鹿らしいと、そう思えたのだ。

「胸を借りますよ、氷雨！」

「男の僕に、胸はない!!」

二人の氷雨が再びぶつかり合った。

◇ ◇ ◇

「ここが、コアの中ですか」

コアの中に侵入した氷雨はいつもと変わらない学園内の風景に少し困惑気味であった。

『正確にはコア内にワールド・パージが生成した世界の中です』

「そうなのですか」

ペイルライダーの補足に氷雨は返事をする。以前のラウラの時と違い、今回のコア侵入はペイルライダーがサポートにつけている。

「私はどうすればいいのでしょうか」

『ワールド・パージはコア内に精神を縛りつけます。鈴を縛っている要因を倒せば鈴は元に戻ることができます』

その説明を受けて、氷雨は理解した。となれば、次に必要な情報はその要因と鈴の所在である。

『鈴の所在は不明。しかし、要因については明確です』

「そうなのですか？」

氷雨は喜ぶ。情報があればどうすればよいかも考えられるというものだ。しかし、ペイルライダーの答えは予想外のものであった。

『あなたです』

その回答に氷雨は驚き、脳内に直接語り掛けられているにもかかわらず、斜め上の虚空に視線を向ける。

「どういうことですか？」

その疑問はもつともなものであるが、ペイルライダーの意図するものと、氷雨が認識したものは少し違ったものであった。

『正確には記憶を失う前の氷雨です。それも実際ではなく、鈴の記憶をもとに造られた偽物です』

そこまで伝えられて初めて氷雨は理解する。しかし、縛る者が氷雨であるということに少し引っかけりを感じた。

「あの、ペイルライダーは以前の私を知っているのですよね？」

『そうです』

「でしたら、教えてほしいのですが……」

その質問は今更なような気もするが、しかし、重要なものであった。

「嵐さんは私にとつて……いえ、氷雨と嵐さんはどういう関係だったのでしょうか？」

少しだけ、ペイルライダーは黙る。その沈黙に何かあるのかを氷雨は計り知ることができなかつた。

『氷雨と鈴は友人関係でした』

それは氷雨の期待していた答えとは違っていた。しかし、ペイルライダーの言葉はそこで終わらなかつた。

『ですがその実、二人は両思いでした』

そこまで来て、氷雨は納得した。そして、自分の胸に抱きつつあること感情の出所に気づいた。

「そこまで聞いてはつきりしました」

氷雨は視線を前に戻し、歩き出す。

「ペイルライダー、実は私、嵐さんに対して好意ともいえる感情を持っているんです」

そう言いながら氷雨は進む。その足取りはまるで行く先を知っているかのようにしつかりとしたものだった。

「正直に答えてもらって構いません。いえ、貴女なら気を遣って嘘を吐くようなこともないでしょう」

胸の中にあつた靄が晴れたような、そんなすがすがしい顔を氷雨はする。

「氷雨の記憶……いえ、氷雨の人格、戻り始めていますよね」

『……その通りです』

やっぱり、と氷雨は呟く。

「そうじゃないかと思つていたんです。今日の私は少しおかしいですから」

それは鈴に対して抱いた感情だけではない。自分、少なくともここ数日の氷雨の行動理念から少し外れた行動の選択をしていたように思えるのだ。それ故に、記憶だけじゃない、人格が戻ってきていると感じたのだろう。

『氷雨の記憶、および人格はH A D E Sの拡張前にコアネットワークへ逃がされてきました。その後、すぐに戻す予定でしたが、私の損傷が激しく、更に修理が篠ノ之博士にしかできないということもあり、今までデータの移行が難しくなっていました』

データの移行という言葉に氷雨は少し笑う。では自分はデータ移行前の古いバージョンということだろうか。

「では記憶が戻り始めたのは、ペイルライダーを起動してからということですか」

『はい。しかし、記憶や人格は純粋なデータではなく、例えるなら圧縮ファイルで保持さ

れています』

つまり、解凍作業が必要ということらしい。そして、その解凍作業に必要なのが想起であるというのだ。

「じゃあ、今から以前の氷雨と対峙することは凰さんを救うだけじゃなくて、記憶を戻すためにも必要なことなのですね」

『そうですね』

そこまで聞くと、氷雨は歩みを止めた。そこにどういう意図があるのかを察したペイルライダーは預かっていた言葉を言う。

『……氷雨は言っていました「どんな選択をしても、僕は納得する」』

「……だったら」

『「けれど」』

しかし、ペイルライダーの言葉はそこで終わらなかった。

『「鈴ちゃんを見捨てる選択肢をしたら、頭の隅で一生呪詛をばらまいてやる」と言っています』

「……」

氷雨は啞然とする。

「それって、理論的に可能？」

『この言葉を聞いた時点でその部分は想起されているはずなので可能です』

氷雨の肩は震える。それは恐怖からの震えでも、悲哀からでもない。

「あはははは！」

氷雨という人物の愉快さからくるものであった。

「すごいですね。氷雨って、とても面白い人なんですネ」

氷雨は氷雨を笑う。しかし、その笑いは馬鹿にした笑いではない。

「記憶を盾に取られても、ただでは転ばない。どこまでも愚直に凰さんのことを思い続けている、こんな保険までかけて……」

一しきり笑った後、氷雨は一つ息をつき目元を拭う。

「こんな人に、敵うわけないですよ」

そうして、氷雨は歩みを進める。

『いいのですか？』

「はい、これでいいんです。元々、この体は氷雨さんのものでしたし」

実は違う。

「それに、呪詛をばらまかれるのは勘弁願いたいですからね」

笑いながらそう言う氷雨はすでに決心をしたのだろう。踏み出した一歩が先ほどよりも力強い。

『ところで、どこへ向かっているのですか？』

「え、それは当然……」

そこはイベント発生率の高さで有名だ。

「自動販売機ですよ」

それはワールド・ページも例外ではなかった。

最終話

虚像は疑問を抱き始める。

戦況は自身が押ししている。それは明らかであった。傷一つない自身の専用機がそれを物語っている。

だが、疑問の原因はそこではない。そう、往々にして疑問というものは自分自身から湧いてくるものであるが、この場合も変わらず当てはまる。目の前の自分（氷雨）への攻撃が、次第に通じづらくなってきているのだ。理由は分からない。だが、氷雨が虚像の攻撃に対応しだしていることは事実である。

「行きますっ！」

何度押しものけても、何度切りつけても、数歩下がった後、再びこちらに迫ってくる。その様に圧倒的に優勢なこの状況でも不安を覚えるのは当然だろう。

そして、その不安が最高に達する瞬間が来た。

「っー！」

全ての剣戟を合わせられ、捌き切られたのだ。

「や、やったー！」

しかし、それを喜んだ氷雨が隙を作ったので虚像はその腹部に強烈な蹴りを放ち距離を作り出した。

どういふことなのか、疑問を抱えたまま、虚像は対峙する。

◇ ◇ ◇

「やった！ やりましたよ！ ついに虚像の攻撃を捌き切りましたよ！」

『よかったですね』

そんな風に喜びを共有しようとペイルライダーに語り掛けるも、彼女の言葉はそっけなく、軽くあしらわれてしまう。

「こんなに頑張ったんですから褒めてくれてもいいじゃないですか」

『ずうずうしいです』

「私のせいではありませんよ？ 氷雨の人格が悪いですよ」

『記憶が戻ったら覚えておいてください』

「その言い回し面白いですね」

そんな風に冗談を言い合えるようになったのもどこかしら氷雨の記憶が戻りつつあるからなのでしょう。少なくとも、昨日の私ではこんなやり取りはできなかつたはずですよ。

もしくはあれでしょうか、もうすぐ自分は消えてしまうということを悟っているが故にはつちやけているのかもしれない。少なくともこれが私の素であるとは思いたくないです。

「じゃあ、もう一度、いきまっ……す……か？」

力を入れようとした足から崩れ、倒れ込む。あ、あれ？ おかしいですね。確かに踏み込んだはずなんですが……。

『精神を削りすぎたことが原因だと思われます』

あ、ああ。せっかく目前まで来たのに、後一步足りなかったということですか。

視線を虚像に向ける。虚像は何ともいやらしい笑みを浮かべる。なるほど、氷雨が笑うとあんな顔になるんですね。あれのどこに凰さんは惹かれたんでしょうか。皆目見当もつきませんね。

勿体ぶる様に虚像がこちらに近づいてくる。その姿はどこまでも小者っぽいもので多分勝利を確信している死亡フラグを纏ったラスボスのような存在なんですよ。

首筋にビームブレードを突き付けられる。熱輻射によつて若干ダメージを食らっているのに継続的に精神が削られて辛いから口上は短めでお願ひしたいですね。じゃないと、聞き終わる前に意識が飛びそうです。

「やはり、お前じゃ鈴ちゃんを守れない。これではつきりしたでしょ？」

「はい、そうですね。私では助けることすらできません。ましてや、その後の守ることなんて、無茶でしょうね。後、首がとても暑いのでちよつとビームブレード離してもらつていいですか？」

私の言葉に嬉しそうに笑う虚像。これが氷雨だというなら、体を返すのは少し躊躇われますね。あ、ビームブレードは放してもらえました。

「そう、そうだよ！ 僕じゃないと鈴ちゃんを守れない！ いや、僕であっても、ここじゃなきや鈴ちゃんは守れない。守り続けることができない！」

その言葉を聞き流すことに私は少し抵抗を感じた。

「確かにそうかもしれないですね」

「そうでしょー！」

「でも……」

私はそれに同意はしない。そのの一部は事実かもしれない。でも私は氷雨が嵐さんを守り続けられていないとは思わない。

「彼は記憶を失う結果になろうとも、嵐さんを守ろうとした。そして、今も嵐さんを守り続けようとしている」

その言葉に虚像は嘲笑を浮かべる。

「いいや、守れてなんかいない。現に氷雨はここに居ない」

「いいえ、ここに居ます。氷雨は嵐さんを守ろうと、ここに居ます」

倒れている間ずっと呪詛が飛び交っていたんだから確信できます。

私はどうにか立ち上がった。幸か不幸か、呪詛のおかげで意識ははっきりしている。少しの頭痛と引き換えですけど。

「氷雨が守り続けようとしている……その証明が！」

最後の力は纏うペイルライダーの装甲を紅く灯らせる。

「この！ 私だあああ！」

『HADESシステム、レディ』

剥離した表面装甲が羽のように後方へ吹き荒れる。それを推進力にして私はビームブレードを振りかぶったまま、前方に突貫する。

かなりの至近距離にいた虚像は対応が追いつかず、衝突する。しかし、勢いはそこで止まらない。そのまま加速し、後方の嵐さんの元へと迫る。

「や、やめろ。後ろには、鈴ちゃんがいるんだぞ！」

その言葉を聞いて僕は笑った。

「知ってるよっ！」

十分な加速を得てから、後方の真紅の粒子を振りかぶったビームブレードの方に移動させ、纏わせる。

「僕は僕を信じてる」

「っ！ お前、まさか！」

虚像が何かに気づき、驚愕を顔に浮かべる。

「鈴ちゃんを大事に思う、僕の気持ちを感じている!!」

僕は振りかぶったビームブレードを勢いに任せて虚像に叩きつける。虚像は鈴ちゃんを縛る鳥かごに叩きつけられ、鳥かごと共に粒子となって弾ける。

僕はペイルライダーを解除する。少し低くなった視界は上空へと流れる粒子で埋められていたが、はつきりとその奥にいる人影を認識していた。

僕は光の中を進む。その距離は近いようで、途方もなく遠かったような気がする。

いつも近くにいた。いつも側にいた。それが当たり前だったのに、離れていた期間が長すぎた。なんて言えばいいだろうか、この気持ち。これ以上の想いを僕は知らない。どんな言葉もこの想いに劣る。だから、これをカタチにするのは難しい。

だから、伝えたいことは言葉にしない。

光の中に影を見つけた。その影が誰であるかを認める前に、僕の足は駆け出していった。

「氷雨っ！」

僕を呼ぶ声に応えるように僕の腕はその華奢な体を包み込んだ。抱きしめたその温

もりに、僕は込み上げてくる涙をこらえることができなかった。

戻ってきたらかつこよく決めるつもりだったのに、こんなにくちやくちやな顔じゃ、どんなセリフを吐いたって決まらないよね。

だから、変に着飾った言葉はいらぬ。僕の気持ちは鈴ちゃんを抱きしめる腕が、体温が、そして、心臓の鼓動が……コアの中だから届かないけど、それでも伝わっているはずだ。

ただ一つ、伝えたい言葉があるとするなら、それは……

「ただいま、鈴ちゃん」

「お帰り、氷雨」

僕は今、鈴ちゃんの元へ帰ってきたんだ。



後日。

「少し風があるね」

「そうね」

僕は鈴ちゃんに呼び出され、屋上のテラスに来た。放課後の空は少しずつ紅く色づいていき、僕らを照らす。あ、テラスと照らす、で上手い感じだね。

『…………』

なぜ無言を伝えてくるのか、ペイルライダー。

鈴ちゃんに呼び出されたのはいいんだけど、鈴ちゃんは何やら横目でこちらを伺ってばかりで一向に要件を話そうとしなかった。そう言えば、用事って何だろうか。もしかして、プレゼントとかかな？ 記憶が戻った祝いに何かくれるんじゃないだろうか。

そう思っただけで鈴ちゃんの方を見るも、どうやら手ぶらのようにプレゼントを持っているようには見えない。

むむむ、となるとどうして呼び出されたんだろうか……。屋上に来いだよ、屋上……。はっ！

「もしかして、決闘?!」

「はあ!?!」

鈴ちゃんが驚いた顔をする。お、これはもしかして凶星かな？

「確かに、前回の戦いはゴーレムの乱入で決着がつかなかったもんね。負けたほうが勝った方のいうことを聞く、その雌雄をここで決するということだね!」

そこまで僕が言うと、鈴ちゃんは何やら呆れ顔になって大きなため息をついた。あれ？ 何か僕は的外れなことを言っていたのかな？

鈴ちゃんの意図を測りかねていると、僕の方へ鈴ちゃんは歩み寄ってきた。まさかここからの先制攻撃が？

少し身構えてみるも、不意に鈴ちゃんの顔が近づく。

「えっ」

それに戸惑う間もなく、僕の頬に温もりが伝わった。それは一瞬のことだった。気づいた時にはすでに鈴ちゃんやんは離れていて、そこに悪戯っぽい笑みを浮かべていた。

「えっ、ちよっ、ちよっと待って。鈴ちゃん、い、今何を……」

もうシヨート寸前で頭の中が真っ白になっている僕に鈴ちゃんやんは恥ずかしそうに何かを呟く。

「氷雨！」

「はいっ！」

鈴ちゃんが僕の名を呼ぶ。

「あたし、あんたのこと、好きだから」

紅潮したに笑みを浮かべて、鈴ちゃんやんは僕に想いを紡ぐ。

「大好きだから！」

どこか吹っ切れたような宣言に、僕の頬は自然と緩む。抑えようとしてもダメだ。この嬉しさは人間の理性を遥かに凌駕している。

「ほ、僕も……」

僕が鈴ちゃんやんに抱いている想いの何十、いや何百分の一も表現できないかもしれないかもしれな

い。

「僕も！」

けれど、やっぱり声にしたい。それを鈴ちゃんに聞いてほしい。それはただの六文字じゃない。僕がこれまでに抱いた全ての気持ち……。

「愛してるよ！」

これが僕の精一杯の拙い愛の言葉。これから二人でツナグミライの初めの一歩だった。

シアワセのカタチ

僕と鈴ちゃんは恋人の関係へと変わったわけだけでも、それを機に変わったことはあまりなかった。鈴ちゃんがデレデレになるわけでもなく、僕らは付き合う前と同様の日常を過ごしていた。まあ、僕からしたらその日常が幸せだったわけだから、不満なんて微塵もないんだけどね。

「鈴ちゃん」

「何よ」

「好きだよ」

「はいはい、あたしも好きよ」

変わったことを強いて言うなら、肩書が恋人に変わったことで、鈴ちゃんの僕に対するあしらい方が少し変わったくらいかな。何気ないやり取りの中で鈴ちゃんからの好意を受け取ることができるようになって、幸せすぎるね。

そんな風なやり取りを食堂のテーブルで行う。机の上に置かれた学食のメニューも鈴ちゃんと食べると、格別においしく感じられるね。え、病気だって？ 違うよ、脳内

麻薬だよ。あ、どちらにせよヤバい奴には変わりないね。

「なんか安心するわね」

「何が？」

息を吐きながら鈴ちゃんがそう言うので僕は首を傾げて見せる。

「あんたがいつも通りだからよ。さつき屋上で緊張が嘘みたいよ」

なるほど。鈴ちゃんは先ほど告白を受けて間もないにも関わらずに相も変わらない僕の振る舞いに安心感を覚えたということだね。

「しかし、鈴ちゃん、それには理由があるんだ」

僕の言葉に鈴ちゃんはキョトンとした顔をする。

「じ、実はテンションが上がりすぎないようにするために……」

僕は机の下に隠していた左手を鈴ちゃんに見せる。

「太ももにペンを突き刺してたんだよね」

「何やってんのよ、あんたは……」

いやー、漫画とかでよく見る手法だから試してみたけど、なかなか効果はあるようだね。ただ、強いて悪い点を上げるなら物凄く痛いってことくらいかな。太ももに痺れるような激痛が走るのを無視できるならおすすめできるよ。僕はもう二度としないけどね。

「あ、そうだ」

そうやって落ち着いてくると、鈴ちゃんに聞こうと思っていた疑問を思い出す。

「鈴ちゃんに告白されてすっかり忘れてたけど……」

告白……自分の言葉にさっきのことを思い出す。あの時、鈴ちゃんにキスされたんだよね。鈴ちゃんの温もり……。

ズブリ

嫌な効果音が頭に響き、再び僕は冷静さを取り戻した。危うく鈴ちゃんへの思いを大声に乗せて叫ぶところだった。というか、ペイルライダーさん。そんな効果音が付くほど刺してないので変な音を僕に伝えないで下さい。

『気持ちだけでも致命傷にはしておきました』

気持ちだけでも致命傷にはして欲しくないんだけど!?

「どうかした?」

鈴ちゃんが不思議そうにこちらを伺う。そうだった。鈴ちゃんに聞きたいことがあつたんだよね。

「いや、なんでもないよ。それより、鈴ちゃん一週間くらい学校休んでたでしょ?」

今日だって休んでたし。だから、突然連絡があつて驚いたんだよね。

「ああ、そうね。明日からは普通に授業出るわよ」

「そうなの？　じゃあ、またお昼誘いに行くね」

ラウラとお昼を食べるのもいいけど、やっぱり鈴ちゃんがいないとね！

「あ、それでね。そのなんで休んでたのかなーって」

千冬さんに聞いてもはぐらかされ、「本人に聞け」と言われるばかりだった。もしかしたら東さんにちよつかいかけられてるんじゃないかと思つて確認しに行つたら東さんは関係ないつて言つてたし……。あれ？　関係ないつてことは、東さんはもしかして鈴ちゃんが休んでた理由知つてたのかな？　だつたら教えてくれてもよかつたのに……。

「ちよつと中国に帰つてたのよ」

「え？　あ、そうだったの」

それなら一週間くらい休んでもおかしくないね。あれ？　いや、この時期に中国に帰る理由って何？

そんな疑問に首を傾げていると、鈴ちゃんが口を開く。

「実はね。あたし、代表候補辞退してきたのよ」

「あ、なるほどね。それでいつたん中国に戻つて……」

だいひょうこうほじたい？　代表……候補……。

僕は勢いよく立ち上がり驚愕を浮かべた顔を鈴ちゃんに向ける。

「ど、どどどど、どとういこと!？」

どこか軽い口調で紡がれた鈴ちゃんの言葉。しかし、それが意味するのは鈴ちゃんが学園から居なくなるかもしれないということだった。

◇ ◇ ◇

鈴はワールド・ページから目覚めた後、千冬に連れられ病院で検査を受けた。検査の結果は異状なし。診断結果を受け取り、外で待っていた千冬の元に向かう。千冬に結果を告げると、千冬は「そうか」と答えた後、車に乗り込んだ。

「千冬さん、頼みがあるんです」

千冬に続いて車に乗り込んだ鈴は運転席に向かって話しかけた。

「織斑先生と呼べと、何回言えばわかるんだお前たちは……」

そのお前たちには氷雨も含まれているのだろう。千冬の中で鈴と氷雨はもうひとつくりの存在なのだ。故に、今回の件が解決したことに安堵している。しかし、鈴の中ではまだ解決していないのだ。

「いえ、千冬さんに頼みがあるんです」

どこか含みのある言い方に千冬は眉を顰める。千冬が沈黙で促すと、鈴が話し始める。

「篠ノ之博士に会わせてほしいんです」

それを聞いた千冬はアクセルを踏もうとした足を浮かせ、助手席の鈴の方を見た。

「それは確かに、私にでないかと頼めないことだな」

鈴の意図を理解した千冬がそういう。しかし、分からないのはその目的だ。むしろ千冬としてはもう束には鈴と接触させないつもりであつたし、鈴もそれを望んでいるものだと思つていた。

「理由が知りたいな」

判断するのはそれからでも遅くないと千冬は考えた。

「知りたいんです、氷雨のことを。あの女の子の言葉の真意を……」

あの女の子というのはクロエのことだろうと、千冬は理解した。そして、ワールド・パージを受けた時に接触した彼女に何か言われたのだろう、と。

その言葉がどのようなものであるかは分からない。しかし、鈴の真剣な眼差しに応えないでいられるほど、千冬は無関係ではなかつた。二度目の強襲を止められなかつたのは自身にも非がある。なら、鈴の頼みを無下することはできない。

「……わかつた」

そう答えると、千冬は端末からどこかへ連絡をする。おそらくは束だろう。しばらくの通信を経て、千冬は鈴の方に向き直る。

「今から会いに行くぞ」

その言葉に鈴は強く頷いたのだつた。

二人が向かったのは織斑宅であった。現在は誰も住んでいないこの家だが、週末には帰っているのか、少し生活感が残っている。

しばらく待っていると、玄関が開く音がした。

「やつほー！　ちーちゃん久しぶりだねー！」

そんな風に騒々しい声が部屋に響く。その声に千冬はため息を吐いた。

「昨日も会っただろう。しかも、うちの生徒を襲わせて」

「えー、でもよかったでしょ？　ひーくんの記憶も戻ったんだし」

すでに束が知っていることに千冬は驚かない。そういう情報だけは早いのだ。興味のないことにはとことん疎いが、彼女の興味があるモノに関しては知らないことがある方がおかしい。

「でさ……」

楽しそうだった声色が何かに気づき一転する。その眼が捉えたのは鈴の存在だった。

「なんでチャイニーズがこんなところにいるのさ」

それは明らかに鈴がここにいることを咎める口調であった。それに気づかない鈴ではないが、そもそも自分を襲ってきたのだ。自分に対して好意的でないことは百も承知。今更それに怖気づくこともなかった。

「あなたが氷雨のお姉さんね」

「はあ？　なにひーくんのこと名前で呼んでるの？　お前のその汚染された息でひーくんの名前を呼ぶんじゃないよ」

そんな東の罵倒を咎めようとした千冬だったが、彼女が咎める間もなく、鈴がそれを用意に介した様子もなく東の隣にいた少女、クロエに問いかけた。

「あの時あんたが言った言葉の真意が知りたい」

クロエはその言葉を受け口元に笑みを浮かべる。鈴は彼女の姿を見た時、やつぱりと納得していた。あの時の少女が氷雨と繋がる人物だろうこと、そして、あの言葉を考えて、この場にはいないはずがないと。

東がクロエの方を見る。そのどこか嬉しそうな表情に東はクロエの気持ちを探した。「なるほど、くーちゃんはそっち側だったのね」

「申し訳ありません、東様」

「別に怒ってないよー。くーちゃんがそう考えてるなら、東さんもちよつと対応を変えようかな」

そう言うのと、東は再び鈴の方に向き直る。しかし、その眼は先ほど前の敵意剥き出しの目ではなく、少しの興味を秘めた視線であった。

「凰鈴音……うん、とりあえず鈴でいいかな。鈴はさ、ひーくんのことどう思ってる？」

突然名前で呼ばれたことに少し戸惑う鈴であったが、束の問いかけに答える。「大好きよ」

「あ、違う違う。そういう感情的なことじゃなくて、ひーくんの立場とかつて意味だよ」
「えっ、あつ。ああ……」

そう束に訂正されると、鈴は顔を真っ赤にして羞恥に顔を隠す。

鈴は紅潮した頬を手でペしりと叩き気を取り直すと、束の方に視線を戻した。

「氷雨はただの男性操縦者ってだけじゃないんでしょ？ 政府と関われば、それこそ世界が変わるような何かがある」

「そこまで言うのと、束は頷く。」

「そこまで分かっているなら話は早いよ、鈴」

その言葉に鈴は束の口から答えが聞けるものだと思った。しかし、帰ってきたのは鈴が知りたいと思っていた言葉ではなかった。

「ひーくんと関わるのをやめて。それは二人ともが不幸になる」

しかし、束の言葉は当然のものだった。国家の代表候補生である以上、鈴と氷雨が交わることは面倒が付きまとうのだ。

「ひーくんはね、別に特別じゃないよ。特別なのはペイルライダー」

そして、束は語りだす、鈴が知りたかったことを。

鈴は知った。氷雨が乗っているペイルライダーの特異性を。そのコアが持つこの世界の前提を覆す搭乗条件が氷雨と自分を引き合わせていたことを。

「それで？」

話し終えた東は鈴に問いかける。

「これを聞いて、鈴はどうするの？」

それは鈴を試しているような言葉。

現状を維持する選択はない。どちらかを取るしかないのだ。その選択は彼女にとって決定的なことだ。彼女だけではない。その選択が及ぼす周囲への影響力は個人のレベルにとどまらない。そんな重圧の中、彼女は決断を下したのだった。

「あたしは……」

◇ ◇ ◇

「で、そう言うことがあって、一旦中国に戻って代表候補を辞退してきたってわけ」

「えー」

「なんで、あんたが不満そうな声出してんのよ」

「いやいや、確かに嬉しいよ？ 政府と僕を天秤にかけて、僕を取ってくれたってこと

でしょ？ 確かにそれは嬉しいことだし、僕だってそう思うけど、これは本当に

正解なの？

「あ、ちよつと待って、それって問題だらけじゃないの？」
「なにがよ」

若干鈴ちゃんは不機嫌そうに返事をする。え、何か怒らせちゃった？

「だ、だって、代表候補生じゃなくなったら国からの支援が無くなっちゃうわけだし、学費とか、生活費とかどうするのさ」

「俺が養う！　くらい言ってくれるでしょ？」

「もちろんさ！　……いやいや、無茶でしょ」

僕の顔は知れてるわけだから就職も難しいだろうし、第一この学園を辞めるって僕個人の見解が通ると思えないし。

僕がうんうん唸っていると鈴ちゃんの笑い声が聞こえてくる。顔を上げるとおかしそうに笑う鈴ちゃんがいた。

「冗談よ。そんな真剣に考えなくてもいいのに」

「え、だって、いずれは本当に養うわけだし、その時期が早まっただけなのかなって……」
僕の言葉に鈴ちゃんは顔を紅くする。

「き、気が早すぎるのよ、あんたは」

「そうかな……」

「そうよ……」

鈴ちゃんはそう言った後、深く息をして頬の熱を冷ました。

「お金に関しては問題ないわよ。あんたのお姉さんが支援してくれるらしいから」
「なんだ。そうだったんだね」

東さんが鈴ちゃんにお金を出してくれるのか。それなら安心だね！

「……………いやいやいやいやいやいあ」

焦りすぎて回らない呂律に鈴ちゃんは笑う。しかし、僕はその可愛らしい笑顔に一瞬和んだものの笑ってられる心理状態ではなかった。

「どうゆうこと!？」

「何が疑問なのよ」

だって、東さんですよ？ 身内以外には冷徹無関心の外弁慶ですよ？ それがどうしてつい最近まで命を狙っていた鈴ちゃんに対して金銭的な支援を…………。

ん？ 身内以外？

「え、ええと。つまりは、その……。東姉が鈴ちゃんと僕が付き合うことを認めたとつてこと？」

「…………そう言うことよ」

少し恥ずかしげに言うのは改めて付き合っていると明言したからだろうか。恥じらう鈴ちゃんに悶えつつも、僕は納得する。鈴ちゃんが代表候補を辞退してきたのは東さ

んに認めさせるためだ。そうなると、束さんが身内である鈴ちゃんを支援しないわけもないし、そう言うことなんだろうね。

「束姉が支援してくれるなら何も問題はなさそうだね」

「信頼してるのね」

僕が安堵に胸を撫で下ろすと、鈴ちゃんが少し嫉妬のようなものを含んだ目でこちらを見てきた。

「悪い意味でだけどね」

おそらく嫉妬の原因はあの襲撃時の僕の対応と比べてだろう。自分にそれほどの信頼は置いてくれないのに……という感じかな？ いやー、でも束さんに感じている信頼を鈴ちゃんにするのは嫌だなー。

「でも、鈴ちゃんのことだって信頼してるよ？」

「どうかしらね」

「僕のこと好いてくれてるって確信してるしね！」

「それ別に信頼と関係ないじゃない」

どこか呆れたような声だったけど、その顔は嬉しげに笑っている。それが嬉しくて僕もつられて笑顔になる。

「あ、でも今は信頼しなくてもいいわよ」

「えつ。なんで？」

な、何か隠し事でもしてるのかな？

「代表候補辞退したから、甲龍取り上げられちゃったのよね。だから、またあんな襲撃があつたらあたし、頼りにならないわよ」

軽い口調で鈴ちゃんは言つたけど、それつて鈴ちゃんにとつて大切なものじゃないの？ 鈴ちゃんが努力して手に入れたものなのに……。

そんな僕の思考を読み取つたのか、鈴ちゃんは笑いながら僕に言い放つ。

「カタチあるものに囚われていたくないのよ。あんなもの無くたつて、あたしはここに立っていられる。それに、本当に大切なものはカタチのないもの。そうでしょ？」

鈴ちゃんの言葉には迷いがなく、僕はそれに納得させられた。こういう前向きなところも鈴ちゃんの良いところだよね。

「まあ、鈴ちゃんは今座つてるけどね」

「うっさいわね。言葉の綾でしょ」

そんな軽口で笑いあう。そんな鈴ちゃんの笑顔が、これからの未来でシアワセのカタチを二人で見つけられる、そう確信させてくれるのだった。

「そう言えば、代表候補の辞退したって、なんだか中国にいる鈴ちゃんちゃんの家族が心配になるんだけど……」

「あ、大丈夫よ。やめる時に束さんとの繋がりをほのめかしたから」

「ああ……」

「本当に大切なのはカタチあるものじゃなくて、カタチのない『ツナガリ』でしょ？」

「間違っていないけど……」

なんだかなーと思ってしまうのだった。

ツナグミライ

僕と鈴ちゃんはこういうわけか束さんに呼び出しを食らった。どうやら束さんのラボで僕らに用事があるらしいけど一体なんだろうか。僕一人ならともかく、鈴ちゃんも連れて行くとなるとペイルライダーで行くのは難しいなと思案顔になっていると、どこからか少女の声が聞こえてきた。

「氷雨叔父さん」

「その呼び方をするのはクロエちゃんだね」

僕は自室の壁に向かって呼びかける。すると虚空から徐々にその肢体をさらし、見えてきた少女の姿はやはりクロエちゃんだった。

「鈴をどうやって連れて行くかと思案してますね」

「その通りなんだけど、よくわかったね」

「叔父さんが頭を使うのは鈴関係の時だけですから」

その通りだから反論しないけど、明らかに馬鹿にしているよね？

『事実では反論できませんね』

「どっちに對してかな？ 少なくとも馬鹿であることは反論するからね？」

「えっ」

「なんで予想外みたいな表情してるのさ！」

この二人が揃うといつも馬鹿にされている気がするね。あれ、もしかしてキャラ被ってるのかな？

「それはそうと、困ってる僕にクロエちゃんは何か解決策を提示してくれるの？」

「気乗りはしませんが、束様に頼まれたので」

気乗りはしないんだ……。

「ゴーレムを連れてきたのでそれに鈴を運んでもらいます」

「あ、なるほどね」

束さんの作ったゴーレムはステルスついてるもんね。それに無人機だから余剰のエネルギーを鈴ちゃんの保護バリアに当てられるから安全だね。

「じゃあ、鈴ちゃん呼んでくるね」

「？」

クロエちゃんは首を傾げる。あれ？ 僕、何か可笑しなこと言ったかな？

「呼びに行くとは？」

「え？ いや、だから鈴ちゃんの部屋に行つてゴーレムのところに連れて行こうって意

味で……」

「鈴はすでに束様のラボですが？」

「運んだ後なの!？」

先に言つてよ!

「では、行きませうか」

「……そうだね」

なんだかクロエちゃんに振り回されてる気がするね。

「でも僕はクロエちゃんの叔父さんなんだし、これくらい平気だよ!」

「早くいきましよう、叔父さん」

強調しないでくれるかな!?

◇ ◇ ◇

外に出るとペイルライダーもとい、蒼騎士を展開した僕の前に両手を広げた状態でクロエちゃんが立ちはだかった。

「……あの、どういうつもりですかね？」

「見てわからないのですか？」

見てわかつたらその意図に従うつもりだけど、生憎僕の頭では理解できないよ。

「ゴレムは鈴を送りました」

「うん」

「私はここにゴーレムで来ました」

「うん」

「さあ」

いや、だからそこで手を広げられても困るんだよ……。

「発言の意味が不明なんだけど……」

「分からないのですか？ 私はここにゴーレムで来ました。そのゴーレムは今はいませ
ん」

「なんで？」

「鈴を連れて行ったからです」

「2体用意しようよ！」

最初から必要だつて分かつてたじゃないか！

「2体で来ると警備に発見される可能性が上がります。一機であれば黒鍵が光学迷彩を
つけることができますから」

最初からゴーレムに光学迷彩つけとけばいいのにな。

「そういうわけなので」

つまりこれは僕に運べと言っているのだろう。

いや、だけど、考えてみれば僕に体を預けるといふ行為は僕を信頼しているからでき

ることで、クロエちゃんが僕のことを認めてくれると解釈することはできないだろうか？

「それは嬉しいことだね」

「私の体と接触することを嬉しがるのは、少し身の危険を感じますね」

『110番の準備はできています』

「待つて！　そういう意味じゃないから！」

どうしてこうも僕の言葉はねじ曲がって伝わってしまうのだろうか。あれかな、僕とクロエちゃんの間で思考の屈折率が違うのかな？　もう角度付きすぎて全反射してるんじゃないかってくらいに意思疎通ができないよ……。

「冗談です」

クスリと笑いクロエちゃんは再び両手を広げる。本当に振り回されてばっかりだよ。

まあ、ここで問答を続けるのも楽しいけれど、鈴ちゃんを待たせているわけだしそろそろ出発しようかな。

「じゃあ、クロエちゃん行くよ？」

「はい」

了解も得たところで僕はクロエちゃんの腰に手を当てた後にもう片方の手を膝の裏に回し、持ち上げた。

「ひゃっ」

「ん？」

何やら可愛らしい悲鳴が聞こえたような気が……。

あたりを見回してみるも周囲にそれらしい人影はなく、夜の静けさが立ち込めるばかりだった。

ということとはあの声の主は……。

僕は抱き上げた少女の方を見る。少女はどういうわけか、そっぽを向いており僕と目を合わせない。

「クロエちゃん……」

「……」

「首に手を回さないと危ないよ？」

「！」

クロエちゃんは少し驚いたような顔を僕の方に向ける。どうやら僕がさっきの悲鳴でクロエちゃんのことをいじると思っていたようだね。

まあ、仕返しでやってもいいけど、クロエちゃんはそう言うことされるのは苦手っぽいし、あえてやる必要もないよね。

そんな僕の対応に驚きつつも、クロエちゃんは僕の指示に従いしつかりとしがみつい

てきた。しつかり……し過ぎで苦しい!?

「ちよっ! クロエちゃん!」

「叔父さんに気を使われるなんて……屈辱です」

「なんでっ!」

『分かります』

「分かつちやつたの!」

やっぱり僕の意図はねじ曲がつちやうようだった。

◇ ◇ ◇

そうしてたどり着いた束さんのラボでは束さんと鈴ちゃんが話をしていた。

「おーい、束姉来たよー」

僕の声に二人が振り返る。

「ひーくん、いらっしやーい」

「遅かったじゃない」

まあ、遅かったのはクロエちゃんに原因があるんだけどね。

それにしても、二人の声色から険悪な感じはしないからどうやら本当に束さんは鈴ちゃんを身内として認めているようだね。それに鈴ちゃんの顔を見るとなんだか嬉しそうである。

「鈴ちゃん、何かいいことでもあったの?」

「え? なんて分かったの?」

鈴ちゃんは驚いた様子だったけど、依然として口角は上がったままだ。

「りっちゃんは表情に出るからねー。今も口元が緩んでるよー」

「え、ほんと? あー、なんか恥ずかしいな」

東さんが鈴ちゃんの頬をつつきながらそう指摘すると鈴ちゃんは恥じらうように笑った。

「え、なにこの仲の良さ」

いつの間にか鈴ちゃんのことりっちゃんなんて呼んでるし。

「驚くのも無理ありませんが、壁が無くなれば束様は誰にでもこうです」

その誰にでもが限られすぎてるから今の状況に驚いてるんだけどね。でも、うまくいっているようで何よりだね。鈴ちゃんも満更じゃなさそうだし。

「はっ! まさかここからNTRルート……!?!」

「それは鈴が心配すべきでは?」

「え?」

「おっと」

クロエちゃんは口が滑ったと言わんばかりに僕から顔を背け、口元に手を当てる。意

味深そうなこと言ってるけど、僕が鈴ちゃん以外になびくことなんてありえないからね。

「それで、東姉が呼んだのって鈴ちゃんが喜んでることと関係あるの?」

「うん、それが要件の一つだよ。簡単に言ったらりっちゃんに専用機を作っただけよ。うって話なのだよ」

東さん太っ腹すぎる!

「とは言っても、りっちゃんが元々搭乗していた甲龍のコアは中国に返還しちゃったからね。戦闘データもないし、どういうコンセプトが良いか聞こうと思って呼び出したってわけ」

「なるほどねー」

「ということとは、僕が来るまでに二人が話していたのってそれに関してなのかな?」

「鈴ちゃんはどんな機体が良いって言ったの?」

「ひ、秘密よ!」

僕が何気なく鈴ちゃんに問いかけると、少し頬を赤らめてそう返してきた。その反応の意図を理解できずに啞然としてみると、東さんが嬉しそうに話した。

「りっちゃんはね、ひーくと並んで戦えるような機体が欲しいって言ってたんだー」

「へ?」

「東さん!？」

並んで戦える、それはクラス對抗戦の時に鈴ちゃんと言っていた対等の関係でいたいという願い。そ、そこまで鈴ちゃんに想ってもらえるなんて、なんとたる幸せ!

「鈴ちゃあああん!」

「ちよつと! 引つ付かないでよ!」

勢いあまつて鈴ちゃんに抱き着くも鈴ちゃんに両手で押し返される。

「別に、あんたのためってわけじゃないからね」

「ツンデレだねー」

「典型的ですね」

「そこが魅力なんじゃないか!」

「あんたたちねえ……」

僕らのやり取りに呆れ顔になりつつも、頬に残る紅が確かなテレを表していた。

「まあ、そういうわけで東さんはこれから大忙しになるわけですよ」

「コアもないし、本当に一から作るわけだからその作業量は尋常じゃなさそうだね。」

「そして、最後にひーくんを呼び出した理由って言うのは、この前の襲撃のことなんだけ
ど」

その言葉に僕はさつきまで緩んでいた頬を引き締める。鈴ちゃんもその襲撃が何を

示しているかを理解しているようで、こちらの様子を心配そうに伺っていた。鈴ちゃんが何を危惧しているのかは分からない。けれど、続く東さんの言葉によつては僕は鈴ちゃんの危惧している行動を犯すかもしれない。

それほどこの話題は繊細なものだと思っていた。だから、僕自身も東さんに問いただすこともせずにはいた。だから僕は柄にもなく真剣な顔になって東さんの方を見る。別に、真面目な表情をした僕に鈴ちゃんが惚れ直さないかな？ とか言う邪念は一切ない……とは言い切れない。

「ひーくん、ごめんなさい」

東さんの口から紡がれたもの。それは僕が最も期待していた言葉で、僕が最も予想していなかった言葉だった。身構えていたところと全く違うものが飛んできたことにより、僕は呆気にとられてどう返事をすべきかを悩んでしまう。だって、東さんだよ。あの東さんが素直に自分のしたことに対して謝罪してきたんだよ？ そりゃ、呆気にとられもしますよ！

そんな僕の沈黙を東さんはどうとらえたのか、続けて言葉を紡ぎだす。

「ひーくんが中国のハニートラップの対象になってるっていう情報だけで、ひーくんたち当事者を見ずにひーくんの大切な人を傷つけようとしていたって、今更になって分かっちゃったから、東さんすごく反省してたんだ。だから、謝りたいなーって」

それはいつもの束さんの口調。でも、だからこそそれが束さんの本心なんだなと思えた。

あの一件以来、悩んでいる暇なんてなかった。だから、徐々にあの襲撃のことは頭の中から消えていっていた。でも、端の方でしこりのように残るものはあった。どうして束さんはあんなことをしたのか。どうしようもなく悪いことなのに、どこかで束さんなりの理由があつたんじゃないかって、10年も一緒だった姉に対して擁護する自分がいた。でも、結果として鈴ちゃんは無事で、束さんと鈴ちゃんの仲は良好で……それを問いただすタイムミングを失っていたんだ。

靄は晴れた。

僕は今、ようやく清算を終え、ツナグミライへ行ける。

「許す……」

「ひーくん」

「つて言うと思つたら大間違いなんだよおおおとおおおとおおお!!」

「ええー!!」

「当然でしょうね」

『むしろ許されると思つていたのでしょいか』

綺麗に終われると思わないでよね! 束さんがやったこと、許せるわけないと思わな

い？

「クロエちゃん、鈴ちゃんを学園に送ってもらっていい？」

「仕方ありませんね」

「ちよ、ちよつと氷雨、あんたはどうするのよ」

鈴ちゃんはどこか慌てた様子だ。多分、鈴ちゃんが危惧していたことって言うのは僕が暴れるんじゃないかってことだったんだろうね。

「安心してよ鈴ちゃん。僕はちよつと東さんと“お話し”するだけだからさ」

「え、笑顔なのに目が笑ってないわよ、あんた」

「あはは、何を言ってるのさ、鈴ちゃん。今、笑う要素どこにもないよね？」

「あ、これやばいやつだわ」

何かを悟ったように鈴ちゃんは東さんの方に手を合わせる。

「じゃあ、東さん。隣の部屋、行きましようか」

「ひ、ひーくん？ 東さんは優しいひーくんが好きだなー」

「奇遇だね。僕も優しい自分の方が好きなんだよね。……まあ、今日は自分に嫌われようかな」

「ひーくんっ!?!」

東さんのウサ耳を掴んで隣室へ向かう。それを見送る鈴ちゃんとクロエちゃんは目

でドナドナを歌っていた。



後日。

授業を終えた休み時間に鈴ちゃんの机に駆け寄る。

「鈴ちゃん。僕、授業を真面目に受けてたよ。褒めて！」

「寝てたじゃん」

「いやいや、あれは睡眠学習という奴ですよ」

と、そんなことを言っていたら頭頂部に鈍い痛みを受けた。痛みに頭をさすりながら工法を振り返ると、そこにはいつものように出席簿を片手に持った千冬さんが立っていた。

「必要ないとしても真面目に受ける。山田先生に迷惑をかけるなよ」

「す、すいません」

休み時間に千冬さんが教室に残っているのは珍しい。何か僕らに用事でもあるのだろうか？

「何か用ですか？」

そう鈴ちゃんが聞くと、千冬さんは頷く。

「昨日のことだが、束から電話が来てな。この前のことを謝られた」

それに鈴ちゃんは何かを察したように僕の方を見る。僕はそれに笑顔を返すも、返された鈴ちゃんはなんだか引きつった表情を浮かべる。

そんな僕らの様子を見て千冬さんは何があつたのかと聞いてくる。

「なにもありませんよ」

僕は満面の笑みと共に千冬さんにそう返すと、千冬さんはビクリと体を震わせてから「そうか」と言葉を残して教室を去っていった。

「あんだ、ほんと何したのよ」

そう聞いてくる鈴ちゃんだったが、僕はその問いに答えず、雲一つない気持ちのいい晴天に目をやる。

「今日もいい天気だね」

こんな日がいっつまでも続くのなら、尊い犠牲は必要だよね。

もうすぐ迎える梅雨の時期に目を逸らしつつ、僕はそう思った。

ペイルライダールート プロローグ

選択肢、留まる。 を選んだ場合。

戻る必要……あるのかな。

僕はこの居心地の良い微睡みのような空間に身を任せてみる。どこか守られているような錯覚を受けるこの場所はとても安心できる場所だ。

ここが現実でないことは分かる。でも、現実に戻ったところで、あの世界に何があるんだらうか。

鈴ちゃんに振られたI Sの世界。そこは僕が戻りたい世界には到底思えない。

「……」

本当にそうだらうか。確かに、僕は鈴ちゃんが好きだからI Sの、この世界に来た。けれど、今の僕にとってこの世界は本当に鈴ちゃんだけの世界なんだらうか……。

そんな風に考えた時、僕はふと霞がかった風景の向こうにいる少女の方を見た。彼女は僕だけを見つめていた。その見守るような視線に僕は思い出したのだ。

「蒼騎士」

「はい」

そうだ。ここは蒼騎士のコアだ。僕の失った意識はISを通じてコアに入り込んでしまっているんだね。

「僕は……どうしたらいいんだろう」

「どうすれば、とは？」

蒼騎士は僕に問いかける。そうだよ。こんな漠然とした問じゃ、答えられないよね。

「私は貴方がどうしたいかを聞きたい」

どうしたいか、か。今までだったら即答できたんだろうけど。今の僕には何も無い。望んでいたものが目の前にあったのに、いざ近づいてみれば今までよりも遠ざかってちゃって。

「ほんと、僕は何がしたかったんだらうね……」

自分の行動に呆れちゃうよ。そんな風に自嘲気味な笑みを浮かべる。蒼騎士はそれに何も答えない。どう反応していいか迷っているのだからか。

「氷雨らしくないですね」

蒼騎士の言う通りかもしれない。けれど、今の僕が今までと同じように振る舞うには

欠けているものがある。それは目的だ。この世界で篠ノ之氷雨としてISという作品に関わる理由がないのだ。

「見つからないんだ、僕が、僕として生きる理由が」

「二人の女性に振られただけですけどね」

うん、まあ、その通りなんだけど、改めて言葉にされると僕って本当に小さい人間なんだなって再認識せられるよね。

そんな僕に蒼騎士は呆れた様子もなく僕にまっすぐな視線を向けている。それはどんな僕でも受け入れてくれていているような、どこか妄信的な感情が混じっているように見えた。

「なくてもいいでしょう」

「え？」

理由がなくてもいい。そう蒼騎士は肯定する。

「今は見失っているだけです。時間をかければ、いずれ見つかります」

蒼騎士は確信をもって僕に伝える。

「いつも私は貴方の側にいます」

その言葉に僕は気づかされる。さつき僕の頭に浮かんだ、僕にとってこの世界は鈴ちゃんだけなのかという疑問に対しての答え。そうだよ。最初は確かに鈴ちゃんだけ

だったかもしれない。でも、この世界に来て10年もの日々を過ごした。その積み重ねは間違いなく僕の世界を構築していて、そこに鈴ちゃんはいなかった。

代わりに、いつも僕の世界には蒼騎士がいた。

時に辛辣な対応をされ、時に遠回しに罵倒され、時に人の不幸を喜ぶような……あれ、もしかして蒼騎士って僕のこと嫌い？

でも、それでもいつも一緒だった。そして、それがこの世界の普通だった。だから、戻ろう。この世界には、まだ僕の居場所があるんだから。

「そうだね……そうだったよ」

「嫌でも離れられませんかからね」

「それどういう意味!？」

こんな軽口が僕の世界を象る大切な要素なんだろうと思った。

第一話 打ち明けられる秘めた想い

目を覚ます。柔らかさに包み込まれている僕はどうかやら保健室のベッドに寝かされていたようだ。保健室の明かりが消えているところを見ると、もうすでに消灯時間を過ぎているんだろう。長い間気を失っていたんだね。ふと枕の脇に目をやるとメモのようなものとその上に鍵が置かれていた。内容は保健室を出る時は戸締りをして明日鍵を返しに来て、というものであった。

うーん、部屋に戻ってもいいけど、一夏たちが寝ているような時間なら起こしちゃいかもしれないし、それなら朝までここに居てもいいかもね。

「というわけで、今何時かな、ペイルライダー」

「現在は深夜1時です」

うわー、ものすごく長い間眠ってたんだね。あ、というかあれかな、コアの中で長居したからかな？

ん？ というか、今のペイルライダーの声いつもと違うくなかった？ なんとというか、少しこもった声というかなんというか。

「もしかして風邪ひいてる？」

「AIは風邪を引きません。氷雨こそ病んでいるのですか、頭を」

「ペイルライダーはもう少し優しさを知るべきだと思うよ……」

そんな辛辣なペイルライダーの言葉もやっぱりこもっているし、なんか僕の下腹部から聞こえるような気がするんだけど……。

そんなことを思っていたら布団の中でもぞりと何かが動いた。

「な、なにかいるの!?!」

深夜の保健室のベッドに何かいるって、それなんていうエロゲ? じゃなくて、ホラーだよ!!

恐怖にハートビートのBPMが200を超えそうな勢いで高まる。正体を確認したくはないけれど、確認しなかったらそれはそれで尚のこと恐怖心を駆り立てるよね!

「そ、背けてはいけない現実というわけか……」

ならば、受けて立とうじゃないか。漢氷雨、全身全霊を以って今、布団をめくらせてもらう!

と、ここまで威勢よく行ってみたものの、僕は布団の端を掴まんで少しずつ引き上げていくという何とも臆病なことをしている。だって、怖いじゃん。

つまみ上げた布団と僕の体の間には暗く底の見えない空間が広がる。布団を少しずつ引き上げていくと、窓から差し込む月光が仄かに隙間を照らし始める。徐々に晴れる

その暗闇の中で何かが光を反射しきらりと光る。暗闇の奥に見える二つの小さな光に僕は声が漏れそうになる。目に涙を溜めながら最後の力を振り絞り、布団を引っぺがした。

そうして明るみになった下腹部には少女の姿をした何かがいた。

「で、出たああああ!!」

ド定番だけど少女の霊だあああ！ 保健室で少女の幽霊なんてベタベタなんだからどうぞご遠慮ください！ というか、夜中の学校で幽霊って言うのがもう古臭いんだから悪霊退散だよ!! あ、学校の怪談アニメは最高に面白かったです!!

「出てきましたね」

なんか冷静に返してきた！ 霊が冷静に……あ、面白くない！ 鳥肌立ってきた、い
ろんな意味で！

「悪霊退散煩惱退散！ どーまんせーまん！ 誰か、安倍晴明呼んできてえええ！」
「騒がしいですよ、こんな夜更けに」

誰のせいかと小一時間問い詰めたところだけでも、今から一時間問い詰めるとちやうど丑の刻のど真ん中になるからやっぱりやめておこうと思う。

慌てふためく僕を尻目に少女の霊は僕の体を這いあがり、徐々に顔を近づけてくる。それに抵抗しようと思ったのだけれど、何故か思うように体が動かなくてなされるがま

ま接近してくる少女を見つめるしかなかった。あ、よく見ると可愛い、とかそう言うことを言える余裕もない。というか、少女の顔はよく見えない。何故かというと、僕の視界は涙でぼやけてしまっているからさっ！ 誰か助けて。

そうしてついに眼前に少女が迫ってくると僕は耐えきれず目を閉じる。これから僕はホラー映画の暗転後を経験するんだね。あ、それはそれで貴重な経験かも……生きて帰れたらね。

「……」

しかし、目を瞑ってから一向に少女の霊は仕掛けてこない。胸の上に確かな重みは感じていないから正面にいるんだろうけど……って、あれ？ 霊に重み？

それを疑問に感じた僕は目を開け、正面の少女をよく見てみる。すると、肌は血が通っていないのかと思うくらい白く、月光に照らされて透き通るかのような印象を受けた。うん、やっぱり幽霊だわ、これ。少なくとも生者には見えないね。

「まだ気づきませんか？」

「いや、貴方が幽霊様だということは察しておりますが」

と、とりあえず襲ってくる様子はなさそうだし、下手に出て穏便に切り抜けよう。

「気づいていないですね。無理ありませんか。私がこの姿を見せるのはこれが初めてですから」

一体この幽霊は何を申しているのでしょうか？ えと、反応から見て幽霊であるという認識は間違いないのかな。となると、布団の中のしかも下腹部あたりに潜んでいた少女の正体……。

「痴女か」

「違います」

「そ、そうですか」

低いトーンで否定されてしまうと少し気圧されしてしまうね。

しかし、そうなるともう選択肢が……。

「……あれ？」

そう言えばこの声には聞き覚えがあるような。

「もしかして、ペイルライダー？」

「ようやく気づきましたか」

言われてみればさっきのコアでぼんやりと見た蒼騎士の輪郭と合致するよう……
しないような。

「いや、でもやっぱりさっきの蒼騎士とはちよつと違う様な」

蒼騎士はもつと大人びた背格好だった気がするけど、今目の前にいるのは僕と同年代、いや少し顔が幼い気もするし、年下にも見える。さっきまでは余裕がなくて見てい

なかったけど、服装も薄手のワンピースだけという格好だし。……というか、体の起伏が蒼騎士に比べて少な……。

「聞こえてますよ」

「あ、やっぱりペイルライダーだね」

僕の思考を読むのはやめてほしいよ。

「心はコアに依存しますが、容姿は外骨格に依存するのでペイルライダーに改修された結果、このような幼い姿になったのです」

「なるほど」

確かにペイルライダーは蒼騎士にあつた甲冑のような装甲が無くなってスリムになつてるし、人型になるとそうなるのか。

「うん、というか今更な疑問なんだけども」

「はい」

「なんで人型になつてるの？」

普通に衝撃的な出来事なんだけど、幽霊に迫られるよりは驚くことじゃないのでなんとなく反応が遅れちゃったよ。

しかし、ペイルライダーの言葉から察するにこの人型もまたISなんだろうね。だって、容姿がISの外骨格に依存しているって言つてたもんね。

「I Sの形態移行の一種です。前例はありませんが、おそらくは搭乗者の精神的な危機に反応して起こる特殊移行（エクストラシフト）だと思われます」

「精神的な危機……」

それはつまり、僕が鈴ちゃんに振られてめちやくちや落ち込んでたから、I Sの防衛機能が反応して特殊移行が発動しちゃったって言うことだよな？　なんてこった、僕の失恋はI Sが危険だと判断するほどのものだったのか。確かに世界に疑問を持ち始めるなんて重傷だったとは思うけどな。

「不本意ですが、私は氷雨を助けるために人型になりました」

「不本意なんだ」

そこは本意であつて欲しかったね。

不意にペイルライダーの顔が近づく。それはお互いの鼻先が接触するくらいの近さだった。突然のことに驚いて距離を取ろうとするも、それに追従するようにペイルライダーは迫ってくるのだ。

「ど、どうしたのさペイルライダー」

動揺している僕を余所にペイルライダーはその感情を見せない瞳を僕に向け続ける。ぶっちゃけ人型のペイルライダーって美人なんだよね。整った顔立ちに凜とした瞳、肌の白さも相まって月光に照らされるペイルライダーは儚げで、そんな少女に迫られると

さすがにドキドキしちゃうよ。

「私では、ダメですか」

「え？」

ペイルライダーの口からこぼれた言葉に、僕は一瞬時が止まったかのように感じた。驚きから心臓の鼓動が一瞬止まったのだ。まあ、それは嘘だけど、それくらいの衝撃だったってことだね。

「氷雨の心に開いてしまった穴は、私では埋まりませんか？」

「えっ、ええっ？」

戸惑う僕にペイルライダーは表情を変えずに畳みかける。

「私は氷雨のことが好きです」

これが、僕とペイルライダーの世界の始まりだった。

第二話 打ち明けた想いの納め処

保健室

結局あの後ペイルライダーの執拗な攻めに困惑している間に夜が明けてしまった。決して寝不足というわけではないけど、6時間にも及ぶアタックに少し疲弊している。とりあえず、食堂が開くと同時に朝食を済ませてしまおう。あまり人型のペイルライダーを見られるわけにもいかないしね。授業の間は寮にいてもらって、放課後に一夏たち事情を話しておこう。

「じゃあ、行くよ」

「返事をもらっていないのですが？」

「えと、突然すぎるから保留ってことで」

「はつきりしない男はモテませんよ」

「それをペイルライダーが言うの!？」

でもまあ、今の僕は恰好悪いよね……。



教室

僕以外誰もいない教室で、僕はぼんやりと考える。

ペイルライダーは僕のことを好きだと言ってくれた。鈴ちゃんに振られた僕の傷心を慰めたいと。それはとてもうれいことだし、僕だってペイルライダーのことは好きだ。でも、僕の中のペイルライダーという存在は長い間一緒にいた、所謂相棒としての好意だと思う。

どんな時も共に世界を共有してきた欠かすことのできない存在。今更失うなんて考えられないし考えたくもないけれど、恋情を抱いているかと問われれば、僕は首を傾げてしまう。それは失礼なことなんだろうけど、でも、ペイルライダーの想いに僕は適当な答えで返事をしたくないんだよね。

「うーん、なんというか……難しい問題だよ」

そんな風に頭を悩ましていると、少しずつ教室に人が増えていき、そろそろ授業が始まるかという時間になってようやく一夏たちの姿が見えた。

「あつ、氷雨！」

「おはよー」

僕が手を振って挨拶をすると、箒が眉間にしわを寄せて迫ってきた。え、ええ。僕、なにか怒らせるようなことしてたっけ？

「大丈夫なのか、氷雨！」

「あれ？」

しかし、その予想に反して箒の口からこぼれた言葉は僕の身を案じる言葉だった。

「もう体調はいいのか？」

「体調？」

箒の後ろから来た一夏も僕を気遣うような言葉を発する。えと、何かあったわけ？

「もしかして、覚えてらっしやらない？」

セシリアの言葉に僕は思いだそうとする。そんな様子の僕にシャルも心配そうに近づいてくる。

「本当に大丈夫？ 氷雨は昨日の夜に食堂で倒れたんだよ？」

あ、ああ。そう言えばそんなこともあったような気がするね。ずっと昔のことのよう
な気がするのは多分、ペイルライダーのことが衝撃的過ぎたからだよね、きつと。

「その節はみんな心配かけてごめんね。でも、ほら。もうこの通り大丈夫だから」

そう言つて両手を広げ自分の健康体を主張してみると、何を勘違いしたのかシャルが
両手を広げて近づいてきて、ついには僕に抱き着いてきた。

「ちよつとシャル？」

「ん、どうしたの、氷雨？」

いや、どうしたってこともないんだけど、さつきのはハグを求めたわけじゃないんだよね。一夏たちに視線を送ると、一夏はシャルの勘違いに笑っているようだった。箒はシャルの行動に不思議そうな顔をしていたが、セシリアは普通そうだ。外国人の感覚ではさつき振る舞いはそういうものと認識されているんだろうか？

まあ、僕も別に悪い気はしないから何も言わないでおこうかな。ていうか、シャルも女の子なんだから僕と接触するのはあまり望まないんじゃないかな？

ちよつとして離れたシャルは箒の不思議そうな顔を見て首を傾げた。

「あ、あれ？ 箒さん、僕、何か変なことしたかな？」

「いや、突然抱き着いたからどうしたのかと思つてな」

そう言われてシャルは自分の行動が勘違いだったことに気づき、顔を紅くした。

「ご、ごめんね、氷雨。き、気持ち悪かったよね」

「え？ いや、別に気持ち悪くはなかったよ。柔らかかったし」

僕の言葉にさらにシャルは顔を紅くする。あ、フォローの言葉選び間違えたかも。

「シャルルさんは筋肉質ではありませんものね」

あ、なるほど。そう捉えることもできるのね。やっぱり性別で表現の印象も変わる者なんだね。

「え？ あ、そ、そうだね！ ぼ、僕はあまり鍛えてないからね」

「ま、ISに筋力はいらねーもんな」

要らないってわけじゃないんだろうけど、筋力がないと扱えない外骨格って言うのは本末転倒だし、必須ではないよね。

「それにしても、昨日はどうしたんだ、氷雨」

「んー、まあ一時的な発作なんじゃないかな？ ほら、僕って病弱キャラだし」

「どこがだよ」

まあ、血液中のナノマシンのおかげで体調管理は完璧だから風邪なんて引かないんだけどさ。病弱キャラが最強っていうのはこうくすぐられるよね、主に厨二心を。そして、戦闘後に疲労で吐血するとかね。

「まあ、何事もなくてよかったですわ」

「あ、セシリアがデレた」

「デレた、とはどういう意味ですか？」

「素直になったとかそういう意味だよ」

「そういう意味でしたら、わたくしはデレましたわよ」

うん、確かに素直だよ。素直に僕の嘘を信じてくれるなんてね。

「氷雨、あんまりからかってやるなよ」

「なっ！ わたくしはからかわれましたの!？」

「あ、うん。ほどほどにするね」

「人の話を聞きなさい！」

と、そんな中で廊下の方から声が聞こえてきた。

「一夏、いる？」

それは鈴の音のような可愛らしい声。つまるところ鈴ちゃんの声である。その声に一夏が振り返ると、驚いた様子を見せた。

「お、お前、もしかして鈴か？」

「そうよ。今日から二組に転入してきたの」

その言葉に教室はざわつく。まあ、IS学園の転入試験って難しいらしいからね。と言つても、鈴ちゃんの前では障害にもなりえないだろうけどね。

「へー、そうなのか」

「知り合いなのか？」

箒が一夏に尋ねると、一夏は僕らに鈴ちゃんのことを紹介する。

「ああ。鈴は箒や氷雨が転校した後に知り合った幼馴染なんだよ。箒と氷雨をフアースト幼馴染としたら、鈴はセカンド幼馴染だな」

鈴ちゃんの紹介をする一夏は思わぬ再開に嬉しそうだった。

「ん？」

鈴ちゃんは一夏が自分を紹介しているのがどんな人物かを見る過程でその視線を僕に向けた。

「あ、あんたは昨日の」

「やあ、昨日振りだね」

鈴ちゃんはおからさまに嫌そうな顔を見せる。それに僕は少し悲しくなっただけで、どうしてだろうか、昨日ほどの落ち込みはなかった。その理由は多分ペイルライダーの好意だろうか。僕には鈴ちゃんだけじゃない、ペイルライダーや一夏たちもいるということに気付かせてくれたから、余裕ができたんだろう。

だから、僕は冷静に言葉を紡ぐことができた。それは最も伝えなかった言葉。

「昨日はごめんね。風さんの気持ちも考えないで変なこと言っちゃって」

伝えたい言葉を伝える。それが、こんなに疲れることだなんて知らなかった。でも、それだけの疲労に見合うものだと思う。

僕の言葉に鈴ちゃんは少し意外そうな顔をする。

「へえ、なんか昨日あった時とは印象違うわね」

「そうかな？」

確かに昨日の僕とは違うかもしれない。あの時の僕は突然の出会いに興奮してたからね。差し詰め、昨日の僕は紅いマントに突進する闘牛のような直進だったからね。

そんな僕をまじまじと鈴ちゃんは見て、頷く。

「許すわ。というか、昨日のことはなかったってことにするわ」

そう言つて鈴ちゃんは笑う。

「というわけで、初対面ね。あたしは凰鈴音。あんたは？」

「篠ノ之氷雨。このクラスの代表だよ。よろしくね」

そう言つて手を差し出すと、鈴ちゃんはそれを躊躇いなく掴み、握手に応じてくれた。

「よろしく。というか、あんたが代表なの？ 一夏じゃなくて？」

鈴ちゃんは意外そうな顔をする。そんな鈴ちゃんに一夏が問いかける。

「というか、なんで俺だと思つたんだ？」

「いや、昨日事務受付の場所を聞いた子に一組の代表つてだれ？ つて聞いたら男に

なつたつて言うからあんたなのかなつて」

うん。昨日の鈴ちゃんが男つて聞いて僕と一夏の二択だったら一夏の方が代表に

なつたと思うよね。

「なんだ。一夏じゃないならクラス代表変わつてもらう必要なかつたじゃん」

「てことは、二組の代表は鈴なのか？ すげーじゃん」

「まあね。なんたつて、あたしは専用機持ちだし」

「へー」

誇らしげに言う鈴ちゃんだったが、一夏の反応は思ったよりも薄いものだった。

「へーって、なによ。もつと驚きなさいよ」

そんな一夏の反応が気に食わない鈴ちゃんはそう言って突つかかる。一夏はそれに「悪い悪い」と謝りながら、訳を話す。

「いや、鈴が専用機を持つてるのは驚きなだけだし、なんというかあまり珍しいものでもないというか……」

「どういう意味よー」

あんまりな一夏の説明に鈴ちゃんが怒ったので僕が一夏に変わって説明を試みる。

「あのね、うちの一組にね。代表候補生が3人いて、それでいて一夏も僕も専用機を持つてて、専用機持ちが5人いるんだよね」

「え、何その過剰戦力」

ですよねー。鈴ちゃんの反応は最もだと思う。僕もそう思うし、多分みんな思っていると思う。まあでも、今思えば国としては希少な男性操縦者に自国の代表候補生を接触させたいというのは仕方のないことなのかもしれないね。

予鈴が鳴り響き、教室ではみんなが席につき始める。

「あ、鈴。さっさと戻ったほうが良いぞ」

「言われなくても戻るわよ。じゃ、またね」

そう言つて去つていく鈴ちゃんは扉付近で千冬さんに出会い、出席簿の洗礼を受けたのであつた。南無。

第三話 波乱を孕んで明快H A D E S

昼休み

午前の授業を切り抜け、戦士たちは束の間の休息を得る。そうして来る5、6時間目に備えるのだ。

「と言つても氷雨はいつも寝てるだろうに」

「寝てません。あれは戦略的休息です」

「どの辺に戦略要素があるんだよ」

「あはは」

昼食を終えて、教室で一夏とシャルと談笑していると、なんだか廊下の方が騒がしくなつていくのに気が付いた。

「どうしたんだろう」

僕が廊下に視線を向けると、一夏とシャルも同様に視線を向けた。しかし、わざわざとした喧騒はいつものことのようにも思えるし、特筆しておかしいという所も見られなかった。

「いつも通りじゃね?」

一夏がそういうとシャルもそれに同意を示した。なので僕もあまり気にしないことにしたんだけど、ちらりと見えた人影に僕は気のせいでは言ことを確信した。

そしてその人物は喧騒を引き連れて教室へと入ってきた。

「氷雨」

馴染みのある抑揚のない声。そう、ペイルライダーが教室にやってきてしまったのだ。

「ちよ、ちよっと!」

僕は立ち上がるとペイルライダーの元へ駆け寄る。

「なにしてるのさ。部屋で待っててって言ったよね?」

そんな僕の言葉を余所にペイルライダーは突然僕の首に手を回し、抱き着いてきた。その突然の行為に周りの喧騒は一瞬治まる。いや、これは場が凍ったという表現がしつくりくるね。

もちろん、僕も凍ってますよ。ええ。でも、身長差を埋めるようにつま先立ちになつてるペイルライダーの姿を少し可愛いと思ってしまう自分がいるのは否定できない。冷めてないね、むしろ燃えてる。いや、萌えてる。

ペイルライダーは一旦僕から離れて視線を僕に合わせてくる。じつと見つめられる

と、どうにも怒れない。

「氷雨に会いたくなりました」

そう言つて再びペイルライダーは抱き着いてくる。今度は手を腰に回して僕の胸に顔をうずめるように、だ。先ほどよりも体を密着させてくるので、ペイルライダーの人より少し低めの体温が伝わってきた。う、嘘でしょ。これが、ペイルライダーの萌え力？

「だ、だからって……」

「迷惑でしたか？」

そんなセリフを上目遣いで吐いてくるのだから手に負えない。なんなんですか。なんなんですか!!

「迷惑といえば迷惑だね」

「でしようね」

でも、どれだけ可愛くとも事實は事實なわけで。それはペイルライダーの方も理解しているようなので、少ししたらスツと僕から離れた。

「ちよ、ちよつと氷雨!」

声の下方へ振り返ると、問い詰めるかのように迫ってくるシャルが見えた。

「あ、シャルル」

「こ、この子は誰なの!？」

どういわけか語気を強めて問いかけてくるシャルだけど、その質問自体はもつともなものだった。周りの人たちも同じ疑問を抱いているのか頷いて同意を示していた。

「え、えーと。色々説明しにくいところはあるわけなんだけど、疑うことなく聞いてくれる?」

「え? う、うん」

僕の前置きがよくわからないものだったからなのか、シャルは勢いを失ったように萎んでいった。

「この子は人のように見えるけど、違うんだ」

「?」

そうだよ。意味が分からないよね。そりゃ、そんな顔になるよね。目を点にして僕とペイルライダーに視線を行ったり来たりさせるシャルに僕は答える。

「この子は……」

「初めまして、シャルル・デュノア。私は氷雨の“パートナー”、ペイルライダーです」
ん? 抑揚のない語り方のペイルライダーだけど、今のは若干音量に違いがあったよ
うな気が……。

ペイルライダーの言葉に啞然としたシャルだったが、段々その真実を自身の中で囁

み砕いて消化していったのか、徐々に表情が変わっていった。まあ、どうしてかわからないけど、変わっていった先の表情が敵意剥き出しなんだけどね。

「そ、そうなんだー。初めまして、ペイルライダーさん」

笑顔を浮かべているシャルだけど、若干口元が引きつっているのは何故だろうか……。というか、シャルは驚かないのかな。ISが人になつての……。

周りの人たちには僕の言ったことが聞こえていなかったのか、皆が一樣に不思議そうな顔をしている。あ、考えなしにばらしたけど、これって聞かれたらまずいんじゃない……。「大丈夫です。氷雨の声に指向性を持たせ、周囲に逆位相の音波を発生させ、シャルル以外の人間の耳には届かないよう考慮しました」

「あ、ありがとう。さすが、ペイルライダーだね」

「それほどでもありません。ですが、もっと褒めてもいいですよ」

「むー」

なんだろう。シャルが何故か悔しそうに唸っているの、ペイルライダーを褒めるのはやめておこうかな。

「というわけなんだ、シャル。あまり周りの人には言わないでくれるかな?」

「……氷雨が言うならそうするよ」

え、なんで不服そうなんですか?

予鈴が鳴り響き、昼休みは終わりを告げた。周りでこちらの動向を伺っていた人たちも自分のクラスへそそくさと帰っていく。何せここは千冬さんが担任のクラスだ。予鈴が鳴ったのにこの周辺にいたのでは千冬さんに何をされるか分かったものではない。

……まあ、それも含めて千冬さんが好きだという稀有なファンもいるわけだけどね。

「じゃ、ペイルライダーさん。『僕ら』はこれから授業だから」

シャルが何か勝ち誇ったようにそう言う。え、どういう意味？

「そのようですね」

「うん。さよら、ペイルライダーさん。いこ、氷雨」

そう言つてシャルは僕の手を取る。半ば強引に教室の中に連れて行かれそうになる。

「えと、じゃ、じゃあ、ペイルライダー。また、放課後ね」

そう僕が言うも、ペイルライダーは返事をしない。返事の代わりに少し口角を上げるだけだった。



授業

「……どういうつもりだ、篠ノ之」

「え、ええと。あ、あはは」

5時間目の座学が始まる。担当教員は千冬さんだ。普段は真面目に受けている僕だ

からいつもならこんな風に授業中に千冬さんに睨まれることなんてないんだけど、今日の僕は一味違う。何故なら……。

「私がこうして氷雨の側にいることは何の問題もありません」

何故なら、膝の上にペイルライダーを抱えているからさ！ もうなんなんですか!!

しかし、あれだね。膝の上ですっぽり収まるんだからペイルライダーは華奢だねって違う！ そう言うことは重要だけど、今は重要じゃないんだよ。

「篠ノ之、こいつは何を言っているんだ」

「ええと、事情はあるんですが、この場で話すとなると、少し問題があるのではないかと
思っています……」

「問題ない。話せ」

なんで事情知らないのに問題ないとか言っちゃうの？ もしかして、問題があつたとしても千冬さんがどうにかしてくれるの？ あ、自分で言つといてなんだけど、千冬さんなら本当にそうしてくれそうな気がするね。

「ええと、実はですね。僕の専用機であるペイルライダーが昨日、僕が意識を失つたのをトリガーに形態移行をしまして」

「ほう。それと、そのやつは何の関係がある？」

千冬さんは薄々分かってるんだろうけど、なんでこんなこと聞いてくるんだろう。何

か考えでもあるのかな？

「それが、トリガーが僕の心的外傷だったからなのか、特殊移行というものを行ったようで、その結果、ペイルライダーの待機状態が人型になって」

「それが、こいつとということか」

そう千冬さんが結論付けたことで、教室は喧騒に包まれた。そりやそうだよ。みんな驚くに決まっているよね。

「静かにしろー！」

その喧騒を千冬さんが鎮めると、クラス全体に向けて千冬さんはペイルライダーの処遇を話し出す。

「今回は篠ノ之の専用機が異例の形態移行をした。これは然る調査を学園側でした後公式に発表する。故に、発表までは機密事項というわけになる」

千冬さんの声がみんなにしっかりとした圧力をかけていく。なるほど、力技で解決するんだね。

「機密事項を漏らしたものが、どういう末路をたどるか。貴様らでも分かるな」

安い脅し文句のような気もするけど、千冬さんが言う喉元にナイフを突き立てられているかのような錯覚に陥る。もう、背筋が凍るようだよ。

そんな感覚に陥っているのは僕だけじゃないらしく、周囲を見回すと青ざめた顔をす

るクラスメイトの姿が目に見える。原因が僕にあるからなんだか申し訳ない気分になっちゃうね。

しかし、そうした口止めだけで止まるようなものなんだろうかという疑問はあるものの、こういう処置を取らないとペイルライダーが自由に動けないだろうという気もある。国外へのリークも可能性としてあるけど、その最たる代表候補生たちは顔見知りだから何とかなるし、例外のラウラは千冬さんの言葉には絶対服従だから大丈夫だろうし、あれ？ 案外何とかなってるのかな？

「今日は特例としてそこで授業を受けることを許可する。だが、明日からは別に席を用意する。分かったな」

「了解しました、織斑先生」

こうしてペイルライダーがこのクラスで授業を受けることになった。